博　士　論　文

煎茶会図録による
煎茶席の空間特性に関する研究

A research on Characteristic of the green tea ceremony room
in illustrated book

2021 年

櫃　本　聡　子

凡例

(1)本論文は、序論(第1章)、本論(第2章～第5章)、結論(第6章)からなる。

(2)各章ごとに注記・図・表を挿入し、注記は章末にまとめた。

(3)文中の図・表は次のように〔 〕に示す

章番　図番

図　〔図1-1〕

章番　図番

表　〔表1-1〕

(4)文中では史料名の前に史料番号を付した。

(5)煎茶会図録の画像は、高取友仙窟・国立国会図書館・東京都中央図書館・名古屋工業大学図書館・名古屋市鶴舞中央図書館所蔵のものを複写し、掲載用に筆者が一部加工した。

(6)図における平面モデルは、著者が書いたものである。

(7)年代の表記は、和暦を主とし、西暦を（　）内に補記した。

煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究

論文要旨

喫茶文化に関する研究を建築史学からみると、抹茶の茶席および関連施設に関しては、数多くの遺構および古典建築書が存在し、多くの先学によって体系的研究が行われている。一方、煎茶席については、現存する遺構が少なく、これに関する古典建築書も確認できない。先学によって全国に点在する現存煎茶席遺構の調査研究が行われているものの、これらの遺構からは、同時代の煎茶会において煎茶席がどのように使われたか、その様子を知ることは難しい。そこで本研究では、煎茶の流行にともなって各地で開催された煎茶会に合わせて刊行された茶会記のうち、席の様子を描写した挿図を収録した煎茶会図録(「茗讌図録」とも呼ばれる)を対象史料とし、悉皆的に収集した煎茶会図録全 51 本の挿図から当時の煎茶会の様子を可能な限り読み取り、平面構成やしつらい、人物の配置の分析と考察を行い、同時代の煎茶会における煎茶席の空間特性を明らかにした。

第１章「序論」では、煎茶席に関する既往の研究についてまとめ、本研究の目的と研究の方法について述べた。

第２章「煎茶会図録の書誌的考察」では、対象史料である煎茶会図録51本について、各図録の書誌を述べた後、著者および題字・序跋を手掛けた人物、出版地域、出版年代などの書誌的考察を行った。その結果、著者は茶会の主催者であることが多く、時代が降るにつれてその中心は文人から骨董商や政治家、地元の有力者へ広がり、彼らをとおして全国的に波及したと考えられることを指摘した。また、江戸末期から明治初めは書画展観目録の形式の図録が多い中で、優れた内容の画期的な図録の存在を指摘し、その後は骨董商の介入により、煎茶道具のカタログ的な図録や写真による挿図を収録する図録が登場すること、多数の図録が出版されている大阪・京都・東京・愛知で特に煎茶が盛んであったことを明らかにした。

第３章「煎茶会の構成」では、各煎茶会の席の構成について述べた後、席の種類を整理し、それぞれの席の関係性を分析と考察した。その結果、江戸末期は前席と茶席を主とした２席以上の席で構成され、茶事に主眼が置かれていたが、文人の嗜みにちなんだ奏楽席・揮毫席などの多彩な席種が登場し、徐々に道具の鑑賞に主眼が移ったことで単独の展観席が増加し、明治末以降は抹茶席など煎茶席でない席が設けられるようになること、京阪は茶席を主とする構成で、特に大阪は他地域に先駆けて多彩な内容の煎茶会が開催される一方、東京では展観席が大半を占めており、茶事より道具を鑑賞することに主眼が置かれていたことを指摘した。さらに、会場、席主について時代的・地域的考察を行った結果、会場は寺院・社家や個人邸、料亭が多く使用され、楼上から眺望を楽しめる建物が好まれ、大阪は青湾の網島、京都は東山の円山近辺や南禅寺界隈、東京は隅田川沿岸や上野の不忍池（小西湖）と、各地域の景勝地で特に水辺が好まれたこと、席主は茶会の主催者やその肉親がつとめることが多いものの、展観席を中心に骨董商や盆栽商がつとめ、彼らは地域をまたいで活動しており、彼らを媒体に煎茶文化が波及したと考察した。

第４章「煎茶席の建築的特質」では、煎茶席の建築意匠およびしつらいについて、挿図から読み取れる煎茶席の平面モデル化を行い、そのモデルを基本資料として平面構成の分析と考察

を行った。その結果、煎茶席の平面構成は14種類に分類できること、明治前期から後期までの間に茶事から道具の鑑賞に人々の関心が移るのに伴い、床のみの平面から道具を飾る場である床脇や付書院が採用され、それら自体も独創的意匠が好まれるようになり、大正期の茶事の形式化に伴い、平面も固定化したこと、東京では展観席が多く、道具の鑑賞に重点が置かれたため、床脇や付書院からなる席が好まれた一方、京都では茶事が重視されることから、席の主題を明確に表せる床のみの席が好まれ、大阪は席種も平面構成も多彩であることを明らかにした。

第５章「煎茶席の使われ方」では、煎茶会に用いられる道具について、目録に記載される名称を整理し、第４章で作成した平面モデルに道具の配置も加え、さらに第４章の分析結果を踏まえて、煎茶席のしつらい、さらに茶席における茗主と客の位置について分析と考察を行った。その結果、しつらいでは各道具で時代的な傾向がみられる中、特に敷物は大きさや敷き方を変化させながら、席中の道具や人物の位置を示す役割を果たしていること、明治後半以降に香合が烏府に入れられたり、煙草盆が客の位置を示したりと抹茶の影響が見られたことを指摘した。

そして、点前座と客座の関係は、床のある茶席で茗主は床前を避け、客が床前に位置すること、大半の席で茗主は床に向かう形で座り、勝手は意識せずに自由に点前をしていること、床の無い茶席では基本的に自由に点前座を配しつつも、開口部を意識した席があると考察した。さらに、客の座り方の変遷について、江戸時代には机を拠り所としたが、明治前期になると机に代わって敷物で客の位置が限定されるようになり、明治中頃以降は客用の敷物が床を意識した配置をとり、明治末までに客の位置を示す敷物と、茗主の位置を示す茶具敷が各地で確認できるようになると、最終的にはここに正客の位置を示す煙草盆が加わって茗主と客の配置が確立することを指摘した。

第６章「結論」では、各章をまとめ、煎茶会図録における煎茶席の空間特性について総括した。

目　次

第１章　序　論
第１節　研究の目的 ・・・・・・・・・・001
第２節　先学の研究 ・・・・・・・・・・003
第３節　研究の手法 ・・・・・・・・・・007

第２章　煎茶会図録の書誌的考察
第１節　各図録の書誌 ・・・・・・・・・・009
第２節　著者および題字・序跋を手掛けた人物 ・・・・・・・・・・039
第３節　出版地域 ・・・・・・・・・・040
第４節　出版年代 ・・・・・・・・・・041
第５節　小結 ・・・・・・・・・・042

第３章　煎茶会の構成
第１節　各煎茶会の構成 ・・・・・・・・・・043
第２節　席の種類と構成 ・・・・・・・・・・069
第３節　煎茶会の会場 ・・・・・・・・・・077
第４節　煎茶会の席主 ・・・・・・・・・・086
第５節　小結 ・・・・・・・・・・089

第４章　煎茶席の建築的特質
第１節　平面モデル化の手法 ・・・・・・・・・・091
第２節　各図録の煎茶空間 ・・・・・・・・・・094
第３節　煎茶席の平面構成 ・・・・・・・・・・108
第４節　小結 ・・・・・・・・・・117

第５章　煎茶席の使われ方
第１節　目録にみる道具とその名称 ・・・・・・・・・・121
第２節　しつらい ・・・・・・・・・・139
第３節　茗主と客の位置 ・・・・・・・・・・147
第４節　小結 ・・・・・・・・・・154

第６章　結　論 ・・・・・・・・・・157

参考文献一覧
既発表論文一覧
謝辞

資料編

第1章

序　論

第１章　序論

第１節　研究の目的

日本の喫茶文化は、抹茶と煎茶に大別されるが、今日で茶道といえば「茶の湯」すなわち抹茶道が広く認知されている。しかしながら、江戸時代中期以降から明治、大正期にかけては、煎茶が全国的に流行し、その影響力は一時抹茶を凌ぐほどであった。

日本における煎茶の起源については諸説あるが、そもそも喫茶法としての煎茶が日本にもたらされたのは､黄檗山万福寺を創立した隠元禅師によって江戸時代初期頃である。この新しい喫茶法が広く受け入れられていくきっかけとなったのが、煎茶中興の祖とも呼ばれる売茶翁高遊外である。佐賀の黄檗宗龍津寺の僧であったが、享保 20 年（1735）に京都東山に茶亭「通仙亭」を構え、「清風」の旗を掲げて売茶活動を行った。売茶翁は、封建社会と結び付いて自由を失った茶の湯、つまり当時の禅僧社会に強い疑念をもっていた。こうした背景から、売茶翁は「茶歌」を詠んだことで有名な唐代の詩人盧仝に深く傾倒し、中国文人の無為自然な生き方に対する憧憬を抱き、盧仝の喫茶精神と禅僧社会への批判的行為を表明する手段として、煎茶の売茶活動を行った。

この売茶翁の煎茶は、詩人盧仝への憧憬という接点によって、池大雅・伊藤若沖などの画家や，大枝流芳・木村蒹葭堂・上田秋成・村瀬栲亭など，当時の文人社会に歓迎され，文化・文政の頃には，煎茶家が誕生するとともに、田能村竹田，頼山陽，青木木米，帆足杏雨などさらに多くの風雅を好む文人に広まった。そして、彼らの強い影響下にあった伊藤博文、木戸孝允、山県有朋などの幕末の志士達が明治の政財界の中心となったことで、茶の湯は衰退し、煎茶が隆盛を迎える。この逆転によって、煎茶は一気に支配権力層と結び付きを強め、茶事より鑑賞することに重点が移ることで、財力豊かな各地の好事家へと波及していくこととなる。さらに、明治・大正期には、煎茶においても茶道としての喫茶法が考案されるようになり、次々に煎茶の家元が誕生することで、煎茶はさらに広まっていく。一方で、自由なお茶という本来の姿は薄れ、次第に形式化していくこととなる。

そして、明治の代が進む中で、憧憬の眼差しは東洋から西洋へと移り、中国趣味が衰退を辿る中､茶の湯は良家の子女の嗜みとされ､高等女学校の科目に組み込まれるなど、再び抹茶台頭の動きが強まり、煎茶は存在が薄くなっていった。

このように明治から大正期にかけて全国的な流行をみせ、その影響力は大きかったと考えられる煎茶であるが、喫茶文化に関する研究を建築史学からみると、抹茶の茶席および関連施設に関しては、多くの先学によって体系的な研究が行われている。一方、煎茶席については、現存する遺構が少なく、また管見の限りこれに関する古典建築書も確認できず、後述するわずかな先学による研究があるに過ぎない。

本研究では、煎茶の流行にともなって各地で開催された煎茶会に合わせて刊行された茶会記のうち、席の様子を描写した挿図を収録した煎茶会図録（「茗醼図録）とも呼ばれる）を対象史料とする。各地で開催された煎茶会は、主催者や茶会の主旨、参加者や規模等は様々であり、それに呼応して煎茶会図録の収録内容も挿図が豊富なものから、簡潔にまとめられたものまで、種々存在する。本研究では、より多くの資料から分析を行うこと、さらに当時の煎茶会の流行や地方への影響なども考察すべく、大規模な煎茶会だけでなく、個人や地方で行われた小規模な煎茶会も扱うこととした。なお、煎茶会図録は、茶会当日に配布されたものではなく、茶会の記念として開催後に刊行され、茶会の関係者を中心に、贈呈もしくは発売されたものである。

この挿図には煎茶席の様子が詳細に描写されており、当時の煎茶会の様子を読み取ることができる。これまでに先学による現存煎茶席遺構の全国的調査研究や、特に挿図の豊富な煎茶会図録 23 本を扱った研究から、煎茶席の建築意匠的な特質が明らかにされている。ただし、これらの研究では、煎茶席が内包する人物や諸道具の配置などについては触れられておらず、同時代の煎茶会において煎茶席の空間がどのようにしつらえられ、その中で茗主と客がどのように座していたのか、その具体的な使われ方までは明らかになっていない。

そこで本研究では、煎茶会図録を悉皆的に収集し、対象史料を 51 本まで増やし、煎茶会図録の書誌的考察を行った上で、特に座敷飾に注目して煎茶席の平面構成について分析を行う。さらに、挿図から可能な限り人物の位置を推測して、諸道具の配置とともに平面モデルを作成し、それを基本資料として、当時のしつらいおよび茗主（亭主）と客の関係を分析することで、同時代の煎茶会における煎茶席の空間特性を明らかにすることを目的とする。

第２節　先学の研究

煎茶席の建築空間に関しては、わずかであるが次の論考や研究がある。以下に紹介し、その要旨を述べる。

１．横山　正

(1)「煎茶の空間」『図説・煎茶Ⅰ伝統と美』講談社、pp.56-74、1982.1

抹茶の世界は、所作が作られた空間との密接な関りの中で進められるため、空間は茶事の場として次第に形式化し、空間と作法は一体化したとし、一方で煎茶の世界は、空間の作りにきまりはなく、日常の事として、常に自由な発想による純粋な面白さ、楽しみを探求する空間が創出されており、両者は対照的であるとしている。そして、この煎茶の空間は庶民に受け入れられ、その座敷や床の間の造りに大きな影響を与えており、日本の数寄の系譜を考える上で、煎茶は重要な意味を持っているとしている。

煎茶に深い関わりがある思われる現存事例として、山紫水明処(頼山陽旧居)、三華亭、中埜邸、花月庵、富岡鉄斎旧居（後楽堂遺趾)、久我邸、朝倉邸（現朝倉彫塑館)、有声軒を挙げ、それぞれの空間構成、室内意匠について論じている。

(2)「文人の好みとその空間」『茶道聚錦７座敷と露地（１）』小学館、pp.252-262、1984.11

抹茶の世界においては、作法と空間が不離のものとして展開してきたのに対し、煎茶の世界は、空間構成に一切制限が無く、設計者の創意に任されていたと述べたのち、煎茶の伝来や煎茶道の先駆者である売茶翁高遊外について述べ、その後の煎茶に関わる主な人物及び煎茶史料について時代ごとに論じている。その上で、建築意匠的特徴として、中国風意匠の導入や自由な平面構成、開放的な空間構成、踏込みの板床が煎茶席の一般的な傾向として見られることを指摘している。実例として、史料『築山庭造伝』、遺構の山紫水明処、成巽閣三華亭、中埜邸、花月庵、柴田邸支那館を紹介している。

２．麓　和善

(1)「煎茶席と中国園林建築」『日中建築』第46号、日中建築技術交流会、pp.14-21、1999.2

煎茶席遺構や煎茶会図録をもとに、煎茶席の建築的特徴を抽出し、中国園林建築遺構や中国絵画・文献史料と比較している。結論として、遺構および煎茶会図録から、煎茶

席は、開放的な空間構成、中国風意匠の導入、唐物・渡来物を多用した明るく華やかな室内意匠が特徴として挙げられるとし、一方で中国園林建築においてもこれらの煎茶席意匠の手本となる特徴が見られるとしている。これは、文人墨客等が中国文化に憧れをもって中国文物史料を参考に積極的に招来したもので、西洋における中国趣味（オリエンタリズム）の流行と同じく、江戸末期から明治期にかけて全盛を迎えるとしている。そして、中国風意匠の多くは「座敷雛形」にも記載され、近代和風住宅にも広く普及することとなるため、近代和風住宅確立期において煎茶席が果たした歴史的意義を見直す必要を指摘している。

(2)「煎茶空間―その文献史的特質」『茶道学体系六茶室・露地』淡交社、pp.205-254、2000.4

煎茶に関する文献から当時の煎茶空間の特質と変遷過程を明らかにしている。一般論として煎茶全般を扱う茶書には空間名称は記されているが、煎茶席の空間については書かれておらず、実際に開催された茶会についての茶会記としての煎茶会図録から、席の構成が「茶席」「前席」などの複数席の構成から、「展観席」などの出現によって単独の席の構成へと移っていったとしている。さらに、煎茶席は明るく開放的であり、開口部において形状や意匠が中国的であることを指摘し、これらは中国文化への憧れから、中国文物史料を参考にしたと考えられ、西洋における中国趣味（シノアズリー）の流行と同様に江戸末から明治にかけて全盛期を迎え、「座敷雛形」に記載されると共に、近代和風住宅にも影響を及ぼしており、煎茶席が果たした歴史的意義は高く評価できるとしている。

(3)「煎茶席と近代和風住宅」『庭園学講座Ⅶ　近代庭園と煎茶』京都造形芸術大学日本庭園研究センター、pp.73-88、2005.8

煎茶書や煎茶会図録などの煎茶に関する文献資料や、現存する煎茶席遺構を分析し、そこから煎茶席の特徴を、景勝地あるいは庭園内に、池を望んで建てられる場合が多いこと、室内からの眺望を楽しむために床が高く、外部に縁と高欄が設けられていること、外部に面して広い開口を設けた、明るく開放的な室内空間であることと指摘している。そして、これらの特徴を中国園林建築と比較し、両者の共通点が多いことから、煎茶席の意匠の手本は中国園林建築や中国文物史料であるとしている。さらに、煎茶席の意匠

が近代に日本で刊行された「建具雛形」などにも見られることを指摘し、実際の近代和風住宅を例にとって、煎茶席が近代和風住宅に及ぼした影響を述べ、煎茶席の近代和風住宅確立期における歴史的意義の高さを評価している。

(4)「煎茶席の意匠的特質」『家具道具室内史』第５号、pp.53-89、2013.5

煎茶席に関する文献史料と、著者がこれまでに実施した全国的な調査によって確認した 50 棟余りの煎茶席遺構のうち、特に意匠的特質を考える上で重要な 17 棟について、豊富な写真と共に紹介し、史料とこれらの現存遺構から煎茶席の意匠的特質を考察し、煎茶席の特徴を以下のように挙げている。眺望の良い優れた景観と一体となった開放的な空間構成、窓・建具・高欄などへの中国意匠の導入、竹材・唐木・奇木および唐物・渡来物を多用した華やかな室内意匠。そしてこれらは、煎茶を好んだ文人等が中国文化に憧れをもって積極的に招来したもので、江戸末期から明治期にかけて全盛を迎え、煎茶席意匠として確立し、さらには中国意匠として多くの「座敷雛形」に記載されることで、幕末から昭和初期にかけての和風住宅にも普及したとしている。

(5)尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎『庭と建築の煎茶文化－近代数寄空間をよみとく』思文閣出版、2018.12

近代数寄空間について、煎茶文化との関連に着目し、庭園と建築の空間と造形という観点からよみといている。まず、近代数寄空間と煎茶趣味についてそれぞれの特質を、近代庭園の空間的特質、煎茶が行われた場や環境、煎茶席の意匠的特質の観点から論じている。次に、煎茶流行の時代について、煎茶文化そのものやその精神性、煎茶席が近代和風住宅にもたらした影響、近代数寄者と煎茶の関係性から述べている。そして、煎茶趣味の広がりについて、建築空間としての煎茶席の歴史的・地域的特質、各地に広がった煎茶文化の伝播について述べ、最後に「近代数寄空間」の大きな特質は、煎茶と抹茶が共に嗜まれていた時代を反映した両者の融合であるとし、茶の湯の求心的な自然観と煎茶の開放的な自然観という、相対する自然との向き合い方を、旧習に囚われない近代数寄者たちが融合させたと結論している。

３．その他

(1)楢林　忠男『煎茶の世界』徳間書店、1971

　煎茶の伝来とその後の発達、煎茶に関わった人物について述べ、どのように煎茶が確立されていったかを述べ、煎茶の世界を論じている。煎茶は中国から伝わり、その自由な精神に着目した売茶翁が人にすすめることをはじめ、その後権威や権力的なものと密接な関係にあった抹茶と対極をなす面が、反権威的な意識を持つ文人達に共感を持って迎えられ、後に町人文化にも影響を与えながら地方へ伝播し煎茶は大流行していく。江戸末には専門的な煎茶家が登場し、煎茶も道の形態を取って、流派も現れてくるとしているが、その自由な精神は変わらず、煎茶家は与えられた場所を最高の茶室に変化させる能力を持ち、その場所の最も個性的なところを引き立たせるように飾りを行い、それに見合った手前を行うため、特別に煎茶の茶室という固定したものを生み出さなかったとしている。

(2)中村　利則『町家の茶室』淡交社、1981

　茶室の地方的な特質を考え、茶室を生活史的に位置づけるべく、茶の湯専一の空間である茶室に限らず、より広義な意味で捉えた生活体に組み込まれた町家の茶室の実例を挙げて論じている。茶室を茶の湯の場と捉え、その成立、とりまく環境、使われる素材、そして茶の湯の場の展開に着目しており、煎茶は茶の湯の場がサロンとして展開したものとして述べられている。その中で、売茶翁を祖とする煎茶の流れが、抹茶の因習化した重みを排し、軽みを追究する、元禄が育んだ文化であるとし、当時の統制強化に反する、文化的教養への憧れを持つ文人達の同人相会する場として煎茶会が開かれ、サロンとして形成されていったとしている。実例として旧小川家（富岡鉄斎旧居）と久我家を紹介し、煎茶の場は自然と交わりあう開放的なものであり、抹茶が不完全さを尊重し恣意的な世界を構成するのに対し、煎茶は普遍的な完全円や直線によって端正な世界を構成するとしている。そして、煎茶は場の限定を特にしないが、そこに漂う雰囲気を、元禄が背景とした理念の中に考えることができるのではないかと結論している。

第３節　研究の方法

本研究では、煎茶の流行にともなって各地で開催された煎茶会に合わせて刊行された茶会記のうち、席の様子を描写した挿図を収録した煎茶会図録（「茗醼図録）とも呼ばれる）を対象史料とし、その挿図から可能な限り室内空間の情報を読み取り、煎茶席の建築的特質やその使われ方について分析する。現在、煎茶に関する文献史料は 195 本あり、これらを記載内容から大別すると、一般論として煎茶を扱った〈茶書〉と、同時代に開催された煎茶会の〈茶会記〉の二つに分けられ、それぞれ茶書が 88 本、茶会記が 106 本刊行されている。ここで扱う文献史料は煎茶文化が隆盛した、明治・大正から第二次世界大戦前までに刊行されたものとした。その後も茶会記については、枚挙にいとまのない各地の各流派による茶会の会記が刊行されるが、これらは対象資料から除いた。これらの茶会記のうち、本研究で対象資料とする煎茶会図録は 51 本確認できた。これらの記載内容は、主に茶会で飾られた書画や道具の目録、茶会や席の様子を描写した挿図からなる。まず史料の書誌的考察を行った上で、目録に記載された茶会の構成、会場、席主について、文字情報を中心に分析し、茶会の流行傾向を把握するとともに、茶会に設けられた席の種類や席数などの基礎情報を整理する。これらを踏まえて、挿図から煎茶席の空間特性を比較検討するため、描写精度に差異がある挿図を平面モデル化することとした。51 本の煎茶会図録には総数 569 の席が確認でき、そのうち平面構成およびしつらいを読み取れる席は 378 席ある。それぞれの座敷飾に注目して平面構成を分類し、その分類をもとに茗主と客の位置関係を考察する。また、目録の道具に関する記述から道具の名称を整理し、道具の配置についても平面モデル化を行い、煎茶席のしつらいについて分析する。

以下、本研究の構成とその概要を述べる。

第１章「序論」では、煎茶席に関する建築史的な研究について、既往の研究をまとめ、本研究の目的と研究方法について述べた。

第２章「煎茶会図録の書誌的考察」では、対象史料である煎茶会図録 51 本について、各図録の書誌を述べた後、著者および題字・序跋を手掛けた人物、出版地域、出版年代などの書誌的考察を行う。

第３章「煎茶会の構成」では、煎茶会ごとの席の構成、会場、席主について述べ、それぞれの項目について時代的・地域的考察を行う。さらに、煎茶会に設けられた席の種

類を整理し、２席以上の席からなる席については、それぞれの席の関係性を分析・考察する。以上から、煎茶会の構成要素について基本的な情報を把握する。

第４章「煎茶席の建築的特質」では、煎茶席の建築意匠およびしつらいについて、まず煎茶席の平面のモデル化を行い、そのモデルを基本資料として、平面構成の分析を行い、それぞれ時代的・地域的考察を行う。

第５章「煎茶席の使われ方」では、煎茶会に用いられる道具について、目録に記載される名称を整理し、第４章で作成した平面モデルに道具の配置も加え、さらに第４章の分析結果を踏まえたうえで、煎茶席のしつらい、さらに茶席における茗主と客の位置について分析を行い、時代的・地域的考察を行う。

第６章「結論」は、各章をまとめて総括し、煎茶会図録における煎茶席の空間特性を明らかにする。

第２章

煎茶会図録の書誌的考察

第２章　煎茶会図録の書誌的考察

本章では、各煎茶会図録の書誌を述べたのち、著者および題字・序跋を手掛けた人物、出版年代、出版地域について考察を行う。

第１節　各図録の書誌

現在、煎茶に関する文献史料は 195 本ある。これらを記載内容から大別すると、茶の由来・製法・貯蔵法・品質・水・煎法・茶具など、一般論として煎茶を扱った〈茶書〉と、同時代に開催された煎茶会について、席に飾られた書画や道具の目録を収録した〈茶会記〉の二つに分けられ、それぞれ茶書が 88 本、茶会記が 106 本刊行されている。茶会記の一覧を〔表 2-2〕に示す。茶会記には、目録だけでなく席の様子を挿図で示した図録形式の茶会記があり、これが本研究で対象資料とする煎茶会図録であり、茶会記 106 本のうち 51 本を占める。茶書と茶会記はそれぞれ、刊行が集中する時期としない時期が存在し、茶書と茶会記ではその時代層が異なっている〔表 2-3〕。

なお、ここで扱う文献史料は煎茶文化が大いに隆盛した、明治・大正から第二次世界大戦前までに刊行されたものとした。その後も茶書については、全日本煎茶道連盟による煎茶道雑誌や、主婦の友社などの出版社による一般向の入門書などが多数刊行されており、茶会記についても、枚挙にいとまのない各地の各流派による茶会の会記を除くと、黄檗遺墨展に合わせて刊行された『黄檗遺墨展　茶会記念帖』（昭和 42 年・1967）の 1 つが刊行されている。

ここではまず、対象資料となる 51 本の煎茶会図録について〔表 2-1〕、その書誌を時間軸に基づいて順に述べていく。

表2-1　対象資料一覧

№	Title/史料名	Author/著者 Name/氏名	Occupation/職業	Publication/刊行年・地 Year	Place
1	Meienhinmoku/茗讌品目	Baiitsu Yamamoto/山本梅逸	Painter/画家	1852 嘉永 5	Kyoto
2	Shunsenyoji/春薦餘事	Naotaka,Naoyoshi Kumagai /熊谷直孝、直善	Incense set-Stationery trader/香・文具商	1860 万延元	Kyoto
3	Seiwanchakaizuroku/青湾茶会図録	Chokunyu Tanomura/田能村直入	Painter/画家	1863 文久 3	Osaka
4	Chakyoitiraku/茶郷一楽	Tameyoshi Morimoto/森本為善	unknown/不明	1865 慶応元	Aichi
5	Kindoyoin/金洞餘音	Ko Sato/佐藤梶	Confucianist/儒者	1870 明治 3	Tokyo
6	Shinkosyogatenkanmokuroku/(新古書画展観目録)	Seiun Tazawa/田澤静雲	Antique trader?/骨董商?	1873 明治 6	Tokyo
7	Kumagaisuikokojituifukusyogatenkanroku /熊谷醉香居士追福書画展観録	Randen Oku/奥蘭田	Industrialist/実業家	1875 明治 8	Tokyo
8	Seiwanmeienzushi/青湾茗讌図誌	Kichirobe Yamanaka/山中吉郎兵衛	Antique trader/骨董商	1876 明治 9	Osaka
9	Maruyamashokaizuroku/円山勝会図録	Naoyuki Kumagai/熊谷直行	Incense set-Stationery trader/香・文具商	1876 明治 9	Kyoto
10	Kuritanigakairyakushi/栗溪雅会略誌	Seishu Makino/牧野静脩	Painter/書画家	1878 明治11	Tottori
11	Fujimototessekisenseisenjoyoroku /藤本鐵石先生薦場餘録	Ryuzo Harada/原田隆造	Prosecutor/検事	1879 明治12	Osaka
12	Ikeiroku/遺馨録	Fukuichi Yamamoto/山本復一	Bureaucracy/官僚	1880 明治12	Kyoto
13	Shogasenchashingakuzuroku/書画煎茶清楽図録	Takesaburo Toyose/豊瀬竹三郎	unknown/不明	1880 明治13	Aichi
14	Shukosanboshoshuzakki/舟阜山房小集雑記	Shuko Mukai/向井舟阜	Potter/陶工	1880 明治13	Kagawa?
15	Fukashimeienzuroku/深志茗讌図録	Teijuro Takeuchi/竹内禎十郎	unknown/不明	1880 明治13	Nagano
16	Chokunyuojuenzuroku/直入翁寿筵図録	Shosai Tanomura/田能村小齋	Painter/画家	1880 明治13	Osaka
17	Unenkuyozuroku/雲烟供養図録	Saburosuke Sugita/杉田三郎助	Antique trader/骨董商	1880 明治13	Kyoto
18	Tsuiensenshinzuroku/追遠薦新図録	Genpo Oku(Randen)/奥玄寶(蘭田)	Industrialist/実業家	1883 明治16	Tokyo
19	Bunshiosenjizuroku/分史翁薦事図録	Nobushige Kashima/加嶋信成	Painter/画家	1883 明治16	Osaka
20	Seigokenchaenzuroku/清娯軒茶筵図録	Shugaku Miura/三浦秋岳	unknown/不明	1883 明治16	Aichi
21	Shokakuteimeienzuroku/招鶴亭茗醼図録	Shokakutei Nakano/中埜招鶴亭	Brewer/醸造家	1886 明治19	Aichi
22	Baisensenseikokientenkanroku /楳仙先生古稀筵展観録	Haizan Yoshitsugu/吉嗣拝山ヵ	Painter/画家	1886 明治19	Fukuoka
23	Ryutoseisho/柳嶋清賞	Shunpusya/春風社	Dilettante/湯社	1887 明治20	Tokyo
24	Zuiisogashuroku/随意荘雅集録	Junzo Go/郷純造	Politician/政治家	1889 明治22	Tokyo
25	Bokuenkisho/墨縁奇賞	Saburobe Oku(Randen) /奥三郎兵衛(蘭田)	Industrialist/実業家	1893 明治26	Tokyo
26	Suikazushi/酔花図誌	Tasuke Tsuji/辻多輔	unknown/不明	1893 明治26	Aichi
27	ChikudoChikukeiokenpisenjiyoroku /竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	Wako Murakami/村上和光	Painter/画家	1894 明治27	Kyoto
28	Kisuiosenjizuroku/淇水翁薦事図録	Matazaemon Nakano/中埜又左衛門	Brewer/醸造家	1894 明治27	Aichi
29	Rokomeienzuroku/老古茗筵図録	Rogo Nakai/中井蘆郷	unknown/不明	1896 明治29	Wakayama
30	Sekichiotsuifukutenkanroku/石癡翁追福展観録	Mitsufuru Yokose/横瀬滿古	unknown/不明	1896 明治29	Nagasaki
31	Shingakukinsho/清楽欣賞(中邨楼茶会)	Tobe Takemura/竹邨藤兵衛ヵ	Politician/政治家	1896 明治29	Kyoto
32	Seishoyoroku/清賞余録	Shinzaburo Kurokawa/黒川新三郎	Antique trader/骨董商	1898 明治31	Tokyo
33	Manokakoenshi/万翁華甲醼誌	Sanyo Ichikawa/市河三陽	unknown/不明	1898 明治31	Tokyo
34	Chikusochaenzuroku/竹荘茶醼図録	Tsurumatsu Mizutani/水谷鶴松	unknown/不明	1899 明治32	Osaka
35	Keitoinshojosenjikaiki/掲燈院小祥薦事会記	Denpe Shimogo/下郷傳平ヵ	Industrialist/実業家	1899 明治32	Shiga?
36	Kenkadoshi/兼葭堂誌	Seishichi Shikada/鹿田静七	Old bookseller/古書籍商	1901 明治34	Osaka
37	Rinkaensenjizuroku/林華園薦事図録	Shinsuke Hayashi/林新助	Antique trader/骨董商	1903 明治36	Kyoto
38	Bonsaiheikajurakukaizuroku/盆栽瓶花聚楽会図録	Shoshichi Kiso/木曾庄七	Bonsai trader/盆栽商	1903 明治36	Tokyo
39	Baisonjuenzuroku/梅村寿筵図録	Tora Uryu/瓜生寅	Industrialist/実業家	1903 明治36	Tokyo
40	Higashiyamachakaizuroku/東山茶会図録	Kahe Iwata/岩田嘉兵衛	Antique trader/骨董商	1908 明治41	Kyoto
41	20th Sansuiseiyukai/第二十回 山水清遊会	Tensho Matsubara/松原天簫	unknown/不明	1908 明治41	Gifu
42	Yoshodomeienzuroku/豫章堂茗讌図録	Keizo Sakata/阪田圭蔵	Painter/画家	1909 明治42	Osaka
43	Denkomeienzuroku/澱江茗醼図録	Shunkodo(Yoshichi)Yamanaka /山中簪篁堂(與七)	Antique trader/骨董商	1909 明治42	Osaka
44	Uchikukojisenenzushi/雨竹居士薦莚図誌	Zenzaemon Nagikawa/椰川善左衛門	Antique trader/骨董商	1913 大正 2	Osaka
45	Fusentsuisenroku/楓川追薦録	Kiyoshi Matsui/松井廉	Antique trader/骨董商	1916 大正 5	Tokyo
46	Matamataichirakuchakaizuroku/亦復一楽茶会図録	Takekazu Ochi/越智武一	unknown/不明	1918 大正 7	Kyoto
47	Keisonosenjizuroku/溪村翁追薦図録	Yozaemon Hosoya/細谷與左衛門	unknown/不明	1920 大正 9	Yamagata
48	Kakuyamashunkoosenjizuroku /角山簪篁翁薦事図録	Shunkodo(Kichirobe)Yamanaka /山中簪篁堂(吉郎兵衛)	Antique trader/骨董商	1922 大正11	Osaka
49	Shoryusha 50th anniversary meienzuroku /昌隆社五十周年記念茗讌図録	Shoryusha/昌隆社	Dilettante/湯社	1926 大正15	Osaka
50	Sokenankinenmeienzuroku/雙軒庵記念茗讌図録	Takayamado/高山堂	Antique trader/骨董商	1926 大正15	Osaka
51	Gakuonenchakaizuroku/学温園茶会図録	Rinemon Mori/森林右衛門	Fiber dealer/繊維商	1926 大正15	Aichi

〔表2-2〕茶会記一覧

No.	書　名	刊　年		刊行地	編　者	所蔵				
		和暦	西暦			高取友仙窟	国立国会	都立中央	その他	備考
1	聞中禅師七回忌供養茶会	天保6	1835	大阪						
2	煎茶小集	天保9	1838	大坂	椿椿山画					史料84が複製
3	小川流煎茶烹茶記	嘉永4	1851							
4	**茗讌品目**	嘉永5 序	1852	京都	山本梅逸			○		
5	**春薦餘事**	万延元 跋	1860	京都	頼立斎			○		
6	**青湾茶会図録（天・地・人）**	文久3	1863	大坂	田能村直入				名大	
7	**茶郷一楽（上・下）**	慶応元 跋	1865	愛知	森本為善			○		
8	**金洞餘音**	明治3 跋	1870	東京	市川万庵			○		
9	雲情霧影	明治3 跋	1870	京都	永寿堂・蕉雨堂					
10	山静日長村舎書画展観録	明治5 題言	1872	高松ヵ	向井舟皐					
11	墨水茗讌雅集	明治5	1872	東京	煎茶社中・骨董社中					
12	**（新古書画展観目録）**	明治6 序	1873	東京	田沢静雲		○			
13	**熊谷醉香居士追福書画展観録**	明治8	1875	東京	奥蘭田			○		
14	**青湾茗醼図誌**	明治9	1876	大坂	山中簪篁堂		済		名大	
15	**円山勝会図録（上・下・余）**	明治9	1876	京都	編輯：熊谷直行	○				
16	島田学校書画展観録	明治11	1878	静岡	島田学校				島田市・浜松市	
17	**栗溪雅会略誌**	明治11	1878	鳥取	牧野静脩、前田真郷	○				
18	古書画鑑賞会図録	明治12	1879	東京	下條桂谷・狩野探美		△			
19	**藤本鉄石先生薦場餘録**	明治12	1879	大阪	原田隆			○		
20	**遺馨録（上・下）**	明治12	1880	京都	山本復一			○		
21	尚古杜多	明治12 跋	1879		三田藤光			△		
22	**書画煎茶清楽図録**	明治13	1880	愛知	豊瀬竹三郎	○	済			
23	**舟皐山房小集略記**	明治13 識語	1880	香川	向井舟皐			○		
24	**深志茗讌図録・書画展観録**	明治13	1880	東京	編輯：竹内禎十郎	○				
25	**直入翁寿筵図録（天・地・人）**	明治13	1880	大阪	田能村順之助	○				
26	**雲烟供養図録（首・上・中・下）**	明治13	1880	京都	杉田三郎助	○	済			
27	青眼小録	明治13	1880	高松	益清亭、他			△		
28	偕楽会図録	明治14 跋	1881		能美遠				中津市耶馬溪文庫	
29	春園図録	明治14 跋	1881		森田弘道				岡山県	
30	洛東薦事余録	明治15	1882	京都	清水清太郎		△			
31	**追遠薦新図録**	明治16	1883	東京	奥玄寳			○		
32	琵琶勝会	明治16	1883	近江	児島氏					
33	**分史翁薦事図録**	明治16	1883	大阪	加島信成		○			
34	**清娯軒茶筵図録**	明治16	1883	愛知	三浦秋岳			○		
35	（可憐曲）	明治17 序	1884	東京	山口澗水 カ					
36	據信斎雅集小録	明治18	1885	高松ヵ	岩佐梅窓					
37	**招鶴亭茗醼図録**	明治19 跋	1886	愛知	中埜招鶴亭			○		
38	**楳仙先生古稀筵展観録**	明治19 跋	1886	福岡	吉嗣拝山			○		
39	煎抹茶醼会	明治20？	1887							
40	**柳嶠清賞**	明治20 跋	1887	東京	古梅居士	○				
41	関東四大家妙品展観目録	明治20 跋	1887	東京	須原畏三、他					
42	東山頌寿録	明治21	1888	京都	頼龍三			△		
43	**随意荘雅集録**	明治22 跋	1889	東京	郷純造			○		
44	拝山先生別筵展観録（驪筵展観録）	明治22	1889	富山	武庫川光任		○			
45	風月社第壱回煎抹茶茗筵録	明治25	1892		田中至義、他					
46	**墨縁奇賞（春・夏・秋・冬・付録）**	明治26	1893	東京	奥三郎兵衛	○				
47	**酔花図誌**	明治26	1893	愛知	辻多輔・芳賀久一郎	○				
48	梅村先生追薦展観録	明治26 序	1893	高松	山本梅村門人連中					
49	**竹洞竹溪翁建碑薦事餘録**	明治27	1894	京都	村上和光		○	○		
50	馬島杏雨古稀雅筵書画展観目録	明治27	1894	東京	馬島瑞園		△			
51	太湖勝会展観書画録	明治27	1894	長浜	杉本吉士・吉田長作		△			
52	**洪水翁薦事図録**	明治27	1894	愛知	中埜又左衛門		○			
53	雲煙小録	明治28	1895	高崎	五十貝鶴郎・山本有所		△			
54	信濃清娯欣賞録	明治28 序	1895	長野ヵ	土屋東橘			○		
55	**老古茗筵図録**	明治29	1896	和歌山	中井蘆郷			○		
56	**清楽欣賞（中邨楼茶会）**	明治29 跋	1896	京都	竹邨氏	○				
57	**石癡翁追福展観録**	明治29	1896	長崎	横瀬満古		○			
58	**清賞余録**	明治31	1898	東京	黒川新三郎（小樵）	○				
59	**万翁華甲醼誌**	明治31 序	1898	東京	市河三陽、他		済	○		
60	**竹荘茶醼図録**	明治32	1899	大阪	水谷鶴松	○				
61	**掲燈院小祥薦事会記**	明治32 序	1899	滋賀	下郷伝平 カ			○		
62	雲烟供養集	明治32	1899	静岡	高味友三郎			△		
63	一宮支部発会図録　全	明治34	1901	一宮	日本南画協会尾張国一宮支部					
64	**蒹葭堂誌**	明治34	1901	大阪	編輯兼発行者：鹿田静七			○		
65	倉田先生寿醼図録	明治35	1902	和歌山	森懋		○			
66	共楽会茶筵図録	明治35	1902	岡山	大山小雅堂					
67	梅村寿筵図録（乾・坤・生彩・詩）	明治36	1903	東京	瓜生寅				長崎県	
68	**林華園薦事図録**	明治36	1903	京都	林新助	○				
69	**盆栽瓶花聚楽会図録**	明治36	1903	東京	木曾庄七		○			
70	雲烟供養	明治38	1905	大阪	門内利助			○		
71	**東山茶会図録（東・山・茶・会）**	明治41	1908	京都	岩田嘉兵衛				鶴舞図	
72	十八会記	明治41	1908		立野酉吉					
73	**第二十回　山水清遊会**	明治41	1908	岐阜	松原天簫	○				
74	**豫章堂茗讌図録**	明治42	1909	大阪	阪田圭蔵	○				
75	**澱江茗醼図録（乾・坤）**	明治42	1909	大阪	山中簪篁堂			○		
76	山添蠖軒翁追薦会	明治43	1910		中島静甫					
77	直入居士薦事図録	明治44	1911	京都	奥田天門・兼本春篁				京工繊	
78	大師会図録	明治45	1912	東京	平田久			△		
79	**雨竹居士薦筵図誌**	大正2	1913	大阪	椰川善左衛門	○				
80	鱸翁追遠録	大正2	1913	松江	池田健助					
81	長春堂新居茗筵記	大正3 序	1914	京都ヵ	長春堂主人			○		
82	水竹邨荘甲寅茗筵記	大正3	1914	京都	田近竹邨					
83	魁春追薦茶筵記	大正4	1915		斎藤平吉					
84	煎茶小集	大正5	1916	東京	椿椿山画			△		史料１の複製
85	**楓川追薦録　附留影録（春・夏・秋・冬）**	大正5	1916	東京	松井廉	○				
86	七石亭茗筵録	大正5	1916	大阪	湯川玄洋			○		
87	悠々居士薦事茗筵記	大正6 題言	1917	京都	九鬼健一郎				三重県田村泰次郎文庫	
88	小西泰山華甲寿筵図録	大正6 序	1917		小西退蔵					
89	**亦復一楽茶会図録**	大正7	1918	京都	田近竹邨題、越知武一編	○				
90	亦復一楽（画集）	大正7	1918		田近竹邨題、越知武一編			○		
91	良山堂茶話二編（烹茶会約　P.47～48）	大正8	1919	東京	阿部良山、相見繁一編、芸苑叢書			△		
92	吉嗣拝山先生追福展観図録	大正9	1920	福岡	萱島秀山・藤瀬冠村、他				富山県	
93	**溪村翁追薦図録**	大正9 序	1920	山形	細谷与左衛門	○				
94	楓川画集（上・下）	大正9	1920	東京	松井廉					
95	一楽荘新居茗筵記	大正10 自序	1921		一楽荘主人					
96	**角山簪篁翁薦事図録（瑞・草・魁）**	大正11	1922	大阪	山中簪篁堂			○		
97	森琴石先生薦事図録	大正14	1925		近藤翠石				中津市耶馬溪文庫	
98	**雙軒庵記念茗讌図録**	大正15	1926	大阪	高山堂		○			
99	**昌隆社五十周年記念茗讌図録**	大正15	1926	大阪	井上熊太郎		○			
100	松雲荘賀筵録	大正15	1926	和歌山	春見會				和歌山県	
101	**学温園茶会図録**	大正15	1926	愛知	森林右エ門	○				
102	売茶堂落慶茶筵会記	昭和3	1928	京都						
103	坂田習軒先生追福茗筵録	昭和3 序	1928		大阪通仙社					
104	高遊会茗筵図録　第一輯	昭和6	1931		篠野浩三編					
105	高遊会茗筵図録　第二輯	昭和6	1931		篠野浩三編					
106	高遊会茗筵図録　第三輯	昭和7	1932		篠野浩三編					

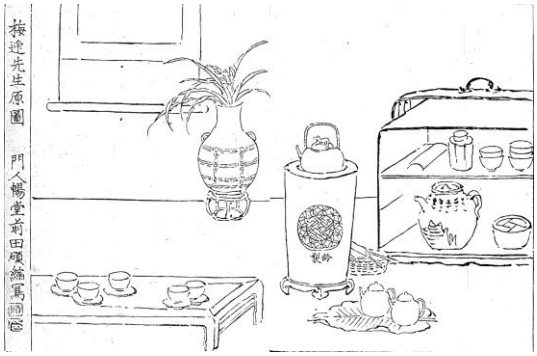
太字は対象史料を示す。　　△：茶会記ではあるが席の挿図なし

〔表2-3〕煎茶関係文献年表

(1)『茗讌品目』

（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、１冊、小本(17.4 ㎝×11.3 ㎝)、匡郭(12.0 ㎝×9.5 ㎝)、単辺、有界、版心「(丁数)」

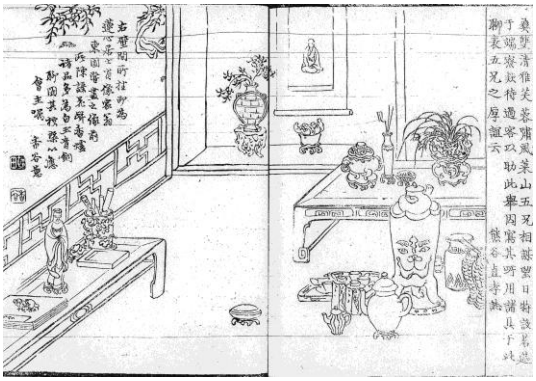


〔図 2-1〕『茗讌品目』茶席

山本梅逸の長寿(古希)を祝うために、嘉永５年(1852)4 月 20 日に、京都の八坂で開催された煎茶会の図録である。刊記はないが、跋文に「壬子(1852)冬識於玉禅書屋梅逸亮」とあり、嘉永５年に山本梅逸によって刊行されたと考えられる。山本梅逸は尾張の南画家で、同じく尾張の南画家中林竹洞とともに京都に出て、南画を学びながら煎茶を好み、頼山陽をはじめとする文人らと親交した。帰郷した後は、煎茶文化の普及を図っており、尾張の煎茶文化の先駆者である。本書は、第 1～5 席の挿図と目録、書画の目録という単純な構成である。多くの煎茶会に影響を与えた史料 3『青湾茶会図録』以前に刊行された図録として貴重である。

(2)『春薦餘事』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、１冊、中本(17.9 ㎝×12.1 ㎝)・匡郭(13.7 ㎝×10.4 ㎝)、単辺、有界、版心「(丁数)」



〔図 2-2〕『春薦餘事』茶席

薬種業鳩居堂を営んだ熊谷家四代目熊谷蓮心の追薦のため、蓮心が亡くなった翌年の万延元年(1860)夏に、息子直孝(後の七代目熊谷酔香)と直善が、京都の円山で開催した煎茶会の図録である。刊記はないが、序文によれば息子直孝と直善が目録を製作した。序文は幕末の志士で詩文や書画をよくした山中静逸が書いており、本茶会は静逸と藤田南渓の勧めにより開催された。山中静逸は、信天翁と号し、史料 6『新古書画展観目録』など、明治初期の大規模煎茶会の図録に度々名が

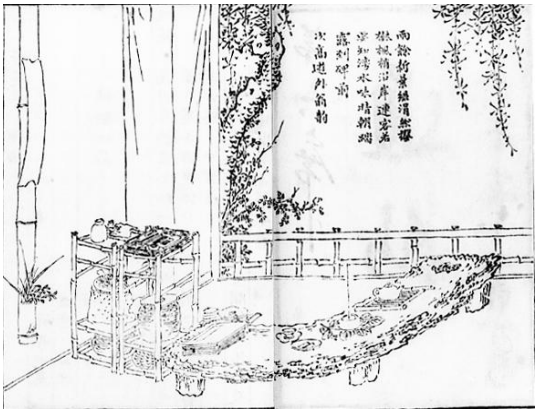
みえ、初期の煎茶会の中心的人物の一人と考えられる。

本書は書画の目録が大半を占め、茶席の挿図は１図収録されるのみである。

(3)『青湾茶会図録』

（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵他）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴、３冊、中本(18.0 ㎝×12.4 ㎝)、匡郭(15.2 ㎝×10.9 ㎝)、単辺、有界、版心「青湾茶会図録（天・地・人）巻（丁数）煙嵐社藏梓」



〔図 2-3〕『青湾茶会図録』茶席

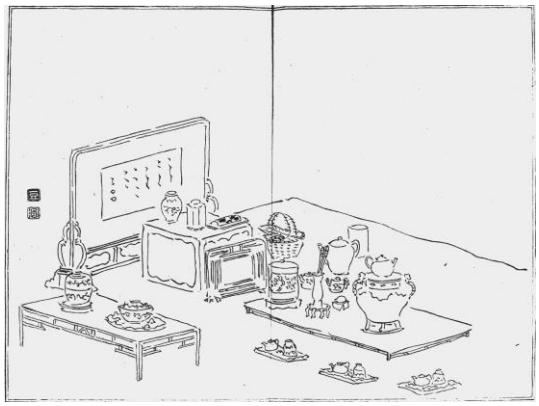
売茶翁高遊外の百年忌を記念し、またそれを機に茶と縁由の深かった青湾の地（淀川下流）に「青湾之碑」を建立し、その落成もかねて、文久２年（1862）４月 23 日に開催された「青湾茶会」と、同年７月 16 日に開催された「後青湾茶会」の図録である。大坂の青湾(網島)で開催され、特に前者の青湾茶会は来客 1200 名、奉仕側約 100 名にも及ぶ大茶会であったとされ、全 11 席が設けられ、それぞれの席に盧仝の「茶歌」になぞらえた名がつけられていた。後青湾茶会は前会の盛会をうけて、高遊外の命日である７月 16 日に再び青湾の地で行われており、参会者は 150 名ほど、設けられた席は全７席と、前会より小規模であったが、前会の十倍も楽しい茶会であったと序文に記されている。

天・地・人の３巻構成で、人巻刊記によると、浪花田能邨氏蔵梓、執事煙嵐社・白頭社・随意社により、文久３年(1863)春に刊行された。ここでいう田能邨氏とは、田能村竹田の弟子で、幕末から明治にかけて関西を中心に活躍した南画家の田能邨直入のことである。竹田と同様に、直入も煎茶にも通じていた。

本書は、天・地・人の３巻で構成され、天・地巻には青湾茶会、人巻には後青湾茶会が収録されている。席毎に席の挿図、席名、茗主の名、道具の目録が記され、この後に刊行された多くの煎茶会図録は、本書に大きな影響を受けている。

(4)『茶郷一楽』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、２冊、中本(20.3 ㎝×13.0 ㎝)、匡郭(15.3 ㎝×10.2 ㎝)、双辺、有界、版心なし



〔図 2-4〕『茶郷一楽』茶席

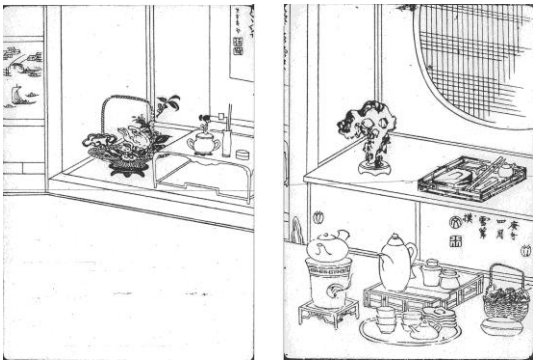
慶応元年（1865）10 月 22 日に名古屋

で行われた煎茶会の図録である。上下２巻構成で、上巻に第１席の挿図、下巻に第２席の目録が収録されている。刊記はなく、上巻奥書に「慶応紀元乙丑之冬十月念五日題于雙竹菴／西窓風爐蝉鳴之下／紫石山人森本為善(印)」(／印改行、以下同)とあり、慶応元年に刊行されたと考えられる。

(5)『金洞餘音』(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

大和綴、１冊、小本(17.1 ㎝×11.7 ㎝)、匡郭(12.6 ㎝×8.9 ㎝)、双辺、有界、版心「(蝙蝠文)」

安政５年（1858）７月 18 日に歿した市河米庵の十三回忌のため、明治３年（1870）４月 26 日に、息子の市河万庵が、東京の両国橋東で開催した煎茶会の図録である。刊記はないが、序文に「明治三年庚午秋七月　佐藤榥撰并書」とあり、明治３年に儒者の佐藤榥(立軒)によって刊行されたと考えられる。市河米庵は幕末三筆の一人とされた江戸時代の書家で、文房清玩の趣味が深く、煎茶も好んでしており、松井釣古の旧主加賀屋正清兵衛に楓川亭と命名したことでも知られている。当日は 300 余の書画を展示し、2000 人の来客を集めた。頼山陽の息子である頼復が跋文を書いている。



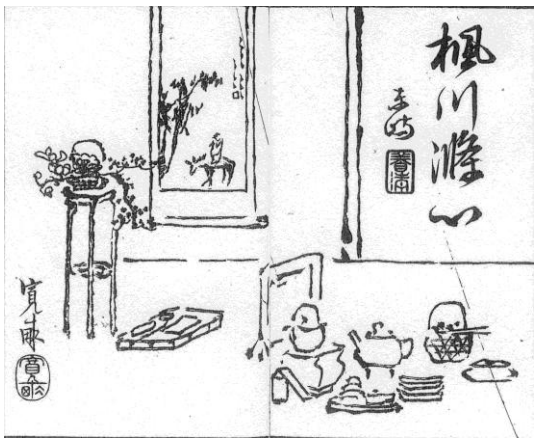
〔図 2-5〕『金洞餘音』茶席

本書は、書画の目録が大半を占め、茶席の挿図が１図収録されるのみである。

(6)『新古書画展観目録』(国立国会図書館所蔵)

袋綴、１冊、小本(15.0 ㎝×8.9 ㎝)、匡郭(10.9 ㎝×6.7 ㎝)、単辺、有界、版心なし

明治６年（1873）頃に東京で開催された煎茶会の図録であるが、刊記はなく、巻末に「田澤静雲謹白」とある。序文を明治６年４月 16 日に信天翁(山中静逸)が書いている。



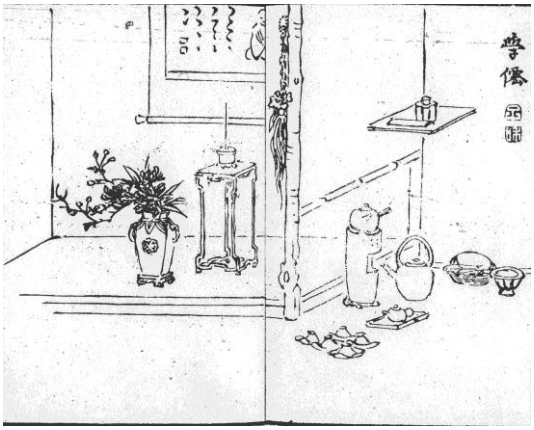
〔図 2-6〕『新古書画展観目録』茶席

本書は、書画の目録が大半を占め、席の挿図が１図収録されるのみである。

(7)『熊谷醉香居士追福書画展観録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、1 冊、特小本(11.6 ㎝×7.2 ㎝)、匡郭(8.0 ㎝×5.5 ㎝)、単辺、有界、版心「(丁数)」

鳩居堂七代目熊谷酔香の追薦のために、京都で開催された円山勝会に合わせて明治８年（1875）11 月６・７日に、奥蘭田が東京の隅田川近くの欸乃邨荘で開催した煎茶会の図録である。刊記はなく、表題に「明治八年十一月　欸乃邨荘蔵梓」とある。中扉題を「松菊」(木戸孝允)が書いている。奥蘭田は本名を奥三郎兵衛といい、蘭田の他にも玄宝という雅号も持っている。実業家でありながら詩文や書画に造詣が深く、後に史料 18『追遠薦新図録』・25『墨縁奇賞』の煎茶会も主催した。この茶会では数十幅の書画を集めて熊谷醉香居士の追福を行っており、両日で 150 人余の来客を集めた。京都で開催された円山勝会の会主熊谷直行は、史料９『円山勝会図録』の最後に、本茶会への謝意を述べている。本書は、前半に書画の目録、後半に茶醼記が記され、席の挿図が１図収録されている。

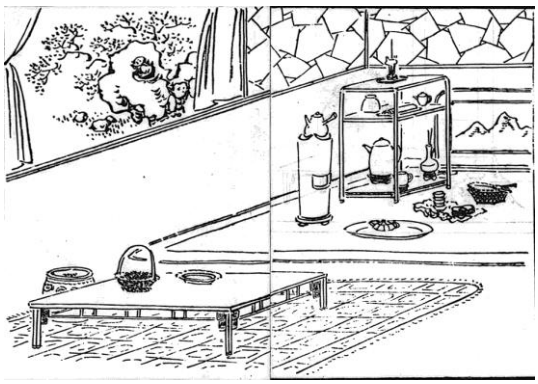


〔図 2-7〕『熊谷醉香居士追福書画展観録』（明治８年）茶席

(8)『青湾茗醼図誌』（名古屋工業大学所蔵他）

木版本、淡茶紙表紙、袋綴、4 冊、小本(17.2 ㎝×11.1 ㎝)、匡郭(11.8 ㎝×8.8 ㎝)、単辺、有界、版心「〇茗醼図誌(巻数)（丁数)」

山中簪篁堂二代目山中吉兵衛追薦のため、明治７年（1874）11 月８日に、長男の三代目吉兵衛、次男の吉郎兵衛、養子で三男の與七が祭主となり、大阪の青湾で開いた煎茶会の図録である。瑞・草・魁および「青湾茗醼書画展観録全」の４巻構成で、魁巻刊記によると、次男山中吉郎兵衛の編輯・蔵梓により、明治９年１月 11 日に刊行された。山中簪篁堂は、大阪の骨董商で、息子らはそれぞれ独立して家を構え、その所在地から天満の長男吉兵衛は「天山」、北浜の角に住む次男吉郎兵衛は「角山」、



〔図 2-8〕『青湾茗醼図誌』茶席

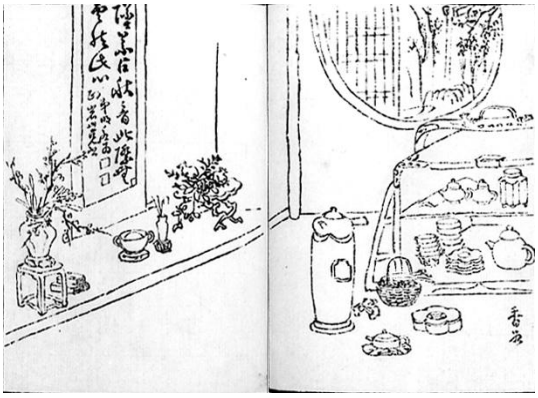
高麗橋の三男與七は「高山」と称した。後に煎茶会図録に登場する山中商会は、山中簪篁堂が合名会社化したもので、海外にまでその活躍の場を広げ、イギリスでは英国王室御用達の称号まで得ており、大阪だけでなく全国的に大きな影響力を持っていた。関西で開催される煎茶会に度々登場しており、特に史料 43『澱江茗醼図録』・48『角山簪篁翁薦事図録』は、先考追薦のために彼らが主催した茶会の図録である。

本書は、各席の挿図と目録に加えて、骨董商の図録らしく特に注目すべき品に関して道具の図と説明が収録されている。序文を漢学者の長三洲、書家で鑑定に精通した小林卓斎、南画家の田能村直入らが書いている。彼らは後の煎茶会図録の題字や序文・跋文も度々手掛けている。

(9)『円山勝会図録』（高取友仙窟所蔵）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴、3 冊、小本(15.1 ㎝×10.0 ㎝)、匡郭(11.1 ㎝×7.8 ㎝)、単辺、無界、版心「円山勝会図録（巻之上、巻之下、餘巻)(丁数)」

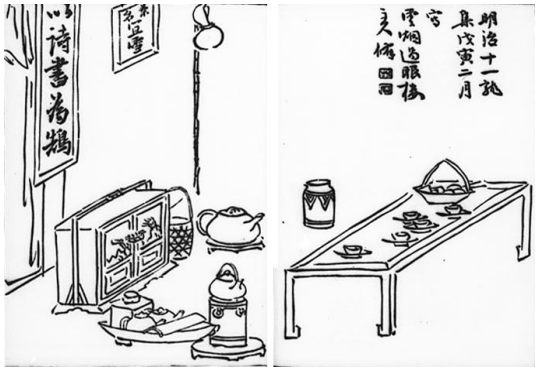
京都の香具屋鳩居堂七代目熊谷酔香の追薦のため、明治 8 年(1875)11 月 6・7 の両日に、息子直行が京都円山で開催した煎茶会の図録である。上・下・余巻の 3 巻構成で、余巻刊記によると、熊谷直行の編輯・蔵梓により、明治 9 年 5 月に出版された。鳩居堂は、当時の煎茶界で活躍しており、その後の大茶会の図録にも頻繁に名がみえる。本茶会は全国から五百余の書画が出展され、書画器物の品比べの観を呈したといわれ、2 日間では興が尽きなかったために、翌 8 日も鴨涯の水楼に席を設けており、総席数 31 席におよぶ大茶会であった。上巻に書画幅目録が記載され、下巻には 6・7 日の円山正阿弥や長楽寺などにおける茗莚(茶会)、余巻には 8 日の鴨厓の水楼における茗莚の挿図と目録が収録されている。上巻扉題を富岡鐵斎、序文を頼支峰、跋文を谷如意(鐵臣)、下巻扉題を国重半山、序文を山中信天翁、跋文を片山精堂、余巻序文を小林卓蔵、識語を石津灌園と熊谷直行が書き、さらに各席の賛を当時の代表的文人が書いている。彼らはこの後も関西での煎茶会の図録に度々登場しており、関西煎茶界の中心的人物らであったと考えられる。



〔図 2-9〕『円山勝会図録』茶席

(10)『栗渓雅会略誌』（高取友仙窟所蔵）

木版本・淡黄土色紙表紙・袋綴、1 冊、中本(17.6cm×11.9 ㎝)、匡郭(12.8 ㎝×9.2 ㎝)、双辺、有界、版心「栗渓雅会略誌　(丁数)」



〔図 2-10〕『栗渓雅会略誌』茶席

明治８年３月９日に亡くなった鳥取藩藩儒で南画家の正墻適處の三回忌のため、明治 11 年（1878）2 月 2 日に、息子種太が鳥取栗渓の黄檗宗寺院興禅寺で開催した煎茶会の図録である。刊記によると、士族の牧野静修と前田眞郷の編集により、明治 11 年 3 月 30 日に刊行された。本書は、各席の目録の後に、門人による追悼詩が記載され、席の挿図は茶席が 1 図収録されるのみである。

(11)『藤本鐵石先生薦場余禄』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、1 冊、小本(15.8cm×10.0 ㎝)、匡郭(11.5 ㎝×8.1 ㎝)、単辺、無界、版心「○(丁数)」

〔図 2-11〕『藤本鐵石先生薦場余禄』茶席

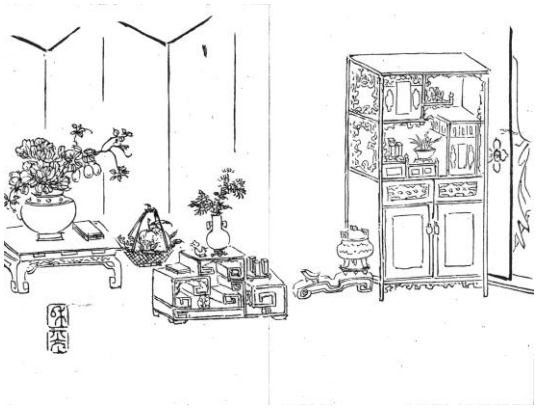
外題に「藤本鐵石先生薦場余禄」、見返し題に「薦場余禄」と記されている。幕末の志士藤本鐵石の十七回忌のため、明治 12 年(1879)5 月 11 日に、息子藤本彦衛と友人本城温が、大阪の浪華博物場で開催した煎茶会の図録である。跋文に「西疇原田隆子隆稿(印)」と記されている。原田隆は、字を子隆、号を西疇と称し、篆刻家・漢詩人として活躍した。図録前半に書画の目録、後半に友人らによる追悼詩が記載され、席の挿図は 1 図収録されるのみである。

(12)『遺馨録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴、2 冊、中本(18.2 ㎝×11.2 ㎝)、匡郭(11.4 ㎝×7.7 ㎝)、単辺、有界、版心「遺馨録(上巻・下巻)　(丁数)　○讀書室蔵」

安政６年 11 月 27 日に没した本草学者山本亡羊の二十回忌のために、明治 12 年(1879)11 月 18 日に、孫山本復一が西京の本國寺で開催した煎茶会の図録である。上下２巻構成で、上巻題辞に明治己卯(12 年)十二月／對岳(岩倉具視) (印)(印)」、序文に「明

治十三季一月上浣／華頂山松翁(印)(印)」、「明治十二年十二月／児章夫盥手書／(印)(印)」、跋文に「己卯仲冬百々菘拝撰」「明治 12 年 11 月　不肖男正夫謹書／(印)(印)」、下巻題字に「明治十二年／冬日／龍山人(印)(印)」、跋文に「明治庚辰(13)五月／西尾為忠謹跋／(印)(印)」、「己卯十二月／孫山本復一謹識(印)」と記されている。上巻の前半に陳列品の目録、下巻の前半に茶席の目録と挿図が収録されており、上巻の陳列品の目録をみると、植物をはじめ、香、古墨、経、書画、さらには駝鳥の毛や卵が並べられたことがわかる。両巻とも後半は、30 種近くの動植物の緻密な画と説明が記載されており、本草学者の追薦録らしい図鑑のような構成である。主催者の山本復一は、岩倉具視の秘書を務めた人物で、その関係から題辞を岩倉具視が書いた。

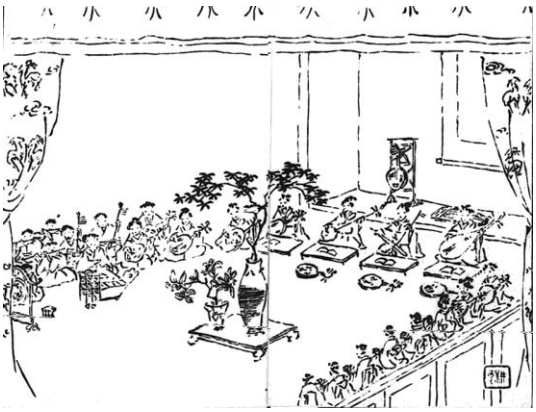


〔図 2-12〕『遺馨録』前席

(13)『書画煎茶清楽図録』(国立国会図書館所蔵他)

筆写本、灰色紙表紙、袋綴、1 冊、中本(18.4 ㎝×12.8 ㎝)、匡郭(13.3 ㎝×9.2 ㎝)、単辺、無界、版心「(丁数)」

明治 13 年（1880）頃に名古屋の極楽精舎で開催された煎茶会の図録である。刊記によると，明治 13 年 2 月 25 日に豊瀬竹三郎により刊行された。本書は，前半に書画の目録，後半に茶席と奏楽席の挿図が収録されている。



〔図 2-13〕『書画煎茶清楽図録』奏楽席

(14)『舟皐山房小集略記』(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

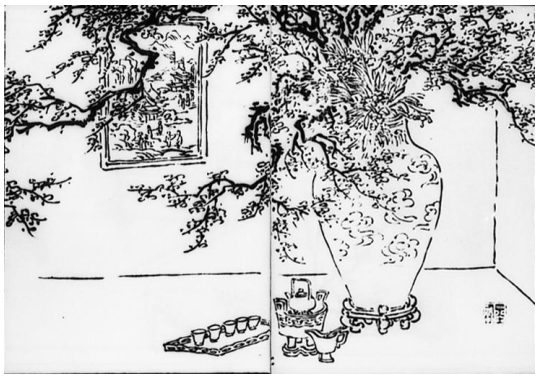
袋綴，1 冊，特小本(13.0 ㎝×8.6 ㎝)，匡郭(8.9 ㎝×6.8 ㎝)，単辺，有界，版心「(丁数)」

〔図 2-14〕『舟皐山房小集略記』外観

陶業家の向井舟皐の還暦を祝うため，明治 13 年(1880)5 月 7 日に，彼の別業で開催された煎茶会の図録である。向井舟皐は，香川浅野村の人で，浅野焼を興したとされている。題辞に「庚辰夏日／梅村(印)」，序文に「友人梅邨□□亥識／於三聖庵中(印)(印)」と記されている。三聖庵梅村とは，山田梅村のことで，高松藩に仕えた儒者・文人である。刊記はなく，巻の中程に「時明治十三年庚辰五月七日向井舟皐自記」とあることから，向井舟皐自身が刊行したと考えられる。席の挿図は 1 図のみで，外観の挿図が 3 図収録されている。

(15)『深志茗讌図録』(国立国会図書館所蔵他)

袋綴，2 冊，小本(15.3cm×10.4 ㎝)，匡郭(10.4 ㎝×7.5 ㎝)，単辺，有界，版心「○茗讌図録 （上・下）（丁数)」

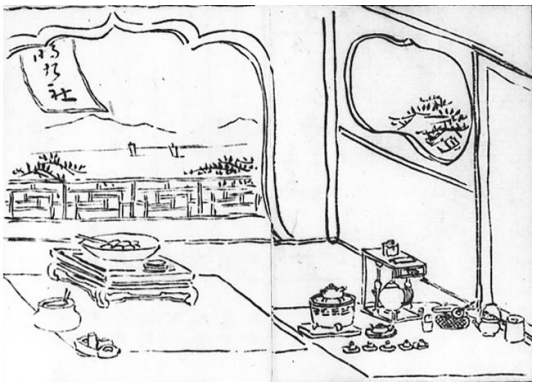


〔図 2-15〕『深志茗讌図録』前席

明治 12 年(1879)3 月，深志すなわち信州松本の青龍禅寺で開催された煎茶会の図録である。深志茗讌図録乾・深志茗讌書画展観録坤の 2 巻からなり，坤巻刊記によると，竹内禎十郎の編集により，明治 13 年 9 月 5 日に出版されている。出版人として東京の須原鐵二・北畠茂兵衛・楓川亭・朝陽堂・高木壽頴・田澤静雲・畏三房，長野の岩下伴五郎・西澤喜太郎・高美甚右衛門・窪田重平，大阪の岡島真七，京都の鳩居堂，以上 13 名が記されており，東京の楓川亭や京都の鳩居堂など，当時の煎茶界で活躍した骨董商や香・文具商の名がある。発売とは記されていないが，これらの出版人によって発売されたのであろう。乾巻に第 1～3 席の挿図と目録が収録され，坤巻に書画の目録が収録されている。また，序文を詩人の小野湖山，跋文を書家の小林卓齋が書いている。

(16)『直入翁寿筵図録』(高取友仙窟所蔵)

木版本・薄茶紙表紙・袋綴，3 冊，小本(16.2 ㎝×10.6 ㎝)，匡郭(10.2 ㎝×7.2 ㎝)，単辺，有界，版心「直入山房藏梓」



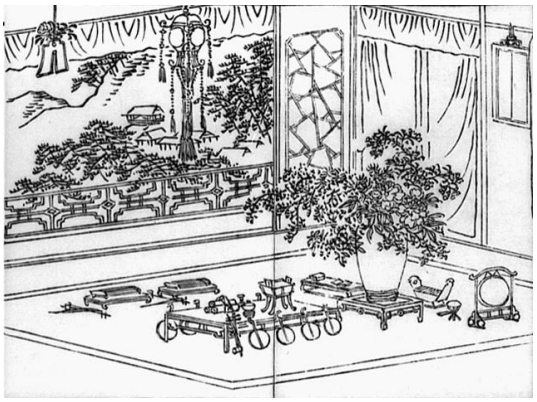
〔図 2-16〕『直入翁寿筵図録』茶席

直入翁の長寿を祝うため，明治 10 年(1877)3 月 11 日に，大阪の広岡氏別荘他

で開かれた煎茶会の図録である。天・地・人の 3 巻からなり，田能村小斎の編集，直入山房蔵梓で，明治 13 年 11 月に刊行された。直入翁とは史料 3『青湾茶会図録』の編者の南画家田能村直入のことで，小斎は直入の養子で，同じく南画家である。3 巻いずれも席の挿図(写真 7)と書画・道具の目録が収録されている。数え年で六十一を表す華甲にちなんで、玄関副席に六十一仙人の書画を飾るなど、大変趣向のこらされた茶会であったと思われる。

(17)『雲烟供養図録』（国立国会図書館所蔵他）

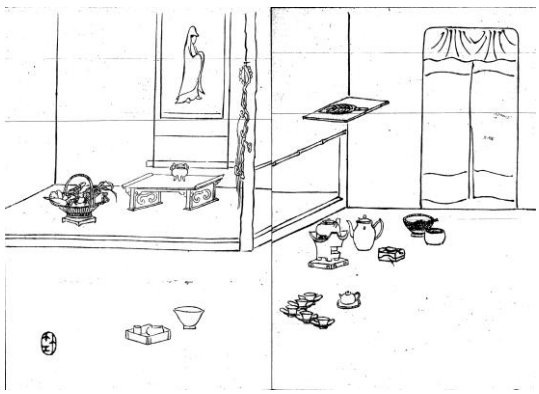
木版本、青色紙表紙、袋綴，4 冊，中本(19.4 ㎝×11.5 ㎝)，匡郭(12.4 ㎝×8.4 ㎝)，単辺，有界，版心「雲烟供養図録(首巻・上巻・中巻・下巻）（丁数） 〇莱山堂藏」



〔図 2-17〕『雲烟供養図録』奏楽席

莱山堂主人杉田竹香供養のため，明治 12 年(1879)5 月 18 日に，息子尚綱が京都東山で開催した煎茶会の図録である。首・上・中・下の４巻からなり，下巻刊記によると，京都の杉田三郎助の編輯・出版により，明治 13 年 11 月に刊行され，京都の文石堂から発売された。莱山堂は京都の骨董商で，先の史料 2『春薦餘事』・9『円山勝会図録』・16『直入翁寿筵図録』にその名がみえる。首巻に知恩院で展観された書画の目録，上・中・下巻に牡丹園や中邨楼などに設けられた茶席や奏楽席の挿図と書画や道具の目録が収録されている。外観の挿図の一画に描かれた室内に飾られた道具と、室内の挿図の道具が整合することから、煎茶席の室内から外観までの詳細が分かる史料である。また，各巻の題字や序文・跋文の多くは，史料 9『円山勝会図録』・12『遺馨録』にも登場した儒者や画家・書家が書いており，当時彼らの間で煎茶会が流行していたことが確認できる。

(18)『追遠薦新図録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）



〔図 2-18〕『追遠薦新図録』茶席

袋綴，1 冊，中本(19.3cm×11.4 ㎝)，匡郭(12.0 ㎝×8.5 ㎝)，単辺，有界，版

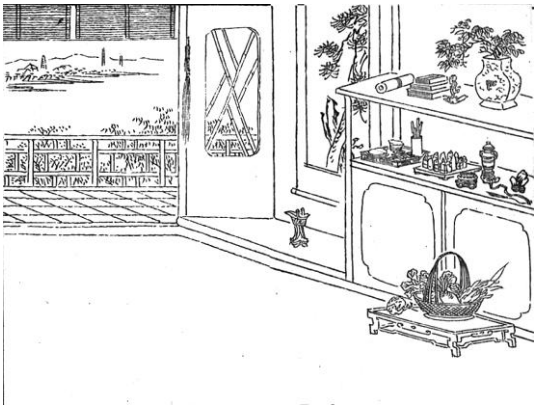
心「追遠薦新図録　(丁数)　○　注春居蔵」

明治の筆匠高木寿頴の追薦のため，明治 16 年(1883)に，奥蘭田が東京の欸乃邨荘で開催した煎茶会の図録である。刊記には禁売買とあり，「明治十六年七月廿五日刻成／注春居」とある。注春居とは奥蘭田のことである。会場には多数の文房四宝が陳列され，本書の大半はそれらの目録が占め，席の挿図はわずか 6 図である。茶席の挿図から，同じく欸乃邨荘で開催された史料 7『熊谷醉香居士追福書画展観録』の茶席と同じ室内であることがわかる。題字を井上馨や木戸孝允と親交のあった当時の官僚である杉聴雨(孫七郎)や，明治の三筆と称された巌谷一六，日下部鳴鶴らが書いている。杉はこの後も東京での煎茶会の図録に度々登場しており，東京煎茶界の中心的人物と考えられる。

(19)『分史翁薦事図録』

(国立国会図書館所蔵)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，2 冊，中本(18.2 ㎝×11.1 ㎝)，匡郭(12.5 ㎝×8.3 ㎝)，単辺，有界，版心「分史翁薦事図録(元・亨・利・貞)(丁数)」



〔図 2-19〕『分史翁薦事図録』茶席

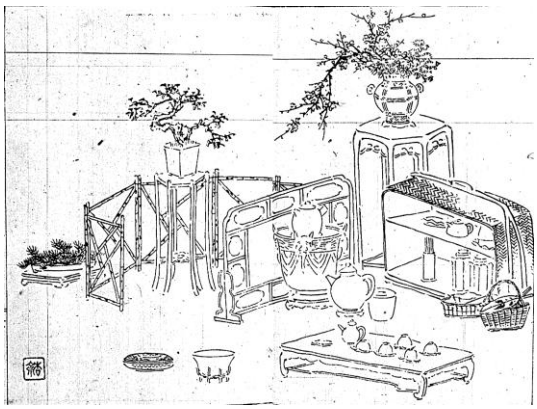
明治 14 年 8 月 29 日に亡くなった大阪の唐物商吉祥堂主人の小西分史翁の一周忌のため，明治 15 年(1882)5 月 14 日に，息子則明が大阪網島と片街で開催した煎茶会の図録である。当日は全 15 席を設け、来客 3 千人余を集めた大煎茶会であった。元・亨・利・貞の 4 巻構成で，刊記から加嶋信成の編集，小西平兵衛(吉祥堂)の出版により，明治 16 年 12 月に刊行，発売された。諸国発売所として，大阪の後藤祥雲堂・山中簪篁堂・西尾五福堂・鹿田松雲堂・倉澤奎雲堂・赤志忠雅堂，東京の須原沈香閣・田澤静雲堂・松井楓川堂・西島静芳堂，京都の熊谷鳩居堂・島川清雅堂・北邨文石堂，長崎の池島村泉堂，名古屋の片野東壁堂，中国上海の岸田楽善堂が記されている。各巻に席の挿図と目録，元巻後半に「芳華園印譜」が収録されている。また，各席の目録には掛軸や注目すべき名器・盆栽等の図が豊富に掲載されており，煎茶会図録として充実した内容といえる。多数の跋文の中には書家の小林卓齋の名が見え，明治政府の首脳人物の一人である三条実美が題字を書いている。

(20)『清娯軒茶筵図録』

(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

袋綴，1冊，中本(18.4 ㎝×11.4 ㎝)，匡郭(12.9 ㎝×9.1 ㎝)，単辺，有界，版心「清娯軒茶筵図録　(丁数)」

明治16年(1883)11月15日に，清娯軒主人三浦秋岳によって尾張半田で開催された煎茶会の図録である。刊記に，「山水屋主人錦水漁者謹書(印)／名古屋長者町豊原堂彫刻(印)／明治16年歳次昭陽(癸)協洽(未)新陽望日」，跋文に「明治十七年三月於酎處／当家　眉山人(印)」，「杏斎織田啓記／(印)(印)」と記されている。本書は道具に焦点を当てており，室内まで描かれているのは7図である。

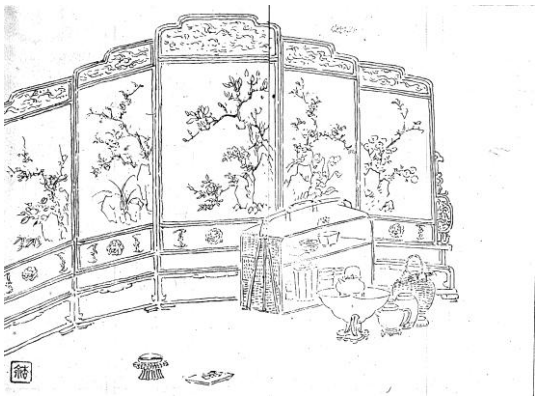


〔図 2-20〕『清娯軒茶筵図録』茶席

(21)『招鶴亭茗醼図録』(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

袋綴，1冊，中本(18.6 ㎝×11.9 ㎝)，匡郭(12.6 ㎝×9.1 ㎝)，単辺，有界，版心「(丁数)」

明治17年(1884)に，愛知県知多半島半田の中埜家で開催された煎茶会の図録である。刊記はないが，序文に「時在丙戌五月眉山筆幷書」，跋文に「時歳次丙戌夏五月／(福岡)敬堂源欽崇檐幷書」とあり，明治19年丙戌頃に刊行されたと考えられる。本書は前年に同じく半田で開催された茶会の図録である史料20『清娯軒茶筵図録』と形式が酷似しており，その影響を受けたことが伺える。中埜家は代々醸造業を営む豪商で，その三代および四代又左衛門は，とりわけ煎茶を好んだ。中埜家の広大な邸内には，安政年間に三代又左衛門が中国趣味を導入して建設した主屋「招鶴亭」と，池畔の隠居所「水亭」，築山の上に建つ煎茶席「山亭」(消失)，および四代又左衛門が主屋に接続して建設した二階建の「新座敷」がある。現存する水亭と本図録および後述する史料28『淇水翁薦事図録』所収の挿図を比較するとほとんど一致しており，煎茶会図録の挿図の信憑性を確認することができる史料といえる。

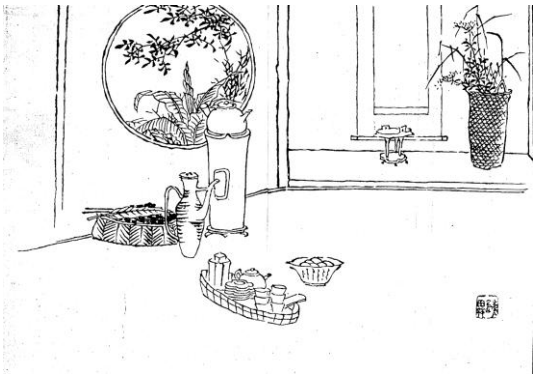


〔図 2-21〕『招鶴亭茗醼図録』茶席

(22)『楳仙先生古稀筵展観録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴，1 冊，中本(19.7 ㎝×13.0 ㎝），匡郭(14.1 ㎝×10.1 ㎝)，単辺，有界，版心「楳仙先生古稀筵展観録」

大宰府の絵師吉嗣梅仙の古稀を祝うために，明治 19 年(1886)頃に開催された煎茶会の図録である。刊記はなく，跋文に梅仙の息子で南画家の吉嗣拝山の名があることから，拝山が中心となって図録を刊行したと考えられる。本書は，前半に書画の目録，後半に席の挿図が収録されている。書画の所有者や煎茶席の茗主が九州の人であることから，地元大宰府で開催された可能性が高い。



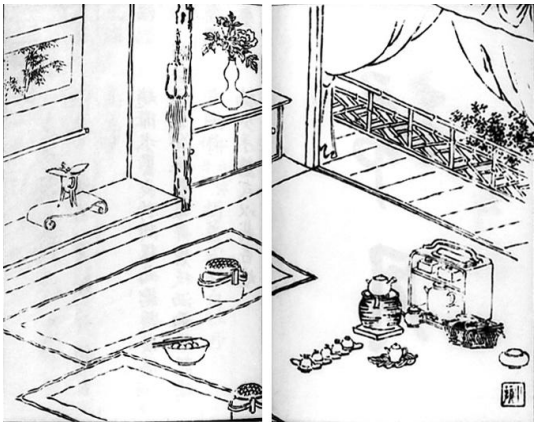
〔図 2-22〕『楳仙先生古稀筵展観録』茶席

(23)『柳嶠清賞』

（高取友仙窟所蔵）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(17.5 ㎝×11.9 ㎝）, 匡郭(13.6 ㎝×9.0 ㎝)，単辺，無界，版心「春風社」

明治 20 年(1887)11 月 24 日，春風社によって東京柳島の料亭橋本楼で開催された煎茶会の図録である。刊記はないが，版心の記載から春風社によって刊行されたと考えられる。春風社は東京の好事家を主体とする湯社である。明治中期までにこのような湯社が各地で生まれ，彼らによる大小様々な煎茶会が催された。本茶会を主催した春風社，京都の先春社や大阪の昌隆社はその代表的なものである。席の挿図は帝室技芸員も務めた野口小蘋の手によるもので，全 5 席の様子が詳細に描かれている。また，各席の題字や序文・跋文の多くを，史料 18『追遠薦新図録』に登場した画家や書家が書いている。



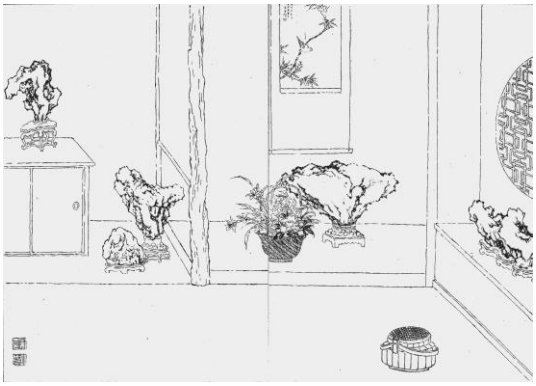
〔図 2-23〕『柳嶠清賞』茶席

(24)『随意荘雅集録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴，2 冊，大本(27.2 ㎝×17.2 ㎝)，匡郭，単辺，無界，版心「〇　随意荘」

郷純造が自らの告老のために、明治 22 年（1889）5 月 18 日に隅田川西岸橋場の別邸随意荘で開催した宴の図録である。

刊記はないが，序文と跋文を郷純造自ら書いていることから，彼が刊行したと考えられる。本書は上下 2 巻で構成され，上巻には目録と野口小蘋画による席の挿図，下巻には郷への贈答品の目録と祝辞が収録されている。郷純造は大蔵次官を務めた政治家で，四男が三菱財閥の岩崎家の養子に，娘が川崎財閥に嫁ぐなど，経済界とも深く繋がっていた。そのような人脈を感じさせるように，内題を三条実美が書いており，祝辞を松方正義，伊藤博文などの政治家や，杉聴雨，市河万庵などの文人が寄せている。

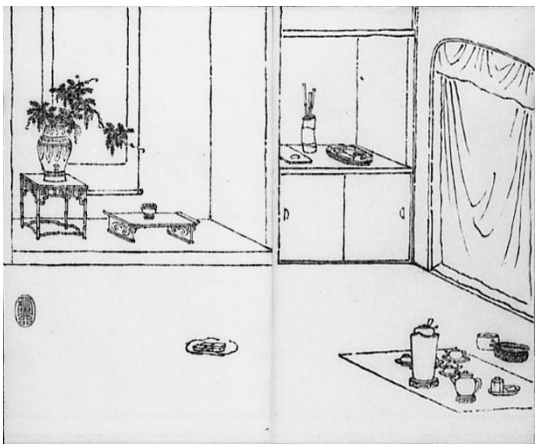


〔図 2-24〕『随意荘雅集録』展観席

(25)『墨縁奇賞』（高取友仙窟所蔵）

筆写本、黄土色紙表紙、袋綴，4 冊，大本(25.6 ㎝×14.4 ㎝)，匡郭(17.4 ㎝×10.4 ㎝)，単辺，無界，版心「墨縁奇賞(巻数) (丁数)欸乃邨荘」

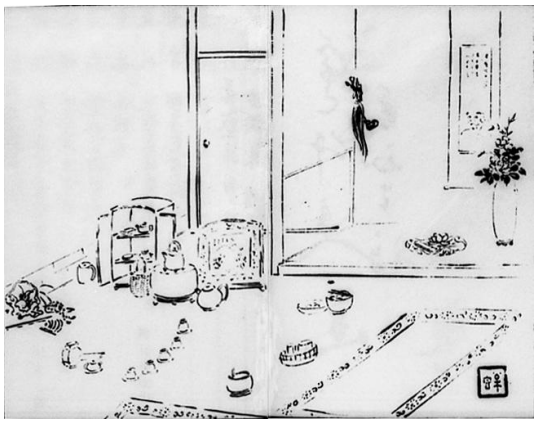
明治 24 年(1891)5 月 24・25 日に，大阪網島の金波楼(鮒宇)で開催された煎茶会の図録である。刊記によると，明治 26 年(1893)4 月 10 日に，東京の奥三郎兵衛により刊行され，東京の岸田楽善堂・大橋博文館・吉川文玉圃，京都の熊谷鳩居堂，大阪の後藤祥雲堂・川本成古堂・鹿田松雲堂，名古屋の片野東壁堂から発売された。この奥三郎兵衛は，史料 7『熊谷醉香居士追福書画展観録』・18『追遠薦新図録』の茶会を主催した奥蘭田のことである。跋文によると，本茶会は奥蘭田が旧友を迎えて，所蔵している明清書画の展観を行ったもので，図録は会の景況を記録し，見返すことができるように作られた。本書は春・夏・秋・冬の 4 巻構成で，春巻前半と冬巻に席の挿図が収録され，他は展観席に出展された書画について体裁・寸法・縮図・賛の拡大を掲載し，著者が解説を附している。奥蘭田は、茶器の名品を図示して解説を加えた『茗壷図録』（明治 9 年・1876）を出版したことでも有名である。



〔図 2-25〕『墨縁奇賞』茶席

(26)『酔花図誌』（高取友仙窟所蔵）

木版本、黄土色紙表紙、袋綴，1 冊，中本(17.5 ㎝×11.4 ㎝)，匡郭(12.9 ㎝×8.3 ㎝)，単辺，有界(文章)，版心「酔花図誌」

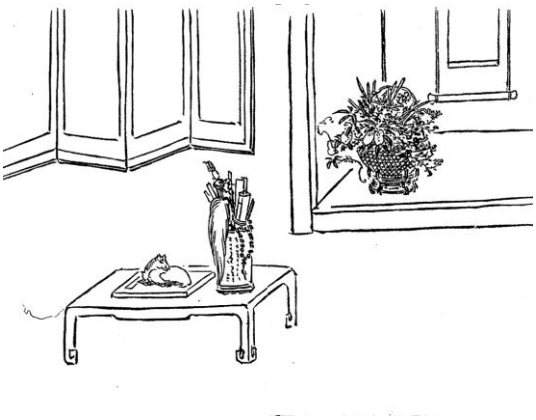


〔図 2-26〕『酔花図誌』茶席

木公鳥山梨瓶の追薦のため，明治 26 年(1893)４月 24 日に，愛知の善福精舎および太田家で開催された煎茶会の図録である。刊記によると，明治 26 年 7 月に辻多輔，芳賀九一郎により，非売品として刊行された。跋文によると，木公鳥山梨瓶は愛知県西尾市において公園設置や学校創建などの公共事業に深く関わった人物である。本書は，大半が書画の目録，盆栽や道具の挿図で占められ，席の挿図は煎茶席と抹茶席が各１席あるのみである。

(27)『中林竹洞竹渓翁墓碑建立薦事会展観録』（国立国会図書館所蔵他）

木版本、薄茶紙表紙、大和綴，1 冊，中本(19.6 ㎝×13.0 ㎝)，匡郭(15.5 ㎝×10.1 ㎝)，単辺，有界，版心「○ （丁数)」



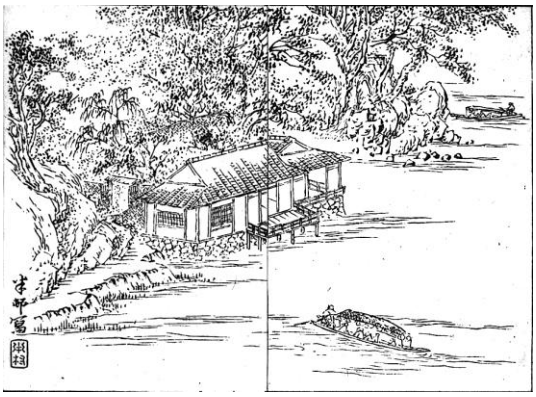
〔図 2-27〕『中林竹洞竹渓翁墓碑建立薦事会展観録』前席

中林竹洞および竹渓の墓碑建立を記念して，明治 26 年(1893)11 月 18 日に，洛東の真如堂で開催された煎茶会の図録である。外題に「薦事余録　完」，見返し題に「中林竹洞竹渓翁墓碑建立薦事会展観録」と記されている。刊記によると，京都の村上和光の編輯，藤井孫兵衛の発行兼印刷で，明治 27 年 5 月 20 日に出版され，熊谷鳩居堂と藤井五車楼から発売された。中林竹洞は，史料 1『茗讌品目』を刊行した山本梅逸とともに，南画家として名古屋・京都で活躍した。その長男竹渓は書の才能に優れ，本書の編輯者村上和光は竹渓の門人であった。本書は，書画の目録が大半を占め，席の挿図は 3 図描かれるのみである。

(28)『淇水翁薦事図録』（国立国会図書館所蔵）

木版本、あさぎ布表紙、袋綴，3 冊，中本(18.7 ㎝×11.5 ㎝)，匡郭(12.5 ㎝×8.7 ㎝)，単辺，有界，版心「○淇水翁薦事図録（松・竹・梅）（丁数)」

淇水翁こと中埜家三代又左衛門の追薦のため，明治 18 年(1885)4 月に愛知半田の中埜家他で開催された煎茶会の図録である。松・竹・梅の 3 巻構成で，梅巻刊記によると，四代中埜又左衛門の編纂兼発行により，明治 28 年 2 月 20 日に出版され，半田の盛田富三郎，名古屋の百花堂甚助，東京の田中梅吉から発売された。



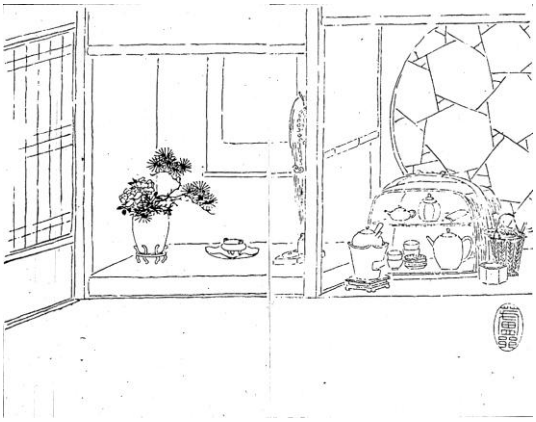
〔図 2-28〕『淇水翁薦事図録』水亭

松・竹巻に席の挿図，梅巻に書画の目録が収録されている。中埜家は史料 21『招鶴亭茗醼図録』を開催した招鶴亭のことで、本書の松巻に描写された招鶴亭と水亭の外観は，現存建物の外観と一致している。

(29)『老古茗筵図録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴，1 冊，小本(14.9 ㎝×9.5 ㎝)，匡郭(11.0 ㎝×7.7 ㎝)，双辺，無界，版心「老古茗筵図録　(丁数)」

明治 28 年(1895)6 月 23 日に，和歌山の城東四美館で開催された煎茶会の図録である。刊記に非売品とあり，明治 29 年 4 月 1 日印刷，同年 4 月 10 日御届，編輯兼発行人中井寅蔵とある。本書は，前半に茶席の挿図，後半に書画の目録が収録されている。



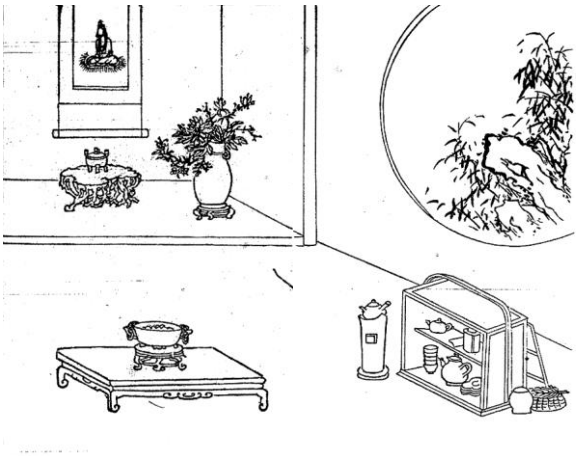
〔図 2-29〕『老古茗醼図録』茶席

(30)『石癡翁追福展観録』

(国立国会図書館所蔵)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(18.7 ㎝×10.9 ㎝)，匡郭(12.6 ㎝×8.0 ㎝)，単辺，有界 ，版心「展観録　(丁数)」

篆刻家成瀬石癡翁の追薦のために，明治 29 年(1896)4 月 12 日に長崎の長照寺で開催された煎茶会の図



〔図 2-30〕『石癡翁追福展観録』茶席

録である。刊記によると，横瀬満古の編輯兼発行により，明治 29 年 7 月 10 日に非買品として刊行された。本書は，前半に書画の目録と茶席の挿図が 1 図収録されるのみで，後半は「寶篆石室印譜」と題して彼の印譜となっている。

(31)『清楽欣賞（中邨楼茶会)』

(高取友仙窟所蔵)

木版本、茶色紙表紙、袋綴，1 冊，中本(17.1 ㎝×12.1 ㎝)，匡郭(14.0 ㎝×9.4 ㎝)，単辺，有界，版心なし

明治 29 年(1896)6 月に, 京都祇園の中邨楼で開催された煎茶会の図録である。刊記はないが，跋文に「明治丙申(1896)三伏日」と記されている。跋文中に主催者として記された「竹邨君」という人物は，下京区長および代議士を務めていることから，竹邨藤兵衛と考えられ、出展されている書画の多くは竹邨氏所蔵であり、彼の財力の大きさが推測できる。なお、他の多くの図録にみられるような骨董商との関わりは認められない。本書には 4 席の挿図と目録が収録されている。

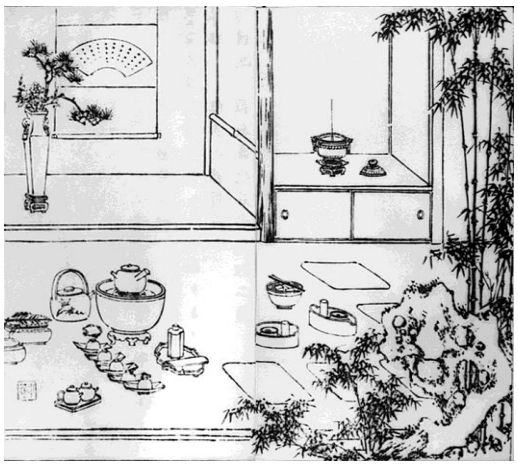
〔図 2-31〕『清楽欣賞（中邨楼茶会)』茶席

(32)『清賞余録』

(高取友仙窟所蔵)

袋綴，1 冊，中本(17.1 ㎝×12.1 ㎝)，匡郭(14.0 ㎝×9.4 ㎝)，単辺，有界，版心「清賞余録　(丁数)　鄰芳幽居」

明治 30 年(1897)3 月中旬に, 東京上野の桜雲台および小西湖(不忍池)畔松源楼で、黒川小樵、松井楓川等によって開催された煎茶会の図録である。乾･坤の 2 巻構成で，坤巻刊記によると，黒川新三郎(小樵)の著作兼発行により，明治 31 年(1898)6 月 4 日に出版され，発売された。発売所として，東京の松井楓川亭，遠藤魁春堂，五十嵐成竹堂，京都の岩田秋竹堂，熊谷鳩居堂，大阪の山中箸篁堂，後藤祥雲堂，名古屋の山田百花堂という、後の煎茶会図録にも頻繁に登場する骨董商の面々が名を連ねている。各席の挿図は野口小蘋の手により詳細に描かれている。

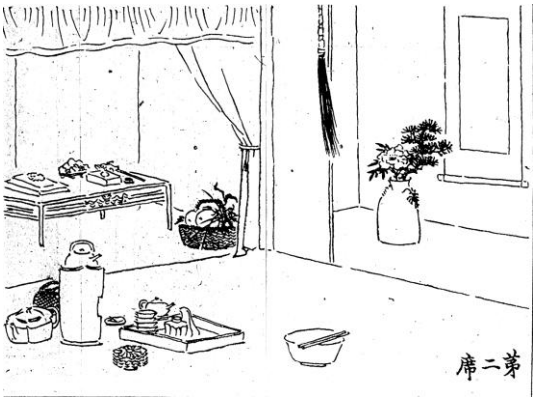


〔図 2-32〕『清賞余録』茶席

(33)『万翁華甲醮誌』

(国立国会図書館所蔵他)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(19.6 ㎝×12.7 ㎝)，匡郭(12.0 ㎝×8.2 ㎝)，単辺，無界，版心「(丁数)」



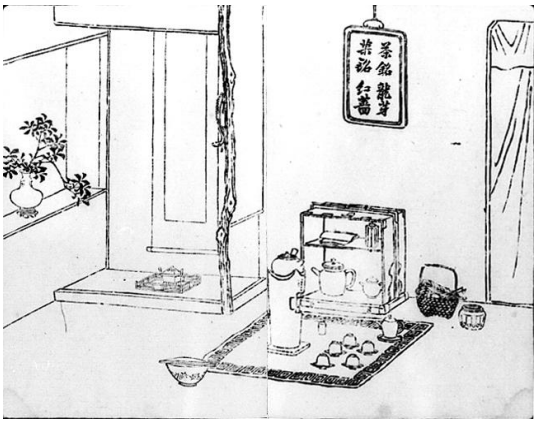
〔図 2-33〕『万翁華甲醮誌』茶席

市河万庵の華甲を祝うため，明治 31 年(1898)3 月 26・27 日に，息子三陽が東京上野の小西湖(不忍池)畔の松源楼で開催した煎茶会の図録である。刊記によると，市河三陽の編集兼発行により，明治 31 年 8 月 28 日に出版された。跋文により，本書は茶会の記念として，参加者に後日贈るために作られたものであることが確認できる。3 席の挿図と，道具については図に加えて体裁や寸法なども詳細に記載している。松源楼は史料 32『清賞余録』でも会場となっており，両史料の挿図を比較すると，本図録の第 1 席と史料 32 の第 3 席が同じ席のようにみえる。

(34)『竹荘茶醮図録』

(高取友仙窟所蔵)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(18.8 ㎝×11.7 ㎝)，匡郭(13.4 ㎝×8.7 ㎝)，単辺，無界，版心なし



〔図 2-34〕『竹荘茶醮図録』茶席

水谷竹荘の追薦のため，明治 32 年(1899)5 月 7 日に，西尾五福堂主人のすすめで、大阪の朝翠堂主人が幹事となって、大阪築地の竹式楼で開催した煎茶会の図録である。煎茶会としては小規模だが、当日の来場者は 350 余名にのぼった。刊記には非売品とあり，「会主　水谷鶴松」，「補助　朝翠堂／永藤徳太郎」，「補助　梅丈園／植田秀四郎」，「明治三十二年己亥五月之吉」と記されている。本書は前半に席の挿図，後半に道具の図と寸法などを詳説しており，道具のカタログ的な意味で製作されたと考えられる。

(35)『掲燈院小祥薦事会記』(東京都立中央図書館加賀文庫所蔵)

袋綴，1 冊，中本(19.9 ㎝×12.9 ㎝)，匡郭(14.6 ㎝×9.9 ㎝)，単辺，有界，版心「掲燈院小祥薦事會記」

明治31年5月19日に亡くなった下郷傳平の一周忌のために、明治32年5月、滋賀長浜の個人邸と長浜別院で開催された煎茶会の図録である。刊記はないが，二代目下郷傳平が茗主を務め，彼の自邸を会場としていることから，図録の製作にも主体的に関わったと考えられる。下郷傳平は実業家で，米穀商のかたわら骨董品を各地に転売して利益を収め，後に大阪製紙所を買収して経営に腕をふるった。前半に遺愛品の目録，後半に席の挿図が収録されている。

〔図 2-35〕『掲燈院小祥薦事会記』碁席

(36)『兼葭堂誌』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

袋綴，1冊，小本(15.4㎝×10.1㎝)，匡郭(12.1㎝×8.8㎝)，双辺，無界，版心「(丁数)」

木村兼葭堂の百回忌のため，明治34年(1901)3月10日に，大阪東区安土町の書籍商事務所で開催された煎茶会の図録である。刊記によると，鹿田静七の編輯兼発行により，明治34年7月20日に刊行された。鹿田静七は大阪の古書店鹿田松雲堂の主人であり，史料25『墨縁奇賞』の発売所にも名がみえる。木村兼葭堂は，書画や骨董，器物の蒐集家として有名であったため，諸国から様々な文化人が彼を訪ねており，幅広い交友関係をもっていた。跋文には当日の来客は500余人にのぼったとある。本茶会では兼葭堂旧蔵の道具を飾っている。本書は「兼葭翁追薦遺墨展観録」と「兼葭堂記」の二部構成で，煎茶会図録は前者である。席の挿図は1図のみで，他は各席の書画や道具等の目録が収録されている。

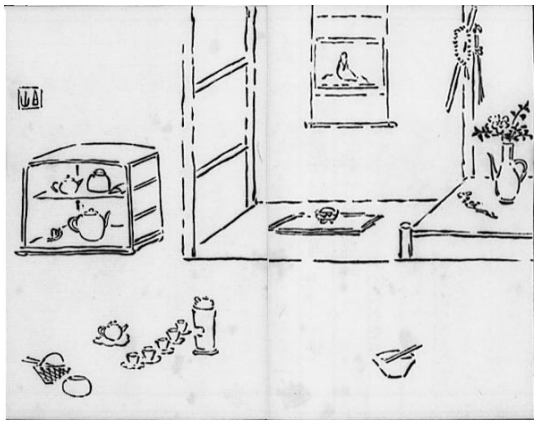
〔図 2-36〕『兼葭堂誌』茶席

(37)『林華園薦事図録』（高取友仙窟所蔵）

木版本、茶色紙表紙、袋綴，1冊，特小本(15.5㎝×10.5㎝)，匡郭(11.5㎝×7.3㎝)，単辺，有界，版心「林華園薦事図録　(丁数)」

京都の美術商林順道の十三回忌のため，明治36年(1903)3月に，息子新助が自邸の林華園で開催した煎茶会の図録である。刊記によると，林新助の編輯，笹川延太郎の発行

により，明治 36 年 7 月 20 日に非売品として刊行された。林家は数代続く京都の美術商で、林新助は，後に京都美術倶楽部取締役を務め，大阪の山中箒篁堂とも共同で仕事を行うなど，京都美術商会の中心的役割を果たした人物である。個人邸を会場とした小規模な煎茶会にも関わらず，図録の題字を明治政府の要職を歴任した井上馨が書いており，その人脈が伺える。本書は，各席の目録と席の挿図が 2 図収録されるのみである。

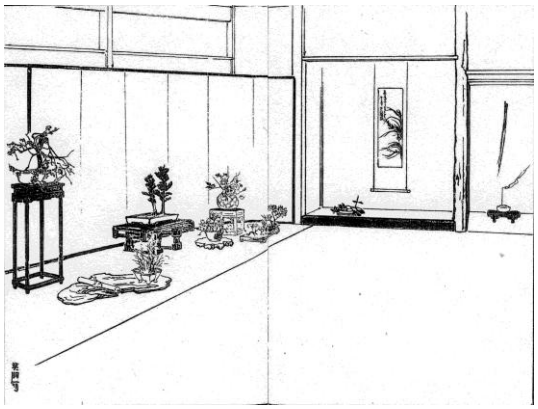


〔図 2-37〕『林華園薦事図録』茶席

(38)『盆栽瓶花聚楽会図録』（国立国会図書館所蔵）

袋綴, 2 冊, 半紙本(23.0 ㎝×15.1 ㎝), 匡郭なし，版心「（頁数)」

明治 36 年 11 月 21・22 日に，聚楽会が東京根岸の菓子屋岡埜の支店である古能波奈園と，群馬の伊香保温泉の 2 ヶ所で開催した秋季大会「瓶花盆栽煎茶莚大會」の図録である。刊記によると，盆栽商義昌堂木曽庄七の著作兼発行により，明治 36 年 12 月 31 日に刊行されている。聚楽会は明治 35 年 5 月に創立された盆栽家の集まりである。本書は上下 2 巻で構成され，席は主に盆栽陳列席で占められているが，煎茶席が 2 席設けられ，その挿図も掲載されている。

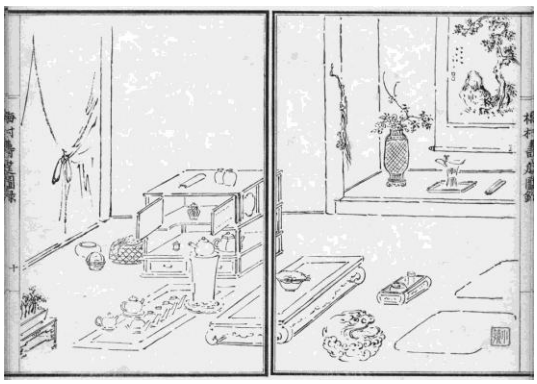


〔図 2-38〕『盆栽瓶花聚楽会図録』盆栽陳列席

(39)『梅村壽筵図録』（国立国会図書館所蔵他）

袋綴, 4 冊, 半紙本(22.0 ㎝×13.0 ㎝), 匡郭(14.8 ㎝×10.4 ㎝)，双辺，無界，版心「梅村壽筵図録（丁数)」

瓜生寅の還暦を記念して，明治 35 年(1902)4 月 13 日に, 彼自身が新宿の常円寺で開催した煎茶会の図録である。瓜生寅は漢学，蘭学，英学を学び，官僚とな

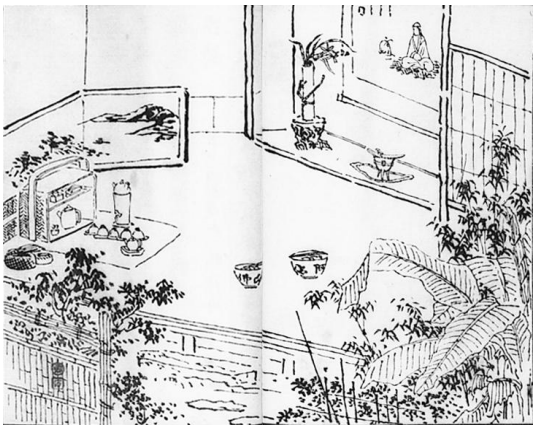


〔図 2-39〕『梅村寿筵図録』茶席

ってから，日本鉄道会社に勤務した後，兵庫日本米穀輸出会社顧問を経て，外国船積立業瓜生商会を設立した実業家である。本書は乾・坤 2 巻と祝辞を収録した『梅村壽筵生彩集』，己亥(明治 32 年)以後の彼自身の詩を収録した『梅村己亥以後詩』の全 4 巻で構成される。刊記によると，瓜生寅の著作により，明治 36 年 5 月 27 日に非売品として刊行された。乾・坤巻に席の挿図，道具の目録と図が収録されている。

(40)『東山茶会図録』(名古屋市鶴舞中央図書館所蔵)

木版本、薄茶表紙、袋綴，4 冊，中本(19.7 ㎝×11.6 ㎝)，匡郭(13.2 ㎝×8.6 ㎝)，単辺，有界，版心「東山茶会図録　(巻数)(丁数)」

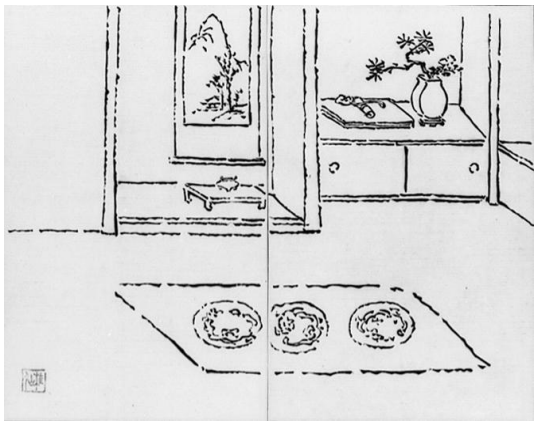


〔図 2-40〕『東山茶会図録』茶席

岩田秋竹堂主人が先考追薦のために，明治 41 年(1908)2 月に京都東山の左阿弥楼他で開催した煎茶会の図録である。東・山・茶・会の 4 巻構成で，会巻刊記によると，岩田嘉兵衛の著作兼発行により，明治 41 年 11 月 3 日に出版された。岩田秋竹堂は京都の骨董商で，関西で開催された煎茶会の図録に度々登場する。茶会は全 20 席が設けられ、当日は参会者が千数百人を数える盛大なものであった。追薦ということで全ての席に観音像を描いた掛軸もしくは観音像を飾りつけていることが特徴的である。ほとんどの席の挿図を収録した充実した内容の図録である。

(41)『第二十回 山水清遊会』(高取友仙窟所蔵)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(19.6 ㎝×12.2 ㎝)，匡郭(13.8 ㎝×8.9 ㎝)，単辺，有界，版心なし



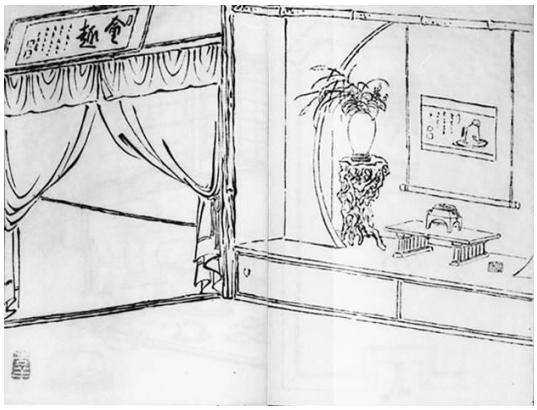
〔図 2-41〕『第二十回山水清遊会』迎賓席

明治 41 年 12 月 5 日に，岐阜の萬松館で開催された第二十回山水清遊会の図録である。刊記はなく，巻末に「会主　松原天粛」とだけ記されている。序文・跋文もなく，全 6 席の目録と第 1～4 席の挿図を収録した単純な構成である。

(42)『豫章堂茗讌図録』（高取友仙窟所蔵）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(17.6 ㎝×12.5 ㎝)，匡郭(12.9 ㎝×8.7 ㎝)，単辺，有界，版心「豫章堂茗讌図録(丁数)」

豫章堂初代與兵衛の百年忌のため，明治 41 年(1908)9 月に，豫章堂松山卓爾が自邸で開催した煎茶会の図録である。刊記によると，阪田圭蔵の著作，松山與兵衛の発行により，明治 42 年 12 月 23 日に非売品として出版された。豫章堂は大阪の骨董商で，煎茶にも精通していた。著者の阪田圭蔵は，南画家の坂田習軒のことで，煎茶をよくし，煎茶道習軒流の創始者である。本茶会は自邸で行われており，規模は小さいが，本書は各席を複数の視点で描写しており，席の様子を詳細に把握できる史料である。

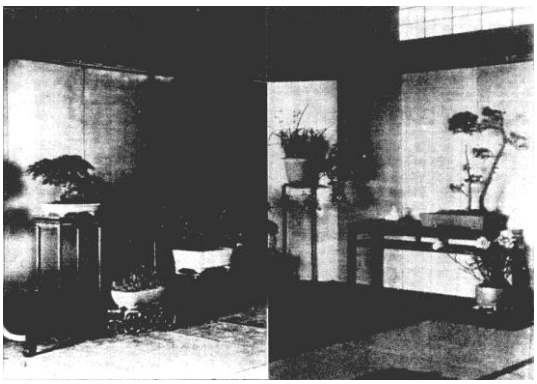


〔図 2-42〕『豫章堂茗讌図録』茶席

(43)『澱江茗醼図録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

銅版本、薄茶紙表紙、袋綴，2 冊，小本(17.0 ㎝×11.9 ㎝)，匡郭(12.8 ㎝×9.3 ㎝)，単辺，一部有界，版心「〇澱江茗醼図録（乾・坤）(丁数)」

大阪の山中簪篁堂主人，高山簪篁翁四回忌のため，明治 41 年(1908)11 月 8 日に，網島の鮒宇楼や個人邸で開催された煎茶会の図録である。乾・坤 2 巻構成で，坤巻の奥付に非売品とあり，「明治四十二年十二月／山中與七／山中吉兵衛／山中吉郎兵衛／池戸宗三郎」とある。席の挿図に写真を掲載しており，当時の煎茶席を正確に把握することができる。

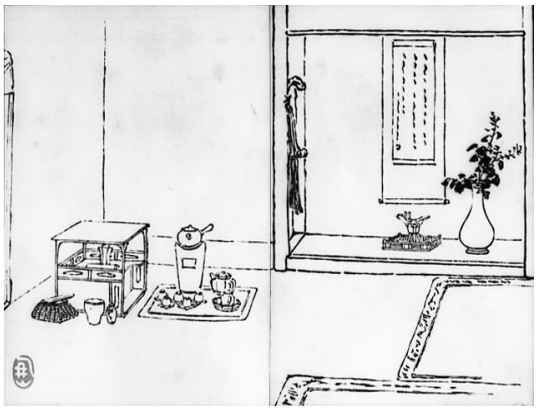


〔図 2-43〕『澱江茗醼図録』盆栽陳列席

(44)『雨竹居士薦筵図誌』

(高取友仙窟所蔵)

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，2 冊，中



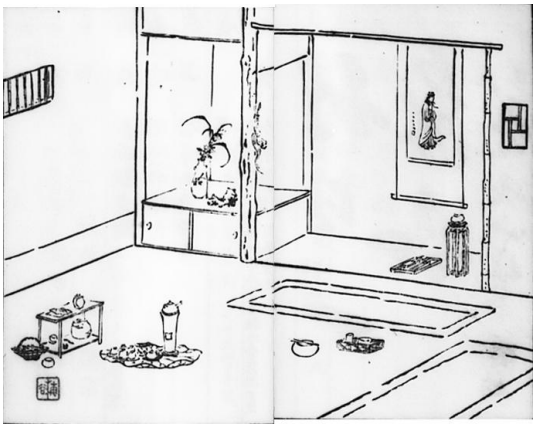
〔図 2-44〕『雨竹居士薦筵図誌』茶席

本(19.3 ㎝×11.8 ㎝)，匡郭(12.5 ㎝×8.6 ㎝)，単辺，無界，版心「雨竹居士薦筵図誌　(丁数)」

大阪の骨董商椰川雨竹堂主人が先考追薦のため，明治 42 年(1909)5 月 7 日に，船場の堺卯楼他で開催した煎茶会の図録である。2 巻構成で，奥付に非売品とあり，「大正二年(1913)二月／大阪市南区鰻谷中之町／椰川善左衛門」とある。全 15 席の挿図と目録を収録している。題字を公卿の東久世通禧や多くの画家，書家が寄せ，第 5 席の茗主を実業家で文化人の住友春翠が務めるなど，幅広い交友関係が伺え、当日は数百人の来賓で盛り上がりを見せた。

(45)『楓川追薦録』（高取友仙窟所蔵）

袋綴，4 冊，中本(17.7 ㎝×11.9 ㎝)，匡郭(12.9 ㎝×8.3 ㎝)，単辺，有界，版心「楓川追薦録　(丁数)　楓川亭蔵」



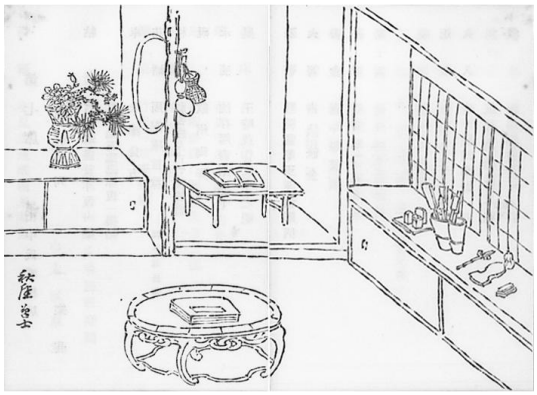
〔図 2-45〕『楓川追薦録』茶席

大正 4 年(1915)12 月に，東京の楓川亭主人松井廉が，前年 7 月 21 日に亡くなった父楓川翁(釣古)の追薦のため，隅田川岸や茅場街で開催した煎茶会の図録である。春・夏・秋・冬の 4 巻構成で，秋巻の刊記によると，松井廉の編輯兼出版により，大正 5 年(1916)11 月 21 日に刊行された。冬巻に友人による追悼詩が「楓川留影録」として収録されている。楓川亭は東京開催の煎茶会に必ず関わっており，関東の煎茶界を牽引してきた存在といえる。本茶会は全 18 席からなり，当日は二千数百名の来賓を迎える盛況ぶりであった。本書は，ほぼすべての席について挿図を収録しており，充実した内容である。

(46)『亦復一楽茶会図録』

（高取友仙窟所蔵）

木版本、灰色模様入紙表紙、袋綴，1 冊，半紙本(22.0 ㎝×13.0 ㎝)，匡郭(15.1 ㎝×10.5 ㎝)，単辺，無界，版心「亦復一楽　(丁数)」



〔図 2-46〕『亦復一楽茶会図録』展観席

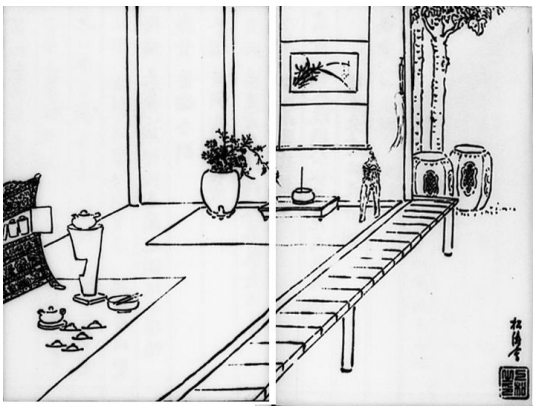
田能村竹田の「亦復一楽帖」の臨画成就を記念して，大正 7 年(1918)5 月 26

日に，竹邨桑者によって、京都の平安神宮周辺で開催された煎茶会の図録である。刊記によると，越智武一の編輯兼発行により，大正 7 年 9 月 20 日に非売品として出版された。竹邨桑者は田能村直入の弟子で南画家の田近竹邨のことである。本茶会は全 20 席からなり，煎茶席の他に，亦復一楽帖や竹田翁遺印の展観席，酒飯席，抹茶席，洋風模擬店など多彩な構成である。本書は，自序と各席の挿図，目録という単純な構成である。

(47)『溪村翁追薦図録』（高取友仙窟所蔵）

木版本、茶色紙表紙、袋綴，1 冊，小本(17.6 ㎝×12.2 ㎝)，匡郭(14.0 ㎝×9.2 ㎝)，単辺，有界，版心なし

細谷溪村の追薦のため，大正 9 年(1920)10 月 3 日に山形の定林精舎と對葉館で開催された煎茶会の図録である。翌 4 日にも書画展観席を 1 席設けて余興を楽しんでおり、両日の来賓は 100 名余であったとされている。刊記はなく、巻末に「催主／細谷與左衛門／細谷治右衛門／細谷理右衛門／櫻井源蔵／細谷光蔵／大正九年十月三日」とあり，細谷與左衛門を中心に身内の手で刊行したと考えられる。席の挿図は全 11 席のうち 4 席描写されるのみで，他は書画の目録が占めるが，地方の煎茶会の図録として貴重である。



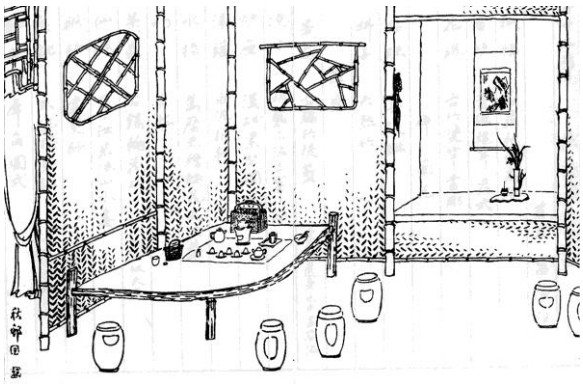
〔図 2-47〕『溪村翁追薦図録』茶席

他の図録にみられるような骨董商、湯社との関わりは認められないものの、図録の形式が史料 45『楓川追薦録』によく似ることから、地方の有力者が都市の煎茶会に影響を受けていたことが分かる史料である。

(48)『角山簪篁翁薦事図録』（東京都立中央図書館加賀文庫所蔵）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，3 冊，半紙本(22.1 ㎝×14.9 ㎝)，匡郭(15.2 ㎝×11.5 ㎝)，単辺，有界，版心「角山簪篁翁薦事図録　（端・草・魁）(丁数)」

角山翁山中吉郎兵衛の三回忌のため，大正 8 年(1919)11 月 3 日に，大阪網島の鮒宇楼および藤田氏旧邸で



〔図 2-48〕『角山簪篁翁薦事図録』茶席

開催された煎茶会の図録である。瑞・草・魁の 3 巻構成で，魁巻刊記によると，山中簪篁堂の編輯，山中吉郎兵衛の発行により，大正 11 年 6 月 1 日に非売品として出版された。全 20 席が設けられ，そのほとんどに席の挿図が収録されている。第十席の古銅器陳列席では，古銅器の蒐集家として著名な住友春翠所蔵の古銅器が出品され，図録では目録に加えて古銅器の図も収録されており，古銅器への関心が高かったことが伺える。題字を書家や画家だけでなく，清(中国)の学者らが寄せている。

(49)『昌隆社五十周年記念茗讌図録』（国立国会図書館所蔵）

袋綴, 2 冊, 特大本(31.0 ㎝×21.1 ㎝), 匡郭なし，版心なし

昌隆社創立 50 周年を記念して，大正 14 年(1925)10 月 22・23 日に，大阪美術倶楽部と鵜野氏邸で開催された煎茶会の図録である。乾・坤の 2 巻構成で，坤巻刊記によると, 昌隆社中の井上熊太郎(柳湖堂)の著作兼発行により，大正 15 年 1 月 25 日に刊行され，大阪の博文堂から発売された。昌隆社は，明治 9 年に大阪の骨董商らによってつくられた結社で，当初は明九社と称し，史料 17『直入翁寿筵図録』に初めて登場した。その後，昌隆社として史料 19『分史翁薦事図録』に登場した後は，大阪の大規模な煎茶会に名がみえる。この茶会は骨董商が主催する茶会として最大級のもので、書画展観席や盆栽陳列席、銅器陳列席での道具の陳列方法は、今日における美術館展示を思わせる。

〔図 2-49〕『昌隆社五十周年記念茗讌図録』茶席

全 15 席について席の挿図を写真で収録しており，特大本に大きく印刷されているところから, 50 周年記念にかける骨董商の思いの大きさが感じられる。

(50)『雙軒庵記念茗讌図録』

（国立国会図書館所蔵）

薄茶墨色布表紙、折本， 1 冊，特大本(31.8 ㎝×25.5 ㎝)，匡郭なし，版心なし

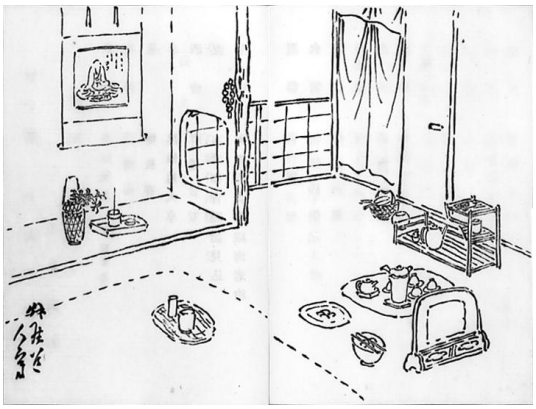
大正 14 年(1925)10 月 16・17 日に，

〔図 2-50〕『雙軒庵記念茗讌図録』茶席

実業家の松本奈蔵により大阪の堺卯楼で開催された「先考雙軒紀念茶會」の図録である。松本奈蔵の父は，百三十銀行創立者の松本重太郎で，数寄者としても有名で叟軒と号した。重太郎は大正 2 年 6 月に亡くなっていることから，本茶会は十三回忌のために開催されたと考えられる。刊記によると，大阪の美術商である高山堂池戸宗三郎の著作兼発行により，大正 15 年 7 月 25 日に非売品として刊行された。本書は，前半に全席の目録を記載し、後半に席の挿図をまとめて掲載する構成となっており、史料 43『澱江茗醼図録』・49『昌隆社五十周年記念茗讌図録』と同じく，席の挿図を写真で収録している。

(51)『学温園茶会図録』（高取友仙窟所蔵）

木版本、薄茶紙表紙、袋綴，1 冊，中本(21.9 ㎝×12.9 ㎝), 匡郭(15.3 ㎝×10.3 ㎝)，単辺，無界，版心なし



〔図 2-51〕『学温園茶会図録』茶席

森居易斎翁十七周忌のため，大正 15 年 11 月 14・15 日に，愛知県一宮市森林右衛門本邸(明月閣)・森林兵衛別邸(竹梁斎)・森林右衛門別邸(学温園)・瑞芳院で開催された煎茶会の図録である。刊記に「一宮七間町　森林右ヱ門」とある。席の挿図(写真 23)と各席の目録という単純な構成である。本茶会は他の煎茶会のような骨董商，湯社との関わりは認められないが、香煎席、盆栽陳列席、煎茶席、抹茶席、書画展観席、酒席、蘭茶席など豊富な席種を組み合わせている。

〔表2-4〕複数の図録で題字または序跋を手掛けた人物

| 氏名/職業/活動拠点/登場回数 | | | | 1 茗讌品目 | 2 春薦余事 | 3 青湾茶会図録 | 4 茶郷一楽 | 5 金洞余音 | 6 新古書画展観目録 | 7 熊谷醉香居士追福書画展観録 | 8 青湾茗醼図誌 | 9 円山勝会図録 | 10 栗渓雅会略誌 | 11 藤本鉄石先生薦場余録 | 12 遺馨録 | 13 書画煎茶清楽図録 | 14 舟阜山房小集略記 | 15 深志茗讌図録 | 16 直入翁寿筵図録 | 17 雲烟供養図録 | 18 追遠薦新図録 | 19 分史翁薦事図録 | 20 清娯軒茶筵図録 | 21 招鶴亭茗醼図録 | 22 楳仙先生古稀筵展観録 | 23 柳崎清賞 | 24 随意荘雅集録 | 25 墨縁奇賞 | 26 酔花図誌 | 27 中林竹洞竹渓翁建碑薦事余録 | 28 淇水翁薦事図録 | 29 老古茗筵図録 | 30 石瘕翁追福展観録 | 31 清楽欣賞（中邨楼茶会） | 32 清賞余録 | 33 万翁華甲醼誌 | 34 竹荘茶醼図録 | 35 掲燈院小祥薦事会記 | 36 兼葭堂誌 | 37 林華園薦事図録 | 38 盆栽瓶花聚楽会図録 | 39 梅村寿苑図録 | 40 東山茶会図録 | 41 第二十回山水清遊会 | 42 豫章堂茗醼図録 | 43 澱江茗醼図録 | 44 雨竹居士薦筵図誌 | 45 楓川追薦録 | 46 亦復一楽茶会図録 | 47 渓村翁追薦図録 | 48 角山簪篁翁薦事図録 | 49 昌隆社五十周年記念茗讌図録 | 50 雙軒庵記念茗讌図録 | 51 学温園茶会図録 | 史料名/開催地/刊行年 |
|---|---|---

第２節　著者および題字・序跋を手掛けた人物

図録を総覧すると、著者はそのほとんどが茶会の主催者である。江戸末期の茶会の主催者は文人が中心であったが、明治に入ると、先考の追薦を目的として都市部を中心に、骨董商や煎茶道具商・香具商などが大茶会を主催するようになる。大阪は骨董商の山中箸篁堂、京都は香具商の熊谷鳩居堂、骨董商の岩田秋竹堂、東京は骨董商の松井楓川亭がその中心であり、彼らは長野の史料 15『深志茗讌図録』の発売所にも名がみえ、活動範囲の広さがわかる。一方で明治中頃には、書画や煎茶そのものを楽しむ茶会や長寿を祝う茶会など、追薦以外の目的の茶会が、文人だけでなく実業家や政治家など有力者によって開催される。茶会の主催者ではないものの、図録の題字を手掛けた人物には、史料 7『熊谷醉香居士追福書画展観録』に木戸孝允、史料 12『遺馨録』に岩倉具視、史料 19『分史翁薦事図録』・24『随意荘雅集録』に三条実美、史料 37『林華園薦事図録』に井上馨といった明治政府の要人らの名があり、当時の煎茶の隆盛のほどを看取することができる。明治末期から大正期にかけては、再び骨董商によって先考を追薦する茶会が開催されるが、度重なる戦争の影響からか、追薦以外の目的の茶会はほとんど開かれなくなる。

図録の序文、跋文や題字を手掛けた人物を見ると、儒者や漢学者、画家、書家が名を連ねており、彼らの間で煎茶が流行していたことがわかる〔表 2-4〕。その中で頻繁に登場するのが、関西では山中静逸、谷鉄臣、小林卓斎、富岡鉄斎、小野湖山、藤澤南岳、東京では杉聴雨、都市部だけでなく地方でも名がみえるのは長三洲である。特に小林卓斎は、明治初めの大茶会の史料８『青湾茗醼図誌』において、史料３『青湾茶会図録』の著者田能村直入とともに、序文を書いている。その後も多くの図録の序文や跋文を手掛けており、直後に開かれた大茶会の史料９『円山勝会図録』や、史料 19『分史翁薦事図録』、地方の図録ながら挿図が豊富な史料 15『深志茗讌図録』など、彼が序文や跋文を書いた図録は、いずれも充実した内容である。また、富岡鉄斎は史料９『円山勝会図録』以降、史料 48『角山箸篁翁薦事図録』までの京阪で開かれた大茶会の図録では必ず序文や跋文、挿図を手掛けており、活動期間が長い人物である。以上のような煎茶の流行とともに、煎茶会に度々登場する骨董商や文人たちをとおして、図録の構成や形態が、全国的に波及していったと考えられる。

第３節　出版年代と内容の変遷

出版年代を考察するにあたっては〔表2-3〕を参照されたい。まず江戸末期に4本が刊行される。明治に入ると全国各地で煎茶が大流行しはじめ、それに呼応して図録も多く刊行されるようになり、西南戦争が終結する明治10年までに5本が刊行される。このうち明治9年に京阪の大茶会の図録である史料８『青湾茗醼図誌』・９『円山勝会図録』が相次いで刊行されると、一気に刊行数が増加し、大日本帝国憲法が発布された明治22年までの明治前半に、東京・京都・大阪などの都市を中心とした大茶会の図録を含む15本が刊行される。特に明治13年は史料16『直入翁寿筵図録』・17『雲烟供養図録』を含む5本が刊行されている。その後は史料28『淇水翁薦事図録』などの地方の茶会を含む、比較的規模の小さい茶会の図録が、日露戦争が終結する明治38年までに15本刊行される。日露戦争後の明治末期には4本が刊行され、特に明治41年に京都の大茶会の図録である史料40『東山茶会図録』が刊行されると、以後大正時代まで史料43『澱江茗醼図録』などの大茶会の図録が相次いで刊行され、大正期には8本が刊行される。

次に、収録内容を見ると、史料３『青湾茶会図録』を除く江戸末期に刊行された３本の図録は、いずれも書画の目録が図録の多くを占めている。この書画の目録を記す形式は、その後さらに発展し、史料８『青湾茗醼図誌』・９『円山勝会図録』・15『深志茗讌図録』・17『雲烟供養図録』など、大規模な煎茶会の図録では、別冊で書画展観目録が著されるまでになる。このような初期の状況の中で、史料３『青湾茶会図録』は、各席の挿図・茗主の氏名・道具の目録などからなる充実した図録で、「青湾茶会」そのものが画期的であると同時に、煎茶会図録としても画期的である。その後の煎茶会および煎茶会図録に与えた影響は、極めて大きいといえる。明治後半以降は、骨董商等の介入により、席の挿図と道具の目録で構成された、いわばカタログ的な煎茶会図録の形式が定着する。特にそれを色濃く示すのは史料８『青湾茗醼図誌』と、その後の史料 19『青湾茗醼図誌』・25『墨縁奇賞』・33『万翁華甲醼誌』・34『竹荘茶醼図録』の５本で、道具を図示し、寸法や作者の解説を加えた出品道具解説中心の図録もある。明治末以降になると、写真による挿図が登場する。明治 41 年刊行の史料 43『澱江茗醼図録』が初見で、その後大正 15 年刊行の史料 49『昌隆社五十周年記念茗讌図録』・50『雙軒庵記念茗讌図録』の２本で確認できる。明治末になって印刷技術や写真技術が発達したことにより、和装本でありながらも、文人画によって席の趣を描写するというそれまでの煎茶会図録の形式が、

大きく変容したといえる。また、この頃から『煎茶式』（明治 42 年）に代表されるような、煎茶の式法を記した茶書が刊行され始める。大正 11 年からは、わずか 10 年間に 21 本の茶書が著され、『煎茶伝授書』（大正 11 年）・『煎茶教科書』（大正 14 年）など煎茶の形式化による煎茶道の確立が伺える。これらと同時期に刊行された史料 48『角山簪篁翁薦事図録』等の挿図は、『煎茶式』の影響がみてとれる。

第４節　出版地域

対象図録 51 本を刊行地域別にみると、大阪 13 本、京都 10 本、東京 12 本、愛知 7 本、長崎・福岡・鳥取・香川・和歌山・滋賀・岐阜・長野・山形各１本となり、多数出版されている 4 地域において特に煎茶が盛んであったことが分かる。

なかでも売茶翁による煎茶発祥の地ともいえる京阪の図録は、豊富な挿図をもつ優れた図録が多い。京都で出版された史料１『茗讌品目』・２『春薦餘事』は、煎茶会図録の先駆的存在である史料３『青湾茶会図録』の前に刊行された図録として貴重な史料である。特に前者においては会主である画家の山本梅逸によって挿図が描かれ、すべての席の挿図を掲載するなどその内容は大変充実している。

東京で出版された図録 12 本のうち、史料 24『随意荘雅集録』・25『墨縁奇賞』・32『清賞餘録』の３本が「大本」、史料 38『盆栽瓶花聚楽会図録』が「半紙本」と、他の地域と比較すると大型の本が多い。また、史料 23『柳嶋清賞』・24『随意荘雅集録』・32『清賞餘録』・39『梅村寿筵図録』の４本は、明治期から大正期にかけて活躍した女流南画家の野口小蘋が挿図を手掛けており、席の様子が緻密に描写されている。なお、史料 25『墨縁奇賞』は東京で出版されているが、茶会の会場となったのは大阪の鮒宇楼である。

一方、地方の図録をみると、長野で出版された史料 15『深志茗讌図録』は、出版人に東京の楓川亭や京都の鳩居堂の名があり、山形で出版された史料 47『溪村翁追薦図録』は、その構成が東京で出版された史料 45『楓川追薦録』に似ている。つまり、都市部の影響を受けて、全国的に煎茶が流行していったことが分かる。

なお先述した、道具の挿図や解説を加えたカタログ的な図録や、挿図に写真を用いた図録など、新しい形態の図録は、大阪で初めて登場しており、煎茶会図録の先駆である史料３『青湾茶会図録』が出版された地として、他地域に先駆けて新たな試みを発信していたといえるかもしれない。

第５節　小結

以上，煎茶会図録 51 本について，書誌的考察を行ったうえで，著者および題字・序跋を手掛けた人物，出版年代と内容の変遷，出版地域を考察した結果，次のことを明らかにすることができた。

ⅰ　著者：茶会の主催者であることが多い。主催者は，江戸時代は文人が中心であったが，明治以降は，都市部では骨董商や政治家が中心となり，地方では地元の有力者である。図録の構成や形態は，煎茶会に度々登場する骨董商や文人をとおして，全国的に波及したと考えられる。

ⅱ　出版年代と内容の変遷：江戸末期４本，明治前半20 本，明治後半19 本，大正期8 本が刊行された。江戸末期から明治初めにかけては書画展観目録の形式もしくは別冊で書画展観目録を付すものが多く、同時期に流行した書画展観会の影響が見られる。こうした中で出版された，煎茶会図録の先駆『青湾茶会図録』（史料３）は，優れた内容の画期的な図録で，後の図録に大きい影響を与えた。明治前半からは骨董商の介入により，煎茶道具のカタログ的な図録が増え，明治末以降は写真による挿図を収録するものも登場した。

ⅲ　出版地域：大阪・京都・東京・愛知において多数出版されており，この４地域で特に煎茶が盛んであり，そこから全国的に流行していったと考えられる。

第３章

煎茶会の構成

第３章　煎茶会の構成

本章では、煎茶会の構成について、会場と席主および席の構成に注目し、時代的・地域的考察を行う。さらに、複数の席からなる席について、個々の席の内容および席内での関係についても考察を行う。

第１節　各煎茶会の構成

煎茶会に設けられていた席について、図録ごとに一覧表とした。表中の黒色は祭場および抹茶席など本研究の対象としない席、灰色は室内の挿図がない席を表す。

(1)『茗讌品目』

総席数７席で構成され、席種の内訳は茶席５席、前席１席、書画展観席１席、このうち挿図は書画展観席を除く計６席が描かれる。第一席から第四席はそれぞれ茶席のみで、第五席は文具が飾られた席（後の史料では同様の席を「前席」と称している）と次席（茶席）の複数席で構成される。前席と茶席の関係は、前席に多様な道具が飾られる一方、茶席は茶具のみが配されており、前席を展観席として茶席では茶事のみを楽しむ構成となっている。

会場は京都八坂の耕雲園で、特に第三席では磚畳の亭を会場として、立礼式の茶席を設けている。席主は主催者の山本梅逸をはじめとする、個人がつとめている。

〔表3-1〕 茗讌品目　　嘉永５年(1852)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一　茶席	茶席	中島竹僊		八坂　耕雲園	1			
	第二　茶席	茶席	菓亭山人			1			
	第三　茶席	茶席	小杉秋濤			1			
	第四　茶席	茶席	風月堂主			1			
	第五　－	（前席）	玉禅室主			1			
	次席	（茶席）				1			
	－	（書画展観席）							

(2)『春薦餘事』

席名の記載がなく、席の構成は不明である。書画の目録および茶席の描写が一つあることから、書画展観席と茶席による構成と推定される。

〔表3-2〕 春薦餘事　　万延元年（1860）　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	－	（書画展観席）			円山多福庵				
	－	（茶席）	彝雙堂・清雅堂・芙蓉堂・嘯風堂・莱山堂		端寮（花洛庵）	1			

会場は京都円山の安養寺塔頭端寮である。安養寺塔頭には、この端寮（本名を花洛庵重阿弥といい、別名を庭阿弥という）をはじめ、多福庵也阿弥、長寿庵左阿弥、勝興庵正阿弥、多蔵庵春阿弥（眼阿弥）、延寿庵連阿弥の六阿弥坊があり、江戸時代には遊興施設として機能していたようである。これら六阿弥坊は、その後も京都の大茶会で会場とされている。席主には莱山堂をはじめとする京都の骨董商が名を連ねている。

(3)『青湾茶会図録』

この茶会は青湾茶会（以下、前会とする）と後青湾茶会（以下、後会とする）からなる。両茶会を合わせると、単独席が 10 席、複数席が９席の全 19 席で構成され、複数席を分割すると総席数は 32 席となっている。席種の内訳は、茶席 17 席、前席８席、副席４席、展観席１席、酒席１席、その他１席である。挿図は茶席 15 席、前席８席、副席２席、展観席１席、酒席１席の計 28 席ある。

前会は第一席から第七席で構成されるが、第四席から第七席に独立した副席（茶席）が設けられており、全 11 席からなるといえる。複数の席からなる席は、第一・三・四・

〔表3-3〕 青湾茶会図録　　文久３年（1863）　　大坂

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
天	第一席　喉潤	（前席）	田能村小斎	木邨小園-田上小泉-瀧山晴暉-津田文操-平泉柳煙	大長精舎	1			
	茶席	茶席				1			
	第二席　破悶	（茶席）	荒掘先春	冨澤泉石	川口氏別業		1		
	第三席　捜腸	（前席）	大槻眞沙-大槻弓林	大槻松ニ-小嶋海造-平井雄輔-田中桂林-児嶋定撥	川真田氏別業	1			
	茶席	茶席				1			
	次席	（副席）							
	第四席　発汗	（前席）	今堀梅實	佐崎霞村-中山金輔-巖井蘆江-南郷俊哲	斎藤氏別業	1			
	茶席	茶席				1			
	小室	（副席）			（別室）	1		1	
	第四席　発汗副席	（茶席）	竹内芥山	小芝葛斎-乾菱萍	船房　浪花丸	1			
地	第五席　肌清	（前席）		太玄居馬洲-氷室義彦-西尾橋坪	草間氏別業	1			
	茶席	茶席				1			
	第五席　肌清副席	（前席）	田中介眉-小寺慶山-藤井芥田-田中耕雨	野間亭義平-来々堂祥平-松下園陸奴-梨雪堂恒七	草間氏楼上	1	1		
	茶席	茶席				1			
	第六席　通仙	茶席	田能村小虎	渡邊薫艸-樋口陸士-小林乗雲-野々村少平	仮廠	1			
	第六席　通仙副席	（茶席）	藤岡東谷-岡東菑-瀧山東湖	岡本晩翠-田中琴雨-服部菜亭	船房　天洞	1			
	次席	（副席）							
	厨下	（水屋）							
	第七席　風生	（遺物展観席）	高瀬雨舟-川本金蟲	山本逸作-河口荒亭	桜祠祠官山本氏	1			
	第七席　風生副席	（酒席）	平泉竹好-谷村修生-小林秋村-本庄楳翠-田上円城	小野素外-中■尚古	山本氏春秋亭	1			
人	第一席　華月庵社	（茶席）	高瀬雨舟-岸田稲處-今井東雲		船房　紅梅	1			
	第二席　松下園	（茶席）	高津陸奴	川本金蟲-本岡魚州-松久竹風-高津梅雪	楼亭	1			
	第三席　任雲社	（前席）	鎌田諾斎-田能村小虎	高木墨田-前田小芝-佐々木羔彦	桜祠神楽場	1			
	茶席	茶席				1			
	提籃席	（茶席）			桜祠林下		1		
	第四席　洗心堂	（茶席）	宮城伸斎	前田玉芝	山本氏池亭	1			
	第五席　養和堂	（前席）	藤岡東谷	岡本晩翠-田能村小斎	山本氏正屋	1			
		（前席副席）				1			
	小室	（副席）				1			
		（茶席）				1			
	第六席　清心窩	（前席）	山本花暁-中川有文-野々村ニ牛	今井短亭	山本氏茅亭	1			
	茶席	茶席				1			
	第七席　換骨場	（茶席）	安井梨雪-佐崎霞村	飯田玉琴	蓬屋甃席	1			

五・五席副席は文具等が飾られた席（前席）と茶席からなり、このうち第三席に次席（副席）、第四席に小室（副席）が付随する。また、第六席副席は茶席と次席（副席）および厨下（厨房）からなる。一方単独の席は、第二・四席副席・六席は茶席、第七席は遺愛品の展観席、第七席副席は酒席となっている。後会は全８席からなり、第一・二・提籃・四・七席が単独の茶席、第三・五・六席が前席と茶席からなり、さらに第五席は前席副席・小室（副席）の複数席から構成される。

前席・副席と茶席の関係は、前席・副席は多様な道具を飾る展観席とし、茶席は茶事を楽しむ構成となっている。ただし、前会の第一・五席、後会の第六席では、前席に菓子器が置かれており、前席で菓子をいただいた後に茶席で茶を喫するという、一体的な席の構成もみられる。なお、前会の第五席副席の前席は、瓶花と盆栽が多数飾られており、後に登場する盆栽陳列席の先駆けと考えられる。

会場は大阪青湾の大長寺、桜祠、個人邸としている。前会の第二席と後会の提籃席は庭での野点席、前会の第四席副・六席副・七席副席・後会の第一席は船房、前会の第六席は仮屋、後会の第七席は磚敷の茅葺建物（立礼式）、と独創的な会場設定で客を楽しませている。席主は補助も含めると個人名がほとんどで、各席を複数人で担当している。前会の第一・六席・後会の第三・五席には主催者である田能村小斎（直入）の名がある。

(4)『茶郷一楽』

全２席からなり、第一席が前席と茶席、第二席が茶席と次席（書画展観席）で構成される。茶席２席、前席１席、書画展観席１席の総席数４席で構成され、挿図は第一席の２席が描写されている。前席と茶席の関係は、前席はを展観席とし、茶席は茶事を楽しむ構成となっている。

会場は蓬左城（名古屋城）南の光明寺である。席主は個人が担当しており、第一席に主催者の森本紫石の名がある。

〔表3-4〕 茶郷一楽　　慶応元年（1865）　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
上	第一席	（前席）	雙竹菴　森本紫石	竹酔居碩齋・松濤菴其儁	城南　光明寺	1	1		
	茶席	茶席				1			
下	第二席	（茶席）	硯田耕者室（三輪可墨）						
	次席展観蔵幅	（書画展観席）							

(5)『金洞餘音』

席名の記載は茶席と清唱席のみだが、書画の目録が図録の大半を占めることから、書画展観席も設けていると思われる。挿図は茶席のみ描かれている。

会場は東京両国橋東の料亭中邨楼で、席主を東京の骨董商楓川亭釣古が担当している。

〔表3-5〕 金洞餘音　　明治3年(1870)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
		(書画展観席)			両国橋東　中邨楼				
	茶席	茶席	楓川亭釣古	嘉木園蘿谷・小野素外・岡本霞兄・高木法古・双田文魁		1			
	清唱席	(奏楽席)							

(6)『(新古書画展観目録)』

席名の記載がなく、席の構成は不明である。書画の目録および茶席の描写が一つあることから、書画展観席と茶席による構成と推定される。

会場の詳細は不明だが、席主を主催者である東京の田澤静雲がつとめていることから、東京が開催地であると考えら得る。

〔表3-6〕 (新古書画展観目録)　　明治6年(1873)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
		(書画展観席)			不明				
	-	(茶席)	田澤静雲			1			

(7)『熊谷醉香居士追福書画展観録』

席名の記載がなく、席の構成は不明である。書画の目録および茶席の描写が一つあることから、書画展観席と茶席による構成と推定される。

会場は東京隅田川岸に建つ奥蘭田別邸の欸乃邨荘で、席主は主催者の奥蘭田が主となって、他に東京の図録で頻繁に登場する楓川亭・畏三堂・文魁堂・田澤静雲らが補助に名を連ねている。

〔表3-7〕 熊谷醉香居士追福書画展観録　　明治8年(1875)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	展観会	(書画展観席)	幹事：奥蘭田	高木法古・楓川亭・畏三堂・文魁堂・田澤静雲	鉄乃邨荘				
	茶醮	(茶席)	奥蘭田	南郷一堂・井上松渓		1			

(8)『青湾茗醮図誌』

全13席から構成され、単独席が８席、複数席が５席となり、複数席を分割すると総席数は21席となる。席種の内訳は茶席11席、前席６席、副席２席、酒席１席、奏楽席１席で、挿図は副席１席を除く計20席ある。複数の席からなる席は、第一席から第四席・第六席で、文具が飾られた文房（前席）と茶席からなり、このうち第三席に文房副席（前席副席）と外席（副席）、第四席に外席（副席）が付随する。一方単独の席は、第五・七・九・十・十二・十三席が茶席、第八席が酒席、第十一席が奏楽席となっている。

前席・副席と茶席の関係は、前席を文具の展観席とし、茶席は茶事を楽しむ構成となっている。また、副席は花具を中心に少数の道具が飾られるのみで、茶席に付属している。以上は先に開催された史料３『青湾茶会図録』と共通するが、変化がみられるのは単独の茶席で、多くの道具が飾られるようになる。また、前席に菓子器が置かれる席はなく、前席と茶席の一体性が薄くなってきたと考えられる。

会場は大阪青湾の青湾茶寮、料亭鮒宇楼、個人邸とする。特に第十席は青湾茶寮と呼ばれる磚敷の中国風な建物、第十一・十二席は船を会場としており、『青湾茶会図録』に劣らない独創的な会場設定で客を楽しませている。席主は主催者である山中簪篁と同じ骨董商の名が多く見受けられる。また、奏楽席の平井連山と長原梅園は姉妹であり、その後も各地で多くの奏楽席を担当している。

〔表3-8〕 青湾茗醼図誌　　明治9年(1876)　　大坂

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
瑞	第一席　文房	(前席)	山中簪篁	多数	鮒宇楼	1			
	茶寮	(茶席)				1			
	第二席　文房	(前席)	巌々洞蘆江	今藤竹風-十二軒踈柳-松居九皋	巽氏別業	1			
	茶室	(茶席)				1			
	第三席　文房	(前席)	松島山田-西尾張橋	中村東山-山水園小雲-平井雄輔-松島杁芳	白山氏別業	1			
	文房副席	(副席)				1			
	茶席	茶席				1			
	外席	(副席)				1			
草	第四席　文房	(前席)	暢春堂植邨霞亭-玩古堂小西玉光	梨雪堂遊方-二楽堂有瓶-文玉堂蟻堂		1			
	茶席	茶席				1			
	外席	(副席)							
	第五席　小室	(茶席)	野馬亭梅處-翠竹堂忠山	-	白山氏小室	1			
	第六席　文房	(前席)	田生堂對松-滴水堂翠堂	男小翠	白山氏別業	1			
	茶席	茶席				1			
	第七席　茶席	茶席	小川小癡-池島村泉	児嶋茶山-佐野瑞巌	白山氏小室	1			
	第八席	(酒席)	原始堂九城-澤木雨堂	三木勝■-小川尚古	安田氏邸	2			
	第九席	(茶席)	大鷲堂大邨-成古堂川本	乾心斎-森梅香-評古堂森田-諸川如水	野田氏別業	2			
魁	第十席	(茶席)	山田琴仙	廣畑蘆水-亀井松栞	青湾茶寮	1		1	
	第十一席	(奏楽席)	平井連山-長原梅園	多数	船房	1			
	第十二席	(茶席)	金芽堂	紅雪堂-梧送堂-有此堂-紅花堂-三木亭-修竹堂	船房	2			
	第十三席	(茶席)	堀井頑仙-濱名白陽	行徳玉江-佐々木美彦	網州楼	1			

(9)『円山勝会図録』

全 31 席からなり、単独席が 20 席、複数席が 11 席、複数席を分割すると総席数 42 席で構成されている。席種の内訳は、茶席 24 席、前席 11 席、書画展観席５席、展観席１席、奏楽席１席で、挿図は茶席 24 席、前席８席、奏楽席１席の計 33 席ある。道具に主眼が置かれ、室内の描写が部分的なものもあり、特に前席はその傾向が顕著である。

前席と茶席の関係は、両者とも飾りは掛軸と花具など少数の道具を飾るのみで、前席は茶席の待合のように構成されている。なお、「前席」という名称はここで初めて登場し、

その後の図録では頻出するようになる。

会場は茶会３日間のうち初め２日間は、京都円山の安養寺塔頭六阿弥坊、雙林寺文阿弥、長楽寺梅枝亭、高臺寺、牡丹園とする。席主はほぼ個人が担当しており、冒頭の奏楽席と最後の茶席を主催者の鳩居堂が担当している。また、「讃州　石田廬・長椿堂」は、後に高松で開かれた史料 14『舟皐山房小集略記』にも名があり、四国での煎茶普及に関わっていたと考えられる。

残り１日は会場を鴨崖（鴨川）の水楼に移し、席主は先の『春薦餘事』でも席を担当した、莱山堂をはじめとする骨董商が名を連ねている。

〔表3-9〕 円山勝会図録　　明治9年(1876)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
上	展観	書画展観席			端寮				
	展観	書画展観席			多福庵				
	展観	書画展観席			藤架亭				
	展観	書画展観席			雙林寺文阿弥				
	展観	書画展観席			正阿弥＋多福庵				
下	奏楽席	奏楽席	鳩居堂		左阿彌之樓上	1			
	茗筵	(茶席)	江州　梅村氏		円山正阿彌之別亭	1	1		
	茗筵	(茶席)	尾崎氏		円山正阿彌之楼上	1			
	茗筵　前席	前席	讃州　石田廬・長椿		長楽寺之梅枝亭	1			
	茶室	(茶席)	堂			1			
	茗筵	(茶席)	林氏		梅枝亭	1			
	茗筵　前席	前席	北條氏		隻林寺文阿彌		1		
	本席	(茶席)				1	1		
	茗筵　前席	前席	村田氏		高臺寺之松林院		1		
	茶室	(茶席)				1			
	茗筵　前席	前席	舩橋氏		高臺寺北某氏別業	1			
	本席	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	市田氏		牡丹圃之別亭	1			
	茶席	茶席	蔵六居		左阿彌之小亭	1			
	茗筵	(茶席)	熊谷直行		左阿彌之幽室	1			
	醉香翁遺愛之器	(遺物展観	－		左阿彌之堂上・別室		1		
余	茗筵　前席	前席	清雅堂		鴨崖之水樓	1			
	本席	(茶席)				1			
	茗筵　前席	前席	長亘堂			1			
	本席	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	秋竹堂			1			
	茗筵	(茶席)	岸花堂			1			
	茗筵	(茶席)	彝雙堂			1			
	茗筵　前席	前席	宗海堂			1			
	茶室	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	嘯風堂			1			
	茗筵　前席	前席	莱山堂			1			
	茶室	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	梨花堂			1			
	茗筵　前席	前席	大狂堂			1			
	茶室	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	淇翠堂			1			
	茗筵　前席	前席	桂花堂				1		
	本室	(茶席)				1			
	茗筵	(茶席)	大阪　梨雪堂			1			
	茗筵　前席	前席	清森堂			1			
	茶室	(茶席)				1			

(10)『栗溪雅会略誌』

全２席からなり、祖先の影像や位牌をまつる影堂と、茶席で構成される。影堂のような祭壇はその後の茶会にも多く設けられるが、最も早い設置はこの茶会である。挿図は茶席１席のみである。

会場は鳥取県の黄檗宗寺院「興禅寺」としており、席主は記載がない。

〔表3-10〕 栗溪雅会略誌　　明治11年(1878)　　鳥取

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	影堂	(祭壇)			興禅寺				
	茶席	茶席				1			

(11)『藤本鉄石先生薦場余録』

席名の記載がなく、席の構成は不明である。書画の目録および茶席の描写が一つあることから、書画展観席と茶席による構成と推定される。

会場は大阪博物場とし、席主には個人名がみられる。

〔表3-11〕 藤本鉄石先生薦場餘録　　明治12年(1879)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
		書画展観席							
	-	(茶席)	中邨桃嶋	林五一・中邨東山・山水園	大阪博物場	1			

(12)『遺馨録』

文房（前席）と茶筵（茶席）の席名を確認できる。また、茶会の主旨が博覧会であり、陳列物の目録があることから、展観席があると判断でき、全３席で構成される。

会場は西京の本國寺とし、席主は記載がない。

〔表3-12〕 遺馨録（上・下）　　明治12年(1879)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	―	展観席							
	文房	(前席)			本國寺	1			
	茶筵	(茶席)				1			

(13)『書画煎茶清楽図録』

全て単独席で全８席から構成される。書画展観席が第一席から女史席を間に挟んで第五席までの６席、茶席が１席、奏楽席が１席で構成され、挿図は茶席と奏楽席の２席の描写がある。

会場は名古屋の極楽精舎としており、席主は奏楽席に史料８『青湾茗醼図誌』の奏楽席を担当した「長原梅園」の名がみられる。

〔表3-13〕 書画煎茶清楽図録　　明治13年(1880)　　愛知

巻名	席名		席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	書画展観	第一席	書画展観席			極楽精舎				
		第二席	書画展観席							
		第三席	書画展観席							
		第四席	書画展観席							
		女史席	書画展観席							
		第五席	書画展観席							
	―		(茶席)	羊鹿堂			2			
	奏楽席		奏楽席	寺田松龍女史	長原梅園先姫-長原松君女史-山本松楽女史-長原竹葉堂-山本松■堂-日比野琢■堂-松本聴松堂-松龍社中		1			

(14)『舟皐山房小集略記』

全８席からなり、第一・二席は前席とその副席と思われるが、茶席に付属する形ではなく、単独の席として扱っている。席の描写は第三前席（茶席）の一つのみである。

会場は主催者別業の遁窩品泉處と舟皐山房、蘆花浅水楼とし、席主は大阪や京都の茶会にも参加している地元の石田廬・長椿堂の名が見える。

〔表3-14〕 舟皐山房小集略記　　明治13年(1880)　　高松 ヵ

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席	－	三木真平・別所翠竹・男洞谷・孫柳汀	清香堂・石田廬・松濤軒・玉壷堂・松醒堂・三茗堂・楳英堂・長椿堂	舟皐山房				
	第二席	－							
	第三前席	（茶席）				1			
	第三後席	（副席）							
	第四席	（茶席）							
	第五席	（酒席）			蘆花淺水楼　楼上				
	第六席	書画展観席			蘆花淺水楼　小室				
	初筵	（茶席）	矢野松岳	文成堂・小椿堂	遁窩品泉處				
	品泉處	（茶席）							

(15)『深志茗讌図録』

全３席からなり、第一席が前席と後席（茶席）、第二席が茶席、第三席がそれぞれ副席を持つ前席（酒席）と後席（茶席）の総席数７席で構成され、全て挿図がある。

前席・副席と後席（茶席）の関係は、茶席に比較的多くの道具を飾り、前席・副席は道具が少なく茶席に付随した席といえる。目録をみると「前席待客後席供茶」とあり、前席は客の待合と明確にわかる。なお、第三席の前席は席名こそ前席であるが、席種は酒席である。

会場は長野県深志の青龍禅寺、栞水亭、松風亭楼上とし、席主には地元の人物と見られる名が連なっている。ただし、出版所として大阪、京都、東京の煎茶に関わる人物の名前が見られることから、全国的にも注目された茶会であった思われる。

〔表3-15〕 深志茗讌図録　　明治13年(1880)　　長野

巻名	席名		席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　清風	前席	前席	魚雁亭閑田・霽日堂白雉・円瓢堂紫生	藤岡鋏枴・采栄堂円峰	青龍禅寺	1			
		後席	（茶席）				2			
	第二席　碧雲		（茶席）	原田蒼渓・高橋一査・高宮東湖		栞水亭	2		1	
	第三席　破門	前席	（酒席）	梅風堂霞洞・一年堂瀨僊・九楽堂栞仙・黄花堂籬外	勺水園葭田・西湖堂春波	松風亭楼上	1			
		副席	副席				1			
		後席	（茶席）				1			
		副席	副席				1			

(16)『直入翁寿筵図録』

全 16 席からなり、玄関と玄関副席が１席、書画展観席が７席、點茶席（抹茶席）と外堂（水屋）が１席、行厨席（酒席）が１席、奏楽席が１席、酒飯席１席、茶席と揮毫席が１席、前席と喫茶席（茶席）が３席、このうち茶席に小室（前席副席）が付随し、総席数 23 席で構成される。挿図は書画展観席６席、抹茶席の水屋、酒飯席をのぞく 15 席

が描写されている。ここでは「玄関・書画展観席・點茶席・揮毫席・行厨席・喫茶席・酒飯席」など初見の席名が多く、従前の茶席を主とした構成から多彩な席種が加わっている。特に煎茶会に抹茶席が挿入されるのはこの茶会が初めてで、当時の茶の世界において煎茶が主流であったことが窺える。

前席と茶席の関係は、前席に多くの道具が飾られて展観席の性格をみせるものの、茶席にも少なからず道具が配されている。また、菓子器が置かれる前席が１席確認でき、前席と茶席の一体性への意識が感じられる。

会場は冒頭の挿図に「広岡氏別荘」とあるものの詳細は不明であるが、人巻の「藤井茶室」の外観を描いた挿図に「幸橋」の名があることから、道頓堀川にかかる幸橋界隈で行われたと推定される。また、「池亭」は青湾茶会で見られる池亭と同じく、池に張り出した建物である。また、席名から「楼上」の席も多く見受けられ、眺望の優れた席が好まれたことがわかる。席主は杉田莱山や山中簪篁など骨董商の名が見られる。

〔表3-16〕 直入翁寿筵図録　　明治13年(1880)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
天	玄関	玄関			広岡氏別荘	1			
	玄関　副席（初席展観）	（展観席）			玄関	1			
	煙嵐社展観	書画展観席							
	鴨西社點茶席	（抹茶席）	釋掠湖-中村瓢心-	鈴木翠亭-二木自睦	清閑亭（広1丈2	2			
	外堂	（水屋）	中村十椿	-丸木卯野	尺　陜1丈）				
	京師展観録	書画展観席							
地	和漢故人書画展観席	書画展観席	山中天山-西尾播吉-	伏水静松-			1		
			山中簪篁	杉田莱山					
	竹田居士明清古人展観	書画展観席				2	1		
	新書画展観 及 諸子揮毫席	書画展観席					1		
		＋揮毫席							
	浪華書画展観	書画展観席							
	別室行厨席	（酒席）		土佐拾輔-川西春濤	玄関東辺	1			
				-市田華亭					
	堺展観	書画展観席							
	池亭扁舟小致	（奏楽席）	堀井頑仙-中村南陽-	長春堂菜田-	池亭	1			
			佐々木金耕	藤岡東皐					
	直入山樵揮毫席	（茶席）	鷲尾秋汀-真野子江-	石原梅影-杉井金谷	菜花園	1			
	菜花園	揮毫席	芝田竹崖-前尾半峰	-松下清泉		1			
	煙嵐社煎茶席　外堂山亭	（前席）	先春園-文昌堂	村尾錦虹-	山亭	1			
	煎茶席	茶席	大村大鶩-松井有香	下辻一濟		1			
人	明九社茗筵　雲影濤聲楼上	（前席）			雲影濤聲楼上	1			
		茶席				1			
	水楼延壽社茗筵　外堂	（前席）			藤井茶室	1		1	
	小室	（前席副席）				1			
	喫茶席楼上	茶席				2			
	水竹楼酒飯席	酒飯席	平泉柳煙-	松浦小竹-金盛復坪	水竹楼			1	
			田上小泉	-大黒福松					

(17)『雲烟供養図録』

全 11 席からなり、単独席が７席、複数席が４席となり、複数席を分割すると総席数 15 席で構成される。初めに書画展観席が設けられ、その後に第一・六・七・九席が茶席、第二席から第五席が茶席と副席、第八席が清楽合奏（奏楽席）、さらに会場を移して書画展観席という構成である。席種の内訳は、茶席８席、副席４席、書画展観席２席、奏楽席１席となり、挿図は書画展観席および副席１席を除いて描写がある。第一・六・七席

は外観からも室内の様子が分かるため、より詳細に空間を知ることができる。

席の関係は、茶席と副席が組み合わされる。実際の席の構成が目録の記載に反映されると考えると、副席は茶席の後に設けられる席といえる。また、副席の飾りは書画と花具など少数の道具であり、同じく京都で開催された史料９『円山勝会図録』の前席が変化したものと考えられる。

会場は東山の端寮、個人邸、牡丹園、中村楼、藤棚亭、最後に知恩院の方丈としており、ここで京都の会場で頻繁に使用される中村楼が登場する。席主は『円山勝会図録』の鴨崖の水楼でも席主を担当した骨董商が名を連ねており、４年前の仲間が再度集って茶会を楽しんだと思われる。

〔表3-17〕 雲烟供養図録　　明治13年(1880)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	―	書画展観席							
天	第一席　本席	（茶席）	讃州高松　石田廬		東山端寮別亭	1		1	
	第二席　本席	（茶席）	鳩居堂・在楳堂		堀内氏楼上	2			
	副席	副席				1			
地	第三席　本席	（茶席）	長亘堂・宗海堂・		牡丹園別亭	2			
	副席	副席	淇翠堂・嘯風堂			1			
	第四席　本席	（茶席）	岸花堂・彝雙堂・		牡丹園	1			
	副席	副席	梨花堂				1		
	第五席　本席	（茶席）	清雅堂		中邨楼別亭	2			
	副席	副席				1			
	第六席　本席	（茶席）			中邨楼茶亭	1		1	
	第七席　本席	（茶席）	大狂堂・秋竹堂・清森堂・澂源堂		中邨楼後亭	1		1	
人	清楽合奏	（奏楽席）	京都　松月園・大阪　平井連山	令古堂・玩古堂・百木堂	藤棚亭	1			
	―	書画展観席			華頂山（知恩院）方丈				
	第九席　本席	（茶席）	莱山堂			2			

(18)『追遠薦新図録』

全３席からなり、文房展観席である本席と副席、小室（書画展観席）、茗筵（茶席）の総席数４席から構成され、全てに席の描写がある。

会場は奥蘭田の別業である東京隅田川の鉄乃邨荘で、席主は奥蘭田の他に、楓川亭などの煎茶に関係の深い人物の名が見られる。

〔表3-18〕 追遠薦新図録　　明治16年(1883)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	本席	（文房展観席）	奥蘭田	樋口■古・三宅樵香・松井釣古・井上松渓・遠藤嶺松・松井半古	鉄乃邨荘	2			
	副席	（文房展観席）				1			
	小室　薦奠之筵	（書画展観席）				1			
	茗筵	（茶席）		南郷一堂		1			

(19)『分史翁薦事図録』

全 16 席からなり、第四・七・十・十二・十四席が茶席、第一・三・六・九・十五席が前席と茶席、第二・五・十一・十三席が書画展観席、第八席が盆栽陳列席、清楽合奏（奏楽席）が１席の総席数 21 席で構成される。単独の盆栽陳列席が登場するのはこの茶会が

初めてで、以後多くの茶会でみられる。挿図は茶席と前席の計 15 席描写されている。

前席と茶席の関係は、前席が花具など少数の道具が飾られるだけの待合のような席になり、両席の関係は京都と似たものに変化している。また、第三席の前席には盆栽以外の盆石や器などの花具が飾られており、後に単独の席として登場する奇石や銅器の展観席の先駆けと考えられる。

会場は大阪網島と片街の二ヶ所に分かれており、第八席までは網島の鮒宇楼、個人邸、大長寺が、第九席以降は方街の個人邸、寺院が会場とされ、清楽合奏は船となっている。

席主は第一席を主催者の小西が、書画展観席は山中簪篁堂を始めとする大阪の骨董商が、第四席には煎茶結社の昌隆社が、他に京都・長崎からも人を呼んでいる。初見の席種である盆栽陳列席は梅丈園・三樹園という盆栽を専門に扱う盆栽家が席主を担当しており、当時盆栽の需要が高まっていたことが分かる。

〔表3-19〕 分史翁薦事図録　　明治16年(1883)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
元	第一席 前席	前席	小西吉祥堂-	田島二楽-福山文玉-	網島　鮒宇亭	1			
	茶室	(茶席)	小西喜祥堂	中山翠竹		2			
亨	第二席	(書画展観席)	西尾五福堂-角-天　山中簪篁堂-杉山松静堂						
	第三席 前席	前席	松本氏		網島　小室氏	1	1		
	茶室	(茶席)				1			
	第四席	(茶席)	昌隆社	山中簪篁堂-岩井嵓嵓洞-武長田生堂-永藤朝翠堂-野口泰來堂-山中永賀堂-森梅香堂-大村大鶩堂-中野原	網島　白山氏別墅	3	2		
利	第五席	(書画展観席)	第二席に同じ		網島　大長寺				
	第六席 前席	前席	京都　山田桂花堂		網島　白山氏別墅	1			
	茶室	(茶席)				1			
	第七席	(茶席)	池田閑怡堂		青湾　川真田氏別墅	2			
	第八席	(盆栽陳列席)		梅丈園-三樹園	(網島)		5		
	第九席 前席	前席	京都　竹村氏		片街　河上氏	1			
	茶室	(茶席)				1			
	第十席	(茶席)	長崎　池島村泉-京井梅嘯-打橋雲泉	佐野瑞嵓-諸熊荷舟-小島精意	片街　徳龍精舎	2			
	第十一席	(書画展観席)	第二席に同じ		片街　徳龍寺				
貞	第十二席	(茶席)	後藤祥雲堂		片街　徳龍精舎	2			
	第十三席	(書画展観席)	第二席に同じ		片街　光明寺				
	第十四席	(茶席)	京都　岩田秋竹堂		片街　東呉氏別墅	1			
	第十五席 前席	前席	植村暢春堂		片街　東呉氏別墅	1			
	茶室	(茶席)				1			
	清楽合奏	(奏楽席)	平井連山　他		船房			1	

(20)『清娯軒茶筵図録』

全５席からなり、前席（盆栽陳列席）、第二席が本席（茶席）と副席、第三席が酒席、第四席が副席（茶席）、第五席が書画展観席の総席数６席から構成される。挿図は書画展観席以外あるが、道具に焦点が当てられているため、室内の描写は緻密ではない。

会場は愛知県半田の清娯軒で、席主は主催者の清娯軒主人がつとめており、盆栽陳列席に『分史翁薦事図録』で登場した大阪の盆栽家三樹園の名がある。

〔表3-20〕 清娯軒茶筵図録　　明治16年(1883)　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	前席	(盆栽陳列席)	清娯軒主人 三浦秋岳	観古堂・蘊真堂・中豐堂・文尋舎・橋畔堂・三樹園（浪華）	清娯軒	2	2		
	第二　本席	(茶席)				1	1		
	副席	副席				1	1		
	第三　酒席	酒席			清娯軒之別亭	1			
	第四　副席	(茶席)				2			
	第五	(書画展観席)							

(21)『招鶴亭茗醼図録』

全４席からなり、前席（盆栽陳列席）、第二が本席（茶席）と副席、第三が茗筵（茶席）、第四が酒席と副席の総席数６席で構成される。図録の形式および席の構成が、先に愛知県半田で開催された史料 20『清娯軒茶筵図録』と共通点が多く、影響を受けていると分かる。挿図は道具に焦点をあてており、室の描写は第三・四席の計２席である。

本席と副席の関係は、副席は少数の道具が飾られており、本席に付属する席である。

会場は招鶴亭の自邸で、席主は記載がないが招鶴亭主人がつとめたと思われる。

〔表3-21〕 招鶴亭茗醼図録　　明治19年(1886)　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	前席	(盆栽陳列席)			招鶴亭		3		
	第二　本席	(茶席)					2		
	副席	副席					1		
	第三　茗筵	(茶席)			招鶴山亭	1			
	第四　酒席	酒席			水楼	1	1		
	副席	副席					1		

(22)『楳仙先生古稀筵展観録』

全５席からなり、書画展観席、清楽合奏（奏楽席）、茶席２席、抹茶席で構成され、挿図は抹茶席を除くと茶席２席のみである。

会場は記載がなく不明だが、席主には地元の人物の名が多く見られ、長崎の池嶋村泉が茶席を担当している。池嶋村泉は史料８『青湾茗醼図誌』・19『分史翁薦事図録』にも名があり、後に長崎で開催される史料 30『石癡翁追福展観録』でも席主をつとめるなど、九州の煎茶文化の中心人物と考えられる。

〔表3-22〕 楳仙先生古稀筵展観録　　明治19年(1886)　　福岡

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	書画展観	書画展観席							
	清楽合奏	奏楽席							
	煎茶席	茶席	長崎　京井梅嘯・池嶋村泉			1			
	煎茶席	茶席	筑前　横田愛石・河内緑陰	筑前　山田嚼砂・下村御風・桜井佐介		1			
	抹茶席	抹茶席	筑前　玄海楼	筑前　小林相誉・帯谷松道		1			

(23)『柳嶋清賞』

全５席からなり、第一席が前席、第二席が書画展観席、第三席から第五席が茶席で構成され、全てに挿図がある。東京での席の構成は、前席が単独席として茶会の初めに設

けられることが多く、前席を茶席に付随させる大阪や京都と異なる。また、書画展観席を見ると、書画の前に盆栽や瓶花が陳列されており、大阪で盆栽陳列席が登場してから４年が経つものの、東京ではまだ盆栽陳列席が登場していない。

会場は東京柳島の料亭橋本楼としており、席主には骨董商の松井釣古や五十嵐春巷など、他の東京の茶会でも名を見る人物が並んでいる。

〔表3-23〕 柳嶋清賞　　明治20年(1887)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席	(前席)	藤堂對緑		柳島橋本楼	1			
	第二席	(書画展観席)	－			1	4		
	第三席	(茶席)	鈴木湖邨	松井釣古		1			
	第四席	(茶席)	太田蘭畹	遠藤嶺松		1			
	第五席	(茶席)	青木碧處	五十嵐春巷		1			

(24)『随意荘雅集録』

全７席からなり、第一席が前席とその副席、第二席が器の展観席、第三席が石の展観席、第四席が抹茶席、第五席が揮毫席、第六席が茶席、第７席が奏楽席、総席数８席で構成され、奏楽席以外に挿図がある。第二・三席の展観席は、花具の一種である器（ここでは特に玉器）や盆石に焦点をあてた単独の展観席としている。

会場は主催者郷純造の別業随意荘としており、第六・七席の船は、随意荘近くの隅田川上である。席主は個人が担当しており、茶席を骨董商の楓川亭釣古がつとめている。

〔表3-24〕 随意荘雅集録　　明治22年(1889)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
上	第一席	(前席)			随意荘	1	1		
	副席	(前席副席)				1			
	第二席	(玉器陳列				1	1		
	第三席	(石陳列席)				1			
	第四席抹茶	(抹茶席)	桜井敬長			1			
	第五席	(揮毫席)				2			
	第六席船房煎茶	(茶席)	楓川亭釣古		船房	1			
	第七席船房明清楽	(奏楽席)	津田旭莽	司馬順子					

(25)『墨縁奇賞』

全３席からなり、前席、書画展観席、茶席で構成される。前席が単独で席を構成するのは関西では珍しく、主催者が東京の奥蘭田であることが席の構成に影響していると思われる。会場は青湾網島の金波楼（鮒宇楼）としており、席主は記載がなく詳細は不明であるが、奥蘭田によるものと思われる。

〔表3-25〕 墨縁奇賞　　明治26年(1893)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	－	(前席)	－	－	網島　金波楼 (鮒宇楼)	1			
	書画	(書画展観席)	－	－		2			
	－	(茶席)	－	－		1			

(26)『醉花図誌』

全６席からなり、遺愛品席（展観席）から始まり、茶席、抹茶席、古泉席（瓦の展観席）、盆栽陳列席、書画展観席で構成される。瓦の展観席はこの茶会のみに見られ、地方の独自性が見受けられる。挿図は茶席と抹茶席の２席が描かれている。

会場は愛知三河の善福寺とし、席主には地元の人々の名が多数記載されている。

〔表3-26〕 醉花図誌　　明治26年(1893)　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	遺愛品席	（遺物陳列席）	複数名	複数名	善福寺		1		
	－	茶席				1			
	－	（抹茶席）	■峰齊清香	松原木仙		1			
	古泉席中古瓦	（瓦陳列席）					1		
	瓶花盆栽	盆栽陳列席					5		
	書画展観	書画展観席							

(27)『竹洞竹溪翁建碑薦事餘録』

全６席からなり、はじめに祭壇、その後茶席が２席続き、このうち１席は前席を持つ。後半は書画展観席が３席設けられ、総席数７席で構成されている。挿図は茶席と前席が描かれている。前席と茶席の関係は、前席は少数の道具が飾られて茶席に付随している。

会場は京都の真如堂、極楽寺、松林院とし、席主は京都の香具屋鳩居堂の名がある。

〔表3-27〕 竹洞竹溪翁建碑薦事余録　　明治27年(1894)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	祭場	（祭壇）	－		（真如堂）東陽院書院	―			
	茶席　第一席　茗席	（茶席）	熊谷鳩居堂		（真如堂）東陽院奥書院	1	1		
	茶席　第二席　前席	前席	大橋小仙居		（真如堂）東陽院別院	1			
	本席	（茶席）				1			
	極楽寺方丈席	（書画展観席）	－		極楽寺方丈				
	見眞堂席	（書画展観席）	－		見眞堂				
	松林院席	（書画展観席）	－		松林院				

(28)『淇水翁薦事図録』

全７席からなり、招鶴亭（第一席）が茶席、第二席が酒席、第三席が前席と茶席となり、その後、半洲居で前席・茶席・副席、北岳楼で前席と茶席、聴松館で第一席（前席）・

〔表3-28〕 淇水翁薦事図録　　明治27年(1894)　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
松	招鶴亭　本席	（茶席）	招鶴亭		招鶴亭		8	1	
	第二席　山亭	（酒席）	招鶴亭		山亭			1	
	第三席　水亭　前席	前席	招鶴亭		水亭		1	1	
	茶席	茶席				2			
竹	半洲居　前席	前席	半洲居		半洲居	1			
	茶席	茶席				1			
	副席	副席				1			
	北岳楼　前席	前席	北岳楼		北岳楼	1			
	茶席	茶席				2			
	聴松館　第一席	（前席）	聴松館		聴松館	1			
	第二席	（盆栽・文房展観席）				1	2		
	第三席　茶室	（茶席）				1			
	敬業堂　茶室	（茶席）	敬業堂		敬業堂	1			

第二席（盆栽・文房展観席）・第三席（茶席）、敬業堂で茶席の総席数 13 席で構成される。挿図は第三席の茶席以降の茶席５席、前席３席、副席１席の計９席が描かれている。

会場は愛知半田の主催者自邸と個人邸としており、席主は各会場の主人が担当していると思われる。

(29)『老古茗筵図録』

全３席からなり、前席と茶席、書画展観席と揮毫席が続き、挿図は前席と茶席の計２席がある。前席と茶席の関係は、前席は茶席の待合のように構成されている。

会場は和歌山市東郭の四美館として、席主は地元の骨董商と思われる延年堂である。

〔表3-29〕 老古茗筵図録　　明治29年(1896)　　和歌山

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	文房	（前席）	岡延年堂	笠本東雲斎・岩橋樗々堂・岡為春堂・岡単瓢堂	東郭　四美館	1			
	茶寮	（茶席）				1			
	－	（書画展観席）							
	別席　書画揮毫会	揮毫席							

(30)『石癡翁追福展観録』

席名の記載がないため、席の構成は不明だが、書画の目録および茶席の描写が一つあることから、書画展観席と茶席で構成されていたと推定される。

会場は長崎の長照寺とし、席主には池島村泉の名がみられる。

〔表3-30〕 石癡翁追福展観録　　明治29年(1896)　　長崎

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	書画展観	書画展観席			長照寺				
	－	（茶席）	池島村泉	寺井虎仙・横田渡舟		1			

(31)『清楽欣賞（中邨樓茶会）』

全４席からなり、第一・二席が書画展観席、第三席が茶席、第四席が酒席と副席の総席数５席で構成され、全てに挿図がある。酒席と副席の関係は、副席が酒席に付随する。

会場は京都の中邨楼とし、席主は記載がなく不明である。

〔表3-31〕 清楽欣賞（中邨楼茶会）　　明治29年(1896)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席	（書画展観席）			中村楼	1			
	第二席	（書画展観席）				1			
	第三席	（茶席）				2			
	第四席	（酒席）				2			
	副席	副席				1			

(32)『清賞余録』

全 12 席からなり、第一席から第三席・第六席から第八席が書画展観席、第四・十一席が盆栽陳列席、第五・九席が前席と茶席、第十・十二席が茶席の総席数 14 席で構成され、

東京の茶会では初めて盆栽陳列席が登場している。挿図は前席を除く第三席から第六席と第九席から第十二席の計８席が描かれる。図録の発売所に京都や大阪の骨董商の名があることから、それらの意見も反映されて席が構成された可能性があり、関西の煎茶会のノウハウが東京まで到達したことを示す茶会といえる。

会場は東京上野の小西湖（不忍池）上松源楼、東叡山（寛永寺）桜雲台とし、席主は書画展観席すべてを黒川小樵が担当し、その他の席は松井釣古をはじめとする東京の骨董商が担当している。

〔表3-32〕 清賞余録　　明治31年(1898)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
乾	第一席　書画展観	書画展観席	黒川小樵		小西湖畔　松源楼				
	第二席　書画展観	書画展観席	黒川小樵						
	第三席　書画展観	書画展観席	黒川小樵			1			
	第四席　瓶花盆栽	（盆栽陳列席）	黒川小樵			1	2		
	第五席　前席	前席	松井釣古				1		
	茶席	茶席				1			
坤	第六席　絵画展観	（書画展観席）	黒川小樵		東叡山　桜雲台	1			
	第七席　絵画展観	（書画展観席）	黒川小樵						
	第八席　絵画展観	（書画展観席）	黒川小樵						
	第九席　前席	前席	黒川小樵				1		
	茶席	茶席				1			
	第十席　茶席	茶席	五十嵐春巷			1			
	第十一席　瓶花盆栽	（盆栽陳列席）	遠藤魁春			2			
	第十二席　茶席	茶席	遠藤魁春			1			

(33)『万翁華甲醮誌』

全３席からなり、第一席が前席、第二席が茶席と副席、第三席が抹茶席で構成され、総席数は４席となる。全ての席で挿図があり、抹茶席を除くと、挿図は計３席となる。このうち第二席の茶席と副席は一つの挿図に描かれている。茶席と副席の関係は、両席が一つの挿図に表されることからも、副席が茶席に付属することが分かる。

会場は東京上野の小西湖（不忍池）上松源楼とし、席主は主催者の市河家と骨董商の楓川亭釣古が担当している。

〔表3-33〕 万翁華甲醮誌　　明治31年(1898)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席	（前席）	市河三陽		小西湖上　松源楼	1			
	第二席　煎茶	（茶席）	楓川亭釣古			1			
	第二副席　文房	副席							
	第三席　抹茶	（抹茶席）	市河米子	村瀬長和・石井照子・三浦久子		1			

(34)『竹荘茶醮図録』

席名が記載されていないが、全６席からなり、各席に飾られた道具および目録をもとに、他の煎茶会図録に倣って席名をつけると、第一席前席、第二席盆栽陳列席と附席（副席）、第三席前席、第四席書画展観席、第五席茶席、第六席酒席となり、総席数は７席となる。挿図は附席を除く全ての席で描かれている。

前席は盆栽陳列席と書画展観席に付属しつつも単独で席を構成している一方、茶席には付属の席がなくなっている。前席の内容は、本席の飾りと大差はないことから、前席と本席が一体となって席を構成していたと思われる。『分史翁薦事図録』以来の大阪の茶会であるが、前席の扱いや茶席の割合など、席の構成が大きく変化している。

会場は竹式楼とし、席主には骨董商の永藤朝翠堂、盆栽家の植田梅丈園の名がある。

〔表3-34〕 竹荘茶醼図録　　明治32年(1899)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	－	（前席）	水谷鶴松	朝翠堂（永藤徳太郎）・梅丈園（植田秀四郎）	竹式楼	1			
	－	（盆栽陳列席）				1	2		
	附席	（副席）							
	－	（前席）				1			
	－	（書画展観席）				1			
	－	（茶席）				1			
	－	（酒席）				1			

(35)『掲燈院小祥薦事会記』

全15席からなり、祭壇１席、遺物展観席５席、揮毫席１席、茶席３席、抹茶席３席、酒飯席１席、碁席１席で構成され、このうち祭壇と遺物展観席１席は玄関、広間、居間などに分かれているが、席数としては１席と考えた。長浜別院に設けられた遺物展観席１席、茶席１席、抹茶席２席、酒飯席１席は、前席や副席と組み合わされた複数の席からなり、総席数は19席となる。挿図は茶席３席、前席１席、碁席１席、酒飯席１席の計６席となる。碁席はこの茶会でのみ登場する席種であるが、文人の嗜みといわれる琴棋書画の一つ「棋」であり、煎茶席として大変重要な意味を持つ席である。

〔表3-35〕 掲燈院小祥薦事会記　　明治32年(1899)　　長浜 ｶ

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	霊壇　玄関 居間 仏間 次ノ間	（祭壇）			本邸				
	遺愛品展観席　玄関 広間 待合室 居間	（遺物展観席）			向陽館				
	遺愛品展観席　第一席	（遺物展観席）			長浜別院				
	第二席	（遺物展観席）							
	第三席　上段 第三席　下段	（遺物展観席）			長浜別院 新御座之間				
	第四席	（遺物展観席）							
	揮毫席	揮毫席			長浜別院　殿閣				
	茗筵　第一席 前席	（茶席） 前席	杉本喆齋		叢翠館	1 1			
	（木村邸）	（碁席）			木村邸	1			
	第二席	（茶席）	沓水籟琴		水柳館	1			
	第三席	（抹茶席）	沓水静涯		滴水館				
	第四席	（茶席）	下郷傳平（２代）		新御殿	1			
	第五席 待合席	（抹茶席） 待合席			含山軒	1		1	
	第六席 副席	（抹茶席） 副席	錦織楓川		錦雲亭	1			
	錦雲亭蕎麦会 副席	（酒飯席） 副席				1		1	

会場は主催者の自邸、長浜別院、他に個人邸などが使用されており、席主には主催者を含む個人名が見られる。

(36)『蒹葭堂誌』

全４席からなり、第一席が祭壇、第二席が書画展観席、第三席が盆栽陳列席、第四席が待合席（前席）と茶席で構成され、総席数は５席になる。「待合席」という席名はここで初めて登場するが、席の内容は前席が名称を変えたものと考えられる。挿図は祭壇と茶席の２席が描かれている。

会場は大阪東区安土町の書籍商事務所とし、席主には古書店の鹿田松雲堂や骨董商の山中箸篁堂などの名が見られる。

〔表3-36〕 蒹葭堂誌　　明治34年(1901)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　祭席	祭壇			書籍商事務所	1			
	第二席　遺墨遺物展観	（書画展観席）	鹿田松雲堂・山中箸篁堂						
	第三席　瓶花盆栽	（盆栽陳列					1		
	第四席　待合席 茶寮	（前席） （茶席）	正木萬春堂			1			

(37)『林華園薦事図録』

全４席からなり、薦事場、待合（前席）と茶席、書画展観席と広間（副席）、酒席の総席数６席で構成され、挿図は茶席があるのみである。

会場は主催者林新助の自邸林華園であることから、席主の記載がないが林氏がつとめたと考える。

〔表3-37〕 林華園薦事図録　　明治36年(1903)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	薦事場	（祭壇）			林華園　自家				
	待合 茶室	（前席） （茶席）			林華園　静室	2			
	展観席 広間	（書画展観席） （副席）			林華園　迎賓閣				
	酒席	酒席			林華園　高楼				

(38)『盆栽瓶花聚楽会図録』

緒言によると、会場には全 35 席が設けられたとされるが、目録ではそのうち 18 席が確認できる。盆栽陳列席が 15 席、茶席が２席、前席が１席、酒席が１席となっており、挿図は盆栽陳列席が 13 席、茶席が２席の計 15 席ある。盆栽陳列席が主であり、煎茶会ではなく、盆栽の展覧会に煎茶席が挿入された構成である。

会場は東京の城北根岸にある菓子屋岡埜の支店古能波奈園と、群馬県の伊香保温泉とする。席主には多数の盆栽家の名があり、大阪で盆栽陳列席が登場してから 20 年を経て、

ようやく東京でも盆栽家が誕生したことがわかる。

〔表3-38〕 盆栽瓶花聚楽会図録　　明治36年(19(　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
上	大畑多左衛門	(盆栽陳列席)			古能波奈園大広間・楼上	1	1		
	山崎喜市	(盆栽陳列席)			古能波奈園庭中・離れ座敷	1			
	加藤金之助	(盆栽陳列席)				1			
	山本清次郎	(盆栽陳列席)				1			
	巣鴨連	(盆栽陳列席)	壽山園・栽花園・培樹園・愛松園・芳樹園・松花園				1		
	清大園	(盆栽陳列席)			伊香保温泉	1			
	千樹園　寄附 本席	(前席) (盆栽陳列席)				1			
	薫風園	酒席			伊香保温泉庭内			1	
	田宮楓溪　茗莚	(茶席)				1			
下	加藤金之助	(盆栽陳列席)				1	1		
	荻原彌吉	(盆栽陳列席)				1			
	渡邉儀三郎	(盆栽陳列席)			伊香保温泉	1			
	大畑多左衛門	(盆栽陳列席)				1	1		
	義昌堂木曽庄七	(盆栽陳列席)				1	1		
	苔香・百草・香樹三園	(盆栽陳列席)					1		
	西花園・九華堂	(盆栽陳列席)			伊香保温泉小室	1			
	清大園	(盆栽陳列席)			古能波奈園	1			
	五十嵐成竹堂	(茶席)				2			

※特記なしでも古能波奈園もしくは伊香保温泉を会場とする

(39)『梅村寿筵図録』

全 12 席からなり、第二席および第四席から第十二席までの 10 席は単独席、第一席と第三席は複数席の展観席で、総席数 15 席となる。挿図は茶席を中心に６席描かれる。煎茶席は２席のみで、展観席４席、酒席・揮毫席・宴席・露店など、茶事ではなく道具の鑑賞や宴の性格が強い構成である。

会場は例言に「(略)／因借柏木村常圓精舍／以當其場／々距新宿停車場／僅三町(略)」とあり、新宿駅界隈の寺院や個人邸とする。席主は骨董商松井風川や盆栽家の名がある。

〔表3-39〕 梅村寿筵図録　　明治36年(1903)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
乾	第一席　雅客 書畫展觀及瓶花盆景席	書画展観席 盆栽陳列席	(書畫陳列)玉置環齋 (諸器排置)仰木桂齋 (瓶花)松井楓川 (盆栽)百艸園 (待賓)廣瀬太次郎	矢澤通禮 上野晩翠 養松園、吉川勇子 寺内多宮、棚橋富蔵	常圓精舍瞻蔔園客堂	1	3		
	第二席　野客　臨時煎茶席	茶席	松井楓川	仰木政次	飯田丈之助別室 在園與精舍之半途	1			
	第三席　貴客　迎賓本席 前廳(庁) 正堂副室 正堂	(前席) (展観席) (展観席)	瓜生復、下山佐助	南田榮蔵	栗園本邸正堂	1	7		
坤	第四席　壽客　肅客席	(酒席)	梅村夫妻正服肅拝 来賓	−	栗園梅花荘	1	2		
	第五席　素客　煎茶副席	(前席)	上野晩翠	−	栗園陶情絲竹室	1			
	第六席　清客　煎茶席	茶席	仰木桂齋	寺内松子、上野晩翠、重岡清助	栗園雙璧齋	1	3		
	第七席　幽客　抹茶席	抹茶席	川上不白	瓜生保子、瓜生敦子、吉川仲子、吉川	栗園忘吾茶寮	1			
	第八席　淨客　揮毫席	揮毫席	瓜生雪雄	−	栗園竹西書屋				1
	第九席　佳客　宴席	(酒販席)	−	−	栗園東北林間假設高桌				
	第十席　遠客　餡餻粉團店	(模擬店)	−	−	茶園間張蘆棚招牌				
	第十一席　近客　魚鮓店	(模擬店)	−	−	栗園北隅竹林之東、傍紫門、設蘆棚				
	第十二席　仙客　留客席	(副席)	−	−	梅花荘階前				

(40)『東山茶会図録』

全 20 席からなり、単独席が 12 席、複数席が８席で、複数席を分割すると総席数 30

席となる。内訳は茶席 11 席、前席６席、書画展観席４席、盆栽陳列席１席、展観席２席、酒席２席、待合と抹茶席、祭壇、玄関となっている。挿図は酒席や抹茶席を除く計 22 席ある。関西の煎茶会に抹茶席が設けられるのは史料 16『直入翁寿筵図録』以来であり、さらに京都の茶会では盆栽陳列席が初めて登場する。

前席と茶席の関係は、両席とも多様な道具を飾っており、道具の展観に主眼が置かれている。これは大阪の茶会に近い構成であり、主催者の岩田秋竹堂の名が史料 19『分史翁薦事図録』や後に開かれる史料 43『澱江茗醼図録』など大阪の茶会で確認できることから、京都の骨董商ながら大阪とのつながりが強かったことが影響したと考えられる。

会場は円山の左阿弥楼、個人邸、真葛原の各所、中邨楼として、席主は林華園の林新助など京都の骨董商だけでなく、大阪や名古屋の骨董商の名前も見られ、全国から多くの参加者を募ったと思われる。

〔表3-40〕 東山茶会図録　　明治41年(1908　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
東	第一席　神祭式場	（祭壇）	岩田嘉兵衛		円山左阿弥楼	1			
	第二席　瓶花陳列	（盆栽陳列席）	平安会				3		
	第三席　書画展観	（書画展観席）	平安会			1			
	第四席　文房	（前席）	遠藤魁春堂			1			
	茶室	（茶席）				1			
	第五席　茶室	（茶席）	田中皆宜堂			1		1	
山	第六席　玄関	玄関							
	広間	（書画・文房・盆栽陳列席）	吉田茂八		菊谿稲垣氏別業	2	2		
	前席	前席				1			
	本席	（茶席）				1			
	第七席　前席	前席	大阪　永藤朝翠堂		真葛原西行庵	1			
	本席	（茶席）				1			
	第八席	（酒席）	濱田百木堂・露木露香堂・長谷川好々堂					1	
	第九席　前席	（書画展観席）	高橋如虹堂		真葛原水琴亭	1			
	本席	（茶席）				1			
茶	第十席　前席	前席	大阪　児島八木堂		高台寺岡林院	2			
	本席	（茶席）				1			
	第十一席　待合	待合席	下邨家庵		菊渓山荘			1	
	抹茶席	抹茶席							
	第十二席　前席	前席	林新助		真葛原白水楼	1			
	本席	（茶席）				1			
	第十三席　前席	前席	土橋永昌堂			1			
		（茶席）				1			
	第十四席　書画展観	書画展観席	大阪　天・角・高山中箒篁堂		中邨楼	1			
会	第十五席　古銅器陳列	―	秦蔵六・平野英青堂・露木露香堂				3		
	第十六席	（茶席）	藤田鶴居堂			1			
	第十七席　明清書画展観	書画展観席	名古屋　山田百花堂			1			
	第十八席　茶室	（茶席）	岩田秋竹堂			1			
	第十九席　茶室	（茶席）	椰川雨竹堂			1			
	第二十席	（酒席）	岩田秋竹堂					1	

(41)『山水清遊会』

全６席からなり、第一席迎賓（前席）、第二席書画展観席、第三席待合（前席）、第四席茶席、第五席酒席、第六席酒飯席で構成され、挿図は第一席から第四席までの計４席

ある。会場は岐阜の萬松館として、席主は記載がなく不明である。

〔表3-41〕 第二十回　山水清遊会　　明治41年(1908)　　岐阜

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　迎賓	(前席)			岐阜　萬松館	1			
	第二席　展観	(書画展観席)				1			
	第三席　待合	(前席)				1			
	第四席　茶筵	(茶席)				1			
	第五席　浅酌	(酒席)							
	第六席　会員晩餐	(酒飯席)							

(42)『豫章堂茗讌図録』

全５席に玄関を加えた構成で、第一・二・四席は待合席、第三席が茶席、第五席が酒席で構成されている。単独の待合席が３席あり、多くの道具が飾られていることから、茶席等に付随する席ではなく、展観席としての性格が強くなったと考えられる。

会場は大阪の豫章堂の自邸とし、席主は主催者の松山家がつとめている。

〔表3-42〕 豫章堂茗讌図録　　明治42年(1909)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	玄関接待 通庭	玄関	松山卓爾	武津妻梅・ 渡辺楳涯・ 山中永賀堂・ 尾崎精華堂	自邸　豫章堂	1			庭
	第一席　待合席	待合席				3			
	第二席　楼上待合席	(前席)				2			
	第三席　煎茶席	茶席				2			
	第四席　別室待合	(前席)				1			
	第五席　浅酌席	(酒席)				2			

(43)『澱江茗醼図録』

全 15 席からなり、第四席が待合と抹茶席、第七・十三席が待合席と煎茶席、第二・九席が書画展観席、第三・六・八・十一席が茶席、第五・十・十二席が盆栽陳列席、第十四席が模擬店、第十五席が酒席、総席数 18 席で構成される。挿図は第一席の祭壇、第四席の抹茶席を除くと、挿図は計 10 席となる。模擬店はこの茶会で初めて登場しており、席主の山中商会（山中簪篁堂の合名会社）誕生が、そのきっかけと考えられる。

〔表3-43〕 澱江茗醼図録　　明治42年(1909)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　霊前	(祭壇)	山中興七・山中繁次郎		鮒宇楼	1			
	第二席　南宗書画展観	書画展観席	昌隆社						
	第三席　煎茶	(茶席)	高　山中簪篁堂			1			
	第四席　抹茶　待合	待合席	戸田露朝			1			
	濃茶席	(抹茶席)				1			
	第五席　瓶花盆栽	(盆栽陳列席)	植田梅丈園			2			
	第六席　煎茶	(茶席)	高　山中簪篁堂			2			
	第七席　煎茶　待合席	(前席)	角　山中簪篁堂		貴志氏邸				
	煎茶席	茶席				2			
	第八席　煎茶	(茶席)				2			
	第九席　古画展観	(書画展観席)	天・角　山中簪篁堂						
	第十席　瓶花盆栽	(盆栽陳列席)	村上一樹園		井上氏別業	2			
	第十一席　煎茶	(茶席)	遠藤魁春堂・岩田秋竹堂			1			
	第十二席　瓶花盆栽	(盆栽陳列席)	三木三樹園			2			
	第十三席　煎茶　待合席	(前席)	昌隆社		岩崎氏邸	1			
	煎茶席	茶席				1			
	第十四席　模擬店	模擬店	山中商会		青湾堤				
	第十五席　浅酌	(酒席)			鮒宇楼				

会場は青湾網島の鮒宇楼、個人邸とし、席主は骨董商が名を連ね、盆栽陳列席では盆栽家３園（三木三樹園、植田梅丈園、村上一樹園）が各々席を担当している。

(44)『雨竹居士薦筵図録』

全 15 席からなり、第九席の前席と本席（茶席）以外は単独席となり、総席数 16 席で構成される。第一席が祭場、第二席が遺物展観席、第三・六・十二席が盆栽陳列席、第四・八・十席が書画展観席、第五・七・十一・十三・十四席が茶席、第十五席が酒席で、全てに挿図がある。

会場は堺卯楼と個人邸とし、席主は史料 43『澱江茗醼図録』とほぼ同じ人物である。

〔表3-44〕 雨竹居士薦筵図誌　　大正2年(1913)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　薦事　祭場	（祭壇）	椰川善左衛門		堺卯楼・木村氏邸	1			
	第二席　遺愛品陳列	（遺物展観席）				1			
	第三席　盆栽	（盆栽陳列席）	村上一樹園			1	2		
	第四席　書画展観	書画展観席	昌隆社			1			庭
	第五席	（茶席）	山中箒篁堂・椰川雨竹堂	住友春翠		1			庭
	第六席　盆栽	（盆栽陳列席）	植田梅丈園			1	2		
	第七席　煎茶	（茶席）	昌隆社			1			
	第八席　書画展観	書画展観席	昌隆社			1			
	第九席　前席 本席	前席 （茶席）	椰川雨竹堂	阪上拾翠		1 1			
	第十席 高松所蔵家書画展観	書画展観席				1			
	第十一席　煎茶	（茶席）		遠藤魁春堂		1			
	第十二席　盆栽陳列	盆栽陳列席	三木三樹園			1	1		
	第十三席	（茶席）		岩田秋竹堂		1			
	第十四席　遺物煎茶	（茶席）	椰川雨竹堂			1			
	第十五席	（酒席）	椰川雨竹堂			1			

(45)『楓川追薦録』

〔表3-45〕 楓川追薦録　　大正5年(1916)　　東京

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
春	第一席　祭壇	（祭壇）			江西日本橋倶楽部	1			
	第二席　本朝書画展観合席	書画展観席	吉川長春堂			1			
	第三席　茗筵	（茶席）	早川琴韻	松井半古		1			
	第四席　明清書画展観合席	書画展観席	矢澤樵邨			1			
	第五席　盆栽　前席 本席	前席 （盆栽陳列席）	大塚其道			1			
	第六席　書画展観	書画展観席	説田鶴山	神通古玩堂・森田起雲堂		1			
夏	第七席	（酒席）	松井廉		江東美術倶楽部	1			
	第八席　盆栽合席	（盆栽陳列席）	倉石薫風園・平井百草園				1		
	第九席　書画展観　前席 本席	前席 （書画展観席）	伯爵藤堂家	本山幽篁堂		1			
	第十席　茗筵	（茶席）	伯爵藤堂家			1			
	第十一席　書画展観　本朝書画 明清書画	書画展観席 書画展観席	男爵岩崎家	黒川小樵		1			
	第十二席　茗筵	（茶席）	男爵岩崎家	松井半古		1		1	
	第十三席　盆栽合席	（盆栽陳列席）	木部苔香園・清水清大園				1		
	第十四席　盆栽合席	（盆栽陳列席）	村田香樹園			1			
秋	第十五席　茗筵　前席 本席	前席 （茶席）	中澤蘭渓	山本淇翠堂	茅場街新福井楼	1 1			
	第十六席　茗筵	（茶席）	鈴木湖邨	椰川鉄宗		1			
	第十七席　書画展観　一室 二室	書画展観席 書画展観席	菊池得堂	木口金大郎		1 1			
	第十八席　茗筵	（茶席）	林松坡			1			
	獨尊居	（書画展観席）	加納銕哉			1			

全 19 席からなり、単独席が 14 席、複数席が５席、複数席を分割すると総席数 24 席で

構成される。席種の内訳は、茶席６席、前席３席、書画展観席９席、盆栽陳列席４席、酒席・祭壇が各１席である。挿図は盆栽陳列席３席を除く全てで描かれている。前席が茶席以外の盆栽陳列席、書画展観席にも設けられ、本席に付随する席と考えられる。

会場は江西日本橋倶楽部、江東美術倶楽部、茅場街新福井楼として、席主は楓川亭と交流のあった、黒川小樵や椰川の名があり、さらに藤堂家や岩崎家など当時の有力者の名も見受けられる。また、盆栽陳列席は東京の盆栽家が担当している。

(46)『亦復一楽茶会図録』

全 20 席からなり、第六席が前席と茶席、第二十席が供餐（酒飯席）と附明清楽合奏（奏楽席）の複数席である他は全て単独席で、総席数 22 席で構成される。席種の内訳は茶席８席、前席・待合席が各１席、展観席３席、書画展観席１席、抹茶席２席、酒席・酒飯席が各１席、模擬店３席、奏楽席１席となり、煎茶会が煎茶席だけではない、多彩な内容を含んだものへと変化している。挿図は第一席から第十四席から第八・十二席を除いた計 13 席ある。

会場は京都市公会堂、個人邸、平安神宮としており、席主は京都だけでなく大阪からも多くの骨董商を招いている。

〔表3-46〕 亦復一楽茶会図録　　大正7年(1918)　　京都

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　竹邨桑者画展観	（展観席）			京都市公会堂階下及楼上	1			
	第二席　煎茗	（茶席）	岡　墨光堂		同上　楼上別席	1			
	第三席　竹田翁遺印陳列	（展観席）	林　新蕉堂		杉村氏對山館	1			
	第四席　煎茗	（茶席）	土橋　永昌堂			1			
	第五席　煎茗	（茶席）	石原　竹影堂			1			
	第六席　煎茗　前席	前席	大辻草生			1			
	本席	（茶席）				1			
	第七席　一楽帖陳列	（展観席）	一楽荘		山中氏看松居	1			
	第八席　煎茗	（茶席）	山本淇翠堂					1	
	第九席　前席待合	待合席	天　山中簪篁堂			2			
	第十席　煎茗	（茶席）				1			
	第十一席　煎茗	（茶席）	一楽荘			1			
	第十二席　香煎	（茶席）	高　山中簪篁堂		塚本氏　後園			1	
	第十三席　抹茶	抹茶席	春海調古庵		同上　看雲亭	1			
	第十四席　小酌	（酒席）	林　林華園		同上　清流亭	1			
	第十五席　一楽善哉	模擬店	今井八方堂		同上　後園			1	
	第十六席　一楽蕎麦	模擬店	北岡寄好堂					1	
	第十七席　洋風模擬店	模擬店	紫明会		平安神宮　神苑橋殿			1	
	第十八席　抹茶	抹茶席	服部來々堂		同上　神苑			1	
	第十九席　名家書画展観	書画展観席	角　山中簪篁堂		同上　貴賓館				
	第二十席　供餐	（酒飯席）	一楽会		同上　神苑			1	
	附明清楽合奏	（奏楽席）	平井連山社中		同上　池中浮艇				

(47)『溪村翁追薦図録』

全 11 席からなり、全て単独席で第一席が仏壇、第二・四・六から十席が書画展観席、第三・十一席が茗筵（茶席）、第五席が盆栽・書画・文具の展観席で構成される。席の描写は第一席から第四席までがあり、このうち第一席仏壇を除くと、挿図は計３席となる。

会場は山形県の定林寺、對葉館とし、席主は主催者の細谷家が多くを担当している。

〔表3-47〕 溪村翁追薦図録　　大正9年(1920)　　山形

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　佛壇	(祭壇)	細谷益堂	細谷大壽	定林寺	1			
	第二席　書画展観	書画展観席	細谷源翁	上松松濤		1			
	第三席　茗筵	(茶席)	細谷稷々亭	鈴木古香堂・板坂廣明堂		1			
	第四席　書画展観	書画展観席	細谷香雲堂・細谷竹村			1			
	第五席　盆栽＋溪村翁遺愛書画幅及文房具	(盆栽・書画・文房展観席)	細谷竹村	板坂廣明堂			2		
	第六席　書画展観	書画展観席	細谷稷々亭		對葉館				
	第七席　書画展観	書画展観席	槙羽南						
	第八席　書画展観	書画展観席	槙羽南						
	第九席　書画展観	書画展観席	桜井延壽堂						
	第十席　書画展観	書画展観席	細谷竹村	延澤羽山					
	第十一席　茗筵	(茶席)		延澤羽山					

(48)『角山簪篁翁薦事図録』

全20席からなり、第六・十五席が待合と煎茶席、ほかは全て単独席で、総席数22席で構成される。席種の内訳は茶席７席、待合席２席、書画展観席４席、盆栽・陶器・銅器陳列席各１席、抹茶席２席、模擬店２席、酒席・祭壇各１席である。挿図は陶器と銅器の陳列席、模擬店や酒席を除く計16席がある。待合席（前席）は本席に付随する。

会場は青湾網島の鮒宇楼と、藤田美術館で有名な藤田氏旧邸とし、席主は主催者の山中簪篁堂が多くをつとめるかたわら､昌隆社や山中商会､京都の平安会の名も見られる。また、財閥の住友・岩崎、実業家の川崎・藤田など当時の有力者の名前が並ぶ。

〔表3-48〕 角山簪篁翁薦事図録　　大正11年(1922)　　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　祭壇	(祭壇)	山中吉郎兵衛		鮒宇楼	1			
	第二席　遺墨展観	書画展観席	角　山中簪篁堂			1			
	第三席　本邦南宗書画展観	書画展観席	昌隆社中			1			
	第四席　瓶花盆栽陳列	盆栽陳列席	村上一樹園			1			
	第五席　煎茗	(茶席)	角　山中簪篁堂			1			
	第六席　煎茗　待合席 煎茗席	(前席) 茶席	高　山中簪篁堂	嘉納玉泉		1 1			
	第七席　煎茗	(茶席)	土橋永昌堂	藤田耕雪		1		1	
	第八席　煎茗	(茶席)	井上柳湖堂・橋崎渓竹堂	八田西洞		1			
	第九席　支那陶器陳列	(陶器陳列席)	天　山中簪篁堂	住友家	藤田氏旧邸洋館				
	第十席　古銅器陳列	(銅器陳列席)		住友家					
	第十一席　抹茶	抹茶席	戸田一玄菴		同上　庭園			1	
	第十二席　煎茗	(茶席)	藤田鶴居堂・児島八木堂	岩崎家	同上　市隠亭	1			
	第十三席　煎茗	(茶席)	昌隆社中		同上　庭園	1		1	
	第十四席　古画展観	書画展観席	角　山中簪篁堂	川崎家	同上	1			
	第十五席　煎茗　待合 煎茶席	(前席) 茶席	京都　平安会社中			1 1			
	第十六席　明清書画展観	書画展観席	昌隆社中・角　山中簪篁堂			1			
	第十七席　抹茶	抹茶席	戸田一玄莽	藤田家	同上　残月茶亭	1			
	第十八席　洋風模擬店	模擬店	山中商会		同上　庭園			1	
	第十九席　模擬店	模擬店	京都　山中合名会社		鮒宇楼庭園			1	
	第二十席　浅酌	(酒席)						1	

(49)『昌隆社五十周年記念茗讌図録』

全15席からなり、第一席が祭壇、第二・四・五・十二・十三・十四席が待合（もしくは前席か寄付）と茶席、このうち第二・十四席については前席に副席が加わり、第三・六席が書画展観席、第七席が盆栽陳列席、第八・十・十一席が茶席、第九席が銅器の展

観席、第十五席が酒席の総席数 23 席で構成される。第八席および第十四席前席以外に席の描写があり、このうち祭壇を除いて、挿図は計 20 席となる。

茶席と組み合わされる席について、待合、前席、寄付という名称の違いはあるが、それぞれに飾られる道具の共通性から、全て同じ役割を果たす席で前席と考えられる。前席と茶席の関係は、両席ともに床を設け、前席には掛軸・花具・香具を飾って寄付とするか、さらに文具机を加えて文具の展観席とし、少数の道具で床を飾って主題を持った茶席で茶事を楽しむ構成となっている。

会場は大阪美術倶楽部と個人邸とし、席主は主幹も含めて全て昌隆社の関係者が担当している。

〔表3-49〕 昌隆社五十周年記念茗讌図録　大正15年(1926)　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
乾	第一席　茗祖祭壇	(祭壇)	社中		大阪美術倶楽部	1			
	第二席　煎茗　待合	(前席)	嘉納玉泉	主幹：山中簪篁堂		1			
	副席	(前席副席)				1			
	茗筵	(茶席)				1			
	第三席　南宗書画展観	書画展観席	社中			3			
	第四席　煎茗　待合	(前席)	中村陶菴	主幹：井上柳湖堂		1			
	茗筵	(茶席)				1			
	第五席　煎茗　待合	(前席)	津和青柯	主幹：山中簪篁堂		1			
	茶席	茶席		水原聴雨堂		1			
	第六席　明清書画展観	書画展観席	社中			4			
坤	第七席　瓶華盆栽	(盆栽陳列席)		主幹：一樹園・三樹園・梅丈園		1			
	第八席　支那茶	(茶席)	社中		鵜野氏別館				
	第九席　銅器陳列	(銅器陳列席)	社中			1			
	第十席　煎茗	(茶席)	阪上拾翠	主幹：椰川雨竹居		1			
	第十一席　煎茗	(茶席)	横江竹軒	主幹：水原聴雨堂		1			
	第十二席　煎茗　待合	(前席)	八田西洞	主幹：橋崎溪竹堂	鵜野氏邸	1			
	茶席	(茶席)				1			
	第十三席　煎茗　前席	前席	湯川七石	主幹：山中簪篁堂		1			
	本席	(茶席)		瀬戸高山堂		1			
	第十四席　煎茗　寄付	(前席)	藤田家	主幹：池戸高山堂					
	副席	(前席副席)				1			
	茶席	茶席				1			
	第十五席　浅酌	(酒席)	社中			1			

(50)『雙軒庵記念茗讌図録』

全６席からなり、第一・二・五席が書画展観席、第三席が待合（前席）、第四席が茶席、第六席が酒席で構成される。総席数６席となり、全てに席の描写がある。

第三席待合は単独席ではあるが、第四席茶席の前席とみることができ、前席を展観席とし、茶席で茶事を楽しむ構成となっている。

〔表3-50〕 雙軒庵記念茗讌図録　大正15年(1926)　大阪

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席	(書画展観席)	会主：松本杏蔵		平野町 堺卯楼上	1			
	第二席	(書画展観席)				1			
	第三席　待合	(前席)				1			
	第四席　煎茗	(茶席)				1			
	第五席	(書画展観席)				1			
	第六席　浅酌	(酒席)				1			

会場は史料 44『雨竹居士薦筵図録』でも使用された大阪平野町の堺卯楼上とし、会主は松本奈蔵とされているが、各席の席主については記載がなく詳細は不明である。

(51)『学温園茶会図録』

全 11 席からなり、第一席が祭壇、第二席が前席３つと香煎席、第三席が前席と盆栽陳列席、第四・七・九・十一席が茶席、第五・八席が抹茶席、第六席が前席と書画展観席、第十席が酒席の総席数 16 席で構成される。席の描写は前席１席を除いた第二席から第四席と第九席の計７席である。香煎席、抹茶席、蘭茶席など、茶席が多彩になっている。

会場は、愛知県にある主催者森家の本宅と別邸、および瑞芳院としおり、この図録の名前にもなっている学温園の庭園では野点席も設けられている。席主の多くも森家が担当している。

〔表3-51〕 学温園茶会図録　　大正15年(1926)　　愛知

巻名	席名	席種	茗主	補助	会場	挿図 室内	挿図 飾り	挿図 外観	挿図 他
	第一席　祭壇	(祭壇)							
	第二席　香煎　階上　(一)	(前席)	森幽谷		本宅　明月閣	1			
	(二)	(前席)				1			
	階下	(前席副席)							
	香煎席	(茶席)				1			
	第三席　瓶花盆栽　広間(一)	(前席)	森五樹		森林兵衛別邸 竹梁齋	1			
	(二)	(盆栽陳列席)				2			
	第四席　煎茶	茶席				1			
	第五席　薄茶	(抹茶席)	瑞芳院		同上　松濤庵			1	
	第六席　書画展観　前席	前席	森幽谷		森林右衛門別邸 学温園				
	―	書画展観席							
	第七席　野席煎茶	(茶席)	内田九圃楼					1	
	第八席　薄茶	(抹茶席)	森幽谷		同上　松風庵	1			
	第九席　煎茶	(茶席)			同上	1			
	第十席　浅酌	(酒席)			瑞芳院			1	
	第十一席　蘭花湯	(茶席)	西川渉古		瑞芳院半日庵				

第２節　席の種類と構成

本節では煎茶会図録に記載されている席について、席種の分類を行ったうえで、席の構成の時代的・地域的な比較を行い、席の構成が時代の流れの中でどのように変化していったかを明らかにする。考察にあたっては〔表 3-52〕を参照されたい。

第１項　時代的考察

時代区分については、基本的には出版年代と同様に江戸末期、明治時代前半と後半、大正期とする。各時代の図録の本数と席数〔２席以上からなる席の各席を１席と数えた場合の総席数〕は、江戸末期４本で 29 席〔46 席〕、明治時代前半 20 本で 149 席〔194 席〕、明治時代後半 19 本で 151 席〔189 席〕、大正期８本で 117 席〔140 席〕となり、大正期に開催された茶会の多くが大規模な茶会であったことが分かる。

（1）江戸末期

煎茶会図録の先駆けで、この時代における唯一の大茶会である史料３『青湾茶会図録』では、19 席中９席が前席と茶席の２席以上から構成されており、江戸末期全体で見ても 29 席中 12 席（41.4%）が複数席で構成されている。席種に目を向けると、半数以上（54.3%）は茶席で占められており、その前に設けられて諸道具が飾られる前席・副席も３割を超している。前席が道具の鑑賞の場になっていることから、展観席はほとんどなく、書画展観席が３席、遺愛品の展観席が１席見られるのみである。

また、その後の煎茶会でほぼ常設される「酒席」も史料３が初見となる。

（2）明治時代前半

この頃になると、京阪で 10 席以上から構成される大茶会が盛んに行われるようになり、席のバリエーションも豊富になる。これまでの茶会にみられる茶席や書画展観席の他に、史料５『金洞餘音』に「清唱席」、史料９『円山勝会図録』に「奏楽席」の記載が見られ、主に明清楽の演奏を鑑賞する席が図録 20 本中９本に登場する。さらに史料 17『直入翁寿筵図録』には「點茶席」・「揮毫席」・「行厨席」・「酒飯席」など新たな席名が多数出現しており、煎茶会に點茶席（抹茶席）を組み込んだ初めての事例となる。これらをみると、「奏楽席」や「揮毫席」など、文人の嗜みである「琴棋書画」を意識した席の存在が目を引く。ただし、奏楽席はこの後大正期に１回登場するのみで、明治前半で姿を消す。

また、史料 19『分史翁薦事図録』には第八席に盆栽や瓶花が単独の席に陳列された、「盆栽陳列席」が始めて登場する。この３年前に刊行された史料 17『直入翁寿筵図録』

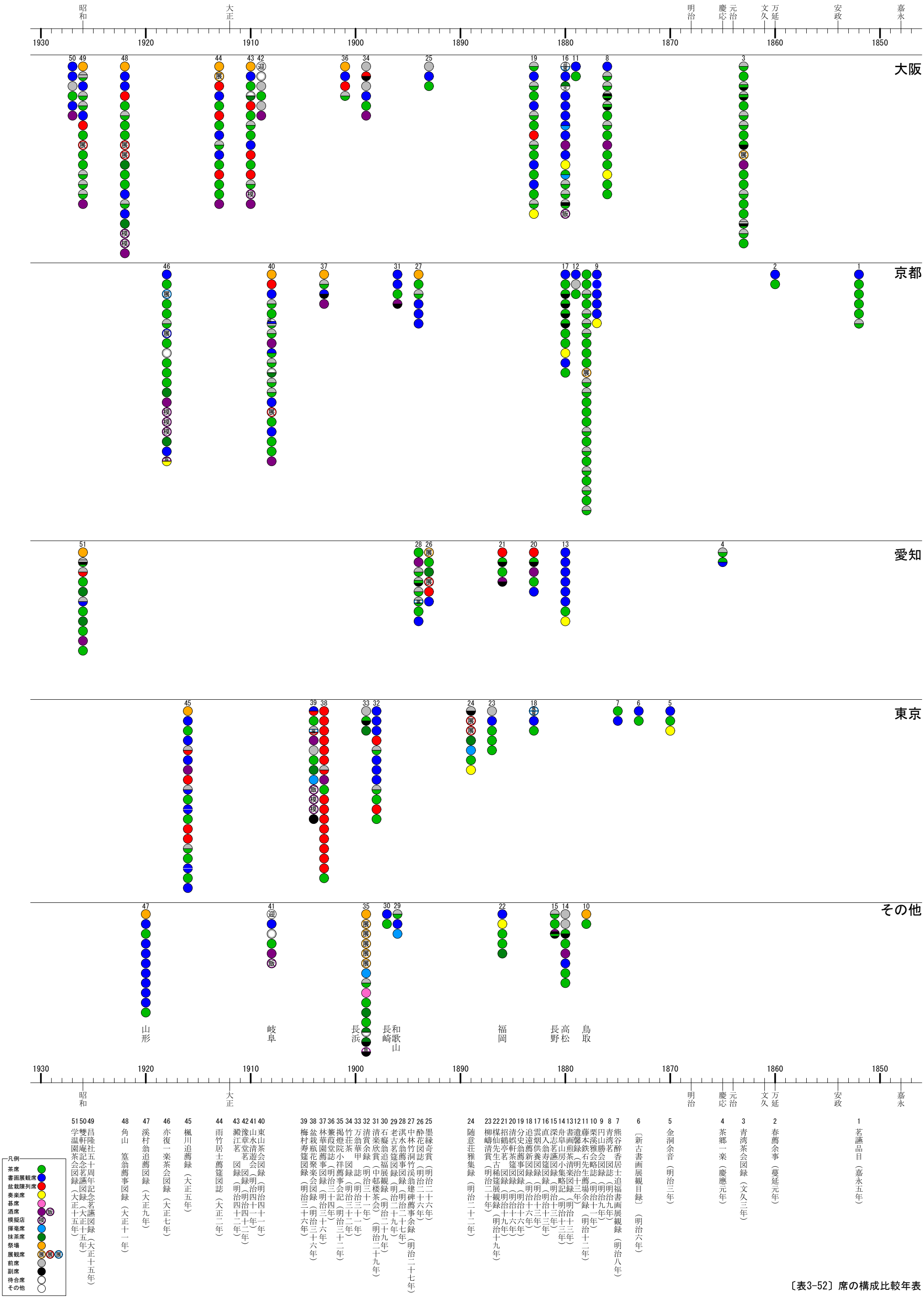
では、盆栽や瓶花は書画展観席の飾りとして書画の前に陳列されていたことから考えても、この頃急速に盆栽などの道具の鑑賞に対する関心が高まったことがうかがえる。その後も史料 24『随意荘雅集録』の第二席・第三席に盆石や玉器の展観席が単独席として登場しており、従来は前席に飾られていた道具が量・質ともに充実し、単独の席として分化していったとことがわかる。以上のことから、単独席が 149 席中 110 席（73.8%）にまで増加し、前席と茶席の２席以上からなる席が３割弱にまで減少している。また、席種に目を向けると、茶席が４割ほど（42.3%）に減少し、前席・副席も２割近く（23.2%）まで減少する一方で、書画展観席や盆栽陳列席を含む各種展観席が全体の 22.2%にまで増加する。

（３）明治時代後半

この時期の煎茶会は比較的小規模のものが多く、新しい席種はほぼ見られないが、史料 26『蒹葭堂誌』に茶席の前に設けられる席として、前席に代わって「待合席」の名が初めて登場しており、以後この「待合席」が主流となる。また、史料 35『掲燈院小祥薦事会記』における、「碁席」はこの茶会でのみ見られる席であるが、琴棋書画を意識した席として注目される。他に史料 39『梅村寿筵図録』には後の「模擬店」であろう「餡羹粉團店」「魚鮓店」が登場しており、茶会の末尾に模擬店もしくは酒席・酒飯席を設け、茶会の先頭に先考をまつる祭壇を設ける構成が定着していく。席の構成については、単独席が 151 席中 120 席（79.5%）を占め、２席以上からなる席が全体の２割ほど（20.5%）にさらに減少する。その中で、茶席以外の書画展観席や盆栽陳列席にも前席や副席が設けられるようになり、２席以上からなる席の構成にも変化が見られる。席種別に見ると、茶席の減少はさらに進んで全体の４分の１程度（24.9%）となり、書画展観席や盆栽陳列席を含む各種展観席が全体の３分の１（33.3%）を占めるまで増加する。

（４）大正期

試料 40『東山茶会図録』をきっかけに、再び 10 席を超える席を設けた先考追薦の大煎茶会が各地で開催されるようになるが、その大半が単独の席で、前席と茶席の２席以上からなる席はついに全体の２割を切る（16.2%）まで減少する。この頃には大きな煎茶会に抹茶席が１、２席設けられるようになる。席種別では、茶席が再び増加して全体の３割近く（31.4%）を占め、書画展観席や盆栽陳列席を含む各種展観席は明治後半と同じく全体の３分の１（34.3%）を占める。



〔表3-52〕席の構成比較年表

以上から席の構成は、江戸時代から明治前期にかけては前席と茶席を主とした２席以上の席で構成され、茶事に主眼が置かれており、その中で明治前期には盆栽陳列席、展観席、奏楽席、揮毫席、酒席などの多彩な席種が登場し、茶事だけでなく文人の嗜みを煎茶会に取り入れようとした意図が見える。しかし、その後は前席が減少し、代わりに単独の展観席が増加している。これは、茶事よりも道具の鑑賞に主眼が置かれるようになったことで、従来茶席の前席に飾られていた道具が量・質ともに充実し、各種展観席として単独で席を構成するようになったためである。そして、明治末から大正になると、祭壇や模擬店、抹茶席など煎茶席ではない席が煎茶会に設けられるようになる。

第２項　地域別考察

（1）大　阪

煎茶会図録の先駆である史料３『青湾茶会図録』が刊行されるなど、他地域に先駆けて趣向のこらされた煎茶会が開催されている。まず、『青湾茶会図録』では、「青湾茶会第五席肌清副席前席」に瓶花と盆栽が多数陳列されており、席種は前席とするものの、後の茶会で見られる盆栽陳列席の先駆けと考えられる。史料 17『直入翁薦事図録』では抹茶席・揮毫席・酒飯席が、史料 19『分史翁薦事図録』では単独の盆栽陳列席が初めて設けられ、これらは後の各地での煎茶会でも席を構成している。席種別にみると、全 206 席のうち茶席 76 席（36.9%）、前席・副席 53 席（25.7%）、各種展観席 46 席（22.3%）で、他に酒席・酒飯席・模擬店 14 席、奏楽席３席、揮毫席１席、祭壇が５席、抹茶席が４席、その他４席となり、茶席を主としながらも展観席など多彩な席種が均衡よく構成されている。席の構成は複数席が 155 席中 39 席（25.1%）で、複数席の構成は主に前席もしくは副席と茶席からなる。なお、史料 25『墨縁奇賞』は会場を大阪としながらも、主催者が東京の奥蘭田であるため、東京の茶会でよくみられるような、茶会の初めに独立した前席を設けており、さらに盆栽陳列席が登場してから 10 年が経つにも関わらず、盆栽や瓶花を書画展観席の書画の前に陳列している。

（2）京　都

同じ関西の大阪とは異なり、江戸末期から明治時代後半にかけて主に前席と茶席および書画展観席で構成され、大正時代になっても、模擬店や酒席が増えるくらいで盆栽陳列席はほぼ見られない。しかし史料 40『東山茶会図録』はこれら京都の茶会の中で異色を放っており、文具の展観席や盆栽陳列席、古銅器陳列席など展観席が多くみられるな

ど、大阪に近い席の構成をしている。席種別にみると、全139席のうち茶席62席（44.6%）、前席・副席30席（21.6%）、各種展観席28席（20.1%）このうち書画展観席は20席ある。他に酒席・模擬店９席、奏楽席３席、祭壇が３席、抹茶席が３席、その他１席となり、茶席を主として構成されている。席の構成は複数席が107席中30席（28.0%）で、他地域と比較して最も複数席が多くなる。

（3）東　京

明治時代前半までは比較的小規模な茶会しか行われていないが、そのなかで奥蘭田によって大阪で開催された史料25『墨縁奇賞』を含めた、史料23『柳嶋清賞』・24『随意荘雅集録』では、茶会の初めに茶席とも展観席とも異なる単独の席が設けられる。この席の内容は明治末に開催された史料 41『山水清遊会』の「迎賓」に似ていることから、茶会全体における「待合席」と考えられ、関西には見られない東京の特徴といえる。明治時代後半になり史料32『清賞余録』で初めて大規模な茶会が開催され、そこで初めて盆栽陳列席が登場してからは、史料38『盆栽瓶花聚楽会図録』のような、盆栽の陳列会に茶席が設けられた会が開催されるほど盆栽への需要が高まる。また、席の構成は関西に近づき、前席と本席の２席以上で席を構成する席が増加していくが、史料45『楓川追薦録』では茶席だけでなく、展観席にも前席が設けられており、東京の特色といえる。席種別にみると全100席のうち茶席23席（23.0%）、前席・副席14席（14.0%）、各種展観席49席（49.0%）、他に酒席・模擬店６席、奏楽席２席、揮毫席２席、祭壇１席、抹茶席３席となり、道具を鑑賞する展観席が全体の半数以上を占める。席の構成は複数席が86席中13席（15.1%）で、ほぼ単独席で構成されている。

以上から、大阪と京都は同じ関西でありながら、茶席を主とする部分では共通するものの、席の構成は異なる傾向を示している。大阪は茶席を主としながら、他地域に先駆けて趣向を凝らした席を茶会に設け、多彩な内容の煎茶会を開催している。一方、京都では茶事および書画の展観が好まれるが、明治末期以降は盆栽陳列席や模擬店が設けられるようになり、大阪の席の構成に近づく。東京では展観席が大半を占めており、茶事より道具を鑑賞することに主眼が置かれていたようである。

第３項　複数の席からなる席の各席の内容および関係

本節では煎茶会図録に記載された席の中でも、特に複数の席から構成される席について地域的な比較を行い、個々の席の内容とそれらの関係性を明らかにする。

（1）大　阪

江戸末期の史料３『青湾茶会図録』では複数の席からなる席が多い。すべての前席・副席が床を設けて、多種の道具を飾る展観席となり、茶席が床を設けず茶具のみを置いて茶事を楽しむ構成となっており、この関係性は史料８『青湾茗醼図誌』にも受け継がれる。一方で菓子器に注目すると、前席に菓子器を置いて、前席で菓子をいただいた後に茶席で茶を喫するという、両者を一体に捉える関係性をもつ席もあり、この関係性は史料 17『直入翁寿筵図録』でも確認できる。しかし、史料 19『分史翁薦事図録』ではこうした席の関係性は見られなくなる。その要因として、単独の展観席の登場、茶席に床を設けるようになったことの２点があげられる。単独の展観席の登場によって前席は道具の鑑賞の場でなくてよくなった上、茶席に床を設けるようになったことで茶席にも道具を飾るようになり、前席に置かれる道具が減少し、床を設けない前席も出現する。この後は単独の展観席の増加によって、複数席はほぼ見られなくなり、再び複数席が登場するのは史料 43『澱江茗醼図録』である。この頃から複数席は「待合席」と茶席の２席以上で構成されるようになるが、待合席の内容を見ると展観席を思わせ、江戸末期から明治時代前半頃の前席が名前を変えたものと考えられる。そして史料 44『雨竹居士薦事図録』以後、前席に文具を載せた平机、茶席の床には掛軸・香炉・瓶花、床柱に仏具というように、道具の配置が固定化をみせる。

（2）京　都

初めに複数席が登場する史料１『茗醼品目』では、前席に床はなく、多種の道具を机上に飾り、茶席に床を設けて掛軸・花具のみを飾っており、前席を展観席とし、茶席では茶事を楽しむ構成となっている。この関係性は江戸末期から明治時代前半にかけての大阪と似るが、京都ではその後史料 12『遺馨録』にしか見られない。

京都の流れの原点は史料９『円山勝会図録』である。前席および茶席ともに床を設けて、前席には書画と花具くらいを飾って茶席の待合とし、茶席の床も少しの道具を飾るくらいで茶事を楽しむことに主眼を置いている。この関係性は、史料 16『雲烟供養図録』において一時的に茶席と「副席」に変化するが、史料 46『亦復一楽茶会図録』まで、京都で開催された茶会に一貫して見られる。

ただし、この流れの中で史料 40『東山茶会図録』は他と異なる構成を見せる。前席に仏具を中心とした多種の道具を飾り付けて展観席とし、さらに数席の茶席では多種の道具を飾っており、茶事とともに道具の鑑賞も楽しもうとする意図がうかがえる。

（3）東　京

他の地域と比較すると、東京では複数席が少なく、明治前半の史料 18『追遠薦新図録』で本席と副席の２席からなる席が初めて見られる。この副席は本席（文具の展観席）の補助的な席であり、席の内容も本席と同じ文具の展観席となり、副席として独自の要素は見られない。この関係性は、大正期の史料 45『楓川追薦録』でも見られ、前席が書画展観席・盆栽陳列席とも複数の席を構成するようになり、前席にも本席の内容に沿った道具を飾っていることから、前席は本席の補助となっている。

（4）愛　知

１つの茶会の中でも前席・副席の内容が統一されておらず、地域的な傾向はつかめなかったが、個別に前席・副席の内容を見ていくと、茶席の待合として用いられたり、道具が多数置かれて展観席とされており、京阪寄りの席の構成と言える。

以上、前席および副席と本席との関係性は地域によって違いがあり、東京では、前席および副席が本席の補助的な席として用いられている。京都では、前席は茶席の待合のように用いられ、茶席も過度な装飾はされず、茶事を楽しむことに主眼をおいた構成で、両者の関係性は時代が変わってもほぼ一貫している。一方大阪では、時代を追うごとに関係性が変化していく。江戸末期から明治時代前半では、前席と茶席を一体で茶事の場として捉える構成や、前席・副席を道具で飾って展観席とし、茶席では茶事を楽しむ構成が見られる。そして、明治時代前半のうちに茶席で道具の鑑賞も行われるようになり、茶事より道具の鑑賞に関心が移る中で、単独の展観席の登場を機に複数の席からなる席はほぼ姿を消す。明治末期には再び複数席が出現しているが、展観席としての前席が待合席へと名を変えたもので、飾られる道具が固定化を見せる。

第３節　会場

本節では、煎茶会図録に収録された会場について分析することによって、煎茶会で好まれた場所やその要因を明らかにする。

まず、各図録における煎茶会の会場についての記述をみると、多数の会場に席を設けた比較的大規模な茶会の図録では、江戸時代末期から明治末期頃まで、席毎の目録に会場が記載される。史料３『青湾茶会図録』第一席の目録には「第一席喉潤　大長精舎／茗主　田能村小齋／(略)」(／印改行、以下同）と記されており、第一席の会場が網島の大長寺であったことがわかる。同様の記述は、史料８『青湾茗醼図誌』・９『円山勝会図録』・16『直入翁寿筵図録』・17『雲烟供養図録』・19『分史翁薦事図録』・38『盆栽瓶花聚楽会図録』・39『梅村寿筵図録』・40『東山茶会図録』・46『亦復一楽茶会図録』でみえる。この記載方は、地方で開催された小規模な茶会の図録でも参考にされたと考えられ、史料 14『舟皐山房小集雑記』・15『深志茗讌図録』・20『清娯軒茶筵図録』・21『招鶴亭茗醼図録』・28『淇水翁薦事図録』・35『掲燈院小祥薦事会記』でも、席毎の目録に会場が記載されている。明治末期以降は、史料 43『澱江茗醼図録』(明治 42 年、1909)で巻頭に「席次／第一席　靈前　祭主　山中與七／山中繁次郎／(略)／第六席　煎茶　茗主　高山中簪篁堂／掛幅及茶具悉係先人遺愛品／右六席設鮒宇樓／(略)」とあり、巻頭にまとめて記載した席次から、第一席から第六席までの会場が鮒宇楼であったことが分かる。同様の記述は史料 45『楓川追薦録』[注1)]・48『角山簪篁翁薦事図録』・49『昌隆社五十周年記念茗讌図録』・51『学温園茶会図録』でみえる。一方、１箇所もしくは少数の会場で完結する小規模な茶会の図録では、序文や跋文等の文中に会場が記載される。史料 11『藤本鐵石先生薦場餘禄』の序文に「〇祭藤本鉄石君文　本城温／維明治十二年五月十一日。友人本城温與令嗣彦／衛及舊友諸士謀。設位於浪華博物塲。(略)」とあり、浪華博物塲（大阪博物場）が会場とわかる。以上のように各図録では、煎茶席の会場について詳細に記載しているため、各席の挿図がどこの会場を描いたものか明確に知ることが出来る。

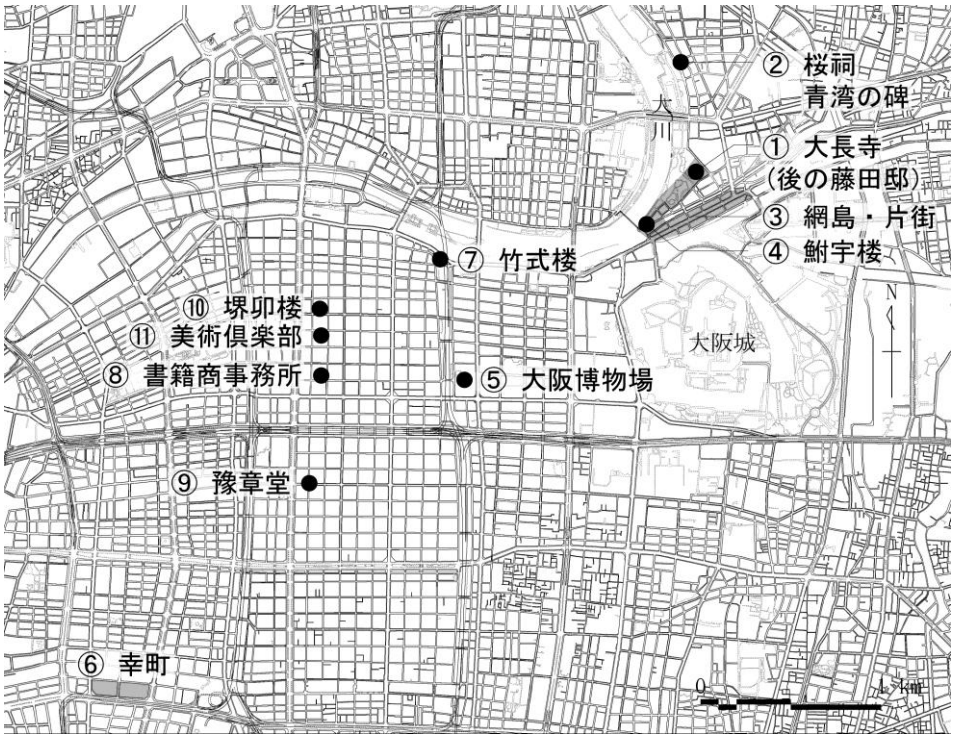
各図録にみえる煎茶会の会場を〔表 3-53〕に示す。このうち、場所が分かる会場については、地図に位置を落とし込んだ〔図 3-1～3〕。これをみると第２章４節において、煎茶会が盛んに行われたことが明らかになった大阪、京都、東京、名古屋の４地域のうち、大阪では青湾すなわち網島と船場界隈、京都では東山の円山近辺、東京では隅田川

〔表3-53〕煎茶会の会場

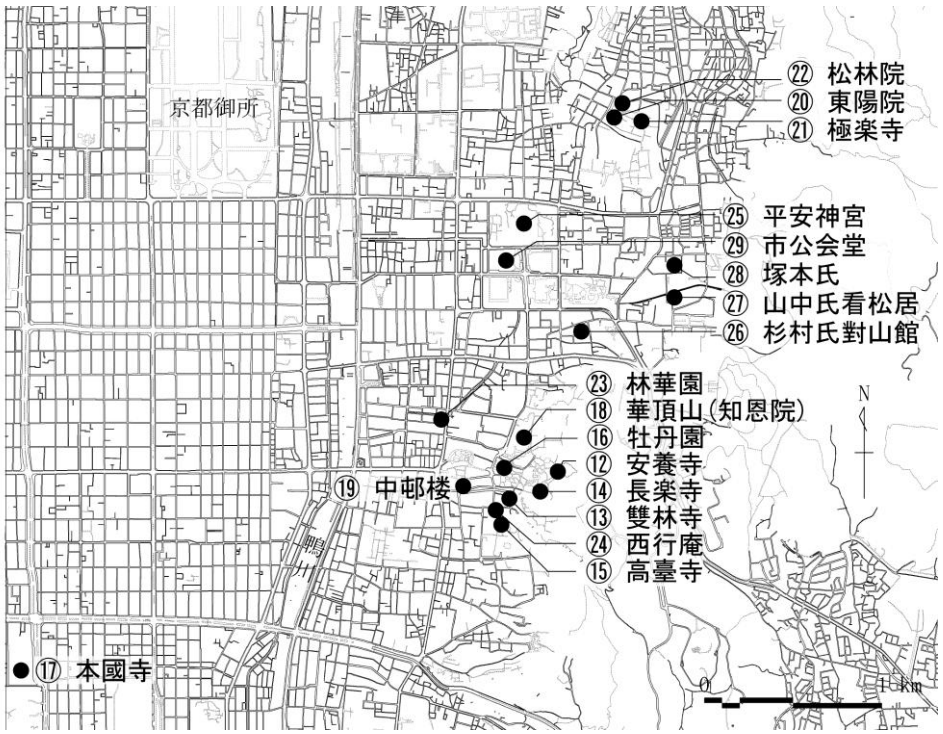
	No.	Title/史料名	Publication /刊行年		Site/会場
Osaka/大阪	3	Seiwanchakaizuroku/青湾茶会図録	1863	文久３	①**Daichoji/大長精舎**,②**OhshiKagurajo/桜祠神楽場**, ③*Kawaguchi,Saito,Kawamada,Kusama villa/川口氏別業,斎藤氏別業,川真田氏別業,草間氏別業・楼上*,②*Ohshi priest Yamamoto house,Syunsyutei,Iketei,Main house,Kayatei/桜祠祠官山本氏・春秋亭・池亭・正屋・茅亭*, Rotei/楼亭,Temporaly store/仮厳,Naniwamaru,Tendo,Ume(Boat)/浪花丸・天洞・梅(舟),Hookushuseki/蓬屋贅席
	8	Seiwanmeienzushi/青湾茗醾図誌	1876	明治９	③*Tatsumi,Shirayama,Noda villa/巽氏別業,白山氏別業,野田氏別業*,③*Yasuda house/安田氏邸*, ④Funauro/鮒宇楼,Seiwansaryo/青湾茶寮,Boat/舟,Moshuro/網州楼
	11	Fujimototessekisenseisenjoyoroku/ 藤本鐵石先生薦場餘録	1879	明治12	⑤Osaka Museum/大阪博物場
	16	Chokunyuojuenzuroku/直入翁寿筵図録	1880	明治13	⑥*Hirooka villa/広岡氏別荘*,Seikantei/清閑亭,Iketei/池亭,Saikaen/菜花園,Santei/山亭,UneitoseiRojo/雲影濤聲楼上, ⑥Fujii tea room/藤井茶室,Suichikuro/水竹楼
	19	Bunshiosenjizuroku/分史翁薦事図録	1883	明治16	①**Daichoji/大長寺**,③**Tokuryuji/徳龍寺**,③**Komyoji/光明寺**,③*Komuro,Kawakami house/小室氏,河上氏*, ③*Shirayama,Kawamada,Togo villa/白山氏別墅,川真田氏別墅,東呉氏別墅*,④Funauro/鮒宇楼,Boat/舟
	25	Bokuenkisho/墨縁奇賞	1893	明治26	④Funauro/鮒宇楼
	34	Chikusochaenzuroku/竹荘茶醾図録	1899	明治32	⑦Takeshikiro/竹式楼
	36	Kenkadoshi/兼葭堂誌	1901	明治34	⑧Book office/書籍商事務所
	42	Yoshodomeienzuroku/豫章堂茗讌図録	1909	明治42	⑨*Yoshodo/豫章堂*
	43	Denkomeienzuroku/澱江茗醾図録	1909	明治42	③*Kishi,Iwasaki house/貴志氏邸,岩崎氏邸*,③*Inoue villa/井上氏別業*,④Funauro/鮒宇楼,③Seiwan Bank/青湾堤
	44	Uchikukojisenenzushi/雨竹居士薦筵図誌	1913	大正２	*Kimura house/木村氏邸*,⑩Sakaiuro/堺卯楼
	48	Kakuyamashunkoosenjizuroku/ 角山簪筮翁薦事図録	1922	大正11	①*Fujita old house/藤田氏旧邸洋館*,④Funauro/鮒宇楼
	49	Shoryusha 50th anniversary meienzuroku/ 昌隆社五十周年記念茗讌図録	1926	大正15	⑩*Uno house(Sakaiuro?)/鵜野氏邸・別館(堺卯楼ヵ)*,⑪Art club/美術倶楽部
	50	Sokenankinenmeienzuroku/雙軒庵記念茗讌図録	1926	大正15	⑩Sakaiuro/堺卯楼
Kyoto/京都	1	Meienhinmoku/茗讌品目	1852	嘉永５	Kounen/耕雲園,Suisosangeinosha/水送山迎之榭
	2	Shunsenyoji/春薦餘事	1860	万延元	⑫AnyojiTafukuan,Hashinoryo/安養寺多福庵・端寮
	9	Maruyamashokaizuroku/円山勝会図録	1876	明治９	⑬**SorinjiMonami/雙林寺文阿弥**,⑭**ChorakujiBaishitei/長楽寺梅枝亭**,⑮**KodaijiShorinin/高臺寺松林院**, ⑮*Kodaijikita certain villa/高臺寺北某氏別業*,⑫AnyojiTafukuan,Hashinoryo,Shoami,Saami/安養寺多福庵・ 端寮・正阿弥・左阿弥,Fujidanatei/藤架亭,⑯BotanenBettei/牡丹園別亭,OgaiSuiro/鴨崖水楼
	12	Ikeiroku/遺馨録	1880	明治13	⑰**Honkokuji/本國寺**
	17	Unenkuyozuroku/雲烟供養図録	1880	明治13	⑱**KachozanHojo/華頂山方丈**,*Horiuchi house/堀内氏*,⑫AnyojiHashinoryo/安養寺端寮,⑲Nakamuraro/中邨楼, ⑯Botanen/牡丹園,Fujidanatei/藤棚亭
	27	ChikudoChikukeiokenpisenjiyoroku/ 竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	1894	明治27	⑳**ShinnyodoToyoin/真如堂東陽院**,㉑**GokurakujiHojo/極楽寺方丈**,**Kenshindo/見眞堂**, ㉒**Shorinin/松林院**
	31	Shingakukinsho/清楽欣賞(中邨楼茶会)	1896	明治29	⑲Nakamuraro/中邨楼
	37	Rinkaensenjizuroku/林華園薦事図録	1903	明治36	㉓*Rinkaen/林華園*
	40	Higashiyamachakaizuroku/東山茶会図録	1908	明治41	㉔**Saigyoan/西行庵**,⑮**KodaijiKorinin/高臺寺岡林院**,*Inagaki villa/稲垣氏別業*, ⑫AnyojiSaami/安養寺左阿弥,⑲Nakamuraro/中邨楼,Sanso/山荘,Suikintei/水琴亭,Hakusuiro/白水楼
	46	Matamataichirakuchakaizuroku/ 亦復一楽茶会図録	1918	大正７	㉕**Heianjingu/平安神宮**,㉖*SugimuraTaizankan/杉村氏對山館*,㉗*YamanakaKanshokyo/山中氏看松居*, ㉘*Tsukamoto house/塚本氏*,㉙Kyoto-shi public hall/京都市公会堂
Tokyo/東京	5	Kindoyoin/金洞餘音	1870	明治３	㉚Nakamuraro/中邨楼
	6	Shinkosyogatenkanmokuroku/(新古書画展観目録)	1873	明治６	Unknown/不明
	7	Kumagaisuikokojituifukusyogatenkanroku/ 熊谷酔香居士追福書画展観録	1875	明治８	㉛*Aidaisonso/欸乃邨荘*
	18	Tsuiensenshinzuroku/追遠薦新図録	1883	明治16	㉛*Aidaisonso/欸乃邨荘*
	23	Ryutoseisho/柳嶋清賞	1887	明治20	㉜Hashimotoro/橋本楼
	24	Zuiisogashuroku/随意荘雅集録	1889	明治22	㉝*Zuiiso/随意荘*,Boat/舟
	32	Seishoyoroku/清賞余録	1898	明治31	㉞Ohundai/桜雲台,㉟Shogenro/松源楼
	33	Manokakoenshi/万翁華甲醾誌	1898	明治31	㉟Shogenro/松源楼
	38	Bonsaiheikajurakukaizuroku/盆栽瓶花聚楽会図録	1903	明治36	㊱Konohanaen/古能波奈園,Ikahoonsen/伊香保温泉
	39	Baisonjuenzuroku/梅村寿筵図録	1903	明治36	**Joenji/常円寺**,*Kurien/栗園*,*Iida house/飯田丈之助別室*
	45	Fusentsuisenroku/楓川追薦録	1916	大正５	㊲Shinfukuiro/新福井楼,㊳Nihonbashi club/日本橋倶楽部,㊵Art club/美術倶楽部（旧中邨楼）
Other Area/その他	4	Chakyoitiraku/茶郷一楽	1865	慶応元	**Komyoji/光明寺**
	13	Shogasenchashingakuzuroku/書画煎茶清楽図録	1880	明治13	**Gokurakuji/極楽精舎**
	20	Seigokenchaenzuroku/清娯軒茶筵図録	1883	明治16	*Seigoken/清娯軒*
	21	Shokakuteimeienzuroku/招鶴亭茗醾図録	1886	明治19	*Shokakutei/招鶴亭*,*Santei/山亭*,*Suiro/水楼*
	26	Suikazushi/酔花図誌	1893	明治26	**Zenfukuji/善福寺**
	28	Kisuiosenjizuroku/淇水翁薦事図録	1894	明治27	*Shokakutei/招鶴亭*,*Hansukyo/半洲居*,*Hokugakuro/北岳楼*,*Choshokan/聽松館*,*Keigyodo/敬業堂*
	51	Gakuonenchakaizuroku/学温園茶会図録	1926	大正15	**Zuihoin/瑞芳院**,*Rinbe house/林兵衛本宅・別邸*,*Rinemon villa/林右衛門別邸*
	10	Kuritanigakairyakushi/栗渓雅会略誌	1878	明治11	Tottori/鳥取	**Kozenji/興禅寺**
	14	Shukosanboshoshuzakki/舟阜山房小集雑記	1880	明治13	Kagawa?/香川	*Shukosanbo/舟阜山房*,*Rokasensuiro/蘆花浅水楼*,*Tonkahinsenkyo/遁窩品泉虚*
	15	Fukashimeienzuroku/深志茗讌図録	1880	明治13	Nagano/長野	**Seiryuzenji/青龍禅寺**,Kinsuitei/琴水亭,Shofutei/松風亭
	22	Baisensenseikokientenkanroku/ 楳仙先生古稀筵展観録	1886	明治19	Fukuoka/福岡	Unknown/不明
	29	Rokomeienzuroku/老古茗筵図録	1896	明治29	Wakayama/ 和歌山	Shibikan/四美館
	30	Sekichiotsuifukutenkanroku/石癡翁追福展観録	1896	明治29	Nagasaki/長崎	**Choshoji/長照寺**
	35	Keitoinshojosenjikaiki/揭燈院小祥薦事会記	1899	明治32	Shiga?/滋賀	**Nagahamabetsuin Daitsuji/長浜別院大通寺**,**Ganzanken/含山軒**,*Shimogo,Kimura house/* 下郷邸,木村邸,Koyokan/向陽館,Sosuikan/叢翠館,Suiryukan/水柳館,Tekisuikan/滴水館, Kinuntei/錦雲亭,Rokuinro/渌飲楼
	41	20th Sansuiseiyukai/第二十回 山水清遊会	1908	明治41	Gifu/岐阜	Banshokan/萬松館
	47	Keisonosenjizuroku/渓村翁追薦図録	1920	大正９	Yamagata/山形	**Jorinji/定林寺**,Taiyokan/對葉館

Bold：Shrine&Temple/社寺, *Italic*：Residence/個人邸, Underline：Restaurant/料亭, Normal：etcetera/その他
Enclosed Alphanumerics：Number in the Map

沿岸と上野というように、地域毎に好んで煎茶会が開催された場所があることがわかる。以下、地域毎に詳述する。



〔図 3-1　大阪における煎茶会の会場〕



〔図 3-2　京都における煎茶会の会場〕

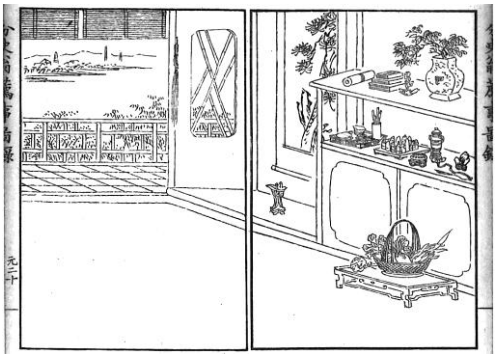
〔図 3-3　東京における煎茶会の会場〕

（1）大　阪

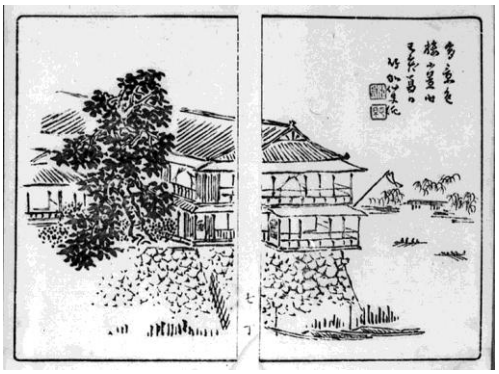
まず大阪についてみると、史料３『青湾茶会図録』では網島の大長寺や桜宮の宮司山本氏邸など、寺院や社家が会場となっている。また、同じく網島や片街の個人邸も複数用いられており、こうした個人邸は、その後の大茶会でも主な会場とされた。史料 48『角山簪篁翁薦事図録』では、もともと大長寺があった場所に、実業家の藤田伝三郎が建てた邸宅（現在の藤田美術館）が大々的に使われた。他に網島で頻繁に用いられたのが、史料８『青湾茗醼図誌』で登場する料亭「鮒宇楼」で、ここは史料 19『分史翁薦事図録』・25『墨縁奇賞』・43『澱江茗醼図録』・48『角山簪篁翁薦事図録』でも会場となった。

以上のように幕末から大正まで網島の地が好まれた理由として、第一に淀川（現在の大川）を臨む優れた景観が挙げられる。〔図 3-4〕は史料 19『分史翁薦事図録』の茶会で鮒宇楼に設けられた茶席の様子であるが、窓の外に対岸の造幣局の煙突が描かれており、茶席から淀川の流れを眺めていたことがよくわかる。この優れた景観によって当時網島には、富裕層の別邸や雅人の閑居、料理屋などが点在し、それらが茶会の会場とされたのである。また、水辺という会場設定によって、舟上に茶席を設け、清風の茶を一層楽しんだのであろう。加えて、水質の良さによって古くは豊臣秀吉の頃から茶の湯に用いられ、史料３『青湾茶会図録』の著者田能村直入により煎茶にとってシンボル的な「青湾之碑」がこの地に建てられたことも、大きな要因の一つと考えられる。

明治後半からは網島に加え、町人文化の中心であった船場でも煎茶会が開催されるようになる。史料 34『竹荘茶醼図録』では今橋の「竹式楼」（多景色楼とも書く。〔図 3-5〕）、史料 44『雨竹居士薦筵図誌』では、当時の東区平野町四丁目に位置していた「船場堺卯楼」といった料亭の記載がみられ、堺卯楼は史料 50『雙軒庵記念茗醼図録』でも会場となっている[注2]。このように、煎茶会の会場が水辺の網島から船場へと移ってきたことは、茶会の目的が、優れた景観を眺めながら茶を喫することに加え、道具や書画の鑑賞にも重きをおいた茶会へと変化していったことを感じさせる。



〔図 3-4〕『分史翁薦事図録』網島の風景



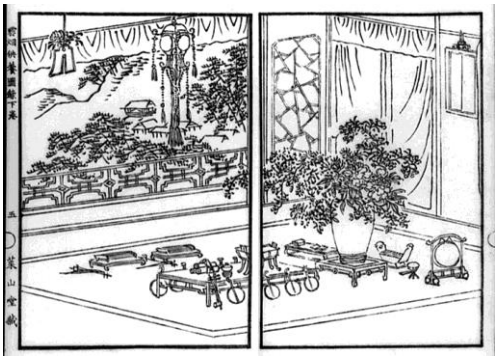
〔図 3-5〕『竹荘茶醼図録』竹式楼

（2）京　都

次いで京都についてみると、社寺に関係する会場が大半を占める。史料２『春薦餘事』には円山の花洛庵重阿弥を示す「端寮（はしのりょう）」、「多福庵」也阿弥の名がみえる。史料９『円山勝会図録』にはそれらに加えて、勝興庵「正阿弥之別亭」、長寿院「左阿弥之楼上」など、安養寺塔頭の六阿弥坊の記載があり、さらに近辺の塔頭「雙林寺文阿弥」「長楽寺梅枝亭」「高臺寺松林院」の名もみえる。また「藤架亭」「牡丹園」も会場とな

っており、これらはその後も史料 17『雲烟供養図録』・40『東山茶会図録』で会場となっている。他に会場として頻出するのは、祇園にある老舗料亭「中邨楼」で、史料 31『清楽欣賞』ではここだけを会場として茶会が行われた。そして史料 46『亦復一楽茶会図録』では、円山から少し北にある、南禅寺界隈の個人別荘や「平安神宮」「京都市公会堂」が会場となった。

京都においても、頼山陽が鴨川畔に煎茶席の山紫水明処(文政 11 年、1828)を建てており、煎茶会図録では史料９『円山勝会図録』に「鴨崖水楼」がみえるなど、水辺も好まれた。一方で、主に円山近辺から祇園にかけても会場として好まれた。これは、ここで売茶翁が売茶活動を始めた煎茶ゆかりの地であることが大きな要因と考えられる。加えて、西に京都市内を一望できる眺望の良い場所〔図 3-6〕であることも、この地が好まれる要因といえよう。また大正期には範囲を北へ拡大し、南禅寺界隈の別荘も会場とされた。この地は、明治 23 年(1890)に琵琶湖疎水が竣工したのに伴い、邸内に水を引き込んだ別荘が近代数寄者等によって建てられた。彼らは文化人であり、煎茶も好んだことが知られる。



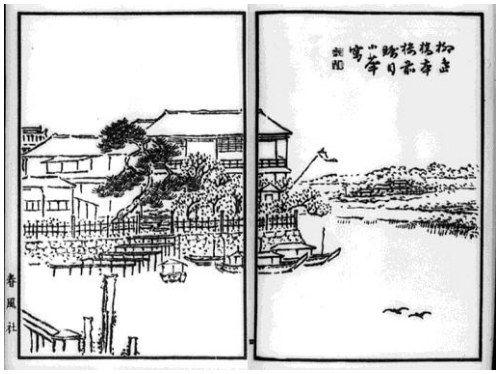
〔図 3-6〕『雲烟供養図録』開口部からの眺望

（3）東　京

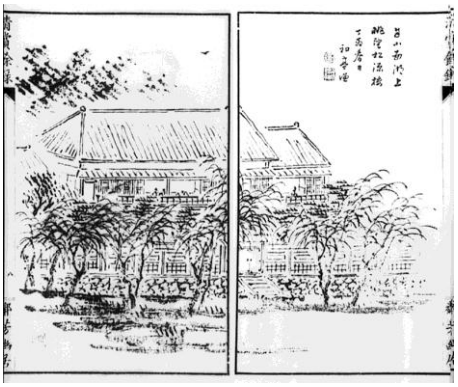
東京についてみると、社寺を会場とすることはほぼなく、料亭や個人邸が会場となっている。史料５『金洞餘音』にみえる「中邨楼」は後に史料 45『楓川追薦録』で用いられた「東京美術倶楽部」となった料亭で、隅田川に架かる両国橋の東に位置した。隅田川沿いは、その後も史料７『熊谷酔香居士追福書画展観録』・18『追遠薦新図録』にみえる「欸乃邨荘」や、史料 24『随意荘雅集録』の橋場の「随意荘」、史料 45『楓川追薦録』の浜町の「日本橋倶楽部」、茅場街の「新福井楼」が会場となった。川沿いという点では、史料 23『柳嶋清賞』の「橋本楼」も北十間川と横十間川が交わる場所にあり、その姿は

歌川広重の『名所江戸百景』（安政３－５年・1856-1858）「柳しま」にも描かれている。このように川沿いが好まれたのは、大阪の網島と同じく、やはり川を臨む優れた景観が要因と考えられる〔図 3-7〕。

同様に水辺の景観が好まれたと考えられる会場に上野がある。史料 32『清賞余禄』で「小西湖畔松源楼」「東叡山桜雲台」が用いられ、松源楼は史料 33『万翁華甲醼誌』でも用いられた〔図 3-8〕。不忍池を中国の西湖になぞらえて小西湖と称していることからも、その景勝が好まれたのであろう。



〔図 3-7〕『柳嶋清賞』橋本楼

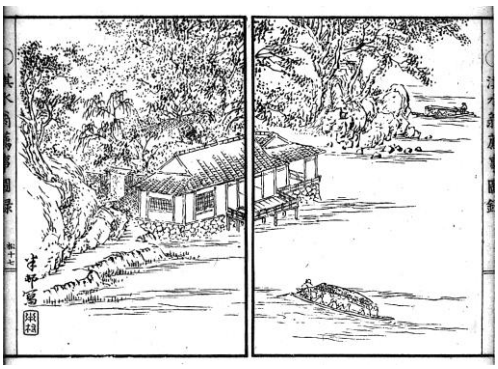


〔図 3-8〕『万翁華甲醼誌』松源楼

（4）その他の地域

地方をみると、追薦目的の茶会の多くは寺院が会場となる。その他の茶会でも寺院もしくは個人邸が会場となり、料亭はほぼない。これは茶会の規模がそれほど大きくないため、一つの寺院で煎茶会を開催出来たり、地方の有力者が自邸を会場としたためであろう。また、大阪や東京のように川を臨む会場はみられないが、史料 14『舟皐山房小集雑記』の「遁窩品泉處」〔図 3-9〕や 28『淇水翁薦事図録』の「水亭」（21『招鶴亭茗醼図録』の「水楼」と同じ。〔図 3-10〕）は、邸内の池に臨む建物であり、図録にその外観が掲載されている。

〔図 3-9〕『舟皐山房小集雑記』遁窩品泉處



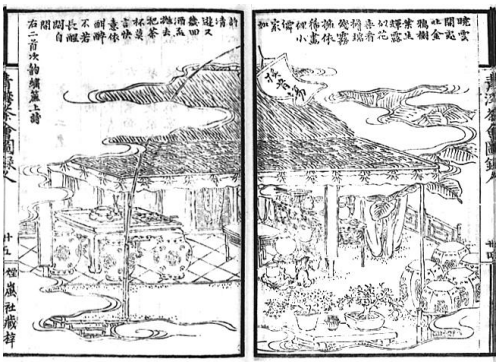
〔図 3-10〕『淇水翁薦事図録』水亭

（5）多彩な会場

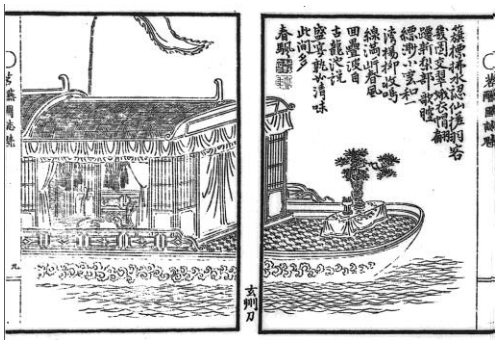
他に注目したい会場として、史料１『茗讌品目』の「水送山迎之榭」、史料３『青湾茶会図録』の「蓬屋甃席」、史料８『青湾茗醼図誌』の「青湾茶寮」がある。これらはすべて床に磚を四半敷した開放的な亭で、後ろ２つは草葺き屋根の建物である[注3)]。机と榻（トン）とよばれる中国で用いられる陶磁器製の太鼓状の腰掛けを設置して、茶会の際に庭園を眺めながら茶を喫することのできる中国趣味あふれる空間を設けたことが挿図からわかる〔図 3-11〕。なお、史料３『青湾茶会図録』の「蓬屋甃席」は、後青湾茶会の第七席の目録の末尾に「此席假構小亭。於櫻祠西畔苔蘚浄處。葺／蓬布甓。設廡移蕉。以遮日光。玉琴着黄衣／載烏帽倚榻。其趣可入詩畫」とあり、茶会で臨時に建てた仮設の亭であったことが分かる。同図録には、青湾茶会の第六席の目録末尾に「此席新構假廠。於青湾碑後。葺蓬為屋。垂／簾為障。以簡易新潔為主。僅容五客。（後略）」とあり、客五人が入れる程度の小さな廠を茶会に合わせて新築したことが分かる。同類の建物は、大正期の史料 48『角山簪篁翁薦事図録』の第十三席に、屋根が草葺き、柱が竹、壁が網代の東屋が確認でき、やはり腰掛けの榻が置かれている。

また、舟を会場として用いた茶会もある〔図 3-12〕。史料３『青湾茶会図録』の第四副席「船房俗曰浪花丸」、第六副席「船房俗曰天洞」、後青湾茶会第一席「船房俗曰紅梅」、史料８『青湾茗醼図誌』の第十一席（奏楽席）・第十二席、史料 24『随意荘雅集録』の第六席・第七席（奏楽席）、これらはすべて舟を会場とし、特記のないものは茶席である。このような煎茶会の影響を受けてか、京都南禅寺界隈の野村碧雲荘には、茶室三畳台目・水屋二畳からなる屋形船形の蘆葉舟（大正 10～昭和３年・1921～1928）という茶室がある。

このように茶会の開催にあわせて仮設で茶亭を構えていることは、まさに売茶翁高遊外の売茶活動における「通仙亭」に通じるところである。加えて、舟という可動する会



〔図 3-11〕『青湾茶会図録』蓬屋甃席



〔図 3-12〕『青湾茗醼図誌』船

場が用いられたことは、船上で茶宴を楽しんでいた中国文人への憧憬の表れもあるが、何より建物から解放された自由な茶事を表現したとも捉えることができる。特に初期の煎茶会においては、茶の湯への批判から、炉の存在によって茶事と建築が密接に関係する茶の湯に反発するように、こうした会場が選択されたのではないだろうか。いずれにしても、会場の多彩さから、趣向を凝らした茶会が開かれたことがわかる。

注 1）席次とせず、例言内でまとめて記載している。
注 2）鵜野氏邸は堺卯楼(鵜野卯兵衛)を指す可能性がある。
注 3）『茗讌品目』の「水送山迎之榭」は、挿図に屋根が描かれていないため、屋根葺材は不明。

第４節　席　主

次いで席主について見ていく。多くの茶会が先考の追薦を目的としているため、主催者やその肉親が茶席の席主をつとめることが多いが、他に展観席を中心として京阪では大阪の骨董商山中箸篁堂や骨董商の結社である昌隆社、京都の香具商熊谷鳩居堂・骨董商岩田秋竹堂が、東京では骨董商の松井楓川亭が中心的人物として見られる。彼らは明治初期から大正にかけてそれぞれ６つを超す茶会で席主をつとめ、自身が主催する大煎茶会も開催している。彼らが主催の煎茶会は、山中箸篁堂が史料８『青湾茗醼図誌』・43『澱江茗醼図録』・48『角山箸篁翁薦事図録』、昌隆社が史料 49『昌隆社五十周年記念茗讌図録』、熊谷鳩居堂が史料２『春薦余事』・９『円山勝会図録』、岩田秋竹堂が史料40『東山茶会図録』、松井楓川亭が史料 45『楓川追薦録』である。彼らは初めこそ主催者の意向によって席主を務める立場であったが、回を重ねるごとに採長補短したであろうことは想像に難くなく、後には主催者に助言する立場を担うようになったと考えられ、当時の煎茶界において大変大きな影響力を持っていたことがうかがえる。

一方地方では、京阪の煎茶会でもその名が見られる、高松の石田廬・長椿堂や、長崎の池島村泉が地元の煎茶会でも席主をつとめており、彼らを介して京阪の煎茶文化が各地方に伝えられたと考えられる。

他に、大阪の史料 19『分史翁薦事図録』、東京の史料 38『盆栽瓶花聚楽会図録』における両地での盆栽商の登場も注目される。彼らは煎茶の隆盛とともに高まった盆栽の需要によって、各地に先駆けてまず大阪に誕生しており、大阪では三木三樹園・植田梅丈園・村上一樹園が煎茶会の盆栽陳列席の担当としてたびたび登場する。その後東京でも木戸孝允、伊藤博文、渡辺千秋などの有力者が、出入りの植木屋や庭園師の中から盆栽の専業者を養成し、東京の煎茶会にも登場する村田香樹園・木部苔香園・清水清大園を生んでいる。

また、楽器の演奏という特殊な技能を要する奏楽席では、平井連山・長原梅園の姉妹の名がたびたび登場し、史料８『青湾茗醼図誌』・13『書画煎茶清楽図録』・16『雲烟供養図録』など、京阪を中心に愛知まで活躍のフィールドは広い。

〔表3-54〕複数の図録で席主を手掛けた人物

| 活動拠点/屋号/登場回数 | 史料名/開催地/刊行年 | | 1 茗讌品目 | 2 春薦余事 | 3 青湾茶会図録 | 4 茶郷一楽 | 5 金洞余音 | 6 新古書画展観目録 | 7 熊谷酔香居士追福書画展観録 | 8 青湾茗醾図誌 | 9 円山勝会図録 | 10 栗渓雅会略誌 | 11 藤本鉄石先生薦場余録 | 12 遺馨録 | 13 書画煎茶清楽図録 | 14 舟阜山房小集略記 | 15 深志茗讌図録 | 16 直入翁寿筵図録 | 17 雲烟供養図録 | 18 追遠薦新図録 | 19 分史翁薦事図録 | 20 清娯軒茶筵図録 | 21 招鶴亭茗醾図録 | 22 樸仙先生古稀筵展観録 | 23 柳崎清賞 | 24 随意荘雅集録 | 25 墨縁奇賞 | 26 酔花図誌 | 27 中林竹洞竹渓翁建碑薦事余録 | 28 洪水翁薦事図録 | 29 老古茗筵図録 | 30 石瘕翁追福展観録 | 31 清楽欣賞（中郁楼茶会） | 32 清賞余録 | 33 万翁華甲醾誌 | 34 竹荘茶醾図録 | 35 掲燈院小祥薦事会記 | 36 蒹葭堂誌 | 37 林華園薦事図録 | 38 盆栽瓶花寮楽会図録 | 39 梅村寿苑図録 | 40 東山茶会図録 | 41 第二十回山水清遊会 | 42 豫章堂茗醾図録 | 43 澱江茗醾図録 | 44 雨竹居士薦筵図誌 | 45 楓川追薦録 | 46 亦復一楽茶会図録 | 47 溪村翁追薦図録 | 48 角山簪篁翁薦事図録 | 49 昌隆社五十周年記念茗讌図録 | 50 雙軒庵記念茗讌図録 | 51 学温園茶会図録 |
|---|---|---

第５節　小結

以上、煎茶会図録 51 本について、煎茶会の構成、席種とその関係性、会場、席主に注目して分析を行った結果、次のことを明らかにすることができた。

ⅰ．席種は、時代的には江戸末期から明治前半は前席と茶席を主とした２席以上の席で構成され、茶事に主眼が置かれていた。明治前半は盆栽陳列席、奏楽席、酒飯席などの多彩な席種が登場し、文人の嗜みを茶会に取り入れようとした意図が見える。その後、道具の鑑賞に関心が移り、前席の道具が量・質ともに充実し、単独の展観席を構成するようになった。明治末から大正には、模擬店、抹茶席など煎茶席でない席が設けられるようになる。

ⅱ．地域的には、大阪と京都は茶席を主とするが、大阪は趣向を凝らした席を設けて多彩な内容の煎茶会を開催しているのに対し、京都では古くから茶事および書画の展観が好まれている。東京では展観席が大半を占めており、高価な道具を鑑賞することに主眼が置かれていたと考えられる。

ⅲ．複数の席からなる席は、地域差が見られる。東京では前席および副席が本席の補助的な席で用いられており、京都では、前席は茶席の待合のように用いられる。大阪では、明治前期まで前席と茶席を一体で捉えたり、前席・副席を展観席とするが、明治前期のうちに茶事より道具の鑑賞に関心が移る中で、複数の席からなる席はほぼ姿を消す。明治末に再び登場した複数席は、前席が待合席に変化し、飾られる道具が固定化を見せる。他地域は、京阪寄りの傾向が見られる。

ⅳ．会場は、寺院・社家や個人邸、料亭が多く使用され、楼上から眺望を楽しめる建物が好まれた。大阪は青湾の網島、京都は東山の円山近辺や南禅寺界隈、東京は隅田川沿岸や上野の不忍池（小西湖）というように、各地域における景勝地で、特に水辺を好んで煎茶会が開催された。

ⅴ．席主は、茶会の主催者やその親族がつとめることが多い。江戸末期に数席ながら骨董商が煎茶会に参加したことで、後に彼らが主催して鑑賞に主眼を置いた茶会が開催され、その流れの中で盆栽商など道具の専門家が出現し、単独の展観席が増加した。

第４章

煎茶席の建築的特質

第４章　煎茶席の建築的特質

煎茶会図録にみられる煎茶会の会場は、第３章３節で述べたとおり、寺社、個人邸、料亭などであり、必ずしも煎茶の茶事にのみ使用する煎茶専一の空間ではなく、既存の座敷を煎茶会の会場として使用している場合が少なくない。これは、元来清風を理想とし、その精神性を重視した煎茶においては、抹茶におけるさまざまな規範や特定茶匠の好みが定型化した意匠などがなく、その茶事空間も自由であったためであると考えられる。しかし、煎茶空間に独自の特質がなかったというと、少なくとも現存する煎茶席遺構において看取できる独特の室内意匠と、それによる空間の特殊性を考えれば、煎茶空間独自の特質の存在を認めざるを得ない。煎茶会図録における煎茶席についても、新築でなくとも、実際にそこで煎茶会が開催されているわけであるから、煎茶的要素を含む建物であることは間違いない。先学による特に挿図の豊富な煎茶会図録を扱った研究においても、煎茶席独自の意匠的特質の存在が指摘されている。

本章では、煎茶会図録に描かれている煎茶席の平面構成に着目する。基本資料となる平面モデル化の手法を述べたのち、平面構成を分析し、煎茶席として好んで用いられた平面構成やその時代的・地域的な特質を明らかにする。

第１節　平面モデル化の手法

煎茶会図録全 51 本の中には本席に付随する前席や副席も含めると 569 の席があり、そのうち煎茶席の様子が描写されているのは 378 席ある。これらには煎茶席の部屋の一部分が描かれるが、特に床（とこ）・床脇（棚）・付書院のいわゆる座敷飾は、軸や花卉等を飾って、その席の主題を表現する場であることから、詳細に描かれている。中でも、史料 17『雲烟供養図録』(明治 13 年、1880)は、特に緻密に挿図が描かれている図録で、室内視点の描写だけでなく、外部から見える室内の様子まで描かれているため、部屋の全貌が分かる挿図もある。

さらに、煎茶会図録に記載される各席の道具の目録は、原則として、座敷飾の床に掛けられた「掛幅」いわゆる掛軸が冒頭に記載され、次いで、床、床柱・床脇・付書院（この三者の順番は前後する。）に陳列された道具が続き、室内に置かれた道具、最後に敷物や帳という順で記載される。つまり、床がある席の場合、床には必ず「掛幅」が掛けられ、この席の目録は「掛幅」の項目から始まり、さらに床脇（棚）がある場合、そこに

飾られた道具の目録が続く構成となっている。従って、各席の挿図と目録を照合することで、座敷飾の有無や構成、席の様子を子細に把握することができる。この照合により、目録では座敷飾の存在が確認できるものの、挿図には座敷飾の描写がない、もしくは部分的に描写が不足する挿図は４席であった。その他の挿図は、小さい道具の描写が省略される場合があるものの、座敷飾の構成においては挿図と目録が合致した。

以下に、次節以降の基本資料となる平面モデルのモデル化の手法について述べる。

（1）建築空間

挿図から読み取れる建築空間について、通常の平面図の作図方法に倣い、壁は最も太い線で表現し、開口部については、戸口と窓を白とグレーに色分けし、建具が入る場合は、通常の図面と同様に建具を表現している。格子が入る場合は太めの鎖線とし、高欄については一点鎖線で表している。

（2）人　物

煎茶席には、茗主と客が存在する。煎茶会図録の席の様子を描いた挿図には、人物は描かれていないが、席に飾られる道具の配置から、人物の位置を推測することが可能である。そのため茶席に限定して、道具の配置から可能な限り人物の位置を推測し、平面モデルの中に挿入した。また、茗主については、周辺の茶具の配置などからその向きも推測できるため、位置だけでなく向きも表現することとした。

（3）道　具

煎茶席で用いられた道具を総覧すると、12 種類に分類できる。どの分類に属する道具であるか判別を容易にするため、平面モデルの中で色分けを行った。

道具の分類と色分けは以下の通りである。なお、⑩～⑫は黒の線画で表現する。

①茶具：緑　②書画：青　③香具：桃　④花具：赤　⑤文具：水　⑥仏具：橙

⑦楽器：黄　⑧酒具：紫　⑨抹茶道具：深緑　⑩家具　⑪屏障具　⑫その他

なお、煎茶会図録で登場する道具は各図録によって呼び名が異なる場合があり、今回モデル化するにあたっては、それらを一つの呼び名に統一している。道具の分類と名称の整理については、第５章１節で詳述する。全図録で登場した異なる呼び名についてはそこですべて紹介している。

また、各道具の名称を図中に示すのは困難かつ混乱を招くため、モデル化においては各道具を「１文字」で表現した。さらに、道具によっては床や机に置いて用いる場合と、壁に掛ける場合があるため、モデル化では前者を○、後者を△□で表した。〔表 4-1〕

〔表4-1〕平面モデル一覧表

（置 ○　掛 ⌂ ）

- **茶具**
  - 炉
    - 涼炉
    - 風炉
    - 火炉
    - 炉台
    - 湯鑵 — 鑵座 — 湯
  - 水 — 水注 — 杓 — 水
  - 葉
    - 茶心壷 — 壷
    - 仙媒 — 仙
    - 袱紗 — 袱
  - 煎
    - 茶銚 — 瓶床 — 銚
    - 茶碗 — 碗筒 — 碗
    - 茶托 — 托
    - 盆 — ◎ □
  - 洗
    - 建水 — 建
    - 滓盂 — 滓
    - 箸瓶 — 箸
  - 巾盒 — 巾
  - 烏
    - 烏府
      - 羽帚
      - 火箸 — 烏
    - 炉扇 — 扇
  - 菓子器 — 菓
  - 茶架
  - 器局
  - 茶盤
  - 提籃
  - その他
    - 炉屏
    - 結界
    - 茶旗 — 旗
    - 茶具褥

- **抹茶道具**
  - 炉縁
  - 風炉
  - 釜 — 釜
  - 蓋置 — 蓋
  - 水指 — 杓 — 水
  - 水次 — 次
  - 茶入 — 入
  - 茶杓 — 杓
  - 茶碗 — 碗
  - 建水 — 建
  - 炭斗
    - 羽帚
    - 火箸
    - 釜敷
    - 鐶 — 炭
  - 灰器 — 灰匙 — 灰
  - 長板
  - 風炉先
  - 菓子器 — 菓

茗主 — 主

客 — 客

壁

戸口

窓

建具

格子

高欄

- **書画**
  - 掛
    - 幅
      - 風鎮 — 幅
      - 軸竿 — 竿
    - 聯 — 聯
    - 額 — 額
  - 置
    - 巻 — 巻架 — 巻
    - 書 — 書匣 — 書
    - 扇 — 扇
    - 屏風
- **花具**
  - 花瓶
    - 瓶座 — 花
    - 花鋏 — 鋏
  - 盛物 — 盛
  - 盆栽 — 盆
  - 盆石 — 石
  - 水盤 — 盤
  - 水注 — 杓 — 水
  - 器
    - 古銅器
    - 水晶
    - 陶器 — 器
- **香具**
  - 香炉 — 炉台 — 炉
  - 香盒 — 盒
  - 香筒 — 筒
  - 香袋 — 袋
  - 箸瓶 — 箸
  - 香盆 — ◎ □
- **文具**
  - 硯
    - 硯 — 硯匣 — 硯
    - 硯屏 — 屏
  - 墨 — 墨 — 墨床 — 墨
  - 筆
    - 筆
      - 筆架 — 筆
      - 筆筒 — 筒
    - 筆舐 — 舐
  - 紙
    - 料紙 — 紙匣 — 紙
    - 紙刀 — 刀
    - 鎮子 — 鎮
  - 水
    - 水盂 — 水
    - 水滴 — 滴
  - 印
    - 印材 — 印材盆 — 印
    - 肉池 — 肉
    - 印矩 — 矩
  - その他
    - 腕枕 — 枕
    - 書架
    - 書具匣
- **仏具**
  - 数珠 — 珠
  - 如意 — 如
  - 拂子 — 拂
  - 喚鐘 — 鐘
  - 鏡 — 鏡
  - 像 — 像
  - 経 — 経
  - 扇 — 扇
- **楽器**
  - 琴 — 琴台 — 琴
  - 笛 — 笛
  - 洞簫 — 洞
  - 琵琶・笙・太鼓 — ・
- **酒具**
  - 酒瓶 — 瓶
  - 盃
    - 盃台
    - 盃洗 — 盃
  - 肴盃 — 肴
- **家具**
  - 具列
    - 机・卓・案
    - 架・棚
    - 盆・筒・盤 — □ ◎ 筒
  - 椅子
    - 敦 — 椅
    - 榻 — 椅
  - 敷物
- **屏障具**
  - 帳・簾・幔・幕 — 帳 簾 幔 幕（閉 —— 開 - - - -）
  - 屏風
  - 曲欄
- **その他**
  - 煙盆 — 煙
  - 手炉 — 手
  - 瓢 — 瓢
  - 笠 — 笠
  - 杖 — 杖
  - 提籃 — 籃
  - 置物 — 置
  - 箒 — 箒

第２節　各図録における煎茶空間

本節では、各図録に描かれた挿図をもとに、煎茶席の平面構成および茶席における人物の配置について述べる。平面型は 14 種類に分類でき、以下①から⑭の番号はその平面型を示すが、詳細は第４節で述べることとする。また、しつらいについては各図録で述べることは膨大な記述となるため避け、茗主と客の配置とともに、「煎茶席の使われ方」と題して次章で考察する。

(1)『茗讌品目』

平面：茶席で①が２席、②⑬が各１席、前席１席が⑩となり、床のみの席が３席、床と床脇等からなる席、床が無い席が各１席となる。①壁床を除く床の形式は框床である。

茗主と客：平面型は①②の左床各２席で、茗主はいずれも脇前に位置し、３席は上に、１席は下に座る。茗主の向きは、脇前上では正対が２席、横向きが１席、脇前下では反対を向いている。客は床前に座り、３席で机を囲んでいる。⑬亭の立礼式では客が部屋中央で机を囲み、茗主は別の机をその隣に設けて開口と対面するように座る。

(2)『春薦餘事』

平面：茶席１席が②の框床である。

茗主と客：平面型は②の左床で、茗主は脇前下に正対で座る。客の位置は明確でない。

(3)『青湾茶会図録』

平面：茶席で②が１席、⑪が７席、⑫が１席、⑬⑭が各３席、前席で①②④が各３席、⑥⑨が各１席、遺愛品の展観席１席が④、酒席１席が⑭となり、床のみの席が７席、床と床脇等からなる席が６席、床が無い席が 15 席となる。①壁床の前には置床が置かれており、他の床の形式は框床 10 件である。床脇の形態は、鯰棚、通違棚、枡形の棚で琵琶床のような床脇（以後琵琶棚と呼ぶ）、通棚で、６席全てに棚があり、うち３件が踏込（一部踏込のものも含む）である。また、床境の壁にはほぼ狆潜が設けられ、第五席副席前席では中国風意匠の格子がつく。床柱は第三席前席に下部が切断された吊柱、第四席小室（副席）に奇木が用いられている。

茗主と客：唯一の床がある席は平面型が②の右床で、茗主は脇前上に正対で座り、客は床前下に机を囲んで座っており、茗主の傍には茶道口が見える。床のない席の⑪単室型・⑫複数室型は計８席あり、８席全てで茗主は壁沿いに座るため、客は部屋中央付近に位置する。⑫複数室型では、特に部屋境の壁沿いに座ることで、客は茗主を見ながら他室

の様子も伺える配置となっている。また、２席に茶道口があり、茗主はその傍に位置する。外部に面する開口部がある席は８席中４席で、茗主と開口部の関係は対面２席、平行１席、背面１席となり、客は茗主側を見ながら、対面または横目に外部の様子を見ることが出来る。⑬亭は３席あり、２席が立礼式で四方または三方が開放となっており、残り１席も１面が広く開放となっている。⑭船の３席と合わせて、６席全てで客が中央に位置し、茗主は壁沿いもしくは隅に座る。なお、茶席全 15 席のうち 11 席で客は机を囲んで座る。

(4)『茶郷一楽』

平面：茶席１席が⑪、前席１席が②の框床となる。

茗主と客：平面型は⑪で、外部に面する開口部はなく、茗主は壁と並行に座る。茗主の正面に菓子器が乗った机があるものの、客は茗主を挟んで壁と反対側に座る。

(5)『金洞餘音』

平面：茶席１席が④の框床である。床脇の形態は日出棚で、障子は閉じている。

茗主と客：平面型は④の左床で、茗主は脇前上に横向きで座る。客の位置は明確でない。

(6)『(新古書画展観目録)』

平面：茶席１席が①となる。

茗主と客：平面型は①の左床で、茗主は脇前下に横向きで座る。客の位置は明確でない。

(7)『熊谷醉香居士追福書画展観録』

平面：茶席１席が④の框床である。床脇には茶室の釣棚のような小さな棚が付き、床境の壁には狆潜が設けられ、床柱は天然の丸太を用いている。

茗主と客：平面型は④の左床で、茗主は床脇内に横向きで座る。客の位置は明確でない。

(8)『青湾茗醼図誌』

平面：茶席で①が２席、②④が各１席、⑪が３席、⑫が２席、⑬⑭が各１席、前席で②が３席、④が２席、⑨が１席、副席１席が⑪、酒席１席は２つの床が設けられ、それぞれが①④、奏楽席１席は⑭となり、床のみの席が７席、床と床脇等からなる席が５席、床が無い席が９席となる。①壁床を除く床の形式は框床９件である。

床脇の形態は、棚が無い踏込が１件、違棚、文道棚、琵琶棚などの棚が４件で、うち２件が下部を踏込とする。また、床境の壁には狆潜が設けられ、床柱は第七席茶席で角柱が用いられているが、床柱の無い席がほとんどである。

茗主と客：床がある４席について茗主の位置をみると、平面型が①の右床２席では、脇

前上・下に正対、②の左床では位置が読み取れず、④の右床では脇前上に横向きで座る。客は床前に位置する。床のない席の⑪単室型・⑫複数室型は計５席あり、茗主は３席で壁沿い、２席で部屋中央に座り、客は全ての席で部屋中央付近に位置する。⑫複数室型では、特に部屋境の壁沿いに座ることで、客は茗主を見ながら他室の様子も伺える配置となっている。全ての席で外部に面する開口部があり、茗主と開口部の関係は対面４席、平行１席となり、客は茗主側を見ると、背面に開口部がくる配置となる。なお、全ての席で茗主は茶具と共に大判の敷物上に座り、２席を除いて客は机を囲んで座る。⑬亭や⑭船では茗主の横手に客が位置し、客は机を囲んで座る。

(9)『円山勝会図録』

平面：茶席で①が５席、②が 16 席、④が１席、⑧が２席、前席で①が４席、②が２席、④⑪が各１席、奏楽席１席が⑪となり、床のみの席が 27 席、床と床脇等からなる席が４席、床が無い席が２席となる。①壁床を除く床の形式は框床 19 席、原叟床１席を含む踏込床３席である。床脇の形態は、棚が無い踏込で、床境の壁には半数の席で開口がある。

茗主と客：24 席すべて床があり、茗主は②の右床で床前上に正対、①②の左床各３席・②の右床７席・⑧の左床で脇前上に横向き、④の左床で脇前上に正対、①の右床・②の左・右床では床前下に正対、②の右床で床前下に横向き、⑧の左床で脇前下に正対、①②の右床で脇前下に横向き、②の右床で脇前下に反対向きで座る。これらのうち客が机を囲んで座る席が１席見られる。以上から、茗主の位置には偏りがみられ、24 席中 14 席で茗主は脇前上に横向きで座っており、この茶会ではこの配置が好まれたといえる

(10)『栗溪雅会略誌』

平面：茶席１席が挿図に描写がないが、目録の記載から床があると判断できることから、床のみの席となっている。

茗主と客：座敷飾と人物の位置関係は不明であるが、茗主は茶道口の近くに壁に平行な向きで座り、客は茗主を挟んで壁と平行な机を囲んで座る。

(11)『藤本鉄石先生薦場餘禄』

平面：茶席１席が①で、床柱に天然木を用いている。

茗主と客：平面型は①の左床で、茗主は床前下の茶道口傍に横向きで座り、客は脇前に菓子器を囲んで座る。

(12)『遺馨録』

平面：茶席１席が⑧で框床、床柱は角柱である。付書院の開口は方形で、障子が開いて

いる。前席１席は⑪となっている。

茗主と客：平面型は⑧の右床で、茗主は脇前上に正対、客は床前に机を囲んで座る。

(13)『書画煎茶清楽図録』

平面：茶席１席が①、奏楽席１席が壁一面を床とした②で框床となっている。

茗主と客：平面型は①の左床で、茗主は床前下に正対で座り、客は脇前に菓子器および煙草盆を囲んで座る。

(14)『舟皐山房小集略記』

平面：茶席１席が④で踏込床とし、垂壁が弧を描いている。床脇の形態は、棚が無い踏込である。

茗主と客：平面型は④の右床で、茗主は床前上に正対で座る。客の位置は明確でない。

(15)『深志茗讌図録』

平面：茶席で②が２席、⑨が１席、前席で④⑪が各１席、副席で②④が各１席となり、床のみの席が３席、床と床脇等からなる席が３席、床が無い席が１席となっている。床の形式は框床５席、踏込床１席である。床脇の形態は、棚が無い踏込が２件、下部を踏込とする違棚が１件で、いずれも床境の壁には狆潜が設けられている。床柱は第三席副席が落掛とともに天然木が用いられている他は、直材であることが分かる程度の描写しかなされていない。

茗主と客：全３席で茗主は茶道口傍に座り、②の右床２席で脇前上に横向き・反対向き、⑨の右床で脇前下に横向きに座る。客は２席で床前上から下にかけて並び、１席で脇前上にある机を囲んで座る。

(16)『直入翁寿筵図録』

平面：茶席で①⑪が各１席、②が２席、前席で④が２席、釣棚が付いた③と⑩が各１席、書画展観席１席が⑨、展観席１席が②、揮毫席１席が⑪、奏楽席１席が⑬、酒席１席が⑧、玄関が①となり、床のみの席が６席、床と床脇等からなる席が４席、床が無い席が４席となっている。①壁床を除く床の形式は框床４席、踏込床４席である。床脇の形態は、棚のない踏込、下部を踏込とする釣棚、文道棚である。床柱は全て直材であることが分かる程度の描写しかされていない。

茗主と客：平面型は①の左床１席では茗主の位置が読み取れず、②の左床２席では床前上に正対、床隣に横向きでどちらも茶道口傍に座る。⑪の１席では、茗主は外部に面する火灯口に正対して壁沿いに座り、客が部屋中央に座る。客は菓子器を置いた机を囲ん

で座る席が３席あるが、他１席は客の位置が明確でない。

(17)『雲烟供養図録』

平面：茶席で①が１席、②が４席、④⑤⑦が各１席、副席で①②⑪が各１席、奏楽席１席が⑪となり、床のみの席が７席、床と床脇等からなる席が３席、床が無い席が２席となる。①壁床を除く床の形式は框床６席、踏込床２席である。床脇の形態は、棚が無い踏込が２件、他１件は違棚と天袋とし、前２件に床境の壁は設けられていない。床柱は第一席本席で奇木、第九席本席で角柱が用いられているが、他は直材であることが分かる程度の描写しかされていない。

茗主と客：茶席は全８席あり、茗主は①の左床で床前上に正対、④⑤の左床で床前下に横向き、②の左床と右床２席で脇前上に横向き、⑦で脇前下に正対で座る。なお、②の右床１席は位置が読み取れない。客は菓子器または煙草盆の周辺に座る席が５席、菓子器の置かれた机を囲む席が３席あり、２席で机の下に客用の敷物が敷かれる。煙草盆を置く場合、２つを直交するように置いて、客の位置を示す席もみられる。

(18)『追遠薦新図録』

平面：茶席１席が④、書画展観席１席が①、文具の展観席で④⑪が各１席となり、床のみの席が１席、床と床脇等からなる席が２席、床が無い席が１席となる。①壁床を除く床の形式は框床、踏込床各１席である。床脇の形態は、茶室の釣棚のような小さな棚と幸棚で、床境の壁に狆潜、袖壁に下地窓がある。床柱は丸柱だが、袖壁の柱に竹が用いられている。

茗主と客：平面型は④の左床で、床脇奥の壁面には茶道口があり、茗主は床脇内で横向きに座り、客は床前に菓子器と煙草盆を囲んで座る。

(19)『分史翁薦事図録』

平面：茶席で②④が各４席、⑨が２席、前席で②が２席、⑨⑪⑫が各１席となり、床のみの席が６席、床と床脇等からなる席が７席、床が無い席が２席となっている。①壁床を除く床の形式は框床 13 席で、うち１席が琵琶床である。床脇の形態は、文道棚が３件、下部を踏込とする違棚・通棚が３件で、全てに棚がある。ほとんどの床境の壁には狆潜が設けられ、第六席茶室ではさらに氷裂模様の格子を持った開口がつく。床柱は 13 席中９席が奇木を用いており、うち２席は落掛にも奇木を用いている。

茗主と客：茶席 10 席は全て床のある席で、②の右床で脇前上に正対、②の右床・④の左床と右床・⑨の右床で脇前上に横向き、②の左床で脇前下に正対、④の右床２席・⑨

の右床で脇前下に横向きで座る。５席で茶道口が確認でき、②の右床１席は茗主の位置が読み取れない。客は床前に並んで、外部に面する開口を背にすることが多く、半数の席で机を囲んで座る。茶具と共に茗主が座る敷物も４席に確認できる。

(20)『清娯軒茶筵図録』

平面：茶席２席が②、前席で①②が各１席、副席１席が⑥、酒席１席が②となり、床のみの席が５席、床と床脇等からなる席が１席となる。壁床を除く床の形式は框床３席、踏込床１席である。床脇の形態は、間口が半間の文道棚と地袋が並んでおり、床境の壁には狆潜が設けられ、床柱は全て丸柱である。

茗主と客：平面型は②の右床で、茗主は床隣に横向きで座り、客は床前に菓子器と煙草盆を囲んで座る。なお、②の左床は座敷飾と茶具が別の挿図に描かれるため、茗主の位置が読み取れない。

(21)『招鶴亭茗醼図録』

平面：茶席１席が①、酒席１席が⑪である。

茗主と客：平面型は①の左床で、茗主は脇前上に反対向きで座り、客は床前の煙草盆周りに座る。

(22)『楳仙先生古稀筵展観録』

平面：茶席で②④が各１席で、両者とも框床である。床脇の形態は、棚が無い踏込で、床境の壁には洞窓がある。床柱は天然木が１件見られる。

茗主と客：茗主は②の左床では床前下に正対、④の左床では脇前上に横向きで座る。客の位置は明確でない。

(23)『柳嶠清賞』

平面：茶席３席が④、前席１席が⑤、書画展観席１席が②となり、床のみの席が１席、床と床脇等からなる席が４席となる。床の形式は框床３席、原叟床１席を含む踏込床２席である。床脇の形態は、棚が無い踏込が１件、地袋が３件である。床境の壁に狆潜と中国風意匠の開口が付く席が見られ､床柱は袖壁の柱を含めて５席中４席が奇木である。

茗主と客：３席全て平面型は④で、茗主は左床と右床で脇前下に正対、右床で床前下に正対で座る。客はいずれも上座から茗主のいない側の下座へＬ字型に座り、客の位置には敷物または座布団が敷かれる。客は茗主越しに開口部から外部をみることができる。

(24)『随意荘雅集録』

平面：茶席１席が⑭、前席２席が④、副席１席が⑥、展観席で④⑨が各１席となり、床

と床脇等からなる席が５席、床の無い席が１席となる。床の形式は框床５席で、床脇の形態は寝覚棚、三角形の地袋、錦葉棚、棚が無い踏込で、地袋の扉に網代が見られる。床境の壁には半数の席で狆潜がつき、床柱は３件が天然木である。

茗主と客：船上の茶席で、茗主の左に机を囲むように客が座る。

(25)『墨縁奇賞』

平面：茶席および書画展観席は各１席で④、前席１席が⑤となっている。床の形式は框床２席、踏込床１席である。床脇の形態は、文道棚、錦葉棚である。床柱は角柱が１件みられる。

茗主と客：平面型は④の左床で、茗主は茶道口の傍で脇前下に横向きに座る。床前に菓子器が置かれるが、客の位置は明確でない。

(26)『酔花図誌』

平面：茶席１席が②で、框床となり、床境の壁には狆潜がつく。

茗主と客：平面型は②の右床で、茗主は茶道口の傍で脇前上に横向きに座る。客用の敷物が床前から下座にかけてＬ字型に敷かれ、客はその上に座る。煙草盆は正客の位置とは関係ない。

(27)『中林竹洞竹渓翁墓碑建立薦事会展観録』

平面：茶席２席および前席１席すべて②で、框床である。床境の壁は無く、床柱は角柱や太い孟宗竹を用いており、床框にも天然木の描写がある。

茗主と客：平面型は②の右床で茗主は脇前下に横向きで座るが、客の位置は明確でない。②の左床は、座敷飾と茶具が別の挿図に描かれるため、人物の配置が読み取れない。

(28)『淇水翁薦事図録』

平面：茶席で①⑤⑦が各１席、②が２席、前席で⑩が１席、⑪が３席、副席１席が⑪となり、前席・副席は全て床が無い席である。①壁床を除く床の形式は框床４席である。床脇の形態は、棚が無い踏込と琵琶棚である。床境の壁には狆潜がつき、床柱はすべて丸柱である。

茗主と客：５席すべて床のある席で、茗主は①の右床で床前下に正対、⑦の右床で床前下に横向き、⑤の右床で脇前下に正対で座る。②の左・右床では茗主の位置が読み取れない。客は上座から茗主のいない側の下座にＬ字型に座り、煙草盆がその位置を示すものが２席、脇前に上座から下座へ並んで茗主越しに開口部から外部をみるものが１席、机を囲んで座るものが２席ある。このうち１席は机の下に円形の敷物を敷く。

(29)『老古茗筵図録』

平面：茶席１席が④で框床、床脇の形態は棚が無い踏込で床境の壁には狆潜がつき、床柱は角柱である。床脇奥に氷裂紋様の大円窓がつく。前席１席が⑪となる。

茗主と客：平面型は④の左床で、茗主は床脇内の円窓前に横向きで座るが、客の位置は明確でない。

(30)『石癡翁追福展観録』

平面：茶席１席が②で、框床となる。

茗主と客：平面型は②の右床で、茗主は床前下に正対、客は脇前で机を囲んで座る。

(31)『清楽欣賞（中邨楼茶会)』

平面：茶席１席が⑤、書画展観席２席が⑧、酒席とその副席が⑨となり、５席全て床と床脇等からなる席で框床となる。床脇の形態は袋棚、琵琶棚、天袋と違棚で、すべてに棚がある。床境の壁には狆潜が見られ、床柱は天然木が１件ある。

茗主と客：平面型は⑤の左床で、茗主は茶道口の傍の脇前上で横向きで座る。客用の敷物が床前上から下座にかけてＬ字型に敷かれ、客はその上に座る。煙草盆が正客の位置を示しているように見える。

(32)『清賞余録』

平面：茶席で②④が各２席、書画展観席で④⑪が各１席、盆栽陳列席で④⑤が各１席となり、床のみの席が２席、床と床脇等からなる席が５席、床の無い席が１席となる。床の形式は框床６席、踏込床１席である。床脇の形態は、棚が無い踏込、鯰棚、日出棚、地袋で、床境の壁にはほとんど開口はない。床柱に天然木が２件、角柱が１件みられる。

茗主と客：４席すべて床のある席で、茗主は④の左床で床前下に横向き、②④の右床で脇前上に横向き、②の左床で脇前上に反対向きで座る。客用の座布団もしくは敷物が床前上から下座に掛けてＬ字型に敷かれ、客はその上に座る。傍に必ず煙草盆が置かれるが、正客との関係はみられない。

(33)『万翁華甲醮誌』

平面：茶席１席が②で袖壁が付いた踏込床、前席１席が⑦で框床となっている。床脇の形態は、地袋、下部が踏込の違棚で、床柱に角柱が用いられている。

茗主と客：平面型は②の左床で、茗主は床前下に横向きで座る。客の位置は明確でない。

(34)『竹荘茶醮図録』

平面：茶席１席が⑥、前席で③⑧が各１席、書画展観席１席が⑤、盆栽陳列席１席が③、

酒席１席が⑨となっており、全て框床となっている。床脇の形態は、棚、台形平面の地袋と釣棚、書物棚となり、⑧１席の付書院は火灯窓が設けられている。③は床の中に違棚、鯰棚と釣棚が付く。床境の壁には狆潜がつき、床柱は奇木が１席である。以上、この図録の座敷飾は他の図録にない意匠が多数用いられており、意匠性に富んでいる。

茗主と客：平面型は⑥の左床で、茗主は床隣に横向きで座るが、客の位置は明確でない。茶具の下に茶具敷が描かれる。

(35)『掲燈院小祥薦事会記』

平面：茶席で④が２席、⑨が１席、前席１席が②、碁席１席が④、酒飯席１席が②となり、床のみの席が２席、床と床脇等からなる席が４席となっている。床の形式は框床４席、踏込床２席である。床脇の形態は、棚が無い踏込２件のほか、日出棚、地袋となる。半数の席で床境の壁に狆潜が付き、床柱は天然木が１件見られる。

茗主と客：平面型は④２席・⑨の右床で脇前下に正対に正対で座り、客は床前上から下に並ぶ。茶道口のある席が１席ある他、客用の敷物があるが、敷物の形や敷き方は三者三様で、煙草盆も正客の位置を示していない。

(36)『兼葭堂誌』

平面：茶席１席が④で、框床となり、床脇の形態は通棚である。

茗主と客：平面型は④の左床で、茗主は床前上に正対で座り、客は脇前上から下に並ぶ。茗主は茶具敷、客は敷物が位置を示す。

(37)『林華園薦事図録』

平面：茶席１席が⑤で琵琶床の踏込床となっている。床境の壁に開口があり、床柱は丸柱である。

茗主と客：平面型は②の右床で、茗主は脇前上に横向きで座り、客は円窓前に床前上から下に並ぶ。

(38)『盆栽瓶花聚楽会図録』

平面：茶席で①②が各１席、盆栽陳列席で①③⑨が各１席、②が４席、④⑤⑪が各２席となり、床のみの席が８席、床と床脇等からなる席が５席、床が無い席が２席となっている。壁床のうちの１つは織部床で、他の床の形式は框床８席、蹴込床１席、踏込床１席である。床脇の形態は、棚が無い踏込、地袋、錦葉棚であり、③の棚付床は地袋上に下地窓を持った袖壁を設けている。床境の壁には半数の席に開口があり、床柱は角柱が５席、奇木が３席、竹が２席となっている。また、半数ほどの席で床框に色の濃い角材

が用いられている。

茗主と客：２席のうち茗主は、①の左床で床前上に反対向き、②の右床で床前下に正対で座る。どちらも茶道口があり、茗主はこの傍に座して、客は茗主を囲むようにＬ字型に座っている。茗主は茶具敷、客は敷物が位置を示す。

(39)『梅村寿筵図録』

平面：茶席２席と副席１席が②、文房展観席１席が⑨、酒席１席が①となり、書画および盆栽陳列席１席が、挿図に床の描写はないものの目録に床飾りの記載があることから床のみの席と判断できる。床のみの席が５席、床と床脇等からなる席が１席となる。①壁床を除く床の形式は、框床３席、踏込床１席である。床脇の形態は、棚が無い踏込で、床柱は丸柱が４席、角柱が１席である。

茗主と客：平面型は②の右床２席で、茗主は脇前上に横向きで座り、客は床前に並ぶ。１席は菓子器を置いた机と茗主の茶具敷がみられるが、客は机を囲まずに座布団が位置を示しており、煙草盆が正客を示すようにみえる。

(40)『東山茶会図録』

平面：茶席で②が６席、④⑨が各２席、⑦が１席、前席で②が２席、④⑤が各１席、⑪が１席、目録から床があると判断できる席が１席、書画展観席で②⑪が各２席、書画・文房･盆栽の展観席１席が⑦となり､床のみの席が 11 席､床と床脇等からなる席が８席、床が無い席が３席となる。床の形式は框床 17 席、琵琶床の踏込床１席である。床脇の形態は、下部が踏込の通棚・違棚、下部が踏込の棚と琵琶棚、袋棚、地袋、半地袋である。床境の壁にはほとんど狆潜もしくは洞口などの開口が付くが、床柱に奇木を用いている席は１席で、ほとんどの席では直材であることが分かる程度の描写しかされていない。

茗主と客：11 席全て床があり、茗主は②の左床２席で床隣に横向き、②⑦の左床で床前下に正対、②の右床で脇前上に横向き、②の左右床・④の左床２席・⑨の右床で脇前下に反対向きに座る。⑥の左床は位置が読み取れない。客は全て茗主とは逆側に位置する。

(41)『山水清遊会』

平面：茶席１席が②、前席および待合席各１席が⑤、書画展観席１席が⑪となり、床の形式は全て框床である。床脇の形態はすべて地袋で､床境の壁に狆潜が付くものもある。

茗主と客：平面型は②の左床で、茗主は床前下に正対で座る。客の位置は明確でない。

(42)『豫章堂茗讌図録』

平面：茶席１席が③、待合席で②⑩が各１席、⑤が２席、酒席１席が⑨、玄関が⑪とな

っている。床の形式はすべて框床である。床脇の形態は、棚が無い踏込、下部が踏込の違棚、琵琶棚で、いずれも床境の壁には狆潜が付く。さらに、第二席楼上待合席における床境の壁の開口には竹の格子がつく。床柱は奇木、丸柱、角柱と全席異なっている。また、③は地袋上に円形の開口を持つ袖壁と、竹の落掛を設けており、⑩の棚は三角形平面の地袋になっている。

茗主と客：平面型は③の左床で、茗主は茶道口近くの床前上に反対向きに座り、客が上から下にかけて並ぶ。客は茗主越しに窓と対面するが、窓の障子は閉じており外部はみることが出来ない。茗主の茶具敷が敷かれ、煙草盆があるが、正客の位置を示すものではない。

(43)『澱江茗醮図録』

平面：茶席で②が４席、⑤⑦が各１席、前席１席が④、盆栽陳列席で②④⑨が各１席となっており、床のみの席が５席、床と床脇等からなる席が５席となっている。床の形式は全て框床で、うち１席が琵琶床である。床脇の形態は、下部が踏込の天袋が３席で、このうち違棚が付くものが２席、他に琵琶棚と地袋で、すべてに棚が付いている。床境の壁にはほとんど開口が設けられ、床柱に奇木を使用した席が２席見られる。

茗主と客：６席全て床があり、茗主は⑦の左床で床前下に正対、②の右床２席で床隣と脇前上に正対、⑤の左床で脇前上に正対、②の左床２席で脇前下に反対向きで座る。いずれも茶具敷が茗主、敷物が客の位置を示す。手焙がある席もあるが、正客の位置とは関係ない。

(44)『雨竹居士薦筵図誌』

平面：茶席で②が３席、④⑦⑨が各１席、前席１席が④、書画展観席で②が２席、④⑧が各１席、盆栽陳列席で②が２席、⑦が１席、酒席１席が⑨となっており、床のみの席が７席、床と床脇等からなる席が８席となっている。床の形式は框床 11 席、踏込床４席で、それぞれ１席ずつ琵琶床がある。また框床のうちの１席は、床を対角線に分けた奥を框床とし、前を踏込としている。床脇の形態は、棚が無い踏込が３席、琵琶棚２席、半地袋、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋、床脇を上下左右に四分割した対角線に扉付きの棚を設けたものがある。酒席は⑨の琵琶棚で、この棚を囲むように障子の開口が設けられている。床境の壁にはほとんどの席で開口が設けられ、特に第九席前席は奇木の形を活かした開口である。床柱は、６席に奇木が用いられている。

茗主と客：６席全て床があり、茗主は⑨の左床で床前上に正対、⑦の左床で床前下に正

対、②の左右床・④の左床で脇前上に正対、②の右床で脇前上に横向きで座る。外部に面する開口部が２席に見られ、客はその前に座る。茶具敷が茗主、敷物が客の位置を示しており、茗主を囲むようにＬ字型に敷かれている席が２席確認できる。客の位置に煙草盆が置かれている席も数席あるが、正客とは関係ない。

(45)『楓川追薦録』

平面：茶席で②が３席、④が２席、⑤が１席で、前席で④⑤⑦が各１席、書画展観席で②が３席、⑤が３席、盆栽陳列席１席が②、酒席１席が②となっており、床のみの席が８席､床と床脇等からなる席が９席となっている｡床の形式は框床 14 席､踏込床３席で、それぞれ１席ずつ琵琶床があり、一つの琵琶床には網代の意匠が見られる。床脇の形態は、地袋２席、琵琶棚４席、地袋と通棚、半地袋と通棚、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋がある。床境の壁に開口があるのは３席で、床柱は 17 席中９席が奇木、１席が竹である。落掛に竹を用いている席も２席みられる。

茗主と客：６席全て床があり、茗主は②の右床で床隣に横向き、②⑤の右床で脇前上に反対、④の右床で脇前下に正対、④の左床で脇前下に横向き、②の左床で脇前下に反対向きで座る。１席を除いて茗主の茶具敷もしくは大きめの盆に茶具が載せられている。客は床前に座って、その位置は客用の敷物または座布団が示しており、煙草盆は半数の席に置かれて、正客の位置を示しているように思われる。

(46)『亦復一楽茶会図録』

平面：茶席で②が４席、④が２席、⑦が１席、前席１席が⑤、待合席１席が⑧、書画展観席１席が②、展観席で④⑨が各１席、酒席１席が⑧となり、床のみの席が５席、床と床脇等からなる席が７席となる。床の形式は框床８席、踏込床４席で、うち２席が琵琶床である。床脇の形態は、棚が無い踏込、半地袋と天袋が２席、地袋、下部が踏込の通棚と天袋、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋がある。床境の壁には必ず開口が設けられ、円形や竹の格子が付いた開口も１席ずつ見られる。また、床柱が奇木の席が５席ある。

茗主と客：６席全て床があり、茗主は②の右床で床隣に横向き、②⑤の右床で脇前上に反対、④の右床で脇前下に正対、④の左床で脇前下に横向き、②の左床で脇前下に反対向きで座る。１席を除いて茗主の茶具敷もしくは大きめの盆に茶具が載せられている。客は床前に座って、その位置は客用の敷物または座布団が示しており、煙草盆は半数の席に置かれて、正客の位置を示しているように思われる。

(47)『溪村翁追薦図録』

平面：茶席１席が①、書画展観席で②④が各１席で框床となり、床脇の形態は違棚と天袋である。

茗主と客：平面型は①の右床で、茗主は脇前下に横向きに座り、客は床前上から下にかけて並ぶ。

(48)『角山簪篁翁薦事図録』

平面：茶席で②が４席、⑤が３席、前席で②③が各１席、書画展観席で②④が各２席、盆栽陳列席１席が②となり、床のみの席が９席、床と床脇等からなる席が５席となる。床の形式は框床９席、踏込床３席、うち２席が琵琶床である。床脇の形態は、棚が無い踏込、琵琶棚、冠棚、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋、袖壁にある半円の開口の高さに合わせた棚がある。また、③の棚は地袋の上部に垂壁も設けられている。床境の壁には開口が設けられ、格子や障子が付くものもある。床柱は 12 席中 10 席に奇木が用いられ、他２席のうちの１席は中柱に奇木が用いられている。

茗主と客：７席中６席が床のある席で、３席は茶道口があり、茗主は②の右床３席・⑤の左床で脇前上・下に正対、⑤の左床で脇前上に反対、⑤の右床で脇前上に横向きに座る。客は全ての席で床前上から下にかけて並ぶ。茶具敷が茗主の位置、敷物が客の位置を示し、煙草盆もしくは手焙が正客の位置を示している。また②の床をもつ亭は、史料 16『直入翁寿筵図録』の奏楽席以来の出現となり、それまでは机を配置して飾りの場を創出していたのと異なり、床と作り付けの机を備えた亭となっている。床の型は②の右床で、茗主は脇前上に作り付けられた机に正対で座り、客は同じ机を囲んでいる。

(49)『昌隆社五十周年記念茗讌図録』

平面：茶席で②が６席、④⑦が各１席、前席で②が３席、④が４席、２席の書画展観席のうち１席が②、１席は２つ床が設けられてそれぞれ②⑧、盆栽陳列席１席が②、銅器の展観席および酒席の各１席が⑤となり、床のみの席が 11 席、床と床脇等からなる席が 10 席となっている。酒席は⑤の琵琶棚で、この棚を囲むように障子の開口が設けられている。床の形式は框床 17 席、蹴込床１席、踏込床３席で、框床のうち３席が琵琶床である。床脇の形態は、琵琶棚が４席、棚が無い踏込が２席、地袋、下部が踏込の棚、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋がある。床境の壁にはほとんどの席で開口が設けられる。また、床柱は２席で奇木、１席で竹が用いられている。

茗主と客：８席全て床があり、茗主は②の右床５席で床隣と４席の脇前上に正対、②の

左床で脇前上に横向き、④の右床・⑦の左床で脇前下に正対で座る。ほとんどの席で茗主は床と対面しており、客は８席全てで床前上から下にかけて並ぶ。全ての席で茶具敷が茗主の位置、敷物が客の位置を示し、煙草盆もしくは手焙が正客の位置を示す。

(50)『雙軒庵記念茗讌図録』

平面：茶席１席が⑤、前席１席が②、書画展観席で②⑧が各１席、酒席１席が④となり、６席全て框床である。このうち１席が琵琶床である。床脇の形態は、棚が無い踏込、付書院のように奥に障子の開口を設けた地袋がある。床境の壁には必ず狆潜が設けられる。

茗主と客：平面型は⑤の右床で、茗主は茶道口近くの脇前上に正対で座り、客は床前上から下にかけて並ぶ。茶具敷が茗主、敷物が客の位置を示し、煙草盆と手焙が正客の位置を示す。

(51)『学温園茶会図録』

平面：茶席で②③④が各１席、前席で②④⑨が各１席、盆栽陳列席１席が④となり、框床５席、蹴込床１席、框床一部踏込床１席となる。床脇の形態は、地袋と天袋、地袋、釣棚、下部が踏込の棚があり、床境の壁には必ず開口が設けられ、ここでは洞口が多くみられる。また、棚付床の棚は釣棚である。床柱は半数が奇木を用いている。

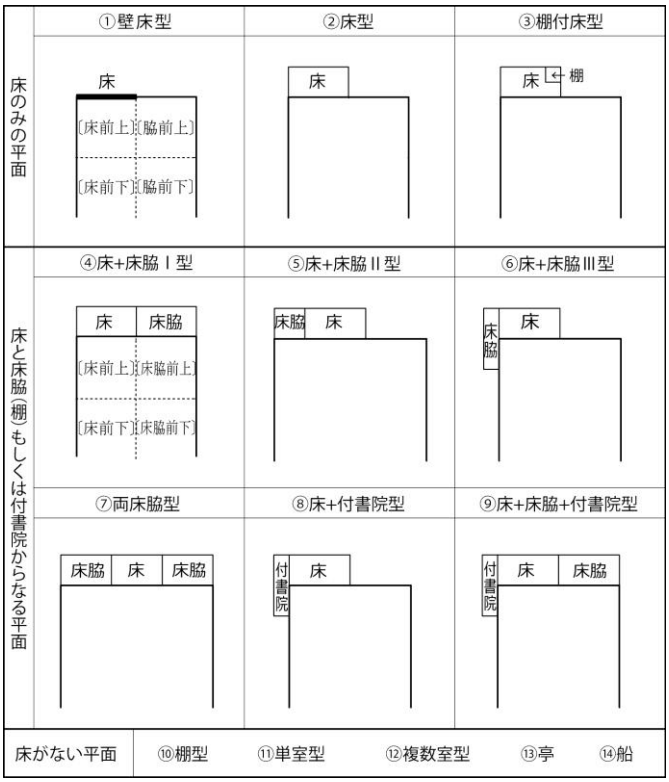
茗主と客：３席すべて床があり、茗主は②の左床で脇前上に反対、③の右床で床隣に反対、④の左床で脇前上に横向きに座る。茗主は茶道口近くに座り、茶具敷が茗主の位置を示す。客は床前上から下にかけて並び、敷物がその位置を示し、煙草盆が正客の位置を示す。

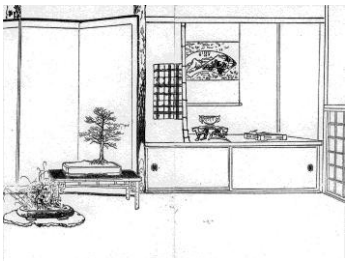
第３節　煎茶席の平面構成

第１項　平面構成の分類

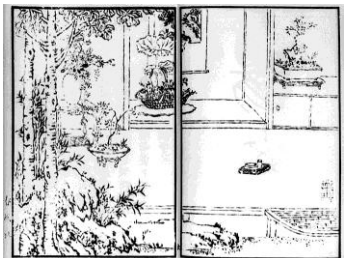
平面構成を分析するにあたり座敷飾に注目すると、９型式に分類できた。まず床がある席について述べる。床には席の主題を表す掛軸が必ず掛けられるが、掛軸以外の道具を飾る場の有無という観点から、床のみの席は①「壁床型」と②「床型」（框床・踏み込み床・蹴込床など）に分けられ、③床の内部に棚を設けた「棚付床型」〔図 4-1 〕も平面の形状から床のみの席とした。次に④～⑨の６型式が床と床脇（棚）や付書院が組み合わされた席で、④部屋の一面に床と床脇が隣り合う標準的な「床＋床脇Ⅰ型」、⑤床と床脇が隣り合い、その同一面に壁も並ぶ「床＋床脇Ⅱ型」〔図 4-2 〕、⑥床脇が床と直交する「床＋床脇Ⅲ型」〔図 4-3 〕、⑦床の両脇を床脇とする「両床脇型」〔図 4-4 〕となる。さらに⑧床と付書院からなる「床＋付書院型」、⑨床と床脇と付書院が揃う「床＋床脇＋付書院型」もある。一方、床がない席として、⑩道具を飾る棚だけからなる「棚型」〔図 4-5 〕、⑪座敷飾がない室のみの「単室型」、⑫それが複数室にわたる「複数室型」〔図 4-6 〕、⑬亭、⑭船の５種類に分類できる。以上、平面構成の型式は計 14 種類となり、この分類に基づいて考察を行う〔表 4-2 〕。

〔表 4-2　平面型一覧〕



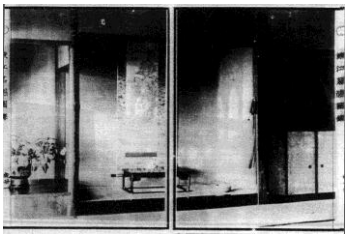


〔図4-1〕 ③棚付床型
史料38『盆栽瓶花聚楽会図録』

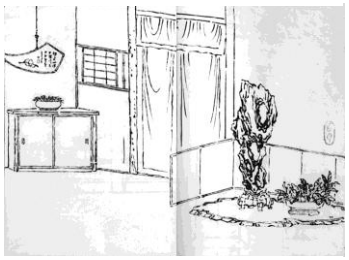


〔図 4-2〕 ⑤床＋床脇Ⅱ型
史料23『柳亭清賞』

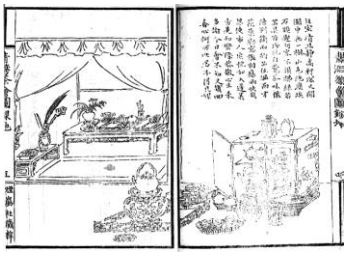
〔図 4-3〕 床＋床脇Ⅲ型
史料24『随意荘雅集録』



〔図 4-4〕 ⑦両床脇型
史料43『殿工茗醼図録』



〔図 4-5〕 ⑩棚型
史料42『豫章堂茗醼図録』



〔図 4-6〕 複数室型
史料3『青湾茶会図録』

第２項　時代的特質

各煎茶会図録における煎茶席の平面構成について、「茶席、前席・副席、展観席・陳列席、その他」の４つに大別した席種別に、先述の 14 種類の平面型に基づいて、時代順に分布をまとめると〔表 4-3 〕のとおりとなる。

挿図から平面構成が読み取れる 378 席（このうち４席は座敷飾を２つ確認できるため、読み取れる平面の総数は 382 となる。）について、各時代の図録の本数と描写数をみると、江戸末期が４本 37 席、明治前半が 20 本 137 席、明治後半が 19 本 113 席、大正期が８本 95 席となる。１本あたりの描写数は大正期が最も多く、この頃の図録に席の空間を捉えた挿図が豊富にあったことが分かる。

次に、各時代における平面構成の特質を述べる。

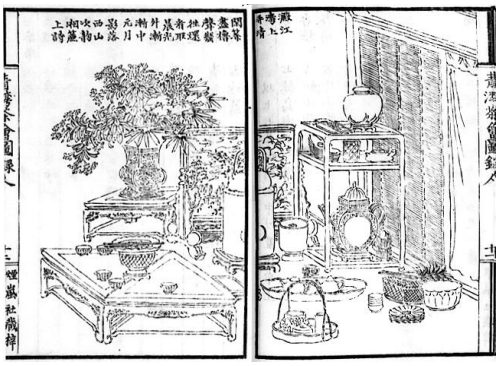
（1）江戸末期

江戸末期 37 席における平面構成の分類内訳は、①壁床型６席、②床型７席、④「床＋床脇Ⅰ型」５席、⑥「床＋床脇Ⅲ型」・⑨「床＋床脇＋付書院型」・⑩棚型各１席、⑪単室型７席、⑫複数室型１席、⑬亭・⑭船各４席となる。床のみの席が 13 席(35.1%)、床と床脇等からなる席は７席(18.9%)、床のない席が半数弱の 17 席(45.9%)を占めており、道具を飾るための床脇等を備えた平面構成が少ない。床のみの席でも、掛幅を飾るだけの簡明な①壁床型が半数みられ、純粋に茶事を楽しんでいた時代である。

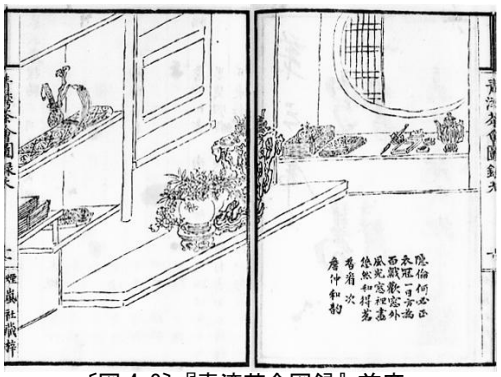
席種別にみると、茶席で床のある席は７席あるのに対し、床のない席が２倍を超える

15 席みられ、特に⑬亭や⑭船等の独立した席が７席ある。また、①壁床型や⑪単室型〔図 4-7 〕、⑫複数室型では座敷飾に縛られず、机や棚、盆を飾りの場として自由に配置し、席主の趣向を表現している。

本席に付随する前席・副席では、床のみの席が７席、床と床脇等からなる席が５席で、床のある席が計 12 席に対し、床のない席は１席のみである。茶席に入る前の客を楽しませるために、座敷飾に道具を飾ったのである〔図 4-8 〕。その他、展観席は④「床＋床脇Ⅰ型」、酒席は⑭船に設けられている。



〔図 4-7〕『青湾茶会図録』茶席　⑪単室型



〔図 4-8〕『青湾茶会図録』前席

（２）明治前半

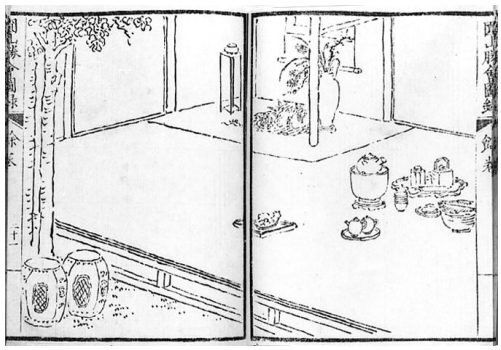
明治前半における平面構成の分類内訳は、①壁床型 22 席、②床型 46 席、③棚付床型１席、④「床＋床脇Ⅰ型」27 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」・⑥「床＋床脇Ⅲ型」各２席、⑦「両床脇型」１席、⑧「床＋付書院型」４席、⑨「床＋床脇＋付書院型」７席、⑩棚型１席、⑪単室型 15 席、⑫複数室型３席、⑬亭２席、⑭船３席、挿図に床の描写はないが目録から床のみの席とわかる席が１席となる。床のみの席が 70 席(51.1%)と半数を占め、床と床脇等からなる席は 43 席(31.4%)、床のない席が 24 席(17.5%)となり、江戸末期と比較すると床のない席の割合が２割以下に減少し、多くは床のある席となる。特に、床のみの端正な平面構成が大半を占めており、席の主題を表現する場である床が重視されたことが伺える〔図 4-9 〕。

席種別では、描写数が 78 席にのぼる茶席において床のある席は 69 席と茶席全体の９割近くを占め、床のみの席が 46 席と、床と床脇等からなる席 23 席の２倍近くみられる。このうち②床型 32 席、④「床＋床脇Ⅰ型」15 席と標準的な形の床が好まれている。また、床のない茶席は９席あり、全体に対する比率は江戸末期と比較すると下がったものの、⑭船のように特別の趣向による席がみられる。次いで描写数が 39 席と多い

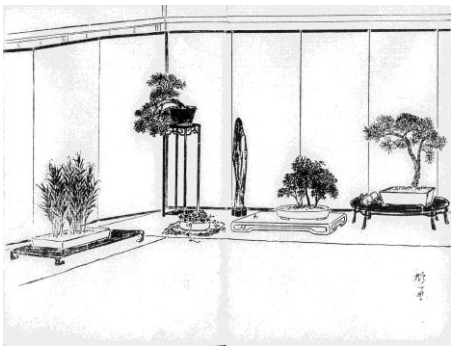
前席・副席においては、床のみの席が重宝された茶席に対して、床と床脇等からなる席が床のみの席とほぼ同じ割合となっている。

明治前半の茶会は、上述した茶席とそれに付随する前席・副席で構成されることが大半であるため、展観席は計８席描写されるのみである。その他の席は、酒席が①②④⑧⑪とすべて異なる形態で、床のある席が４席である一方、奏楽席では②⑬⑭各１席・⑪２席で、床のない席が４席となっている。

なお、床のみの席 69 席のうち 27 席を『円山勝会図録』、床のない席 25 席のうち９席を『青湾茗醼図誌』が占めているため、明治前半の平面構成の傾向は、明治９年(1876)に刊行されたこの２本の図録のデータに影響されるところが大きい。



〔図 4-9〕『円山勝会図録』茶席



〔図 4-10〕『盆栽瓶花聚楽会図録』展観席

（３）明治後半

明治後半には床のみの席が 47 席(41.6%)、床と床脇等からなる席は 51 席(45.1%)、床のない席が 15 席(13.3%)となり、床のみの席と、床と床脇等からなる席の割合が逆転する。分類の内訳は①壁床型４席、②床型 37 席、③棚付床型４席、④「床＋床脇Ⅰ型」19 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」13 席、⑥「床＋床脇Ⅲ型」１席、⑦「床＋両床脇型」５席、⑧「床＋付書院型」３席、⑨「床＋床脇＋付書院型」９席、⑩棚型２席、⑪単室型 13 席、挿図に床の描写はないが目録から床のみの席とわかる席が２席となる。明治前半と同じく、②床型や④「床＋床脇Ⅰ型」、⑨「床＋床脇＋付書院」という標準的な座敷飾が多用される一方で、それ以外の平面構成も数が増加しており、座敷飾自体に多彩さがみられるようになる。こうした中で、①壁床型が少数になり、⑬亭や⑭船が姿を消す。

席種別では、茶席ではすべての席に床があり、床のみの席が 26 席、床と床脇等からなる席が 20 席となり、床のみの席の割合が減少する。茶事が主体の茶席であっても、床脇（棚）に道具等を飾って鑑賞できるような平面が好まれたと考えられる。こうした

床のみの席の減少傾向は、茶席以外の席ではさらに顕著になる。27 席ある前席・副席では、床のみの席が８席となり、床と床脇等からなる席が 11 席、床のない席が８席となる。床のない席でも、⑩棚型もしくは⑪単室型に机や棚を置いて道具を陳列している。

書画および盆栽の展観席は全体の３割ほどの 33 席みられ、このうち床と床脇等からなる席が半数の 16 席を占める。床のない席は全て⑪単室型で、挿図から展観席の様子をみると、書画や盆栽を部屋の四周に並べていることから〔図 4-10 〕、床がない方がむしろ都合が良かったともいえる。

その他、酒席および酒飯席は、５席のうち３席が⑨「床＋床脇＋付書院型」という最も格式が高い座敷飾となっている。

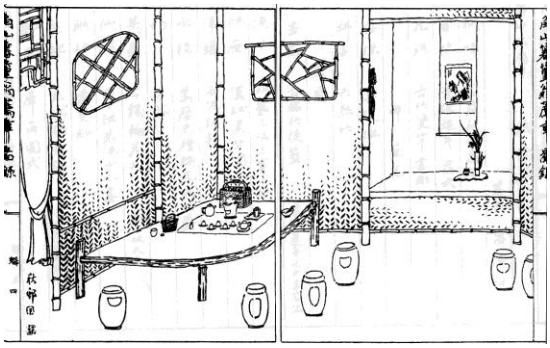
（4）大正期

大正期には床のみの席が 46 席(48.4%)、床と床脇等からなる席は 49 席(51.6%)、床のない席が０席となる。明治後半の流れのまま、床のみの席と、床と床脇等からなる席の割合がおよそ同じであるが、床のない席がほぼ姿を消しており、席を構成するうえで床があることが当然となったといえる。平面構成の分類内訳は①壁床型１席、②床型 42 席、③棚付床型３席、④「床＋床脇Ⅰ型」20 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」14 席、⑦「床＋両床脇型」６席、⑧「床＋付書院型」５席、⑨「床＋床脇＋付書院型」４席となる。標準的な平面構成の②床型、④「床＋床脇Ⅰ型」、⑤「床＋床脇Ⅱ型」に偏りがみられ、席の構成が形式化していたことが伺える〔図 4-11 〕。

そのような中で、②床型の座敷飾をもつ「亭」が史料 48『角山箸篁翁薦事図録』〔図 4-12〕に１席みられる。この煎茶会は、当時の大煎茶会の殆どに関係していた美術商の角山翁山中吉郎兵衛（山中箸篁堂）の三回忌のために開催され、各席に趣向が凝らされており、江戸末期から明治前半の煎茶会を懐古した特色のある茶会構成が感じられる。

席別にみると、茶席では床のみの席が 23 席、そのうちほとんどが②床型の 21 席、床と床脇等からなる席が 16 席、そのうち半数近くが④「床＋床脇Ⅰ型」の７席となっており、これは明治後半から続く傾向である。前席・副席では、やはり道具を飾る場である床脇等と床からなる席が好まれる。展観席では床のみの席が再び増加するが、これは床のない席を用いなくなったことから、端正な②床型が選択されたと考えられる。いずれにしろ、どの席種においても平面構成の固定化が感じられる。その他の席は５席とも酒席で床のある席であるが、平面構成は②④⑤⑧⑨と異なる形態である。

〔図 4-11〕『雙軒庵記念茗醼図録』



〔図 4-12〕『角山簪篁翁薦事図録』亭

（5）時代的特質のまとめ

江戸末期から明治前半にかけては茶席と前席・副席が主となり、床のある席においては床のみの席が多く、中でも②床型と①壁床型がおよそ２：１の割合となっており、壁床に掛けた掛幅の前に机や盆で自由に飾る様子が見られる。床のない席も多くみられ、それらはほぼ茶席で、⑬亭や⑭船など独立した茶席が設けられた。明治後半になると鑑賞を目的とする展観席が全体の３割を占め、それに呼応して飾りの場となる床脇（棚）や付書院のある平面が全体の半数を占めるほどに増加する。その中で④「床＋床脇Ⅰ型」が最も好まれる一方、床の内部に棚を設けた③「棚付床型」や、床と床脇が直交する⑥「床＋床脇Ⅲ型」、床の両脇に床脇がある⑦「両床脇型」、棚を床のように用いる⑩「棚型」など、床と床脇（棚）を組み合わせた多彩な座敷飾が用いられる。それに対して①壁床型が大幅に減少し、床のない席では⑬亭や⑭船が姿を消す。大正期には茶席と展観席が主となり、ほぼすべてが床のある席となり、中でも標準的な平面構成の②床型と④「床＋床脇Ⅰ型」が全体の３分の２を占める。

つまり江戸末期は茶事そのものに主眼が置かれ、座敷飾に縛られることなく自由な席を構成していた。これは、建築と密接に関係することで定型化していった抹茶への反発が表れたものと考えられ、煎茶を象徴する道具の一つである可動する炉（涼炉という）が可能にしたことといえる。加えて、⑬亭や⑭船を積極的に用いている点は、中国文人の生き方への憧憬が如実に表れており、煎茶の精神性を色濃く感じることのできる構成である。

明治前半は、煎茶を知る幕末の志士達が政財界の中心となったことで、煎茶への注目度が一気に高まり、その自由さと華やかさ故に煎茶への理解が深まるより早く流行が広がったと想像できる。その時、茶会の席づくりで参考にしたのは、⑬亭や⑭船のような

席が設けられていることからも、『青湾茶会図録』が大きな影響を与えたことは間違いないが、その精神性まで理解が及んでいたかどうかは疑問が残る。むしろ、「床に軸を掛ける」という以前からの定型に当てはまる部分が読み取られたことで、８割が床のある席となったと理解すると、標準的な形の床が多く用いられたことも頷ける。

明治後半は、煎茶が支配権力層と結び付きを強めたことで、道具等の鑑賞に重きが置かれるようになったために、茶席が減少する一方で展観席が増加する。これに呼応して、道具を飾る場として床脇（棚）等をもつ平面、もしくは道具を陳列した机や棚を配置しやすい⑪単室型が用いられた。また、中国文人への憧憬は、そのまま中国趣味へと繋がっていき、上流階級の邸宅などに中国風の意匠や素材が採用されるようになると、座敷飾も多彩な造りのものが出現した。そして、酒席や酒飯席は、中国文人の嗜みを示す「琴棋詩酒」という言葉があるように、本来、詩を作って酒を飲むための席であった。しかし、明治後半頃には、煎茶会に集った客達が会食する社交の場として、茶席以上に客をもてなす意味合いが強くなり、その結果、付書院まで備えた最上級の座敷飾の平面構成が用いられた。

大正期になると、家元制度の確立による茶事の形式化に伴い、用いられる平面構成が固定化していった。

〔表4-3〕時代別平面一覧表

| 史料名 /Title | 平面型 /Plan Type | 席種 /Kind | Edo/江戸末 | | | | First Half of Meiji/明治前半 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Latter Half of Meiji/明治後半 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | Taisho/大正期 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

〔表4-4〕地域別平面一覧表

| 史料名 /Title | 平面型 /Plan Type | 席種 /Kind | Tokyo/東　京 | | |

第３項　地域的特質

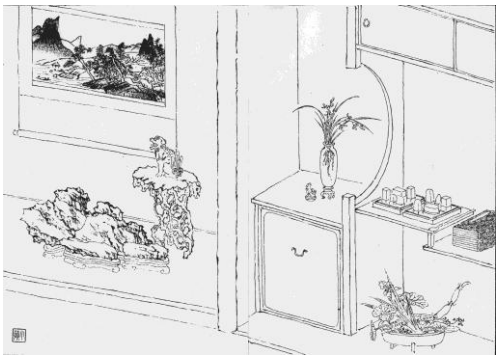
各地域の図録の本数と描写数は、東京より北の山形が１本３席、東京が 12 本 69 席、東京と京都間の長野・滋賀・岐阜が３本 17 席、愛知が７本 30 席、京都が 10 本 97 席、大阪が 13 本 159 席、大阪より西(和歌山・香川・鳥取・福岡・長崎)が５本７席となる。描写数が多いのは大阪であり、図録の本数に対する描写数を考えても京阪の図録に挿図が豊富なことが分かる。

次に、主な地域における平面構成の特質を述べる。

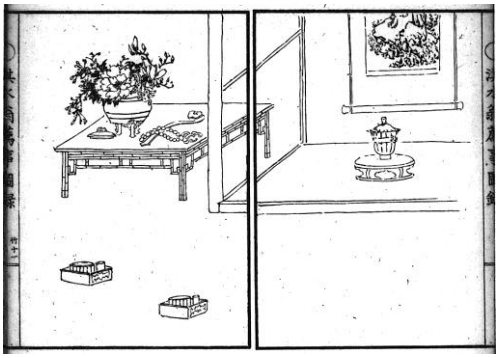
（1）東　京

平面構成の分類内訳は①壁床型５席、②床型 20 席、③棚付床型１席、④「床＋床脇Ⅰ型」21 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」10 席、⑥「床＋床脇Ⅲ型」１席、⑦「床＋両床脇型」２席、⑨「床＋床脇＋付書院型」３席、⑪単室型４席、⑭船１席となり、②④を合わせると全体の６割を占める。床のみの席が 27 席(39.1%)、床と床脇等からなる席が 37 席(53.6%)、床がない席が５席(7.2%)であり、各地域の中で唯一、床と床脇等からなる席が全体の半数を占める。これはこの地域で展観席が多いことからも伺えるように、道具等の鑑賞への関心が高い地域であったといえる〔図 4-12〕。

席種別にみても、どの席種も床と床脇等からなる席が床のみの席を上回る。茶席は 24 席中 23 席に床があり、そのほとんどが標準的な平面である②床型と④「床＋床脇Ⅰ型」である。展観席は茶席の数を上回る 33 席あり、その中で床がない⑪単室型が４席あるのは、机や棚を用いて多くの文房具を陳列したり、部屋の四周に盆栽を並べるなど、あえて主題を掲げずにより多くの陳列品をみてもらう博覧会的な発想によるものであろう。他に酒席は①壁床型もしくは②床型の席である。



〔図 4-12〕『随意荘雅集録』座敷飾り



〔図 4-13〕『淇水翁薦事図録』茶席

（2）愛　知

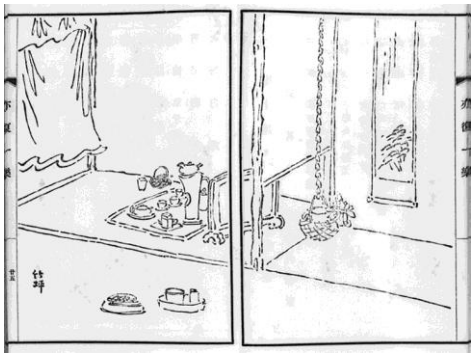
床のみの席が 16 席(53.3%)と半数以上を占め、床と床脇等からなる席が 7 席(23.3%)、床がない席が 7 席(23.3%)で、平面構成の分類内訳は①壁床型 4 席、②床型 11 席、③棚付床型 1 席、④「床＋床脇Ⅰ型」 4 席、⑥「床＋床脇Ⅲ型」・⑦「床＋両床脇型」・⑨「床＋床脇＋付書院型」各 1 席、⑩棚型 1 席、⑪単室型 6 席となる。②床型に次いで⑪単室型が多用されるのは、個人邸などの小規模な会場で開催されたために、部屋の選択肢に限りがあったと考えられる。

席別にみると、展観席がほとんどなく、茶席と前席・副席で構成されており、茶席では 14 席中 10 席と床のみの席が多い〔図 4-13〕。

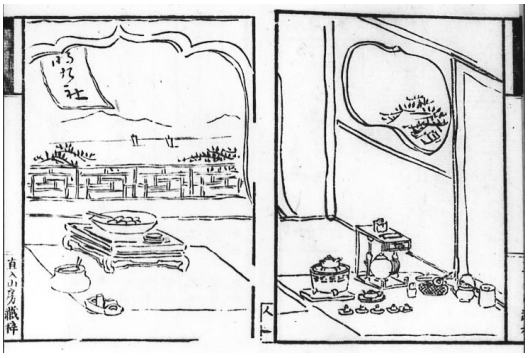
（3）京　都

床のみの席が 56 席(57.7%)と全体のほぼ 6 割を占め、床と床脇等からなる席が 31 席(32.0%)、床がない席は少なく 10 席(10.3%)であり、床のみの席が各地域のなかで最も高い割合を占める。これは、茶事に関心を寄せていたことを伺わせる。分類の内訳は①壁床型 13 席、②床型 42 席、④「床＋床脇Ⅰ型」 11 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」 4 席、⑦「床＋両床脇型」 4 席、⑧「床＋付書院型」 7 席、⑨「床＋床脇＋付書院型」 5 席、⑩棚型 1 席、⑪単室型 8 席、⑬亭 1 席、挿図に床の描写はないが目録から床のみの席とわかる席が 1 席となり、②①④⑪の標準的な平面構成が好まれるとともに、付書院のつく⑧⑨の席が全体の 1 割以上ある。

席種別にみると、茶席が 61 席(62.9%)と 6 割を超しており、そのうち 42 席が床のみの席で①壁床型 8 席、②床型 34 席である。床のない茶席は 1 席のみであった。前席・副席や展観席、奏楽席では床のない⑪単室型が計 8 席見られる。前席でも 23 席中 12 席と床のみの席が多いが、展観席では床と床脇等からなる席が 9 席中 5 席となる。他に酒席の 2 席には付書院が付く。



〔図 4-14〕『亦復一楽茶会図録』②床型



〔図 4-15〕『直入翁寿筵図録』⑪単室型

（4）大　阪

床のみの席 60 席(37.7%)、床と床脇等からなる席 63 席(39.6%)、床がない席 36 席(22.6%)であり、床がない席が２割強と高い割合を占め、床のみの席と、床と床脇等からなる席がほぼ同数である。分類の内訳は①壁床型７席、②床型 49 席、③棚付床型４席、④「床＋床脇Ⅰ型」26 席、⑤「床＋床脇Ⅱ型」14 席、⑥「床＋床脇Ⅲ型」２席、⑦「床＋両床脇型」５席、⑧「床＋付書院型」５席、⑨「床＋床脇＋付書院型」11 席、⑩棚型３席、⑪単室型 17 席、⑫複数席型４席、⑬亭・⑭船は各６席となり、①から⑭すべての種類が見られ、多彩な席が設けられている〔図 4-15〕。

席種別にみると、茶席では床のみの席が 29 席、床と床脇等からなる席が 20 席、床のない席が 23 席で、偏りがあまりない、特に、床のない席 35 席のうち 23 席が茶席であり、多様な茶席が構成された地域といえる。一方、前席・副席や展観席では、床のない席が少ないことから、床のある席が好まれた。また、酒席では９席中７席が床と床脇等からなる席で、付書院がつく席が４席みられる。奏楽席は⑬亭や⑭船に設けられる。

（5）その他の地域

地方においては、席数が少ないために傾向は出にくいが、②床型・④「床＋床脇Ⅰ型」・⑪単室型の標準的な平面構成がみられる。これは、好まれていたというより、個人邸で開催された小規模な茶会であったことが影響したものと考えられる。

（6）地域的特質のまとめ

以上、東京では床のみの席よりも床と床脇等からなる席の割合が高く、さらに展観席が多いことから、茶事よりも道具の鑑賞に重点が置かれ、平面構成もこれに適した飾る場を確保できる床脇（棚）や付書院のついた席が用いられた。京都では床のない席が少ない点では東京と同じであるが、床のある席では東京と全く異なる傾向を示す。茶席が大半を占めていることからも、茶事を楽しむことが重視され、席の主題を明確に表現できる床のみの席が好まれた。大阪は亭や船に席を設けるなど平面構成が多彩で、茶事と道具の鑑賞を均衡よく構成している。やはり、後の煎茶会に大きな影響を与えた煎茶会図録の先駆史料３『青湾茶会図録』(文久３年・1863)の刊行地として、早くからそうした素養があった地域といえる。地方(愛知を含む)では、個人邸等が会場となる小規模な茶会であったためか、標準的な平面構成がみられる。

第４節. 小　結

以上、煎茶会図録 51 本について、座敷飾を中心に平面構成に注目して分析を行った結果、次のことを明らかにすることができた。

ⅰ　煎茶席の平面構成は、14 種類に分類することができる。

ⅱ　時代的特質としては､江戸末期は茶事そのものに主眼が置かれ､抹茶への反発から、煎茶を象徴する道具の一つである可動する炉（涼炉）を用いることで、座敷飾に縛られることなく、中国文人の生き方への憧憬を表出した自由な席を構成していた。明治前半は、煎茶への注目度が一気に高まる一方で、その精神性まで理解が及ばず、「床に軸を掛ける」という以前からの定型に当てはまる部分が読み取られたことで、８割が床のある標準的な平面形の席であった。明治後半は、道具等の鑑賞に重きが置かれるようになったために、道具を飾る場として床脇（棚）等をもつ平面、もしくは道具を陳列した机や棚を配置しやすい⑪単室型が用いられた。また、中国趣味の導入と同時に、座敷飾も多彩な造りのものが出現した。そして、煎茶会に集った客達が会食する社交の場として、酒席には最上級の座敷飾が用いられた。大正期になると、家元制度の確立による茶事の形式化に伴い、用いられる平面構成が固定化していった。

ⅲ　地域的特質としては、東京では展観席が多く、茶事よりも道具の鑑賞に重点が置かれ、床脇や付書院からなる席が好まれた。一方、京都では茶席が大半を占めており、茶事を楽しむことが重視され、その中で席の主題を明確に表せる床のみの席が好まれた。大阪は席種も平面構成も多彩で、茶会の構成に趣向が凝らされている。

第５章

煎茶席の使われ方

第５章　煎茶席の使われ方

第１節　目録にみる道具とその名称

第４章第１節で述べた通り、煎茶席で用いられた道具は以下の 12 種類に分類できる。

①茶具、②書画、③香具、④花具、⑤文具、⑥仏具、

⑦楽器、⑧酒具、⑨抹茶道具、⑩家具、⑪屏障具、⑫その他

煎茶会図録で登場する道具は各図録によって呼び名が異なっており、本研究ではモデル化にあたって、一つの呼び名に統一した。全図録で登場した異なる呼び名についてはここで全て紹介しており、各図録での道具の呼び名は〔表 5-1〕に示す。なお、道具名称の後の＜　＞内は平面モデル化の際､各道具を１文字で表すために用いた文字を示す。

①茶具

茶事を行う際に用いる道具は、抹茶と比較すると煎茶ではその数が大変多い。また、一般になじみのない道具が多く、その名称も漢字を音読みするなど、聞きなれないものが多い｡よってここでは各道具の用途を説明しながら､名称を紹介していくこととする。

・**涼炉**（りょうろ）＜炉＞：煎茶具を描いた書画の大半に登場しており、煎茶道具を最も象徴する道具の一つである。煎茶用の焜炉で細長い形のものが多く、絵付けがされている物もある。

多くの図録で「涼爐」と呼ばれ、時代による変化は見られない。他には、ただ「爐」「鑢」「罏」と呼んだり、「瓦爐」やその形から「三峯爐」と呼ばれることもある。涼炉の代わりに、抹茶にも用いられる「風爐」や、「火爐」（他に「餅掛」「瓶掛」「瓶懸」とも呼ばれる）を用いることもあるが、その用途に涼炉との大きな差が認められなかったため、モデル化では涼炉と同じ表記とした。

また、涼炉を置く台として**炉台**（ろだい）がある。図録では「爐座（坐)」と呼ばれることが多く、他に「坐」「爐臺（台)」「臺」「爐盤」「爐氈」とも呼ばれる。涼炉の下に敷かれるため、今回のモデル化では涼炉の一部と捉え、特に表現していない。

・**湯沸**（ゆわかし）＜湯＞：涼炉の上に掛けて湯を沸かすための道具で、急須に良く似た形のものが多く、ボーフラとも呼ばれている。

図録では「湯鑵（罐・灌)」「湯銚」「湯瓶（瓶・餅)」「湯沸」「湯騰」「鳴泉」「沙罐」「急焼」など多くの名で登場する。中でも「鳴泉」は『清娯軒茶筵図録』(明治 16 年)

など愛知の図録で見られ、愛知独自の呼び名と考えられる。しかし、「ボーフラ」という呼び名は図録では登場せず、湯沸の俗称として『青湾茶会図録』（文久３年）に「湯鑵　砂缾急須式俗曰保冨良有大竹節坐」と記載されている程度である。

また、湯沸を炉から降ろしたときの台として**罐座**（かんざ）があるが、図録では「鑵座」「罐座」「床」として目録には登場するものの、挿図に表われないことが多かったため、モデル化では表現していない。

・**茶心壷**（ちゃしんこ）＜壷＞：茶葉の入れ物で錫製が多いが、陶磁器製や木製などもある。

図録では「茶心壷」が一般的だが、「分茶盒」「分茶壷」「分茶鑵」の名もよく見られ、他に「茶鑵」「茶貯」「茶壺」「茶入」とも呼ばれる。

また、香煎席における香煎入について、図録では「香煎壷」「香煎入」「振出」の名で見られ、茶席における茶心壺と同様の働きをする道具と考えられる。

・**仙媒**（せんばい）＜仙＞：必要な量の茶葉を茶心壺から量り移して、茶銚に入れるための道具である。大小さまざまなものがあるが、大きいものは文字を書く時に用いられる腕枕と混同されることもある。竹製のものが多く、花鳥山水や詩が刻まれる。

図録では 1880 年頃まで「茶合」の名が使われていたが、以後「茶量」が主流となり、1894 年以降には「仙媒」「仙梅」の名も見られるようになっている。他に「茗量」とも呼ばれる。

・**袱紗**（ふくさ）＜袱＞：茶具を清めるために用いられる。通常は上記の茶心壺と仙媒を清めるために用いられることから、この３点はセットで置かれることが多い。しかし、その風習も点前の形式化が始まった明治末期からのことであり、それ以前に袱紗が道具として登場することは少ない。

図録では明治末期以降「帛紗」「袱子」「袱紗」「更紗」「不洗巾」「包袱」の名で頻繁に登場するが、それ以前には「帛紗」「袱紗」「帛」「包袱」「襆」の名が少しの図録に登場するだけである。

・**茶銚**（ちゃちょう）＜銚＞：茶を淹れるためのいわゆる急須で、直接炉に掛けることはない。

図録では「茶銚」と呼ばれることが多いが、「茗注」「茶注」の名もよく見られ、他に「注春」「茗壷」とも呼ばれる。中でも「注春」は『清娯軒茶筵図録』（明治 16 年）など愛知の図録で見られ、愛知独自の呼び名と考えられる。

また、茶銚の台として**銚座**（ちょうざ）があり、図録では「茗注盆」「茶注盆」「茶銚敷」「茶銚盆」「茶銚坐」「茶銚盒」「茶盆」「茗盤」「銚座（坐）」「銚盆」「銚托」「瓶坐」と多くの名で登場するが、挿図に表われないことが多かったため、モデル化では表現していない。

・**茗碗**（めいわん）＜碗＞：煎茶で用いられる茶碗は大変小さく、お酒を飲むお猪口ほどの大きさが一般的である。永谷宗円が新しい茶葉の製法を開発してからは、お茶の色が楽しめるように、中が白いものが用いられるようになっている。

図録では「椀（盌）」「茶碗（盌）」「茗碗（盌・椀）」「𤭢」「茶盞（𤭢・箋）」「茗盞（𤭢）」「茗杯」「茶鍾」など多くの名で登場する。

また、茶碗を収めるための筒状の入れ物を**碗筒**（わんとう）というが、図録では「椀筒」「筒」として少数の図録に登場する。モデル化では茶碗と同じ表記とした。

・**托子**（たくす）＜托＞：茶碗をのせる小さな盆で、一般的な茶托と用途は変わらない。錫製や木製など材質は様々で、形も小判形や丸形などがあり、茶碗とのバランスで選ばれる。図録では「托子」が一般的で、他に「茶托」「𤭢托」「槖子」「槖盆」「盤」の名が見られる。

・**盆**：ここでは点前で使用する盆のことを指し、多くは茗碗を客まで運ぶ際に用いられる。図録では「盆」「茗盆」「茶盆」「茶具盆」「湯盆」「瓶盆」の名で登場する。

・**水注**（すいちゅう）＜水＞：抹茶でいう水指のことで、点前で使う水を入れておき、湯沸の水が減った場合に水を注ぐ道具である。

図録では初めこそ「雲屯」「水曹」「水甌」「水甕」「水壷」など多種の名前が見られるが、明治以降は「水注」が一般化し「水罐」「水指」の名が１回ずつ登場するのみである。

また、水甕などでは水を注ぐ際に**杓**（しゃく）を用いる。図録では「杓」「犠杓」「瓢杓」「匙」「匕」「水匙」として目録に登場する。さらに杓を置く台として**杓座**（しゃくざ）が、「杓座（坐）」「瓢座」の名で登場するが、両者とも挿図に描かれないことが多く、描かれても水注の傍に置かれているため、モデル化では表現していない。

・**巾筒**（きんとう）＜巾＞：茶碗を清めるための茶巾を入れておく筒状の器のことで、蓋付のものを巾盒と呼ぶ。

図録では「巾筒」が一般的だが、「巾座（坐）」「巾臺（台）」「巾置」「巾床」「巾承」「巾盤」「巾籃」「巾碟」「椀巾盒」「茶巾筒」など多くの名が見られる。

・**烏府**（うふ）＜烏＞：炭取りのことで、竹や籐で編まれたものがほとんどである。図録ではほぼ全て「烏府」と呼ばれているが、「炭斗」の名が一部に見られる。

　また、烏府の中に入る道具として**羽箒**（はぼうき）と**火箸**（ひばし）がある。羽箒は炉の灰を掃き清める道具で、図録では「箒（帚）」「羽箒（帚）」と呼ばれ、火箸は炉の中の炭を操作する道具で、図録では「箸」「火箸」「火筋」「火筴」「火叉」と呼ばれる。いずれも烏府の中に入れられているため、モデル化では特に表記していない。

・**炉扇**（ろせん）＜扇＞：煎茶道具として最も象徴的な道具の一つである。涼炉の口から風を送って火を起こすための団扇だが、通常の団扇に比べると面が小さく、柄が長い。図録では頻出しないが「爐扇」「羽扇」「扇」「団扇」の名で登場する。

・**滓盂**（しう）＜滓＞：茶滓を入れるための器である。図録ではほとんどが「滓盂」だが、他に「落葉壷」「落葉」「滓盆」の名が見られる。

・**建水**（けんすい）＜建＞：茶銚や茶碗を洗った水をすてる器である。図録では全て「建水」の名で登場するが、あまり頻度は多くない。

・**茶箸**（ちゃばし）＜著＞：茶銚の中の茶滓を取り除くために用いられる箸である。図録では茶箸ではなく、茶箸を納める著瓶として記載されることが多く、「箸瓶」「箸壷」「小瓶」「小缾」「小壷」の名で見られる。

・**菓子器**（かしき）＜菓＞：茶菓子を盛り付けるための器である。図録では「盂」「菓（果）盂」「菓器」「菓盆」「菓盒」「菓子盂」「菓（果）子器」「菓子盆」「菓子鉢」「菓子碟」「盛菓盂」「盛菓器」「餅餌盂」「餅餌器」「餅餌盆」「餅餌盤」「點心盂」「點心器」「點心盆」など多くの名で登場する。

・**器局**（ききょく）：茶道具一式を納めるための茶箪笥が小型化し、持ち運びできるようになったものである。煎茶の道具としては古くから存在し、図録でも全て「器局」の名で登場する。

・**棚**：煎茶で用いられる棚は、宗匠化に伴い各宗匠が好む型の棚が考案され、多様化している。図録では「茶棚」「棚」「茶架」「籃架」「架」「具列架」「凹字架」「具列案」「具列」「具列床」「茗具床」など多くの名で登場する。

・**提籃**（ていらん）：竹などで編まれたかごで、茶具一式を入れて持ち運べるようになっており、主に野外の席で用いられる。図録では「提籃」「携籃」の名で登場し、室内でも用いられている。

・**茶具敷**（ちゃぐしき）：煎茶席の茶具の下に敷くもので、一定した大きさはないもの

の、横が畳の短辺よりやや短く、縦が 60cm ほどのものが多く用いられる。ただし、その風習も点前の形式化が始まった明治末期からのことであり、それ以前には茶具敷が目録に登場することは大変少なく、挿図における茶具敷の登場は、点前の在り方を考える上で大変重要な意味を持つ。図録では「茶具氈」「茶具氈」「茶具敷」「茶具鋪」「茶具褥」「茗具帊」「敷布」「具列氊」「茗氈」として登場する。

・**炉屏**（ろびょう）：炉先に飾る屏風、もしくはそれに類するもののこと。細い竹を氷裂に組んだものや、表具仕立てで絵付けがされているものなど、様々な形のものがある。図録では「爐屏」「坐屏」「屏」「六曲小屏」「圍屏」「爐欄」「結界」など多くの名で登場する。

・**旗**：席名などを書いて茶席の開口部から外部に掲げている。図録では明治時代初期までに「旗」の名が少数みられた後は、『亦復一楽茶会図録』（大正７年）で「茶旆」が１回みられるのみである。モデル化では特に表現していない。

器局以下５つの道具は、家具や屏障具としての用途が大きいため、１文字では表していない。表記については〔表 4-1〕を参照されたい。

②書画

・**幅**＜幅＞：いわゆる掛軸のことで、床を飾り、各席の主題を最も表す大変重要な道具である。形式は書と画があり、作者は明清などの中国の文人、黄檗宗の住持、日本の文人が珍重される。図録では「掛幅」が一般的だが、「幅」「床幅」「掛軸」「掛物」の名もみられる。

　また、幅に関わる道具として、幅を掛けるための「掛幅竿」「掛竿」「軸竿」や、幅が風で揺れるのを防ぐ「風鎮」も少数の図録の目録に名がみえる。

・**額**＜額＞：横長で長押の上に掛かるもの、正方形に近い形をして壁に掛かるものなど、様々な形態がある。図録では「匾額」「扁額」「額」「掛額」「懸額」「掛匾」「披盤」「碑板」「牌匾」の名で登場する。

・**聯**（れん）＜聯＞：一対になって、柱または壁などの左右に相対してかけて飾りとする細長い書画の板で、中国ではよく見られる。図録では「聯」「楹聯」の名で早くから登場するが、『直入翁寿筵図録』（明治 13 年）以後は１回登場するのみである。

・**書**＜書＞：ここでいう書とは、幅などに書かれた文字のことではなく、本の形になったもののことを指す。画譜や印譜などその内容はさまざまあり、席の中でも手にとっ

て鑑賞できる書画として、重要な道具である。図録では「墨本」「書」「帖」「帙」「冊」「書帖」「書帙」「小帖」「画帖」「画冊」「暦冊」「印譜」など多くの名で登場する。

また、これらの書を数冊まとめておく**匣**（はこ）として、「文庫」「匣」「文匣」「文函」「書函」の名がある。

・**巻**＜巻＞：いわゆる巻物で、図録では「巻」「巻物」「書巻」「画巻」「書画巻」の名で登場する。

また、巻をのせる盆として**軸盆**がある。図録では「架」「巻架」「巻座（坐)」「巻承」「巻置」「軸盆」の名で登場する。

・**扇**＜扇＞：扇面は絵付けが行われるため、書画と同様に扱うべき扇がいくつかある。図録では「扇面」「扇」の名でみられる。

扇の受けとして「扇承」の名もみえる。

・**屏風**：書画展観席や盆栽陳列席では無地の屏風も多用されるが、特に書や画が描かれたものが、部屋の装飾として用いられていることもあり、それらを書画として扱う。図録では単に「屏風」「屏」として登場することが多いが、「六曲屏」「八曲屏」など形態を細かく記載したものもみられる。屏風は、家具や屏障具としての用途が大きいため、１文字では表していない。

③香具

部屋を清めるための香をたくために、香具が必須となる。床飾りの中でも床の中心に飾られることが多く、各席において重要な道具の一つである。

・**香炉**＜炉＞：香をたくのに用いる器で、床飾りの中で最も重要な道具の一つである。ほぼ全ての図録において「香爐」として登場するが、他に「爐」「釣香爐」の名でもみられる。多くは卓や台の上にのって床に置かれており、これらは「爐台」「香爐台」「香爐盆」「爐盖坐」「卓」の名で登場する。

・**香盒**（こうごう）＜盒＞：香を入れておくための器で、様々な材質と形態のものが存在する。

図録では初め香炉とともに床飾りの一つとして飾られることが多かったが、1881年頃からはその位置を変え、烏府の中、もしくは傍に置かれるようになる。抹茶における、炭取りの中に香合を入れておく炭点前の影響があると考えられる。図録では「香盒（合)」が一般的だが、他に「香器」「香袋」「小盒」「盒子」の名もみられる。

・**香筒**（こうづつ）＜筒＞：線香を入れておくための筒だが、香合とは異なり、烏府の

中や傍に置かれることはない。図録では「香筒」「香線」「香架」の名でみられる。

また、香筒を置くための台として図録では「**筒座（坐）**」がある。

・**箸瓶**（ちょへい）＜箸＞：香をたく際に用いる道具を納めておく器のことで、細長い形をした小瓶が多く用いられている。図録では「箸瓶（缾）」「箸壷」「小瓶（缾）」「筋瓶（缾）」「瓶」「缾」「香筋」など多くの名でみられるが、目録の説明には「挿香具」とだけ書かれているため、名前から想像できる香箸以外の道具について、どのような道具が入っていたか詳細は不明である。また、1900 年に入るとほぼ道具として登場しなくなる。

・**香盆**：香具一式を陳列する盆で、図録では「香盆」が一般的であり、他に「盆」「香板」「香牀」の名がみえる。

④花具

・**花瓶**＜花＞**：**定められた形式にとらわれず、自由に花を活けるのが煎茶の花といわれている。文人華と呼ばれ、今日では生け花の世界でも一つの分野をつくっている。花材の取り合わせに意味合いを持たせ、雅題といわれる題名をつけて展観する。図録では「花瓶（缾・缾）」「瓶（缾）花」「花籃」「花器」「花生」「花筒」「花入」「壷」「籃」「小缾」「一枝瓶」「一輪生」「匾籃」など多くの名で必ず登場する。

また、花瓶を置く台として、「瓶卓」「卓」「瓶座」「臺」の名がみえる。

・**盆栽**＜盆＞：『分史翁薦事図録』（明治 16 年）で盆栽に特化した盆栽陳列席が設けられるようになるなど、煎茶席の中で最も重宝された花具といえる。図録では「盆栽」「盆景」「盤景」の名で登場する。

・**盆石**＜石＞：太湖石など奇石を展観する中国文化の影響が強く表れた花具である。図録では「石」「太湖石」「霊壁石」「古谷石」「錦山石」「鎮石」「坐石」の名で登場する。

・**盛物**＜盛＞：瓶花と同じく、花や果物、野菜、ときには石などを組み合わせ、そこに意味合いを持たせ、雅題といわれる題名をつけて展観する。盆や籠に盛るように飾りつけることから、盛物と呼ばれる。図録では「菓（果）籃」「菓（果）盆」「菓（果）盂」「菓（果）物」「菓（果）盤」「菓器」「盛菓器」「果物盆」「盛物」「盛籠」「竹籃」「籃供」「籃」「籠」「盆」「盂」「盤」「鉢子」など多くの名で登場する。

また、仏具の中でも最も重宝される如意に形が似ることから、如意という雅題をもつ**霊芝**（れいし）は、単独で「霊芝」「芝」という名で目録に登場する。

・**水盤**＜盤＞：盆栽に類し、浅い器に水を張って花を活け、他に盆石などを置いて展観

する。図録では「水盤」「盤」「水石」「石菖蒲」の名で登場する。

・**水注**＜水＞：特に花具のそばに置かれた水注のことは花具として扱った。図録では「水瓶（缾）」「水甌」「水注」「提桶」の名で登場する。

・**器**＜器＞：青銅器や玉器など、盆栽と同じく器に特化した展観席が設けられるようになるなど、煎茶席の中で重宝された道具の一つである。図録では「彝」「匜」「盂」「盆」「卣」「壷」「鼎」「缾」「瓶」「盉」「簠」「簋」「古銅器」「古銅簠」「膽瓶」「小瓶」「少瓶」「瓷鉢」など多くの名で登場する。

⑤文具

文具は文人にとって大変重要な道具である。文房（書斎）を硯、墨、筆、紙の四宝で飾り鑑賞することが流行し、四宝の他に硯山、硯屏、水滴、水中丞、筆架、墨床、紙刀、鎮子などの多様な小道具を加えた文房飾りは、煎茶席でも重要な道具とされる。

・**硯**＜硯＞：文房四宝の中でも永久的に使用できる硯は、消耗品である墨、筆、紙より、特別な扱いを受ける道具である。図録では「硯」が一般的であるが、他に「研」「木研」「墨池」「墨斗」の名もみられる。また、硯より小ぶりで筆先を湿らせる道具として**筆覘**（ひってん）があり、少数ながら「筆覘」「筆粘」「筆舐」「筆点」の名がある。

　さらに、硯が入った箱で**硯匣**がある。図録では「硯匣」「硯函」「硯箱」「硯筥」「硯盆」の名で登場するが、モデル化では硯と同じ表記とした。

・**硯屏**（けんびょう）＜屏＞：本来は硯に埃が入るのを防ぐために硯の向こう側に置く屏風であったが、飾りの意味が強くなった道具である。硯山と呼ばれる怪石を硯屏の代わりに置くこともある。図録では「硯山」「硯屏」の名でいくつか登場する。

・**墨**＜墨＞：文房四宝の一つで、硯で磨って用いるため、文房四宝の中でも硯とセットで考えられる。図録では全て「墨」の名で登場する。

　また、墨を置くための台として**墨床**（ぼくしょう）がある。図録では「墨床（牀）」と呼ばれることが多く、他に「床」「墨台（臺）」「墨碟」とも呼ばれ、文具の一つとして重宝された道具である。モデル化では墨の一部として捉え、特に表記していない。

・**筆**＜筆＞：文房四宝の一つで、象牙、堆朱、螺鈿、斑竹、紫檀などの工芸的に優れた筆管が重宝された。図録では全て「筆」の名で登場し、一部で携帯用の「矢立」の名がみられる。

　また、筆を置くための台として**筆架**（ひっか）がある。図録では「筆架」と呼ばれることが多く、他に「筆格」「筆床（牀）」「筆匣」「架」とも呼ばれ、文具の一つとし

て重宝された道具である。モデル化では筆の一部として捉え、特に表記していない。

- **筆筒**：筆を挿して置く筒で、いわゆる筆立てである。筆だけでなく、如意や払子などの仏具、笛などの楽器が立てられることもある。図録では「筆筒」が一般的だが、他に「筆沖」「筒」「竹筒」の名もみられる。他の道具を内包する用途であるため、１文字では表していない。
- **詩箋**（しせん）＜紙＞：文房四宝の一つだが、他の３つの道具に比べると煎茶席で用いられる頻度は少ない。図録では「詩箋」と呼ぶことが多く、他に「詩牋」「紙箋」「箋」「牋」「紙」とも呼ばれる。紙を入れる箱も少数みられ、「紙匣」「料紙箱」「料紙匣」とある。
- **鎮子**（ちんす）＜鎮＞：いわゆる文鎮で、紙や書物が風などで散らないように重しとしてのせる道具。図録では「鎮子」が一般的だが、江戸から明治初期に「鎮紙」、明治後期から大正に「書鎮」「帖鎮」の名が比較的みられ、名称が変化していることが分かる。他に「鎮帋」「文鎮」の名もみられる。
- **紙刀**（しとう）＜刀＞：紙を切るための刀。図録では「箋刀」「紙刀」「珍刀」の名で登場するが、頻度は少なく、文房飾りとしてはあまり用いられなかった道具と考えられる。
- **水滴**＜滴＞：硯に水をつぐ道具で、特に注ぎ入れる形をしたもののことをいう。『青湾茗醼図誌』（明治９年）、『分史翁薦事図録』（明治 16 年）のように水滴に花を活けて、文具のそばに置く花器のように用いる場合もある。図録では「水滴」が一般的だが、他に「硯滴」「水注」の名もみられる。
- **水盂**（すいう）＜水＞：硯に水をつぐ道具で、小杓を用いて一滴ずつ硯に水を入れるもののことである。しかし、筆を洗う用途を兼ねたものもあり、水中丞、筆洗など、口が広い水の入った器を総称して水盂と呼ぶ。図録では「筆洗」として登場することが多く、他に「水中丞」「水烝」「水盂」「水池」の名がみられる。
- **腕枕**＜枕＞：文字を書くときに、腕と紙がこすれて紙が汚れるのを防ぐために用いる腕をのせる台である。図録では「腕枕」の名がみられるが、ほぼ登場しない。
- **印**＜印＞：文房四宝には入らないものの、その工芸性と永久性から文具の中でも重宝される道具である。図録では「印材」が一般的だが、他に「印財」「印」「玉印」「印章」の名がみられる。また、印の入れ物として「印匣（函・箱）」「印窠」「印材入」「印材盆」があるが、平面モデルでは特に表現しなかった。

・**肉池**（にくち）＜肉＞：印を捺すのに用いる色料の器。図録では「印池」「肉池」「印色池」の名でみられる。

・**印矩**（いんく）＜矩＞：印を捺す時に、位置を定めて印影がゆがまないように用いる、丁字形または曲尺形の定規。図録では「印矩」の名がみられるが、ほぼ登場しない。

・**書具匣**：上記の文具を入れる箱である。図録では「書具匣」「文具匣」「文匣」「文庫」「画其箱」の名で登場する。

⑥仏具

煎茶会は様々な主旨で開催されるが、中でも先考を追薦するための茶会がたびたび開催されている。そこで仏事に用いる道具である仏具が、煎茶会では頻繁に登場する。

・**数珠**＜珠＞：仏具の中で特に頻出するのが、この数珠と、後述する如意、拂子の三点である。多くは床柱に掛けられる形で飾られ、後には仏具という性格から離れ、柱掛という装飾道具として捉えられるようになる。図録では「念珠」「珠数」「数珠」「珠」の名で登場し、明治末から大正で「念珠」の名が定着している。

・**如意**（にょい）＜如＞：その名の通り“意の如くなる”ところから出た語である。仏具の中でも最も重宝される道具で、霊芝はその形が如意に似ることから、如意という画題をもつ。図録では「如意」が一般的だが、他に「天然樹似芝者」「孫の手」「柱掛」の名が見られる。

・**拂子**（ほっす）＜拂＞：長い獣毛に柄を付けた道具で、仏事では煩悩や障碍を払う標識として用いられる。図録では「拂子」「弗子」「掃子」「拂塵」「拂手」「竹拂」「塵」「塵尾」「柱掛」の名で登場する。

同様に煩悩を打ち砕く道具である「**獨鈷**（とっこ）」も１回登場する。

・**経**＜経＞：いわゆるお経のことである。図録では「経」「経筒」「経巻」「貝葉（ばいよう）」の名で登場する。

・**像**＜像＞：羅漢や布袋、達磨など、観音像以外も用いられている。『東山茶会図録』（明治 41 年）では特に多くの観音像が床や棚に飾られ、その前には香炉が置かれている。図録では「観音」「観音像」「大士像」「羅漢」「釈迦」「布袋」「布袋像」「達磨」「達磨像」「石仏」「床置」「置物」の名で登場し、特に 1900 年を過ぎたあたりから頻繁に飾られるようになる。

・**鏡**＜鏡＞：祭器など比較的神事の分野の道具ではあるが、今回は類する道具として仏具と捉える。図録では「鏡」「鑑」「古鏡」「漢鏡」の名で登場する。

・**鐘**＜鐘＞：鐘は仏教儀礼の合図や楽器として用いられるため仏具と捉える。図録では床の飾りとして稀に見られ、「編鐘」「小鐘」「鉦」「銅鐸」「喚鐘」の名で登場する。

・**扇**＜扇＞：拂子と同義の道具、もしくは仏事では数珠を置く際の下敷きなどとして扇が使われており、仏具と捉える。図録では「扇」「扇子」「団扇」「便扇」「羽扇」「羽」「孔雀尾」「畫扇」「摺骨扇」「扇袋」の名で登場する。

⑦楽器

文人の嗜みである琴棋書画の一つ、音楽を担う道具として大変重要な意味を持つ。必ずしも奏楽席に置かれるのではなく、多くは奏楽席以外の床飾りとして用いられる。

・**琴**＜琴＞：前述した琴棋書画のうちの一文字に表れているように、文人が持つ道具の中でも大変重要な道具である。江戸後期の文人画家として著名な浦上玉堂は琴の名手でもあった。図録では「琴」「栞」「古琴」「七絃琴」「一弦琴」の名で登場する。

　また、琴を置く台として「琴台」「琴案」「琴床」が、琴のほこりを払う「琴帚」の名もみえる。

・**笛**＜笛＞：琴以外の楽器として比較的多く見られるのが笛と、次に述べる洞簫である。図録では「笛」「横笛」「明笛」の名で登場する。

・**洞簫**（どうしょう）＜洞＞：中国の管楽器で、竹製で日本の尺八に良く似る。図録ではほぼ「洞簫」の名で登場するが、「柱掛」として目録に記載されているものもある。

他に図録に登場する楽器をまとめて紹介すると、『青湾茗醼図誌』・『円山勝会図録』（明治９年）の奏楽席において「太鼓」「鉦鼓」「鞨鼓」「筝」「琵琶」「月琴」「提琴」「笙」「觱篥」が登場する。他は奏楽席でない席の飾りとして「鳳管」「古鐵鈴」「小鈴」「漢鈴」「金環」「小鐘」などの楽器が登場する。

⑧酒具

煎茶では琴棋書画と並んで、酒を嗜むことも重要視されており、酒具はその道具として重要である。しかし、道具としては一般に知られる道具がほとんどであるため、ここでは各道具の説明は省略し、図録での名称を紹介するにとどめる。

・**酒瓶**＜瓶＞：図録では「缾」「壷」「酒瓶」「酒缾」「酒壷」「酒注」「酒銚」「酒尊」の名で登場する。

・**杯**＜杯＞：図録では「杯」「盃」「杯酒」「酒盃」の名で登場する。

　また、杯に付随する道具として、少数であるが「盃台」「杯洗」「洗盃器」がある。

・**肴器**＜肴＞：図録では「行厨」「食盒」「肴器」「肴鉢」「盂」「鉢」の名で登場する。

⑨抹茶道具

一般的な抹茶道具であり、周知されているため紹介は省略する。

⑩家具

・**机**：卓や案などは全て机と同一に扱った。床以外でも香炉や花瓶、盆栽、文具などの道具を飾りつける場を形成する、大変重要な道具である。紫檀、斑竹、天然樹が好んで用いられ、その意匠も雷文や氷裂が施されることが多く、煎茶席を中国風に演出する道具としても重宝される。図録では「几」「机」「卓」「案」の名で登場する。

・**椅子**：榻と呼ばれる陶磁器製の太鼓型の椅子が庭に置かれることが多い。図録では「墩」「榻」「椅子」の名で登場する。

・**棚**：書架が多く用いられるが、書物だけが置かれることは少なく、ほとんどの場合花具、文具が飾られる。図録では「書架」「畫具架」「文房架」「具列架」「紙架」「高架」「層架」「棚」の名で登場する。

・**盆**：家具ではないが、諸道具を受ける物としてここに分類した。香具、盛物、文具、茶具など、多くの道具が盆にのせられて席中に飾られる。床に飾りを行う場合に、稀ではあるが芭蕉の形をした盆が用いられる。図録では「盆」「都載盆」「都統盆」「都統籠」「蕉葉盆」「蕉葉」「芭蕉盆」の名で登場する。

　また、盆と同様の道具として**筒**がある。モデル化では盆と区別するために、図中に筒と表記した。

・**敷物**：家具ではないが、人や道具の位置を示す道具としてここに分類した。段通が多く用いられ、畳敷きの和室を中国風に演出する重要な道具である。茶事が形式化していくにつれて、席中における客の座る位置を示す意味合いが強くなる。図録では「席」と呼ぶことが多いが、「敷物」「氈」「氈」「褥」「綿叚子」「氈毹」「白氈」「鋪氈」「絨緞」「座氈」「座団」「座筵」「坐筵」「円座」の名で登場する。

⑪屏障具

・**帳**：煎茶席で中国的な雰囲気を演出する道具として大変重要である。多くの煎茶席では開口部の建具を外して、代わりに帳を掛けており、中国風の意匠が施された帳が特に重宝されている。

　図録では「帳」が一般的だが、「張幃」の名もみられる。他に同様の道具として「幔」「幕」もいくつかみられる。

・**簾**：帳と同様に建具の代わりに開口部に掛けられ、その多くは外部と接する開口部に掛けられる。図録では「簾」「箔」「湘簾」の名で登場する。

以上の二つの道具については、開口部において開いているときを鎖線とし、閉まっているときを実線として、開閉の区別をした。

・**屏風**：大正頃になると書画の書かれていない無地の屏風が、書画展観席、盆栽陳列席で道具の背景として多用されるようになる。

・**曲欄**：主に庭に置いて、中国の雰囲気を演出する道具として用いられる。竹製で中国風意匠の格子をもつ。江戸時代の煎茶会でのみ見られ、「歩欄」「曲欄」の名で登場する。モデル化では高欄と同じ表記とした。

⑫その他

・**煙草盆**＜煙＞：煙草用の火入れと灰吹などを載せる小さな箱である。抹茶の影響からか、点前が形式化するのに伴い、正客の位置を示すための道具に意味合いが変化してきている。図録では「煙（烟）盆」「煙（烟）盤」「炬盆」「炬盤」「煙草（烟草・莨）盆」「莽盆」など多くの名で登場する。

また、煙草盆に載る道具である**火入れ**については「火入」「火容」「火爐」「火盒」の名で、灰吹きについては記載がなかったが、**煙草入れ**について「莨容」「莨入」「烟壷」「煙筒」の名が見られる。モデル化ではこれら煙草盆一式で一つの表記とした。

・**手焙**＜手＞：手をかざして暖をとるための火鉢。煙草盆と同じく、席中の客の位置を示す道具としても用いられたと考えられる。図録では「火爐」「地爐」「手爐」「手焙」の名で登場する。

・**杖・笠・瓢箪・籃**＜杖・笠・瓢・籃＞：これらの道具は一緒に置かれることが多く、僧が行脚を行うときに携行する道具であり、京都の各所を訪れて煎茶を売っていた売茶翁を意識しての飾りと思われる。図録では「杖」・「笠」・「酒瓢」「瓢」「詩瓢」「小瓢」「古瓢」・「提籃」「籃」「提袋」の名で登場する。

・**置物**＜置＞：像とは別で、馬の置物など形態はさまざまある。図録に水晶玉や勾玉が道具として登場するが、特に用途が読み取れなかったため、これらも置物として扱っている。図録では「紫玉」「銅馬」「管玉」「勾玉」「置物」「陳設品」の名で登場する。

以上が道具の詳細である。⑩⑪の道具は１文字では表しにくいため、表記については〔表 4-1〕を参照されたい。

〔表5-1〕煎茶会図録に記載の道具名一覧①

				①茶具																																		②書画									③香具							④花具	
				涼炉	風炉	火炉	炉台	湯沸	罐座	茶心壷	香煎入	仙媒	袱紗	茶銚	銚座	茗碗	碗筒	托子	盆	水注	杓	杓坐	巾筒	烏府	羽帚	火箸	罐扇	滓盂	建水	（茶瓶）茶箸	棄子器	（茶入）箸	器局	棚	提籃	茶具敷	罐屏	旗	その他	幅	額	聯	書	匣	巻	巻座	扇	その他	香炉	炉台	香盒	香筒	筒座	著瓶	香盆	花瓶	盆栽
1	茗讌品目	嘉永5(1852)	京都	涼罐	風罐	火罐	罐台	湯銚湯瓶		分茶鑵茶罐茶心壷				茗壷茶注茶注		茗王戔茶盤		棄子托子王委托	盆	水曹雲乇水注	犢杓			烏府			羽扇	滓盂			盂		器局						掛幅					画巻				香罐	罐台	香盒			著瓶		花瓶	盤
2	春薦餘事	万延元(1860)	京都	目録ナシ																																																					
3	青湾茶会図録（天・地・人）	文久3(1863)	大坂	涼罐	風罐		罐坐罐盤	湯銚湯鑵	鑵座	茶心壷		茶合	包袱帙紗	茶銚		椀	椀筒	托子	茗盆	水嚴水壷水注	杓		巾筒梅巾盒	烏府			扇罐扇団扇	滓盂		小瓶	棄子碟棄盂棄子器棄子盂		器局	茶架籠架			罐屏	旗		幅短冊	牌編額編額	聯	墨本書帖		巻	巻坐			香罐	罐盖坐	香盒香袋	香筒		小銚	香盆	花銚銚花	盆栽
4	茶郷一楽（上・下）	慶応元(1865)	愛知	罐			罐盤	沙鑵		茶貯		茶合	帙紗	茶銚		椀		棄盆		雲乇	杓	杓坐	巾坐	烏府				滓盂		小銚	棄盒		器局				罐屏			幅	編額		書						香罐							小銚	盆栽
5	金洞餘音	明治3(1870)	東京	涼罐			罐坐	湯鑵		茶心壷		茶合		茶銚		椀		托子		水注				烏府				滓盂			棄子器	箸						旗		幅									香罐		香盒			小銚			
6	（新古書画展観目録）	明治6(1873)	東京	目録ナシ																																																				
7	熊谷醉香居士追福書画展観録	明治8(1875)	東京	罐			罐座	湯瓶		分茶盒		茶量		茗注	茗注盆	茶盤		托子		水注			巾筒	烏府				滓盂			點心盆									幅									香罐							花銚	
8	青湾茗醾図誌	明治9(1876)	大坂	罐涼罐		火罐	罐坐罐覆	湯鑵湯鑵		茶心壷茶壺		茶合	角巾茶巾	茶銚		茶盞茶碗茗椀茗碗		托子	茗盆盆茶盆	水注			巾筒	烏府	帚	箸		滓盂		箸瓶	棄器棄子盂	匙	器局	具列架茶架	提籠	茶具穐	罐屏			掛幅	編額額掛編	徹聯	書・冊書帙画冊帖		書画巻巻		扇		香罐	卓		香筒	筒坐	著瓶小瓶		花銚花瓶一枝瓶花籠花器	盆栽
9	円山勝会図録（上・下・余）	明治9(1876)	京都	涼罐		火罐		湯鑵湯銚		茶心壷		茶量		茗注茶銚		茗王戔茶王戔茗盆茶盤		托子		水注水甕	水瓶		巾筒巾蓋	烏府炭斗	羽帚帚			滓盂			盛葉器葉盂葉器盛葉盂		器局	架	携籠				掛幅	編額		帙冊印譜帖		巻				香罐		香盒香合	香架		筋瓶瓶著絣		壷花瓶	（盆栽）
10	栗渓雅会略誌	明治11(1878)	鳥取	涼罐				湯鑵		茶壷		茶合		茶銚		茗碗		托子	茗盆	水注				烏府					建水		棄子器		器局							幅	懸額	聯	書						約香罐						香盆	花瓶	
11	藤本鉄石先生薦場余録	明治12(1879)	大坂																																					掛幅					巻											花瓶	盆栽
12	遺馨録（上・下）	明治12(1880)	京都	罐				湯絣		茶心壷		茶量		茗注		茗王戔		托子		水注				烏府				滓盂			點心盆			凹字架						幅			書帖		巻				香罐		香盒				香盆	花絣	
13	書画煎茶清楽図録	明治13(1880)	愛知	涼罐				湯鑵		茶壷		茶合	角紗	茶銚	茶銚敷	茶碗		托子	茗盆	水注			巾筒	烏府	羽帚	火箸		落葉壷			棄子器			具列案						幅									香罐	香罐台				著瓶		花瓶	
14	舟阜山房小集略記	明治13(1880)	香川か	涼罐罐	風罐	火罐		湯鑵		茶心壷		茶量		茶銚	茶盆茗盤	茶碗王戔盤		托子盤		水注			巾筒	烏府	羽帚	火筋		滓盂			棄盆葉器									掛幅	扁額		印譜帖画冊						香罐		香器香盒			香筋		花瓶花絣	盆栽
15	深志茗醾図録	明治13(1880)	長野	涼罐		火罐	罐坐	湯鑵湯銚		茶心壷		茶量		茶銚茗注		茶筅茶盞茗杯		茶托托子	盆茗盆	水注			巾筒	烏府	羽帚帚	火又		滓盂			棄子盂		器局							掛幅	披盤編額		帖帙						香罐		香盒	香筒			盆	花瓶花絣花絣	盆栽
16	直入翁寿筵図録（天・地・人）	明治13(1881)	大坂	涼罐	風罐（釜）	火罐	罐坐	湯鑵湯鑵		茶心壷		茶合	横	茶銚	茶銚坐	茶碗		托子	茶盆	水注	杓匕		巾筒	烏府	羽帚			滓盂落葉			棄子器	箸秋	器局	茶架			罐欄	旗		幅	額碑板	聯	帖帙		巻				香罐		香盒小盒			小銚	香板	花瓶絣花	盆栽
17	雲烟供養図録（首・上・中・下）	明治13(1880)	京都	瓦罐罐涼罐			罐座	湯鑵		茶心壷		茶量	帙紗帛	茶銚茗注茶注	銚座茗注盆	茗盌茶盤		托子	茗盆	水注	匙		巾筒	烏府				滓盂			棄子器棄子盂		器局	茶架		茗復				掛幅			冊帖印譜		巻				香罐		香盒香合	香筒		筋瓶	盆	花絣花瓶	盆栽
18	追遠薦新図録	明治16(1883)	東京	罐涼罐			罐坐	湯鑵湯瓶		分茶盒		茶量		茗注	茗注盆	茶盤		托子		水注			巾筒	烏府				滓盂			點心盆點心盂									掛幅									香罐			香線				花瓶花絣	
19	分史翁薦事図録	明治16(1883)	大坂	罐・罐鑵涼罐			罐座	湯銚湯絣湯瓶		分茶盒		茶量		茶銚	銚座茶銚盒	茶碗茶盤		托子		水注			巾筒巾座	烏府				滓盂			餅餌盂餅餌盤		器局	架						掛幅	扁額		冊		巻	架			香罐		香盒	香筒				花絣花器	盤景盆景
20	清娯軒茶筵図録	明治16(1883)	愛知	涼罐				鳴泉湯銚		茶心壷		茶量		注奉茗注		茗王戔茶盤		托子		水注			巾筒	烏府	羽帚			滓盂		箸壷	棄子器		器局		携籠		罐屏六曲小屏			掛幅			冊帖書畫冊		巻			掛幅竿掛竿風鎮	香罐		香盒	香筒		著壷		花絣籃	盆栽
21	招鶴亭茗醾図録	明治19(1886)	愛知	罐涼罐				鳴泉		茶心壷		茶量		注奉茶注		茗王戔茶盤		托子		水注			巾筒	烏府				滓盂			棄子器		器局				囲屏			掛幅			冊帖		巻				香罐							花絣	盆栽
22	楳仙先生古稀筵展観録	明治19(1886)	福岡	涼罐罐				湯鑵湯絣		茶壷分茶盒		茶量		茗注茶銚	茶注盆茶銚盆	茶碗茶盤		托子		水注			巾筒	烏府	羽帚	火筋		滓盂	建水		棄子器餅餌盂		器局							掛幅			冊						香罐						香盆	花絣	
23	柳崎清賞	明治20(1887)	東京	罐涼罐				湯鑵		分茶壷		茶量	包袱	茗注	茗注盆	茗盤		托子		水注			巾筒	烏府					建水				器局							幅									香罐							花絣	盆栽
24	随意荘雅集録	明治22(1889)	東京	罐				湯鑵		茶心壷		茶量		茶注		茗王戔		托子		水注				烏府					建水		點心器								幅			印譜		畫巻				香罐		香盒			絣		花絣	盆栽
25	墨縁奇賞（春・夏・秋・冬・付録）	明治26(1893)	大坂	涼罐			罐座	湯銚		分茶盒		茶量		茶注		茶盤		托子		水注			巾座	烏府	帚	火箸		滓盂			餅餌盂	箸				茶具甑			掛軸			印譜畫冊						香罐		香盒					花絣	盆景

石	器物	蓑之	水鶴	水瓶	器	その他	◎文具	硯	硯屏	硯滴	墨	墨床	墨筆	墨汁	墨中	墨袋	墨箱	墨紙	墨紙	墨刀	水墨	水玉	筒状	印	印章	印面	印箱	書具類	◎武具	数珠	念珠	句珠	棒子	鐵	鎧	兜	具足	手甲	入手	鎧通	鎧	鎧櫃	鎧掛	鎧櫃	冑	冑箱	冑掛	冑櫃	冑
大理石	陶器		水差	水瓶	器			硯	硯屏	硯滴	墨	墨床	墨筆	墨汁	墨中	墨袋	墨箱	墨紙	墨紙	墨刀	水墨	水玉	筒状	印	印章	印面	印箱	書具類		数珠	念珠	句珠	棒子	鐵	鎧	兜	具足	手甲	入手	鎧通	鎧	鎧櫃	鎧掛	鎧櫃	冑	冑箱	冑掛	冑櫃	冑
石	陶器		水差																																														
石	陶器			水注																																													
石	陶器				器																																												
石	陶器					その他																																											
石	陶器	蓑之	水差	水注	器	その他	◎文具	硯	硯屏	硯滴	墨	墨床	墨筆	墨汁	墨中	墨袋	墨箱	墨紙	墨紙	墨刀	水墨	水玉	筒状	印	印章	印面	印箱	書具類	◎武具	数珠	念珠	句珠	棒子	鐵	鎧	兜	具足	手甲	入手	鎧通	鎧	鎧櫃	鎧掛	鎧櫃	冑	冑箱	冑掛	冑櫃	冑
石	陶器	

〔表5-2〕煎茶会図録に記載の道具名一覧②

				①茶具																																		②書画									③香具							④花具	
				涼炉	風炉	火炉	炉台	湯沸	罐座	茶心壷	香煎入	仙媒	袱紗	茶銚	銚座	茗碗	碗筒	托子	盆	水注	杓	杓坐	巾筒	烏府	羽帚	火箸	罐扇	滓盂	建水	（茶筅）	菓子器	（菓子器）	器局	棚	提鑑	茶具敷	罐屏	旗	その他	幅	額	聯	書	匣	巻	巻座	扇	その他	香炉	炉台	香盒	香筒	筒座	著瓶	香盆	花瓶	盆栽
26	酔花図誌	明治26(1893)	愛知	涼罐				湯罐		茶壷		茶合		茶銚		茶盞		托子		水注				烏府	帚			滓盂			菓子器		器局				罐屏			掛幅					巻				香罐		香合	香筒				花瓶	
27	竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	明治27(1894)	京都	涼罐				湯罐 湯瓶		茶心壷 分茶盒		茶量 仙媒		茗注 茶注		茶王戈 茗碗		托子		水注	水匙		巾筒	烏府	羽帚	火又		滓盂			菓子器 點心盂		器局							掛幅	扁額		畫冊		畫巻				香罐		香盒				香盒	花緋 花器	
28	洪水翁薦事図録	明治27(1894)	愛知	罐		火罐		鳥炙 湯沸 湯罐 湯銚		茶心壷		茶量 茶合	帛	注春 茶銚	銚托	茗王戈 茶盞 茶碗 茗碗		托子 茶托		水注			巾置 巾筒	烏府	羽帚	火箸		滓盂			菓子盂 菓器		器局	棗			坐屏			掛幅	掛額		冊 帖 畫冊		巻				香罐		香盒 香合			著瓶 著緋	香盆	花瓶	盆栽
29	老古茗筵図録	明治29(1896)	和歌山	涼罐			罐座	湯銚		分茶盒		仙媒		茶注		茶盞		托子		水注			巾座	烏府	箒	火箸		滓盂			菓子盂	箸	器局							掛物			帖 冊	文庫					香罐		香盒					花緋	
30	石癡翁追福展観録	明治29(1896)	長崎	涼罐				湯罐		茶心壷				茶銚		茶盞		托子		水注			巾盤	烏府	帚			滓盂			菓子器		器局							掛幅									香罐		香器			著緋		花緋	
31	清楽欣賞(中邨楼茶会)	明治29(1896)	京都	罐				湯罐		茶心壷		茶量		茶銚		茶盞		托子		水注	杓		巾筒					滓盂			辟餌盂 菓子器		器局							掛幅	扁額		冊		巻				香罐		香盒			筋緋 筋瓶		花緋 花器	盆景
32	清賞余録	明治31(1898)	東京	涼罐 罐		緋掛	罐坐	湯罐 湯銚		茶心壷	香煎壷	茶量		茶注		茶盞		托子		水罐 水注			巾坐	烏府	羽帚	火箸		滓盂			辟餌器									掛幅			冊 帖		巻				香罐		香盒 香合					花緋 花籠 編籠	盆景
33	万翁華甲醸誌	明治31(1898)	東京	涼罐				湯罐		茶心壷		茶合		茶銚		茶盞		托子		水注			巾磔	烏府							點心盂									掛幅			畫冊 書帖 冊冊		書画巻				香罐						香盆	花籠	
34	竹荘茶醸図録	明治32(1899)	大阪	涼罐				湯緋		茶心壷		茶量	帛紗	茶銚		茶碗		托子		水注			巾筒	烏府				滓盂			辟餌盂		器局							掛幅			帖						香罐		香盒			著瓶		花瓶 花器	盆栽
35	掲燈院小祥薦事会記	明治32(1899)	滋賀か	罐		火罐		湯罐		茶壷 茶心壷		茶量		茶銚 茶注		茶盞 茶碗		托子	盆	水注			巾筒	烏府	羽帚			滓盂 滓盆	建水		菓子器		器局				屏			掛幅	扁額		冊		巻				香罐		香合			著瓶	香盆	花緋 花生	盆栽
36	兼霞堂誌	明治34(1901)	大阪	罐			炉蓋	急焼		茶心壷		仙媒	帛紗	茶銚		茶罐	筒			水注											菓盂			棚						掛幅	扁額		帖						罐	卓						花瓶	
37	林華園薦事図録	明治36(1903)	京都	涼罐				湯銚		茶心壷		茶量	帛紗	茗注		茗王戈		托子		水注			巾台	烏府	帚			滓盂			盛菓器		器局							掛幅			小帖 印譜						香罐		香盒					花瓶 花器	
38	盆栽瓶花聚楽会図録	明治36(1903)	東京	涼罐 三峯罐			罐台	湯沸		茶壷 茶入		仙梅 匕	更紗	茶銚		茶碗		茶托	盆	水注			茶巾筒 巾置	烏府	羽帚			落葉壷		箸瓶	菓子器		器局			茶具敷				幅			書帖		巻 巻物			風鎮	香罐	香罐台	香合					花瓶	
39	梅村寿筵図録	明治36(1903)	東京	涼罐			罐坐	湯罐		茶心壷		茶量	包袱	茶銚	銚坐	茗盞		托子		水注			巾筒 盆巾鑑	烏府	羽帚	火筋	罐扇	滓盂			果盂	箸	器局		提籃	茗具靶				掛幅		聯	帖 書帙 冊 書冊	匣 文匣	巻	盆			香罐		盒子 香盒	香筒		筋瓶	盆 香林	花瓶 瓶花 花籠	盆栽
40	東山茶会図録 (東・山・茶・会)	明治41(1908)	京都	涼罐			罐座	湯罐		茶心壷		茶量	袱子	茶銚	銚坐	茗盞		托子	盆	水注	杓		巾床 巾筒 巾台	烏府	帚	火筋		滓盂		小壷	菓器 菓子器		器局	具列・架 具列床 茗具床 茗具卓		敷布	坐屏 罐屏			掛幅	額 掛額 匾額		帖	文匣	夏巻 書巻 巻	巻架 軸盆			香罐		香盒				香盆	花緋 花器 花筒	盆景 盆栽
41	第二十回　山水清遊会	明治41(1908)	岐阜	涼罐			罐坐	湯沸		茶壷		仙媒	不洗巾	茶銚	銚座	茗盞		托子		水注			巾筒	烏府	羽帚	火箸			建水		菓盂			茶棚						掛幅			帖		巻				香罐		香合				香盆	花瓶	
42	豫章堂茗醸図録	明治42(1909)	大阪	罐				湯罐		分茶壷		茶量	帛紗	茶銚		茶盞		托子		水注	杓	甑座	巾筒	烏府	羽帚	火筋		滓盂			辟餌盂		器局			具列糸 壷				幅 横幅	懸額		帖 印譜		巻	軸盆		軸竿	香罐		香盒	香筒		著緋	香盆	花緋	盆栽
43	澱江茗醸図録(乾・坤)	明治42(1909)	大阪	涼罐 罐			罐座	湯銚 湯瓶		茶心壷		茶量	袱紗	茶銚	銚座	茶盞		托子		水注			巾筒	烏府	箒	火筈		滓盂			菓子盂		器局			茶具甕	罐屏			掛幅			帖 書帖		巻				香罐		香盒				香盆	花瓶 瓶花	
44	雨竹居士薦筵図誌	大正2(1913)	大阪	涼罐		瓶掛	罐座	湯罐		茶心壷		茶量 仙媒	袱子	茶銚	銚座	茗盞 茗碗 茗碗		托子 茶托	茗盆	水注	瓢杓		巾筒 巾置	烏府	帚	火筋		滓盂	建水		菓子器 菓子盂 菓子鉢		器局	茶棚	提籃	茶具鋪				掛幅	扁額		畫冊	文面					香罐	香罐盆	香盒 香合				香盆	花瓶 花入	
45	楓川追薦録　附留影録 (春・夏・秋・冬)	大正5(1916)	東京	涼罐		火罐	罐座	湯銚		茶心壷 分茶盒		茶量	袱子	茶銚 茶注	銚座 銚盆 茗注盆	茗盞茶 盞		托子	茶具盆	水注	杓 瓢杓	杓座	巾筒 巾座	烏府	羽帚 羽帚	火箸		滓盂			點心器		器局	茶棚		茶具復	罐屏			掛幅			帖 冊		巻				香罐		香盒	香筒			香盆	花瓶	
46	亦復一楽茶会図録	大正7(1918)	京都	涼罐			罐座	湯罐	罐座	茶心壷		茶量	袱紗 帛紗	茶銚		茗盞		托子	茗盆	水注			巾筒 巾承	烏府	羽帚	火箸	罐扇	滓盂			菓子盂					茶具甕	屏 罐屏	茶簾		掛幅	額		帖 冊		巻	巻承 軸盆			香罐		香盒	香筒				花瓶	盆栽
47	渓村翁追薦図録	大正9(1920)	山形	涼罐		火罐	罐坐	湯銚 湯罐		茶心壷		茶量		茗注		茶王戈 茗王戈		托子	茗盆	水注			巾筒	烏府				滓盂			盛菓器 菓器		器局							掛幅			畫冊 帖	書面	巻				香罐		香盒					花瓶	
48	角山簪嵜翁薦事図録 (瑞・草・魁)	大正11(1922)	大阪	涼罐			罐坐 罐台	湯罐 湯銚		茶心壷		茶量 茗量 仙媒	袱紗	茶銚	銚坐 茶銚敷	茶盞 茗碗 茗盞		托子		水注 水指	杓		巾筒 巾承	烏府	箒 帚 羽帚	火筈 火筋	罐扇	滓盂			菓子盂 菓子盆 菓器 菓盂		器局			茶具甕 茶具敷 茶具拇	罐屏			掛幅			帖								香盒				盆	花瓶 瓶花	盆栽
49	昌隆社五十周年記念茗醸図録	大正15(1926)	大阪	涼罐	風罐		罐座 坐 茗 罐坐	湯灌 湯銚 湯銚 湯沸	床 罐座	茶心壷 茶壷		茶量 茗量	袱紗 袱子	茶銚	銚座 銚坐	茶盞 茗碗 茗盞 茶盞 茗盞		托子	盆	水注			巾筒 巾承	烏府	羽帚 羽帚 羽帚	火箸 火筈 火筋	罐扇	滓盂	建水		菓子盂 菓子盆 菓盂 菓器 菓子鉢		器局	棚 茶架		茶具拇	罐屏 結界			掛幅 幅 床幅	扁額		帖 畫冊		巻		眉面 眉	眉承	香罐	卓	香盒 香合	香筒			盆 香盆	花緋 花瓶 一輪生	
50	雙軒庵記念茗醸図録	大正15(1926)	大阪	涼罐		瓶掛		湯沸		茶心壷	振出	茶量	帛紗	茶銚		茶碗 茶盞		托子	湯盆 瓶盆	水注			巾蓋	烏府	羽帚	火筋			建水		菓子鉢・ 菓子盆		器局				罐屏			掛幅	掛額		帖						香罐	卓	香盒					花瓶	盆栽
51	学温園茶会図録	大正15(1926)	愛知	涼罐		瓶懸	罐座	湯罐 湯罐		茶心壷	香煎入	仙媒	帛紗	茶銚	銚座	茗盞 茶盞		托子	盆	水注			巾筒	烏府	羽帚	火箸		滓盂	建水		菓子器 菓盆		器局				結界		蘭花器	幅			畫帖 帖		巻	巻置			香罐		香合				香盆	花瓶 花器 花入	盆栽

| | ⑤文具 | | |

第２節　しつらい

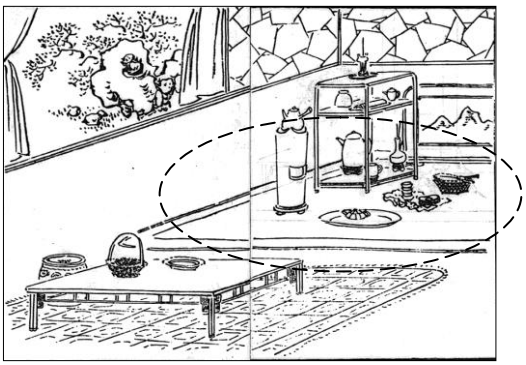
ここでは第４章１節により作成した平面モデルに基づいて、道具の種類ごとにしつらいの変遷を中心に考察を行う。

（1）茶　具

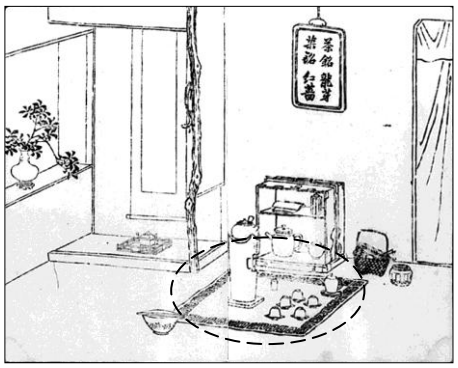
まずは煎茶席の最重要な道具である茶具のしつらいからみていく。

煎茶を煎茶たらしめるその核となるのは、葉茶を用いる喫茶法であることの他に、可動する炉である涼炉をもちいることで、炉に縛られることなく、赴くままに場を設けて茶を喫することができることである。まさに売茶翁高遊外の売茶活動はこのことを表明している。したがって、茶具のしつらいは同じ座敷や空間であっても、席主によって変わることが当然なのである。

煎茶は抹茶と比較すると道具の数が多く、配置する際には陳列できる棚や盆などが不可欠となる。ここで注目したいのは茶具の最下に敷かれる敷物である。現在の煎茶道では当たり前に用いられている「茶具敷」だが、定常的に用いられるようになったのは明治末期からである。茗主用の敷物は史料８『青湾茗醼図誌』で既に登場しているが〔図5-1〕、その大きさは２畳程もあり、茶具だけでなく、茗主もその上に座って点前を行っている。このような敷物は史料 19『分史翁薦事図録』まで確認できる。同年の史料 20『清娯軒茶筵図録』では茶具敷のようなものが見られるが、まだ一般化はしておらず、その後史料 25『墨縁奇賞』で再び登場し、明治末期からは史料 34『竹荘茶醼図録』を皮切りにほとんどの茶席で見られるようになる〔図5-2〕。この茶具敷の登場によって茶具の配置が固定化していくことになり、煎茶道の確立によって点前に即した茶具の配置が形式化していく。



〔図 5-1〕『青湾茗醼図誌』　茶具敷



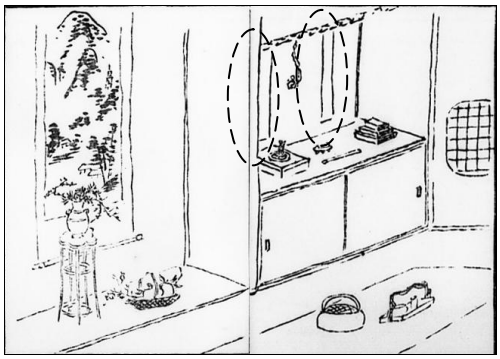
〔図 5-2〕『竹荘茶醼図録』　茶具敷

また先述のとおり、茶具を納めたり、並べたりする道具として器局・棚・盆が使用されている。時代的にみると、江戸後期から明治前期にかけてはこの三者が同程度見られるが、明治後期になると、盆が減少して器局と棚が主流となり、特に器局が盆の倍ほど見られるようになる。器局は煎茶道具として特徴的なものであり、絵付けがされたり凝った意匠のものも作られたことから、器局が鑑賞の対象として重宝されたと考えられる。明治末期から大正期には益々器局と棚に集中を見せるが、特に棚が重宝される。大正期は煎茶道が確立する時期であり、各流派の宗匠によって各種の棚が考案されることから、棚が重宝されるようになったと思われる。地域的に見ると、大阪は器局と棚が主流であり、この二者は同数程度見られ、盆はこれらの半数ほどである。京都は器局が主流であり、棚と盆が同数程度見られる。京阪はいずれも茶事に主眼を置くためか、茶具の並べ方にも趣向をこらそうと、器局や棚が重宝されたものと思われる。一方東京は盆が主流であり、器局にいたっては３席のみしか見られず、京阪とは全く異なる傾向を示している。書画や盆栽等の道具の鑑賞に主眼を置いているため、茶事に関して意識が向きにくくなり、点前ができるだけの道具を並べるのに盆が都合がよかったと考えられる。

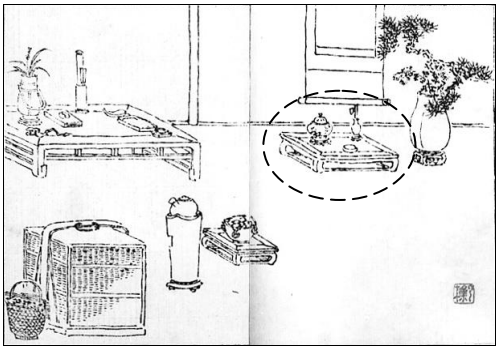
（2）書　画

江戸末期から明治前期の大阪で床が無い茶席が多く、掛軸の代わりに長押上に額が多くみられ、その後茶席に床が設けられると、床に軸が掛けられるようになるが、明治前期の間、茶席では床の掛軸と共に長押上に額が飾られることが多く見られた。明治後期以降は、床の掛軸が中心となり、額は少数の席で小ぶりなものを壁に掛ける程度となった。また、聯は史料 16『直入翁寿筵図録』〔図5-3〕以後、史料 39『梅村寿筵図録』で目録に確認できるだけで姿を消す。

机や床脇に置いて飾られる「書」「巻」はすべての時代で確認できる。初期は席種に偏りが見られないが、明治末期以降は茶席以外の前席や展観席に置かれるようになり、その数も減少して、煎茶席に飾られる書画は掛軸が中心となる。書や巻が飾られる場所は、床脇や付書院がある場合は鎮子を伴ってそこに置かれるが、床のみの席では床や机上に置かれることが多い。書は画譜や印譜など種類も多彩で、鑑賞物として重要であり、史料 46『亦復一楽茶会図録』のように、田能村竹田の「亦復一楽帖」の臨画を記念して茶会が開かれるほどである。



〔図 5-3〕『直入翁寿筵図録』　聯



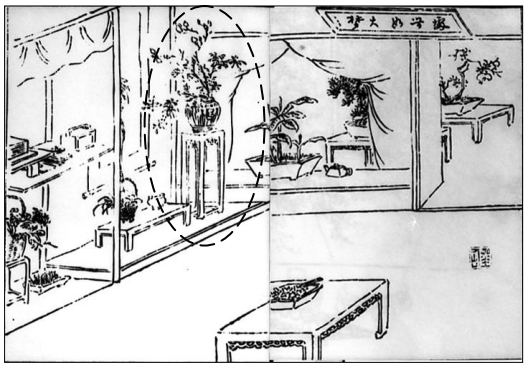
〔図 5-4〕『円山勝会図録』　香具

（3）香　具

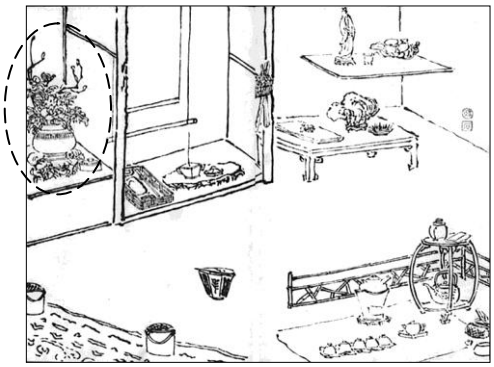
香具は床が無い席ではあまり見られないが、床のある席ではほとんどの床に香炉が飾られている。江戸末期から明治時代中頃までは卓の上に著瓶や香合を伴うのが通例であったが〔図5-4〕、明治末期からは香炉のみを盆や卓に乗せて床に置くことが増え、さらに観音像が飾られることが増えることで、観音像の前に香炉が置かれるようになり、１席に香炉が２つ置かれる席も出現する。また、抹茶の影響からか史料９『円山勝会図録』から、徐々に烏府（炭取り）の中もしくは傍に香合が置かれるようになり、明治中頃以降はこれが定着して、茶具の中に必ず香合が入り、目録では烏府の前後に記載されるようになる。

（4）花　具

盆栽陳列席の発生時期に地域差はあるものの、飾り方に地域差はあまり見られなかった。時代的にみると花瓶の形態に変化が見られた。江戸末期から明治時代前半までは比較的古銅器を好んで用いており、飾り方も床の内外を問わず机上に置かれることが多い〔図5-5〕。明治時代後半からは、花入れを掛ける飾り方が数席で見られ、器も籠を



〔図 5-5〕『深志茗醼図録』　花具



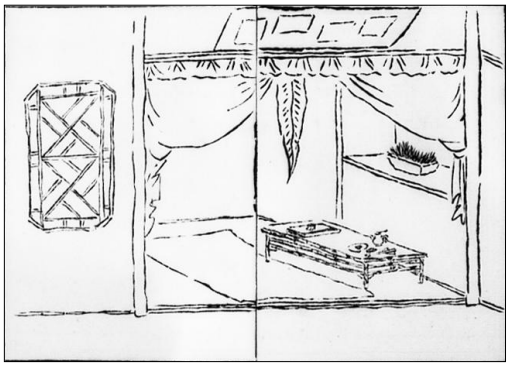
〔図 5-6〕『東山茶会図録』　花具

用いるなどバリエーションを増やしている。その後明治末期以降は、琵琶床の増加や床脇の形状が多彩になるのに伴い、机上に花瓶が置かれることが減り、直に床内に花瓶が置かれるようになる〔図5-6〕。そのため、床に直に置いても均衡をとりやすい、比較的背の高い陶器製の器が好まれるようになったと考えられる。

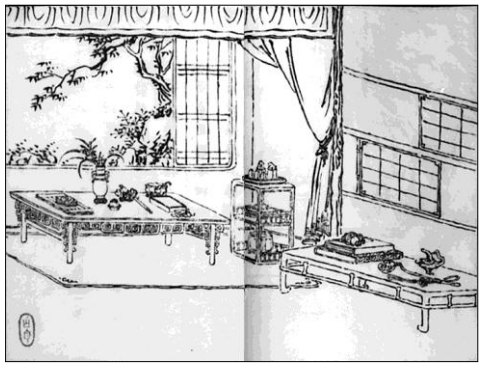
盆栽陳列席のしつらいに時代的・地域的傾向は読み取れないものの、盆栽陳列席と古銅器の展観席では、陳列の仕方が異なっている。盆栽陳列席では、卓に高低差を付けたり盆を用いたりして、さらにそれらの素材も変化に富んでおり、盆栽の形状や雰囲気に合わせて卓や盆が選ばれている。一方、古銅器の展観席では、ほぼ同じ高さ・大きさの机の上に古銅器を整然と並べている。

（5）文　具

いわゆる文房四宝について、江戸時代は主に盆に乗せられて床や机上に置かれていたが、明治前期の史料８『青湾茗醼図誌』以降は平机上に直に並べることが主流となった。史料９『円山勝会図録』からはこの文具机上に文具とともに小さな花器も置かれるようになり、史料 19『分史翁薦事図録』のように文具の水滴がその役割を担っている場合もある。この文具机は、床前の床側側面の開口に平行な向きで置かれるか、床脇もしくは床の脇前に床と平行な方向に置かれている。明治前期の史料 16『直入翁寿筵図録』では、文具机の前に客の着座用に敷物が敷かれている〔図5-7〕。明治末期からは床脇の前もしくは床の脇前の位置が固定化し、文具机の下に敷物が敷かれるようになるなど〔図5-8〕、文具机自体が文具を飾るための机から、鑑賞の対象に変化したと思われ、大正期には前席でこの配置が固定化する。



〔図 5-7〕『直入翁寿筵図録』文具机

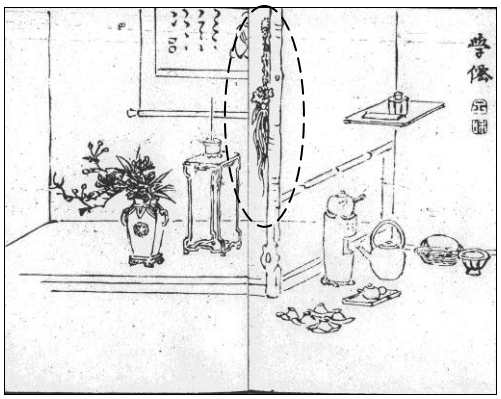


〔図 5-8〕『豫章堂茗讌図録』文具机

（6）仏　具

如意・拂子・扇は、時代を通して頻出する道具で、３つ全てもしくは前２つがセットになって柱に掛けられたり、筆筒に立てられたりしている〔図 5-9〕。筆筒に立てる場合は、文具とともに文具机や棚に飾られており、これは史料 27『中林竹洞竹渓翁建碑薦事餘禄』まで見られる。数珠は先の３つより頻度は低く、如意とセットで柱に掛けられることが多い。また、如意は“意の如くなる”という意味合いから、雅題を表現する素材としても用いられやすく、花瓶と共に床や机上に飾られる。他に観音像が明治末期から追薦茶会で多く飾られるようになる。

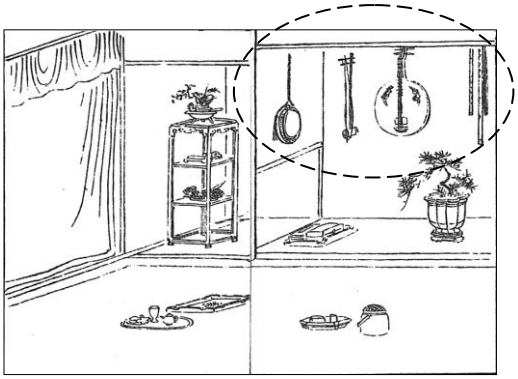
なお、追薦茶会であっても地方の茶会では仏具が飾られない茶会がある一方、都市部での追薦でない煎茶会で仏具が飾られる場合もあり、必ずしも茶会の主旨に合わせて仏具を飾っているのではなく、飾りと認識している茶会もいくつか見られる。



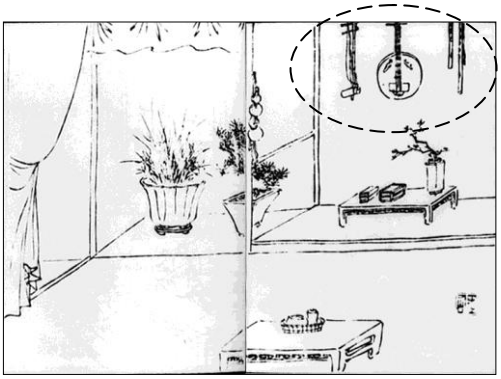
〔図 5-9〕『熊谷醉香居士追福書画展観録』　仏具

（7）楽　器

奏楽席で実際に演奏するために用いる楽器は、太鼓・鉦鼓・鞨鼓・篳篥・笙・笛・琵琶・琴・箏・月琴・提琴などがあり、多種の楽器によって明清楽が演奏されている。



〔図 5-10〕『青湾茗醼図誌』　楽器



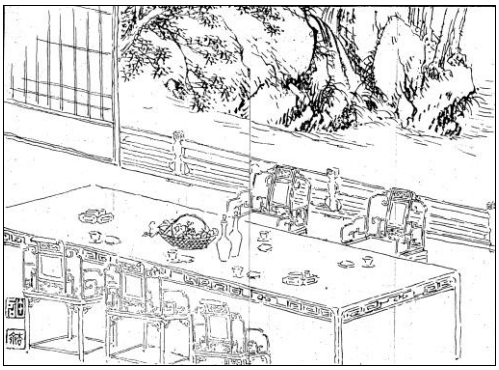
〔図 5-11〕『深志茗讌図録』楽器

奏楽席以外では、江戸末期から明治時代前半にかけては、特に琴が重宝され、床や床脇に置かれる他、壁や柱に掛けて飾られる場合もある。明治時代後半からは、琴が数を減らす代わりに、洞簫が柱に掛けられるようになる。

また、史料８『青湾茗醼図誌』の酒席の床には月琴・提琴が掛けられるが〔図 5-10〕、これと酷似する飾り方が史料 15『深志茗讌図誌』で見られ〔図5-11〕、地方の茶会が都市部の茶会の影響を受けていることが良く分かる。

（8）酒　具

江戸後期から明治中頃までは、ほとんどの酒席に客用の机が置かれ、その上に酒具や菓子器が並べられて、客がそれを囲んで座っていた。この頃は酒瓶がガラス製のものや、瓢箪に酒を入れているものも見られ、酒具自体が趣向に富んでいる。また、史料 21『招鶴亭茗醼図録』のような中国風意匠の机と椅子を設けて、立礼式のような形で行われる酒席や〔図 5-12〕、床に楽器を飾って、時には奏楽席のように音楽を演奏しながら酒を嗜んだと思われる酒席もあり、自由な発想でしつらえられる傾向にある。しかし、明治末期以降は一変して、酒席に酒具が置かれなくなり、客用の机も消えて、床飾りが飾られるのみとなる。



〔図 5-12〕『招鶴亭茗醼図録』）　酒席

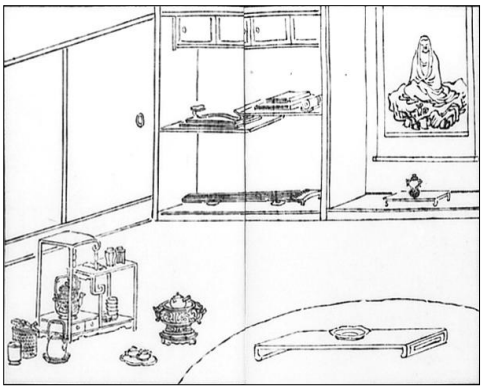
（9）家　具

まず、机は茶席において客の位置を示す重要な装置となっている。明治時代後半以降は見られなくなってしまうが、江戸末期から明治時代前半は、客の拠り所として菓子器が乗った机が置かれている〔図 5-13〕。史料３『青湾茶会図録』では、Ｌ字型に曲がった天然樹の机や、二等辺三角形の机を二つあわせて長方形とした机などがみられ、他にも中国風意匠があしらわれたものや、斑竹で作られたものなど、机自体も面白みのあるものが好まれており、重要な道具であったことがわかる。他にも、花具や文具など様々な

道具を机上に陳列して席中に置いたり、床の中に置いたりしている。一方で、明治時代後半からは床脇の棚が独創的なものが作られて、琵琶床等も増加することから、床の中に机が置かれることが減少する。

敷物は和室を中国風に演出するため、帳とともに古くから重宝されており、形状や敷き方に、時代や席種による変化が見られる。茶席では、明治前半は方形や円形をして部屋の中央に敷かれ〔図 5-14〕、茗主と客がそれぞれ座る。明治後半からはいずれも規模を縮小し、茗主用は茶具敷として茶具のみを乗せ、客用は１畳ほどの大きさとなって、床前から部屋の周囲に沿って敷かれている。煙草盆・手焙とともに客の位置を示す重要な道具となっており、この配置はその後固定化する。書画展観席・盆栽陳列席では、明治後半までは敷物がないのに対し、明治末期になると書画や盆栽を飾る壁面に沿って無地の敷物が敷き廻され、大正期に入ると部屋中央に客用の敷物が加わる。前席・副席では明治前半に文具机の前に客の着座用として敷かれるが、明治末期からは机の直下に敷かれるようになる。いずれにしても敷物は道具や人物の位置を示す役割を果たしている。

他に室内ではないが、庭に墩・榻（とん）と呼ばれる陶磁製の太鼓状の椅子が置かれる。江戸末期から明治初期には目録にも記載されており、しつらいの一部として捉えられていたことが分かる。この墩・榻が置かれることで、空間を中国風の雰囲気に演出することができるため、その後も目録に記載はないものの、史料 48『角山簪篁翁薦事図録』まで挿図に描写されている。



〔図 5-13〕『雲烟供養図録』　敷物・机

〔図 5-14〕『雙軒庵記念茗讌図録』　屏風・敷物

(10) 屏障具

各時代を通して屏風は用いられており、書画が書かれた屏風や、簾のような素材のもの、中国風意匠のものなど多種の屏風が見られる。多くは道具の背景のように用いられ、陳列の場を演出する道具として捉えられていることが分かる。明治前半からは床が無い

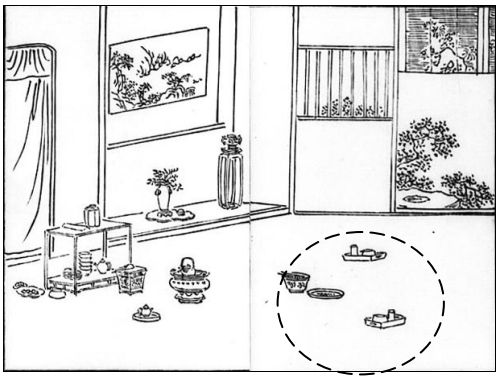
前席にはほぼ置かれており、花瓶を置いた机の後に置かれて、床の代わりに陳列の場を創出しているように見える。明治末期からは特に書画展観席・盆栽陳列席で書画や盆栽を飾る机や敷物とともに、無地の屏風を壁面に沿って並べたり〔図 5-14〕、前席では文具机の後ろに置いたりするなど、敷物とともに道具を飾る場所を示す役割を果たしている。

また、煎茶席では帳が重宝され、抹茶でいう茶道口にあたる茶席の出入口に暖簾状に掛けるのは当然ながら、煎茶席の特徴の一つである外部に広く開いた開口部に掛けて、両端をカーテン状に束ねることで空間を中国風に演出している。目録での出現頻度は時代を追うごとに減少するものの、挿図にはその存在が確認でき、煎茶席をしつらえる際には欠かせない道具となっている。

（11）その他

杖や笠、瓢箪が時折柱に掛けられる飾りとして見られるが、その飾りが何を意図しているかははっきりとしない。僧が行脚するときに装備するものとも考えられることから、茶を売り歩いた売茶翁高遊外を意識した飾りであろうか。

また、煙草盆や手焙が多く見られる。江戸末期には既に煙草盆が煎茶席に登場しており、主に茶席で客が座る机の近くに置かれている。明治前半には客用の机が減少していくことから、煙草盆が客の座る位置を示すようになるが、一つの茶席に二つの煙草盆が置かれる場合もあり〔図 5-15〕、この頃はまだ煙草盆が正客の位置を示すほどではない。明治後半からは正客の位置を示すような配置を見せるものも登場するが、必ずしも茶席に煙草盆が置かれているわけではなく、完全な固定化には至らない。明治末期から大正期には特に大正期において、煙草盆と手焙が正客を示す位置に完全に固定化しており、同時期に煎茶会に挿入されるようになった、抹茶席の影響が感じられる。さらには煎茶道の確立による茶席の形式化が見られたといえる。



〔図 5-15〕『雲烟供養図録』　煙草盆

第３節　茗主と客の位置

本章では、第４章を踏まえたうえで、特に茶席における茗主と客の配置について、点前座と客座の位置関係、客の座り方の考察を行う。平面型は第４章の分類に基づく。

第１項　点前座と客座の位置関係

位置の分析を行うに当たり、部屋を床に向かって左右に分け、床の正面を「床前」、床の脇の壁または床脇の正面を「脇前」とし、さらに床と平行に部屋を中央で分け、床に近い側を「上」、遠い側を「下」とする。以上のように縦横に４分割した部屋のそれぞれの場所を、「床前上」・「床前下」・「脇前上」・「脇前下」とする。また、床の隣に畳が敷いてある場合は、そこを「床隣」とする。茗主は茶具の配置などから位置だけでなく向きも予測できたため、向きについても分析した。その結果を〔表 5-2〕に示す。

なお、挿図のある茶席の総数は 185 席、床のある席が 160 席あり、この内、茗主の位置と向きが判明するのは 149 席であった。

（1）床のある席

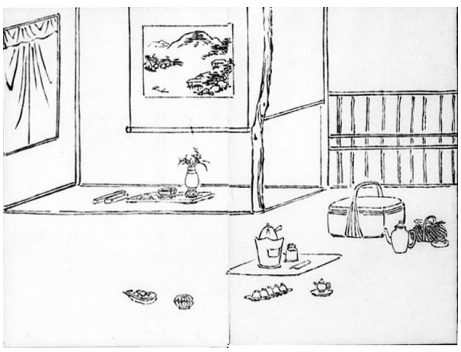
まず、茶席における床の左右をみると、左 78 席、右 80 席とほぼ半々であった。席数の多い茶会を個別にみると、２つの茶会で特に好まれた平面型がみられたものの、それらの影響を鑑みると、全体として時代的な傾向はみられず、地域的には京都で左床が好まれる他は、床の左右に囚われない席づくりをしていたと考えられる。平面型に好みの傾向がみられた茶会は、『円山勝会図録』では②床型が計 16 席のうち 12 席右床であり、『昌隆社五十周年記念茗讌図録』でも②床型が計６席のうち５席右床である。②床型は茶席 160 席の半数を占める計 79 席あり、そのうちの６割を超す 49 席が右床であることからも、茶席では②床型の右床が頻繁に用いられたといえる。

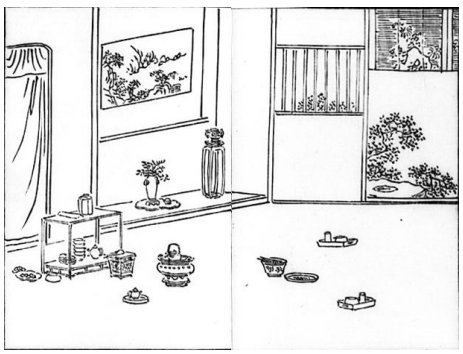
茗主の位置をみると、床前より圧倒的に脇前が多く、判別のできない 10 席を除く 149 席のうち８割の 119 席で茗主は脇前に座る。これは、上座である床の前は、客の場所であるという認識があることが伺える。唯一⑦両床脇型では、計６席のうち５席が床前下に茗主が座る。これは床を挟んで両脇に床脇があるため、茗主が床前を避けようとすると極端に部屋の隅に座ることになることから、床から離れた床前下に座ることで客との配置の均衡を保ったと考えられる。

茗主の上下の位置は平面型によって特徴があり、⑦両床脇型は先述のとおりである。④床＋床脇Ⅰ型・⑨床＋床脇＋付書院型では、計 40 席のうち半数の 21 席が下に位置し

ており、これらの平面では「脇前下」に位置することが多い。これは、床前を避けつつ、道具を飾るための床脇の直前に位置することで、道具の鑑賞の妨げになることを避けるための配慮と考えられる。他の平面では、②床型・③棚付床型・⑤床＋床脇Ⅱ型・⑥床＋床脇Ⅲ型・⑧床＋付書院型は、94 席のうち 10 席が床隣、48 席が上、29 席が下に位置し、「脇前上」が最も好まれる位置となる。これらは平面型からもわかるように床と同一面に壁をもち、その壁もしくはそれに直交する壁に茶道口のような戸口が設けられていることが多いため、茗主の位置が「床隣」もしくは「脇前上」に限定されやすかったと考えられる。また、①壁床型については、計 17 席が上９席、下８席とほぼ半々となっている。これは②③⑤⑥⑧と同様に床と同一面に壁をもつ平面でありながら、床の奥行がないために床の飾りが「床前上」に置かれることから、茗主が床から離れた下に座ることも考慮されたと考えられる。なお、客の位置は床に対して左右に分けた、茗主のいない側に上から下にかけて並ぶことがほとんどであり、上記の考察を踏まえると、床前上から下にかけて並ぶ事が多い。

さらに茗主の向きに目を向けると、床のある面に対して、「床隣」では 13 席のうち２席が正対、10 席が側面、１席が反対を向き、床隣に接する「脇前上」では 64 席のうち３割の 19 席が正対、７席が反対、６割の 38 席が側面を向いている。この範囲が煎茶席で茗主が最も座る範囲であり、茗主は側面（床前上の方向）にいる客をみて座ることが多い。他の範囲は、「床前上」では７席のうち５席が正対、２席が反対を向き、「床前下」では 23 席のうち７割の 16 席が正対、７席が側面を向き、「脇前下」では 41 席のうち６割弱の 24 席が正対、６席が反対、11 席が側面を向いている。これらの範囲では茗主は正対（床の方向）して座ることが多く、「床前上」では床を、「床前下」「脇前下」では上に座る客をみて座ることが多い。





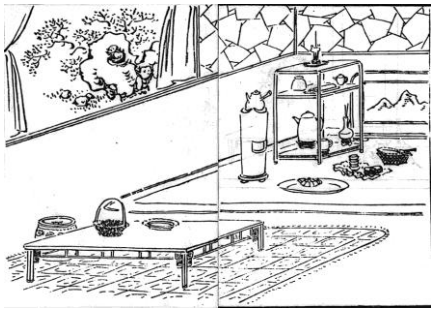
〔図 5-16〕『雲烟供養図録』②床型の左床・右床
茗主は脇前上に横向きで座る

ここで改めて平面型の床の左右に目を向け、各平面型で左右を反転させて重ねてみると、茗主の位置および向きに大差はないことが分かる。したがって煎茶席においては、やはり床の左右はさほど意識されておらず、点前における本勝手、逆勝手にも、どちらかに統一しようとする意図がないことが分かる。〔図 5-16〕

（2）床のない席

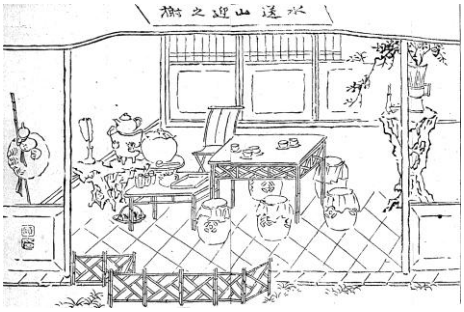
床の無い席において、まず、⑪単室型と⑫複数室型の 16 席をみると、外部に面する開口部が有る 10 席では、開口部が掃出窓の場合、茗主は開口部と直交する壁沿いに、客は部屋の中央付近に机を拠り所として開口部を向いて座る傾向がある。開口部が窓の席は２席しかないため傾向はわからないが、窓沿いに茗主が位置し、客は茗主越しに窓と対面している。外部に面する開口部が無い６席では、壁沿いに茗主が位置し、客は部屋の中央近くに位置する程度のことしか読み取れない。また、複数室型の３席は部屋境の壁に沿って茗主が位置している。以上から、床の無い席では、開口部が茗主と客の位置を決める要素となっている。〔図 5-17、18〕

⑬亭では、部屋の中心に客の机が置かれ、茗主はその脇に別に机を置いて座る。⑭船上の席では、船の長辺を二分するように茗主と客が位置することが多く、茗主は船の軸と直交方向に開口部を向いて座る。いずれも確かな法則はなく、開口部を意識しながら自由に配置が行われたと考えられる。〔図 5-19、20〕

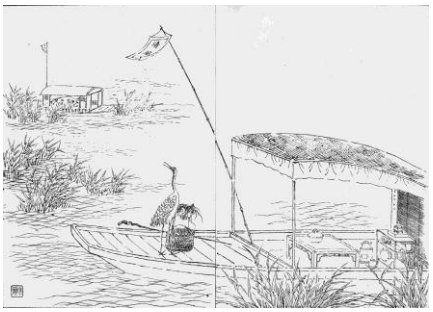


〔図 5-17〕『青湾茗醼図誌』⑪単室型

〔図 5-18〕『青湾茶会図録』⑫複数室型

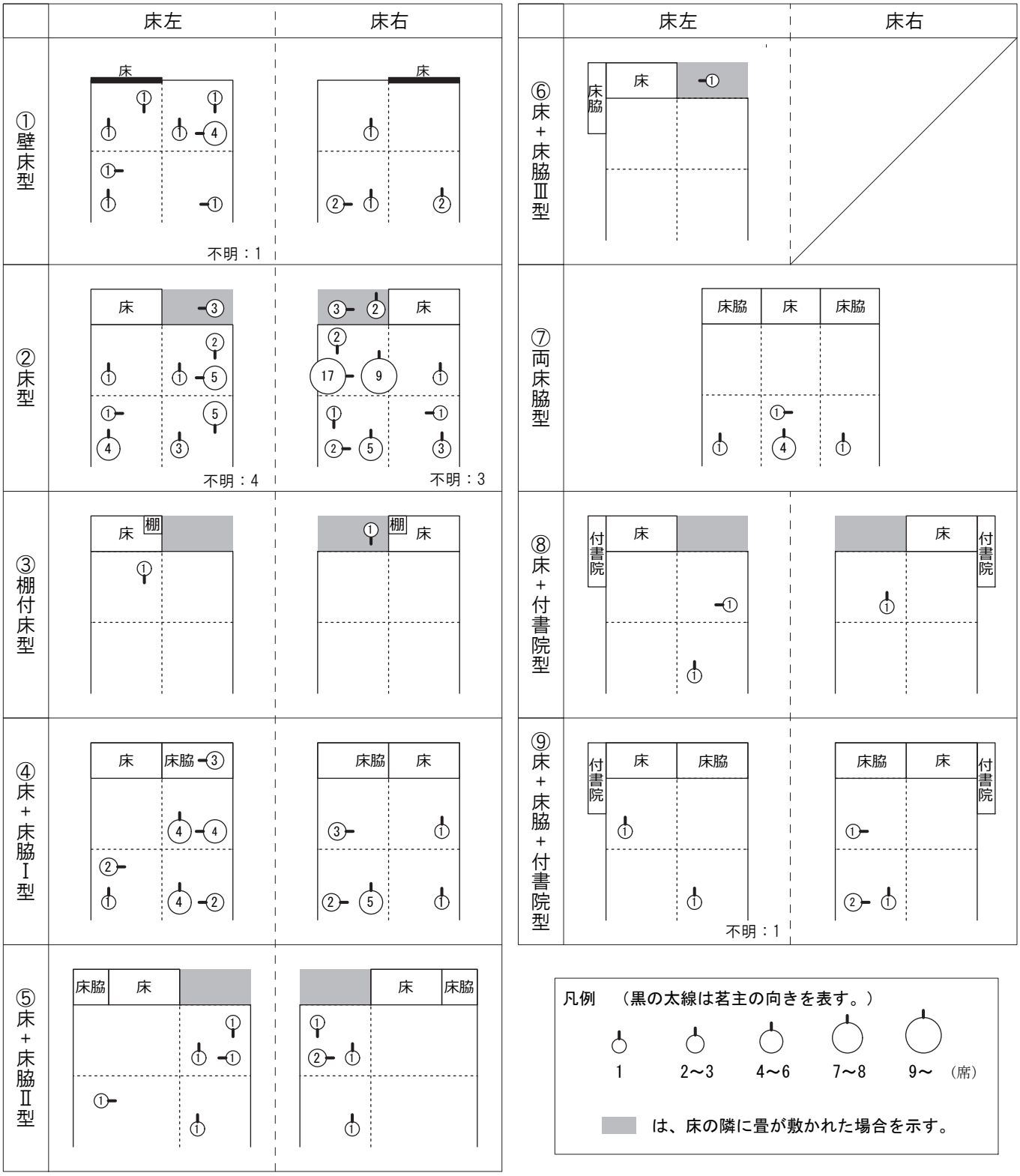


〔図 5-19〕『茗讌品目』⑬亭



〔図 5-20〕『随意荘雅集録』⑭船

〔表5-2〕平面別点前座位置および茗主向き一覧表

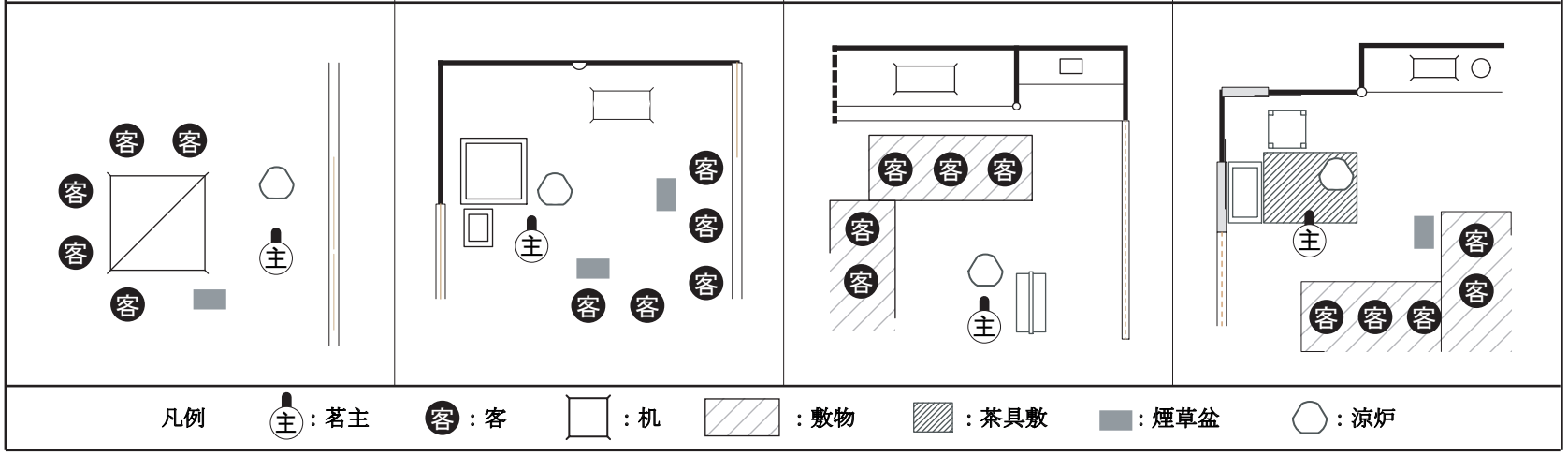


〔表5-3〕机・敷物出現数年表

史料名	1 茗讌品目	2 春薦餘事	3 青湾茶会図録	4 茶郷一楽	5 金洞餘音	6 （新古書画展観目録）	7 熊谷醉香居士追福書画展観録	8 青湾茗醼図誌	9 円山勝会図録	10 栗渓雅会略誌	11 藤本鉄石先生薦場餘録	12 遺馨録	13 書画煎茶清楽図録	14 舟阜山房小集略記	15 深志茗讌図録	16 直入翁寿筵図録	17 雲烟雲烟供養図録	18 追遠薦新図録	19 分史翁薦事図録	20 清娯軒茶筵図録	21 招鶴亭茗醼図録	22 楳仙先生古稀筵展観録	23 柳嶠清賞	24 随意荘雅集録	25 墨縁奇賞	26 醉花図誌	27 竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	28 淇水翁薦事図録	29 老古茗筵図録	30 石瘕翁追福展観録	31 清楽欣賞（中村楼茶会）	32 清賞余録	33 万翁華甲醼誌	34 竹荘茶醼図録	35 掲燈院小祥薦事会記	36 兼葭堂誌	37 林華園薦事図録	38 盆栽瓶花聚楽会図録	39 梅村寿筵図録	40 東山茶会図録	41 第二十回山水清遊会	42 豫章堂茗讌図録	43 澱江茗醼図録	44 雨竹居士薦筵図誌	45 楓川追薦録	46 亦復一楽茶会図録	47 渓村翁薦事図録	48 角山簪篁翁薦事図録	49 昌隆社五十周年記念茗讌図録	50 雙軒庵記念茗讌図録	51 学温園茶会図録
	京都	京都	大阪	愛知	東京	東京	大阪	東京	京都	鳥取	大坂	京都	愛知	高松	長野	京都	大阪	東京	大阪	愛知	愛知	福岡	東京	東京	大阪	愛知	京都	愛知	和歌山	長崎	京都	東京	東京	大阪	長浜	大阪	京都	東京	東京	京都	岐阜	大阪	大阪	大阪	東京	京都	山県	大阪	大阪	大阪	愛知
	1852	1860	1863	1865	1870	1873	1875	1875	1876	1878	1879	1880	1880	1880	1880	1880	1880	1883	1883	1883	1886	1886	1887	1889	1893	1893	1894	1894	1896	1896	1896	1898	1898	1899	1899	1901	1903	1903	1903	1908	1908	1909	1909	1913	1916	1918	1920	1922	1926	1926	1926
茶席数	5	1	15	1	1	1	1	11	24	1	1	1	1	1	3	4	8	1	10	2	1	2	3	1	1	1	2	5	1	1	1	4	1	1	3	1	1	2	2	11	1	1	6	6	6	6	1	7	8	1	2
机(茗主用)	2		2					1							2					1																															
机(客用)	4		12	1				9	3	1		1			1	3	3		4					1				2		1									1												
敷物(茗主用)								9								1			3																1								1					1				
敷物(客用)								1								2	2						3			1		1			1	4			3			2	1	9			2	4	5	4		6	8	1	2
茶具敷									1								1			1					1									1		1		2	1	9			6	6	3	6		7	8	1	2

〔表 5-4〕客の座り方の変遷

江戸末期	明治前半	明治後半	大正期
客は机を拠り所として、自由に座る	客の机は減り、煙草盆が客の位置を示す。（まだ正客を表さない。）	客用の敷物が登場 床を意識した敷物の配置	客用の敷物が固定化 煙草盆が正客を表す　茶具敷が登場

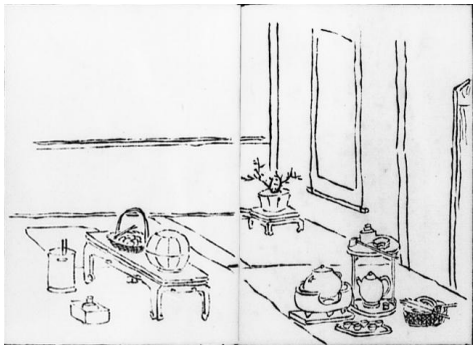


第２項　客の座り方の変遷

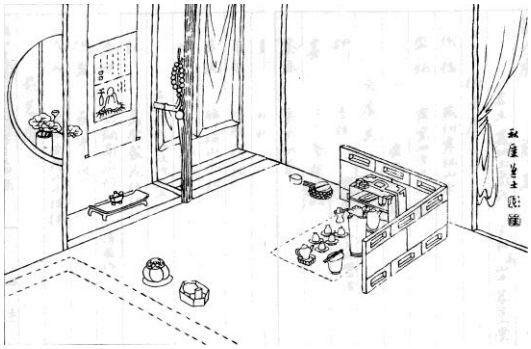
客の座り方には、前節で述べたように、机や敷物などの床上装置が大きな役割を果たすため、それらに注目して考察を行う。考察にあたり、茗主と客それぞれの机と敷物の出現状況を〔表 5-3〕にまとめた。また、時代的考察は地域的考察の中で地域ごとに行った後、全体の傾向を述べることとする。客の座り方の変遷を〔表 5-4〕に示す。

（1）大　阪

江戸時代後期の史料３『青湾茶会図録』には、茶席 15 席のうち 11 席に菓子器の載った机が置かれており、客はそれを囲むようにして茗主と対峙する。明治前期になってからも机は引き続き確認でき、さらに机の下に大判の敷物が敷かれるようになる。江戸時代後期と同じく客は机を囲むように座るが、史料８『青湾茗醼図誌』では 11 席のうち９席、史料 16『直入翁寿筵図録』では４席のうち３席にあったものが〔図 5-21〕、史料 19『分史翁薦事図録』では 10 席のうちの４席となり、徐々にその数を減らしていく。客は机という拠り所が無くなるため、机を囲んでいた時のような円形ではなく、部屋の形状に合わせてＬ字型や直線状に並びを変化させていく。この間、煙草盆は既に茶席の中の客の近くに置かれているが、客の位置を示す程度で正客の位置は表していない。また、机の減少に代わって登場した茶具が置かれる敷物にも注目したい。明治後期になると、この敷物は「茶具敷」と呼ばれる小さめの敷物になり、茗主の位置と向きを的確に示す道具となる。この頃の客の座り方は、机が完全に姿を消したことで、直線状に並ぶことが多くみられる。その後、明治末から大正にかけては史料 43『澱江茗醼図録』に客用の敷物が登場したのを初見として、敷物が客の位置を示す道具として、ほとんどの席で床前にＬ字もしくは直線状に並べられるようになる。これは煎茶の形式化が進んだことを示しており、史料 48『角山簪篁翁薦事図録』以降は完全に形式が確立し、煙草盆、冬期においては手焙が客席に必ず置かれ、それらが正客の位置を示すようになる〔図 5-22〕。



〔図 5-21〕『直入翁寿筵図録』客用机



〔図 5-22〕『角山簪篁翁薦事図録』煙草盆・手焙

（2）京　都

京都では、大阪と異なり江戸時代後期の史料１『茗醼品目』でこそ、菓子器の載った机が見られるものの、明治期においては史料９『円山勝会図録』に２席、史料 17『雲烟供養図録』に３席見られるのみで、客はどの時代においても床前にＬ字型もしくは直線状に並んで座る。なお、挿図の描写が緻密な史料 17『雲烟供養図録』では、客の位置を示す道具として机・煙草盆・敷物がすべて登場し、敷物は正方形および円形で、中心に机が置かれ、客はこの机を囲んで敷物の上に座る。一方、机の無い席では２つの煙草盆が直交して置かれ、それらに沿って客はＬ字型に並ぶが、煙草盆はまだ正客の位置を示さない。史料 31『清楽欣賞（中邨楼茶会)』において、関西で初めて客用の敷物が床前にＬ字型に敷かれると、明治末から大正時代にはそれに加えて茗主の位置を示す茶具敷も登場し、大阪と同様に茗主と客の位置関係が形式化していく。史料 46『亦復一楽茶会図録』ではさらに煙草盆が正客の位置を示すようになり、配置の形式が確立する。

（3）東　京

他の地域と異なり、史料 24『随意荘雅集録』・39『梅村寿筵図録』で菓子器の載った机が見られる他は、机は見られず、客は床前にＬ字型もしくは直線状に並んでいる。明治前期において史料５『金洞餘音』では客の位置を示す敷物は見られないが、史料 23『柳嶋清賞』になると他の地域に先駆けて座布団のような個別の敷物や長方形の敷物が床前にＬ字型に敷かれ、客の位置が固定されるようになる。以後ほとんどの茶会に客用の敷物が用いられ、明治後半から大正期にかけてはそこに煙草盆が加わって正客の位置を示すようになる。そして史料 38『盆栽瓶花聚楽会図録』には茶具敷も登場しており、関西と同様に配置の形式化が認められる。

（4）愛　知

京都とよく似た傾向を示すが、比較的長く机が用いられている。史料４『茶郷一楽』では菓子器を載せた机があるが、客はこの机ではなく茗主を囲むように位置している。明治前半には煙草盆が客の位置を示すようになり、中埜家で開催された二つの茶会においては、二つの煙草盆が直交するように置かれ、それに沿って客がＬ字型に並んでいる。そして明治後半の史料 26『酔花図誌』で客用の敷物が敷かれ、大正期には史料 51『学温園茶会図録』で茶具敷が登場し、他の地域と同様に配置が形式化を見せる。

第４節　小　結

しつらいについては、各道具でそれぞれ時代的な傾向が見られるが、特に敷物で時代的な傾向が見られ、敷物の変遷に伴って、客の座り方にも変化が見られた。敷物は席種および時代によって、敷き方や形状に差異があることがわかり、江戸末期から明治前半の初期の煎茶会においては、戸口や開口部に掛けられた帳とともに、部屋を中国風に演出する装置として、重要な役割を果たしていた・また、茶具に分類されている茶具敷は明治中頃に登場してから、明治末に盛んに用いられるようになると、現代に至るまで使用される重要な道具の一つとなっている。これは、家元制度の確立と時期を同じくしており、煎茶に作法ができたことで茶具の配置が定型化し、茶具を配置する範囲を明示する装置として茶具敷が常用されたと考えられる。このように、敷物は席中の道具や人物の位置を限定させる役割を果たす道具であるといえる。また、他に香具のうち香合が烏府に入る例や、煙草盆の配置など抹茶の影響が見られたことも指摘しておく。

茗主と客の位置関係は、床のある茶席では、②床型の右床の平面型が多く、全体的な傾向として茗主は脇前に位置し、客は床前に位置して開口部を背にして座る。さらに④⑦⑨の平面では、床および床脇に飾られた道具の鑑賞を妨げないよう「下」に、他の平面では床の脇や側面の壁面に茶道口があることが多いため「上」に茗主が位置することが多い。茗主の向きは、床隣および脇前上では床前上を見るように横向きで座り、脇前上および床前・脇前下では正対して座り、ほとんどの席で床に向くような形で座る。また、床の左右で席数や茗主の位置および向きに大差はないため、煎茶席においては床の左右、点前における本勝手、逆勝手はさほど意識されておらず、平面型に合わせて自由に点前を行っている。元来煎茶は可動式の炉である涼炉を用いることで、部屋の平面形に縛られることなく、自由に点前の場を設定できるのであるから、それを証明する結果を得られたといえる。

床の無い茶席では、特筆すべき傾向は見られないものの、外部に面する開口部や茶道口など、開口部を意識しつつ自由に配置が行われている。

客の座り方の変遷は、江戸時代には京阪において客は菓子器を載せた机を囲んで位置していたが､明治前期になるとその傾向は弱まりを見せ､代わって客用の敷物が登場し、客はそこに位置するようになる。そして明治の中頃には、まず東京で客用の敷物が床を意識したＬ字型の配置をとるようになり、明治後期には京都・愛知で、明治末に大阪で

も敷物のＬ字型の配置が見られるようになる。また、明治後半は大阪で他の地域に先駆けて、茗主と茶具の位置を示す茶具敷が登場し、その後明治末に京都・東京で、大正には愛知でも見られるようになる。このように明治末までには、客の位置を示す敷物のＬ字型の配置と、茗主の位置を示す茶具敷が各地でみられるようになり、配置の形式化が確認できる。最終的にはここに正客の位置を示す煙草盆が加わることで茗主と客の配置が確立する。

第６章

結　論

第６章　結　論

本研究は、日本の喫茶文化における煎茶席について、煎茶会図録から同時代の煎茶席の空間特性に関する分析と考察をまとめたものである。

煎茶文化は、自由を失った茶の湯、禅僧社会への批判と、中国文人への憧憬から、江戸中期に売茶翁高遊外によって始まり、江戸末期頃までは風雅を好む文人に受け入れられた。明治以降は、煎茶を知る幕末の志士達が財政界の中心を担うようになると、茶の湯の立場に取って代わるように支配権力層へ広まった。都市部では骨董商や政治家が中心となり、地方では地元の有力者によって煎茶会が開催され、特に大阪・京都・東京・愛知の４地域で煎茶会が盛んに開催された。各地の煎茶会には、度々登場する骨董商や文人がおり、彼らをとおして煎茶が全国に波及した。

煎茶会が開かれると、当日の席の構成、飾られた道具の目録、席の様子を描写した挿図を収録した茶会記としての煎茶会図録が、記念として後日刊行された。これは非売品として配布される場合もあれば、販売される場合もあった。中でも煎茶会図録の先駆『青湾茶会図録』（史料３）は、挿図、道具の目録で構成された優れた内容の画期的な図録で、後の図録に大きい影響を与えた。特に明治前半は煎茶への注目度が一気に高まる一方で、煎茶への理解が流行の速度に追随できず、この図録は教科書的に参考にされたと考えられる。また、明治以降は道具の鑑賞に関心が移り、そこへ骨董商の介入により、煎茶道具のカタログ的な図録が増え、明治末以降は写真による挿図を収録するものも登場した。

これらの図録によれば、煎茶会の会場は、大阪は青湾の網島、京都は東山の円山近辺や南禅寺界隈、東京は隅田川沿岸や上野の不忍池（小西湖）というように、各地域における景勝地で、特に水辺を好んで煎茶会が開催された。寺院・社家や個人邸、料亭が多く使用され、楼上から眺望を楽しめる建物が好まれた。これらは必ずしも煎茶の茶事にのみ使用する煎茶専一の空間ではなく、既存の座敷を煎茶会の会場として使用している場合が少なくない。これは、元来清風を理想とした煎茶においては、その茶事空間も自由であったためであると考えられる。ただし、これらにも煎茶席独自の意匠的特質の存在は指摘されているとともに、少数ながら、数個の茶会では植物屋根の亭を仮設で建てて茶席を構えており、作法や炉に縛られる茶の湯との違いを明確に表明している。

煎茶会の構成は、江戸末期から明治前半は前席と茶席を主とした２席以上の席で構成され、床の無い席や亭・船などにも茶席を設けて、文人主催による茶事に主眼を置いた

趣きのある茶会が開催されていた。こうした中で明治前期からは、一時揮毫席や奏楽席など文人の嗜みを取り入れた席が見られるものの、骨董商が煎茶会に参加するようになったことで、道具への関心も高まりを見せ、展観席としての前席が分化して、盆栽陳列席などの単独の展観席が登場し、その後も骨董商らの支持を受けて一気にその数を増やしていく。この単独の展観席は、前席の道具が質・量とも充実して独立したもので、既に江戸時代には後の盆栽陳列席を思わせる内容の前席も確認できる。このような席の成立には、各地で時代差が見られ、大阪は他の地域の先駆的存在として、揮毫席や盆栽陳列席、模擬店など各時代の流行の発祥地となっている。京都は茶事、東京は道具の鑑賞に主眼が置かれる傾向にあり、大阪は茶事と道具の鑑賞の均整が取れている。

煎茶空間はこのような席の構成の変化に則した形で変化を見せることになる。明治前期までは茶事に主眼が置かれていたが、明治後期になると道具の鑑賞に人々の関心が移るのに伴い、床のみの平面から道具を飾る場である床脇や付書院が採用された。さらに、建築行為の中でも意匠に関心が注がれ、特に座敷飾では意匠性に富んだ棚付床や琵琶床など独創的意匠が好まれるようになった。大正期には家元制度が確立することで生じた茶事の形式化に伴い、用いられる平面も固定化した。この座敷飾への意識は地域によって異なる傾向を示し、東京では展観席が多く、茶事よりも道具の鑑賞に重点が置かれ、床脇や付書院からなる席が用いられた。一方、京都では茶席が大半を占めており、茶事を楽しむことが重視され、その中で席の主題を明確に表せる床のみの席が好まれ、大阪は席種も平面構成も多彩であり、趣向が凝らされた茶会が開催されていた。

こうした煎茶空間の中で、人物や道具の配置を読み解いていくと、床のある席では茗主は脇前に座りながらも床を向くような形で座り、客が床前に位置することが多く、やはり床を意識した配置で客をもてなしていた。床のない席では、煎茶席の特徴の一つである開放的な空間を作り出す広い開口部を意識しつつも、自由な人物配置がみられた。

ここで顕著に時代的な変化を示したのが、人物の配置を示す装置である敷物や机の用いられ方による客の座り方であった。江戸から明治前期には菓子器の置かれた机を拠り所として、比較的自由に着座していた。しつらえとして、座敷内部に机を置いているのは、やはり中国文化への憧れから着想したものであろう。その後、客用の敷物が登場したことで客の位置が限定されるようになり、明治後期には道具が飾られている床を意識した敷物の配置となった。この流れはその後も踏襲され、明治末から大正にかけての煎茶道の確立によって、さらにそこへ正客の位置を限定する煙草盆が加わることで、茗主

と客の配置が確立された。明治末以降の煎茶道の確立に伴った形式化には、少なからず抹茶の影響も見てとることができたといえる。

ただし、こうした形式化の流れの中でも、床の左右で席数や茗主の位置および向きに大差はなかったことから、座敷の平面型によらず、座敷飾と開口部、人物と道具の配置の均衡を考慮しながら自由に席をしつらえていたと思われる。こうした自由な配置を可能にしたのは、煎茶特有の道具である可動式の炉、つまり涼炉の存在が大きな役割を果たしたといえる。

以上、本論文は煎茶会図録を基礎資料に、茶会の構成や会場、関係者について触れながら、煎茶会の流行の傾向を明らかにするとともに、同時代の煎茶席の平面構成に注目し、道具や人物の配置の分析から、江戸末期から明治・大正期にかけて隆盛した煎茶文化において、やはりその根底には自由なお茶を楽しむ精神の存在が認められた。

参考文献

(1)横山正「煎茶の空間」『 図説煎茶Ⅰ伝統と美』講談社、pp56-74、 1982.1

(2)横山正「文人の好みとその空間」『茶道聚錦 7 座敷と露地(1)』小学館、pp252-262、1984.11

(3)麓和善「煎茶席と中国園林建築」『日中建築』第 46 号、日中建築技術交流会、pp14-21、1999.2

(4)麓和善「煎茶空間 その文献史的特質」『茶道学体系六茶室・露地』淡交社、pp205-254、2000.4

(5)麓和善「煎茶席と近代和風住宅」『庭園学講座Ⅻ 近代庭園と煎茶』京都造形芸術大学日本庭園研究センター、 pp73-88、 2005.8

(6)麓和善「煎茶席の意匠的特質」『家具道具室内史』第 5 号、pp.53-89、2013.5

(7)尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎『庭と建築の煎茶文化－近代数寄空間をよみとく』思文閣出版、2018.12

(8)小葉田淳・内藤昌 監修、岡本真理子編『近世建築書―座敷雛形』日本建築古典叢書第５巻、大龍堂書店、1985

(9)楢林 忠男『煎茶の世界』徳間書店、 1971

(10)楢林忠男「青湾茶会図録解題」『日本庶民文化史料集成』第 10 巻 数寄、三一書房、 pp121-122、1976.11

(11) 池井望『盆栽の社会学－日本文化の構造－』世界思想社、1978

(12)『現代煎茶道事典』主婦の友社、1981

(13) 青山清『煎茶道美術大観 －煎茶の空間－』婦人画報社、 1986

(14) 宮崎修多「茗醼図録の時代」『文学』第七巻第三号、岩波書店、p.33～45、1996

(15)『煎茶の世界 しつらいと文化』煎茶文化研究会、雄山閣、1997

(16) 小川後楽「現代の煎茶」『茶道学大系 第一巻』淡交社、1999

(17) 守屋雅史・舩阪富美子「煎茶関係参考文献目録」『野村美術館研究紀要 第 18 号』野村文華財団、2009

既発表論文一覧

第２章

・麓和善、櫃本聡子、濱田晋一：煎茶会図録の書誌的考察－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究　その 1－、日本建築学会計画系論文集 755 号、pp209-219、2019.1（査読付論文）

第３章３節

・櫃本聡子、濱田晋一、麓和善：煎茶会図録にみる煎茶会の会場－煎茶会図録による煎茶席の空間特性に関する研究　その 2－、日本建築学会計画系論文集 763 号、pp1987-1992、2019.9（査読付論文）

謝辞

本論文は筆者が名古屋工業大学大学院工学研究科社会工学専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものである。名古屋工業大学大学院工学研究科社会工学専攻教授麓和善先生には、学部４年生の頃より指導教官として熱心な指導を賜り、この度の研究実施の機会を与えて戴き、休学を挟みながらの五年間という長きに渡って終始ご指導と激励を賜った。ここに深謝の意を表する。椙山女学園大学大学院生活科学研究科教授村上心先生、名古屋工業大学大学院工学研究科社会工学専攻教授北川啓介先生，並びに，同専攻准教授夏目欣昇先生には副査としてご助言を戴くとともにご指導を戴いた。ここに感謝の意を表する。煎茶道賣茶流家元高取友仙窟氏には、本研究の要である煎茶会図録の資料を提供して戴くとともに、ご厚情により煎茶道賣茶流の稽古をつけて戴いた。ここに深謝の意を表する。学友の関東学院大学理工学部助手大谷友香氏、並びに、本専攻麓研究室の各位、同窓生には、多々ご助力を戴いた。ここに感謝の意を表する。

最後に、本研究の活動を理解し、応援と励ましを戴いた、公益財団法人明治村の同僚各位、並びに両親、夫と娘に心から感謝する。

令和三年小寒　自宅にて

博　士　論　文

煎茶会図録による
煎茶席の空間特性に関する研究
（資料編）

2021 年

櫃本　聡子

目次

1.『茗讌品目』 … 1
2.『春薦餘事』 … 2
3.『青湾茶会図録』 … 3
4.『茶郷一楽』 … 10
5.『金洞餘音』 … 11
6.『(新古書画展観目録)』 … 12
7.『熊谷酔香居士追福書画展観録』… 12
8.『青湾茗醼図誌』 … 13
9.『円山勝会図録』 … 18
10.『栗渓雅会略誌』 … 28
11.『藤本鉄石先生薦場餘録』 … 29
12.『遺聲録』 … 29
13.『書画煎茶清楽図録』 … 30
14.『舟皐山房小集略記』 … 31
15.『深志茗讌図録』 … 31
16.『直入翁寿筵図録』 … 34
17.『雲烟供養図録』 … 38
18.『追遠薦新図録』 … 42
19.『分史翁薦事図録』 … 43
20.『清娯軒茶筵図録』 … 49
21.『招鶴亭茗醼図録』 … 52
22.『楳仙先生古稀筵展観録』 … 54
23.『柳嶋清賞』 … 54
24.『随意荘雅集録』 … 56
25.『墨縁奇賞』 … 58
26.『酔花図誌』 … 59
27.『竹洞竹渓翁建碑薦事餘録』 … 60
28.『淇水翁薦事図録』 … 61
29.『老古茗筵図録』 … 66
30.『石癡翁追福展観録』 … 66
31.『清楽欣賞(中邨樓茶会)』 … 67
32.『清賞余録』 … 68
33.『万翁華甲醼誌』 … 71
34.『竹荘茶醼図録』 … 71
35.『掲燈院小祥薦事会記』 … 73
36.『蒹葭堂誌』 … 75
37.『林華園薦事図録』 … 75
38.『盆栽瓶花聚楽会図録』 … 76
39.『梅村寿筵図録』 … 81
40.『東山茶会図録』 … 83
41.『第二十回 山水清遊会』 … 90
42.『豫章堂茗讌図録』 … 91
43.『澱江茗醼図録』 … 93
44.『雨竹居士薦筵図誌』 … 96
45.『楓川追薦録』 …101
46.『亦復一楽茶会図録』 …106
47.『渓村翁追薦図録』 …109
48.『角山簪篁翁薦事図録』 …110
49.『昌隆社五十周年記念茗讌図録』 …114
50.『雙軒庵記念茗讌図録』 …119
51.『学温園茶会図録』 …121

平面モデル凡例一覧表

（置 ○　掛 ⌂ ）

- **茶具**
  - 炉
    - 涼炉
    - 風炉
    - 火炉
    - 炉台 ⬡
    - 湯鑵
    - 鑵座 湯
  - 水
    - 水注
    - 杓 水
  - 葉
    - 茶心壷 壷
    - 仙媒 仙
    - 袱紗 袱
  - 煎
    - 茶銚
    - 瓶床 銚
    - 茶碗
    - 碗筒 碗
    - 茶托 托
    - 盆 ◎ □
  - 洗
    - 建水 建
    - 滓盂 滓
    - 箸瓶 箸
  - 巾盒 巾
  - 烏
    - 烏府
    - 羽帚
    - 火箸 烏
    - 炉扇 扇
  - 菓子器 菓
  - 茶架
  - 器局
  - 茶盤
  - 提籃
  - その他
    - 炉屏
    - 結界
    - 茶旗 旗
    - 茶具褥

- **抹茶道具**
  - 炉縁 ⬡
  - 風炉
  - 釜 釜
  - 蓋置 蓋
  - 水指
  - 水次
  - 杓 水 次
  - 茶入 入
  - 茶杓 杓
  - 茶碗 碗
  - 建水 建
  - 炭斗
    - 羽帚
    - 火箸
    - 釜敷
    - 鐶 炭
  - 灰器
    - 灰匙 灰
  - 長板
  - 風炉先
  - 菓子器 菓

茗主	主
客	客
壁	
戸口	
窓	
建具	
格子	
高欄	

※床形式欄の○付数字は、第４章３節で分類した平面型を示す。

- **書画**
  - 掛
    - 幅
      - 風鎮 幅
      - 軸竿 竿
    - 聯 聯
    - 額 額
  - 置
    - 巻 巻
      - 巻架 巻
    - 書 書
      - 書匣 書
    - 扇 扇
    - 屏風

- **花具**
  - 花瓶
    - 瓶座 花
    - 花鋏 鋏
  - 盛物 盛
  - 盆栽 盆
  - 盆石 石
  - 水盤 盤
  - 水注
    - 杓 水
  - 器
    - 古銅器
    - 水晶
    - 陶器 器

- **香具**
  - 香炉
    - 炉台 炉
  - 香盒 盒
  - 香筒 筒
  - 香袋 袋
  - 箸瓶 箸
  - 香盆 ◎ □

- **文具**
  - 硯
    - 硯
      - 硯匣 硯
    - 硯屏 屏
  - 墨
    - 墨
      - 墨床 墨
  - 筆
    - 筆
      - 筆架 筆
      - 筆筒 筒
    - 筆舐 舐
  - 紙
    - 料紙
      - 紙匣 紙
    - 紙刀 刀
    - 鎮子 鎮
  - 水
    - 水盂 水
    - 水滴 滴
  - 印
    - 印材
      - 印材盆 印
    - 肉池 肉
    - 印矩 矩
  - その他
    - 腕枕 枕
    - 書架
    - 書具匣

- **仏具**
  - 数珠 珠
  - 如意 如
  - 拂子 拂
  - 喚鐘 鐘
  - 鏡 鏡
  - 像 像
  - 経 経
  - 扇 扇

- **楽器**
  - 琴
    - 琴台 琴
  - 笛 笛
  - 洞簫 洞
  - 琵琶・笙・太鼓 ・

- **酒具**
  - 酒瓶 瓶
  - 盃
    - 盃台
    - 盃洗 盃
  - 肴盂 肴

- **家具**
  - 具列
    - 机・卓・案
    - 架・棚
    - 盆・筒・盤 □ ◎ 筒
  - 椅子
    - 敦 椅
    - 榻 椅
  - 敷物

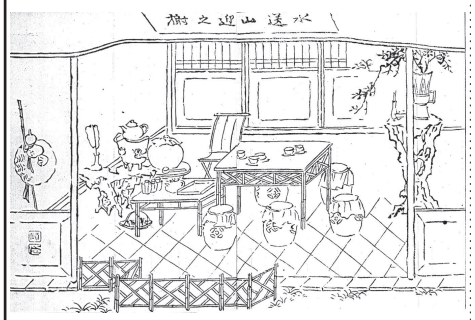
- **屏障具**
  - 帳・簾・幔・幕 帳 簾 幔 幕
    （閉 ―― 開 - - - -）
  - 屏風
  - 曲欄

- **その他**
  - 煙盆 煙
  - 手炉 手
  - 瓢 瓢
  - 笠 笠
  - 杖 杖
  - 提籃 籃
  - 置物 置
  - 箒 箒

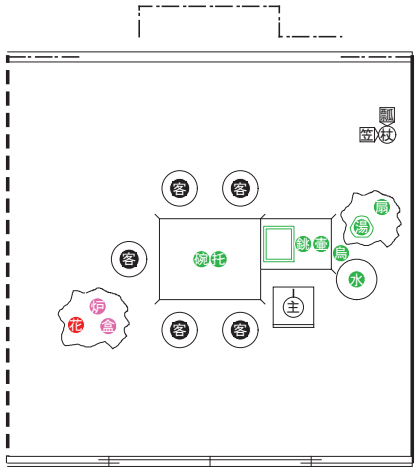
史料名	茗讌品目	著　者	山本梅逸
		開催地	京都
刊行年	嘉永5年（1852）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第三　茶席	床形式	⑬亭　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	四半敷・立礼式
席　種	茶席	書院形式	－		

図

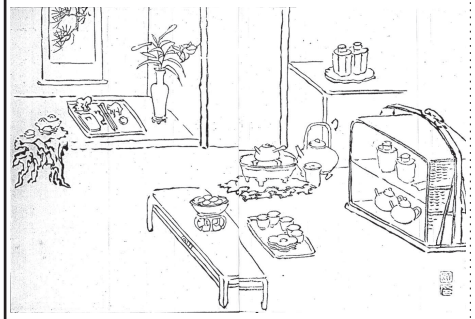


平面モデル

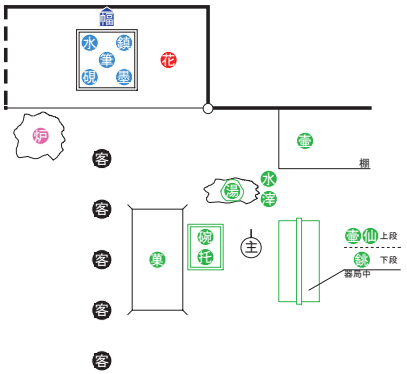


席　名	第四　茶席	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図



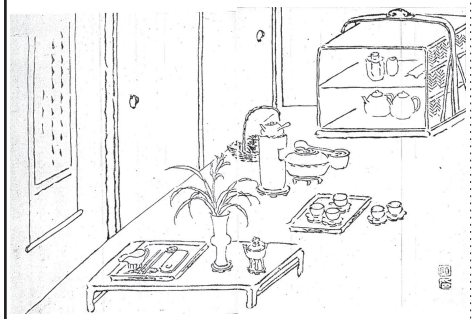
平面モデル



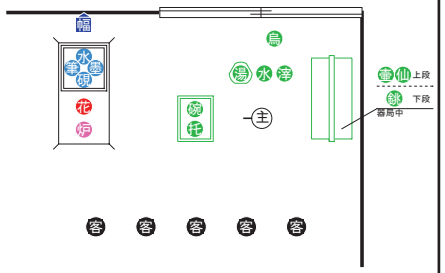
史料名	茗讌品目	著　者	山本梅逸
		開催地	京都
刊行年	嘉永5年（1852）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第一　茶席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図

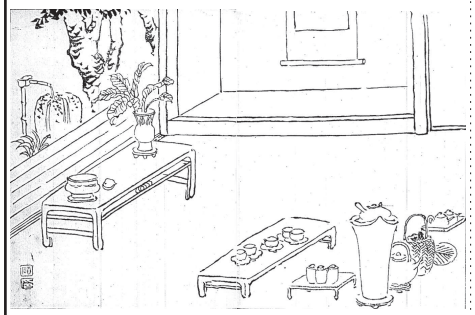


平面モデル

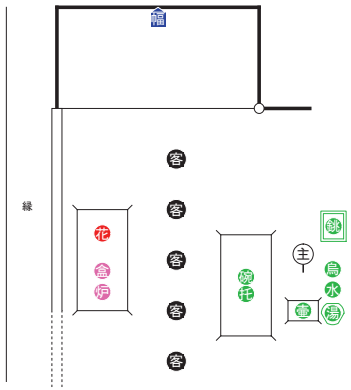


席　名	第二　茶席	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	庭に手水鉢
席　種	茶席	書院形式	－		

図



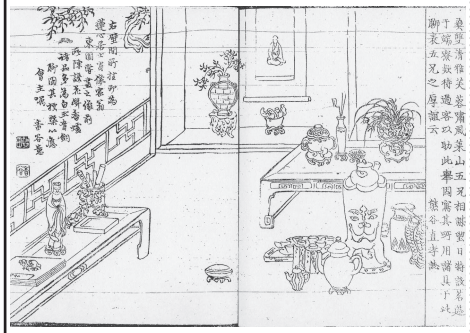
平面モデル



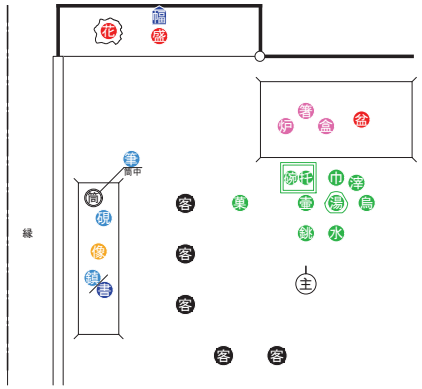
史料名	春薦餘事	著　者	頼立斎
		開催地	京都
刊行年	萬延元年（1860）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	―	床形式	②框床　（柱：―　）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	外部に木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



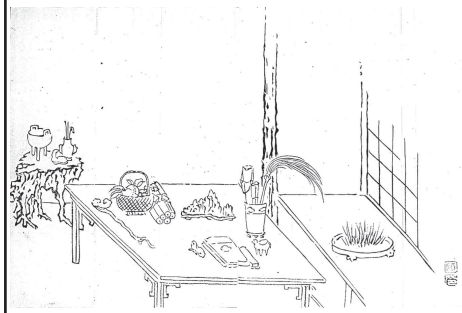
平面モデル



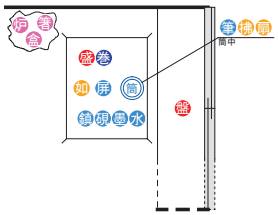
史料名	茗讌品目	著　者	山本梅逸
		開催地	京都
刊行年	嘉永5年（1852）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第五	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	⑩棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

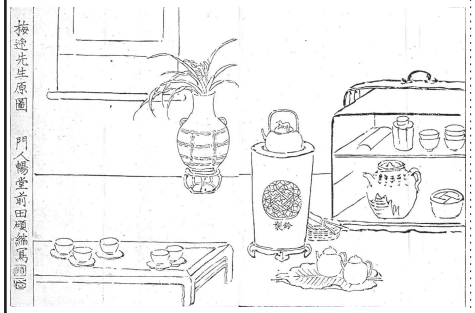


平面モデル

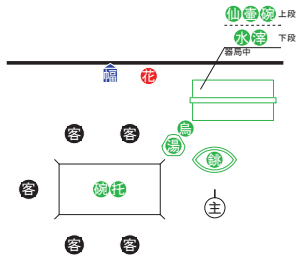


席　名	第五　次席	床形式	①壁床　（柱：―　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



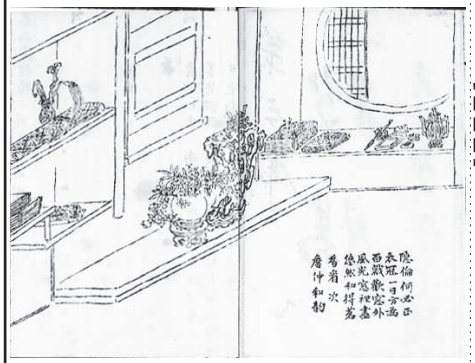
平面モデル



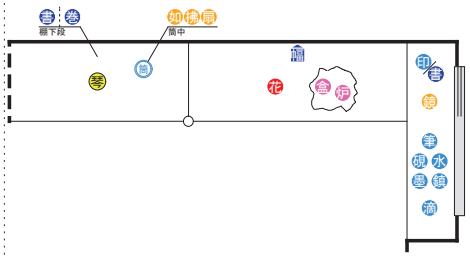
史料名	青湾茶会図録（天巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第三席　捜腸	床形式	⑨框床　（柱：吊柱　）	点　前	―
		床脇形式	通違棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	付書院（円窓）		

図

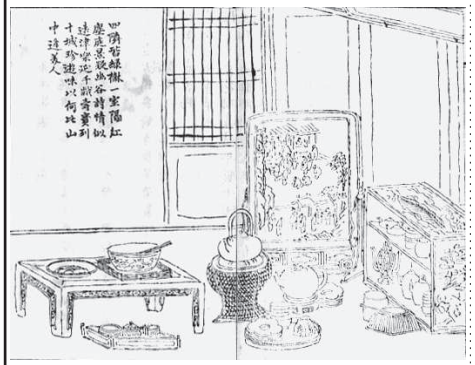


平面モデル

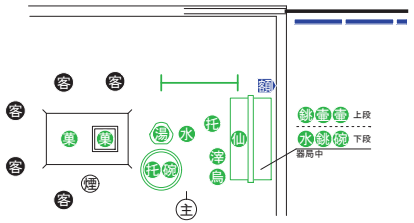


席　名	第三席　捜腸　茶席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	本勝手
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



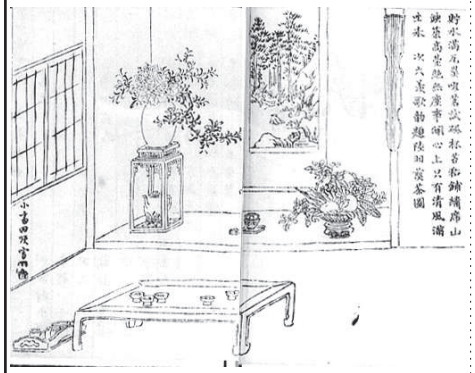
平面モデル



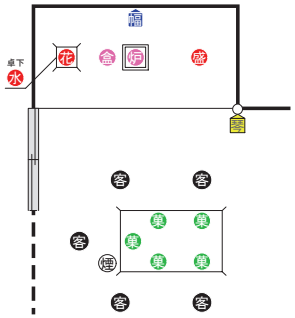
史料名	青湾茶会図録（天巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第一席　喉潤	床形式	②框床　（柱：　丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



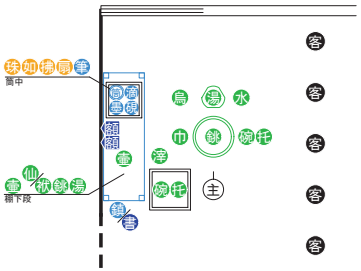
平面モデル



席　名	第一席　喉潤　茶席	床形式	⑪単室　（柱：　―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式			

図

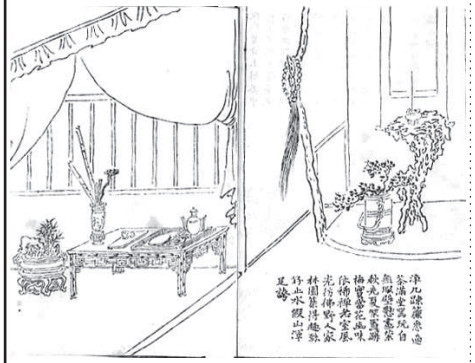
平面モデル



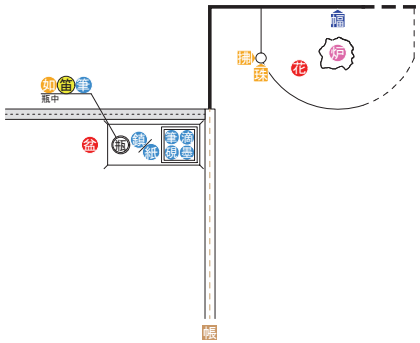
史料名	青湾茶会図録（天巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第四席　発汗　小室	床形式	②框床（曲面）（柱：奇木　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（副席）	書院形式	―		

図

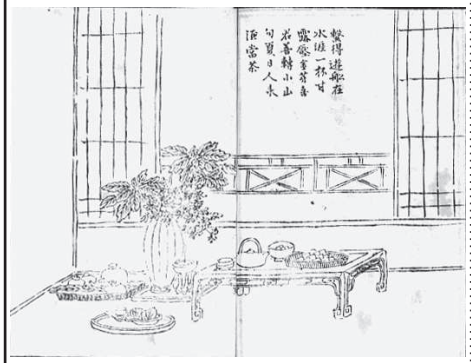


平面モデル

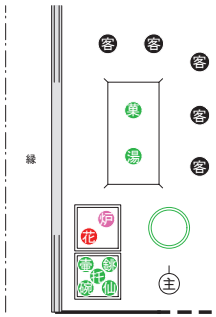


席　名	第四席　発汗副席	床形式	⑭船　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（船房茶席）	書院形式	―		

図



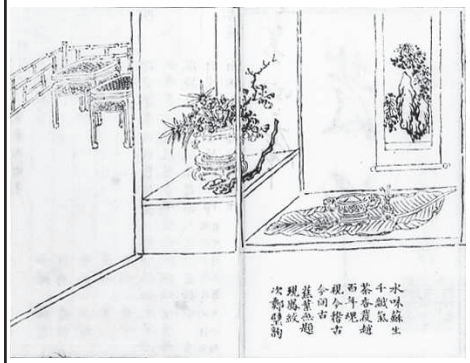
平面モデル



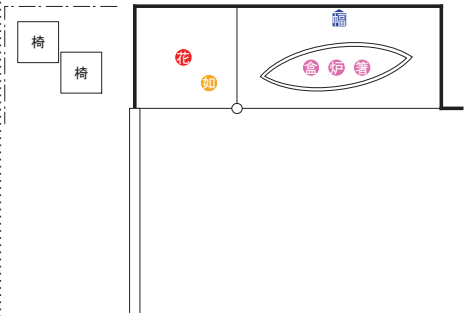
史料名	青湾茶会図録（天巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第四席　発汗	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	庭に榻・歩欄
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

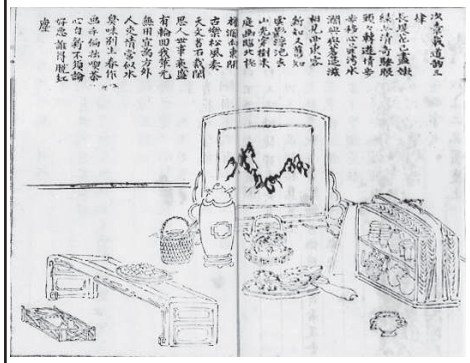


平面モデル

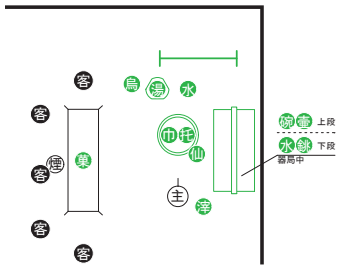


席　名	第四席　発汗　茶席	床形式	⑪　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



平面モデル

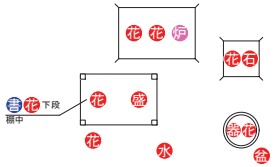


史料名	青湾茶会図録（地巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第五席　肌清副席	床形式	―　　（柱：―　　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

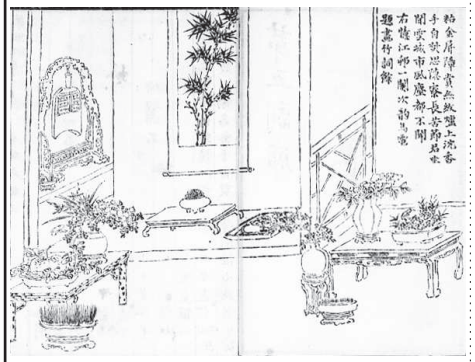
図

平面モデル

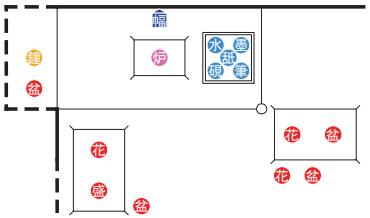


席　名	第五席　肌清副席	床形式	⑥框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



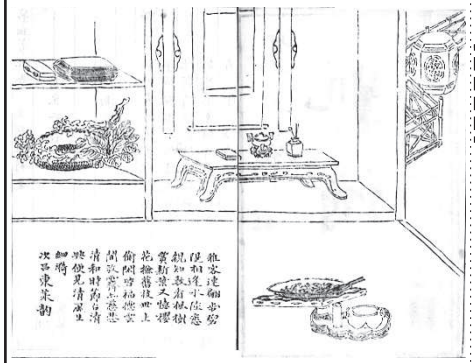
平面モデル



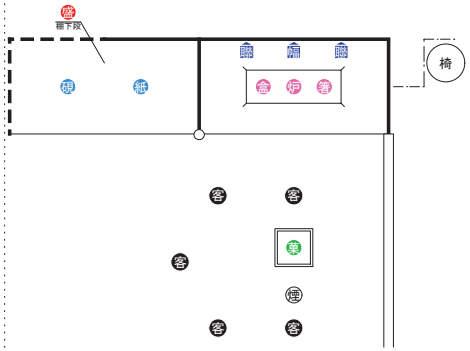
史料名	青湾茶会図録（地巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第五席　肌清	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	通棚	備　考	庭に榻・歩欄
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

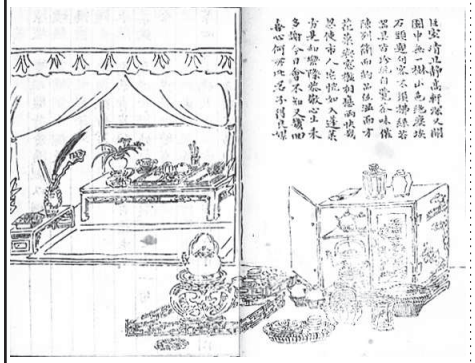


平面モデル

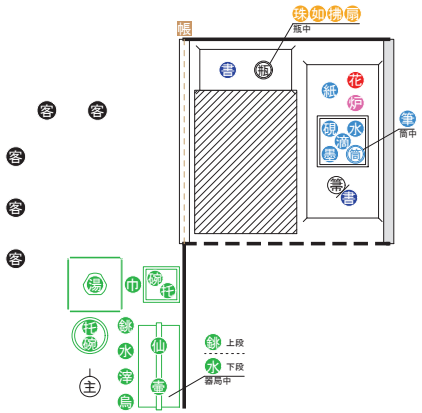


席　名	第五席　肌清　茶席	床形式	⑫複数室　（柱：―　　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



平面モデル

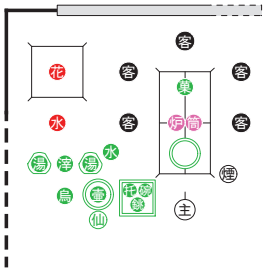


史料名	青湾茶会図録（地巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第六席　通仙副席	床形式	⑭船　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（船房茶席）	書院形式	－		

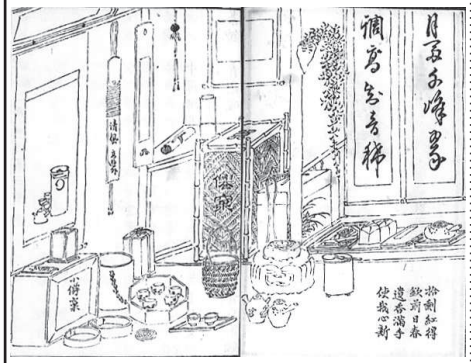
図

平面モデル

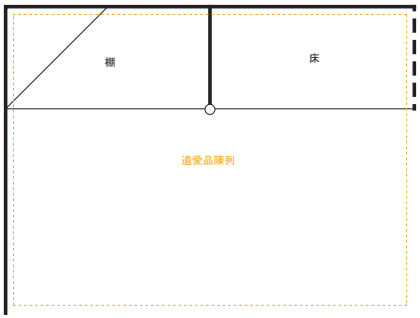


席　名	第七席　風生	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	－
		床脇形式	鯰棚	備　考	
席　種	（展観席（遺物））	書院形式	－		

図



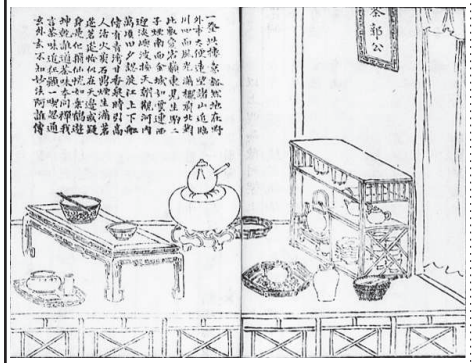
平面モデル



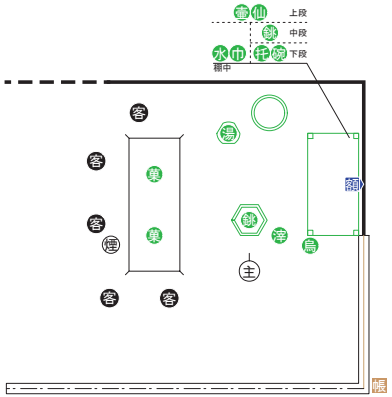
史料名	青湾茶会図録（地巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第五席　肌清副席　茶席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図

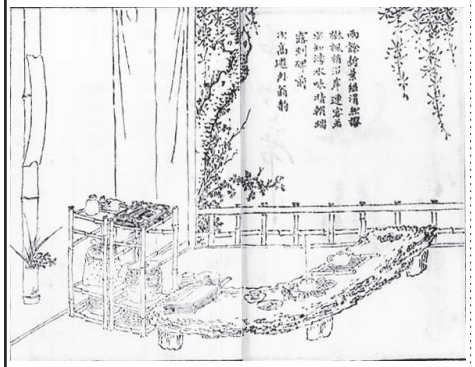


平面モデル

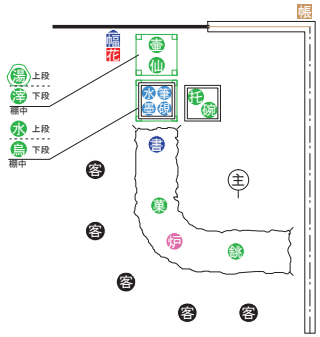


席　名	第六席　通仙　茶席	床形式	⑬亭　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	仮設建物
席　種	茶席	書院形式	－		

図



平面モデル

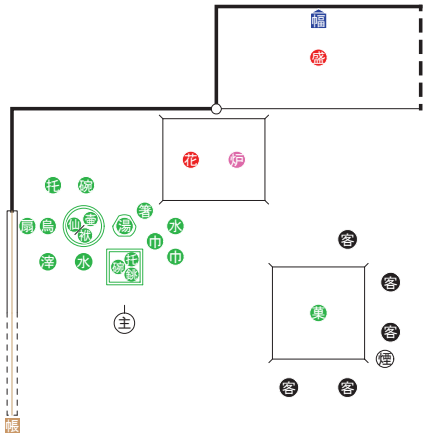


史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第二席　松下園	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

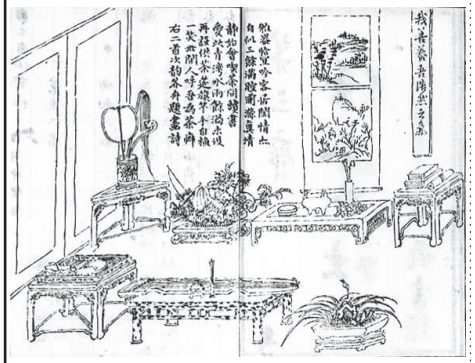
図

平面モデル

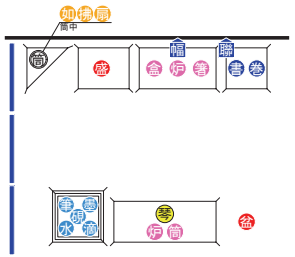


席　名	第三席　任雲社	床形式	①壁床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



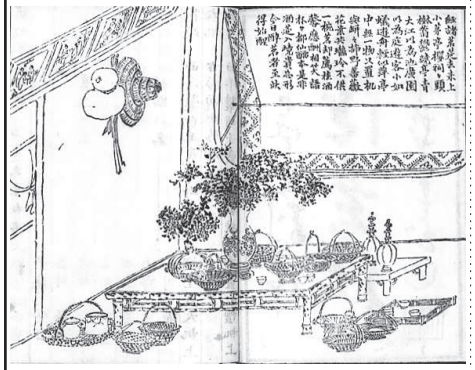
平面モデル



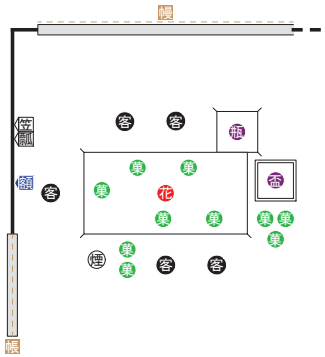
史料名	青湾茶会図録（上:地巻　下:人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第七席　風生副席	床形式	⑭船　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（船房酒席）	書院形式	―		

図

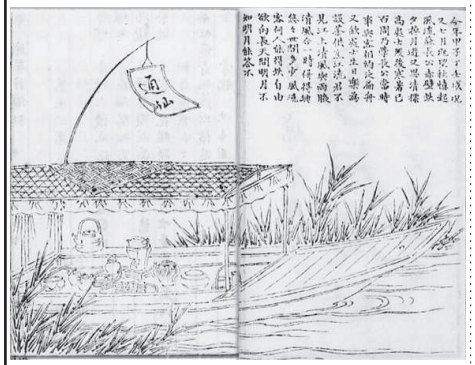


平面モデル

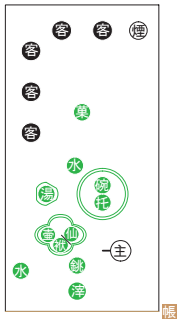


席　名	第一席　華月庵社	床形式	⑭船　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（船房茶席）	書院形式	―		

図



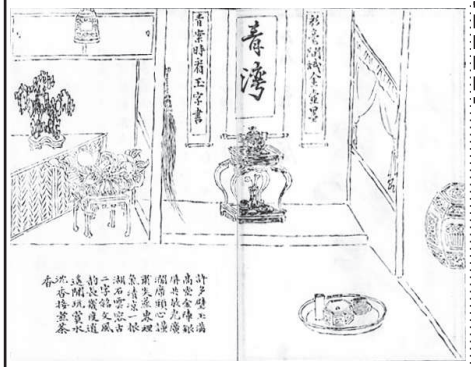
平面モデル



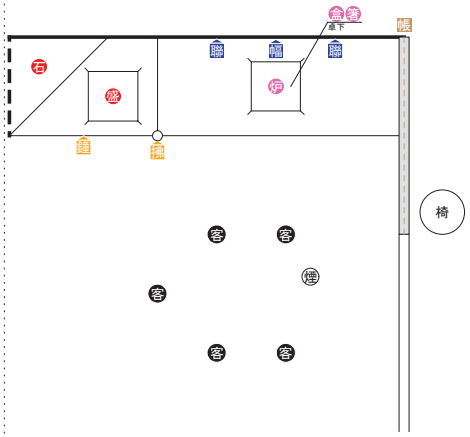
史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第五席　養和堂	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	鮫棚	備　考	庭に榻
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

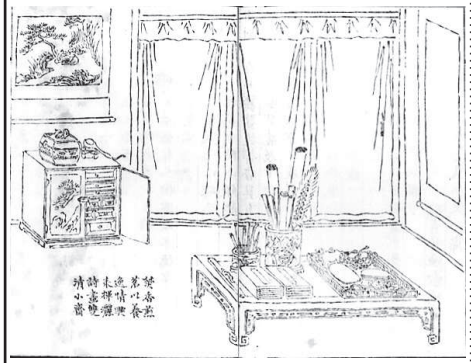


平面モデル

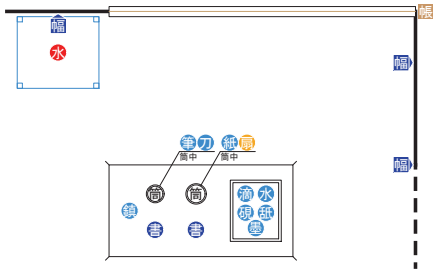


席　名	第五席　養和堂	床形式	①壁床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	―
席　種	（副席）	書院形式	―		

図



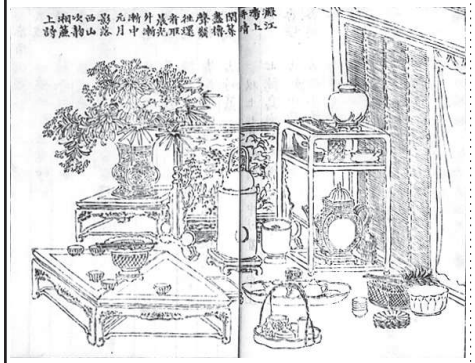
平面モデル



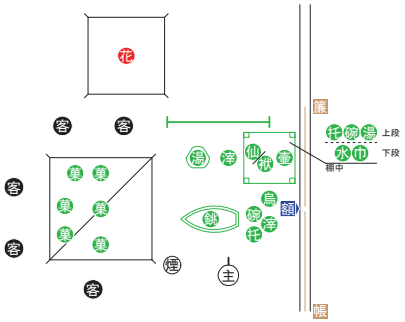
史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第三席　任雲社　茶席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



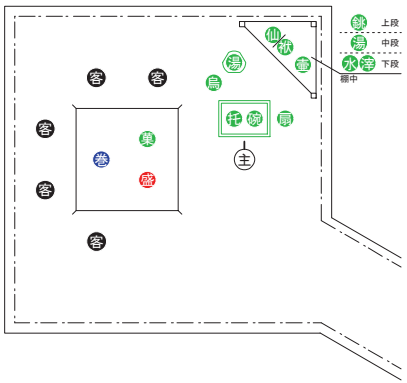
平面モデル



席　名	第四席　洗心堂	床形式	⑬亭　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	池亭、網代の突上げ戸周囲に蓮
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

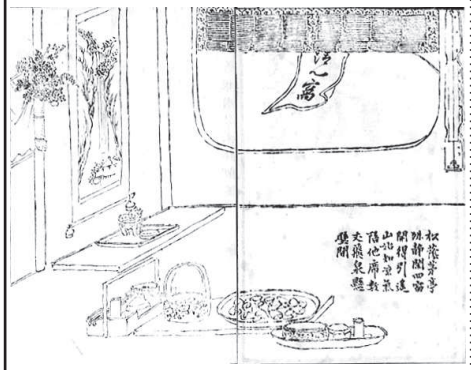
平面モデル



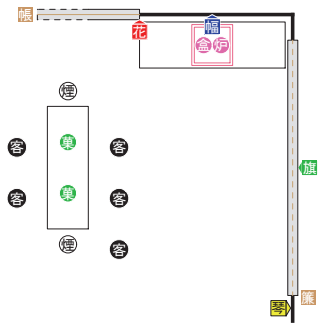
史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第六席　清心窩	床形式	①壁床（置き盤）（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

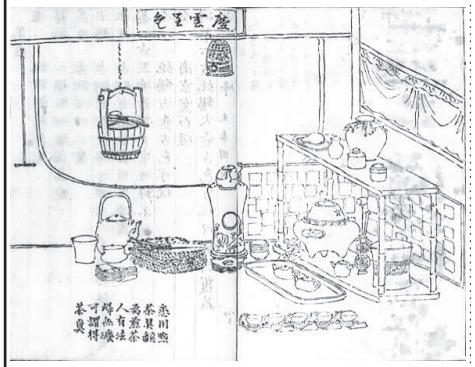


平面モデル

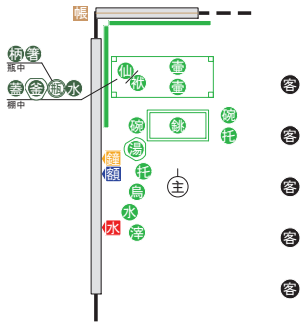


席　名	第六席　清心窩　茶席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



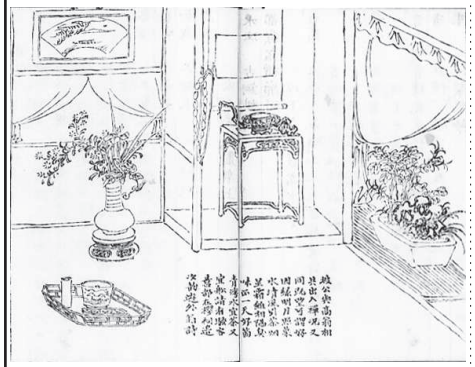
平面モデル



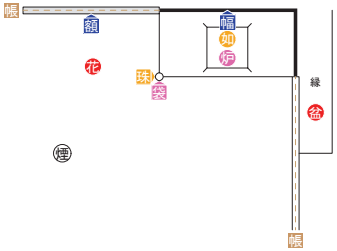
史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第五席　養和堂　小室	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（副席）	書院形式	―		

図

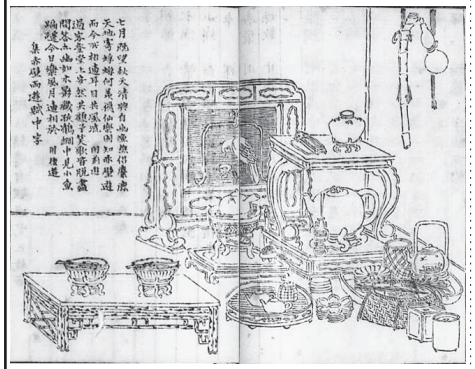


平面モデル

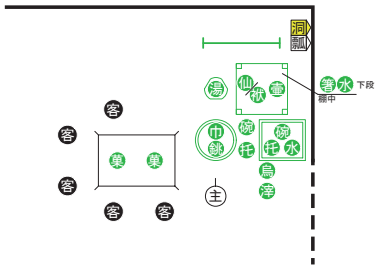


席　名	第五席　養和堂	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



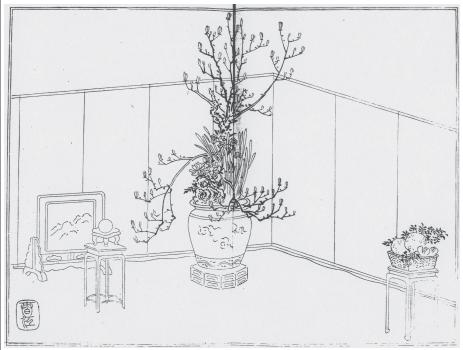
平面モデル



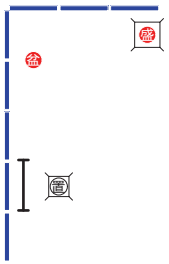
史料名	茶郷一楽	著　者	森本為善
		開催地	愛知
刊行年	慶應元年（1865）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第一席	床形式	― （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



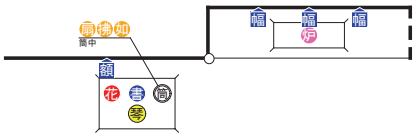
平面モデル



席　名	第一席	床形式	②框床 （柱：丸柱 ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

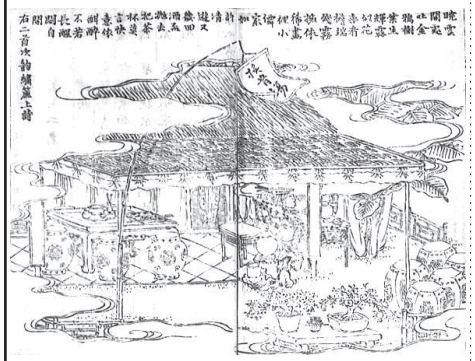
平面モデル



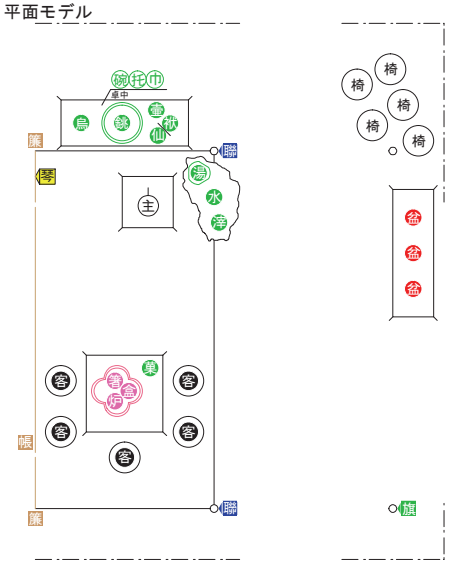
史料名	青湾茶会図録（人巻）	著　者	田能村直入
		開催地	大阪
刊行年	文久3年（1863）	所　蔵	名古屋大学附属図書館

席　名	第七席　換骨場	床形式	⑬亭 （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	四半敷、立礼式 庭に芭蕉・榻・盆栽
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



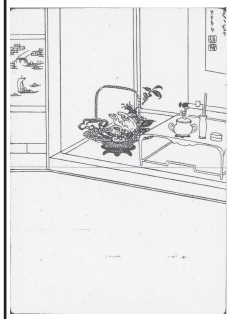
平面モデル

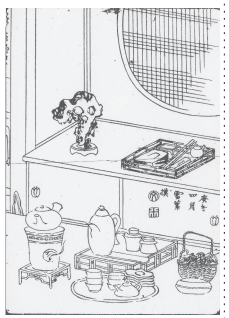


史料名	金洞餘音	著　者	市川万庵
		開催地	東京
刊行年	明治3年 跋（1870）	所　蔵	東京都立中央図書館

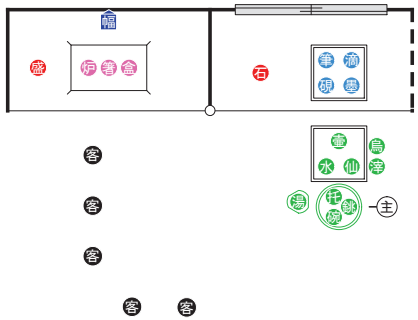
席　名	茶席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	日出棚	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図





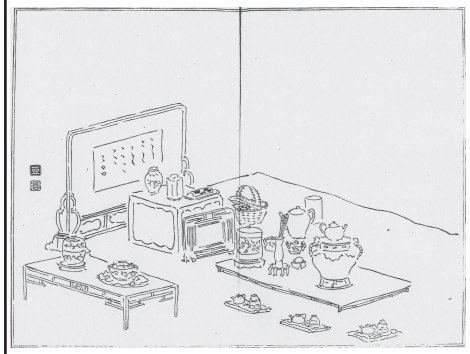
平面モデル



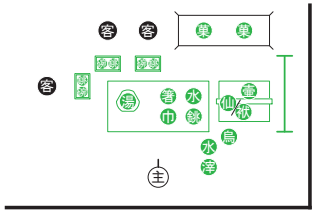
史料名	茶郷一楽	著　者	森本為善
		開催地	愛知
刊行年	慶應元年（1865）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第一席　茶席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



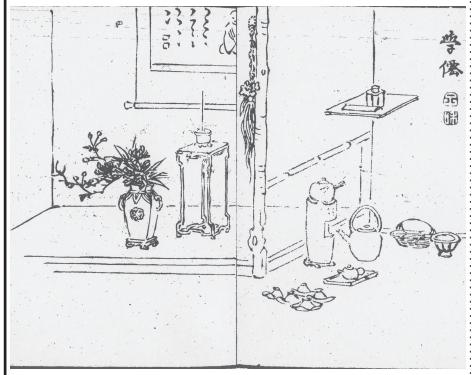
平面モデル



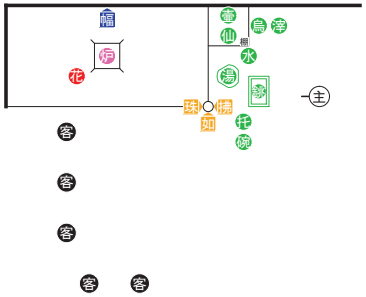
史料名	熊谷醉香居士追福書画展観録	著　者	奥蘭田
		開催地	東京
刊行年	明治8年（1875）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	茶醼	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	床隣
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



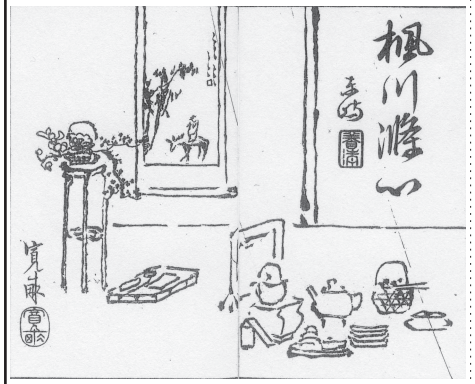
平面モデル



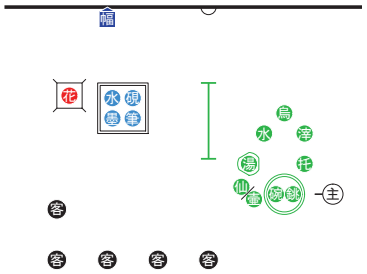
史料名	（新古書画展観目録）	著　者	田沢静雲
		開催地	東京
刊行年	明治6年 序（1873）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	―	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



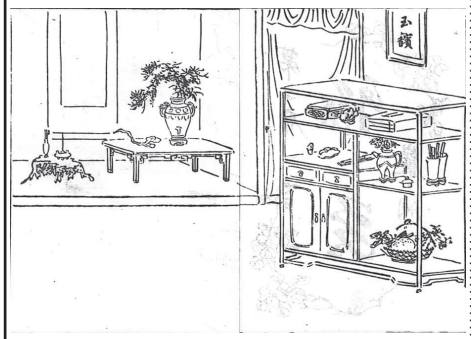
平面モデル



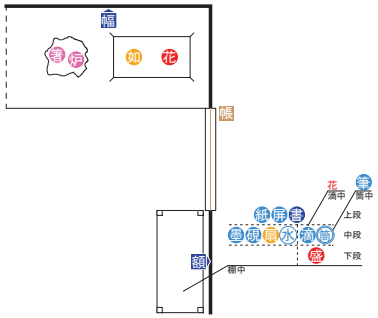
史料名	青湾茗醼図誌（瑞巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第二席　文房	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	－		

図



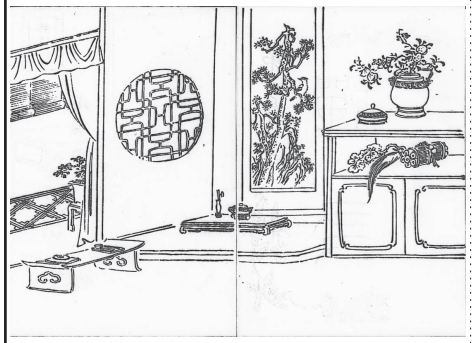
平面モデル



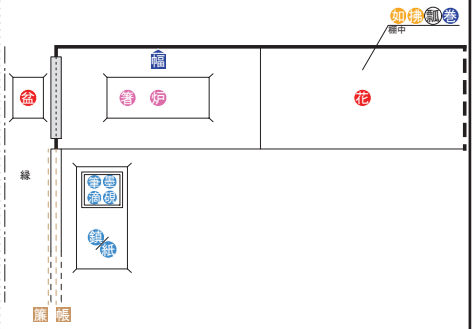
史料名	青湾茗醼図誌（瑞巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第一席　文房	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	書物棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	－		

図

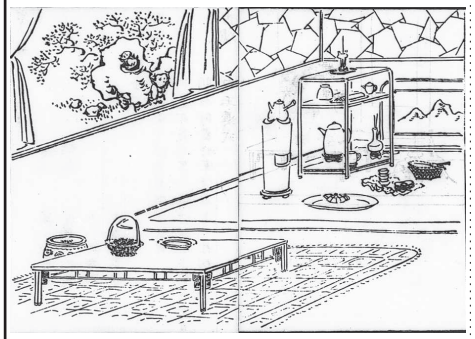


平面モデル

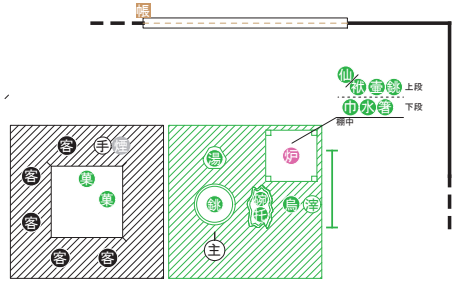


席　名	第二席　茶室	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	庭に木・石
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

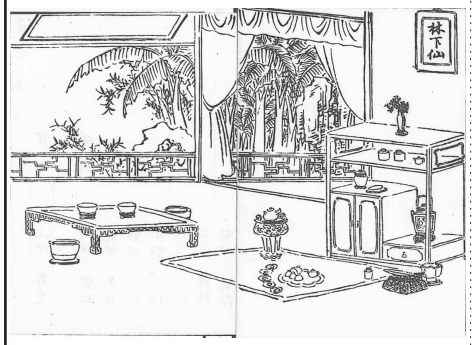


平面モデル

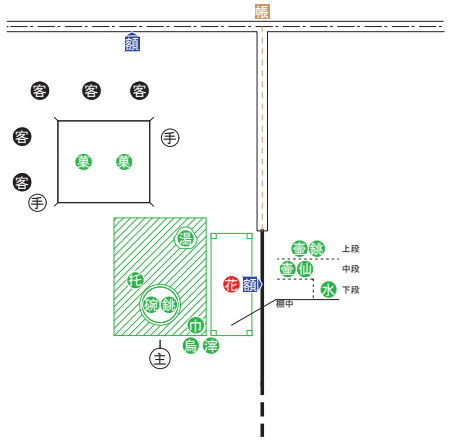


席　名	第一席　茶寮	床形式	⑫複数室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	庭に芭蕉・竹・石
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



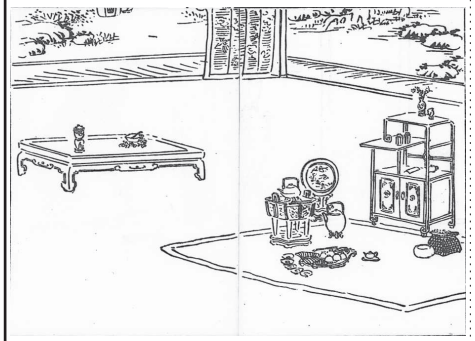
平面モデル



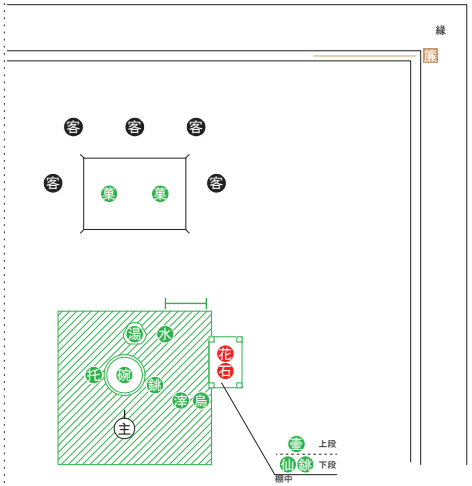
史料名	青湾茗醼図誌（瑞巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　茶席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	庭に榻
席　種	茶席	書院形式	－		

図

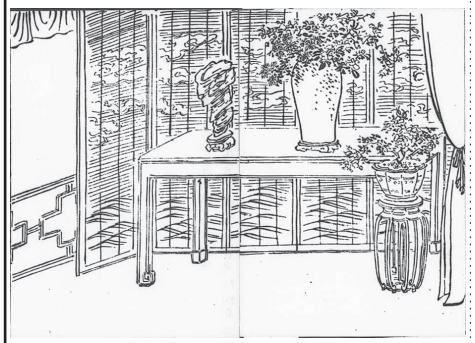


平面モデル

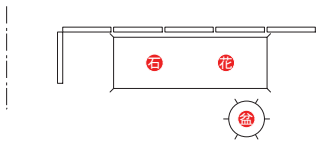


席　名	第三席　外席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種		書院形式	－		

図



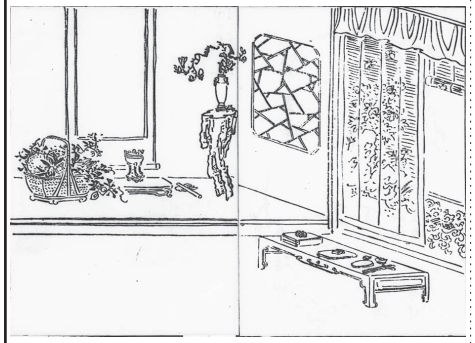
平面モデル



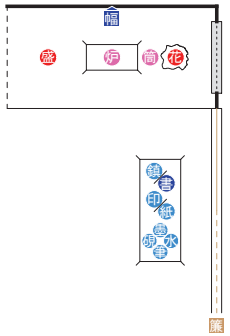
史料名	青湾茗醼図誌（瑞巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　文房	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	－		

図

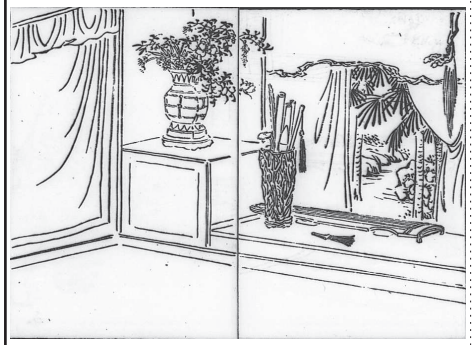


平面モデル

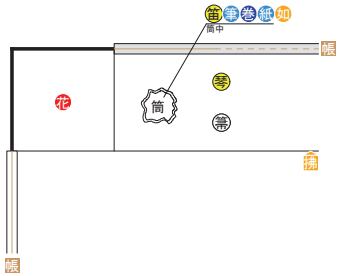


席　名	第三席　文房副席	床形式	④框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	棚	備　考	庭に棕櫚
席　種	（副席）	書院形式	－		

図



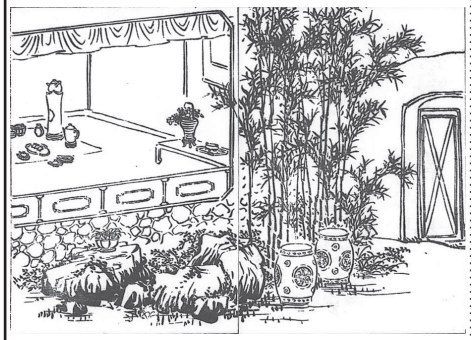
平面モデル



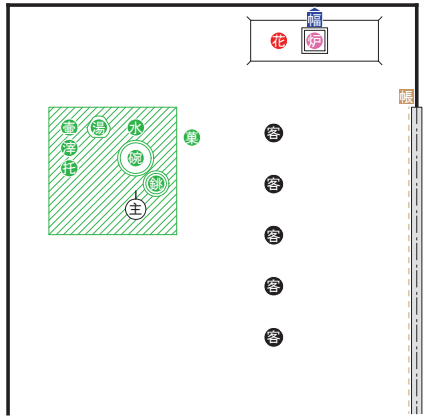
史料名	青湾茗醼図誌（草巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第五席　小室	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	庭に榻・竹・石
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

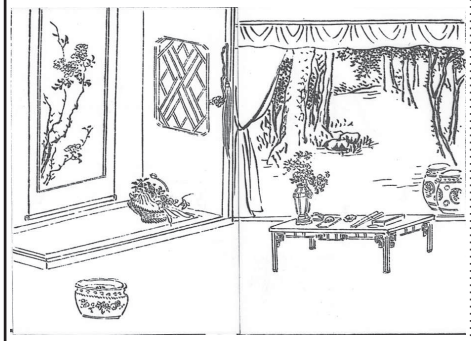


平面モデル

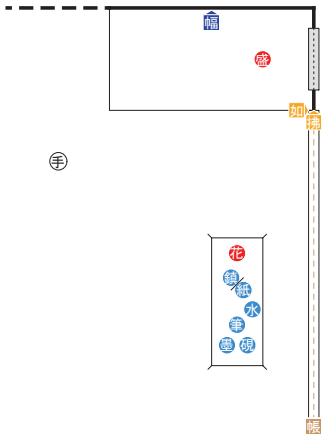


席　名	第六席　文房	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	庭に榻・木
席　種	（前席）	書院形式	－		

図



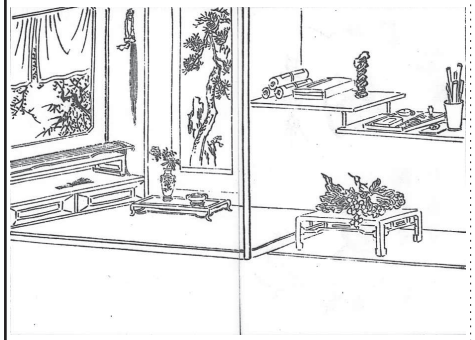
平面モデル



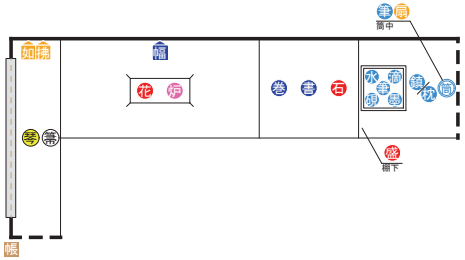
史料名	青湾茗醼図誌（草巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第四席　文房	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	－
		床脇形式	違棚	備　考	外部に木
席　種	（前席）	書院形式	付書院		

図

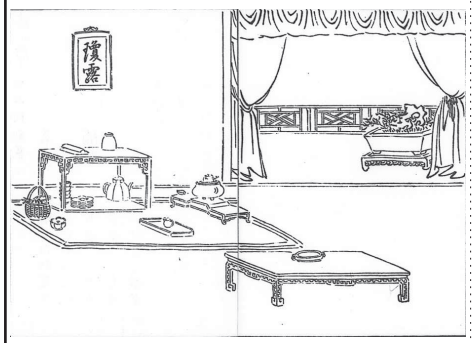


平面モデル

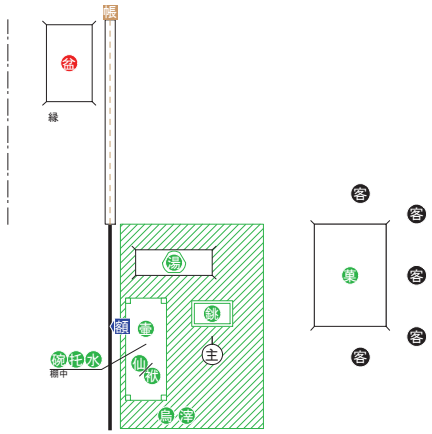


席　名	第四席　茶席・外席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図



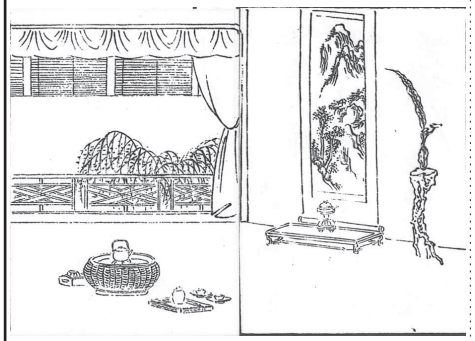
平面モデル



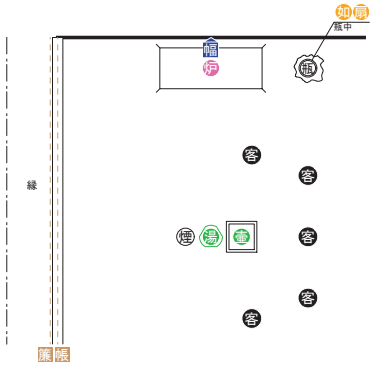
史料名	青湾茗醼図誌（草巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第八席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に柳
席　種	（酒席）	書院形式	－		

図

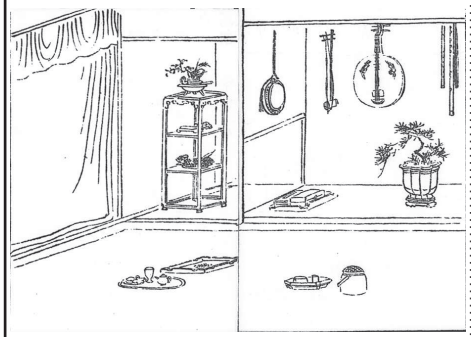


平面モデル

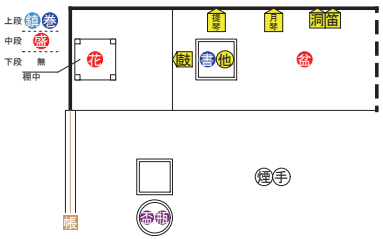


席　名	第八席	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	－
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	－		

図



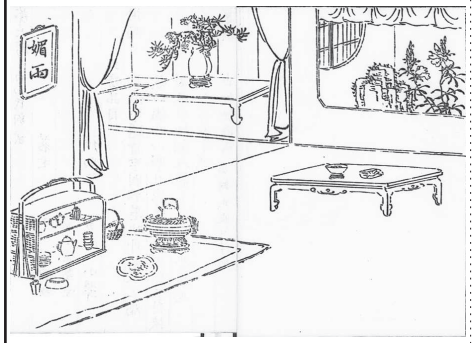
平面モデル



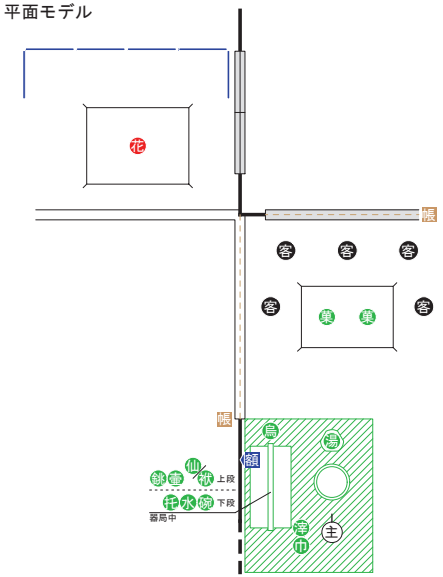
史料名	青湾茗醼図誌（草巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第六席　茶席	床形式	⑫複数室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	庭に花・石
席　種	茶席	書院形式	－		

図

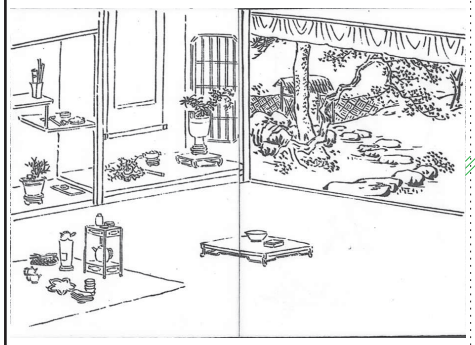


平面モデル

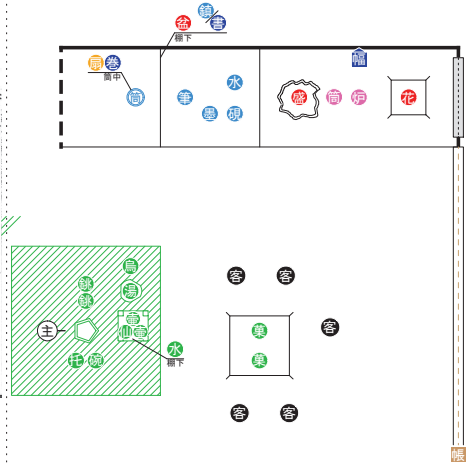


席　名	第七席　茶席	床形式	④框床　（柱：角柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	違棚	備　考	庭に中門からの飛石
席　種	茶席	書院形式	－		

図



平面モデル

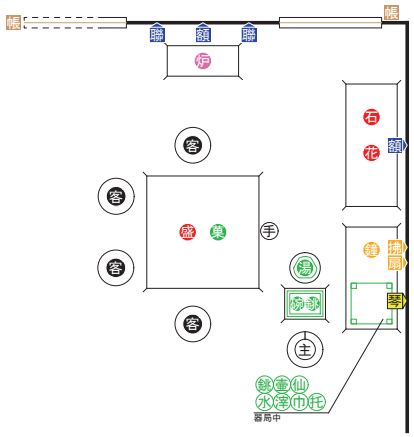


史料名	青湾茗醼図誌（魁巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十席	床形式	⑬亭　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	四半敷、立礼式
席　種	（茶席）	書院形式	－		

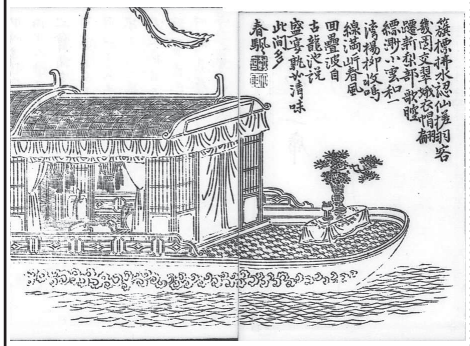
図

平面モデル

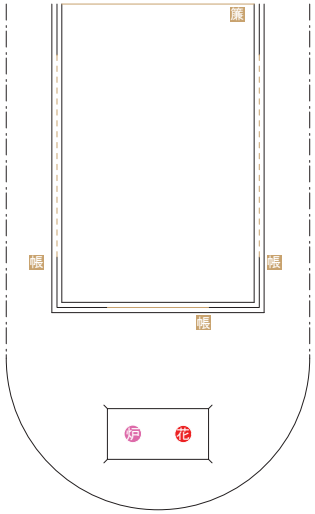


席　名	第十一席	床形式	⑭船　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（船房奏楽席）	書院形式	－		

図



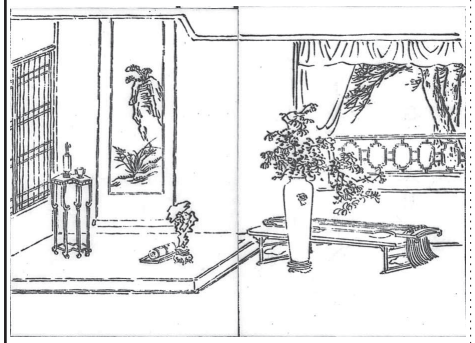
平面モデル



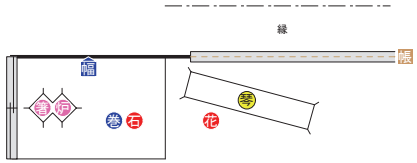
史料名	青湾茗醼図誌（草巻）	著　者	山中篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第九席	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に松 下図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

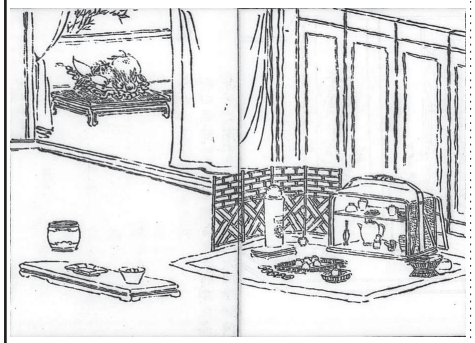


平面モデル

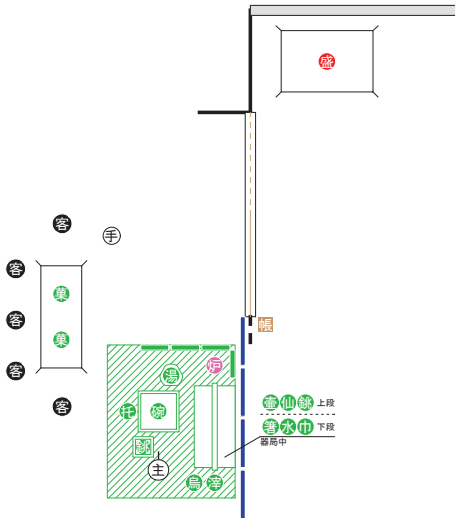


席　名	第九席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	不明
		床脇形式	－	備　考	外部に木の枝 上図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



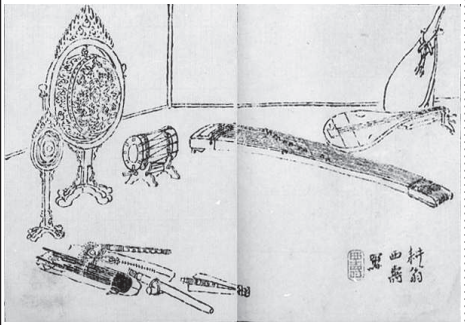
平面モデル



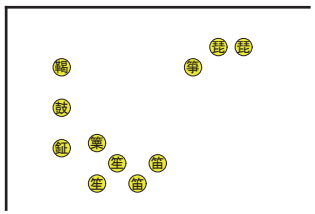
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	奏楽席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	奏楽席	書院形式	－		

図

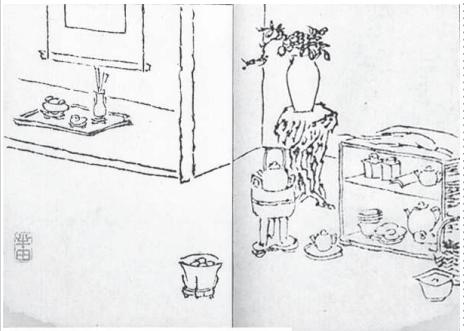


平面モデル

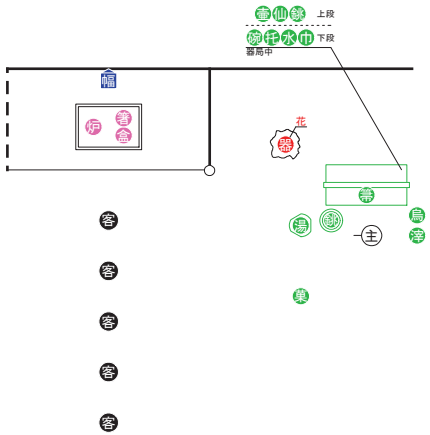


席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



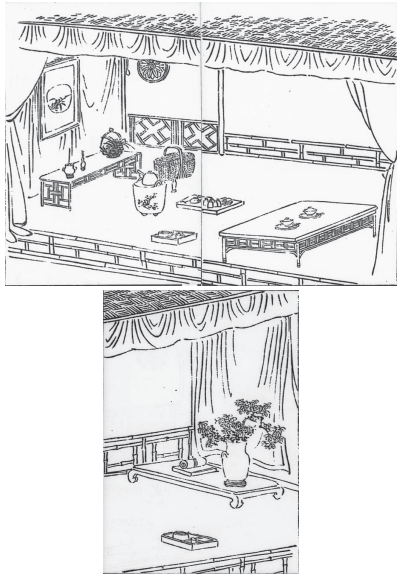
平面モデル



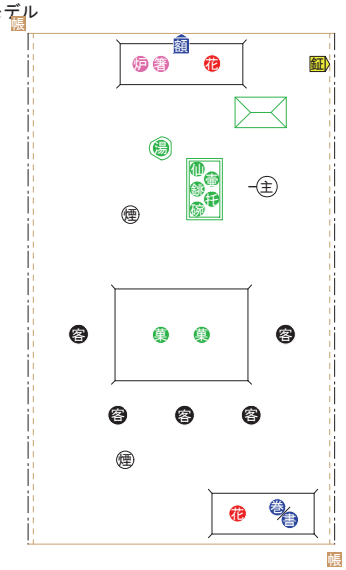
史料名	青湾茗醼図誌（魁巻）	著　者	山中簪篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十二席	床形式	⑭船　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（船房）	書院形式	－		

図



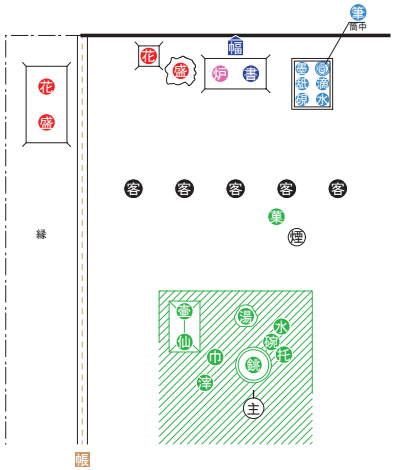
平面モデル



席　名	第十三席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	外部に木の枝、遠景に山
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

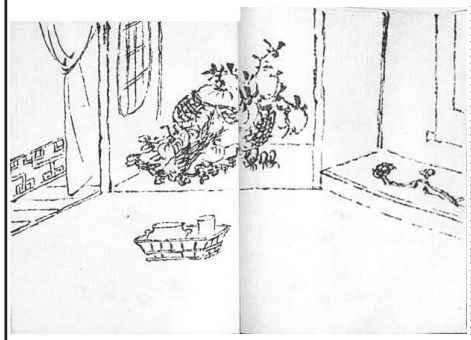
平面モデル



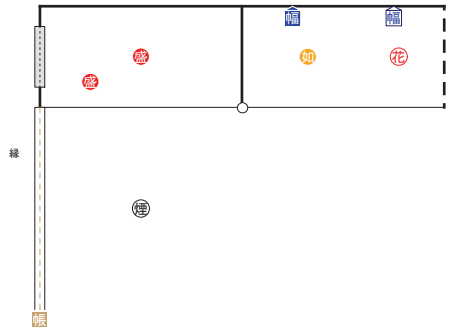
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

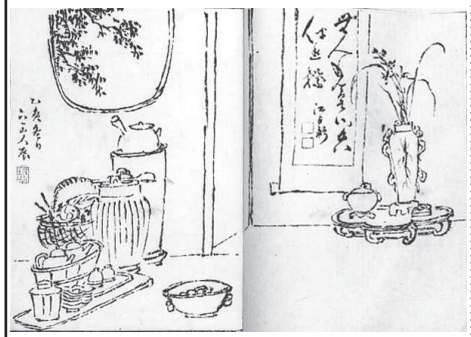


平面モデル

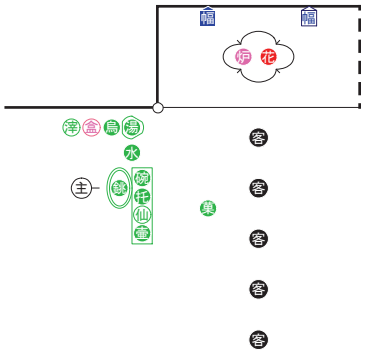


席　名	茗筵　茶室	床形式	②踏込床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	外部に木の枝
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

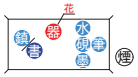


史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

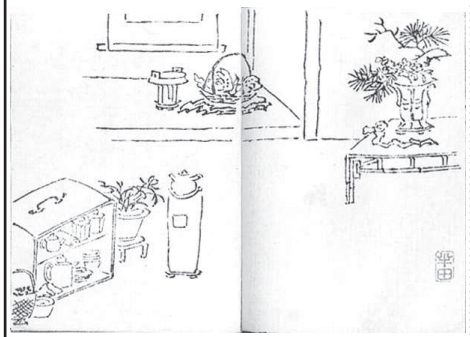
図

平面モデル

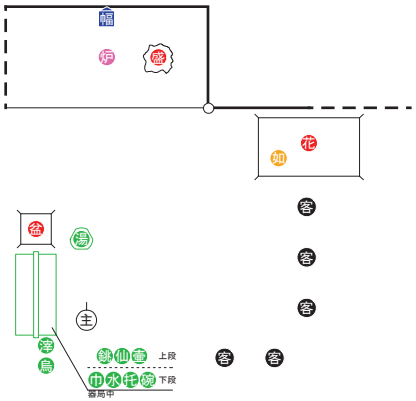


席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



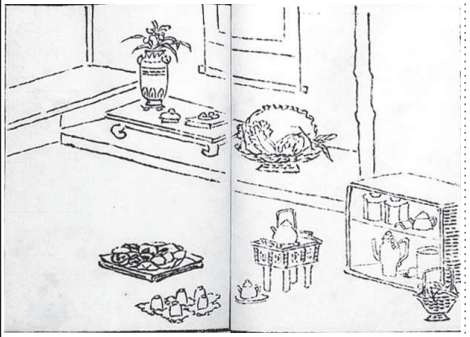
平面モデル



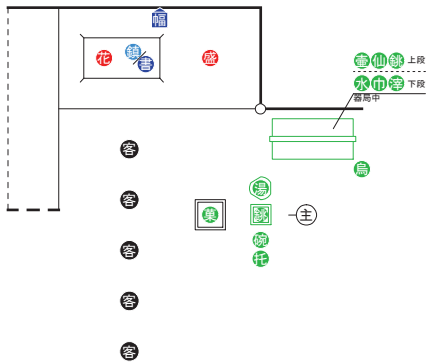
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　本席	床形式	⑧框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図

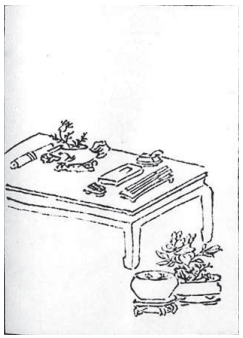


平面モデル



席　名	茗筵　本席	床形式	― （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

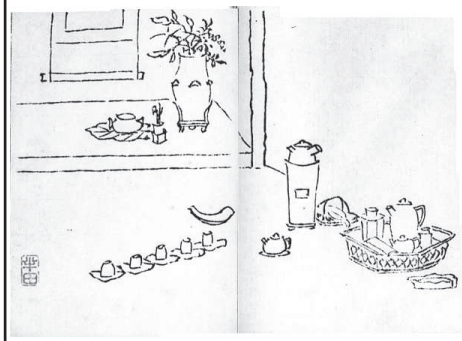


平面モデル

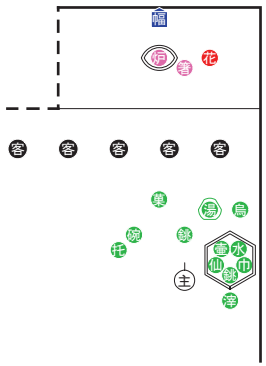
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：― ）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

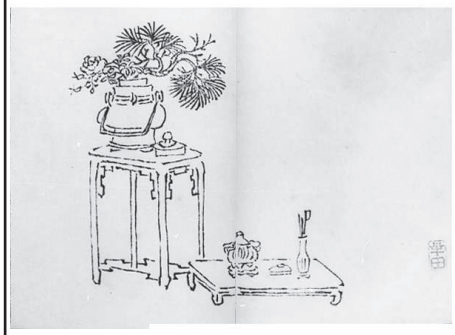


平面モデル



席　名	茗筵　前席	床形式	― （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

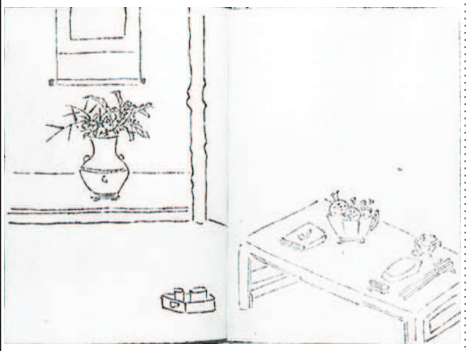


平面モデル

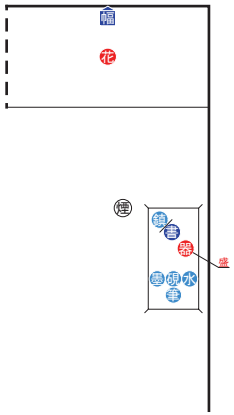
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	②蹴込　床(柱：丸太)	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

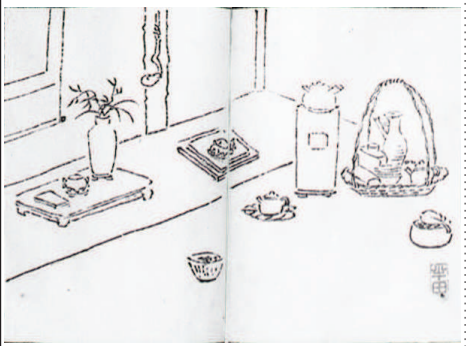


平面モデル

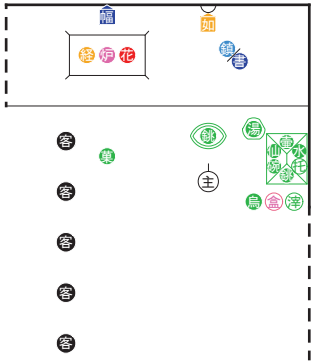


席　名	茗筵　本席	床形式	④踏込床　(柱：丸太)	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

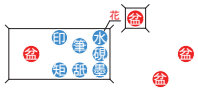


史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	―　　(柱：―)	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

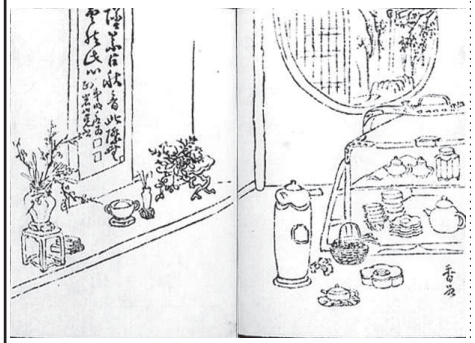
図

平面モデル

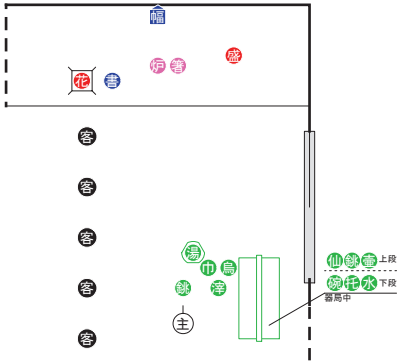


席　名	茗筵　茶室	床形式	②框床　(柱：―)	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	外部に木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



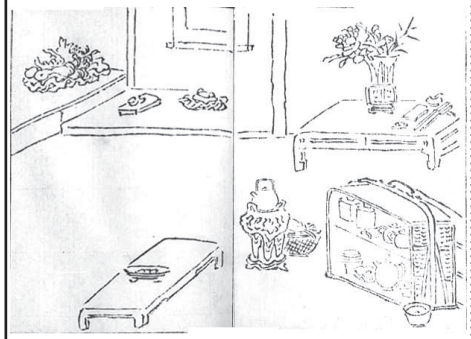
平面モデル



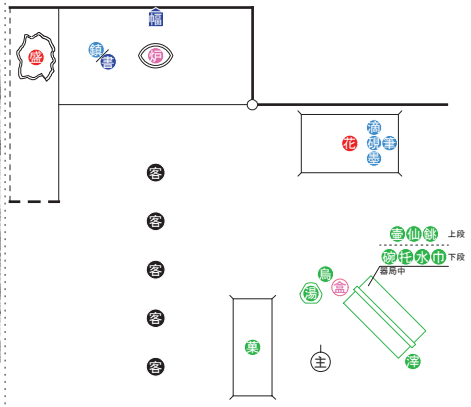
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	⑧框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図

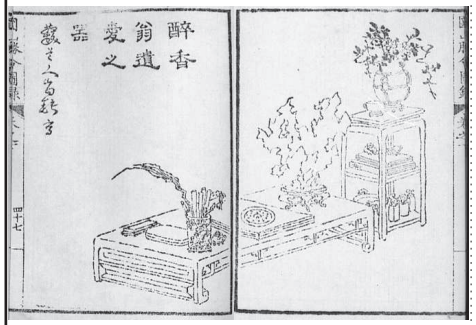


平面モデル



席　名	醉香翁遺愛之器	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（展観席（遺物））	書院形式	―		

図

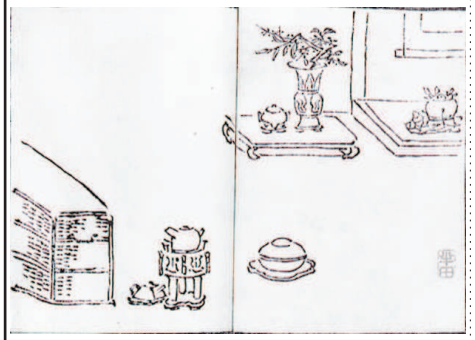


平面モデル

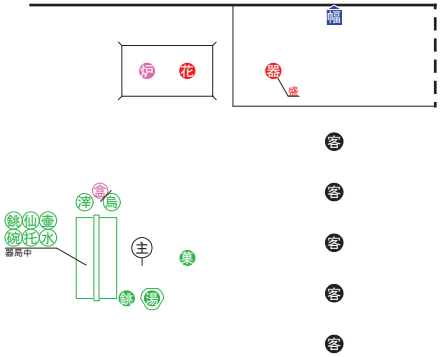
史料名	円山勝会図録（下巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

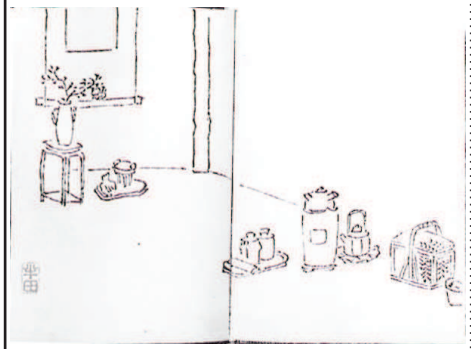


平面モデル

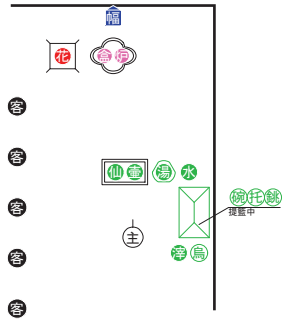


席　名	茶席	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



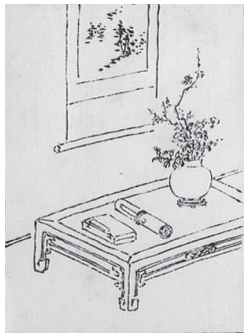
平面モデル



史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図



平面モデル

史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

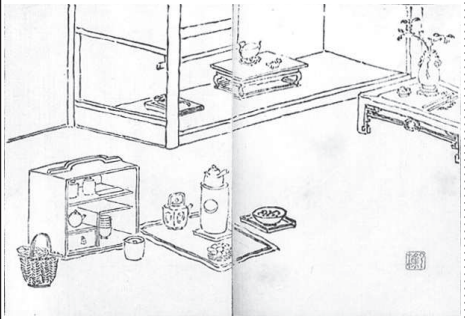
席　名	茗筵　前席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図

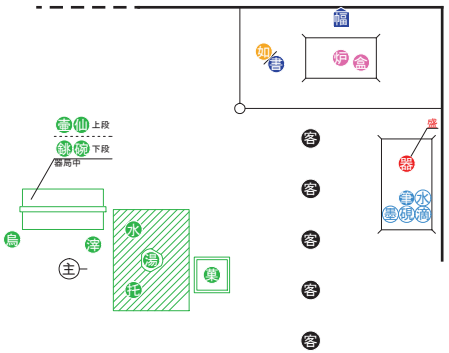
平面モデル

席　名	茗筵　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

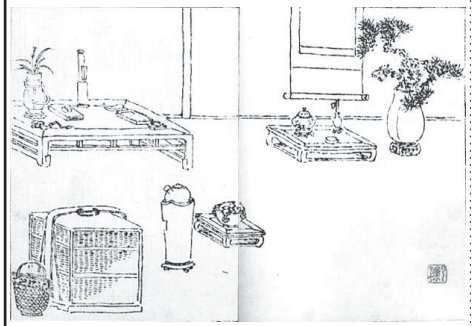


平面モデル

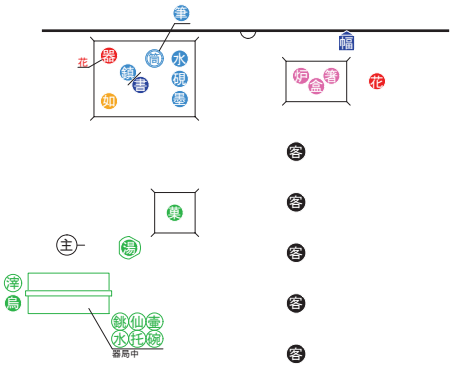


席　名	茗筵　本席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



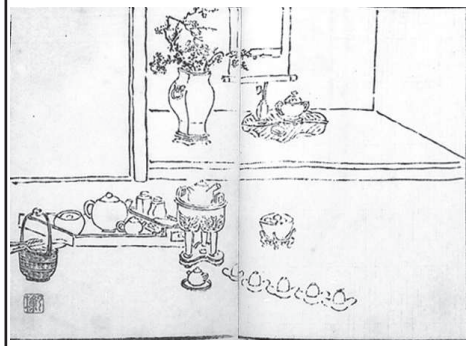
平面モデル



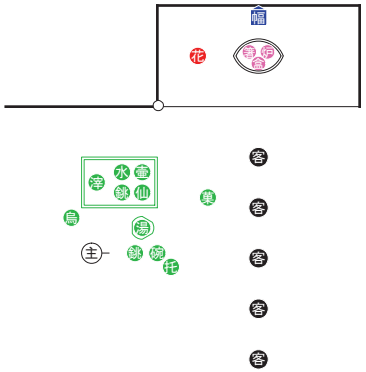
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

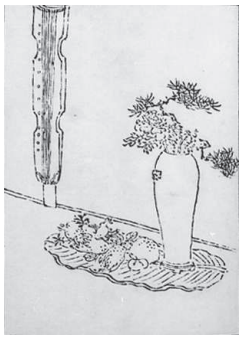


平面モデル

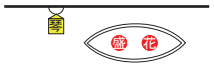


席　名	茗筵　前席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



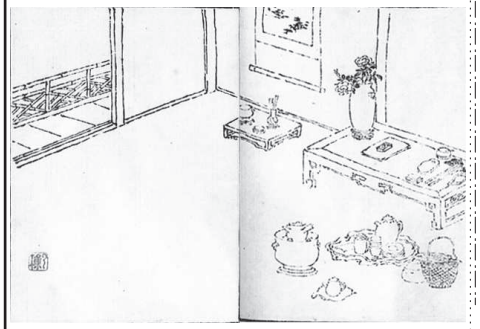
平面モデル



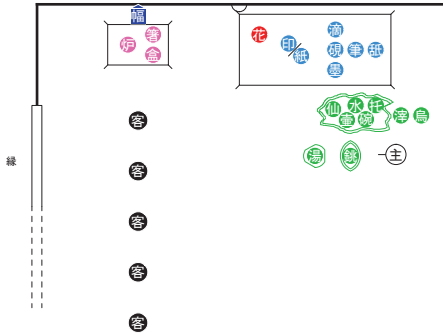
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

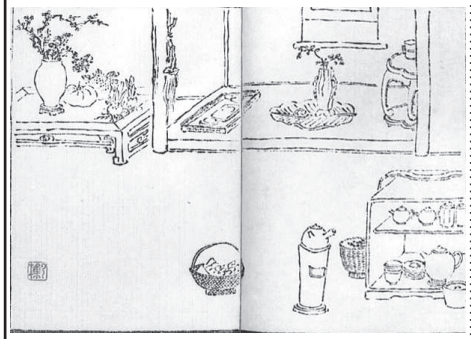


平面モデル

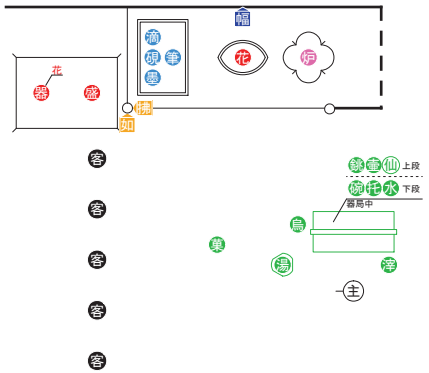


席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

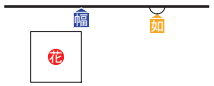


史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	①壁床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

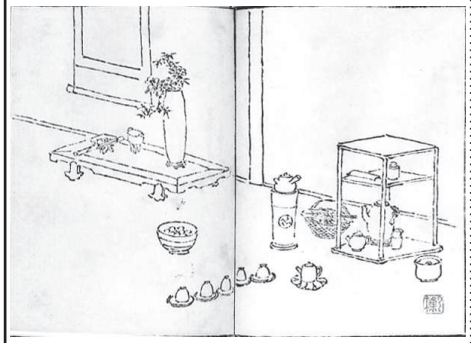
平面モデル



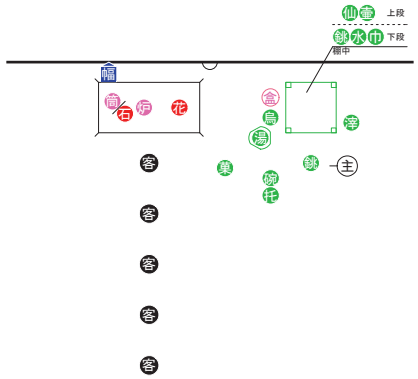
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　茶室	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

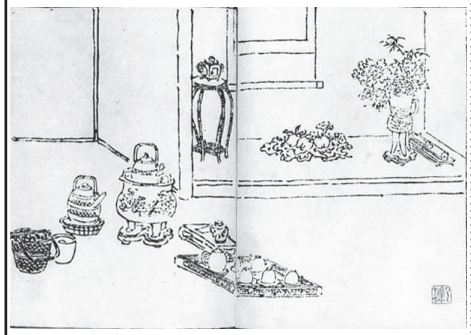


平面モデル

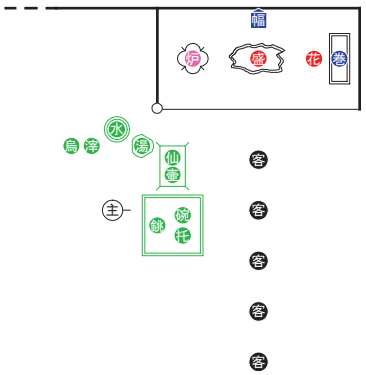


席　名	茗筵　茶室	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

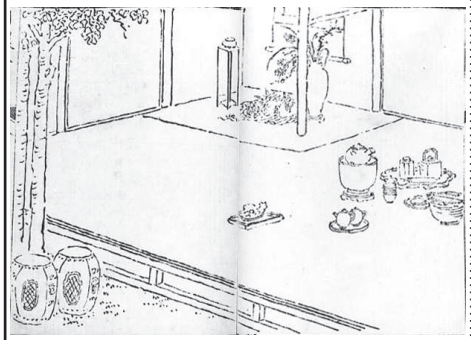


平面モデル

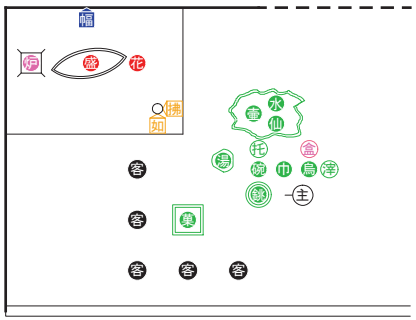


席　名	茗筵	床形式	②原叟床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



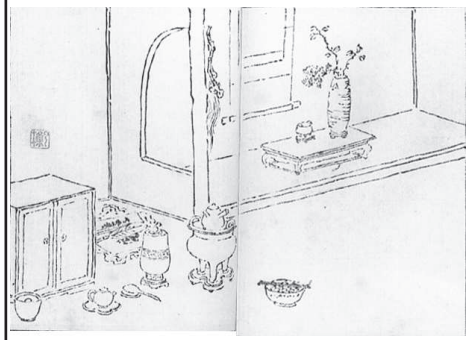
平面モデル



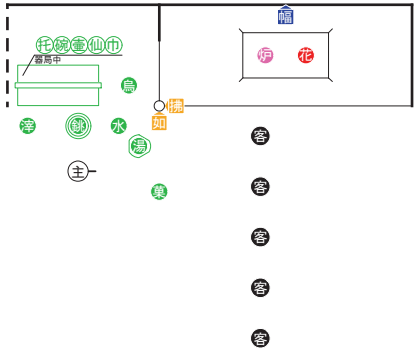
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　茶室	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

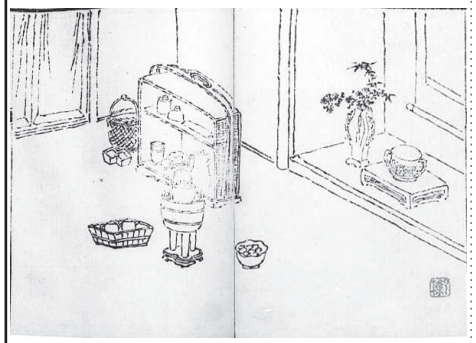


平面モデル

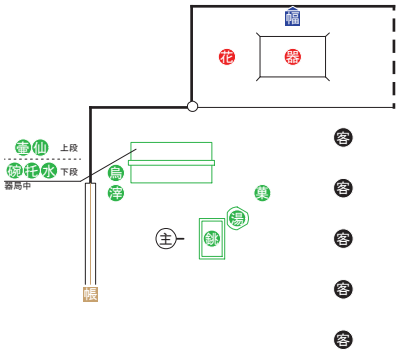


席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



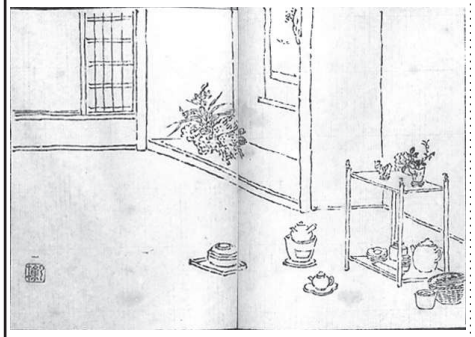
平面モデル



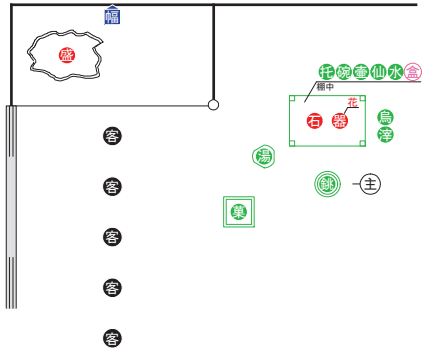
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

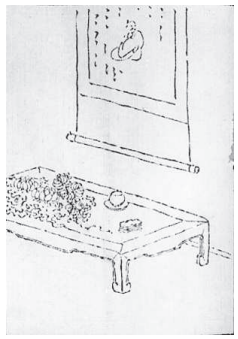


平面モデル



席　名	茗筵　前席	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

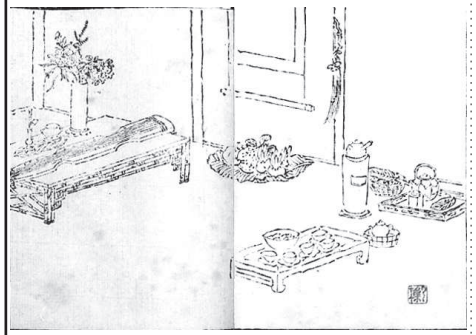


平面モデル

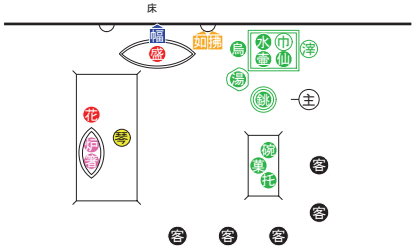
史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵	床形式	①壁床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

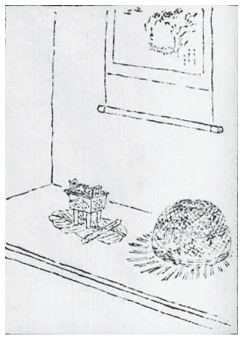


平面モデル

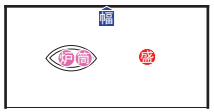


席　名	茗筵	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



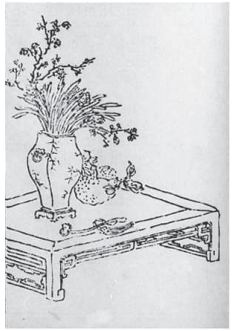
平面モデル



史料名	円山勝会図録（余巻）	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　前席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

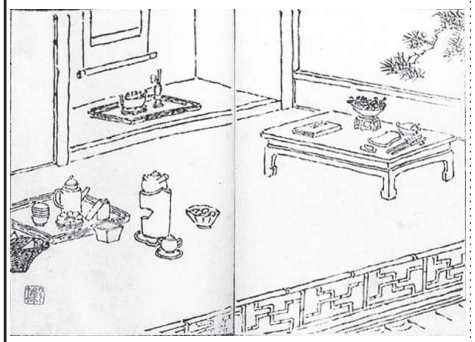
図



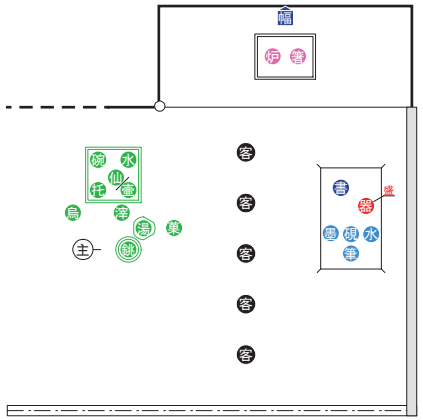
平面モデル

席　名	茗筵　本室	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



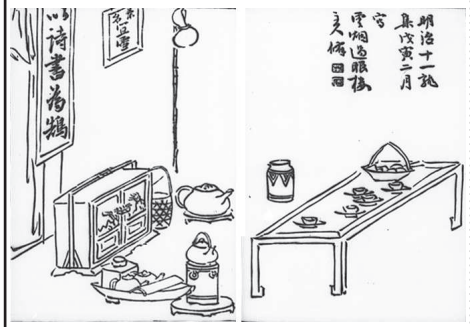
平面モデル



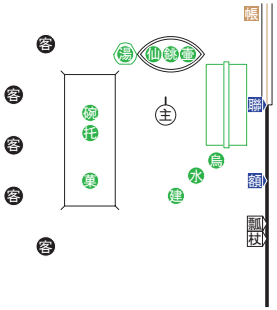
史料名	栗渓雅会図録	著　者	牧野静脩、前田真郷
		開催地	鳥取
刊行年	明治11年（1878）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茶席	床形式	不明　（柱：－）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	目録に床飾りの記載あり
席　種	茶席	書院形式	－		

図



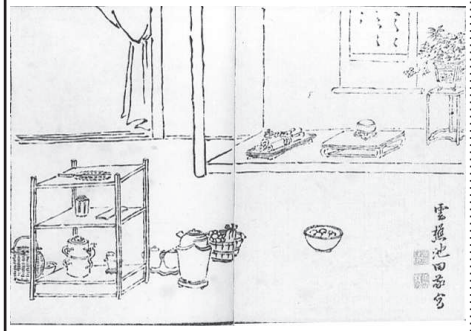
平面モデル



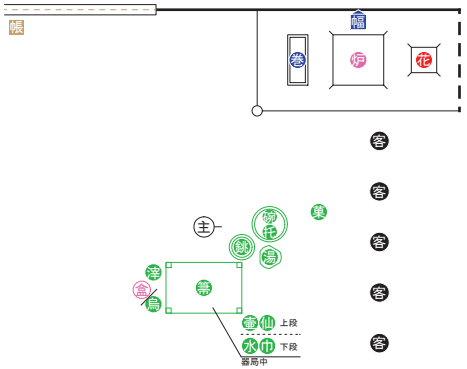
史料名	円山勝会図録	著　者	熊谷直行
		開催地	京都
刊行年	明治9年（1876）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茗筵　茶室	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



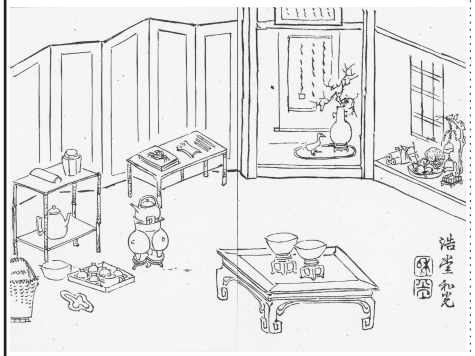
平面モデル



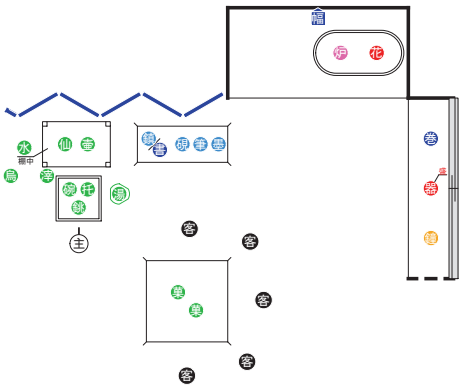
史料名	遺馨録	著　者	山本復一
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	茶筵	床形式	⑧框床　（柱：角柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図

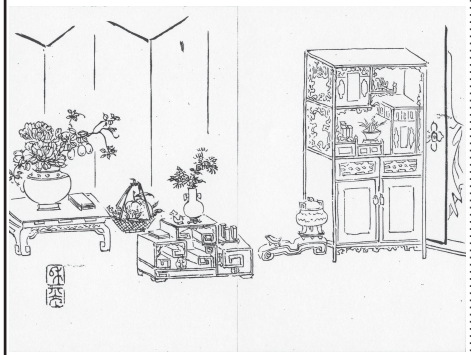


平面モデル

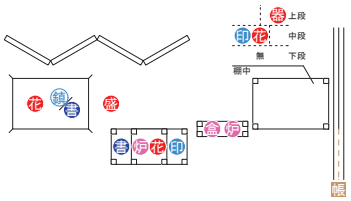


席　名	文房	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



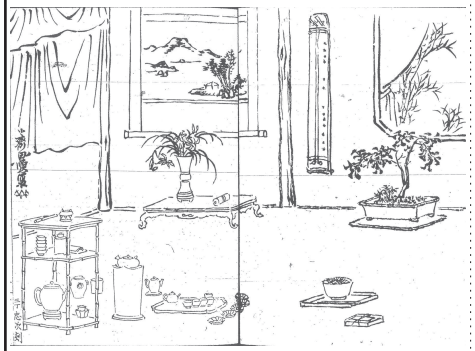
平面モデル



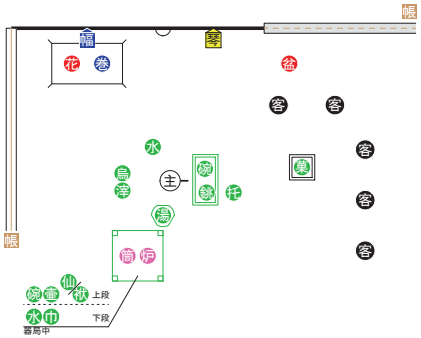
史料名	藤本鉄石先生薦場餘録	著　者	原田隆
		開催地	大阪
刊行年	明治12年（1879）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	―	床形式	①壁床　（柱：丸太）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	外部に竹
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



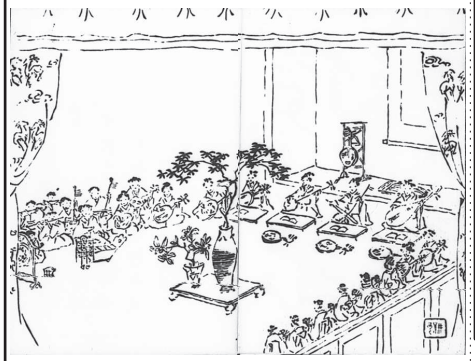
平面モデル



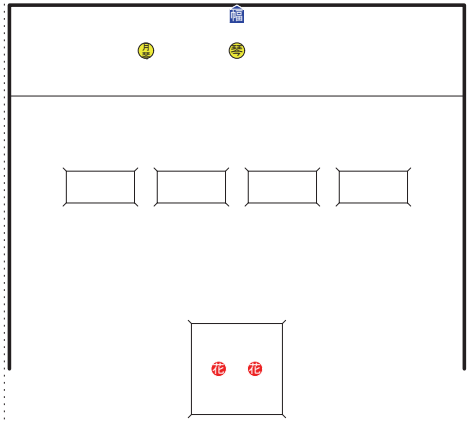
史料名	書画煎茶清楽図録	著　者	豊瀬竹三郎
		開催地	愛知
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	奏楽席	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	奏楽席	書院形式	－		

図



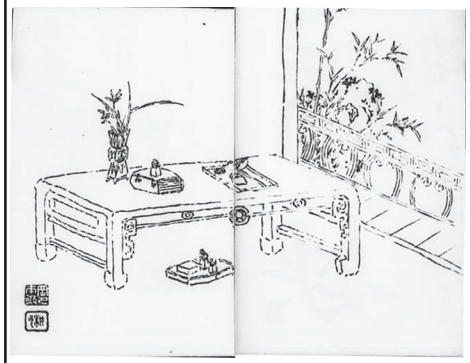
平面モデル



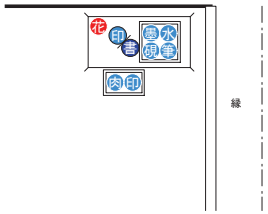
史料名	書画煎茶清楽図録	著　者	豊瀬竹三郎
		開催地	愛知
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	－	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に竹
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

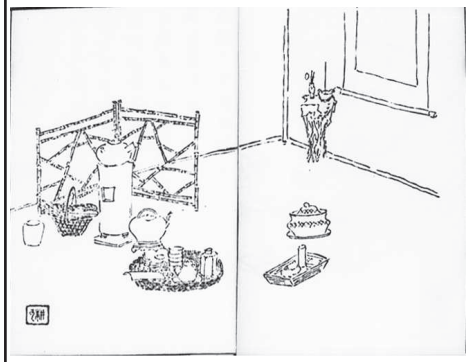


平面モデル

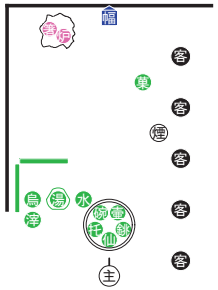


席　名	－	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	床前下
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



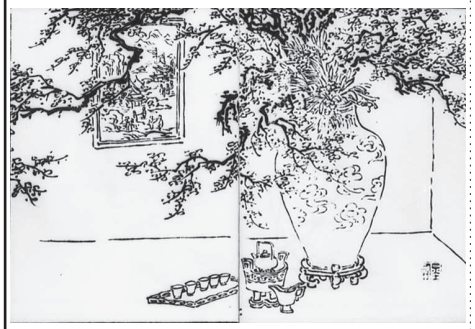
平面モデル



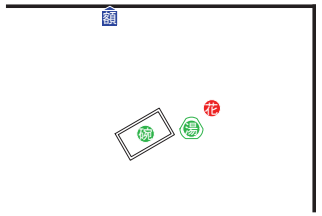
史料名	深志茗讌図録（乾巻）	著　者	竹内禎十郎
		開催地	長野
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　清風　前席	床形式	⑪単室　（柱：　－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図

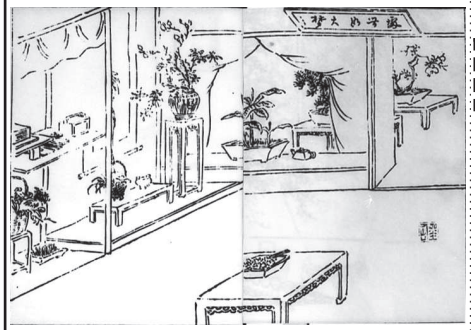


平面モデル

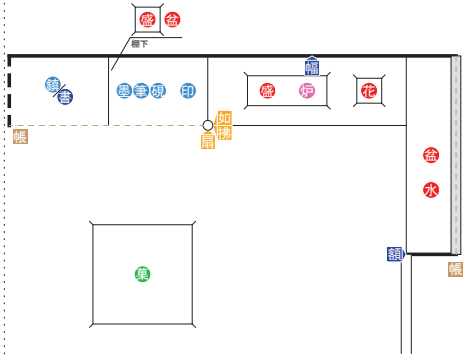


席　名	第一席　清風　後席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	－
		床脇形式	違棚	備　考	次図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



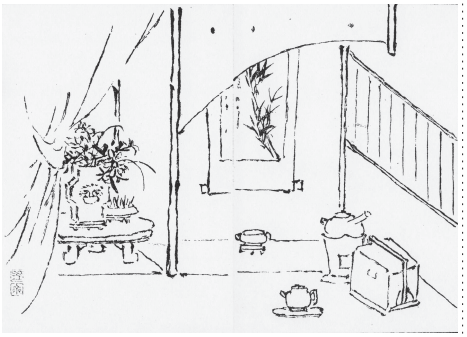
平面モデル



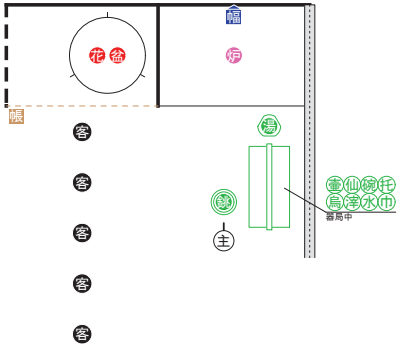
史料名	舟皐山房小集略記	著　者	向井舟皐
		開催地	高松 ヵ
刊行年	明治13年（1880）　識語	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第三前席	床形式	④踏込床　（柱：　丸太　）	点　前	床前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



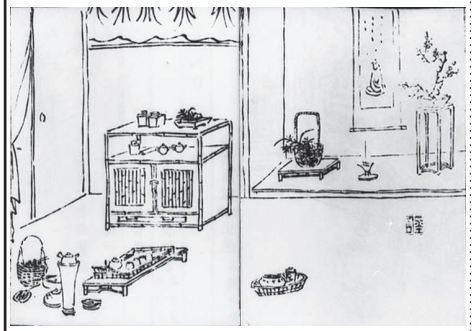
平面モデル



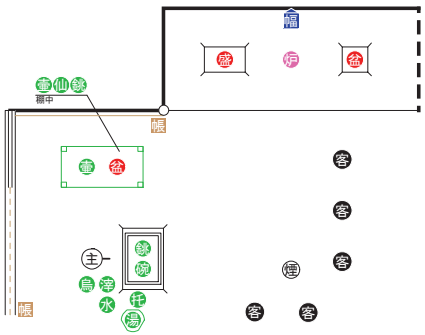
史料名	深志茗讌図録（乾巻）	著　者	竹内禎十郎
		開催地	長野
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　碧雲	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	前図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

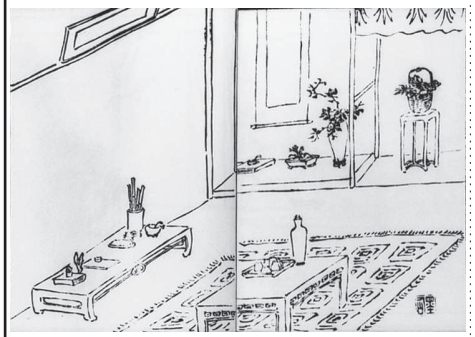


平面モデル

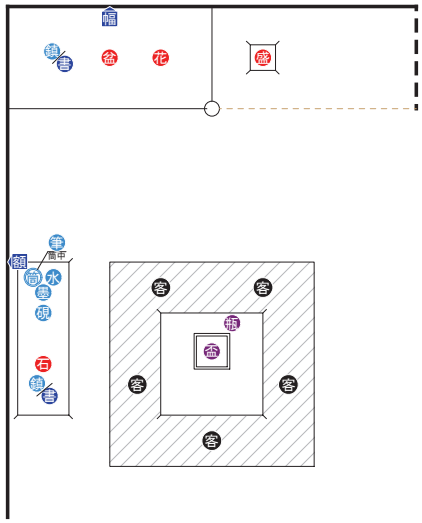


席　名	第三席　破門　前席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



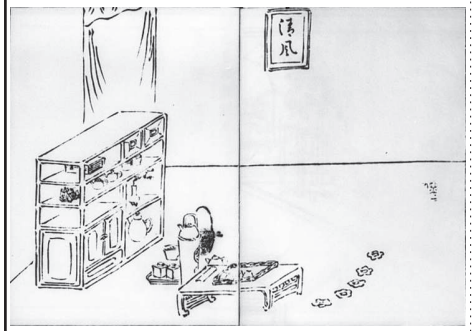
平面モデル



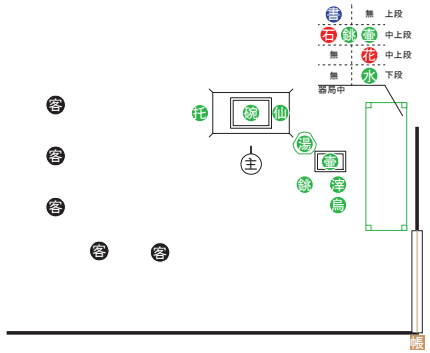
史料名	深志茗讌図録（乾巻）	著　者	竹内禎十郎
		開催地	長野
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　清風　後席	床形式	―　（柱：―）	点　前	不明
		床脇形式	―	備　考	前図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

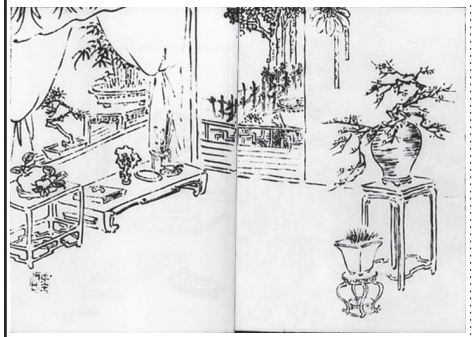


平面モデル

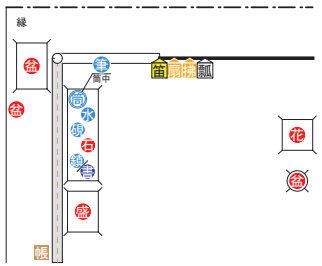


席　名	第二席　碧雲	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	次図と同じ室の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



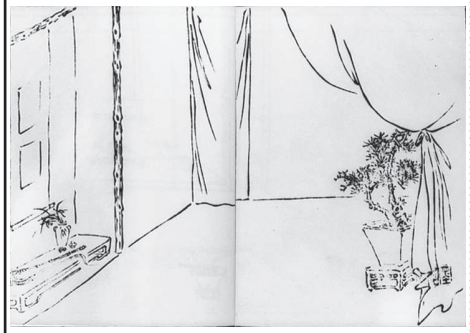
平面モデル



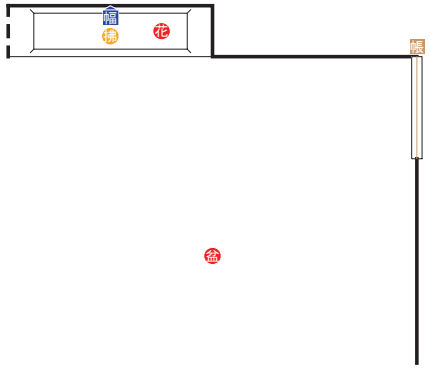
史料名	深志茗讌図録（乾巻）	著　者	竹内禎十郎
		開催地	長野
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　破門　副席	床形式	②踏込床　（柱：丸太　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図



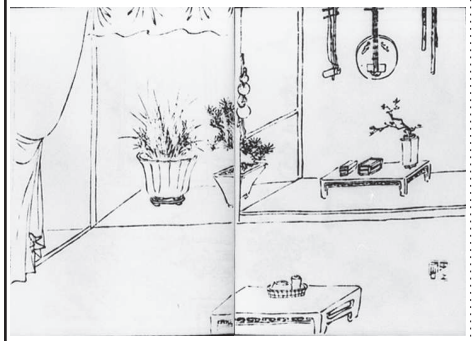
平面モデル



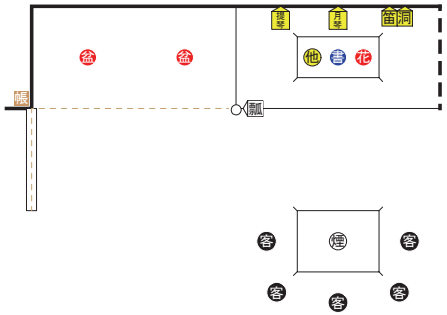
史料名	深志茗讌図録（乾巻）	著　者	竹内禎十郎
		開催地	長野
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　破門　副席	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図

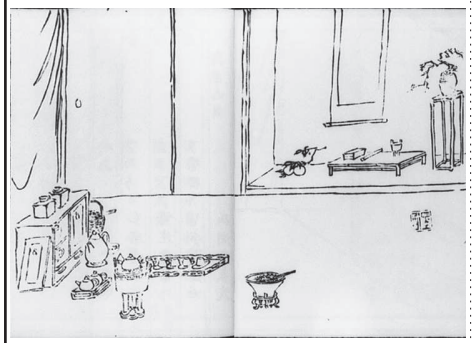


平面モデル

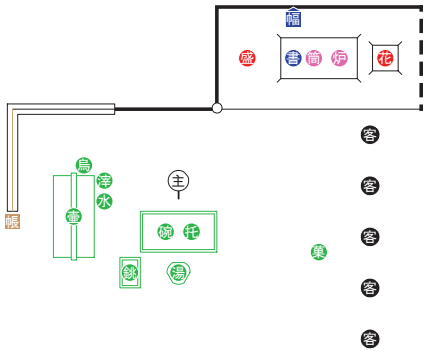


席　名	第三席　破門　後席	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



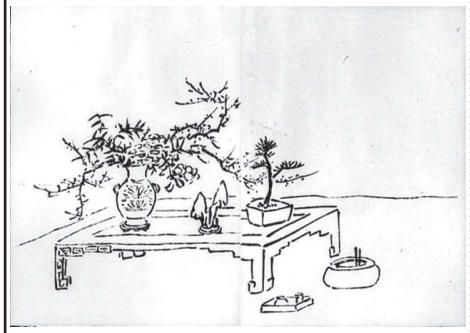
平面モデル



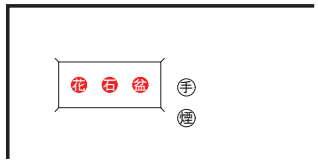
史料名	直入翁寿筵図録（地巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	和漢故人書画展観席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

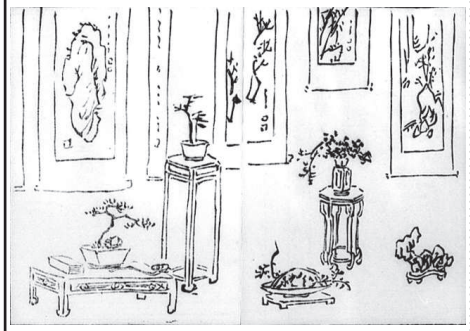


平面モデル

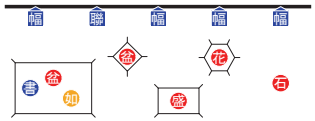


席　名	竹田居士明清古人展観	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



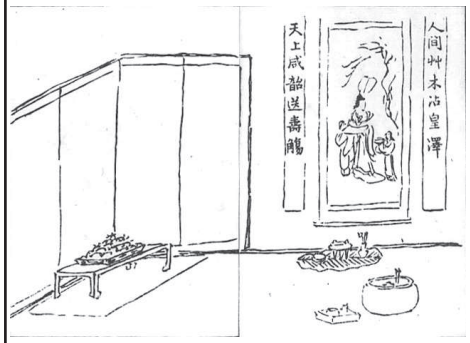
平面モデル



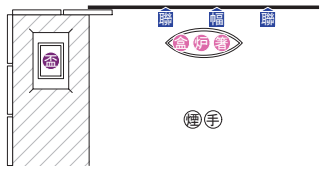
史料名	直入翁寿筵図録（天巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	玄関	床形式	①壁床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（待合席）	書院形式	―		

図

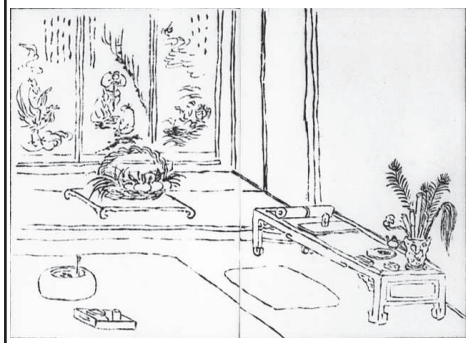


平面モデル

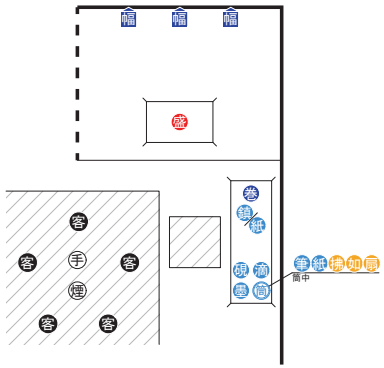


席　名	玄関　副席	床形式	②框床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	展観席	書院形式	―		

図



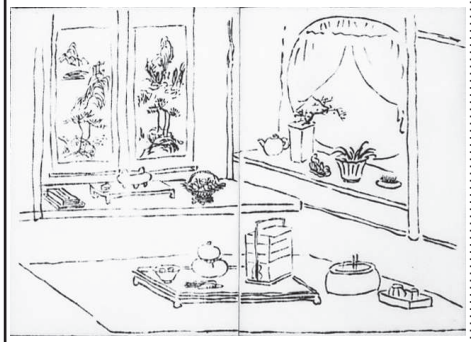
平面モデル



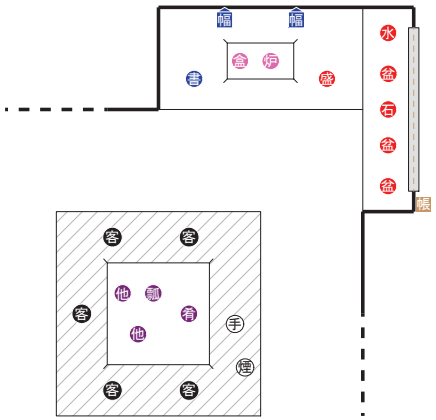
史料名	直入翁寿筵図録（地巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	別室行厨席	床形式	⑧框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	付書院		

図

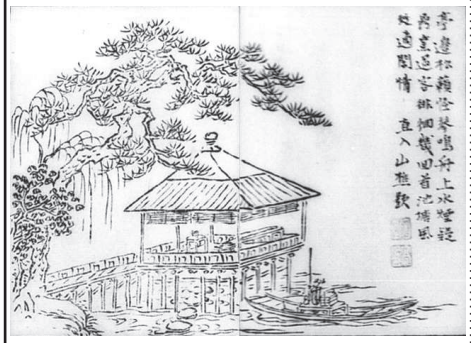


平面モデル

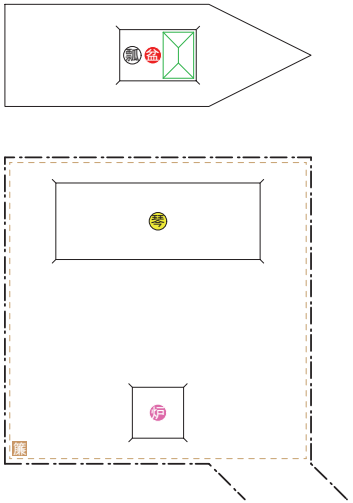


席　名	池亭扁舟小致	床形式	⑬亭　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	池亭、周囲に松・柳
席　種	（奏楽席）	書院形式	－		

図



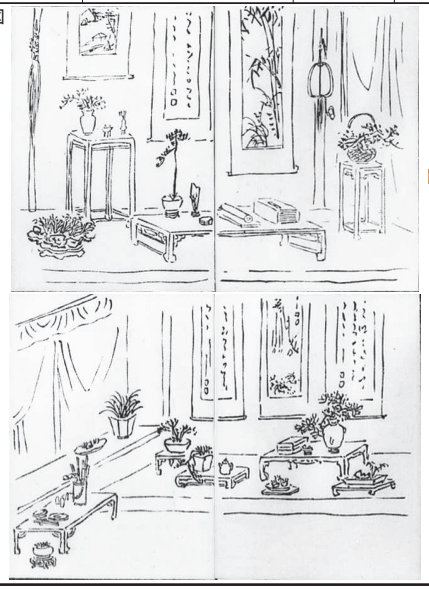
平面モデル



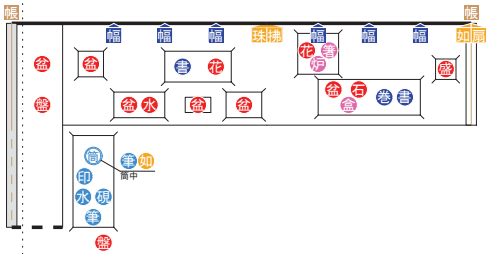
史料名	直入翁寿筵図録（地巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	竹田居士明清古人展観	床形式	⑨框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	－		

図



平面モデル



席　名	新書画展観及諸子揮毫席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	揮毫席	書院形式	－		

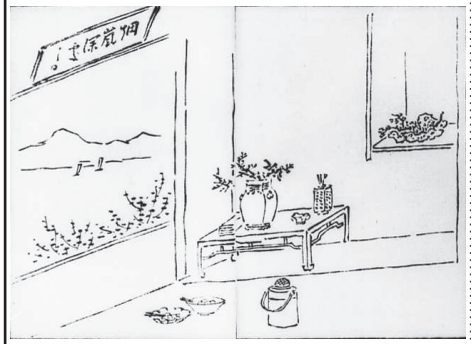
図

平面モデル

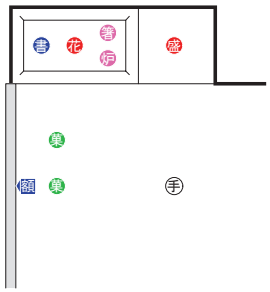
史料名	直入翁寿筵図録（上：地巻　下：人巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	煙嵐社煎茶席 外堂山亭	床形式	③踏込床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に木の枝 遠景に山・湖・舟
席　種	（前席）	書院形式	－		

図

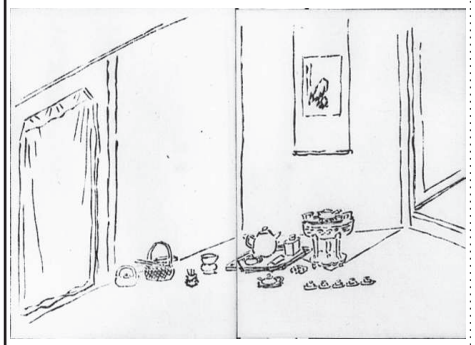


平面モデル

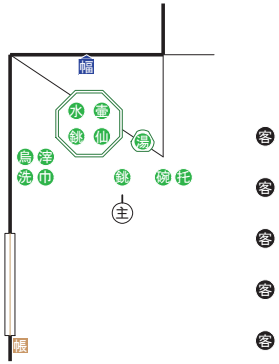


席　名	煙嵐社煎茶席　煎茶席	床形式	②踏込床（三角形の地板）（柱：－　）	点　前	床前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図



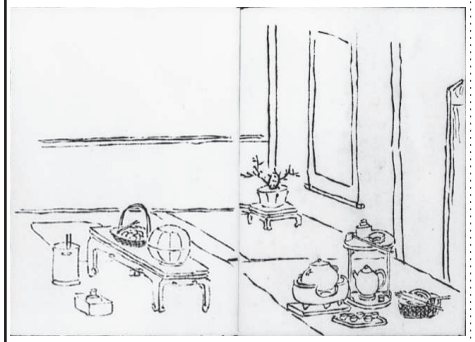
平面モデル



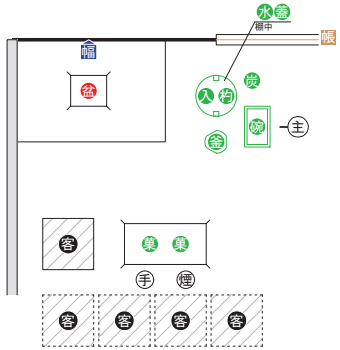
席　名	直入翁寿筵図録（地巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	直入山樵揮毫席	床形式	②踏込床　（柱：－　）	点　前	床隣
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



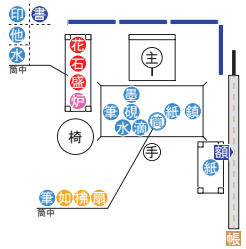
平面モデル



席　名	直入山樵揮毫席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	揮毫席	書院形式	－		

図

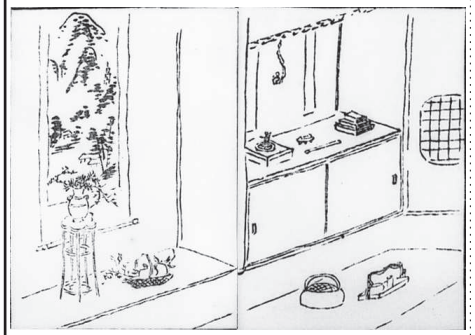
平面モデル



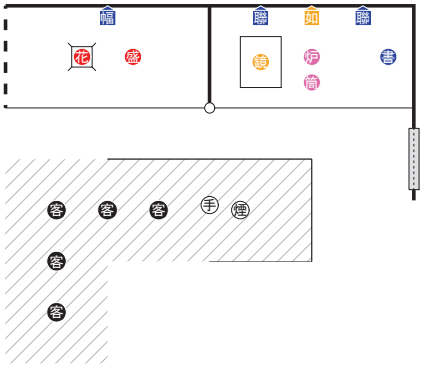
史料名	直入翁寿筵図録（人巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	水楼延壽社茗筵　外堂	床形式	④踏込床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	文道棚	備　考	
席　種	（待合席）	書院形式	―		

図

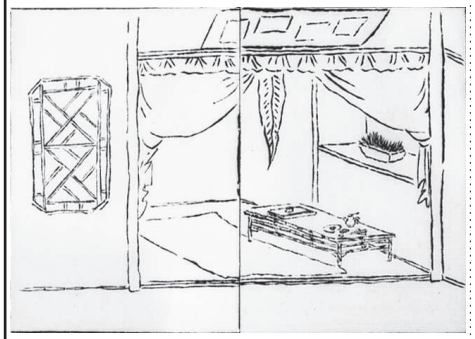


平面モデル

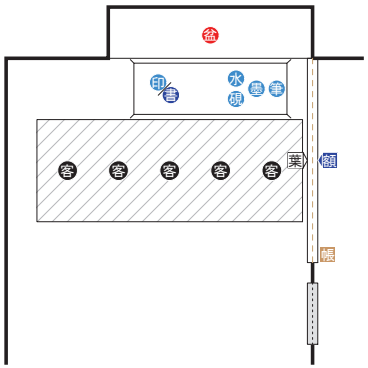


席　名	水楼延壽社茗筵　小室	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	⑩棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

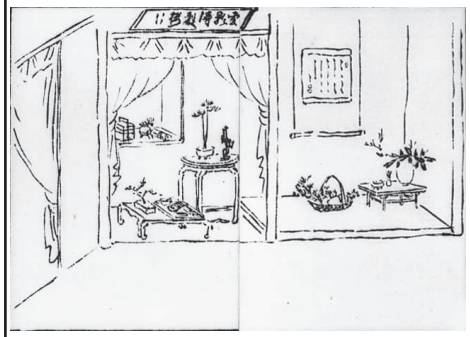


平面モデル

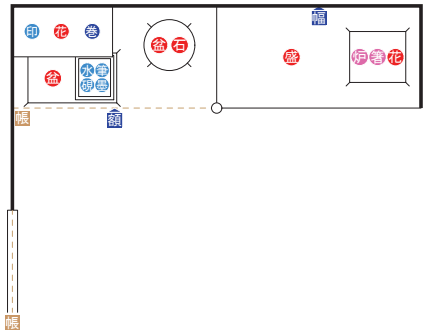


席　名	明九社茗筵　雲影濤聲楼上	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

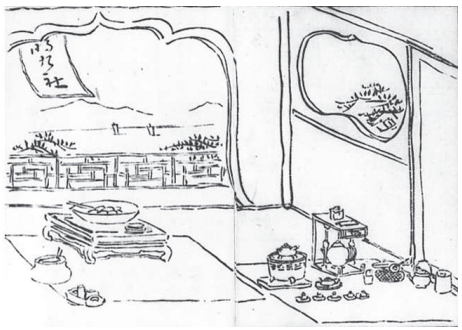


平面モデル

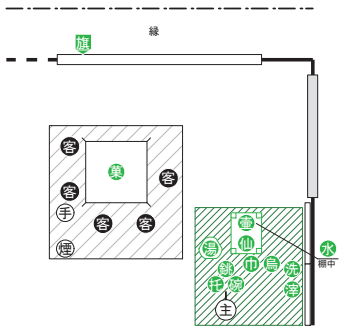


席　名	明九社茗筵　煎茶席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に松 遠景に山・湖・舟
席　種	茶席	書院形式	―		

図



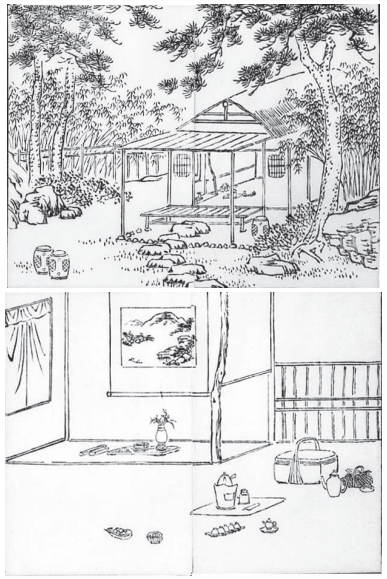
平面モデル



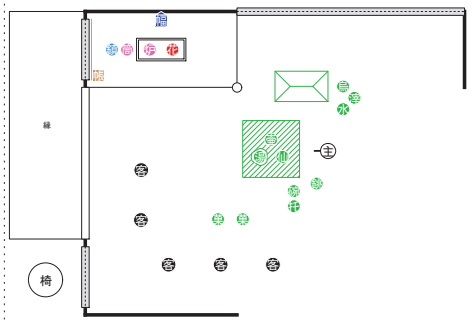
史料名	雲烟供養図録（上巻）	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　本席	床形式	②踏込床（柱：奇木）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

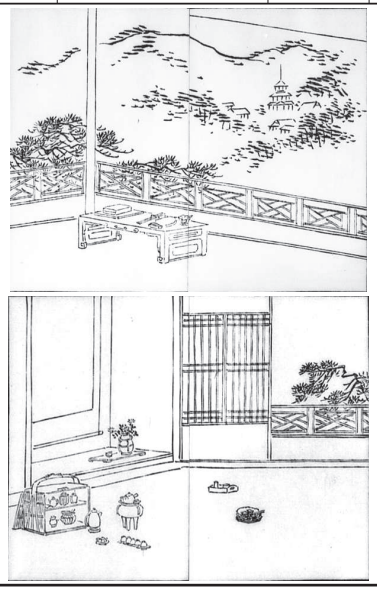


平面モデル

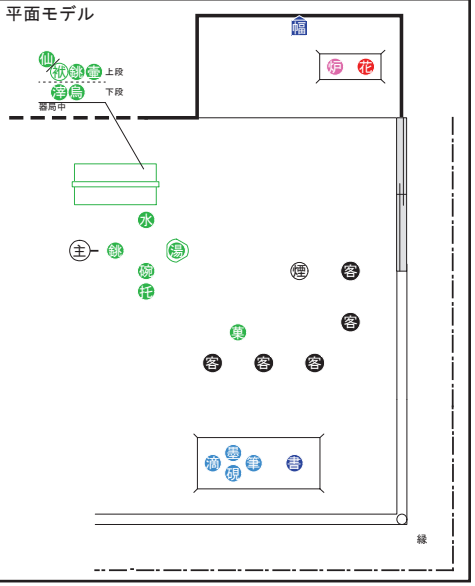


席　名	第二席　本席	床形式	②框床（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	外部に松　遠景に山・塔
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

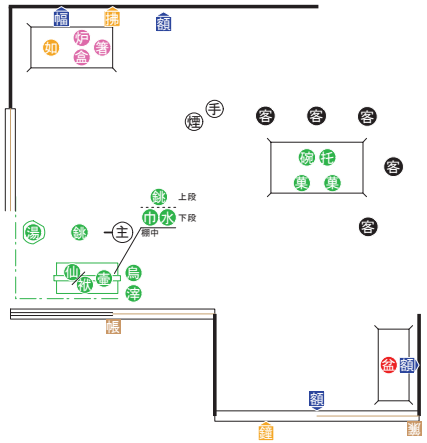


史料名	直入翁寿筵図録（人巻）	著　者	田能村順之助
		開催地	大阪
刊行年	明治14年（1881）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	水楼延壽社茗筵 喫茶席楼上	床形式	①壁床（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

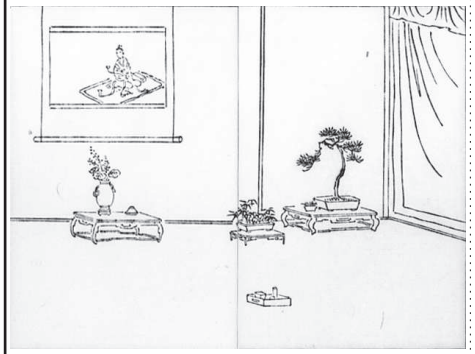
平面モデル



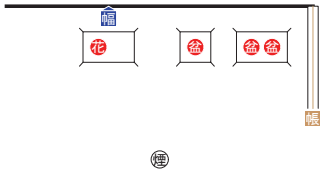
史料名	雲烟供養図録（中巻）	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　副席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	副席	書院形式	－		

図



平面モデル

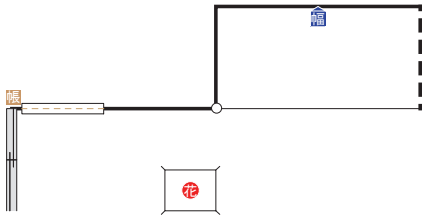


史料名	雲烟供養図録（中巻）	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　副席	床形式	框床　（柱：丸柱）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	副席	書院形式	－		

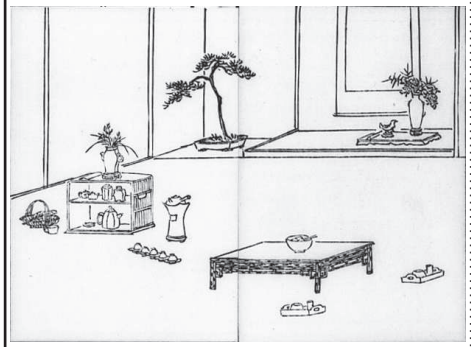
図

平面モデル

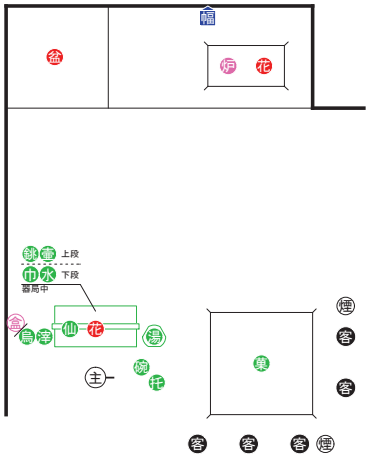


席　名	第四席　本席	床形式	⑤框床　（柱：－　）	点　前	床前下
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

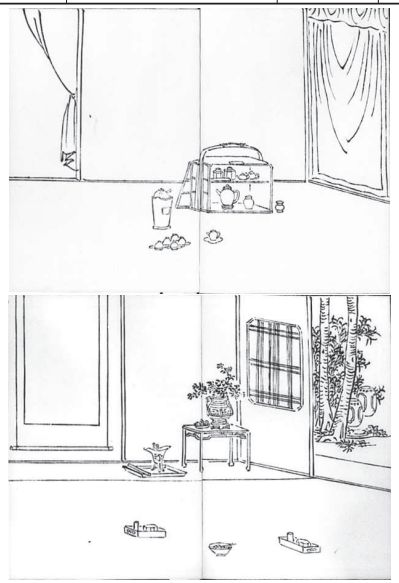


平面モデル

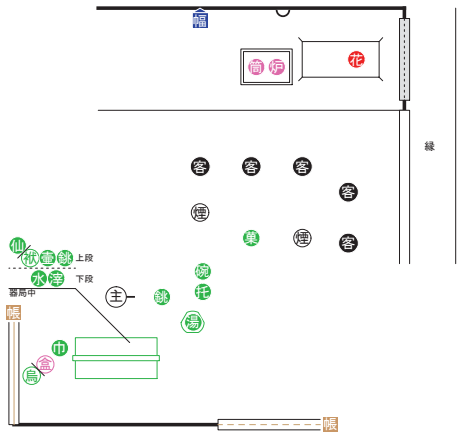


席　名	第三席　本席	床形式	④踏込床　（柱：－　）	点　前	床前下
		床脇形式	－	備　考	外部に木・榻
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



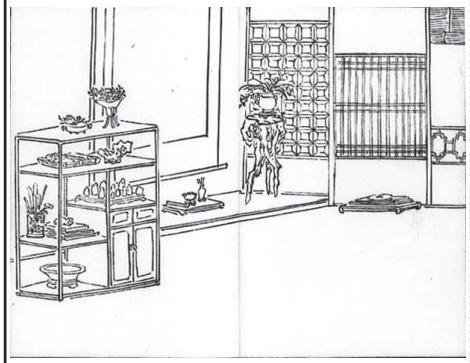
平面モデル



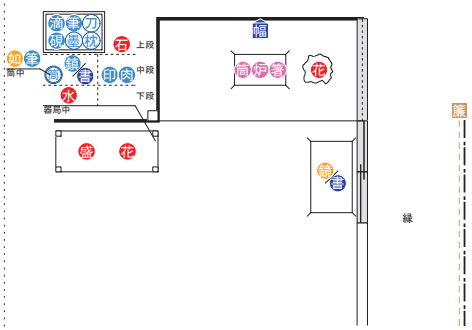
史料名	雲烟供養図録	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第五席　本席	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	前図と同じ部屋の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

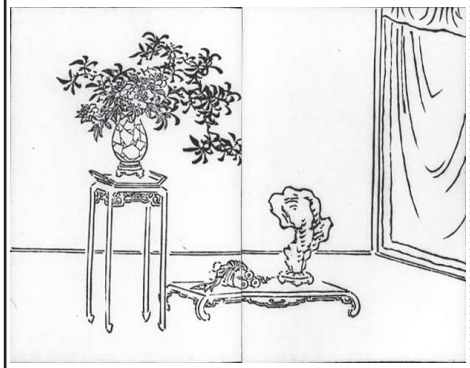


平面モデル

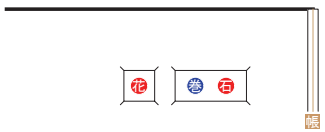


席　名	第五席　副席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図



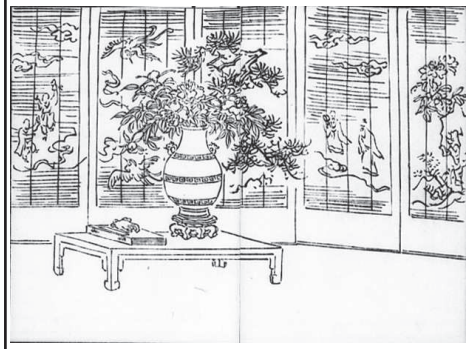
平面モデル



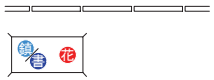
史料名	雲烟供養図録（中巻）	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席　副席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図

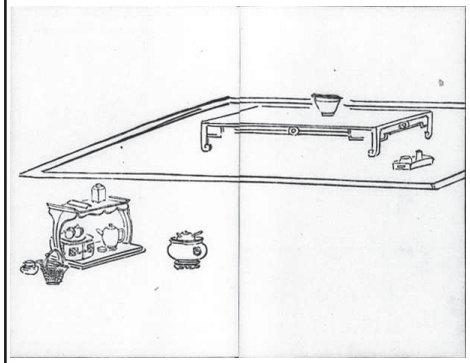


平面モデル

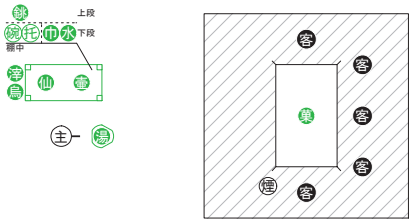


席　名	第五席　本席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	次図と同じ部屋の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



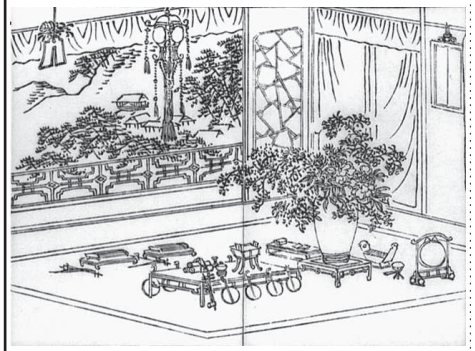
平面モデル



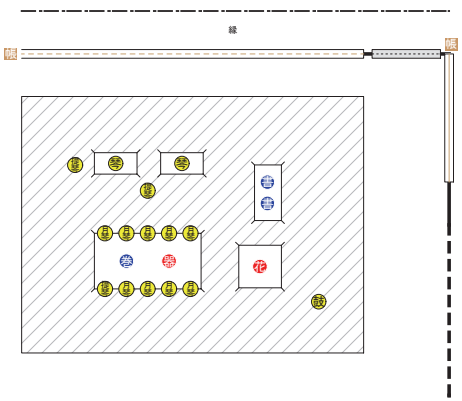
史料名	雲烟供養図録（上巻・下巻） 上：上巻 下：下巻	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	清楽合奏	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に松 遠景に山・建物
席　種	（奏楽席）	書院形式	－		

図

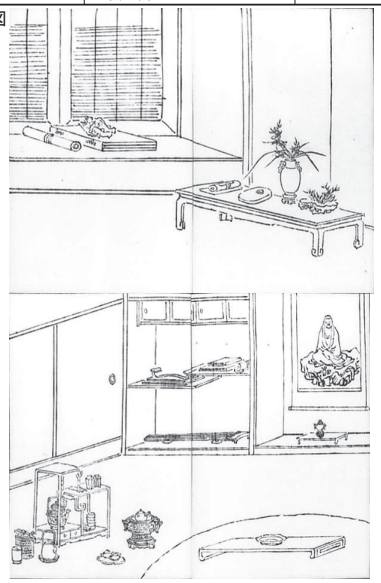


平面モデル

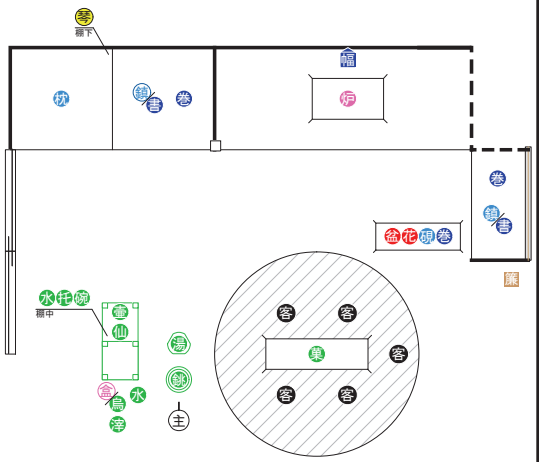


席　名	第九席　本席	床形式	⑨框床　（柱：角柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



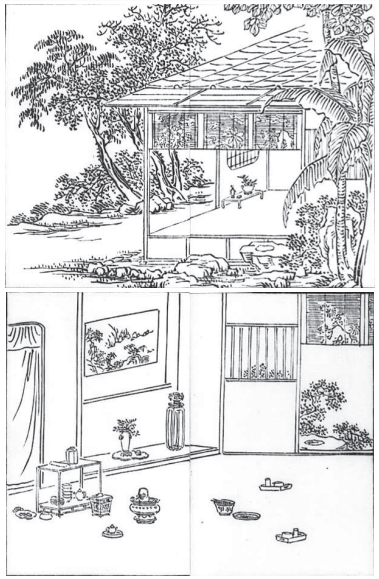
平面モデル



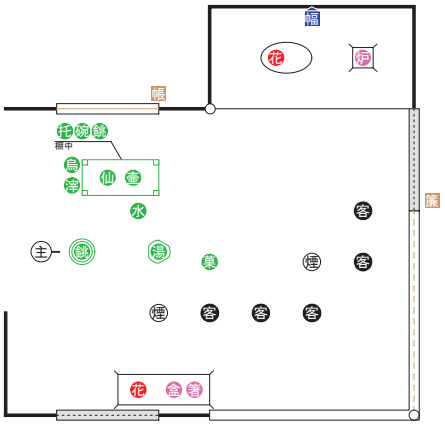
史料名	雲烟供養図録（中巻）	著　者	杉田三郎助
		開催地	京都
刊行年	明治13年（1880）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第六席　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	－	備　考	外部に芭蕉・木・蹲踞
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

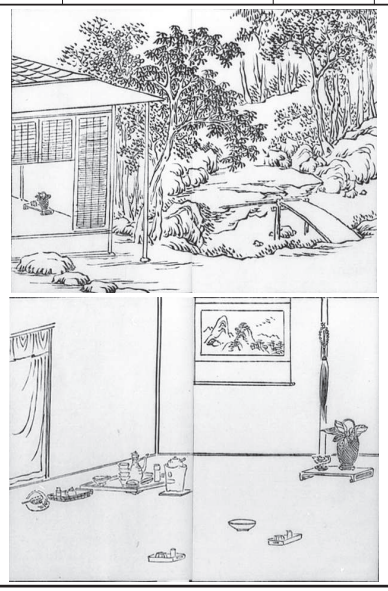


平面モデル

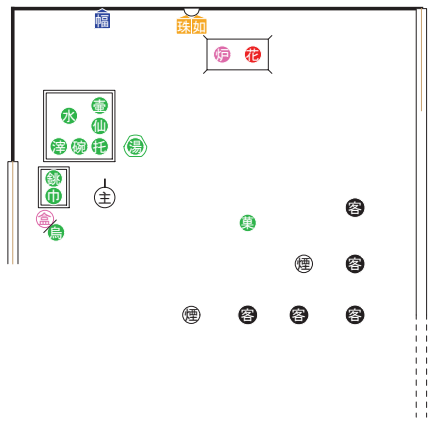


席　名	第七席　本席	床形式	①壁床　（柱：丸柱）	点　前	床前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



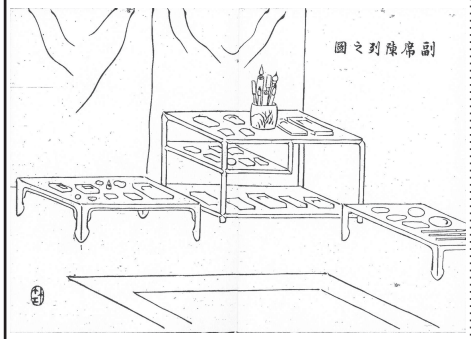
平面モデル



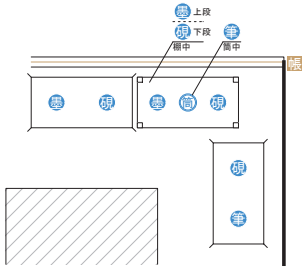
史料名	追遠薦新図録	著　者	奥玄寳（奥蘭田）
		開催地	東京
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	副席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（文房展観席）	書院形式	－		

図

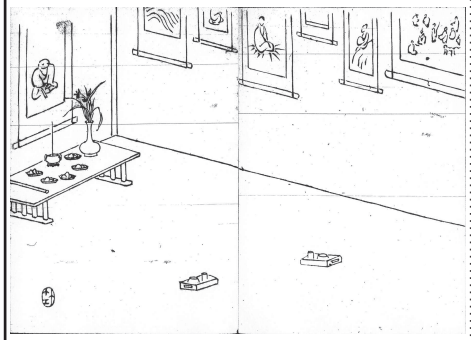


平面モデル

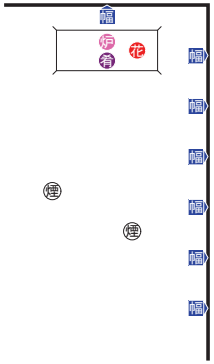


席　名	小室　薦奠之筵	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	－		

図



平面モデル

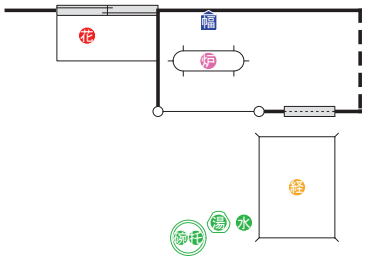


史料名	追遠薦新図録	著　者	奥玄寳（奥蘭田）
		開催地	東京
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	本席	床形式	④踏込床（柱：丸柱）	点　前	－
		床脇形式	幸棚	備　考	
席　種	（文房展観席）	書院形式	－		

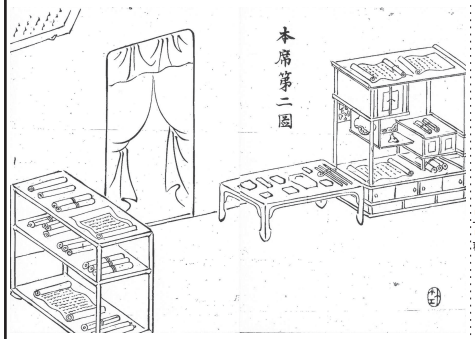
図

平面モデル

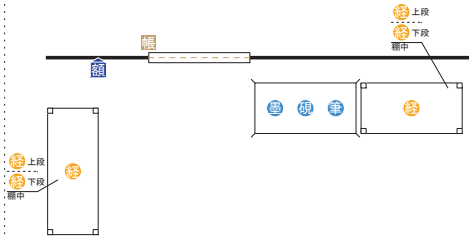


席　名	本席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（文房展観席）	書院形式	－		

図



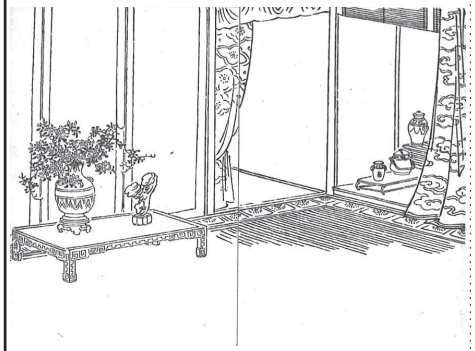
平面モデル



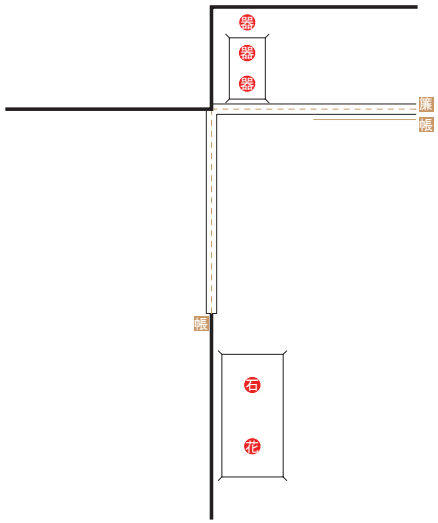
史料名	分史翁薦事図録（上:元巻 下:亨巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第一席　前席	床形式	⑫複数室（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図

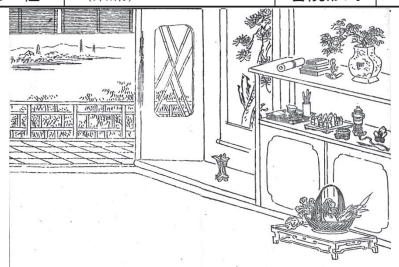


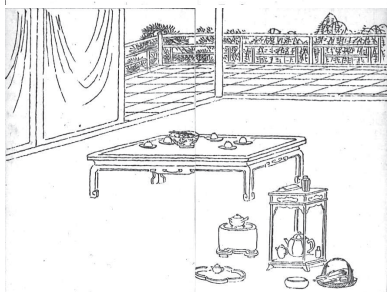
平面モデル



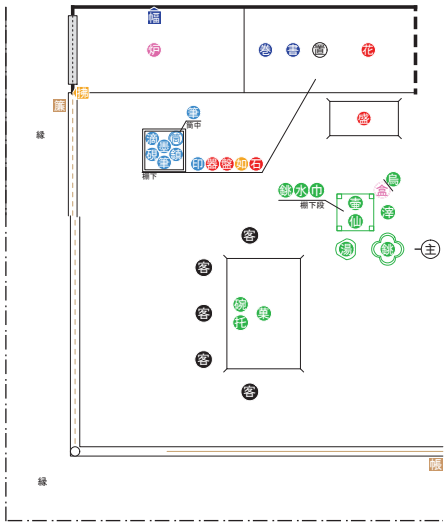
席　名	第一席　茶室	床形式	④框床（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	書物棚	備　考	外部に樹木 遠景に山・湖
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図





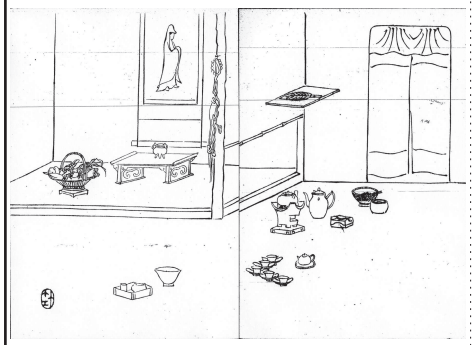
平面モデル



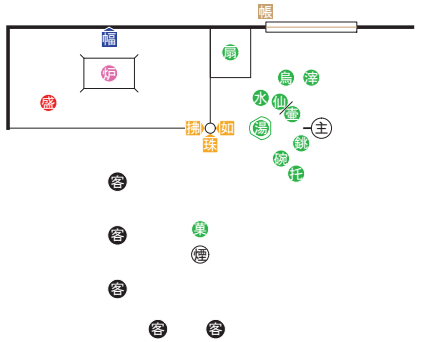
史料名	追遠薦新図録	著　者	奥玄實（奥蘭田）
		開催地	東京
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	茗筵	床形式	④框床（柱：丸太）	点　前	床隣
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



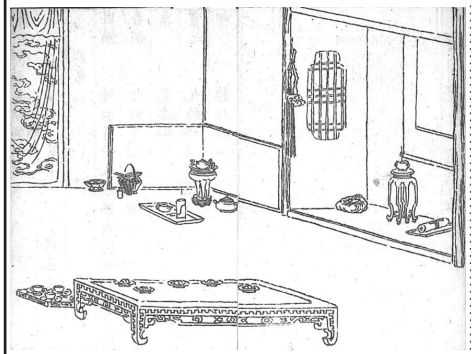
平面モデル



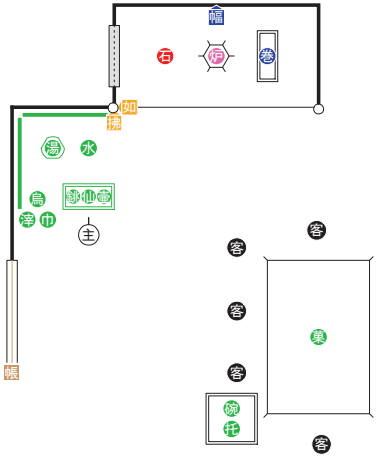
史料名	分史翁薦事図録	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　茶室	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



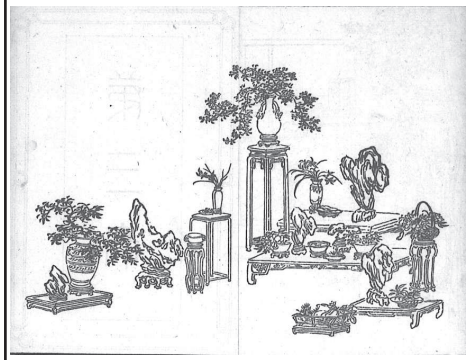
平面モデル



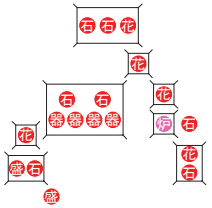
史料名	分史翁薦事図録（亨巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　前席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

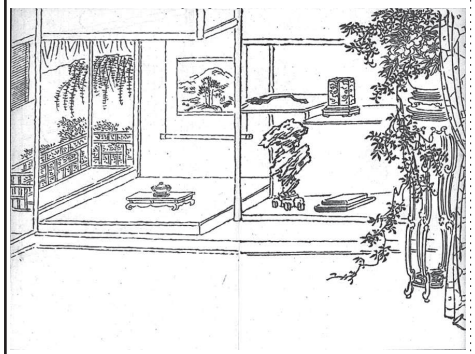


平面モデル

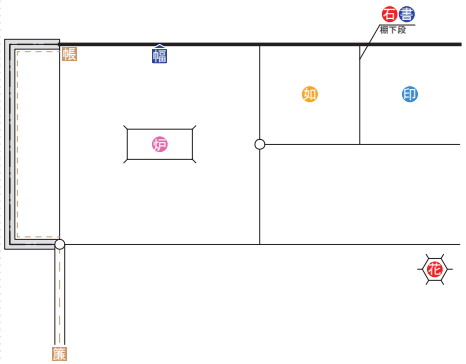


席　名	第三席　前席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	外部に樹木
席　種	前席	書院形式	付書院		

図



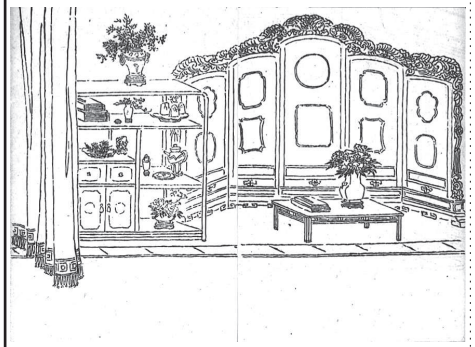
平面モデル



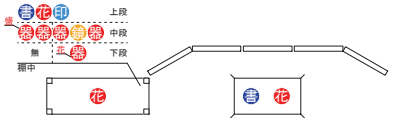
史料名	分史翁薦事図録（亨巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第四席	床形式	―　　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

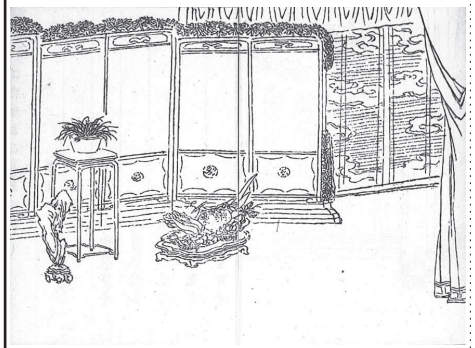


平面モデル

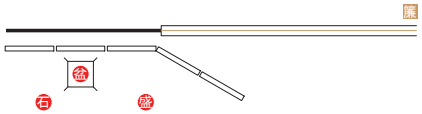


席　名	第四席	床形式	―　　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



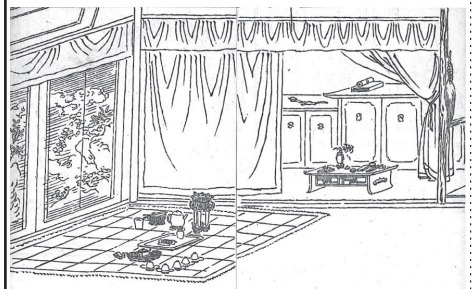
平面モデル

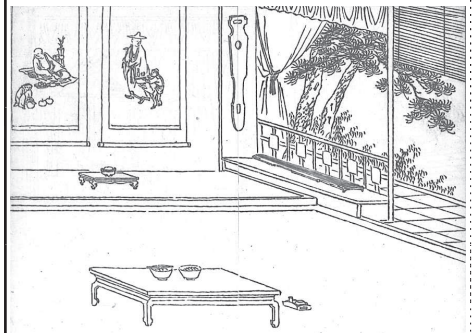


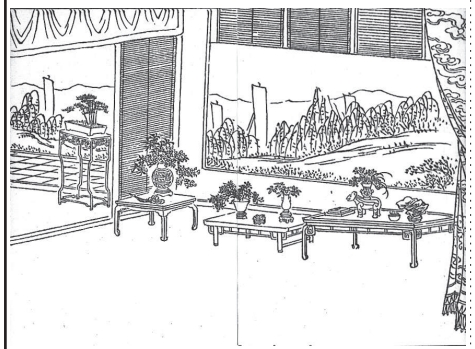
史料名	分史翁薦事図録（亨巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第四席	床形式	⑨框床　（柱：奇木）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚	備　考	外部に松 遠景に山・幟
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

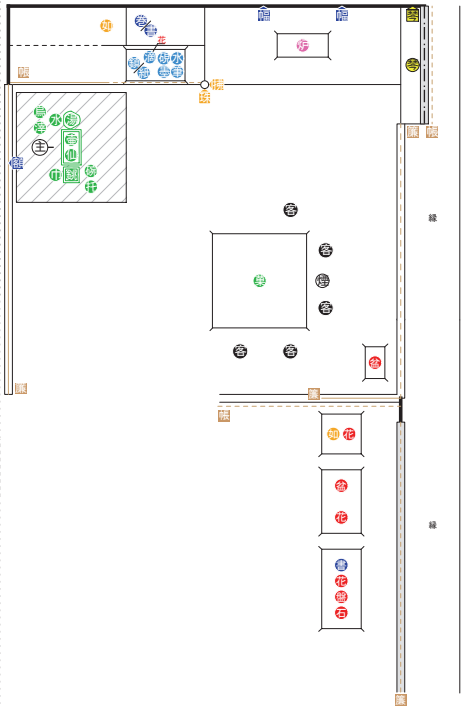
図







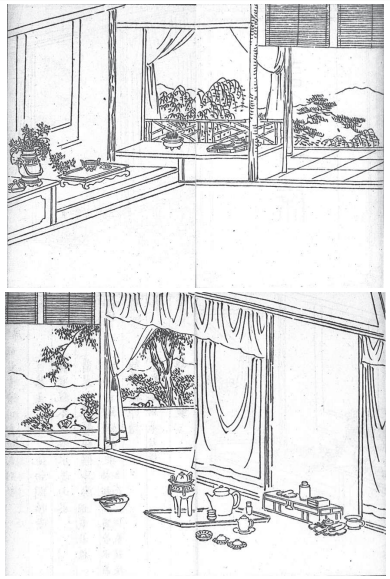
平面モデル



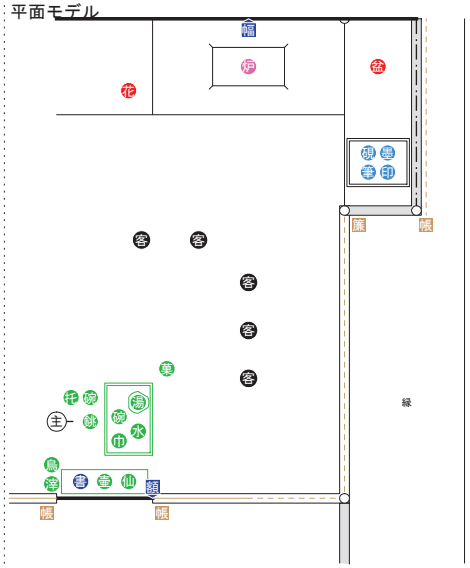
史料名	分史翁薦事図録（利巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第七席	床形式	⑨琵琶床　（柱：－　）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	外部に松・樹木 遠景に山
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



平面モデル



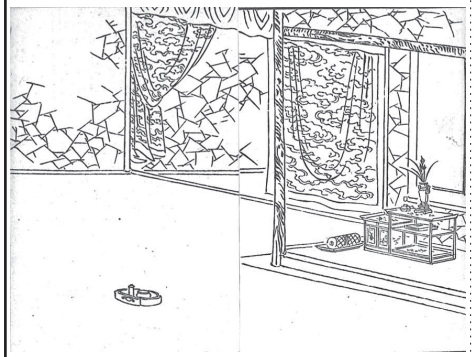
席　名	第八席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	－		

図

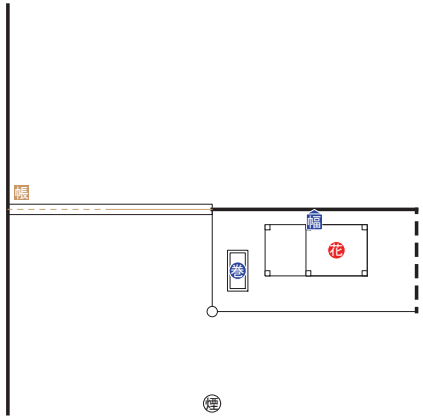
史料名	分史翁薦事図録（利巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第六席　前席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図

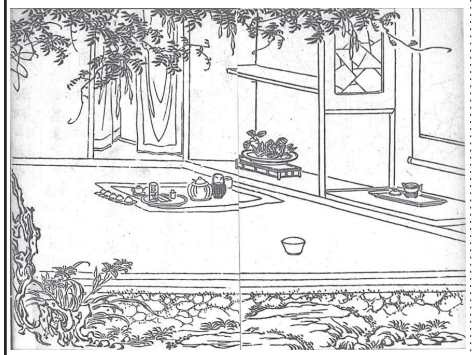


平面モデル

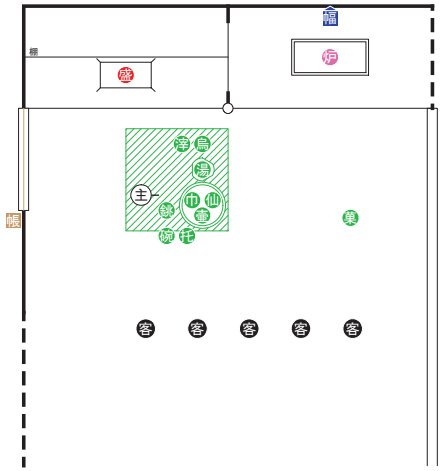


席　名	第六席　茶室	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	通棚	備　考	庭
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



平面モデル

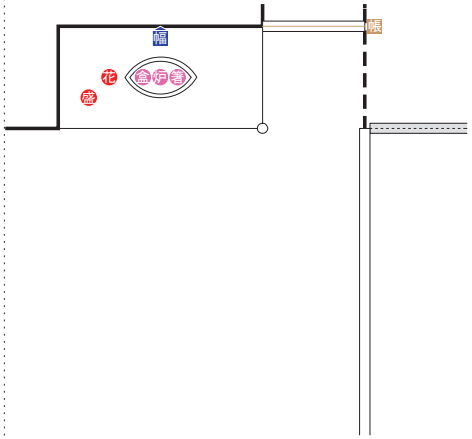


史料名	分史翁薦事図録（利巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に石・植物 次図と同じ部屋の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

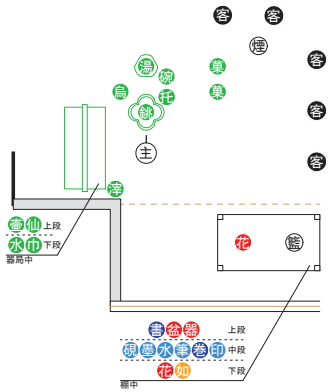
平面モデル



席　名	第十席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に樹木、突上げ戸 上図と同じ部屋の別角度
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

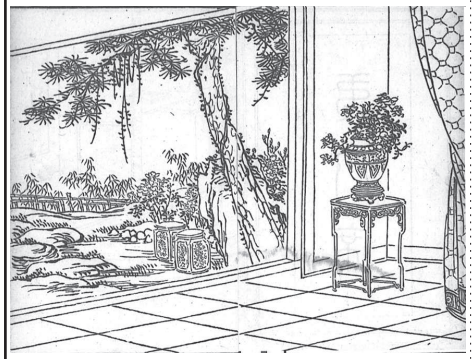
平面モデル



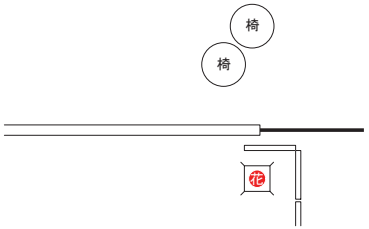
史料名	分史翁薦事図録（利巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第九席　前席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	布敷、庭に榻・松・竹・石
席　種	前席	書院形式	―		

図

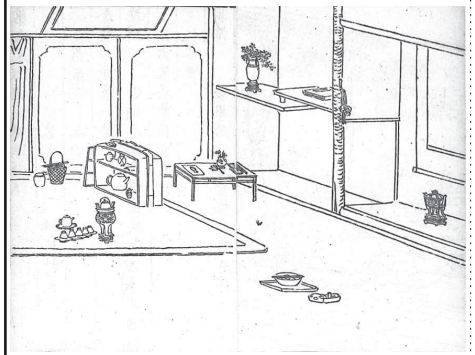


平面モデル

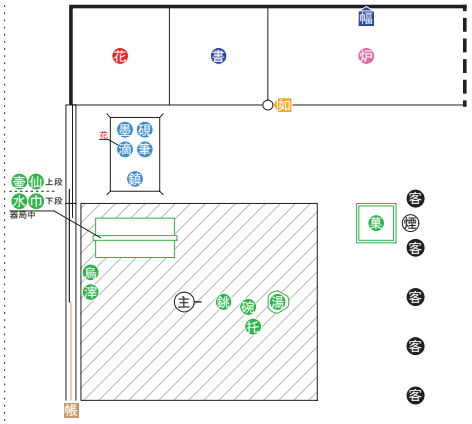


席　名	第九席　茶室	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	脇前下
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



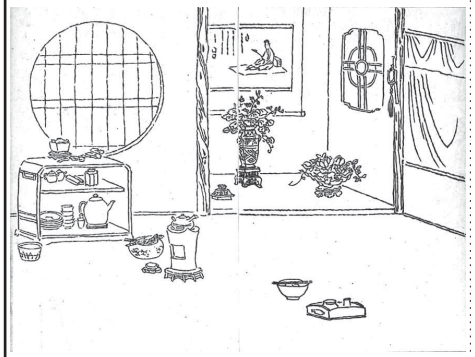
平面モデル



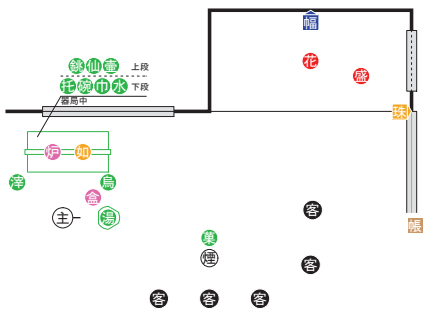
史料名	分史翁薦事図録（貞巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十四席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

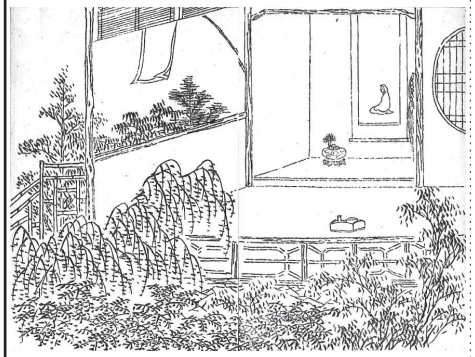


平面モデル

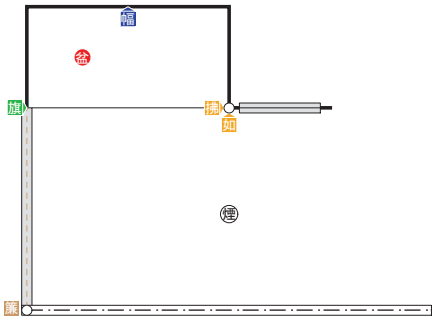


席　名	第十五席　前席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に樹木
席　種	前席	書院形式	―		

図



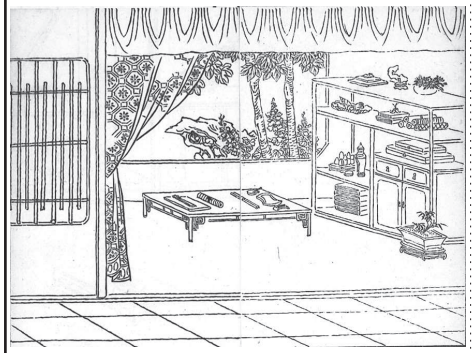
平面モデル



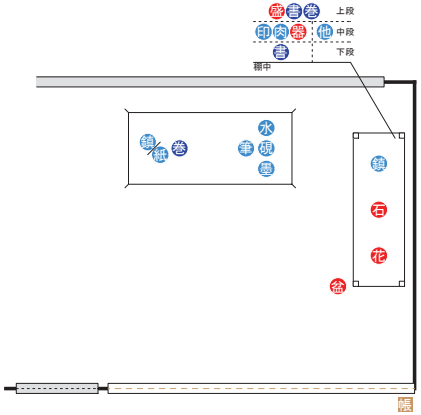
史料名	分史翁薦事図録（貞巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十二席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に石・樹木 次図と同じ席
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

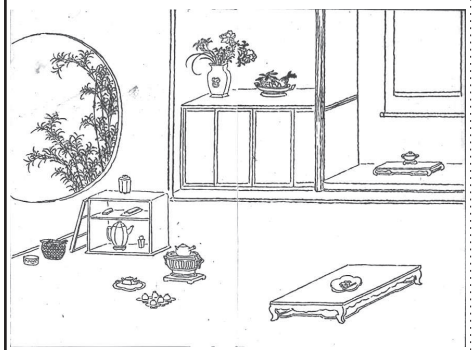


平面モデル

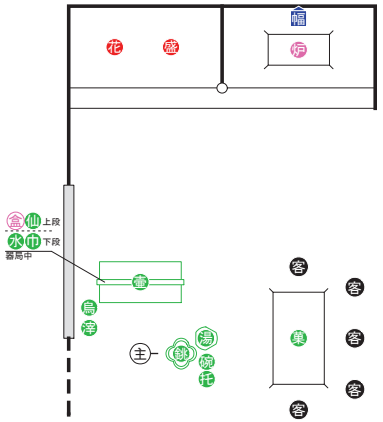


席　名	第十二席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	脇前下
		床脇形式	文道棚	備　考	外部に樹木 前図と同じ席
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



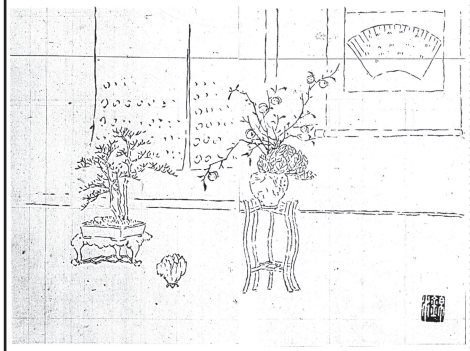
平面モデル



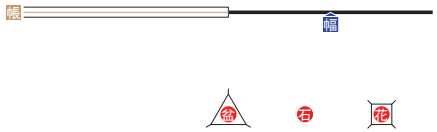
史料名	清娯軒茶筵図録	著　者	三浦秋岳
		開催地	名古屋
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	前席	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽展観席）	書院形式	－		

図

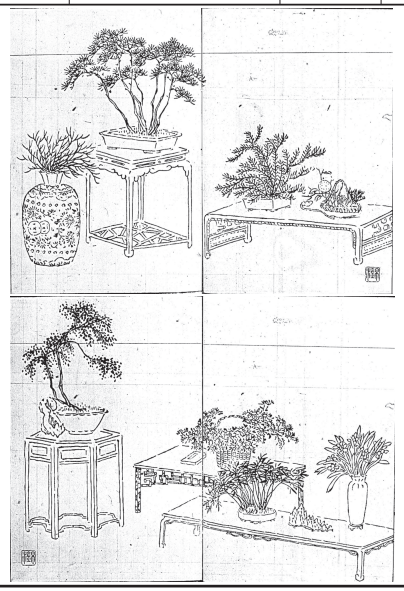


平面モデル

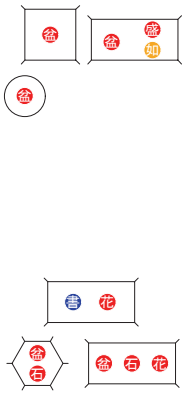


席　名	前席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽展観席）	書院形式	－		

図



平面モデル

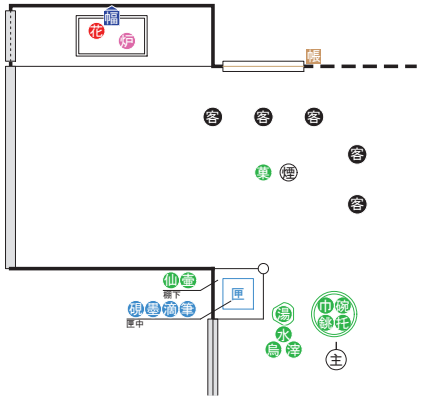


史料名	分史翁薦事図録（貞巻）	著　者	加島信成
		開催地	大阪
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十五席　茶室	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前下
		床脇形式	－	備　考	外部に芭蕉・樹木
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

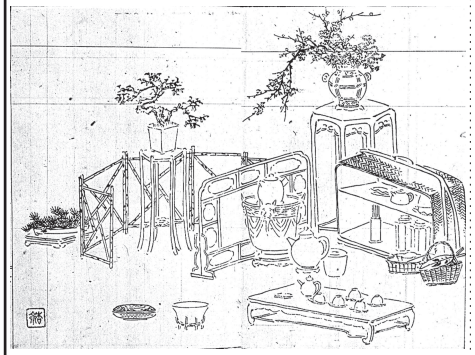
平面モデル



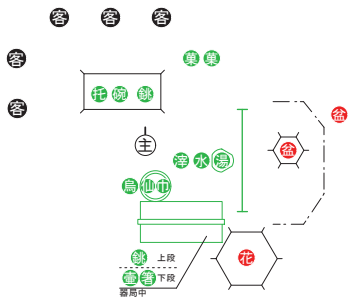
史料名	清娯軒茶筵図録	著　者	三浦秋岳
		開催地	名古屋
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第二　本席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

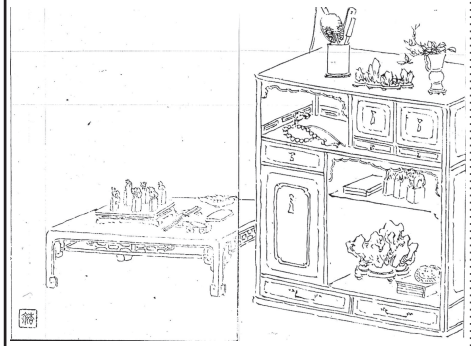


平面モデル

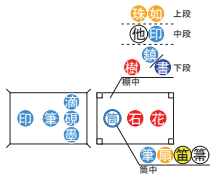


席　名	副席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図



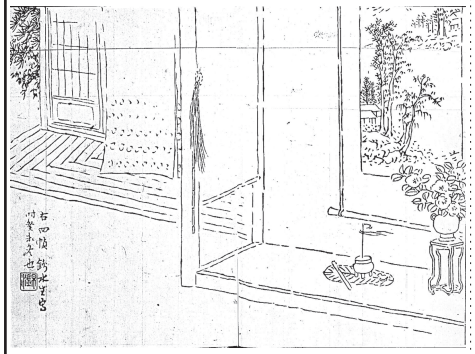
平面モデル



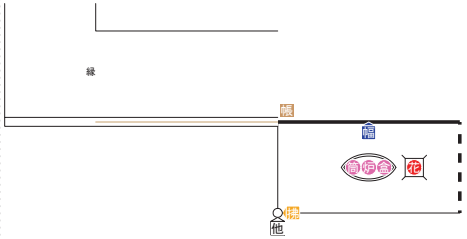
史料名	清娯軒茶筵図録	著　者	三浦秋岳
		開催地	名古屋
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	前席	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に松
席　種	前席	書院形式	―		

図



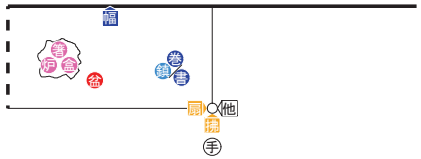
平面モデル



席　名	第二　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

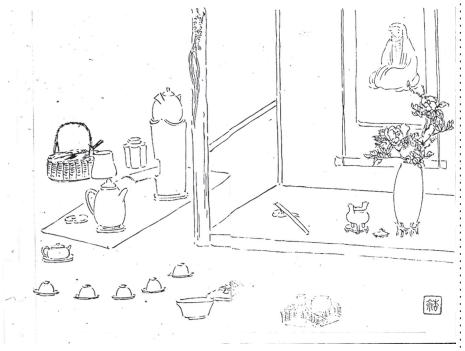
平面モデル



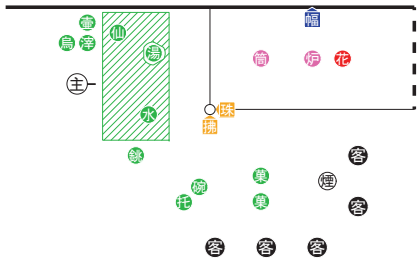
史料名	清娯軒茶筵図録	著　者	三浦秋岳
		開催地	名古屋
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第四　副席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

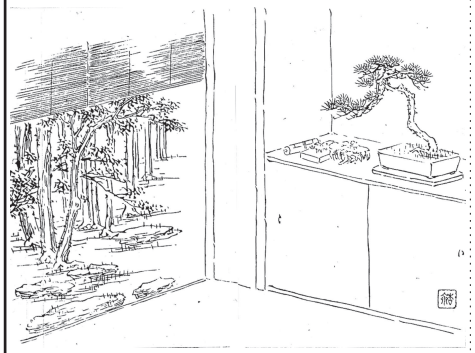


平面モデル

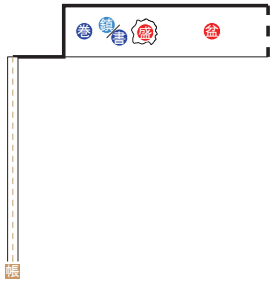


席　名	第四　副席	床形式	― （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	庭に木 前図と同じ席
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



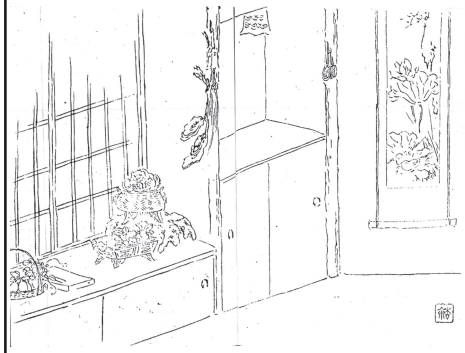
平面モデル



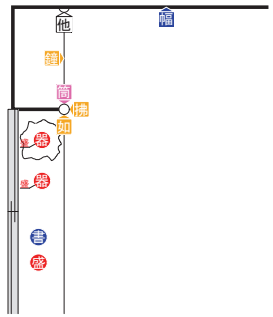
史料名	清娯軒茶筵図録	著　者	三浦秋岳
		開催地	名古屋
刊行年	明治16年（1883）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	副席	床形式	⑥壁床　（柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	文道棚（脇棚）	備　考	
席　種	副席	書院形式	付書院		

図

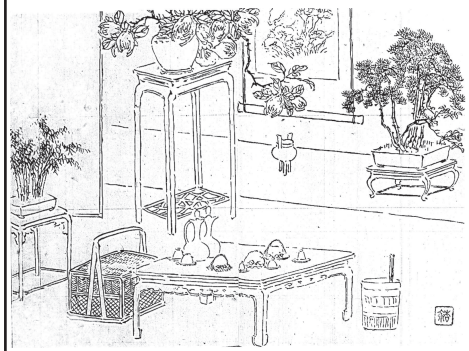


平面モデル

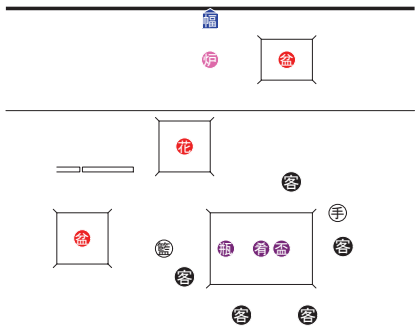


席　名	第三　酒席	床形式	②踏込床　（柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	酒席	書院形式	―		

図



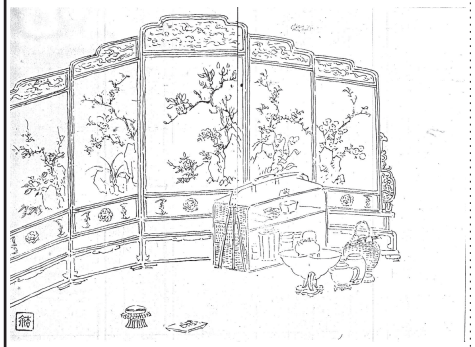
平面モデル



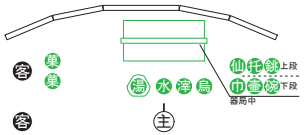
史料名	招鶴亭茗醼図録	著　者	中埜招鶴亭
		開催地	愛知
刊行年	明治19年（1886）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第二　本席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	本勝手
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

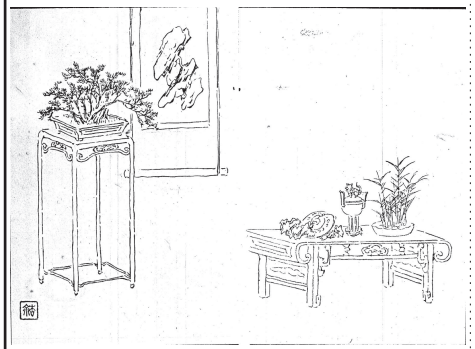


平面モデル

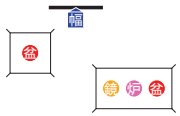


席　名	第二　副席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（副席）	書院形式	―		

図



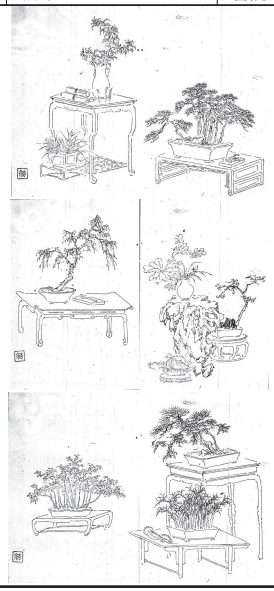
平面モデル



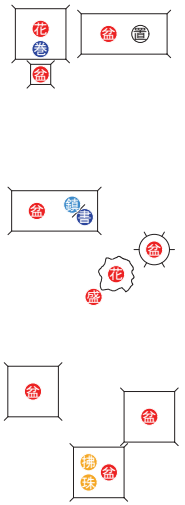
史料名	招鶴亭茗醼図録	著　者	中埜招鶴亭
		開催地	愛知
刊行年	明治19年（1886）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	前席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

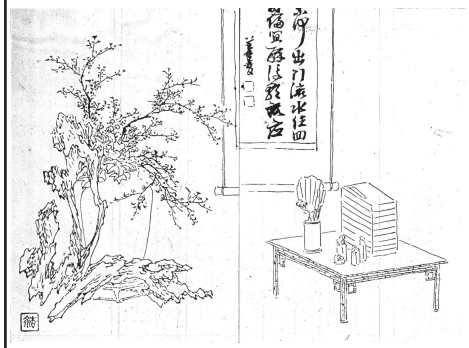


平面モデル

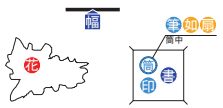


席　名	第二　本席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



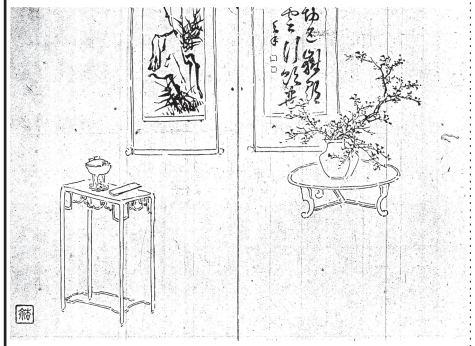
平面モデル



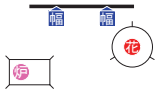
史料名	招鶴亭茗醼図録	著　者	中埜招鶴亭
		開催地	愛知
刊行年	明治19年（1886）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第四　酒席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	酒席	書院形式	―		

図

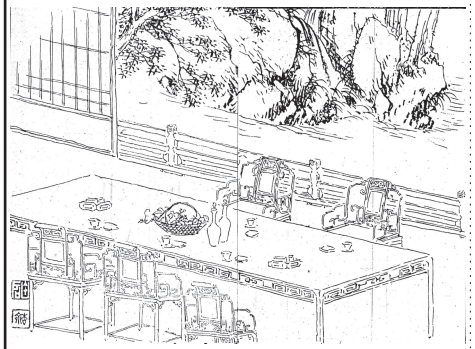


平面モデル

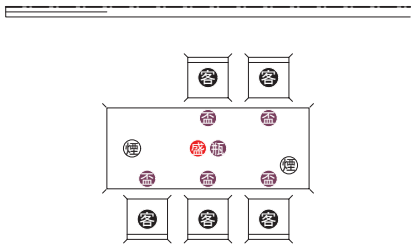


席　名	第四　酒席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	机、椅子 外部に水・石・樹木
席　種	酒席	書院形式	―		

図



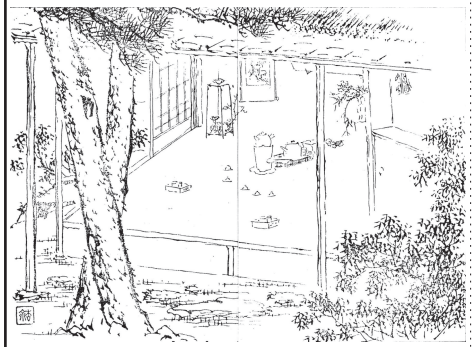
平面モデル



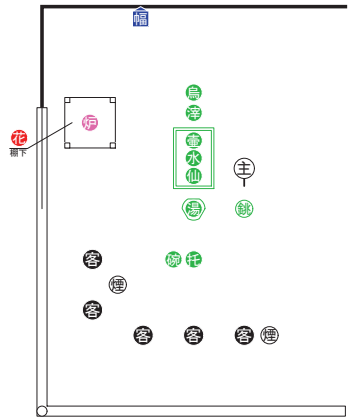
史料名	招鶴亭茗醼図録	著　者	中埜招鶴亭
		開催地	愛知
刊行年	明治19年（1886）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第三　茗筵	床形式	①壁床　（柱：―　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

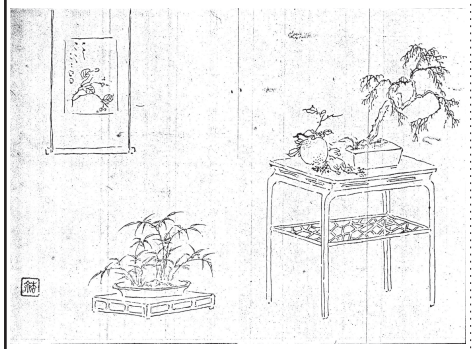


平面モデル

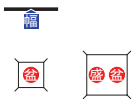


席　名	第四　副席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

図



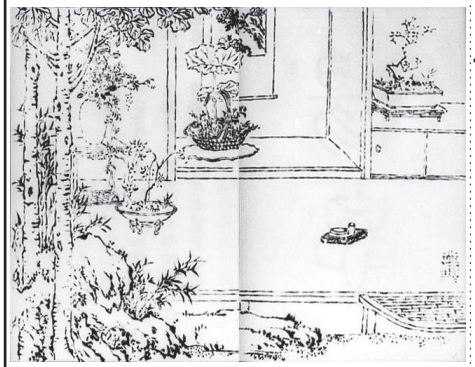
平面モデル



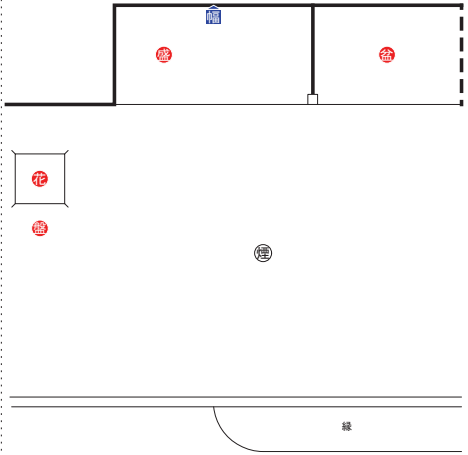
史料名	柳嶋清賞	著　者	古梅居士
		開催地	東京
刊行年	明治20年（1887）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席	床形式	⑤框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	庭に石・樹木
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

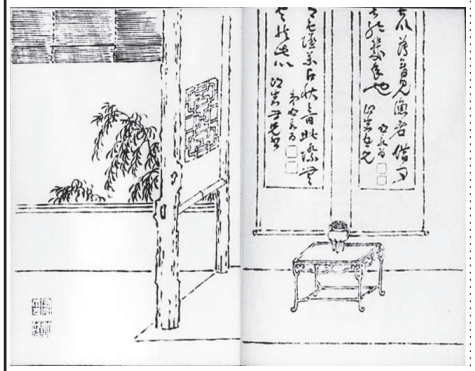


平面モデル

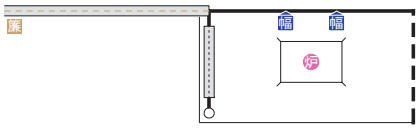


席　名	第二席	床形式	②原叟床　（柱：奇木）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に竹
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



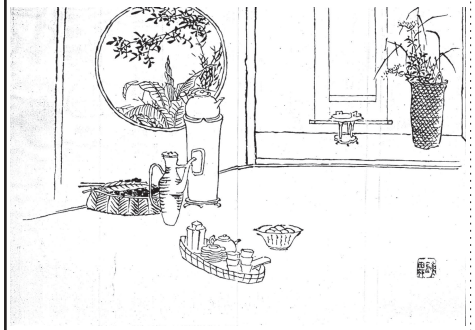
平面モデル



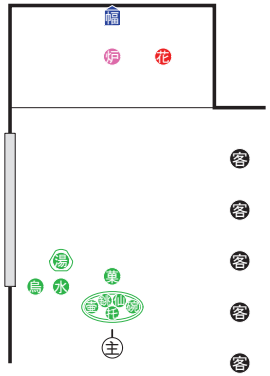
史料名	楳仙先生古稀筵展観録	著　者	吉嗣拝山
		開催地	福岡
刊行年	明治19年（1886）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	煎茶席	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	外部に芭蕉・樹木
席　種	茶席	書院形式	―		

図

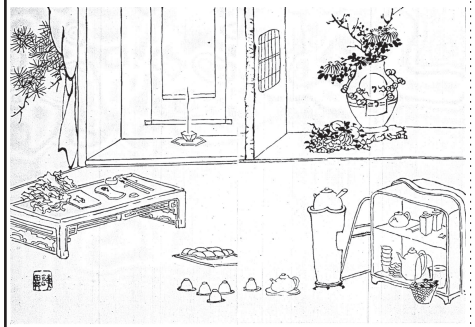


平面モデル

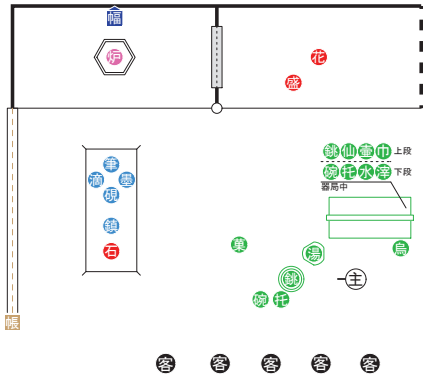


席　名	煎茶席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	外部に松
席　種	茶席	書院形式	―		

図



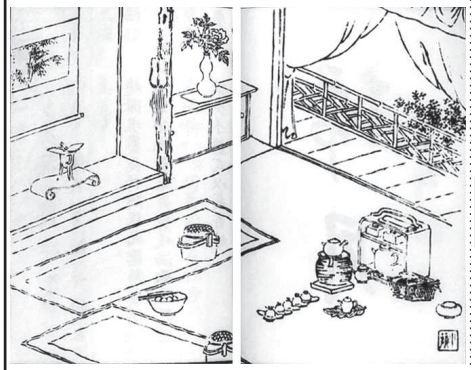
平面モデル



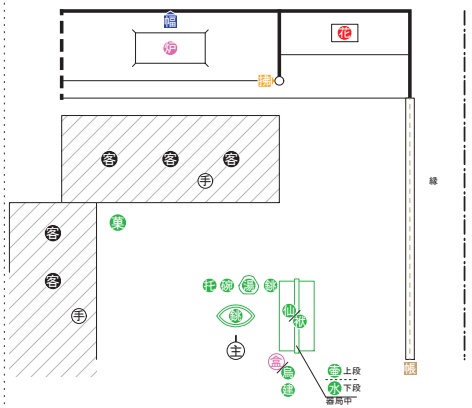
史料名	柳嶋清賞	著　者	古梅居士
		開催地	東京
刊行年	明治20年（1887）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席	床形式	④框床　（柱：奇木）	点　前	脇前下
		床脇形式	地袋	備　考	外部に樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

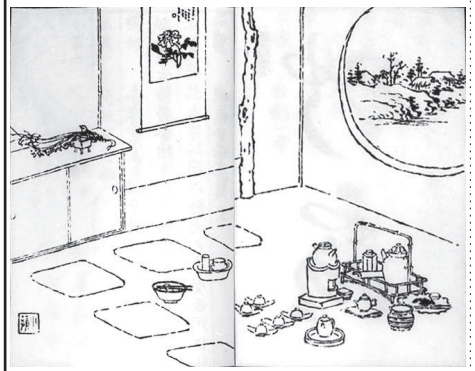


平面モデル

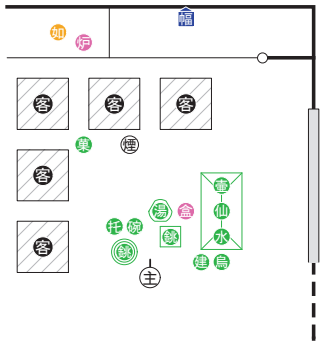


席　名	第四席	床形式	④踏込床　（柱：奇木）	点　前	床前下
		床脇形式	地袋	備　考	外部に石
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



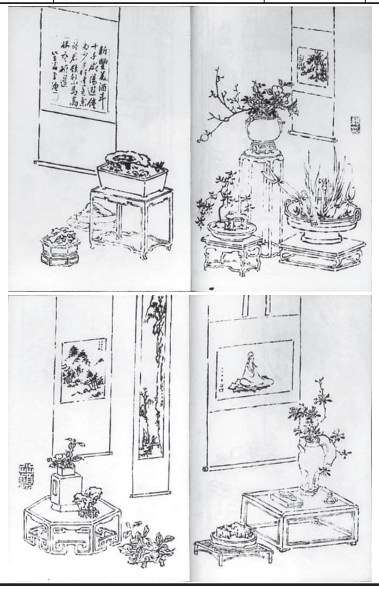
平面モデル



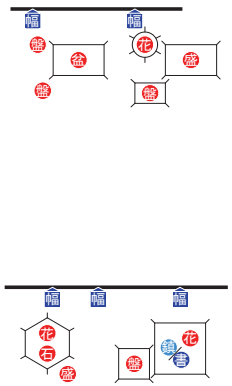
史料名	柳嶋清賞	著　者	古梅居士
		開催地	東京
刊行年	明治20年（1887）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	―
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図

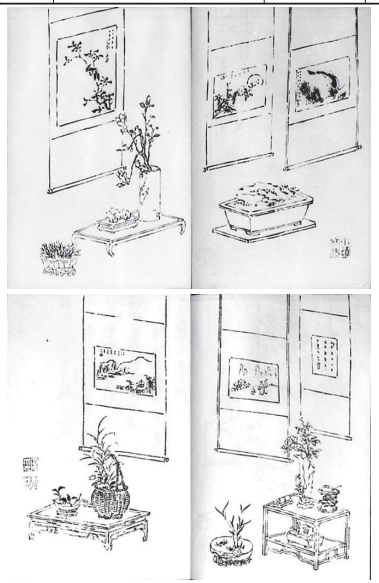


平面モデル

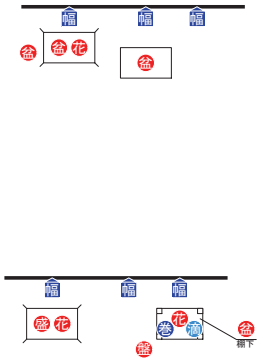


席　名	第二席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	―
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



平面モデル

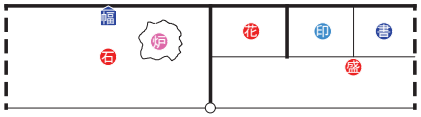


史料名	随意荘雅集録	著　者	郷純造
		開催地	東京
刊行年	明治22年（1889）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第一席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	寝覚棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

平面モデル



席　名	第一席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

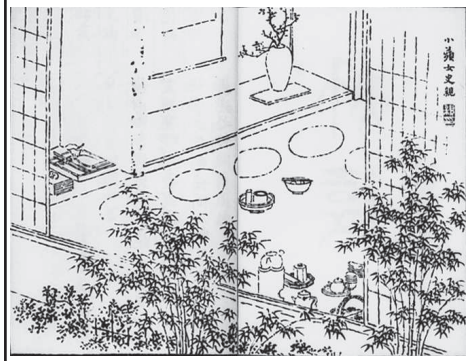
図

平面モデル

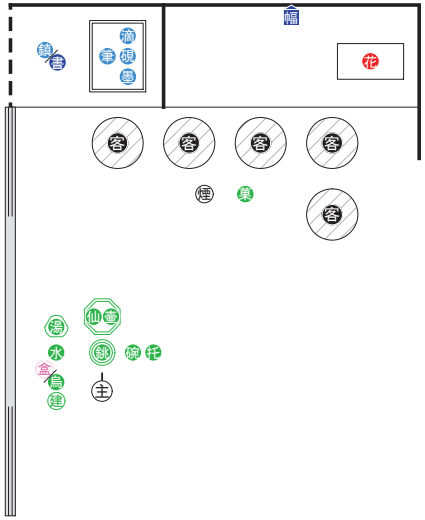
史料名	柳嶋清賞	著　者	古梅居士
		開催地	東京
刊行年	明治20年（1887）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第五席	床形式	④框床　（柱：奇木）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚なし	備　考	外部に竹
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



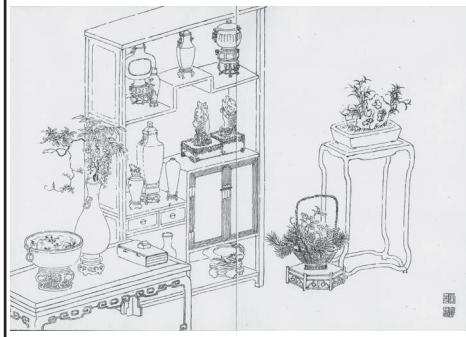
平面モデル



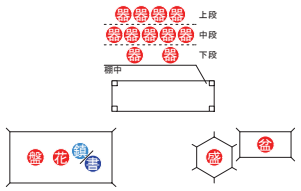
史料名	随意荘雅集録	著　者	郷純造
		開催地	東京
刊行年	明治22年（1889）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第二席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図

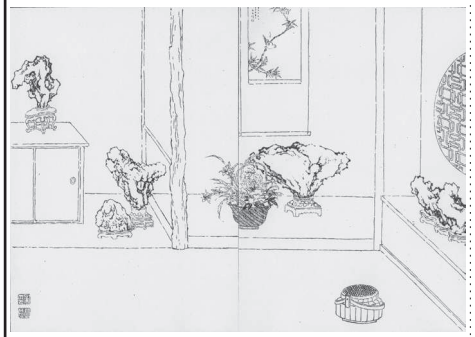


平面モデル

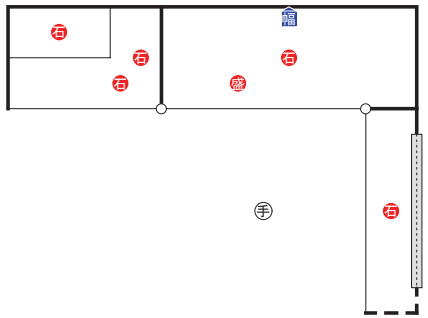


席　名	第三席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	付書院（円窓）		

図



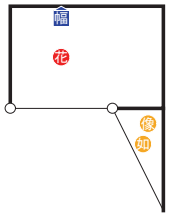
平面モデル



席　名	第一副席	床形式	⑥框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋（三角形、脇棚）	備　考	
席　種	副席	書院形式	―		

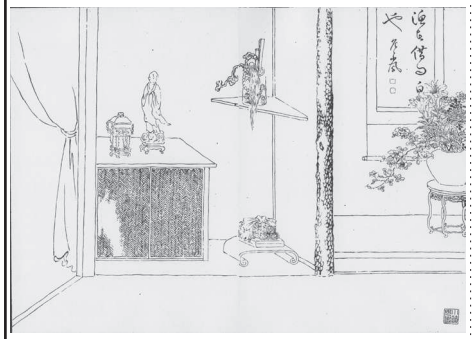
図

平面モデル

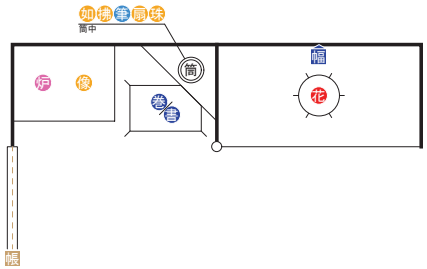


席　名	第二席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図



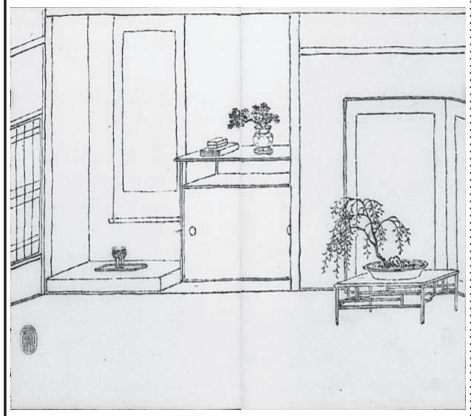
平面モデル



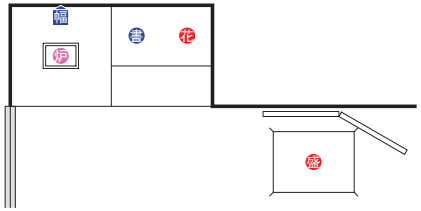
史料名	墨縁奇賞	著　者	奥三郎兵衛
		開催地	大阪
刊行年	明治26年（1893）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	―	床形式	⑤框床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	書物棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

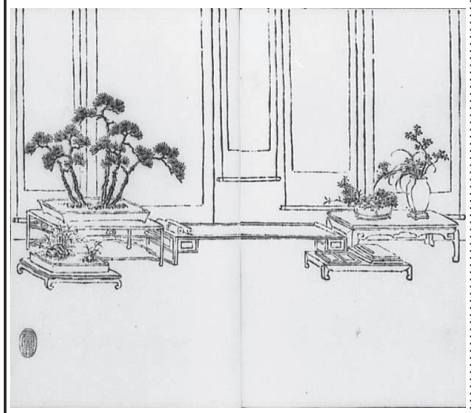


平面モデル

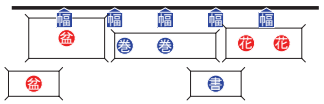


席　名	書画	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



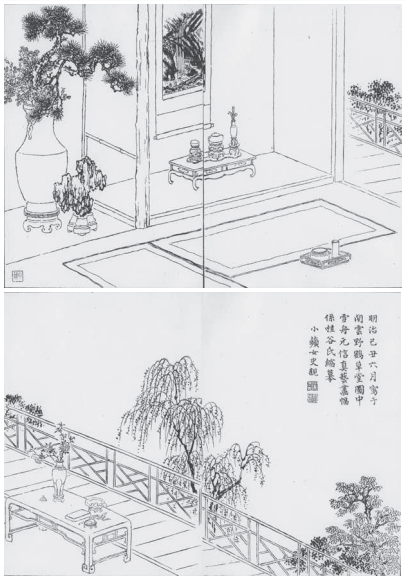
平面モデル



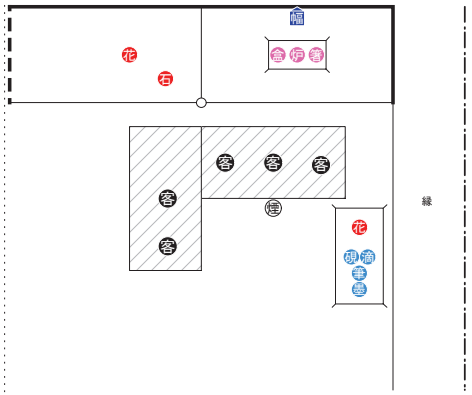
史料名	随意荘雅集録	著　者	郷純造
		開催地	東京
刊行年	明治22年（1889）跋	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第五席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	外部に樹木
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

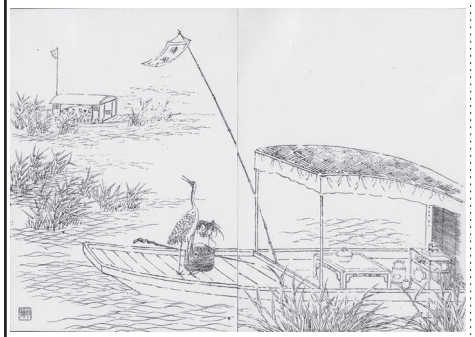


平面モデル

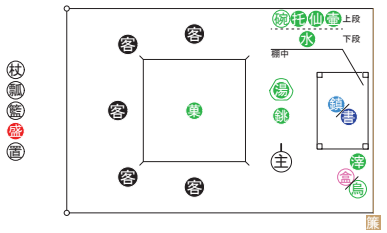


席　名	第六席	床形式	⑭船　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（船房）	書院形式	―		

図



平面モデル



史料名	酔花図誌	著　者	辻多輔、芳賀久一郎
		開催地	愛知
刊行年	明治26年（1893）	所　蔵	高取友仙窟

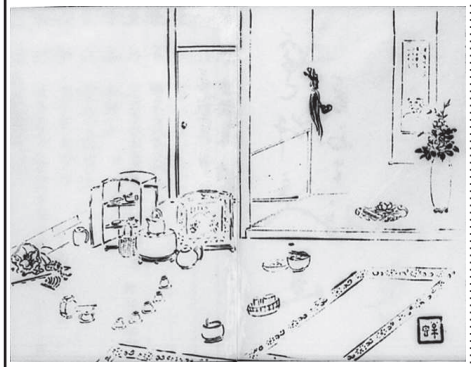
席　名	遺愛品席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図

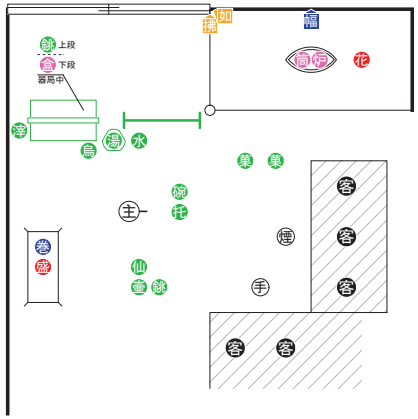
平面モデル

席　名	―	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



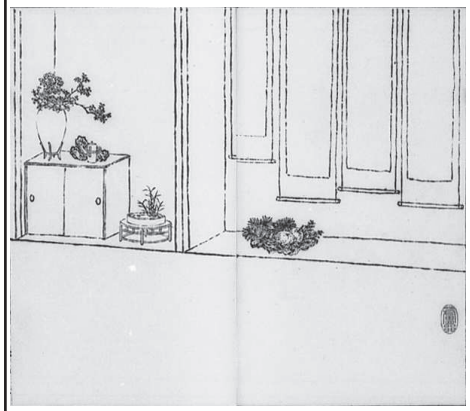
平面モデル



史料名	墨縁奇賞	著　者	奥三郎兵衛
		開催地	大阪
刊行年	明治26年（1893）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	書画	床形式	④踏込床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

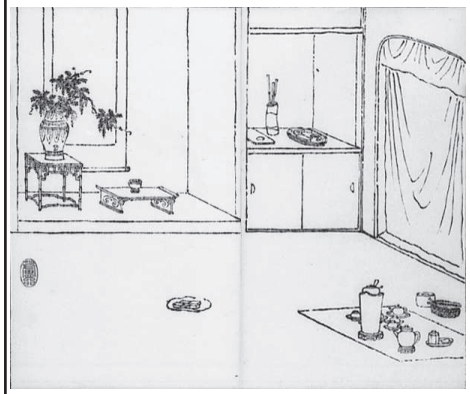
図



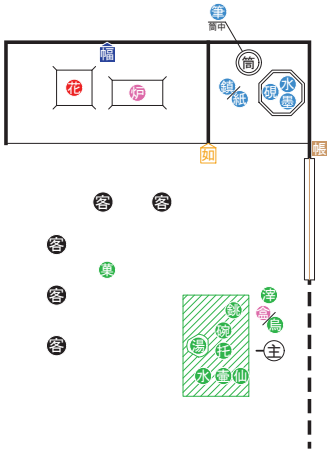
平面モデル

席　名	―	床形式	④框床　（柱：―　）	点　前	脇前下
		床脇形式	文道棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



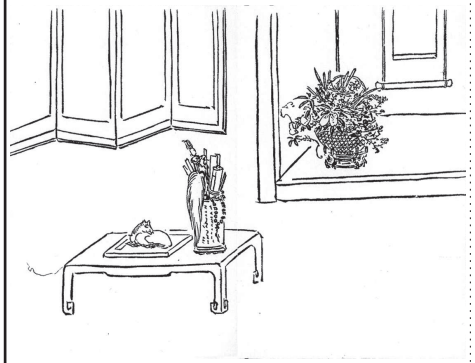
平面モデル



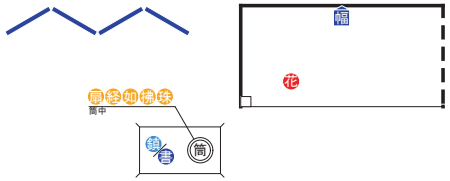
史料名	竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	著　者	村上和光
		開催地	京都
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	茶席　第二席　前席	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



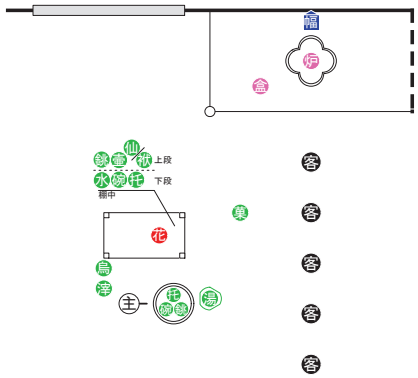
平面モデル



席　名	茶席　第二席　本席	床形式	②框床　（柱：竹）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	外部に竹
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

平面モデル



史料名	酔花図誌	著　者	辻多輔、芳賀久一郎
		開催地	愛知
刊行年	明治26年（1893）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	古泉席中古瓦	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（瓦陳列席）	書院形式	―		

図

平面モデル

席　名	瓶花盆栽	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

史料名	淇水翁薦事図録（松巻）	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

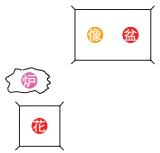
席　名	招鶴亭　本席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

席　名	招鶴亭　本席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

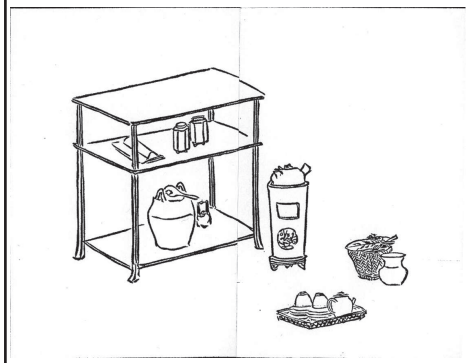
平面モデル



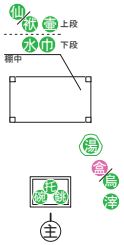
史料名	竹洞竹渓翁建碑薦事餘録	著　者	村上和光
		開催地	京都
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	茶席　第一席　茗席	床形式	―　（柱：―）	点　前	本勝手
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図

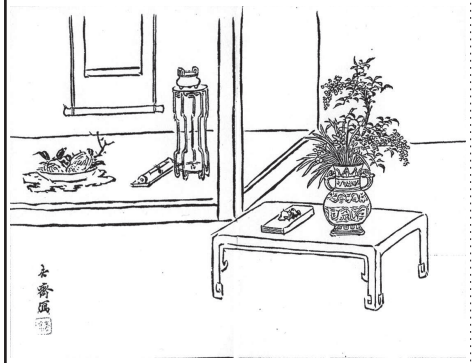


平面モデル

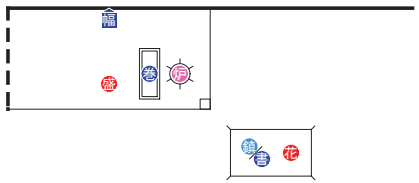


席　名	茶席　第一席　茗席	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



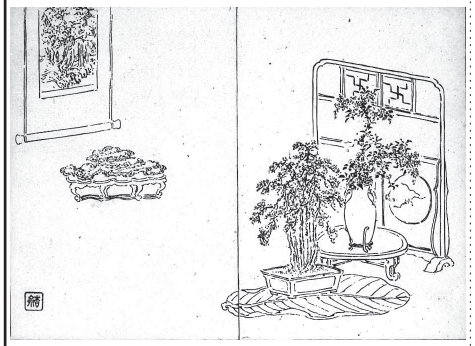
平面モデル



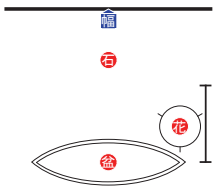
史料名	淇水翁薦事図録（松巻）	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　水亭　前席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

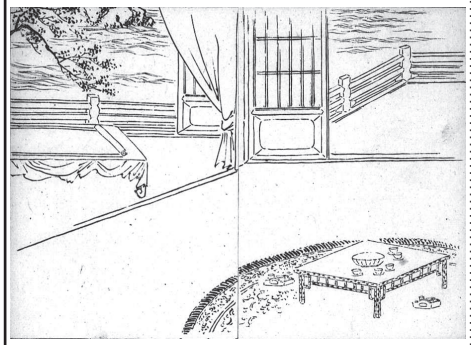


平面モデル

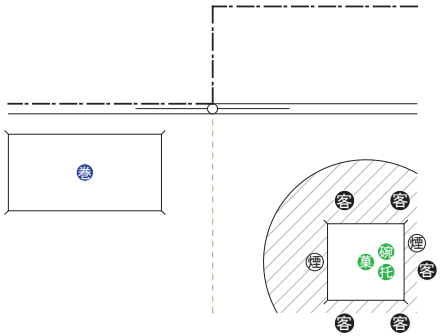


席　名	第三席　水亭　茶席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に池・石・樹木 次図と同じ部屋
席　種	茶席	書院形式	―		

図



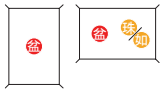
平面モデル



席　名	招鶴亭　本席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

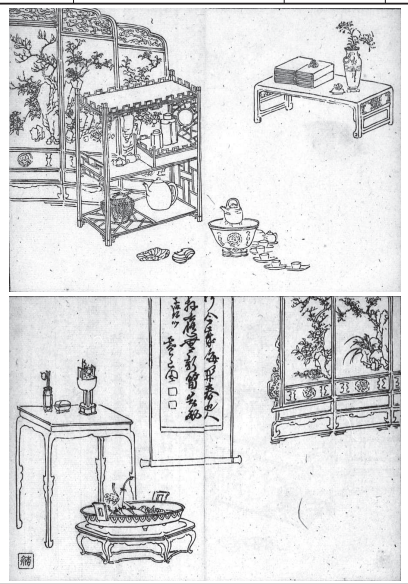
図

平面モデル

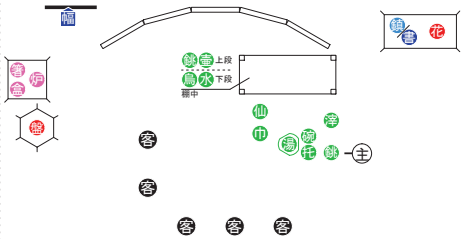


席　名	招鶴亭　本席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



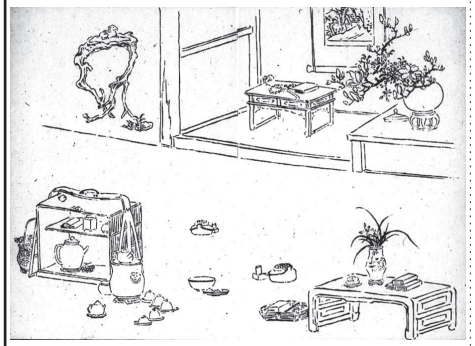
平面モデル



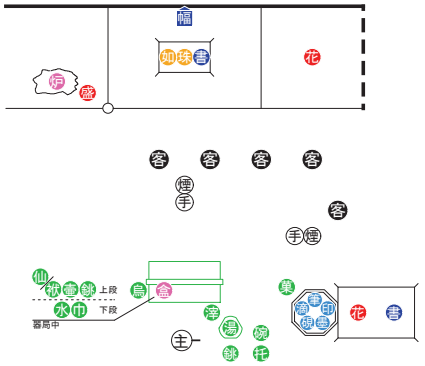
史料名	淇水翁薦事図録	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	半洲居　茶席	床形式	⑦琵琶床　（柱：丸柱　）	点　前	床前下
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図

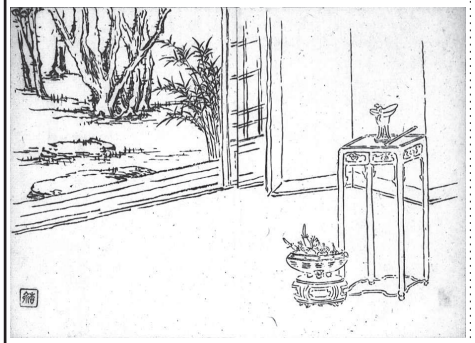


平面モデル

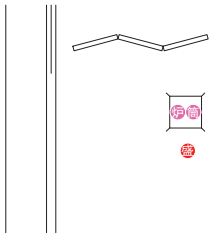


席　名	半洲居　副席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に石・竹
席　種	副席	書院形式	―		

図



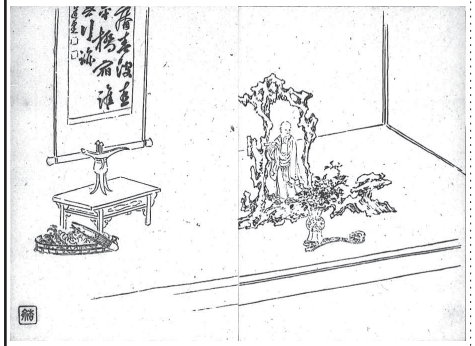
平面モデル



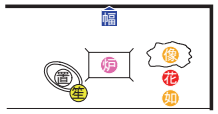
史料名	淇水翁薦事図録（上：松巻　下：竹巻）	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　水亭　茶席	床形式	②框床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図

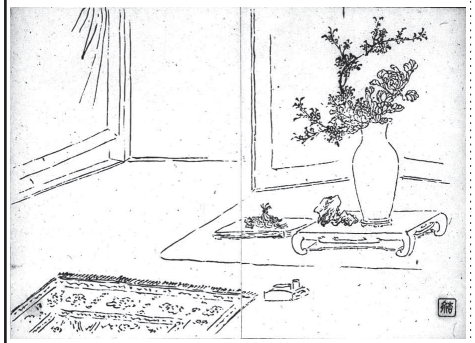


平面モデル

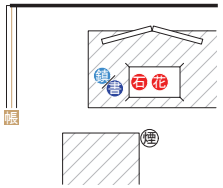


席　名	半洲居　前席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



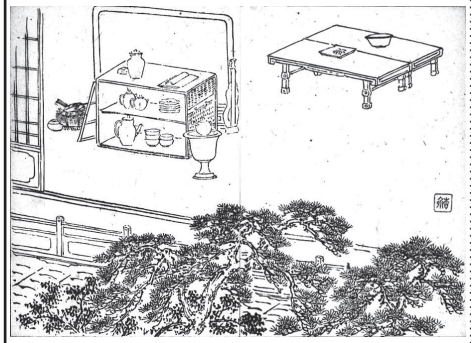
平面モデル



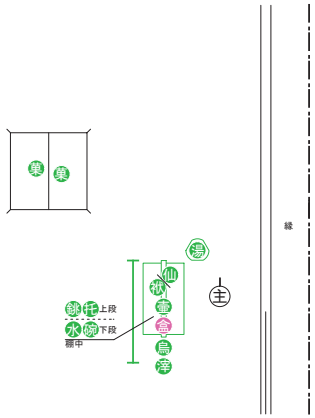
史料名	淇水翁薦事図録	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	北岳楼　茶席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に松・階下の屋根 前図と同じ部屋の別角度
席　種	茶席	書院形式	―		

図



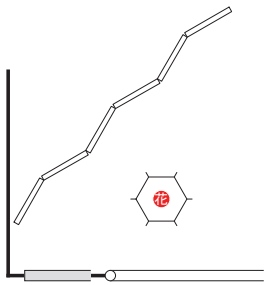
平面モデル



席　名	聴松館　第一席	床形式	⑪単室　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に榻・松・石
席　種	（待合席）	書院形式	―		

図

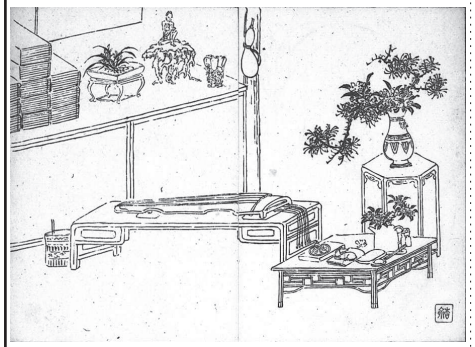
平面モデル



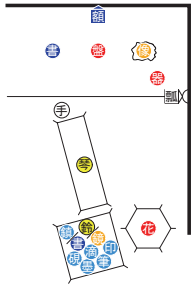
史料名	淇水翁薦事図録	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	北岳楼　前席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	⑩文道棚	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

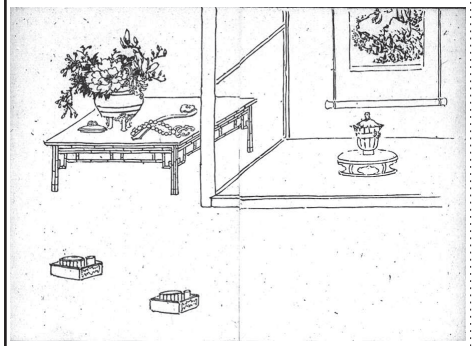


平面モデル

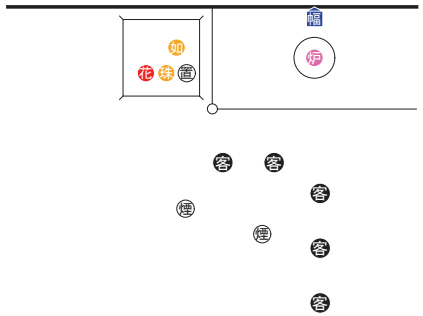


席　名	北岳楼　茶席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	次図と同じ部屋の別角度
席　種	茶席	書院形式	―		

図



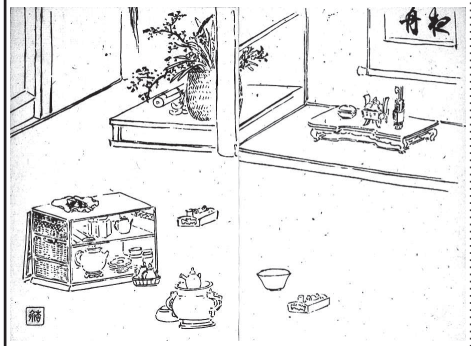
平面モデル



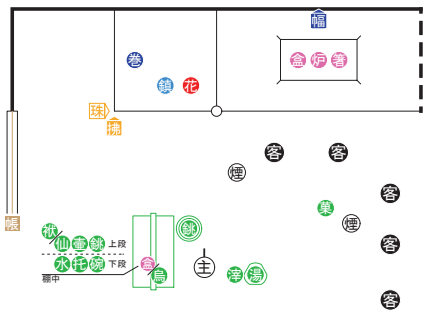
史料名	淇水翁薦事図録	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	聴松館　第三席	床形式	⑤框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

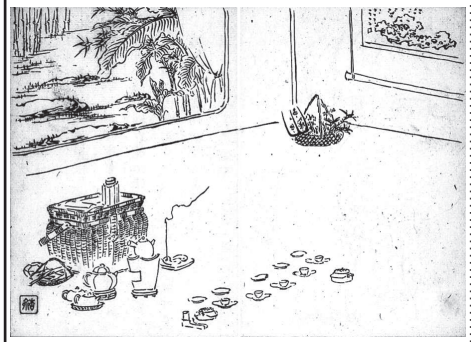


平面モデル

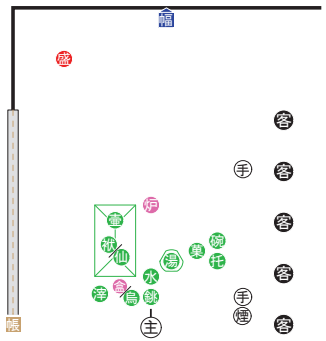


席　名	敬業堂	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	庭に芭蕉・樹木・石
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



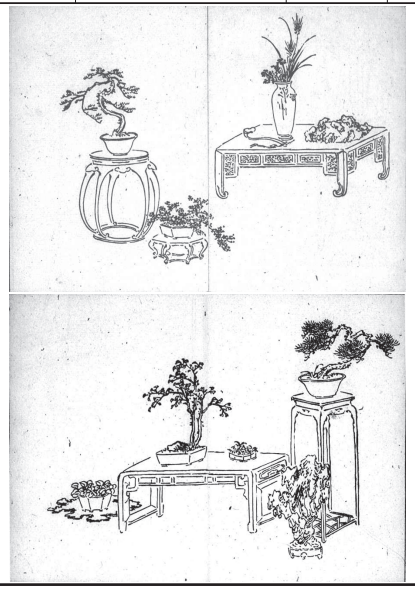
平面モデル



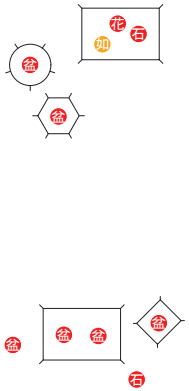
史料名	淇水翁薦事図録	著　者	中埜又左衛門
		開催地	愛知
刊行年	明治27年（1894）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	聴松館　第二席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

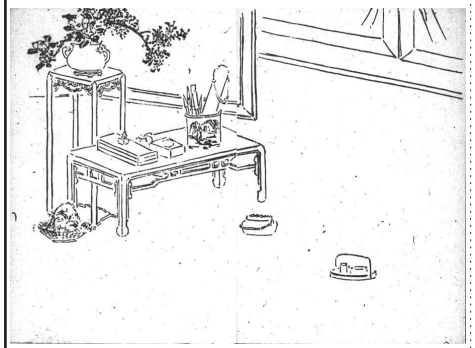


平面モデル

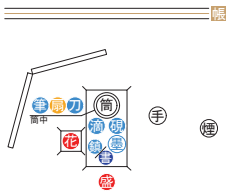


席　名	聴松館　第二席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



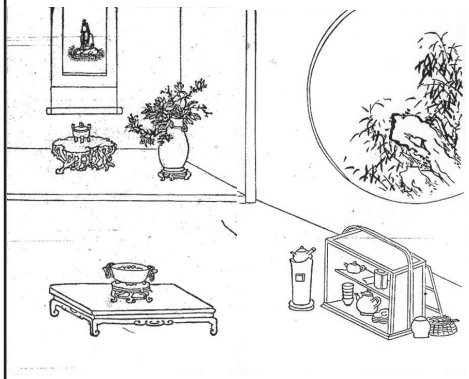
平面モデル



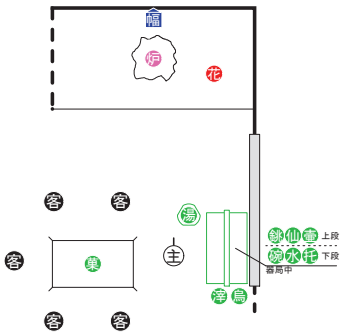
史料名	石癡翁追福展観録	著　者	横瀬満古
		開催地	長崎
刊行年	明治29年（1896）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	―	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	外部に石・竹
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



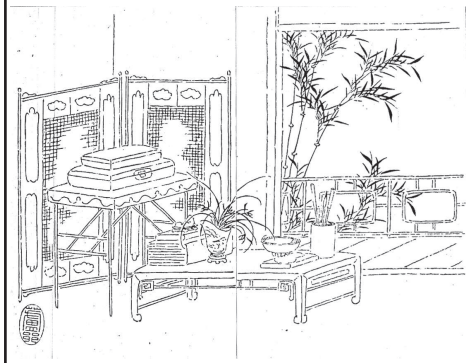
平面モデル



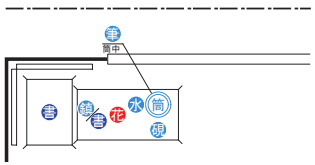
史料名	老古茗筵図録	著　者	中井蘆郷
		開催地	和歌山
刊行年	明治29年（1896）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	文房	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に竹
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

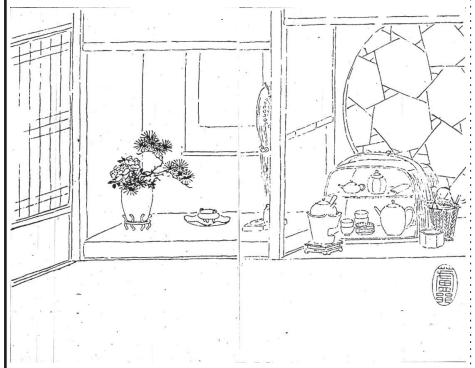


平面モデル

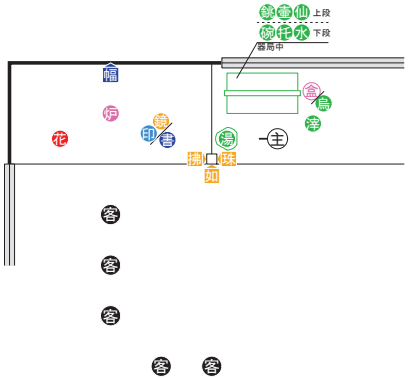


席　名	茶寮	床形式	④框床　（柱：角柱）	点　前	床隣
		床脇形式	棚なし（円窓）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

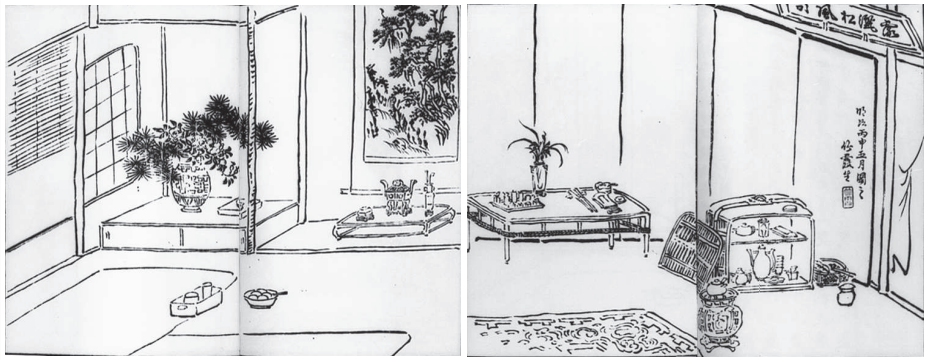


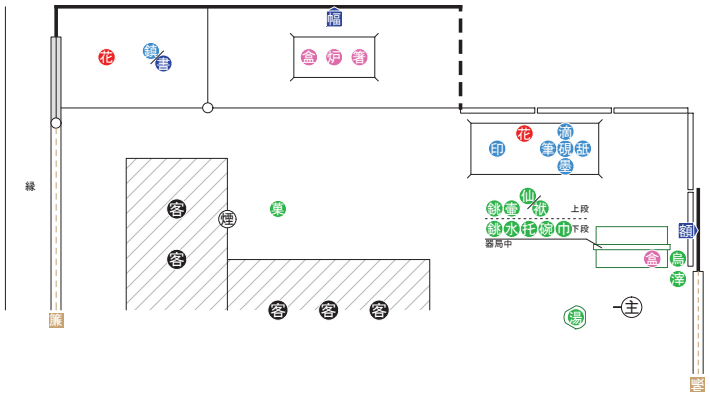
平面モデル



史料名	清楽欣賞（中邨楼茶会）	著　者	竹邨氏
		開催地	京都
刊行年	明治29年（1896）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席	床形式	⑤框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

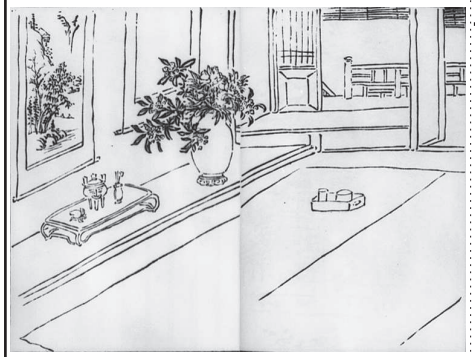




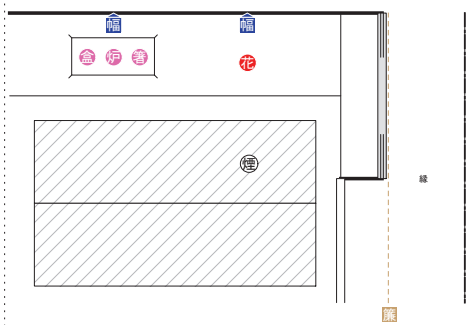
史料名	清楽欣賞（中邨楼茶会）	著　者	竹邨氏
		開催地	京都
刊行年	明治29年（1896）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席	床形式	⑧框床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	付書院		

図



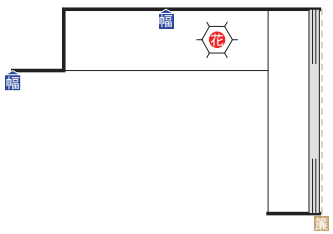
平面モデル



席　名	第二席	床形式	⑧框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	付書院		

図

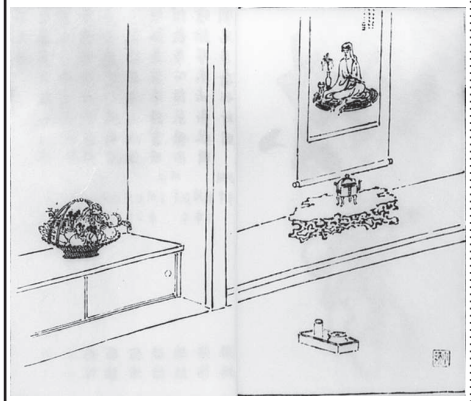
平面モデル



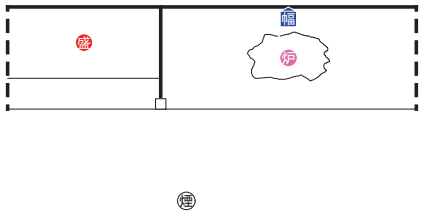
史料名	清賞余録	著　者	黒川新三郎
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席	床形式	④框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



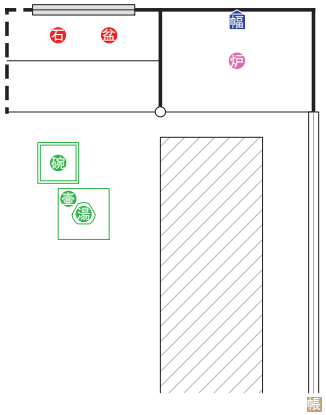
平面モデル



席　名	第四席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	日出棚	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

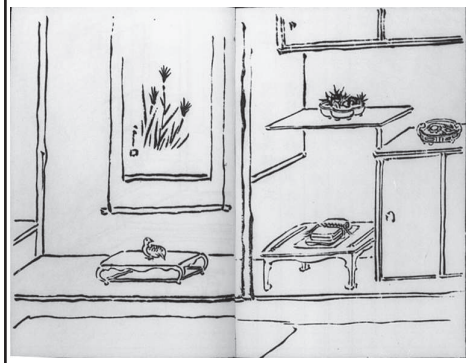
平面モデル



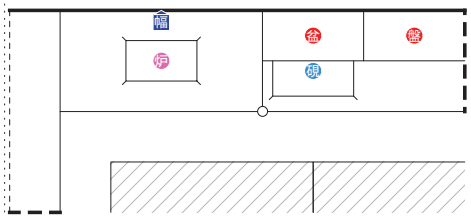
史料名	清楽欣賞（中邨楼茶会）	著　者	竹邨氏
		開催地	京都
刊行年	明治29年（1896）跋	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席　副席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	袋床	備　考	
席　種	副席	書院形式	付書院		

図

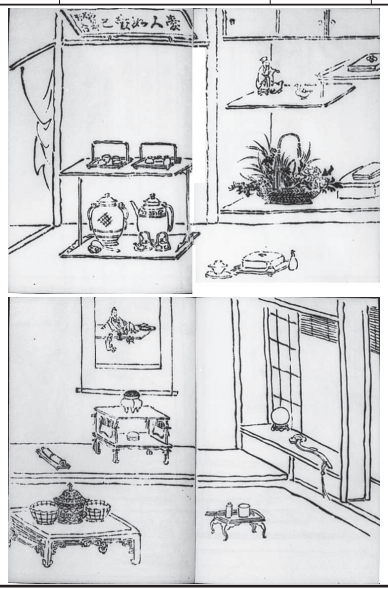


平面モデル

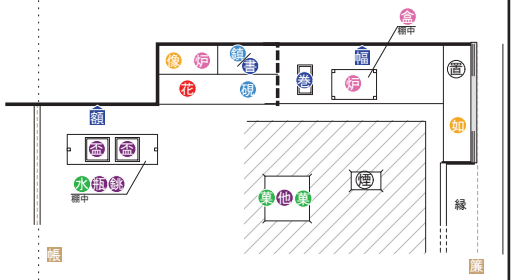


席　名	第四席	床形式	⑨框床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	付書院		

図



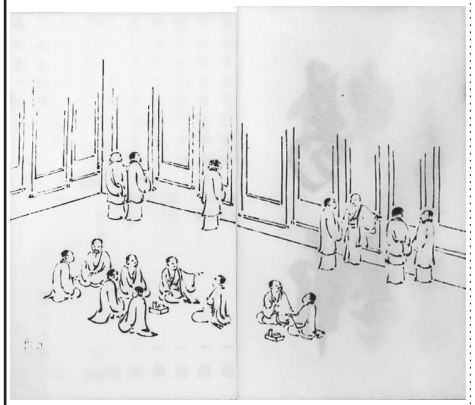
平面モデル



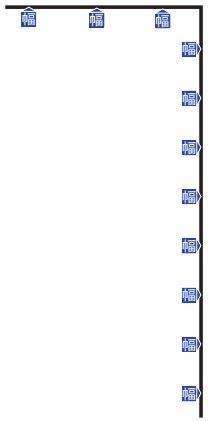
史料名	清賞余録	著　者	黒川新三郎
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第六席	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	－		

図

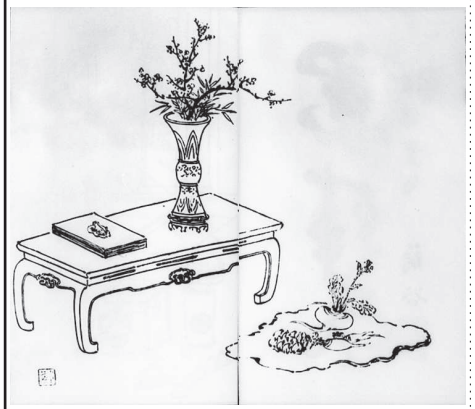


平面モデル



席　名	第九席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	－		

図



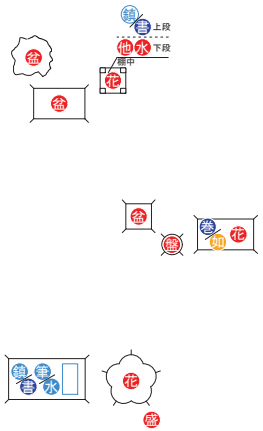
平面モデル

史料名	清賞余録	著　者	黒川新三郎
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（瓶花盆栽席）	書院形式	－		

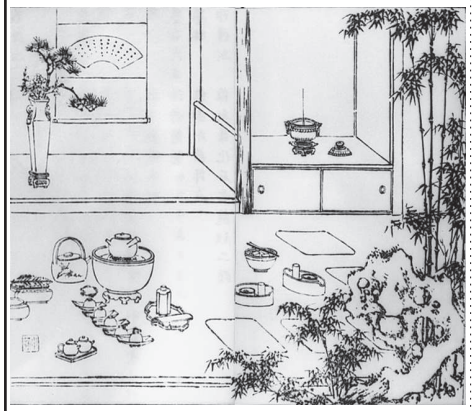
図

平面モデル

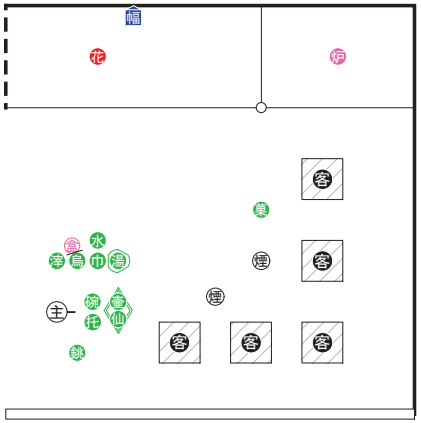


席　名	第五席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	床前下
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	外部に竹・太湖石
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



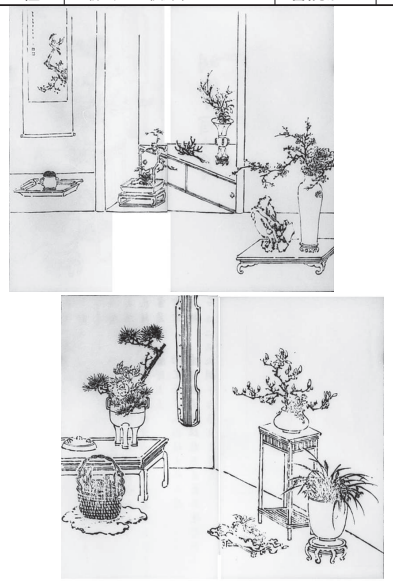
平面モデル



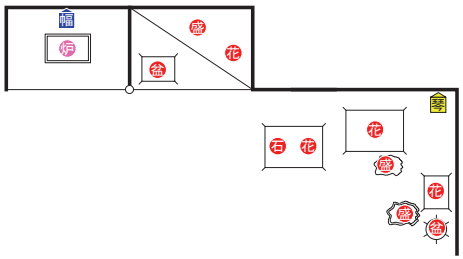
史料名	清賞余録	著　者	黒川新三郎
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十一席	床形式	⑤踏込床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	鮫棚	備　考	
席　種	（瓶花盆栽席）	書院形式	―		

図

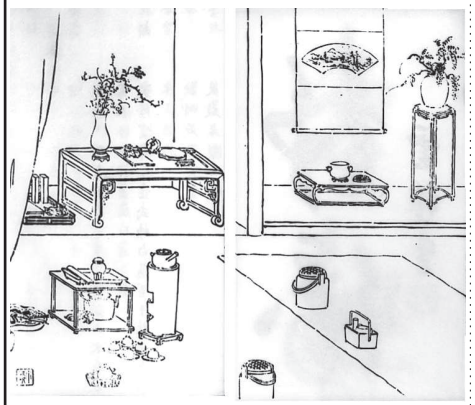


平面モデル

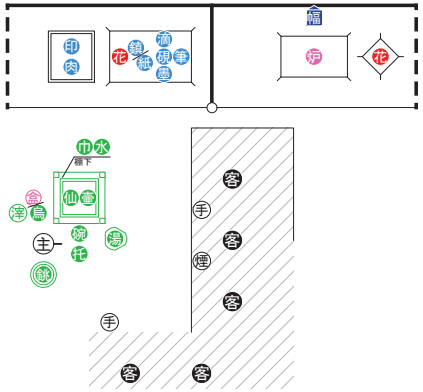


席　名	第十二席	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



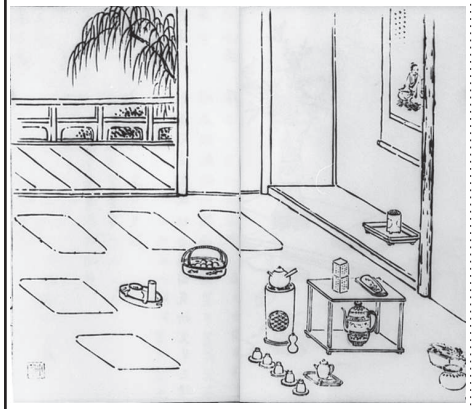
平面モデル



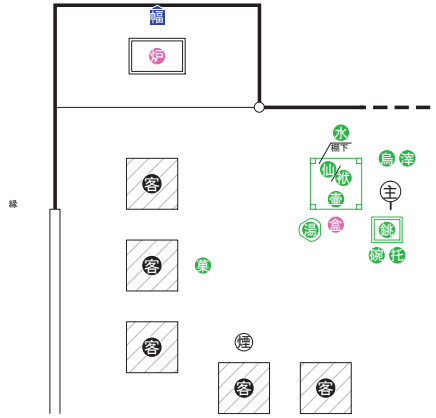
史料名	清賞余録	著　者	黒川新三郎
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第九席	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	外部に柳
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

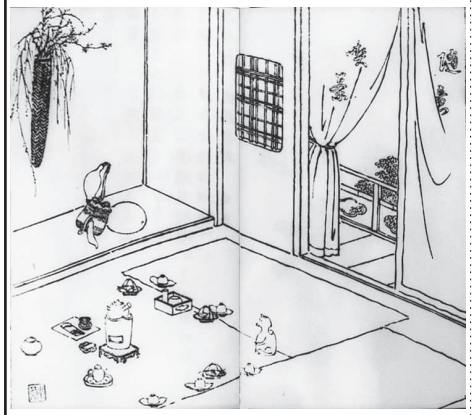


平面モデル

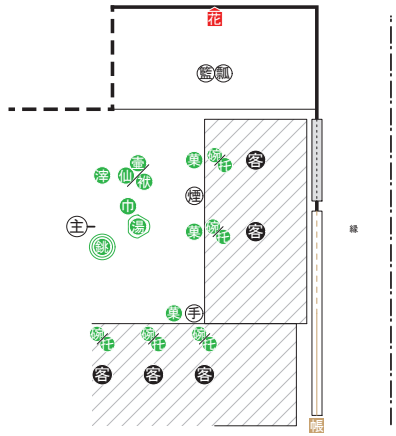


席　名	第十席	床形式	②框床　（柱：―　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	外部に樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



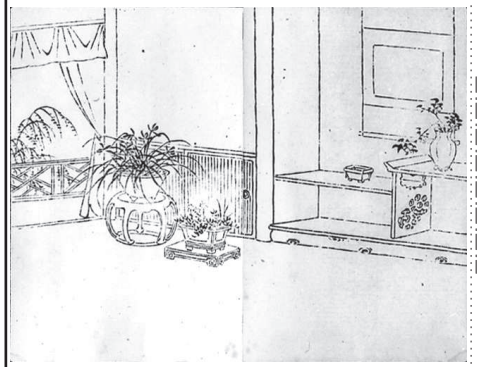
平面モデル



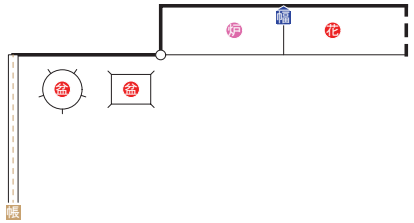
史料名	竹荘茶醼図録	著　者	水谷鶴松
		開催地	大阪
刊行年	明治32年（1899）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	―	床形式	③蹴込床に違棚（柱：　丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	外部に樹木
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



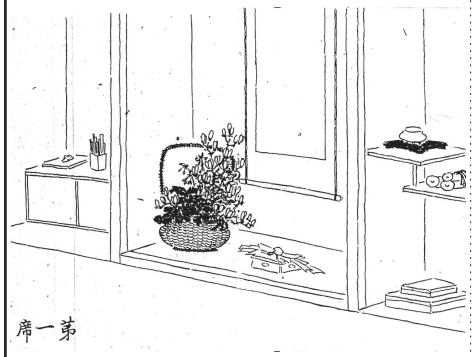
平面モデル



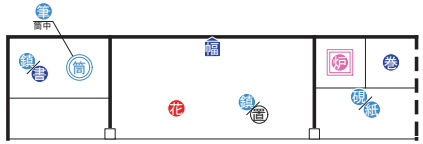
史料名	万翁華甲醼誌	著　者	市河三陽
		開催地	東京
刊行年	明治31年（1898）序	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第一席	床形式	⑦框床　（柱：　角柱　）	点　前	―
		床脇形式	地袋 ＋ 違棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

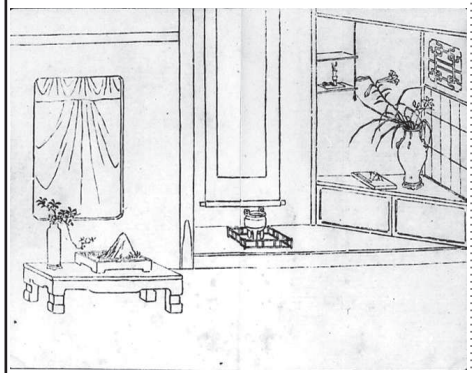


平面モデル

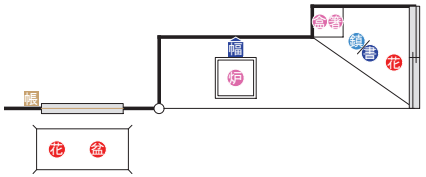


席　名	―	床形式	③框床　（柱：　丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	床の中に鮫棚	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

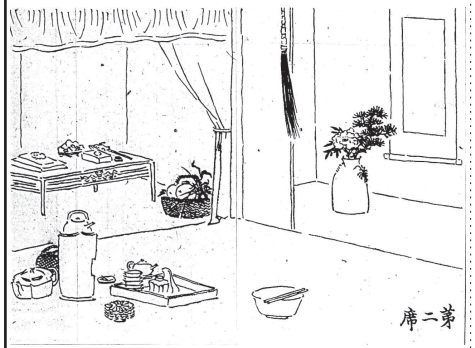


平面モデル

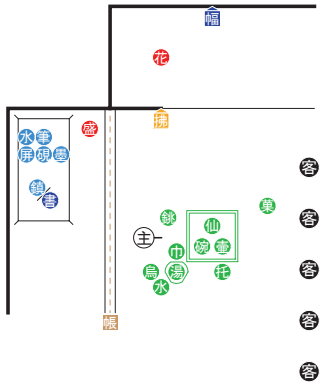


席　名	第二席　煎茶 第二副席　文房	床形式	②踏込床　（柱：　―　）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席 ＋ 副席）	書院形式	―		

図



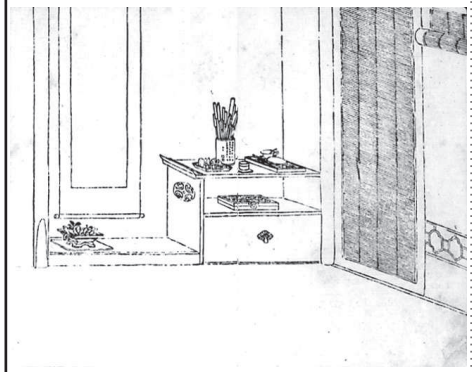
平面モデル



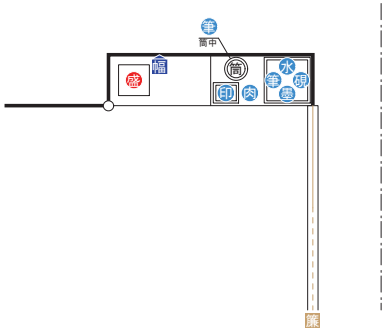
史料名	竹荘茶醼図録	著　者	水谷鶴松
		開催地	大阪
刊行年	明治32年（1899）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	―	床形式	⑤框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	書物棚	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



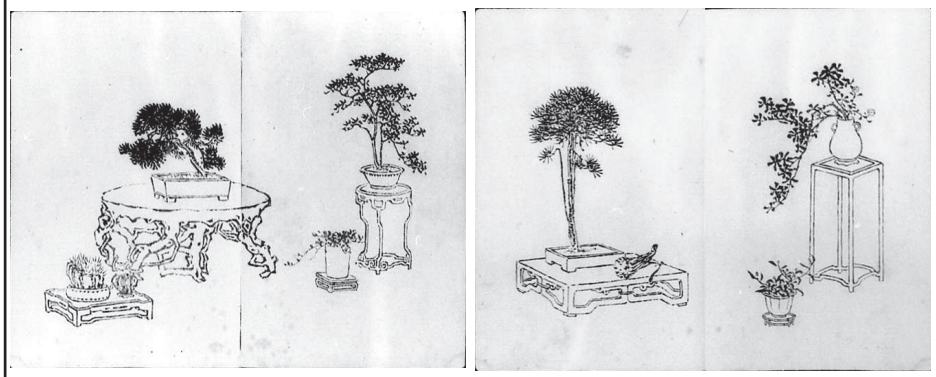
平面モデル



史料名	竹荘茶醼図録	著　者	水谷鶴松
		開催地	大阪
刊行年	明治32年（1899）	所　蔵	高取友仙窟

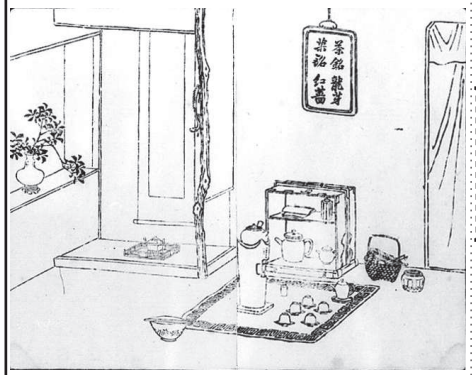
席　名	―	床形式	― （柱：― ）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

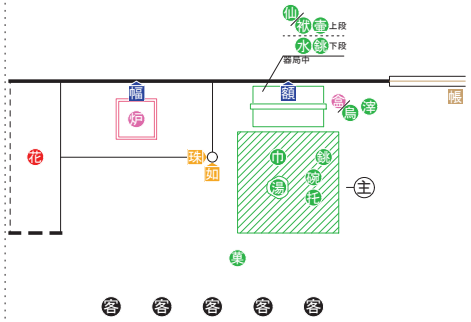


席　名	―	床形式	⑥框床　（柱：奇木）	点　前	床隣
		床脇形式	棚（脇棚）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

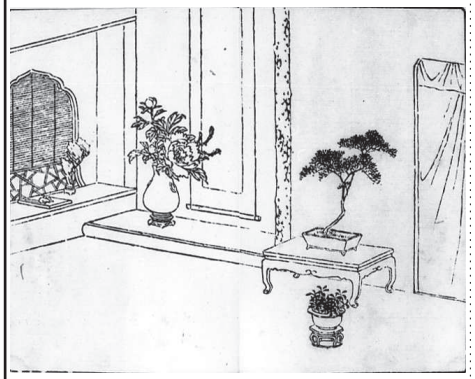


平面モデル

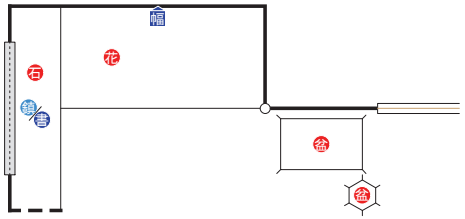


席　名	―	床形式	⑧框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	付書院		

図



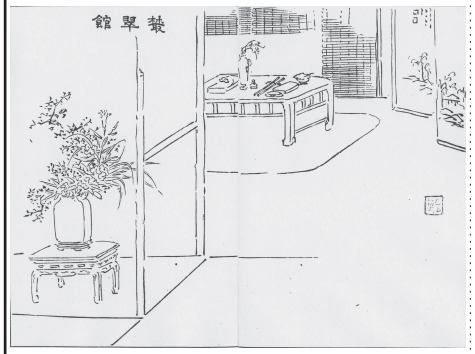
平面モデル



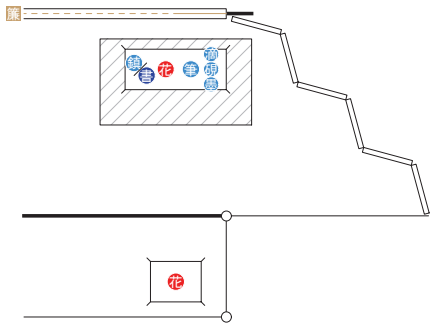
史料名	掲燈院小祥薦事会記	著　者	下郷伝平 ヵ
		開催地	長浜 ヵ
刊行年	明治32年（1899）序	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	茗筵　第一席	床形式	②踏込床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



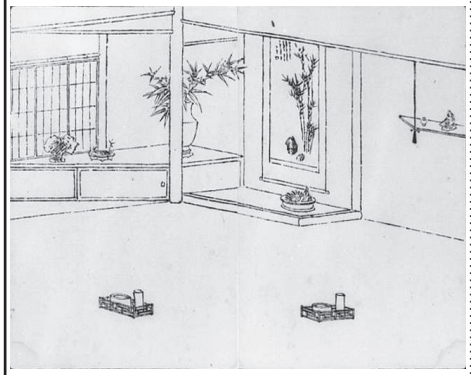
平面モデル



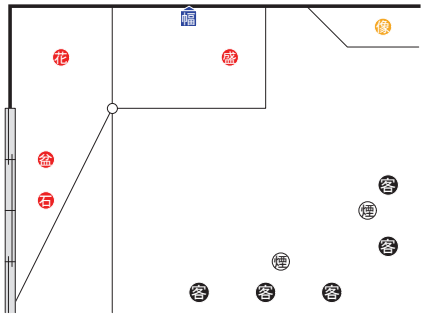
史料名	竹荘茶醼図録	著　者	水谷鶴松
		開催地	大阪
刊行年	明治32年（1899）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	―	床形式	⑨框床　（柱：丸太　）	点　前	―
		床脇形式	地袋（台形）	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	―		

図

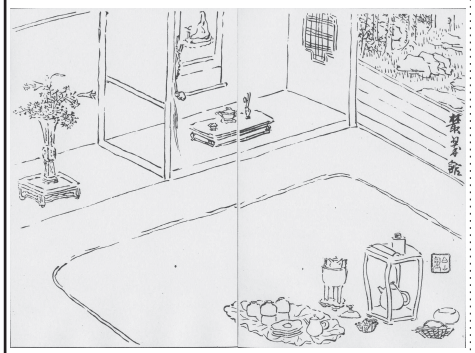


平面モデル

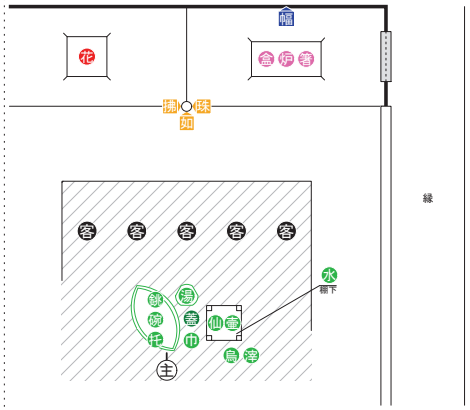


席　名	茗筵　第一席	床形式	④框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚なし	備　考	庭に石・樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



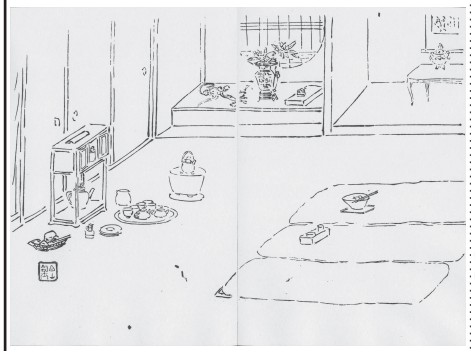
平面モデル



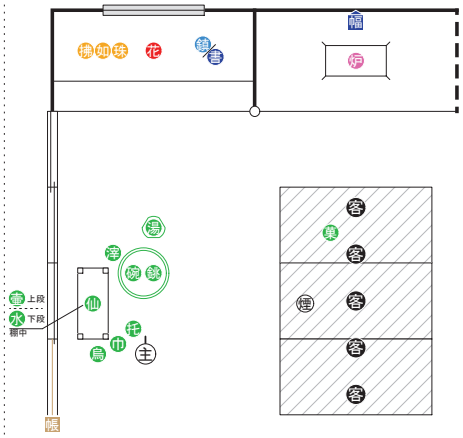
史料名	掲燈院小祥薦事会記	著　者	下郷伝平 ヵ
		開催地	長浜 ヵ
刊行年	明治32年（1899）序	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第四席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	日出棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

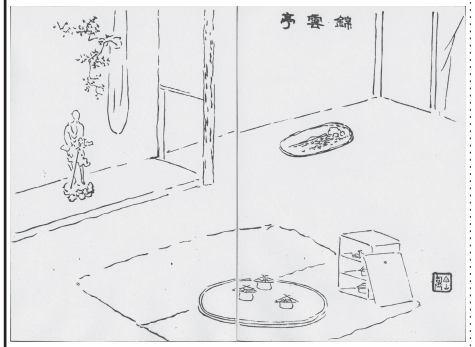


平面モデル

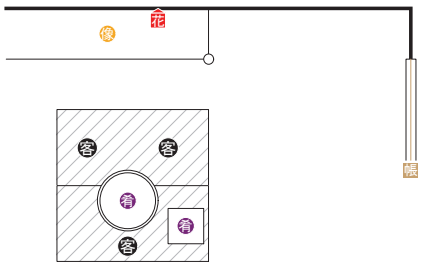


席　名	錦雲亭蕎麦会	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（酒飯席）	書院形式	―		

図



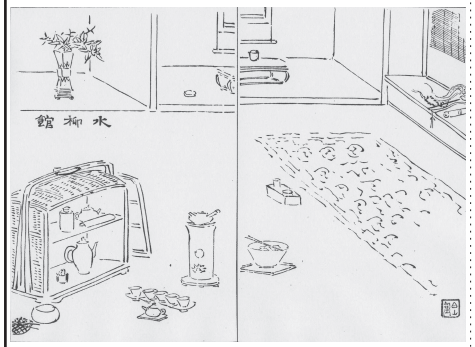
平面モデル



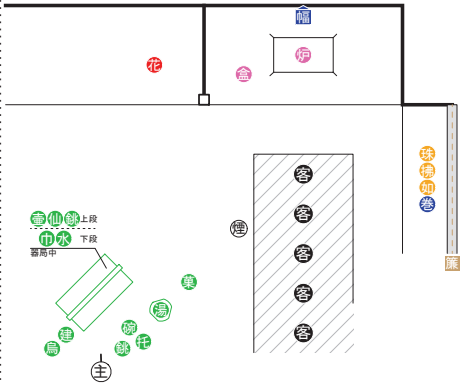
史料名	掲燈院小祥薦事会記	著　者	下郷伝平 ヵ
		開催地	長浜 ヵ
刊行年	明治32年（1899）序	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	茗筵　第二席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚なし	備　考	―
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



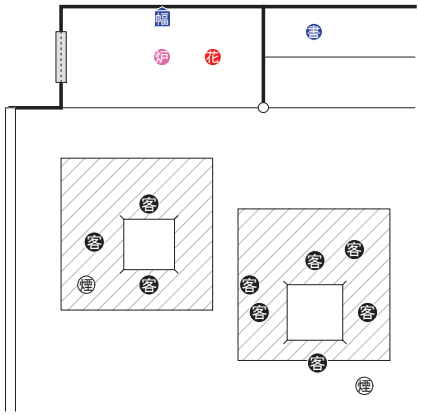
平面モデル



席　名	―	床形式	④踏込床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	文道棚	備　考	庭に手水鉢・芭蕉
席　種	（囲碁席）	書院形式	―		

図

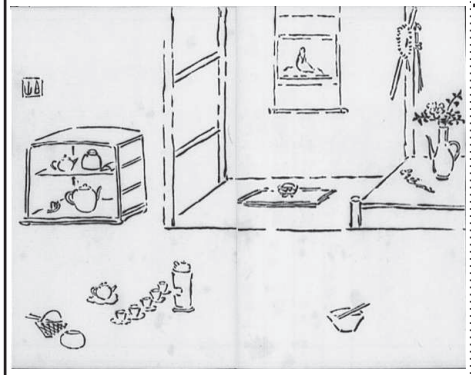
平面モデル



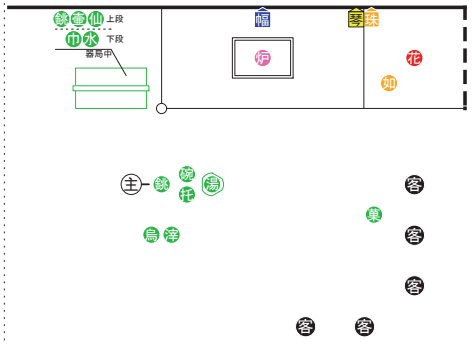
史料名	林華園薦事図録	著　者	林新助
		開催地	京都
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	茶室	床形式	⑤琵琶床（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図

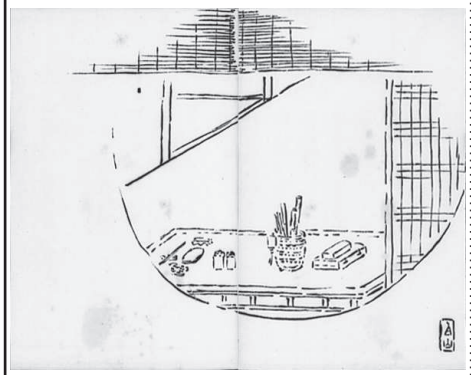


平面モデル

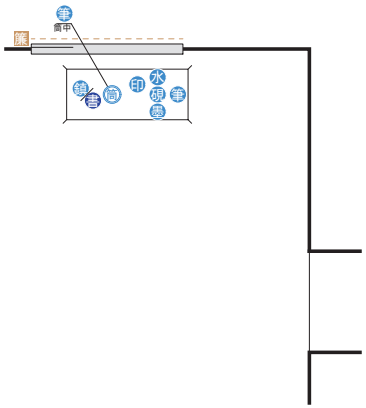


席　名	茶室	床形式	―（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



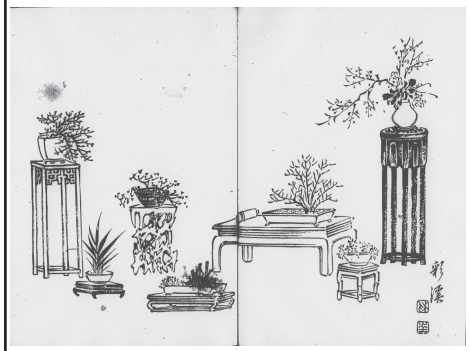
平面モデル



史料名	蒹葭堂誌	著　者	鹿田静七
		開催地	大阪
刊行年	明治34年（1901）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第三席　瓶花盆栽	床形式	―（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

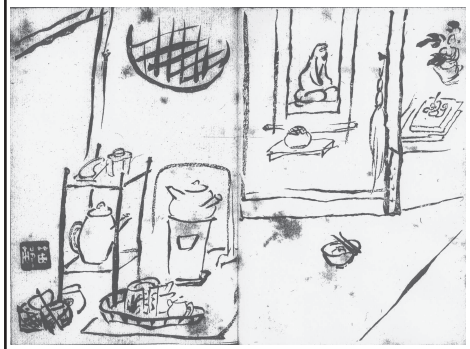
図



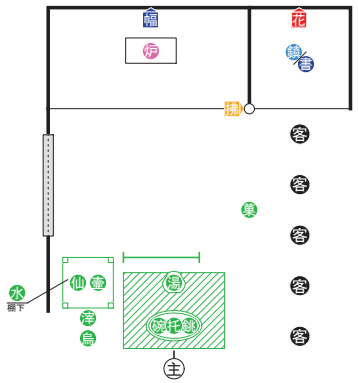
平面モデル

席　名	第四席　茶寮	床形式	④框床（柱：丸柱）	点　前	床前下
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



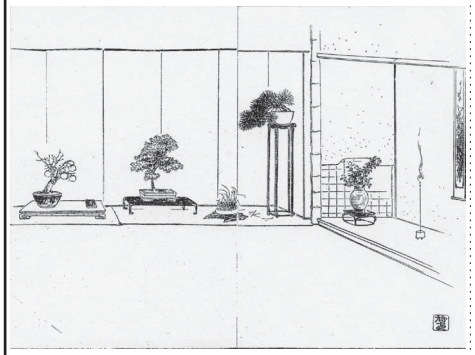
平面モデル



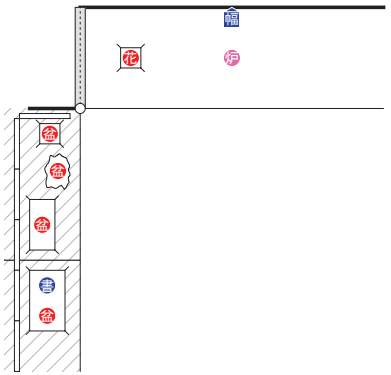
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	山崎喜市	床形式	②蹴込床　（柱：竹　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

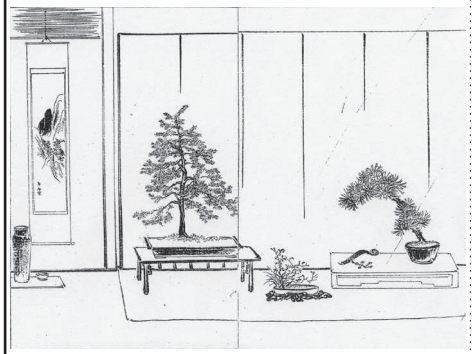


平面モデル

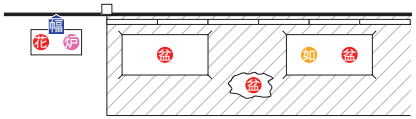


席　名	加藤金之助	床形式	①織部床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



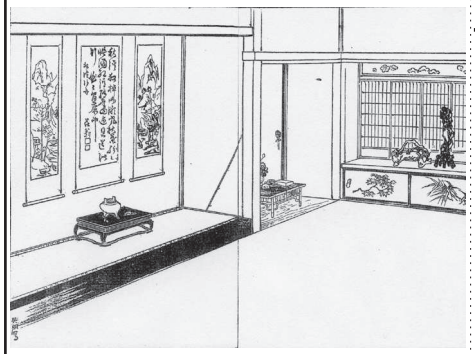
平面モデル



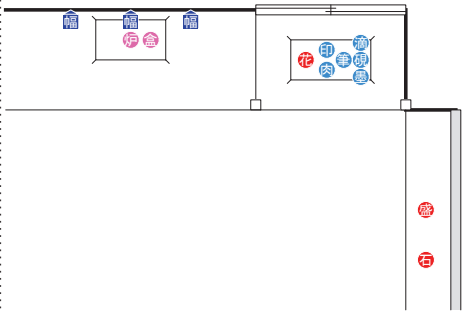
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	大畑多左衛門	床形式	⑨框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	付書院		

図

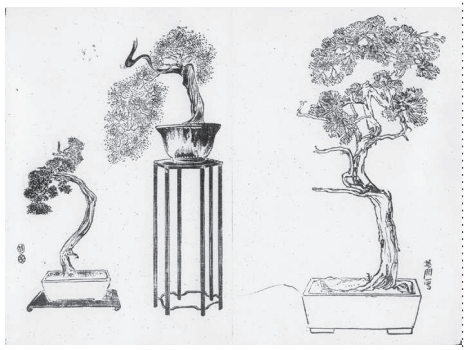


平面モデル



席　名	大畑多左衛門	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

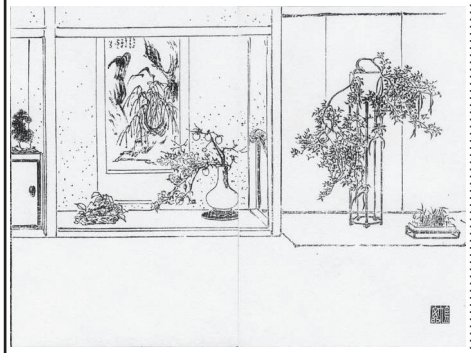


平面モデル

史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	清大園	床形式	⑤框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

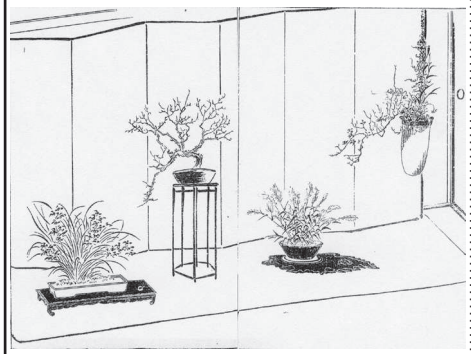
図



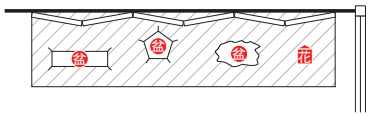
平面モデル

席　名	千樹園	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



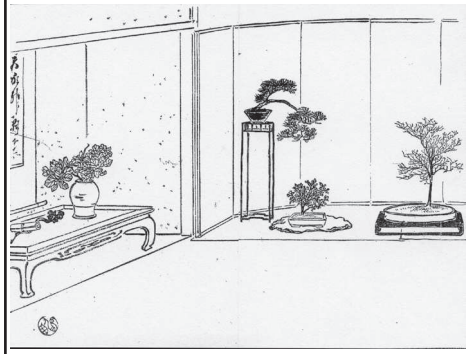
平面モデル



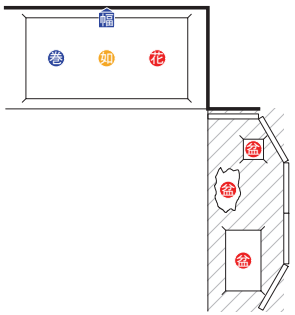
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	山本清次郎	床形式	②踏込床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

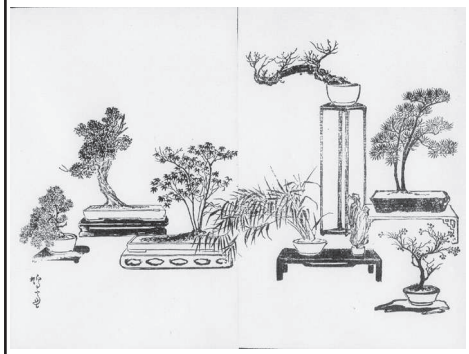


平面モデル



席　名	巣鴨連	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

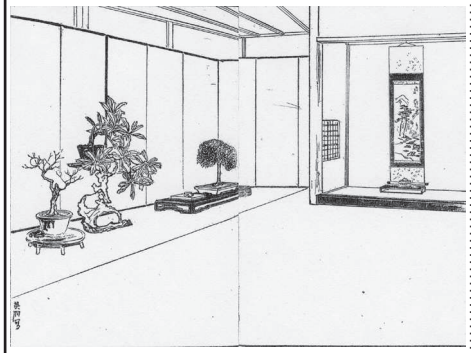


平面モデル

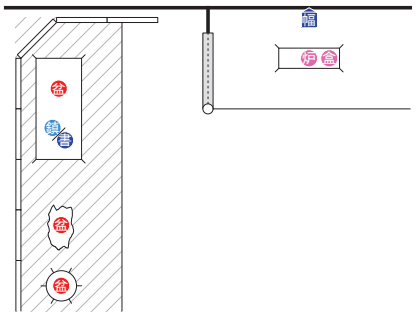
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	荻原彌吉	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

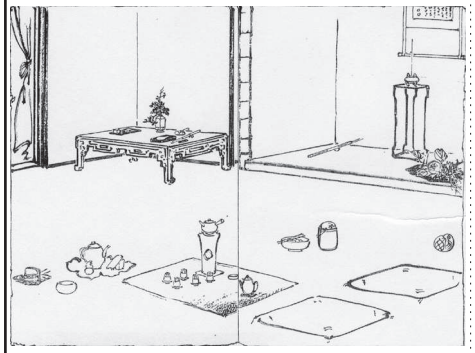


平面モデル

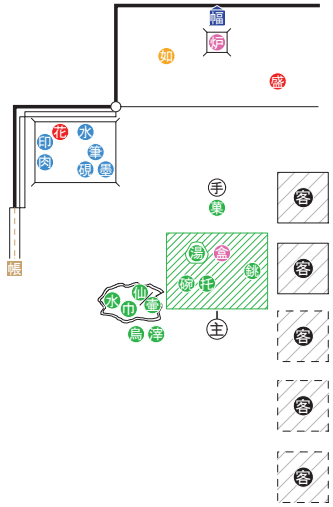


席　名	田宮楓溪　茗筵	床形式	②框床　（柱：竹）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

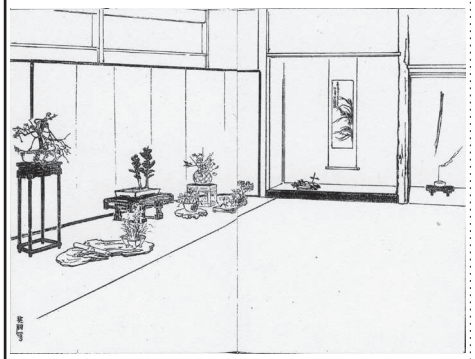


平面モデル

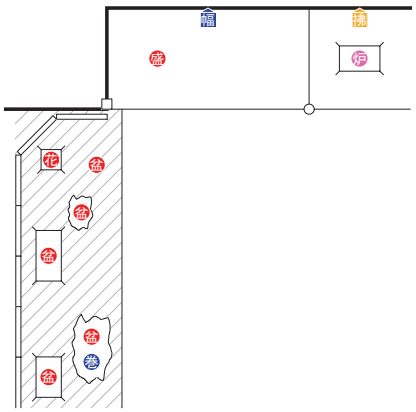


席　名	渡邉儀三郎	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

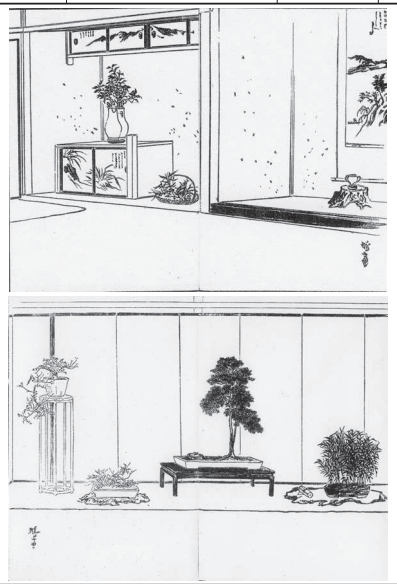


平面モデル

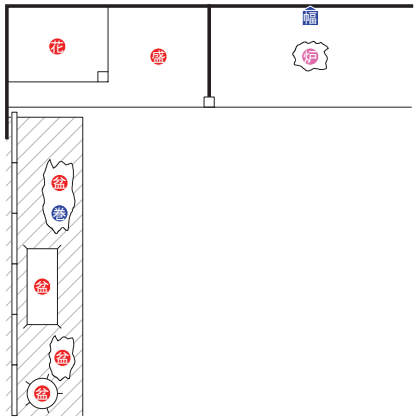


席　名	加藤金之助	床形式	④框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



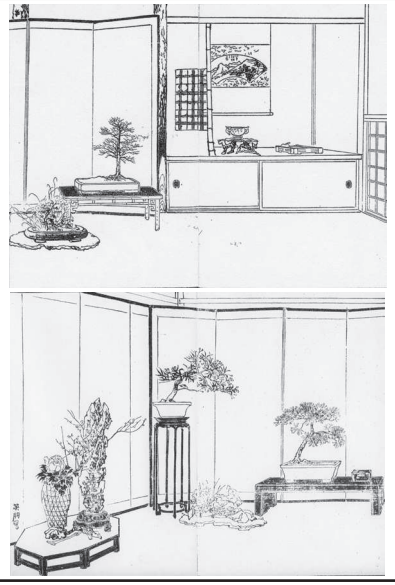
平面モデル



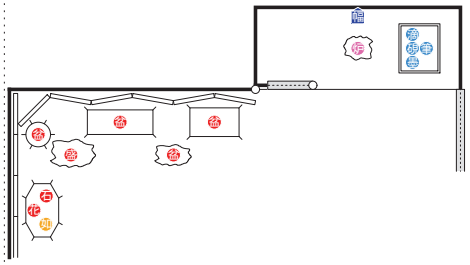
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	義昌堂木曽庄七	床形式	③框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

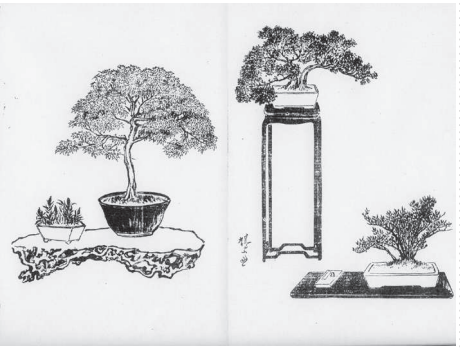


平面モデル



席　名	苔香・百草・香樹三園	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



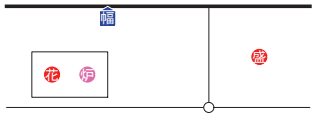
平面モデル

史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	大畑多左衛門	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

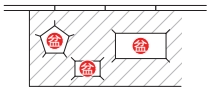
平面モデル



席　名	大畑多左衛門	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

平面モデル

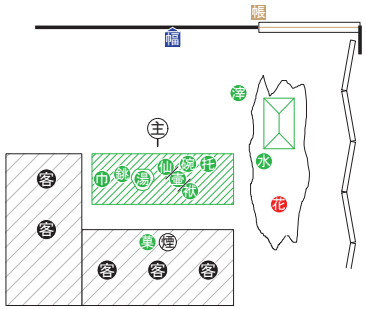


史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	五十嵐成竹堂	床形式	①壁床　（柱：－　）	点　前	床前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

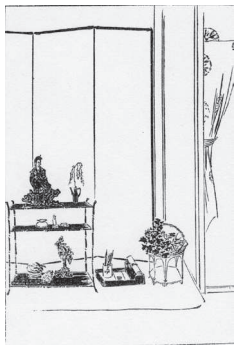
図

平面モデル

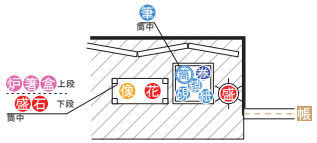


席　名	五十嵐成竹堂	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図



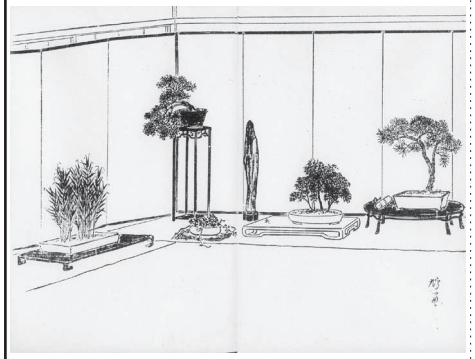
平面モデル



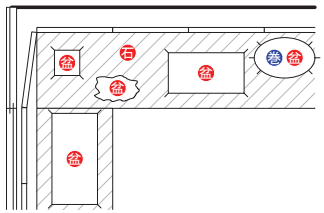
史料名	盆栽瓶花聚楽会図録	著　者	木曾庄七
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	西花園・九華堂	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	－		

図

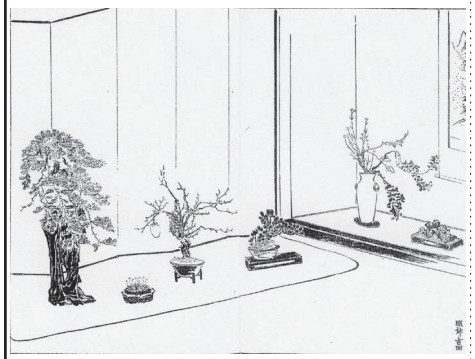


平面モデル

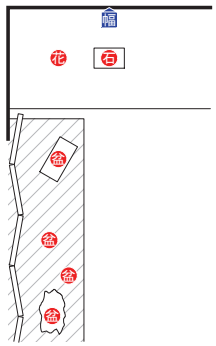


席　名	清大園	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	－		

図



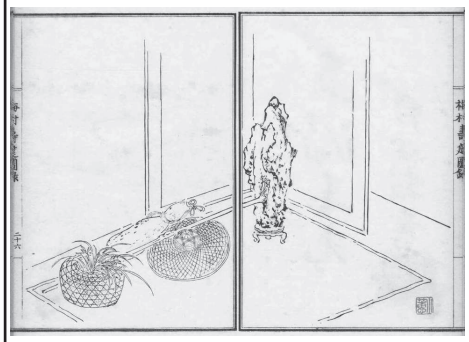
平面モデル



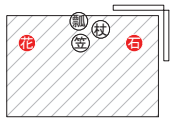
史料名	梅村寿筵図録	著　者	瓜生寅
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　貴客 迎賓本席　前廳	床形式	―　　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

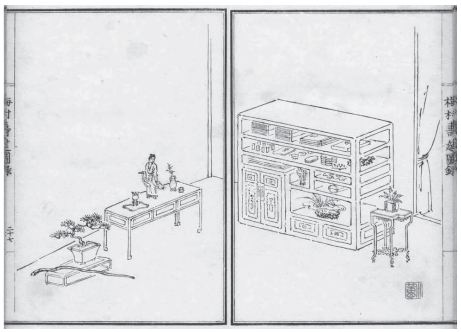


平面モデル

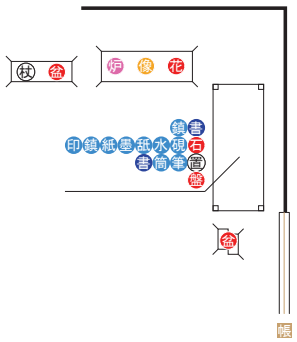


席　名	第三席　貴客 迎賓本席　正堂副室	床形式	―　　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図



平面モデル

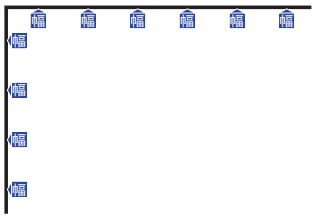


史料名	梅村寿筵図録	著　者	瓜生寅
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第一席　雅客 書畫展観及瓶花盆景席	床形式	不明　　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	目録に床飾りの記載あり
席　種	書画展観席	書院形式	―		

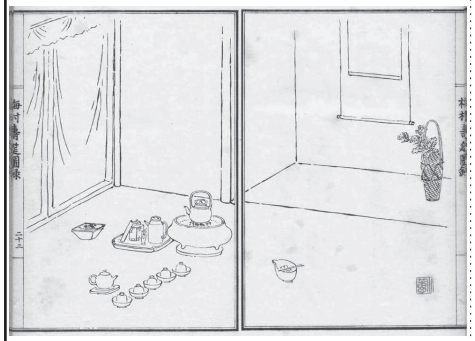
図

平面モデル

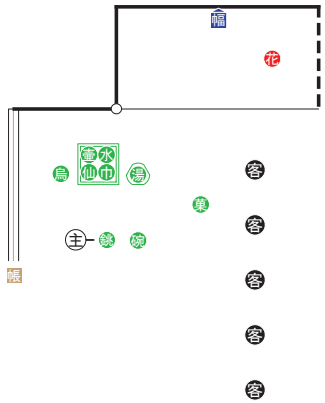


席　名	第二席　野客 臨時煎茶席	床形式	②踏込床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



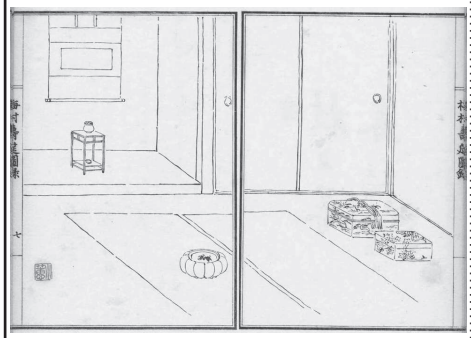
平面モデル



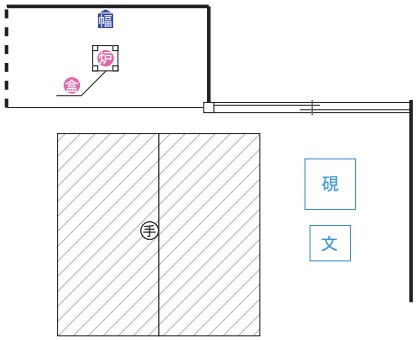
史料名	梅村寿筵図録	著　者	瓜生寅
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第五席　素客　煎茶副席	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	
		床脇形式	—	備　考	
席　種	（副席）	書院形式	—		

図



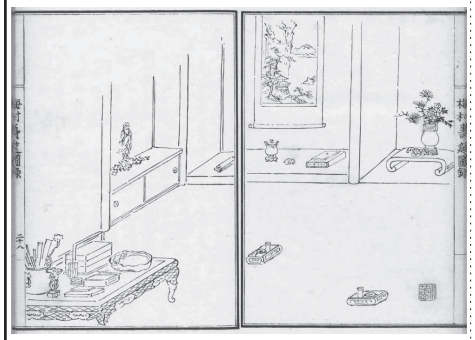
平面モデル



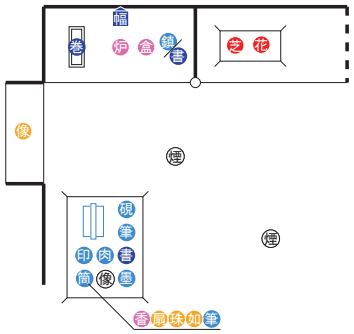
史料名	梅村寿筵図録	著　者	瓜生寅
		開催地	東京
刊行年	明治36年（1903）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　貴客 迎賓本席　正堂	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	
		床脇形式	踏込	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	付書院		

図

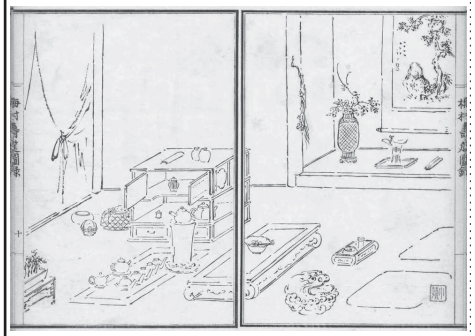


平面モデル

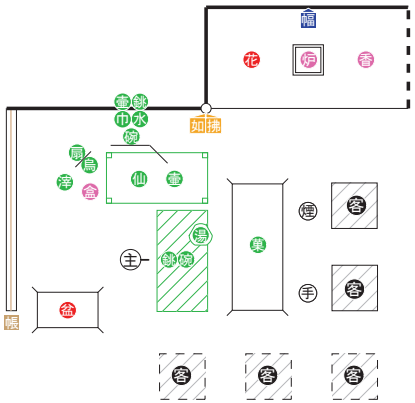


席　名	第六席　清客　煎茶席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	—	備　考	
席　種	茶席	書院形式	—		

図

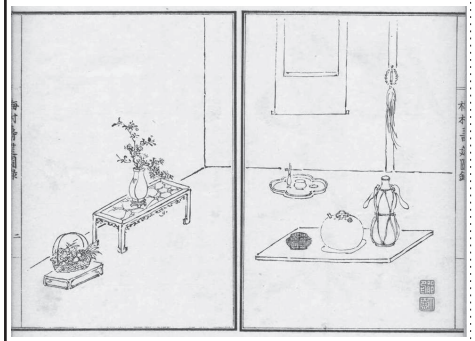


平面モデル

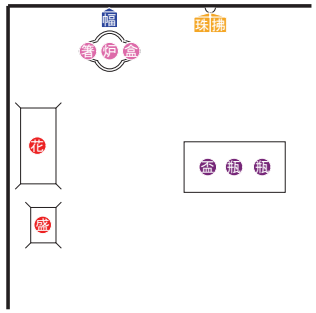


席　名	第四席　壽客　粛客席	床形式	①壁床　（柱：—）	点　前	
		床脇形式	—	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	—		

図



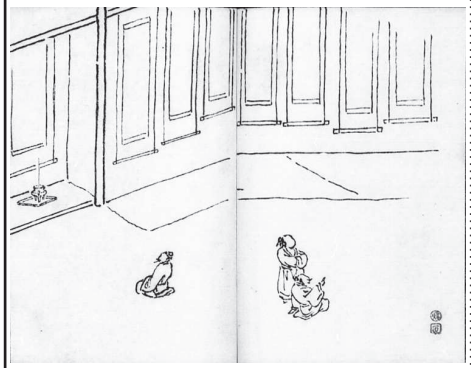
平面モデル



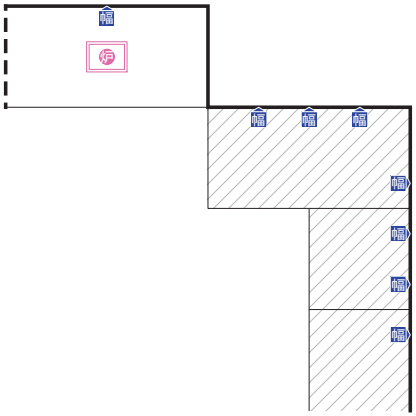
史料名	東山茶会図録（東巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第三席　書画展観	床形式	②框床　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	－		

図

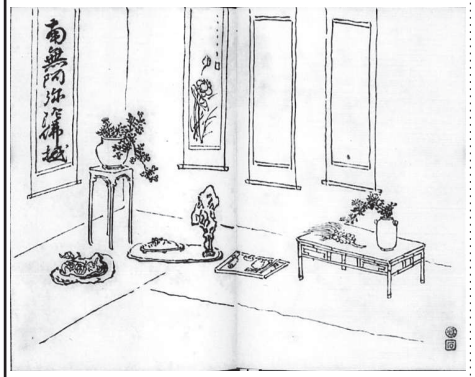


平面モデル

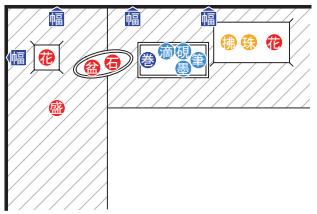


席　名	第四席　文房	床形式	⑪単室　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（文房展観席）	書院形式	－		

図



平面モデル



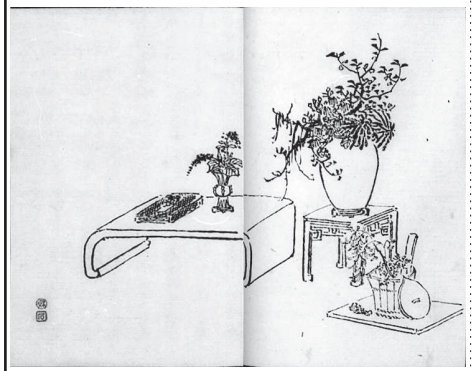
史料名	東山茶会図録（東巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第二席　瓶花陳列	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	－		

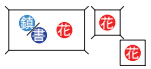
図

席　名	第二席　瓶花陳列	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	－		

図



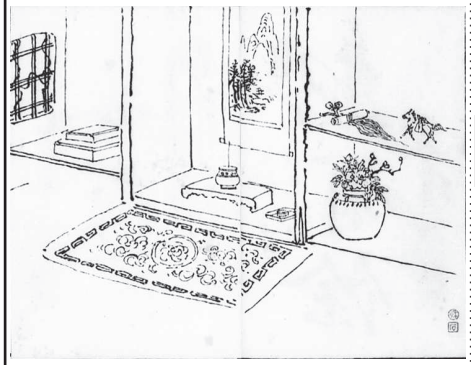
平面モデル



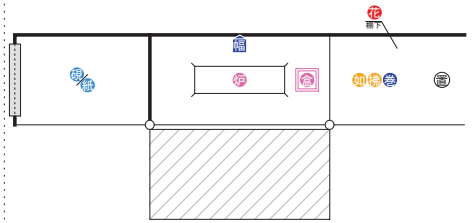
史料名	東山茶会図録（山巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第六席 広間	床形式	⑦框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	通棚	備　考	
席　種	（書画＋文房＋盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

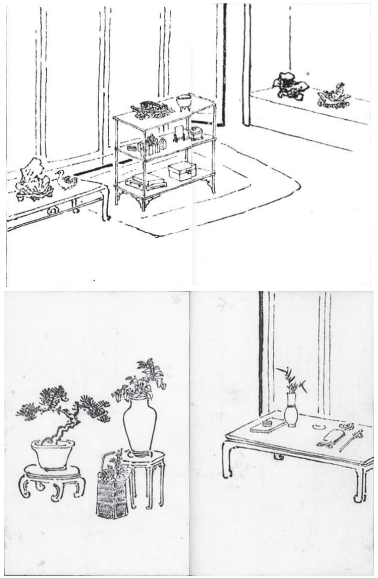


平面モデル

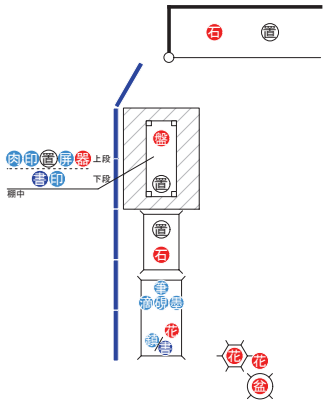


席　名	第六席 広間	床形式	―	（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	棚		備　考	前図と同じ席
席　種	（書画＋文房＋盆栽陳列席）	書院形式	―			

図



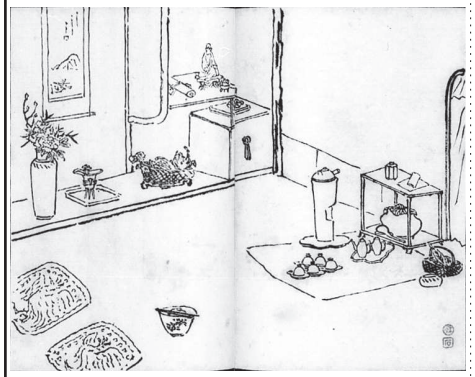
平面モデル



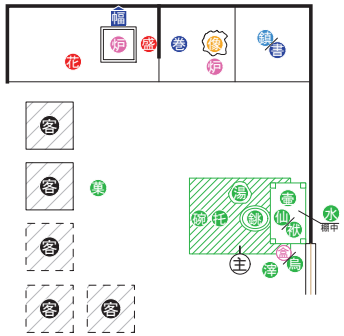
史料名	東山茶会図録（上：東巻　下：山巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第四席　茶室	床形式	④框床　（柱：―）	点　前	脇前下
		床脇形式	地袋＋棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

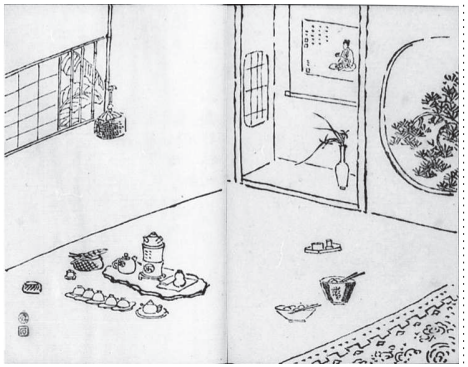


平面モデル

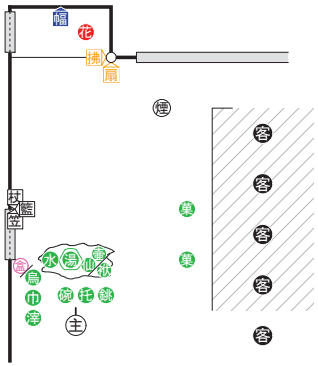


席　名	第五席　茶室	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	外部に芭蕉・松
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



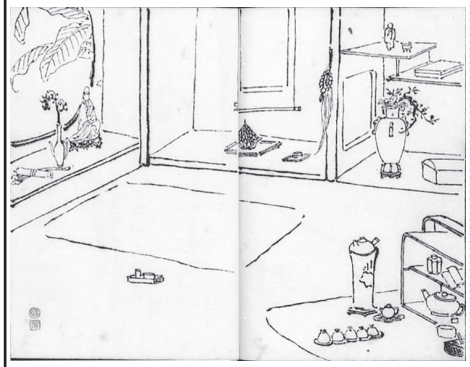
平面モデル



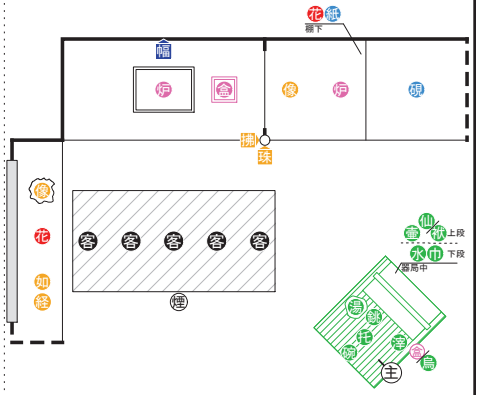
史料名	東山茶会図録（山巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第六席　本席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	違棚	備　考	外部に芭蕉
席　種	（茶席）	書院形式	付書院（円窓）		

図

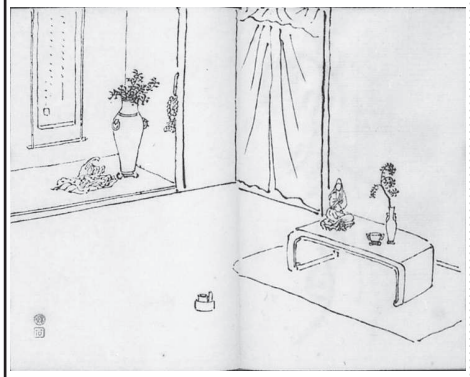


平面モデル

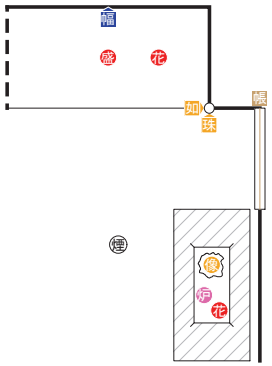


席　名	第七席　前席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



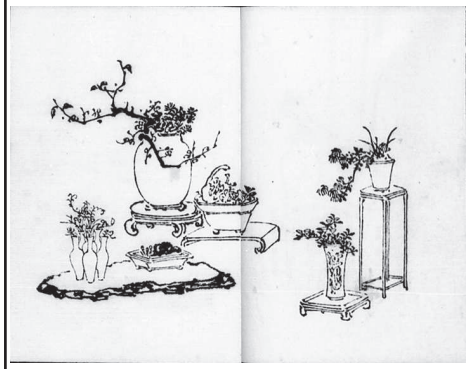
平面モデル



史料名	東山茶会図録	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第六席　広間	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画＋文房＋盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

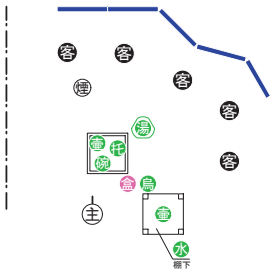


平面モデル

席　名	第六席　前席	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	本勝手
		床脇形式	―	備　考	外部に棕櫚・階下の屋根
席　種	前席	書院形式	―		

図

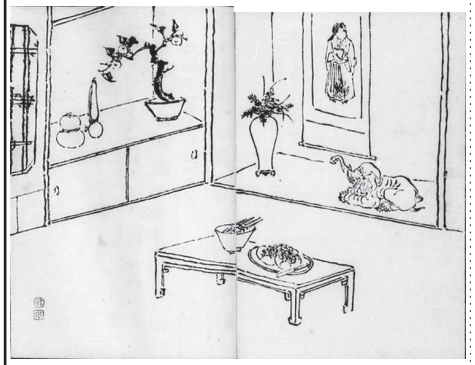
平面モデル



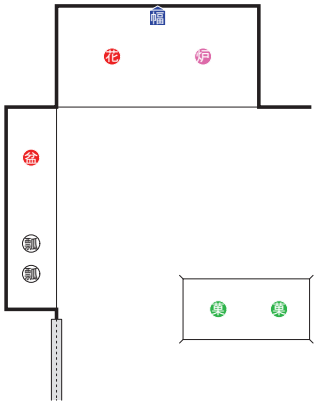
史料名	東山茶会図録（上:山巻　下:茶巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第九席　本席	床形式	⑨踏込床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	不明	備　考	目録に床脇の陳列品の記載あり
席　種		書院形式	付書院		

図

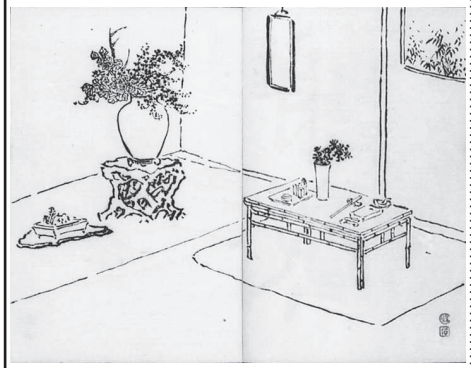


平面モデル

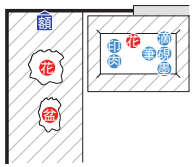


席　名	第十席　前席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	次図と同じ部屋の別角度
席　種	前席	書院形式	―		

図



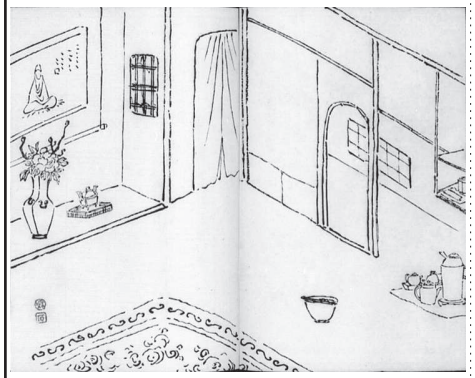
平面モデル



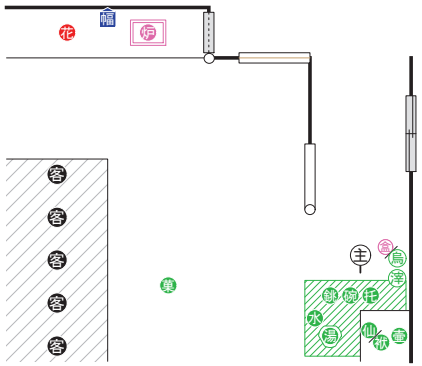
史料名	東山茶会図録（山巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第七席　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	逆勝手
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

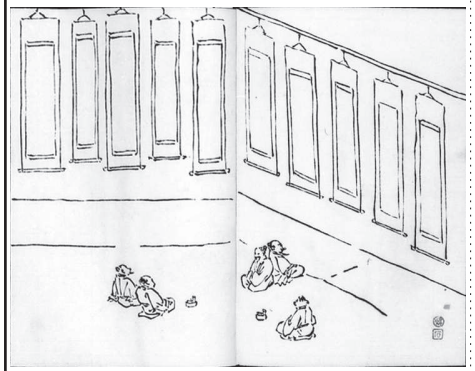


平面モデル

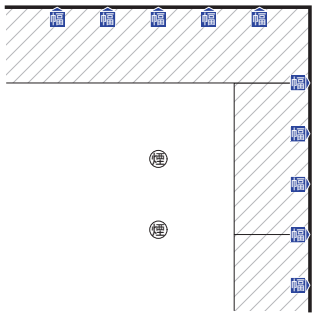


席　名	第九席　前席	床形式	不明　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	目録に床飾りの記載あり
席　種	前席	書院形式	―		

図



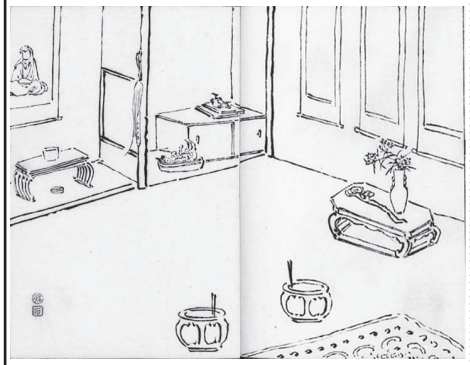
平面モデル



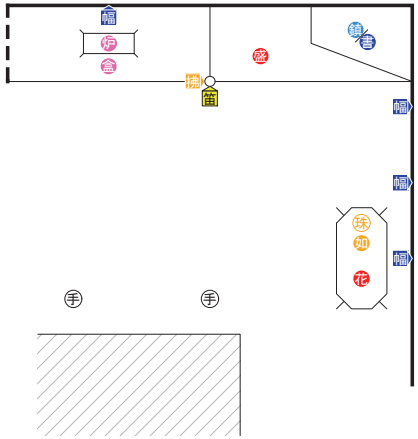
史料名	東山茶会図録（茶巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十二席　前席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	鮫棚	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



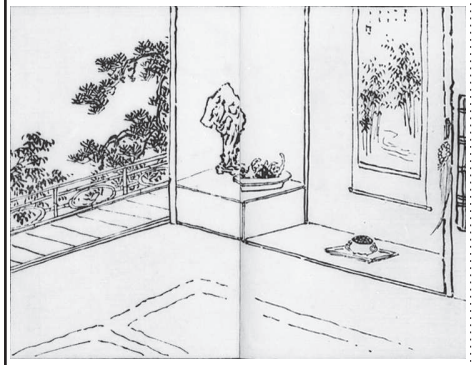
平面モデル



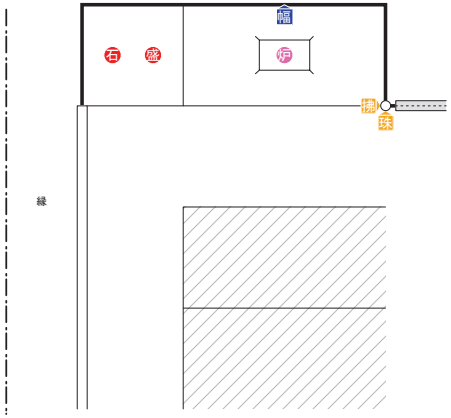
史料名	東山茶会図録（茶巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十席　前席	床形式	⑤琵琶床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に松 前図と同じ部屋の別角度
席　種	前席	書院形式	―		

図

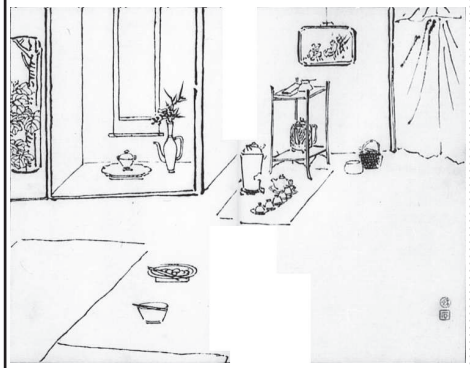


平面モデル

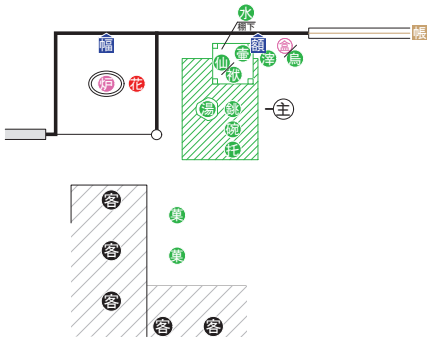


席　名	第十二席　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	外部に樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

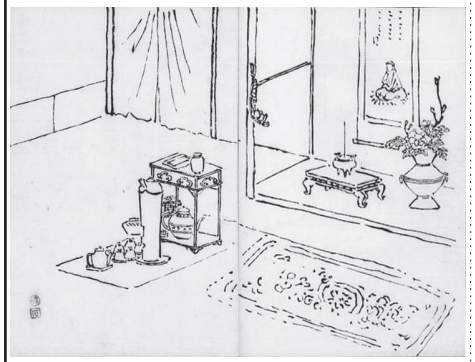


平面モデル

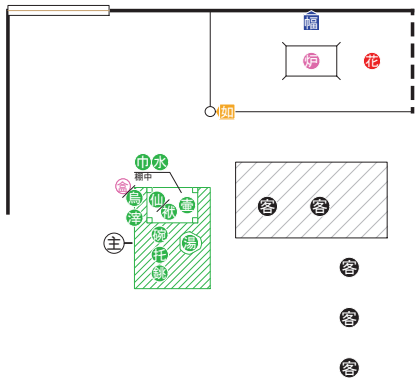


席　名	第十席　本席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



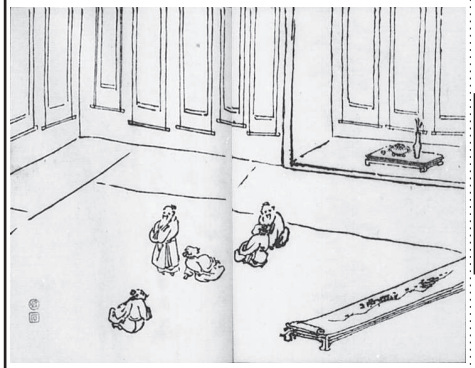
平面モデル



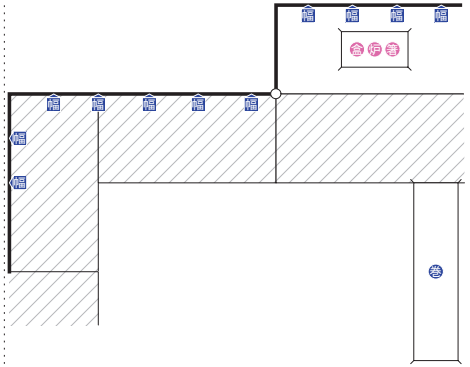
史料名	東山茶会図録（上:茶巻　下:会巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十四席　書画展観	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

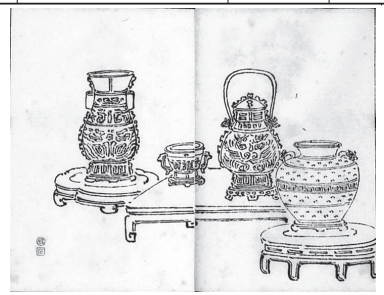


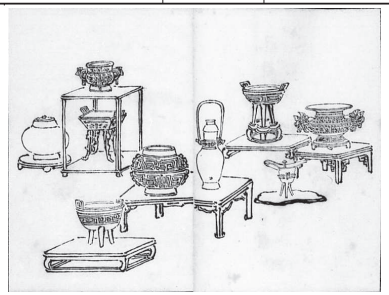
平面モデル

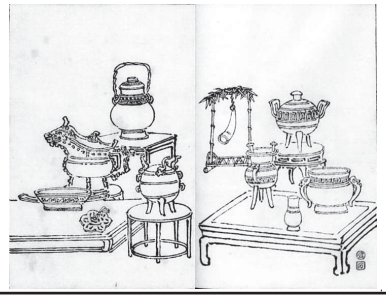


席　名	第十五席　古銅器陳列	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（銅器陳列席）	書院形式	―		

図



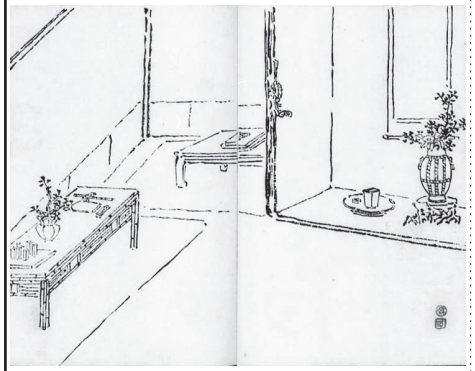




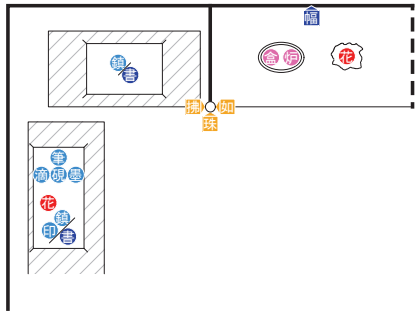
史料名	東山茶会図録（茶巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十三席　前席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図

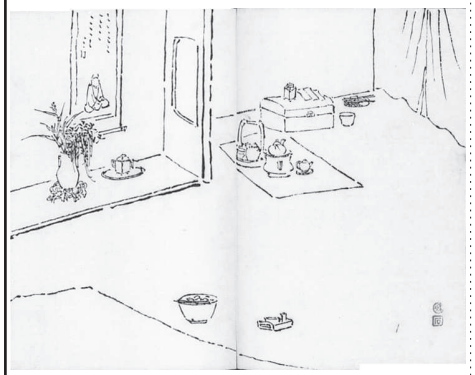


平面モデル

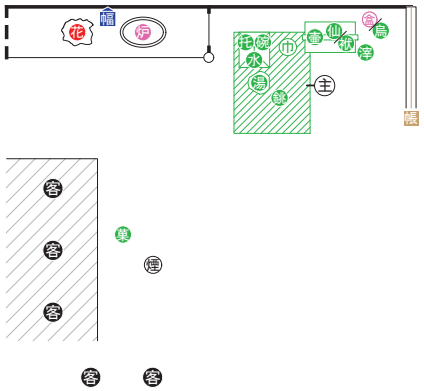


席　名	第十三席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



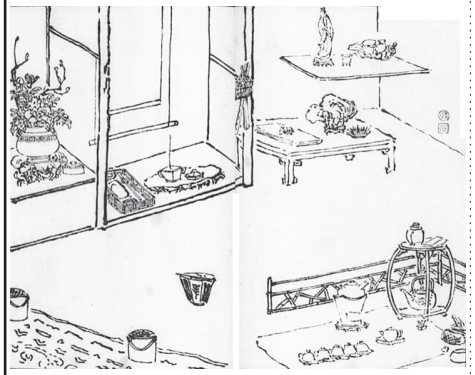
平面モデル



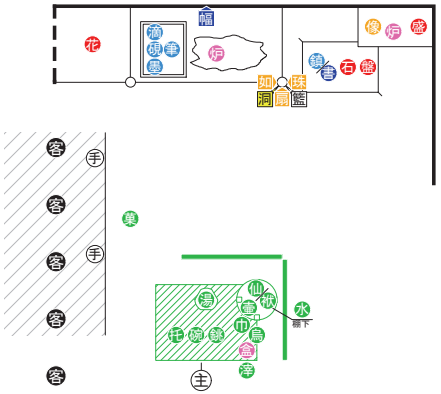
史料名	東山茶会図録（会巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十八席　茶室	床形式	⑦框床　（柱：丸柱）	点　前	床前下
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

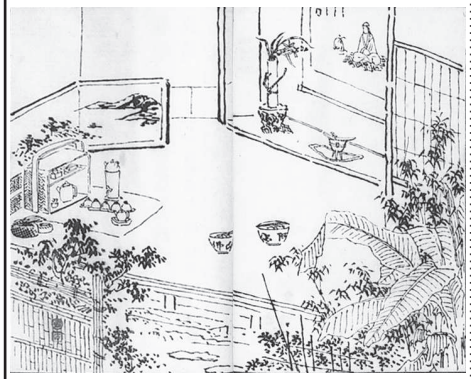


平面モデル

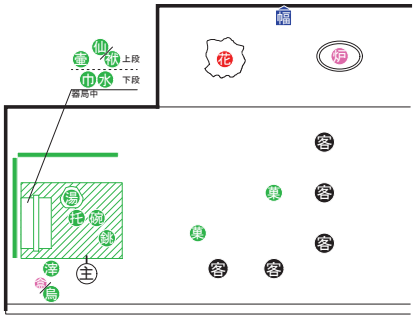


席　名	第十九席　茶室	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	庭に芭蕉・竹・樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

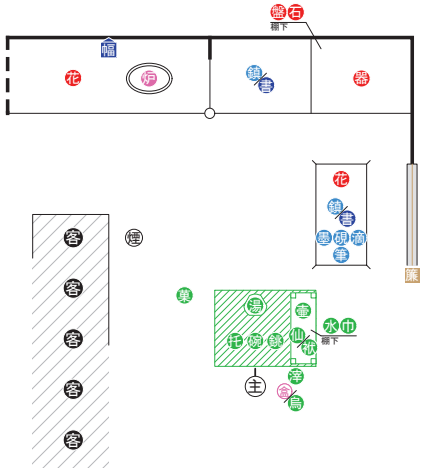


史料名	東山茶会図録（会巻）	著　者	岩田嘉兵衛
		開催地	京都
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	名古屋市鶴舞中央図書館

席　名	第十六席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

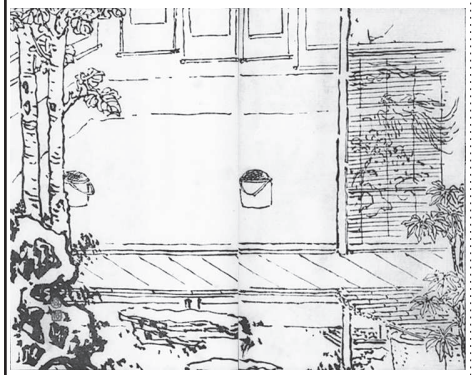
図

平面モデル

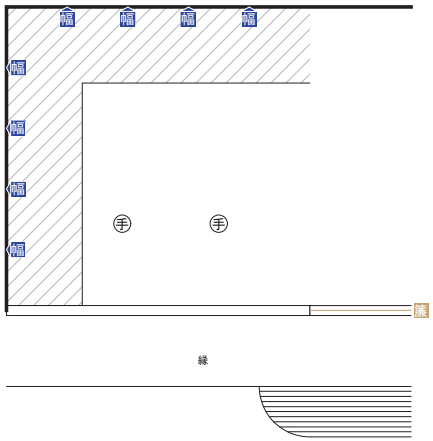


席　名	第十七席　明清書画展観	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に太湖石・手水鉢・樹木
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



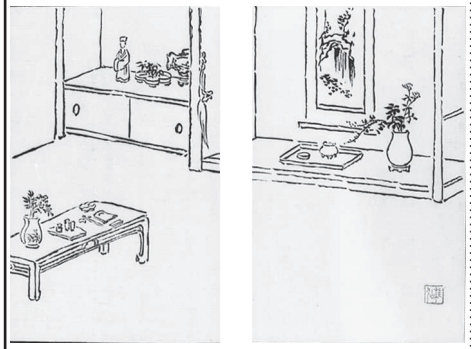
平面モデル



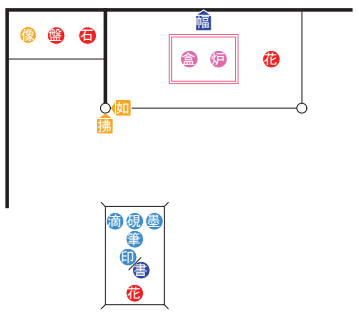
史料名	山水清遊会	著　者	松原天簫
		開催地	不明
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　待合	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（待合席）	書院形式	―		

図

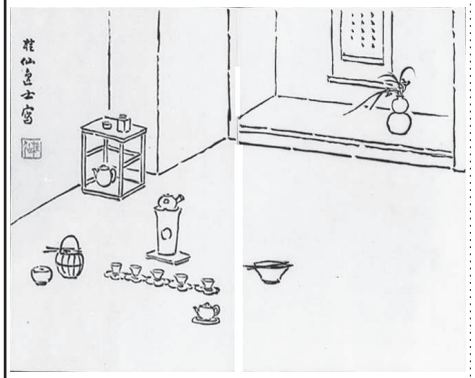


平面モデル

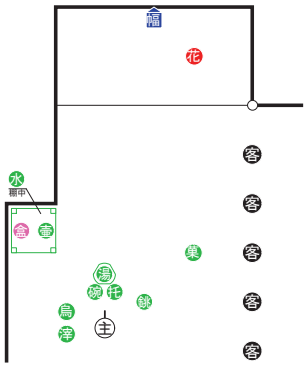


席　名	第四席　茶筵	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	床前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



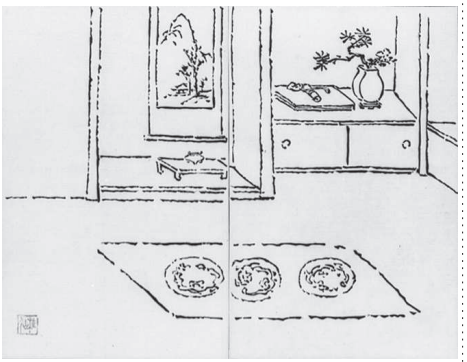
平面モデル



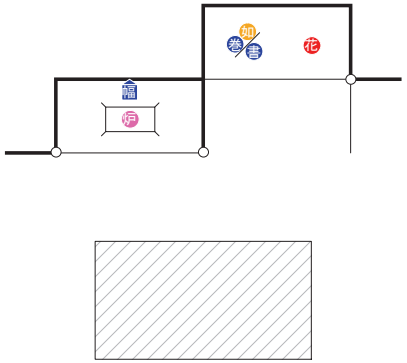
史料名	山水清遊会	著　者	松原天簫
		開催地	不明
刊行年	明治41年（1908）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　迎賓	床形式	⑤框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

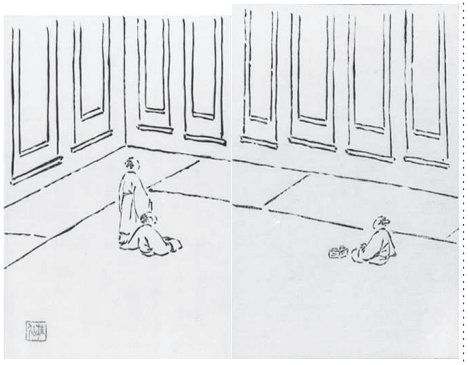


平面モデル

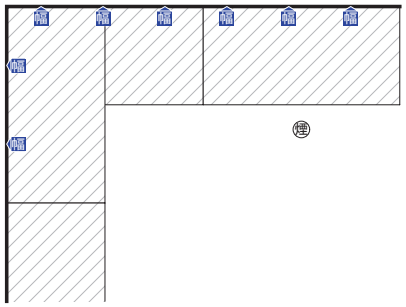


席　名	第二席　展観	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



平面モデル

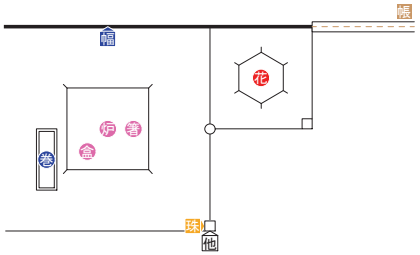


史料名	豫章堂茗醼図録	著　者	阪田圭蔵
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　待合席	床形式	⑤框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	待合席	書院形式	―		

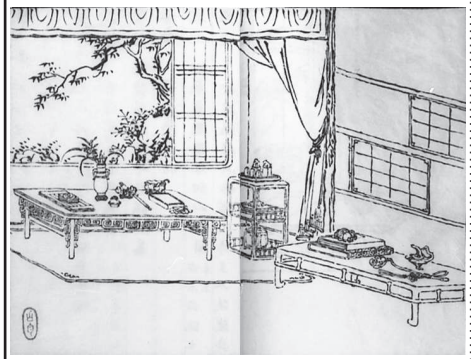
図

平面モデル

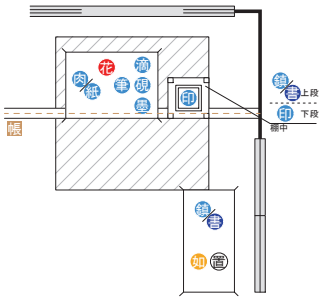


席　名	第一席　待合席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	外部に石・樹木 前図と同じ席
席　種	待合席	書院形式	―		

図



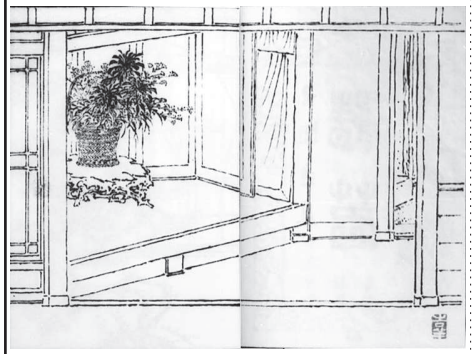
平面モデル



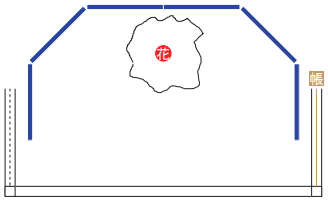
史料名	豫章堂茗醼図録	著　者	阪田圭蔵
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	玄関接待	床形式	⑪単室　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	玄関	書院形式	―		

図

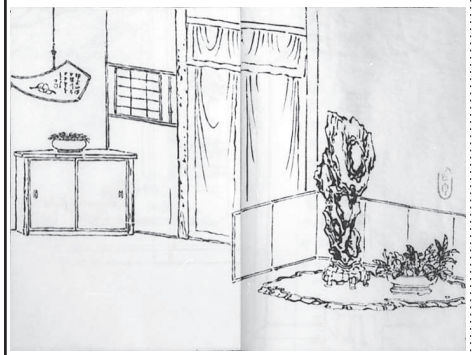


平面モデル

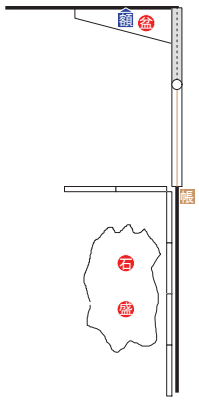


席　名	第一席　待合席	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	⑩地袋	備　考	
席　種	待合席	書院形式	―		

図



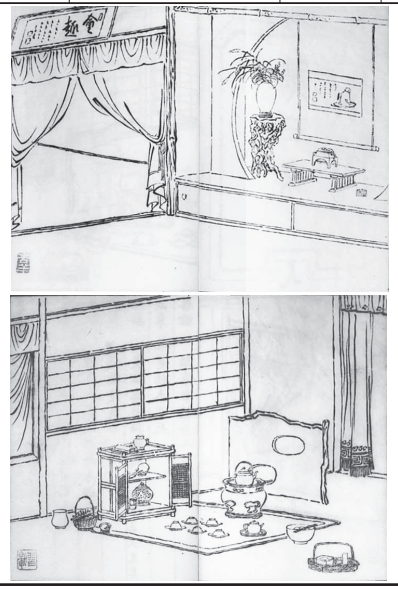
平面モデル



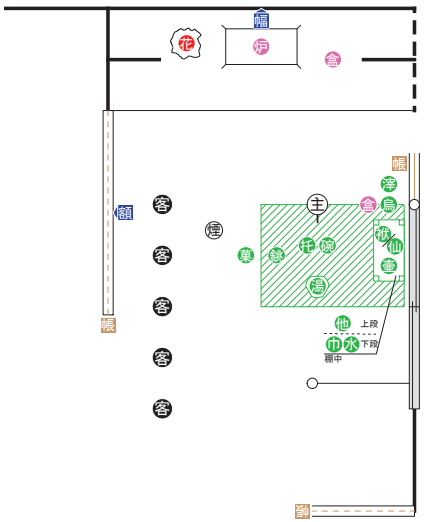
史料名	豫章堂茗醼図録	著　者	阪田圭蔵
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　煎茶席	床形式	③地袋（円形の袖壁）（柱：－　）	点　前	床前上
		床脇形式	－	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図

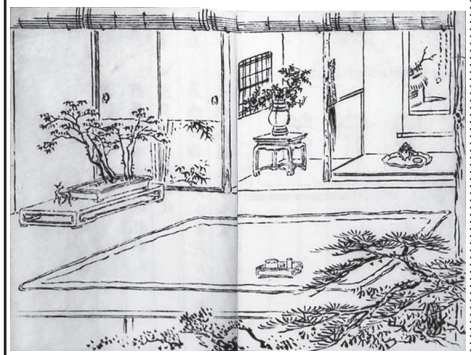


平面モデル

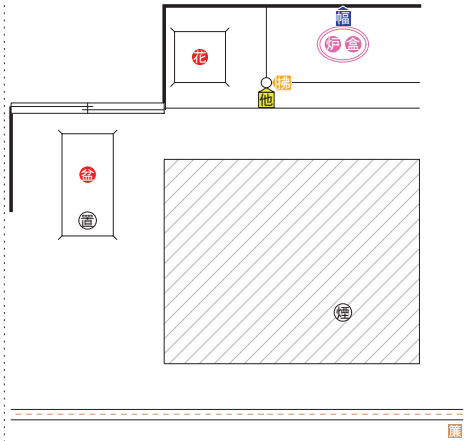


席　名	第四席　別室待合	床形式	⑤框床　（柱：丸太　）	点　前	－
		床脇形式	棚なし	備　考	外部に松
席　種	待合席	書院形式	－		

図



平面モデル

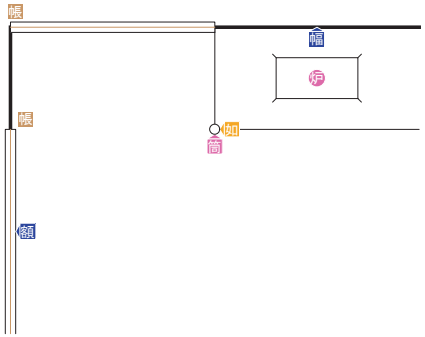


史料名	豫章堂茗醼図録	著　者	阪田圭蔵
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　楼上待合席	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	待合席	書院形式	－		

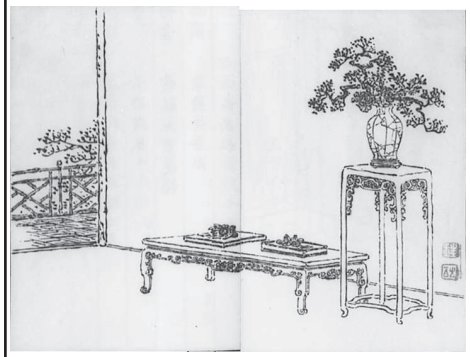
図

平面モデル

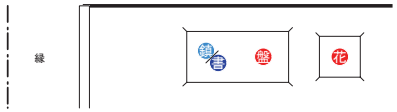


席　名	第二席　楼上待合席	床形式	－　（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	外部に樹木 前図と同じ部屋の別角度
席　種	待合席	書院形式	－		

図



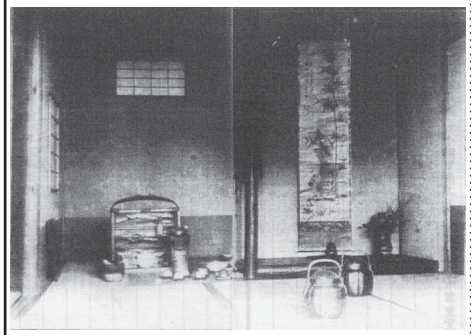
平面モデル



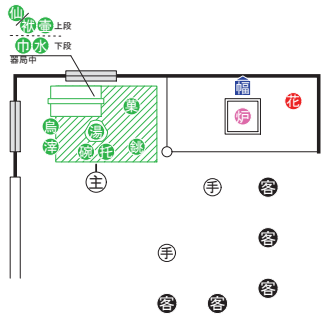
史料名	澱江茗醼図録（乾巻）	著　者	山中簪篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第三席　煎茶	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

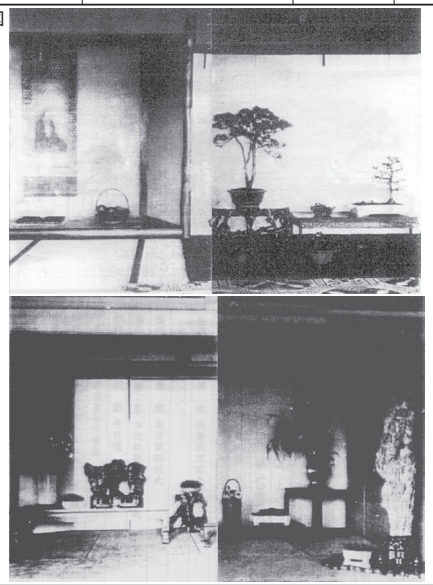


平面モデル

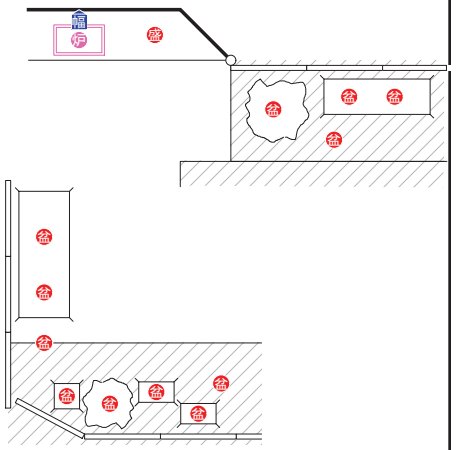


席　名	第五席　瓶花盆栽	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



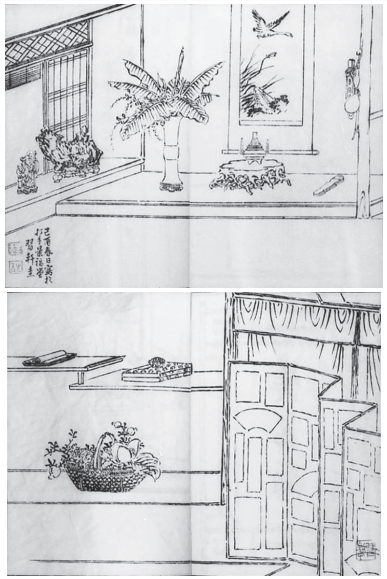
平面モデル



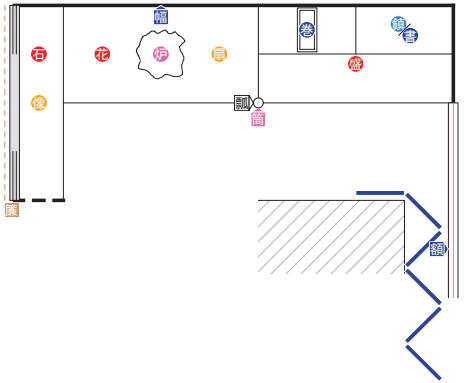
史料名	豫章堂茗醼図録	著　者	阪田圭蔵
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第五席　浅酌席	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	酒席	書院形式	付書院		

図



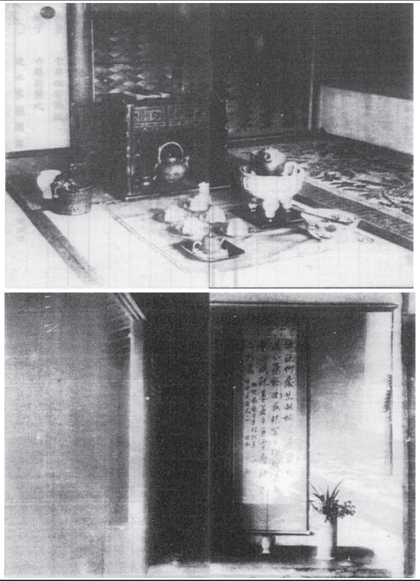
平面モデル



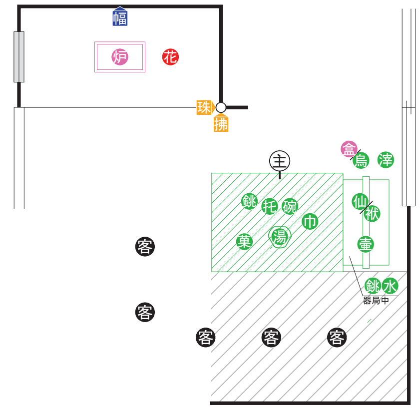
史料名	澱江茗醼図録（上：乾巻　下：坤巻）	著　者	山中箺篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第八席　煎茶	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



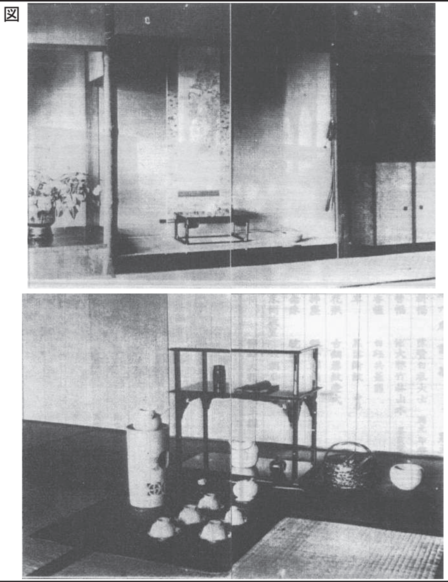
平面モデル



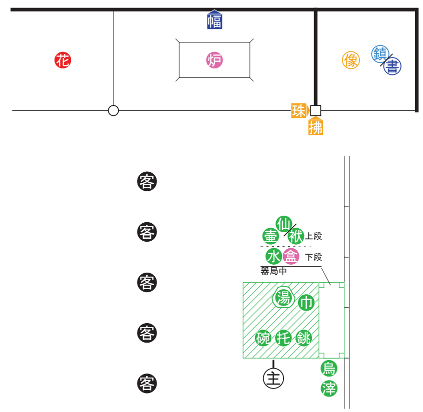
史料名	澱江茗醼図録（乾巻）	著　者	山中箺篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第六席　煎茶	床形式	⑦框床　（柱：丸太）	点　前	床前下
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

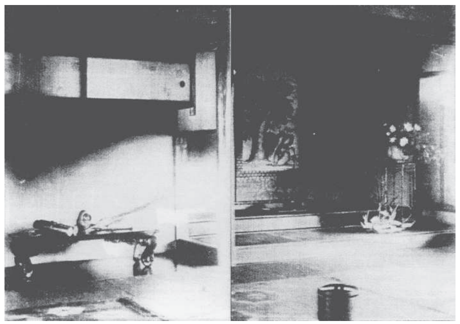


平面モデル

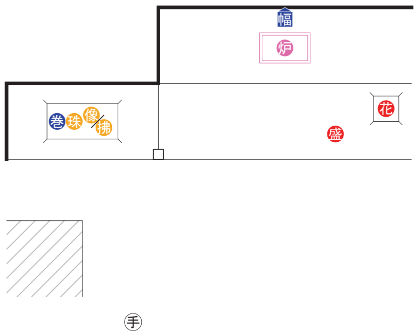


席　名	第十席　瓶花盆栽	床形式	④框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	天袋	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

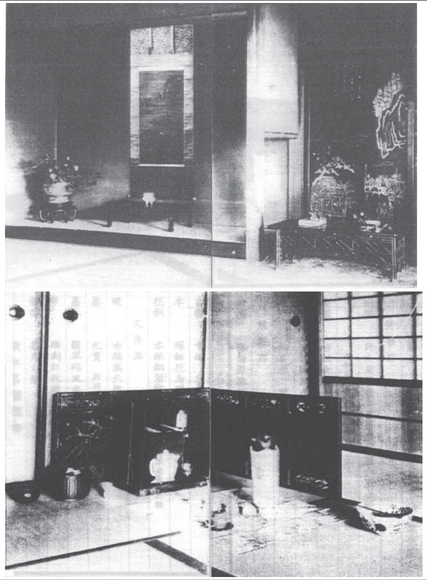


平面モデル

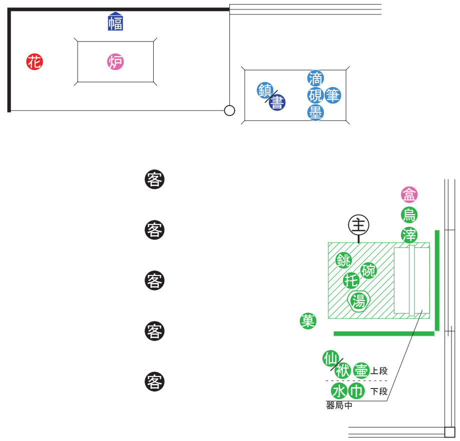


席　名	第七席　煎茶　煎茶席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



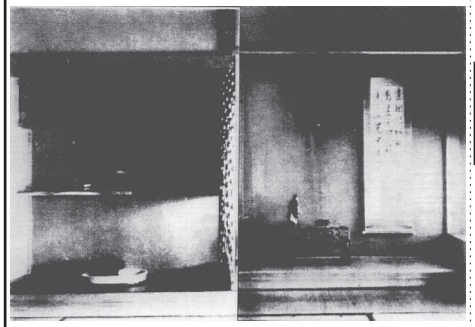
平面モデル



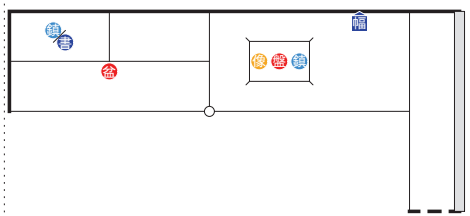
史料名	澱江茗醼図録（坤巻）	著　者	山中簟篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第十二席　瓶花盆栽	床形式	⑨框床　（柱：奇木）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	付書院		

図



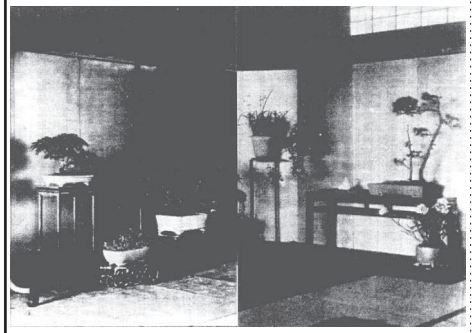
平面モデル



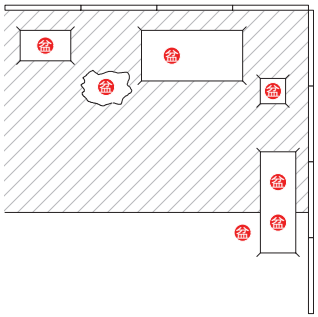
史料名	澱江茗醼図録（坤巻）	著　者	山中簟篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第十席　瓶花盆栽	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

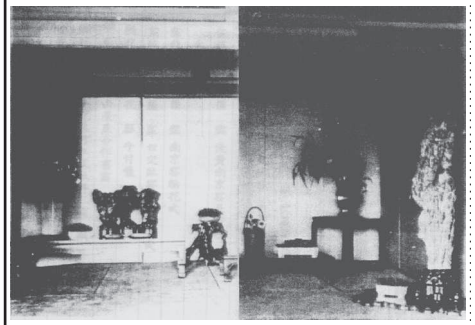


平面モデル

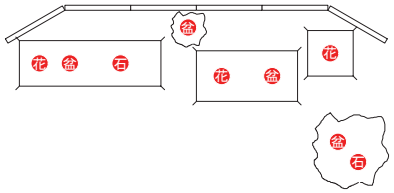


席　名	第十二席　瓶花盆栽	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

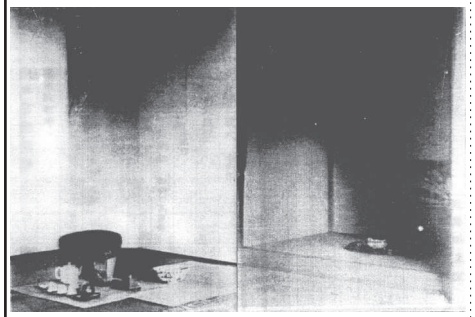


平面モデル

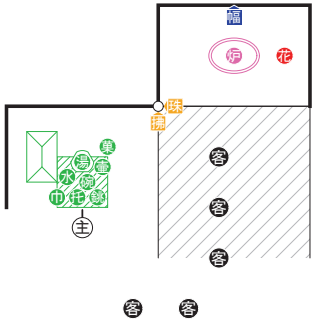


席　名	第十一席　煎茶	床形式	②框床　（柱：―）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



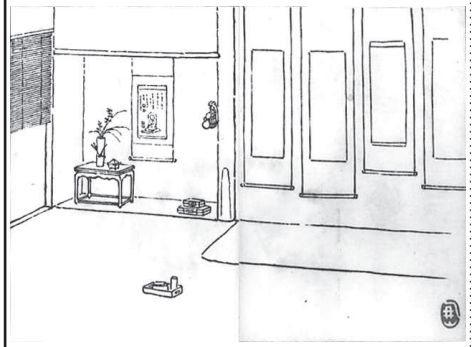
平面モデル



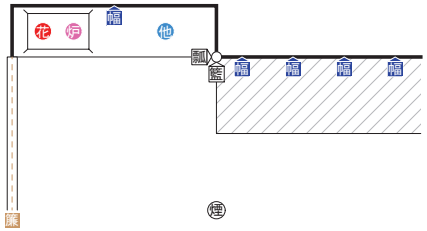
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(上)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　遺愛品陳列	床形式	②踏込床（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（文房＋書画展観席）	書院形式	―		

図

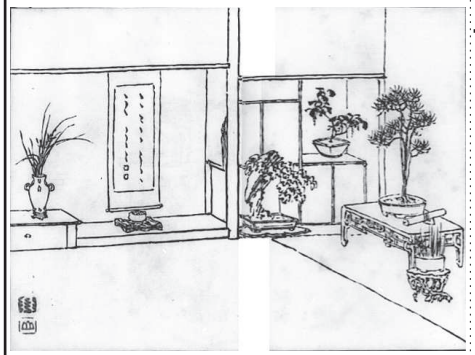


平面モデル

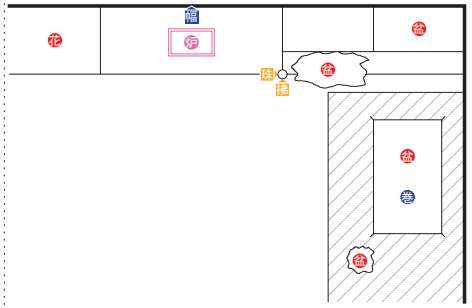


席　名	第三席　盆栽	床形式	⑦琵琶床（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	袋棚	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



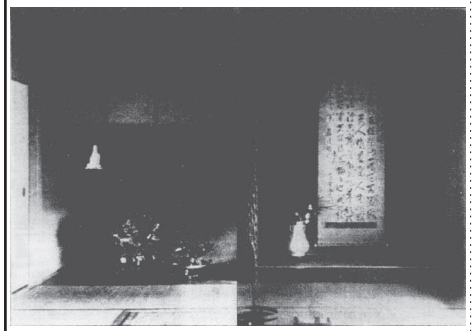
平面モデル



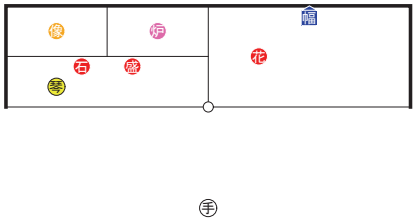
史料名	澱江茗醼図録（坤巻）	著　者	山中簟篁堂
		開催地	大阪
刊行年	明治42年（1909）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第十三席　煎茶　待合席	床形式	④框床（柱：奇木）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	待合席	書院形式	―		

図

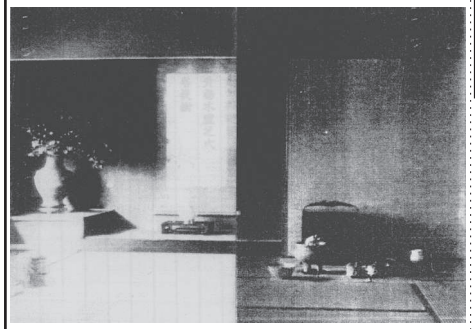


平面モデル

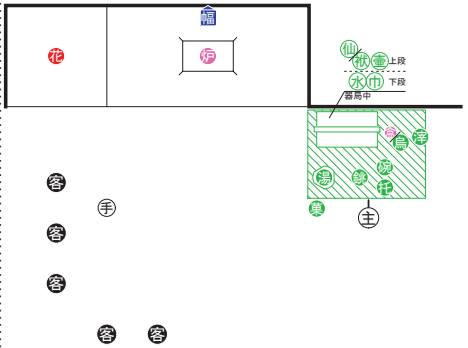


席　名	第十三席　煎茶　煎茶席	床形式	⑤琵琶床（柱：―）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図



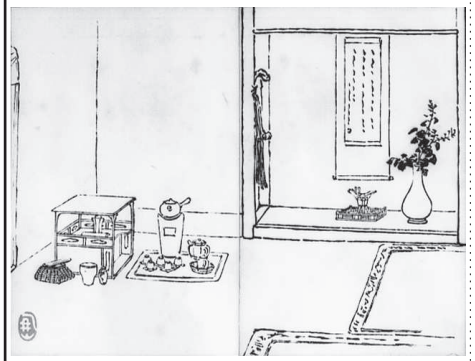
平面モデル



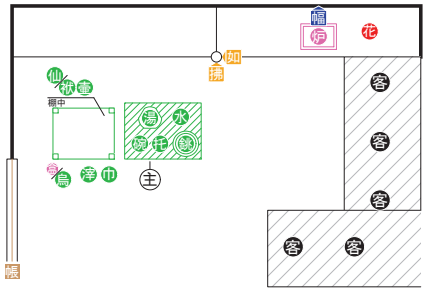
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(上)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第五席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

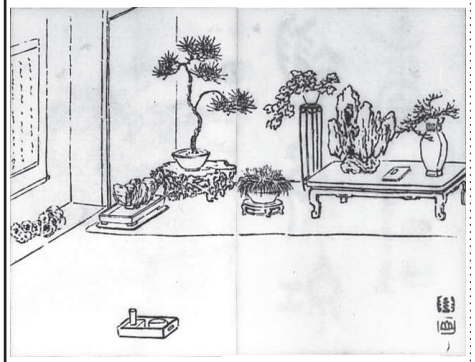


平面モデル

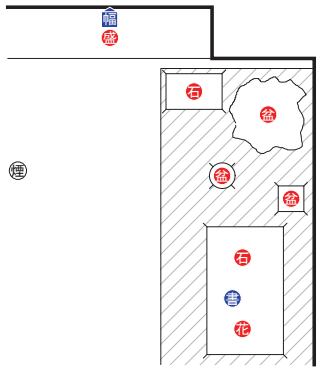


席　名	第六席　盆栽	床形式	②踏込床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



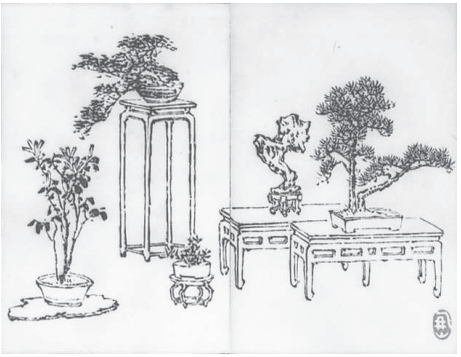
平面モデル



史料名	雨竹居士薦筵図誌（(上)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

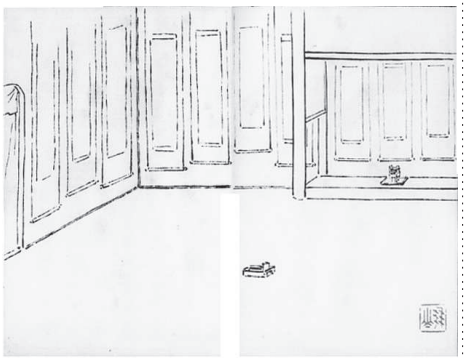
席　名	第三席　盆栽	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

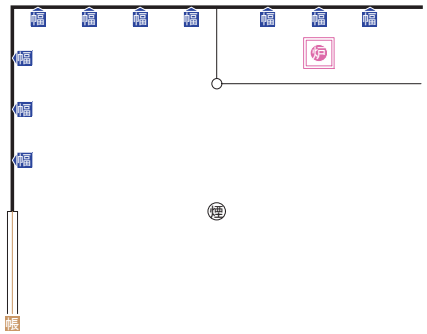


席　名	第四席　書画展観	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



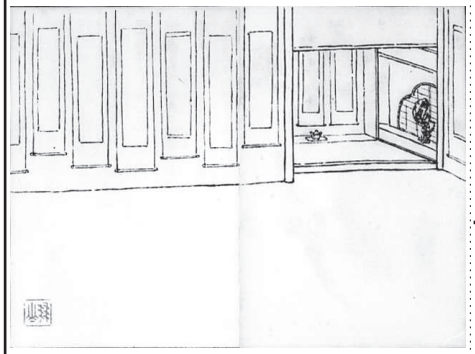
平面モデル



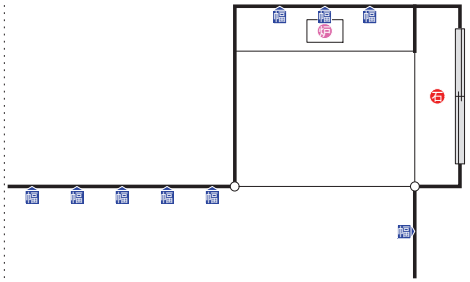
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(下)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第八席　書画展観	床形式	⑧框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	付書院		

図

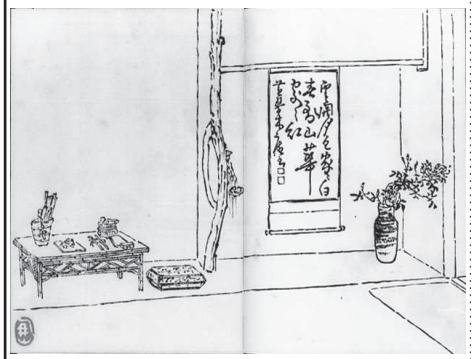


平面モデル

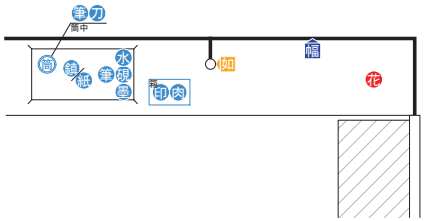


席　名	第九席　前席	床形式	④踏込床　（柱：奇木）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



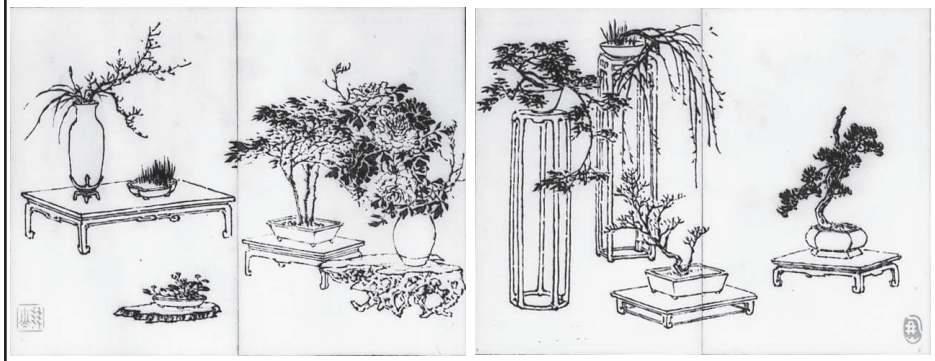
平面モデル



史料名	雨竹居士薦筵図誌（(上)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

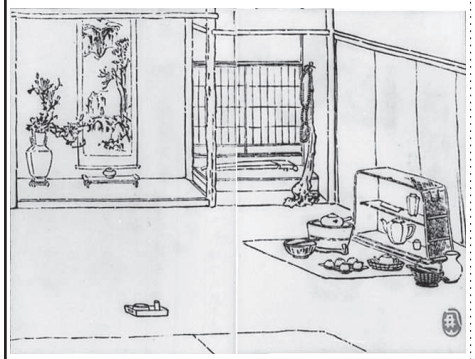
席　名	第六席　盆栽	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

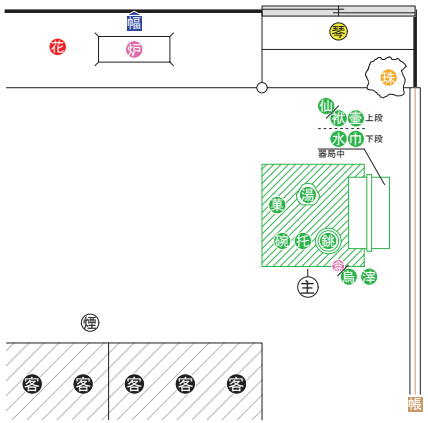


席　名	第七席　煎茶	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



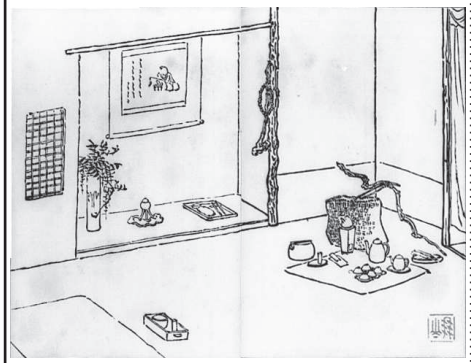
平面モデル



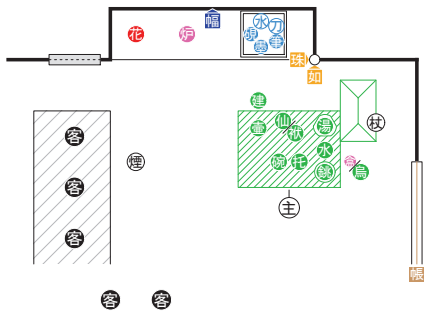
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(下)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十一席　煎茶	床形式	②框床　（柱：奇木）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

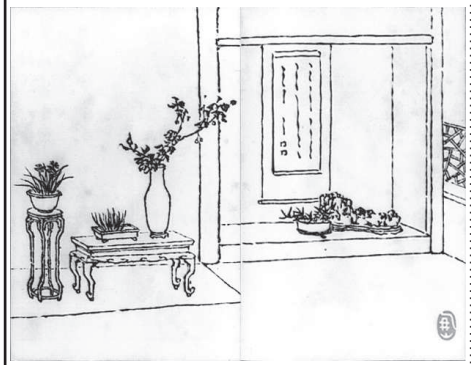


平面モデル

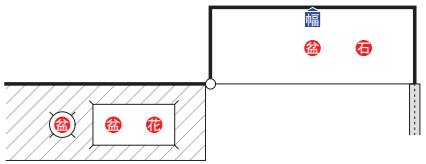


席　名	第十二席　盆栽陳列	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



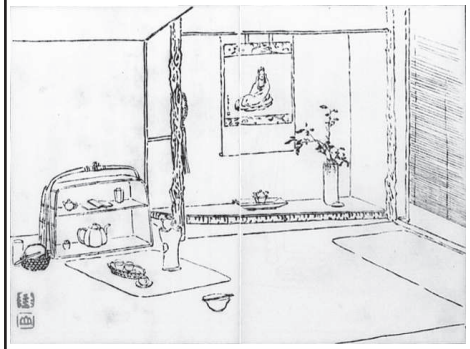
平面モデル



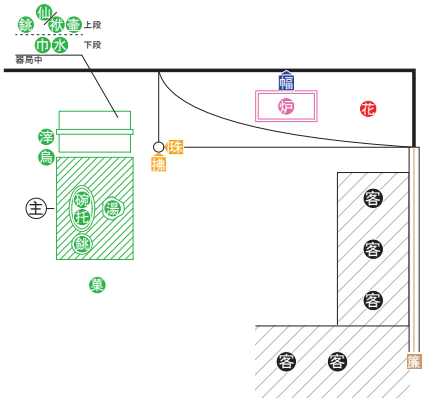
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(下)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第九席　本席	床形式	②框床（前面が曲面）（柱：奇木）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

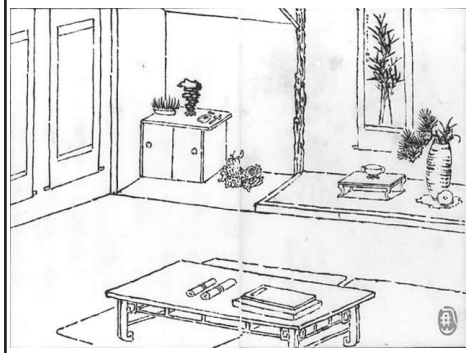


平面モデル

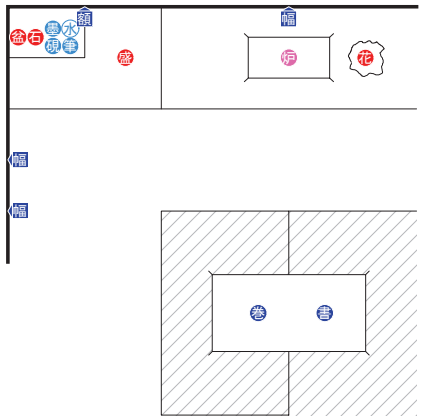


席　名	第十席 高松所蔵家書画展観	床形式	④框床　（柱：奇木）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



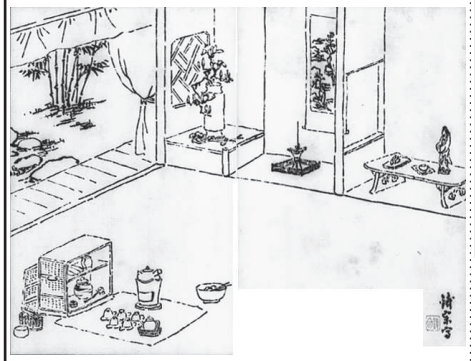
平面モデル



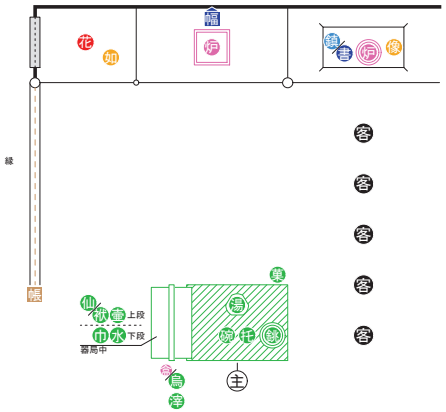
史料名	雨竹居士薦筵図誌（(下)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十四席　遺物煎茶	床形式	⑦琵琶床　（柱：丸柱）	点　前	床前下
		床脇形式	棚なし	備　考	庭に竹
席　種	茶席	書院形式	―		

図

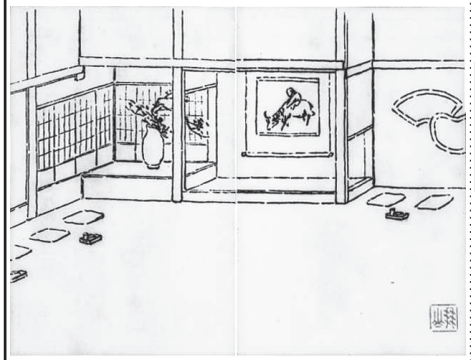


平面モデル

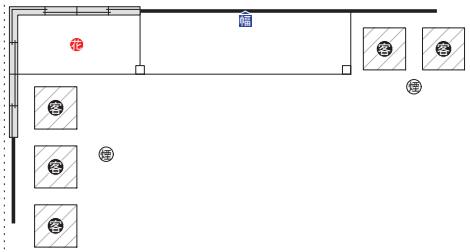


席　名	第十五席	床形式	⑨框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	―		

図



平面モデル



史料名	雨竹居士薦筵図誌（(下)巻）	著　者	椰川善左衛門
		開催地	大阪
刊行年	大正2年（1913）	所　蔵	高取友仙窟

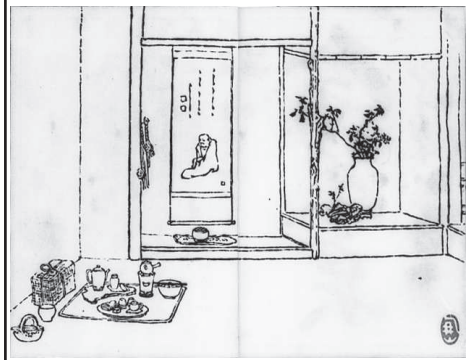
席　名	第十二席　盆栽陳列	床形式	―　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	盆栽陳列席	書院形式	―		

図

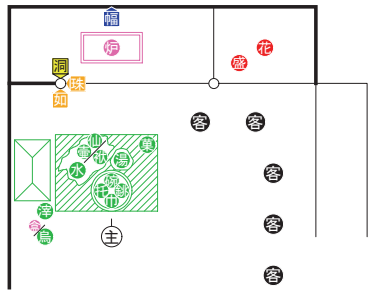
平面モデル

席　名	第十三席	床形式	⑨框床　（柱：丸太）	点　前	床前上
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図



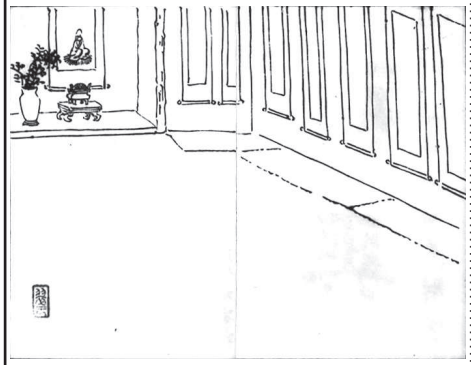
平面モデル



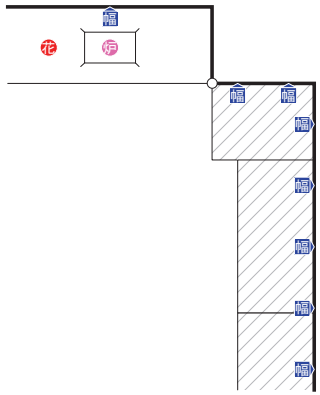
史料名	楓川追薦録　（春巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席 明清書画展観合席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

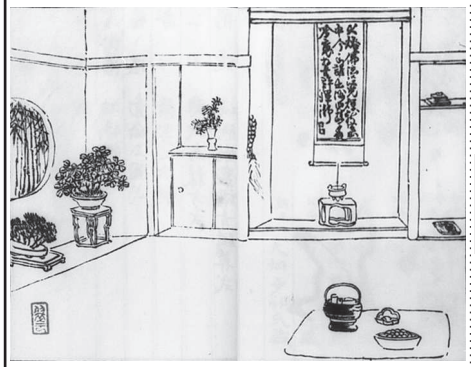


平面モデル

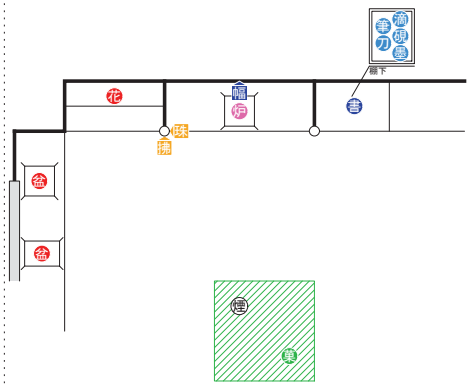


席　名	第五席　盆栽　前席	床形式	⑦框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	通棚＋地袋	備　考	外部に竹
席　種	前席	書院形式	―		

図



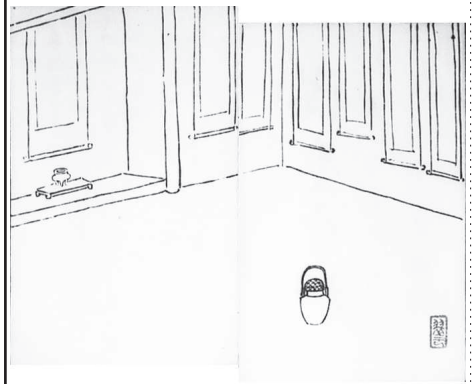
平面モデル



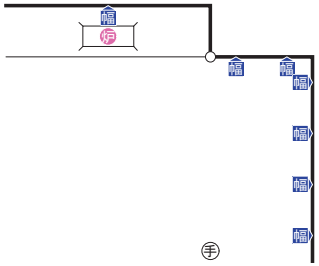
史料名	楓川追薦録　（春巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席 本朝書画展観合席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

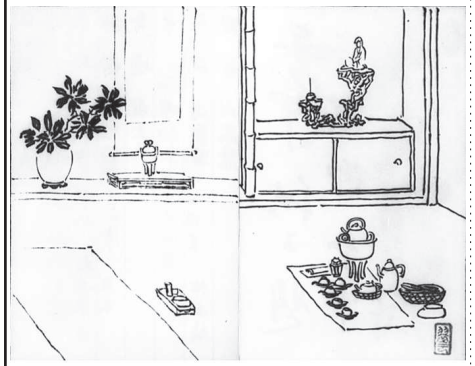


平面モデル

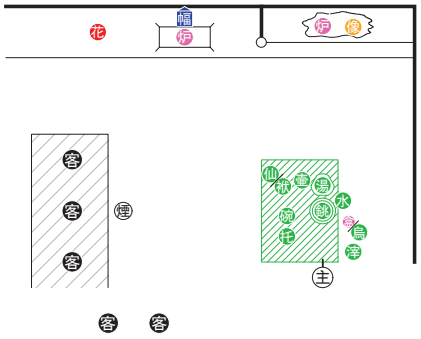


席　名	第三席　茗筵	床形式	④踏込床　（柱：竹）	点　前	脇前下
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル



史料名	楓川追薦録　（夏巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第八席　盆栽合席	床形式	ー　（柱：ー　）	点　前	ー
		床脇形式	ー	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	ー		

図

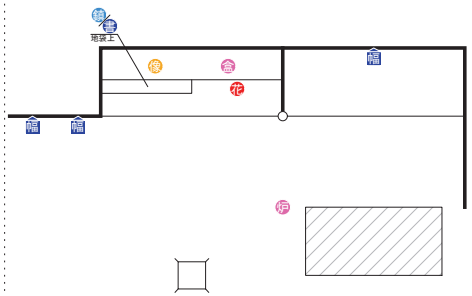
平面モデル

史料名	楓川追薦録　（上：春巻　下：夏巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第六席　書画展観	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	ー
		床脇形式	机棚	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	ー		

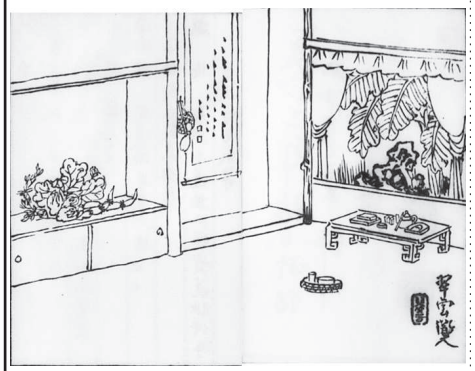
図

平面モデル

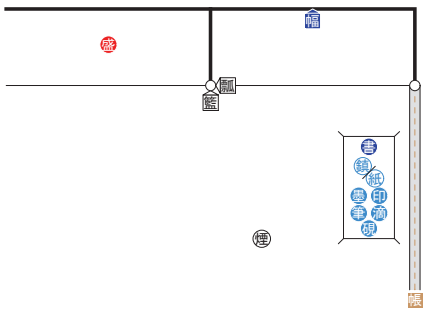


席　名	第九席　書画展観　前席	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	ー
		床脇形式	地袋	備　考	外部に芭蕉・太湖石
席　種	前席	書院形式	ー		

図

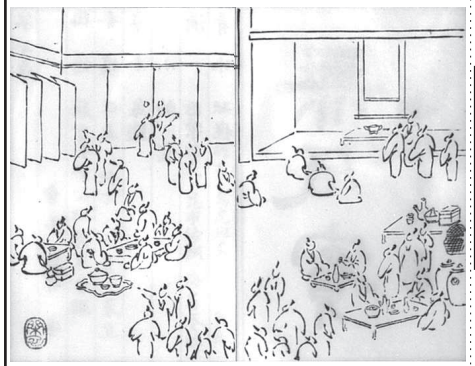


平面モデル

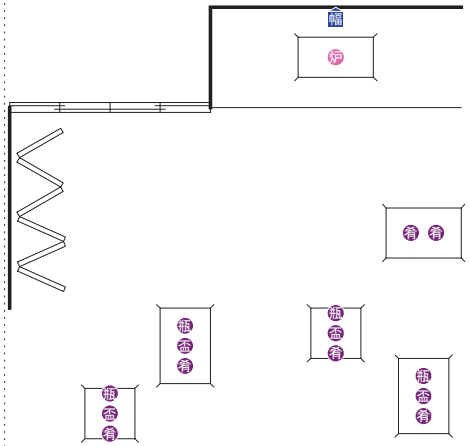


席　名	第七席	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	ー
		床脇形式	ー	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	ー		

図



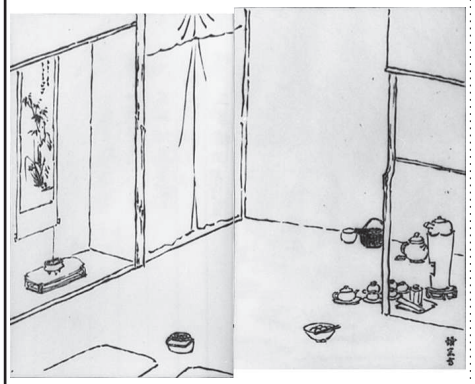
平面モデル



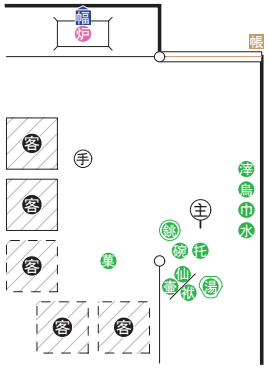
史料名	楓川追薦録　（夏巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十二席　茗筵	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

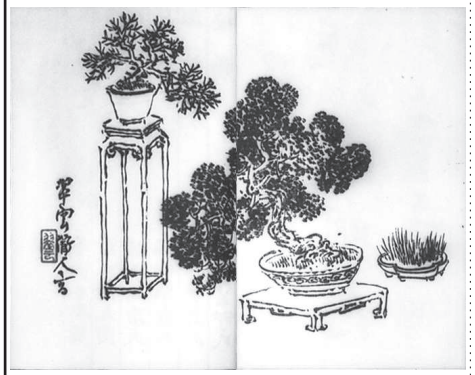


平面モデル



席　名	第十三席　盆栽合席	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

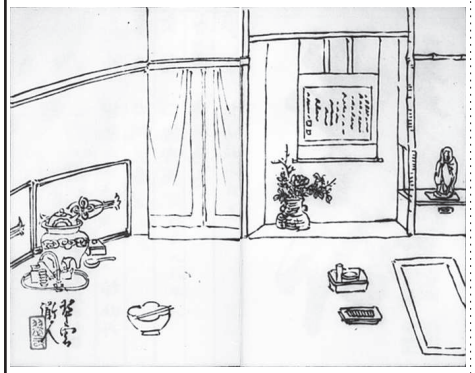


平面モデル

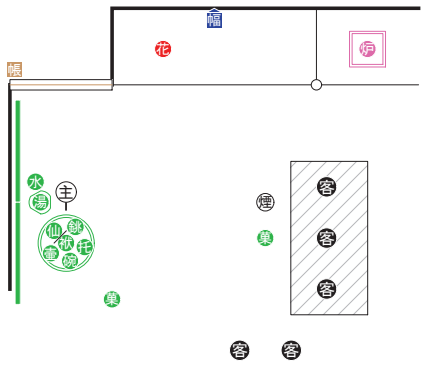
史料名	楓川追薦録　（夏巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十席　茗筵	床形式	⑤踏込床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

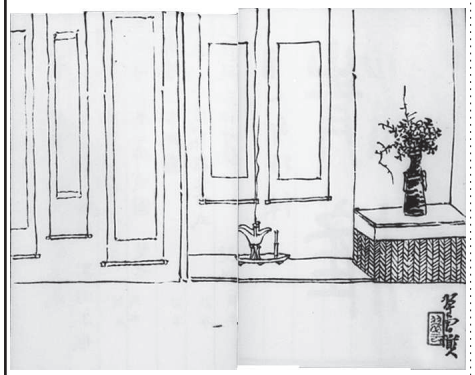


平面モデル

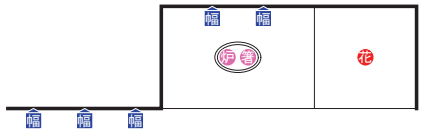


席　名	第十一席 書画展観　本朝書画	床形式	⑤琵琶床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



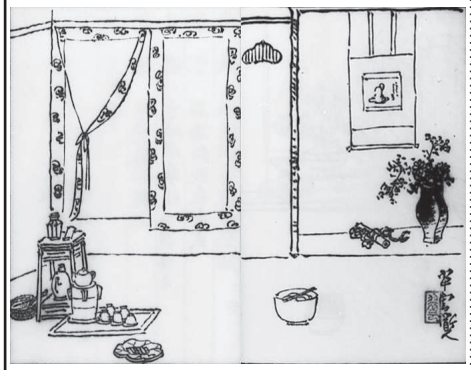
平面モデル



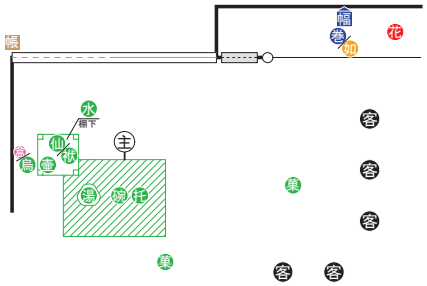
史料名	楓川追薦録　（秋巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十五席　茗筵　本席	床形式	②踏込床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

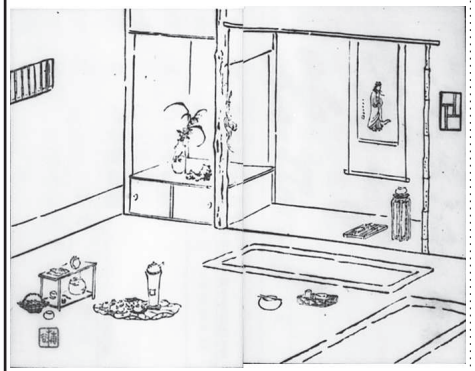


平面モデル

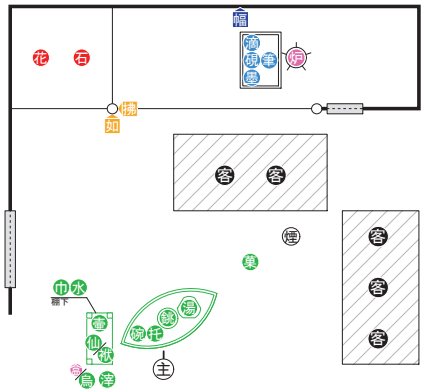


席　名	第十六席　茗筵	床形式	④踏込床　（柱：丸太　）	点　前	脇前下
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

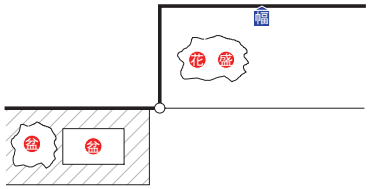


史料名	楓川追薦録　（上：夏巻　下：秋巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十四席　盆栽合席	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

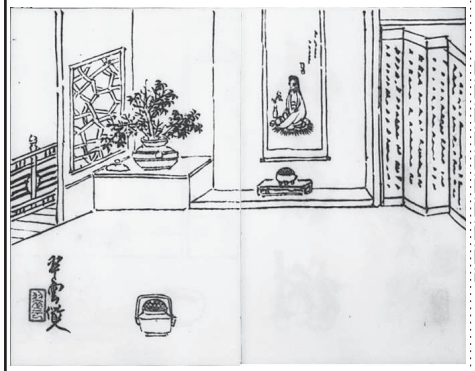
図

平面モデル

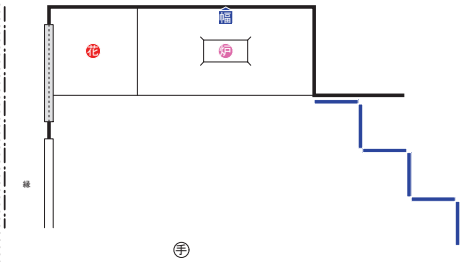


席　名	第十五席　茗筵　前席	床形式	⑤琵琶床　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



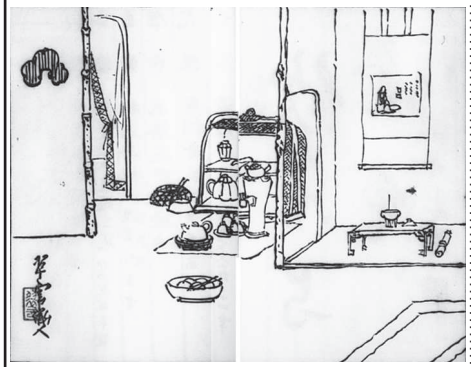
平面モデル



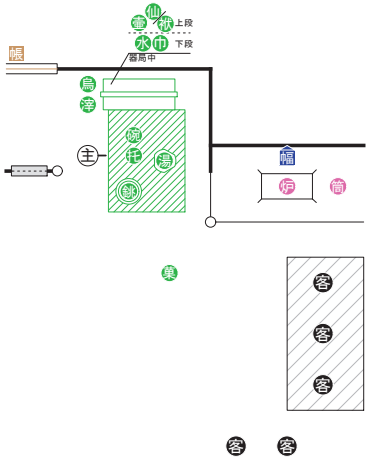
史料名	楓川追薦録　（秋巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十八席　茗筵	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



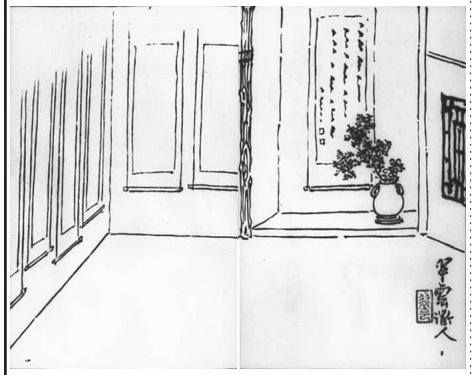
平面モデル



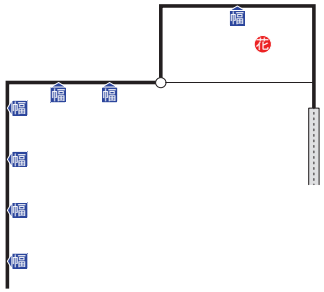
史料名	楓川追薦録　（秋巻）	著　者	松井廉
		開催地	東京
刊行年	大正5年（1916）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十七席　書画展観　一室	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

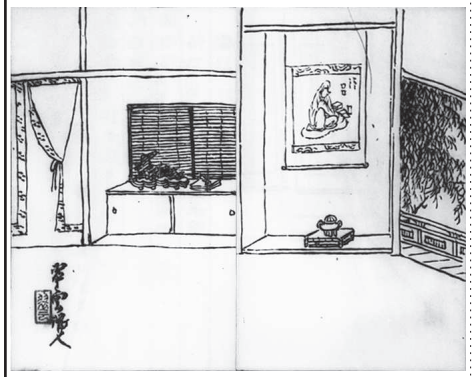


平面モデル

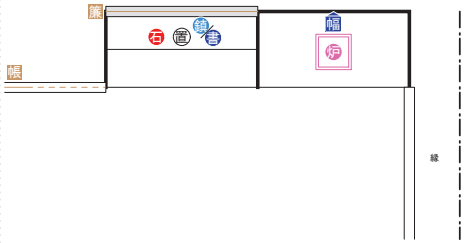


席　名	第十七席　書画展観　二室	床形式	⑤框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	外部に樹木
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



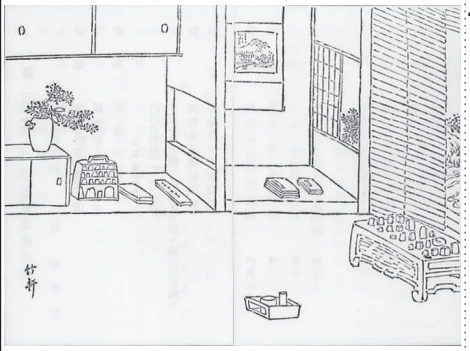
平面モデル



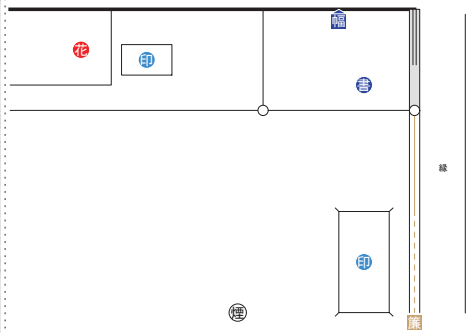
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第三席　竹田翁遺印陳列	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	錦葉棚	備　考	外部に樹木
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図

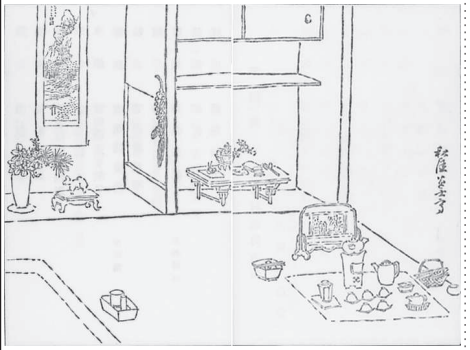


平面モデル

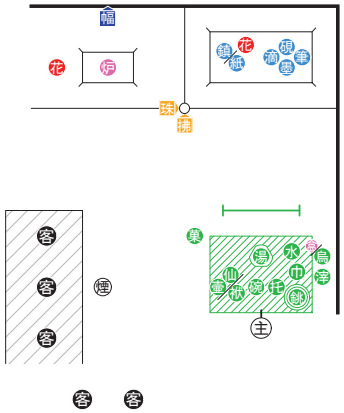


席　名	第四席　煎茗	床形式	④踏込床　（柱：丸柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	通棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



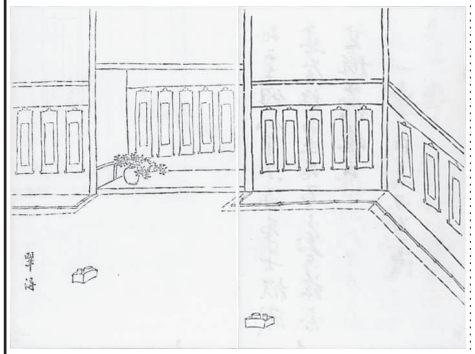
平面モデル



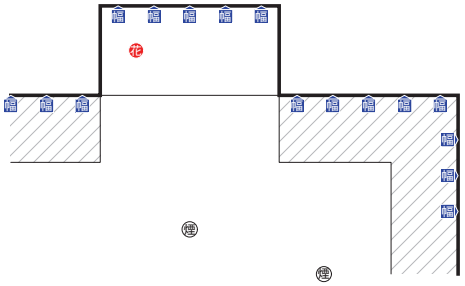
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第一席　竹邨桑者画展観	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

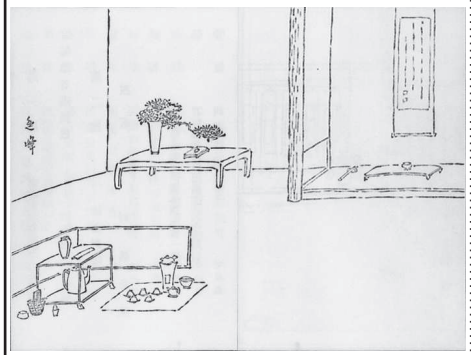


平面モデル

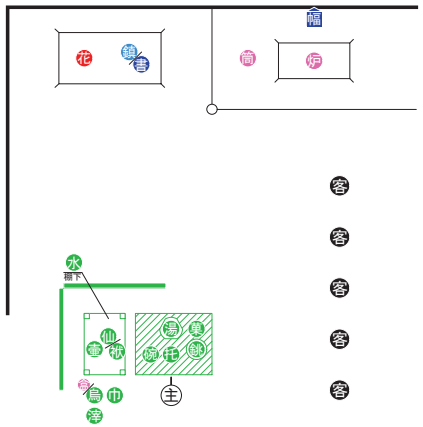


席　名	第二席　煎茗	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



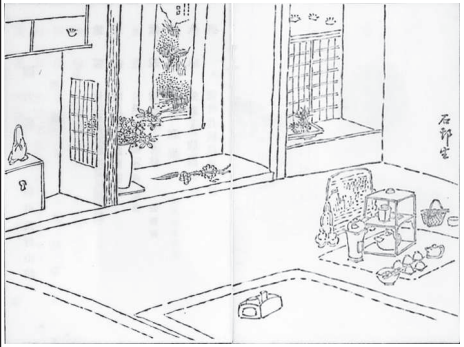
平面モデル



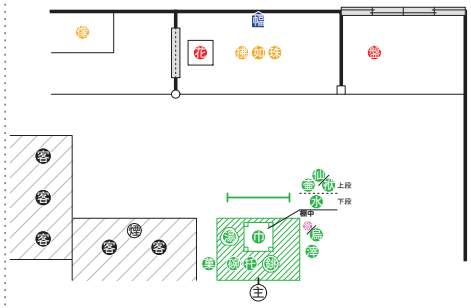
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第六席　煎茗　本席	床形式	⑦框床　（柱：丸太）	点　前	床前下
		床脇形式	錦葉棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	付書院		

図

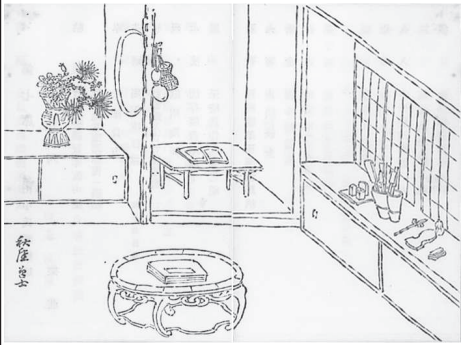


平面モデル

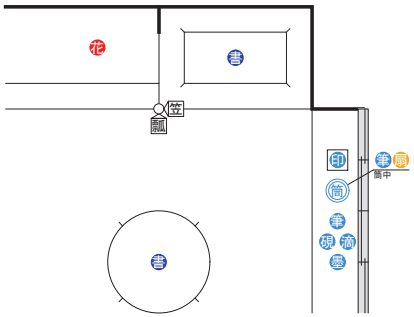


席　名	第七席　一楽帖陳列	床形式	⑨框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	付書院		

図



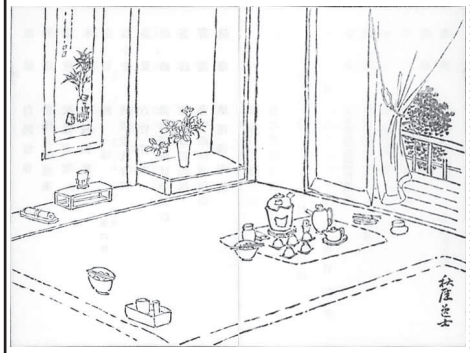
平面モデル



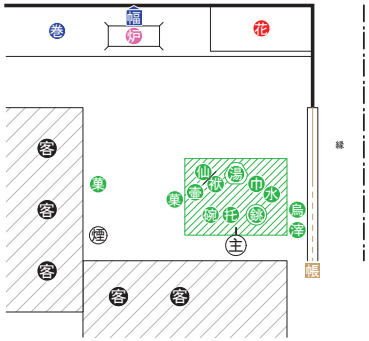
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第五席　煎茗	床形式	④琵琶床　（柱：―）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	外部に樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

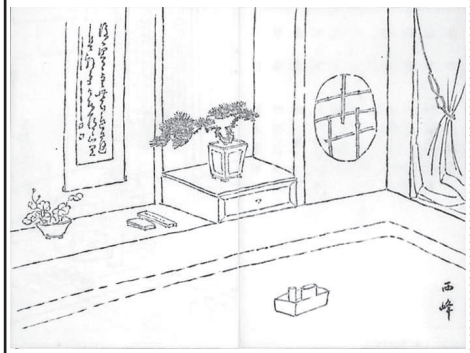


平面モデル

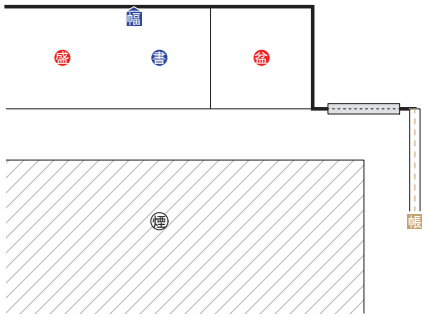


席　名	第六席　煎茗　前席	床形式	⑤琵琶床　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	前席	書院形式	―		

図



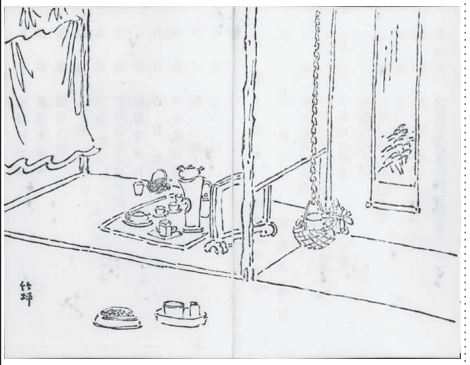
平面モデル



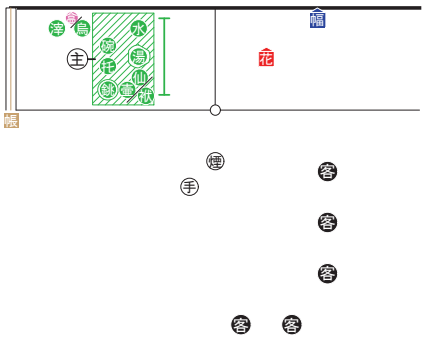
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十席　煎茗	床形式	②踏込床　（柱：丸太　）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

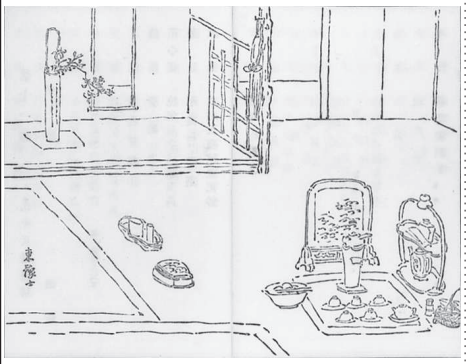


平面モデル

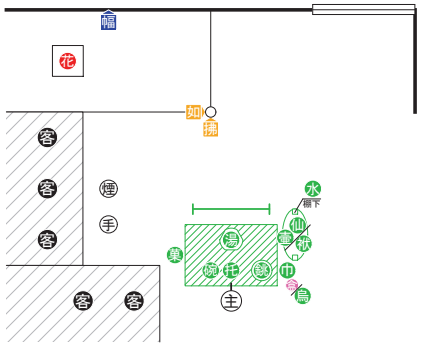


席　名	第十一席　煎茗	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



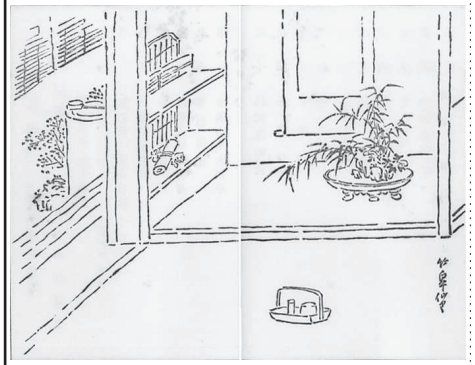
平面モデル



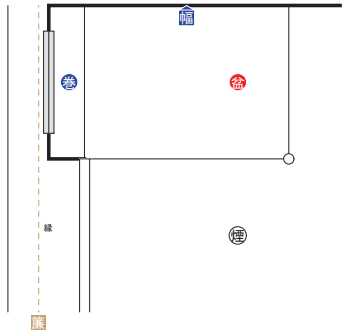
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第九席　前席待合	床形式	⑧框床　（柱：丸柱　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に手水鉢・樹木
席　種	待合席	書院形式	付書院		

図

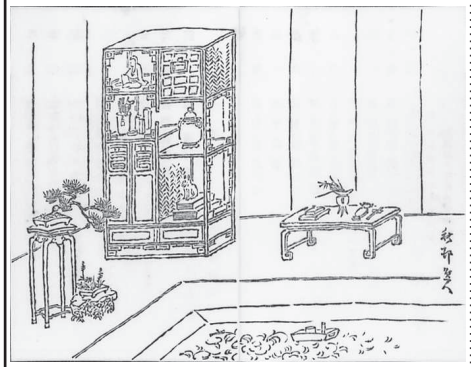


平面モデル

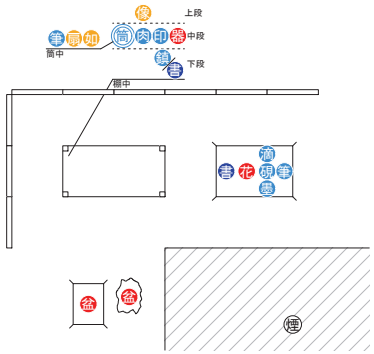


席　名	第九席　前席待合	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	待合席	書院形式	―		

図



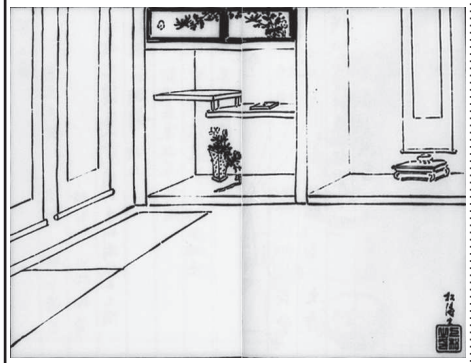
平面モデル



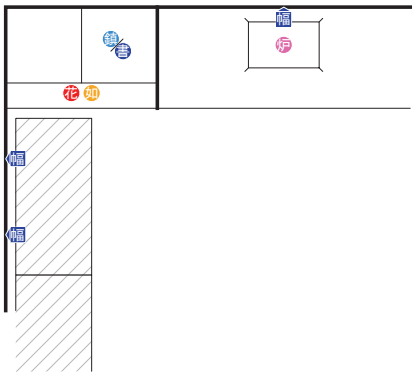
史料名	溪村翁追薦図録	著　者	細谷与左衛門
		開催地	山形
刊行年	大正9年（1920）序	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　書画展観	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	違棚	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

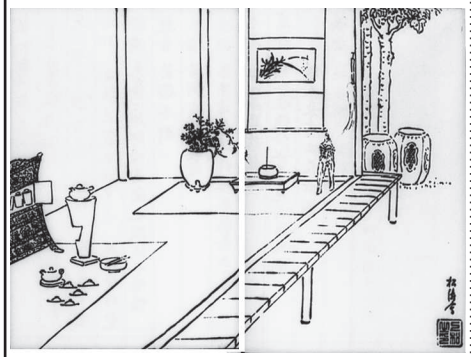


平面モデル

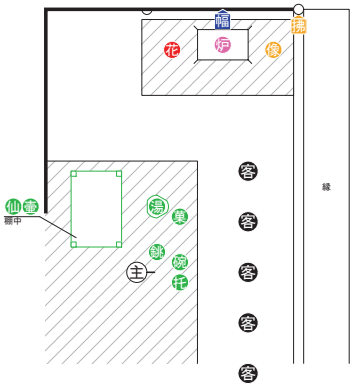


席　名	第三席　茗筵	床形式	①壁床　（柱：―）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	庭に榻・樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



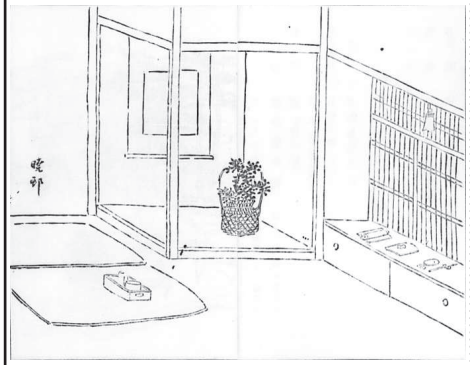
平面モデル



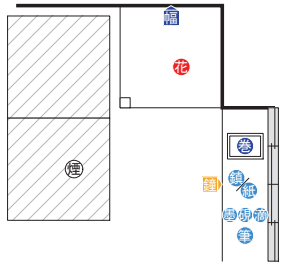
史料名	亦復一楽茶会図録	著　者	越知武一
		開催地	京都
刊行年	大正7年（1918）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第十四席　小酌	床形式	⑧框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	付書院		

図



平面モデル

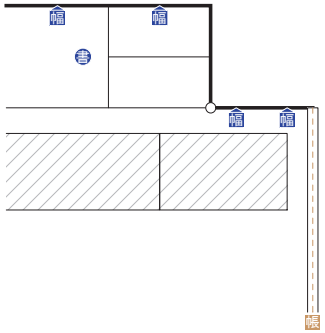


史料名	角山篘篁翁薦事図録（瑞巻）	著　者	山中篘篁堂
		開催地	大阪
刊行年	大正11年（1922）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第二席　遺墨展観	床形式	③琵琶床（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

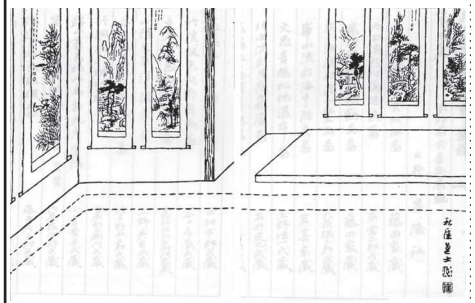
図

平面モデル

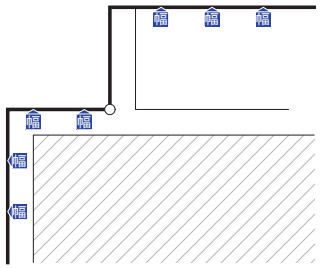


席　名	第三席　本邦南宗書画展観	床形式	②框床（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図



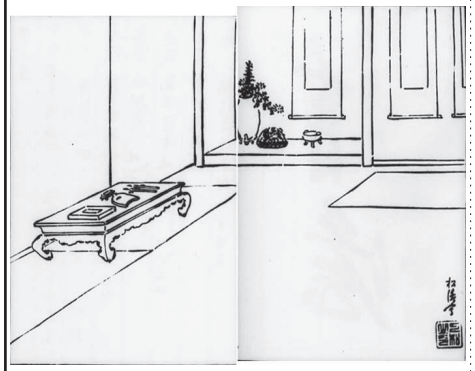
平面モデル



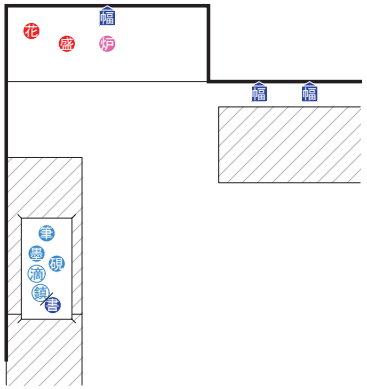
史料名	溪村翁追薦図録	著　者	細谷与左衛門
		開催地	山形
刊行年	大正9年（1920）序	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席　書画展観	床形式	②框床（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

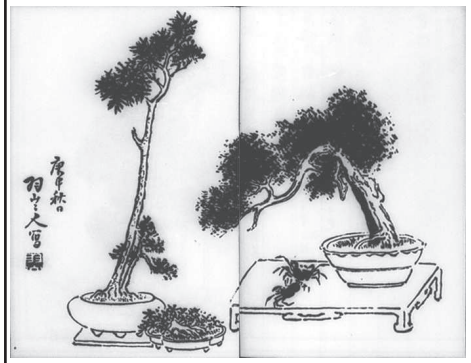


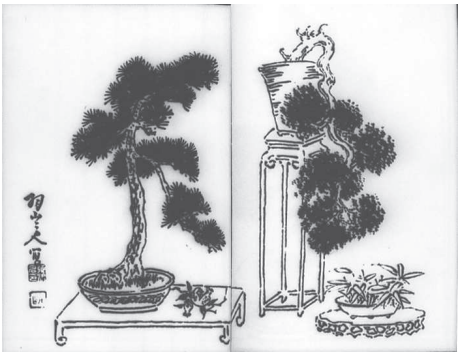
平面モデル



席　名	第五席　盆栽	床形式	―（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図

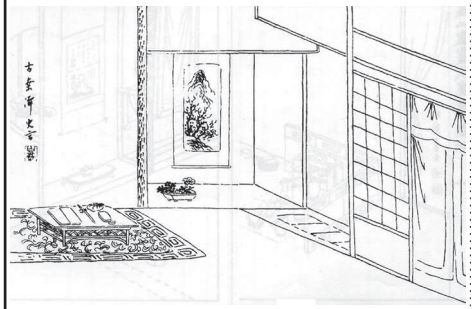




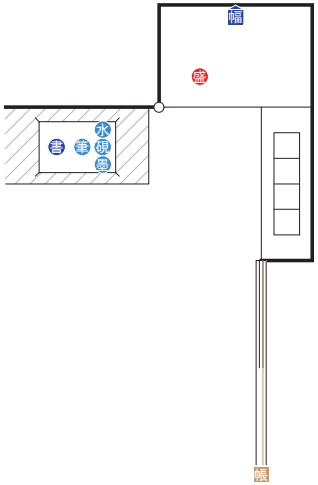
史料名	角山篘篁翁薦事図録（瑞巻）	著　者	山中篘篁堂
		開催地	大阪
刊行年	大正11年（1922）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第六席　煎茗　待合席	床形式	②踏込床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	待合席	書院形式	―		

図

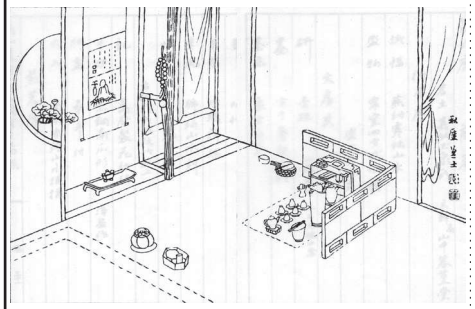


平面モデル

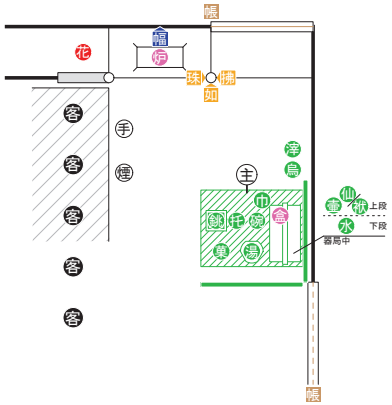


席　名	第六席　煎茗　煎茗席	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



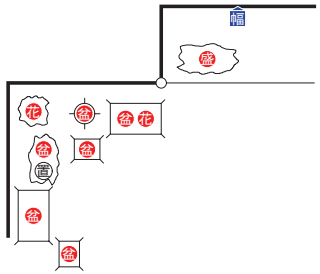
平面モデル



席　名	第四席　瓶花盆栽陳列	床形式	②踏込床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

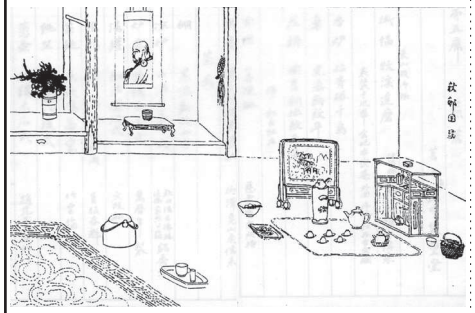
図

平面モデル

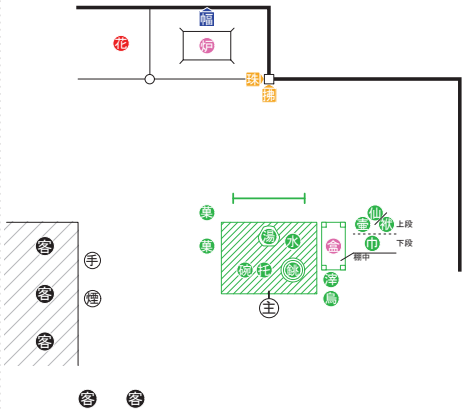


席　名	第五席　煎茗	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	脇前下
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

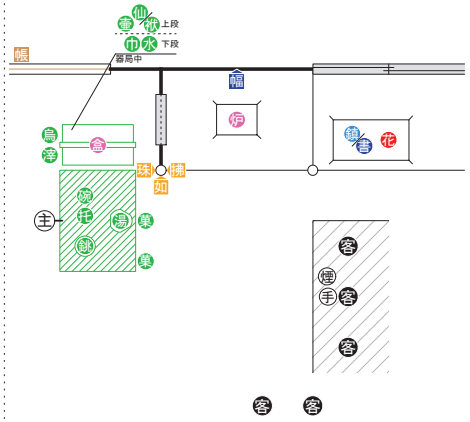


史料名	角山篘篁翁薦事図録（上：草巻　下：魁巻）	著　者	山中篘篁堂
		開催地	大阪
刊行年	大正11年（1922）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第十二席　煎茗	床形式	⑤踏込床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

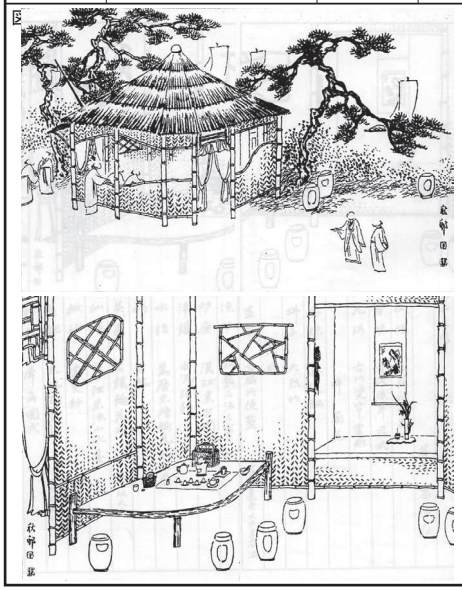
図

平面モデル

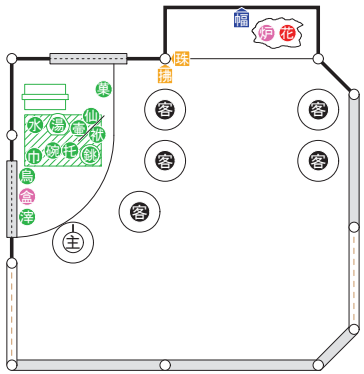


席　名	第十三席　煎茗	床形式	②　（柱：竹　）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	外部に松・幟
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



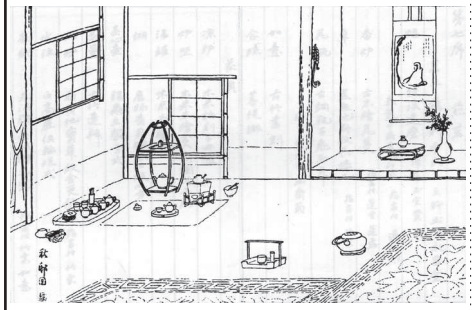
平面モデル



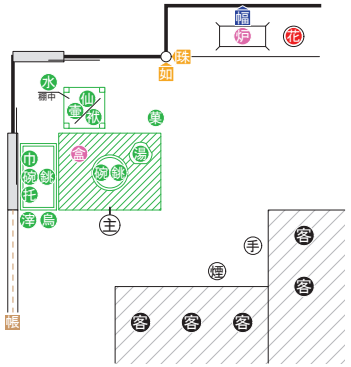
史料名	角山篘篁翁薦事図録　（草巻）	著　者	山中篘篁堂
		開催地	大阪
刊行年	大正11年（1922）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第七席　煎茗	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

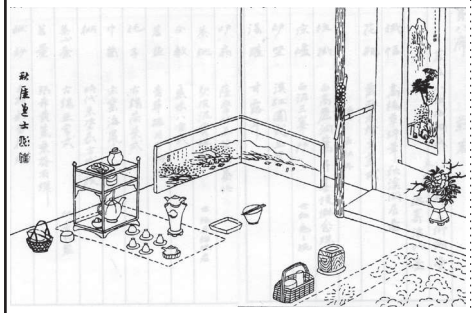


平面モデル

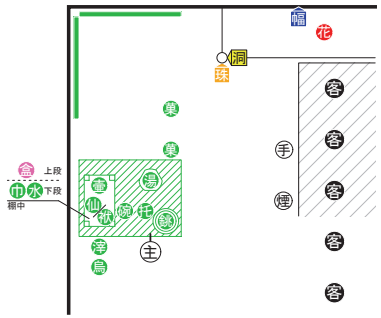


席　名	第八席　煎茗	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



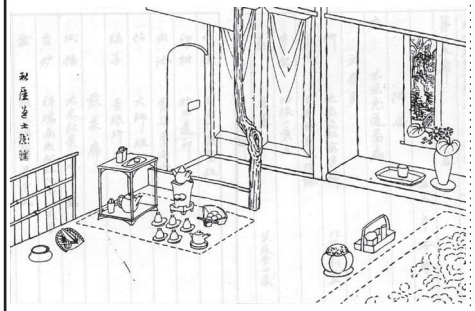
平面モデル



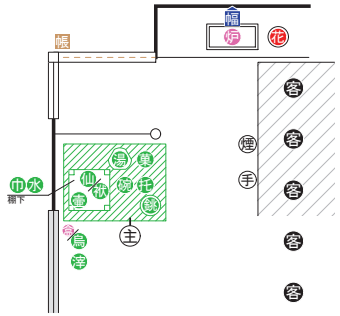
史料名	角山篘篁翁薦事図録（魁巻）	著　者	山中篘篁堂
		開催地	大阪
刊行年	大正11年（1922）	所　蔵	東京都立中央図書館

席　名	第十五席　煎茗　煎茶席	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	脇前下
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

図

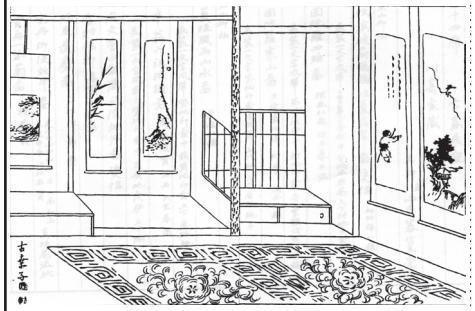


平面モデル

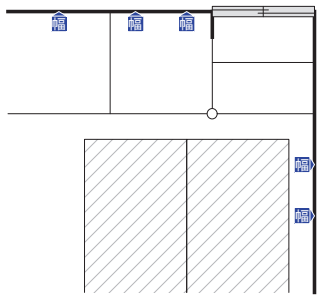


席　名	第十四席　古画展観	床形式	⑦琵琶床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	付書院		

図



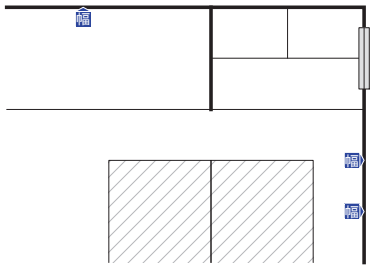
平面モデル



席　名	第十六席　明清書画展観	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	冠棚	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

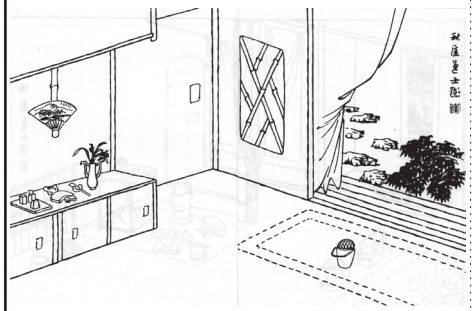
図

平面モデル

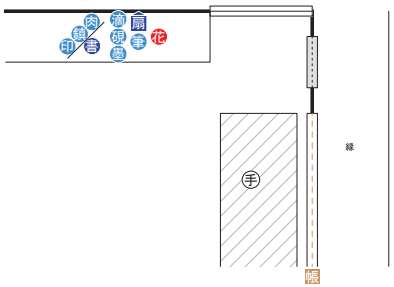


席　名	第十五席　煎茗　待合	床形式	③地袋　（柱：―）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	庭に笹
席　種	待合席	書院形式	―		

図



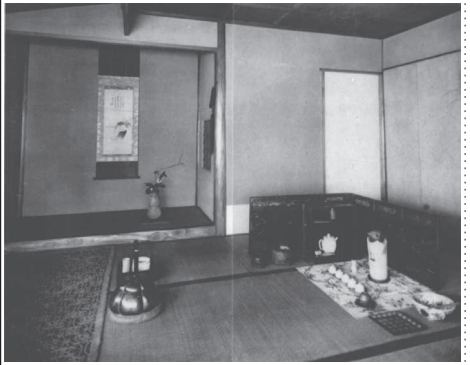
平面モデル



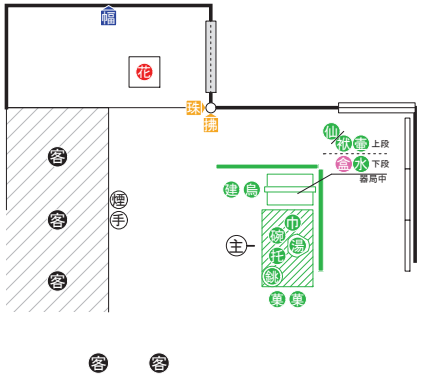
史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第二席　煎茗　茗筵	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



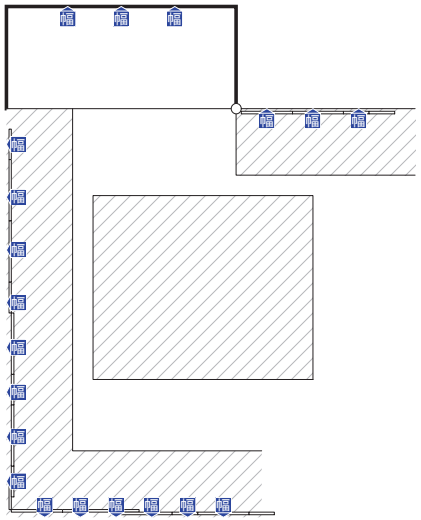
平面モデル



席　名	第三席　南宗書画展観	床形式	②框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	書画展観席	書院形式	―		

図

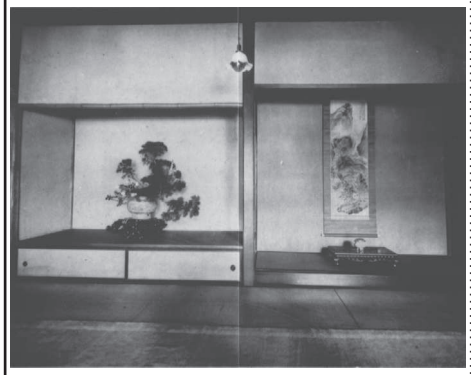
平面モデル



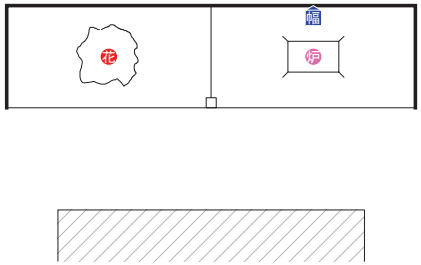
史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第二席　煎茗　待合	床形式	④框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

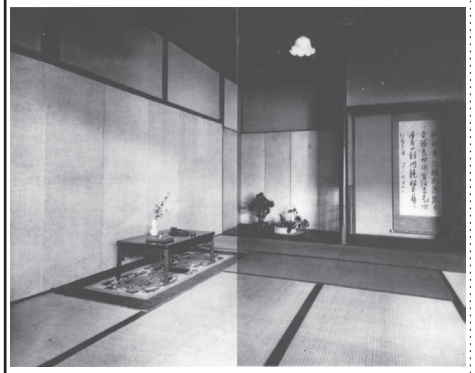


平面モデル

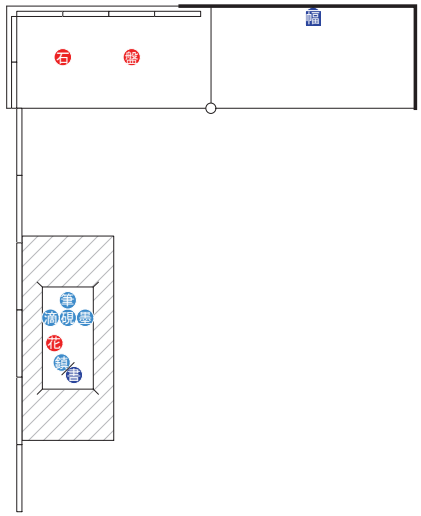


席　名	第二席　煎茗　副席	床形式	④踏込床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（前席副席）	書院形式	―		

図



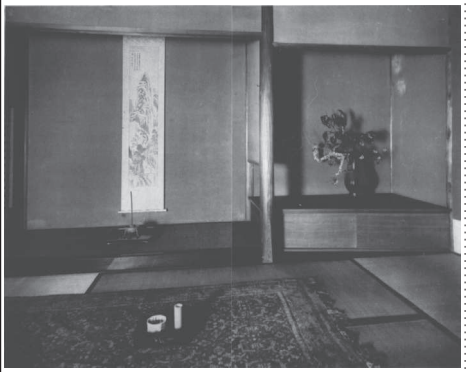
平面モデル



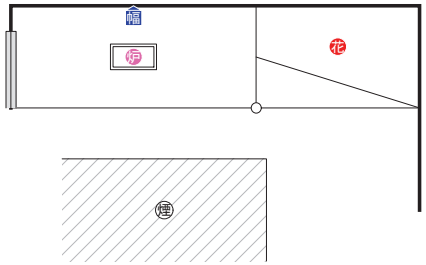
史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第五席　煎茗　待合	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

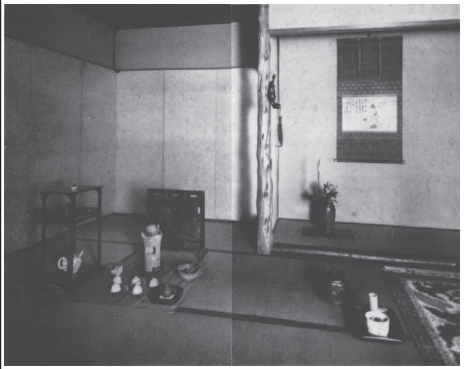


平面モデル

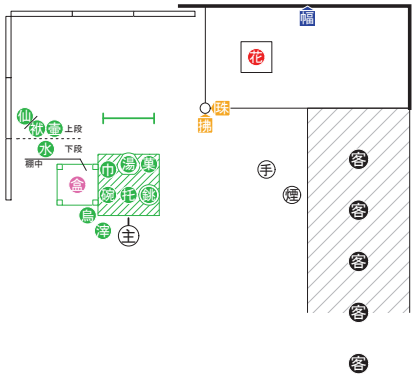


席　名	第五席　煎茗　茗筵	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

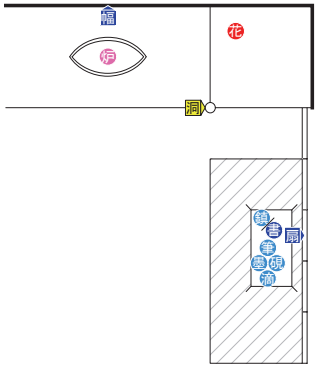


史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第四席　煎茗　待合	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋（琵琶床風）	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

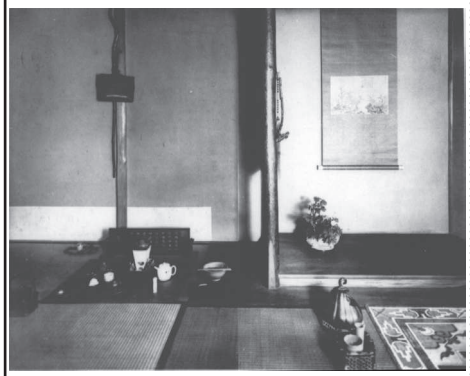
図

平面モデル

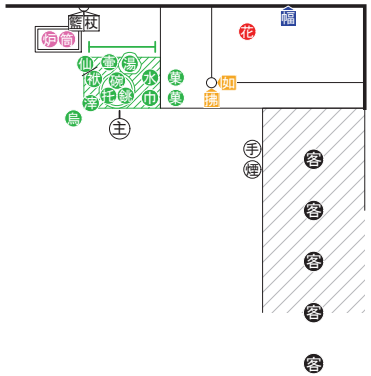


席　名	第四席　煎茗　茗筵	床形式	②蹴込床　（柱：丸太）	点　前	床隣
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



平面モデル

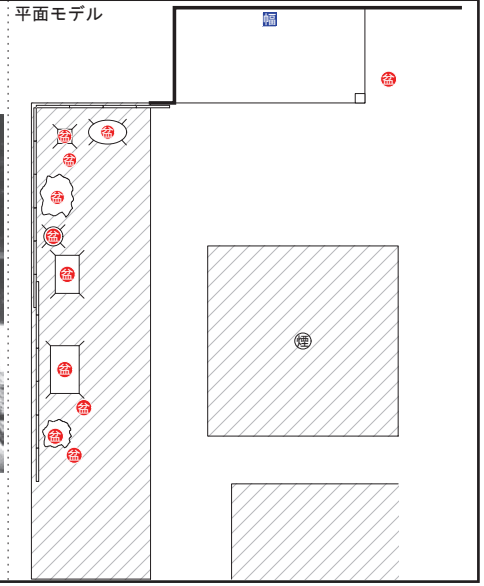


史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第七席　瓶華盆栽	床形式	②框床　（柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

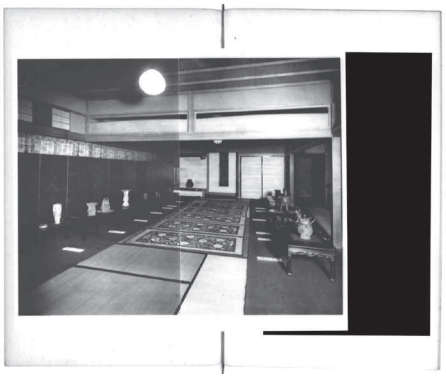
図

平面モデル

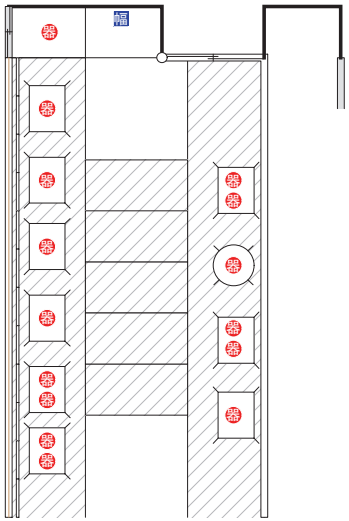


席　名	第九席　銅器陳列	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（展観席）	書院形式	―		

図

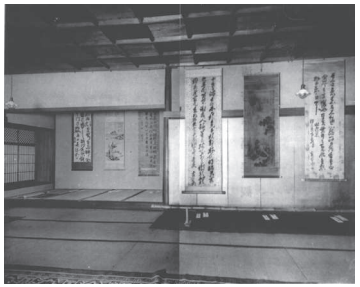


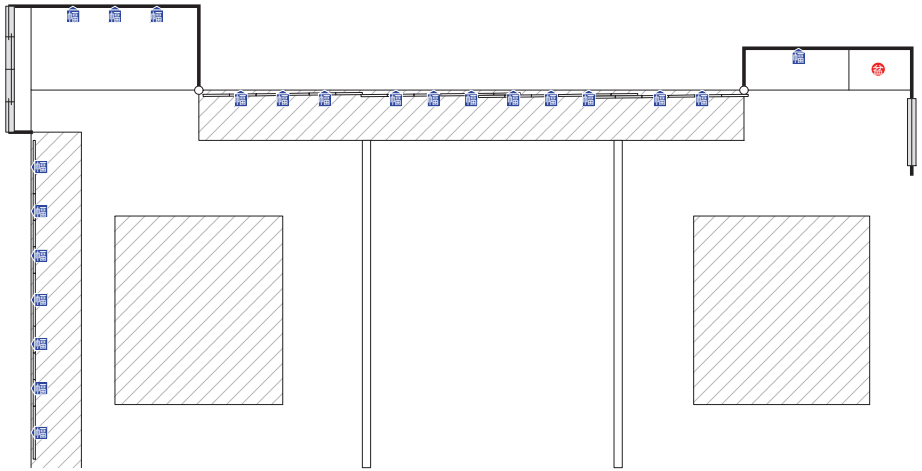
平面モデル



史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第五席　煎茗　待合	床形式	⑧框床・⑤琵琶床（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	付書院		



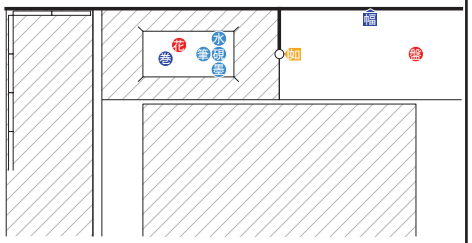


史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十二席　煎茗　待合	床形式	②踏込床　（柱：奇木　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

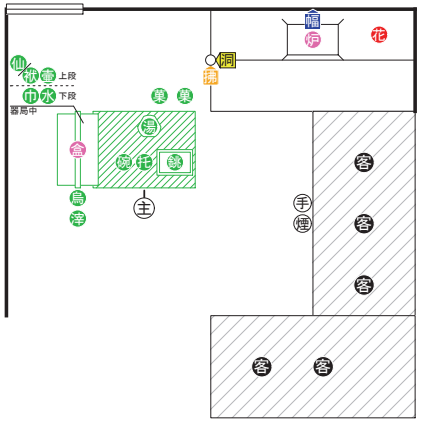
平面モデル



席　名	第十二席　煎茗　茶席	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	茶席	書院形式	―		

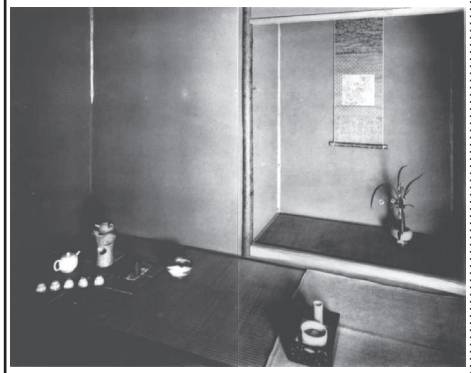
図

平面モデル

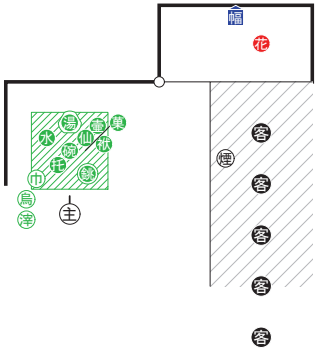


席　名	第十席　煎茗	床形式	②框床　（柱：丸柱　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

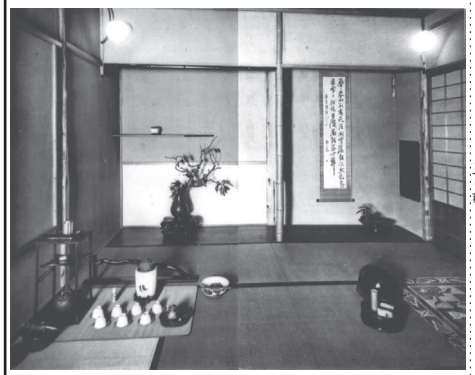


平面モデル

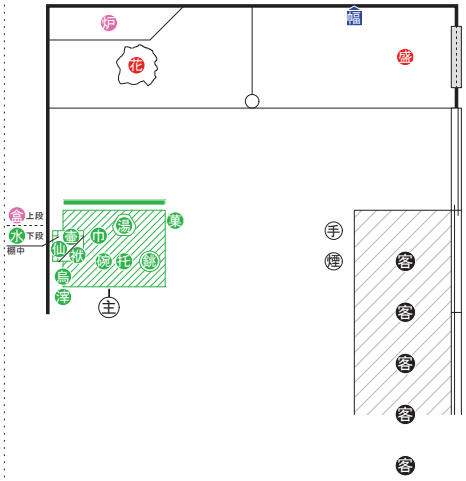


席　名	第十一席　煎茗	床形式	④踏込床　（柱：竹　）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



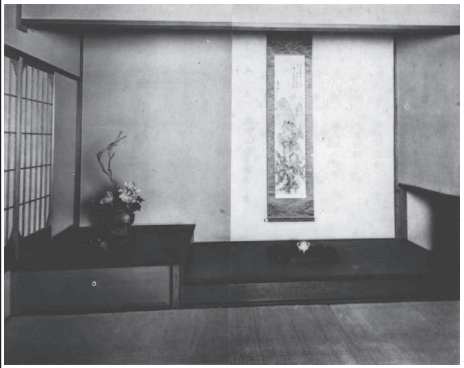
平面モデル



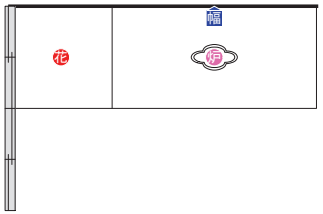
史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十四席　煎茗　副席	床形式	⑤框床（琵琶床）（柱：－　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	（前席副席）	書院形式	－		

図

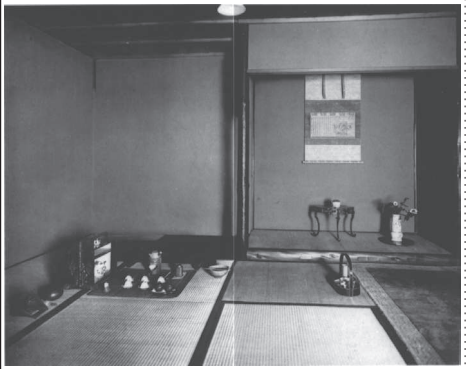


平面モデル

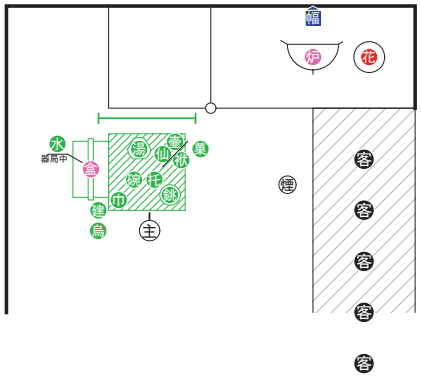


席　名	第十四席　煎茗　茶席	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	茶席	書院形式	－		

図



平面モデル

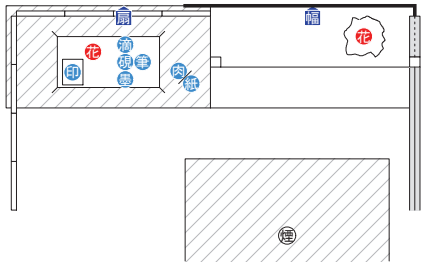


史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十三席　煎茗　前席	床形式	②框床　（柱：角柱　）	点　前	－
		床脇形式	－	備　考	
席　種	前席	書院形式	－		

図

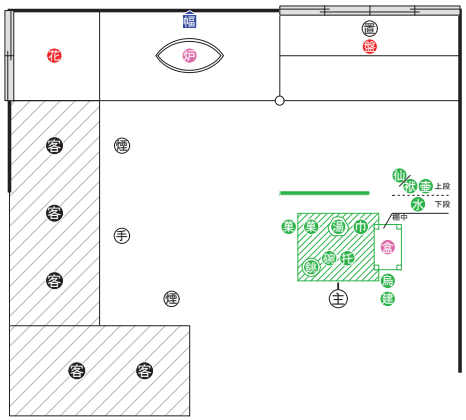
平面モデル



席　名	第十三席　煎茗　本席	床形式	⑦框床（琵琶床）（柱：丸太　）	点　前	脇前下
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	－		

図

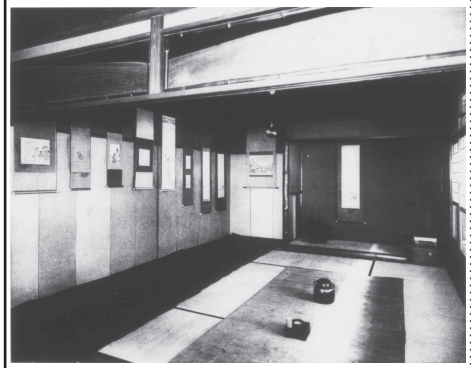
平面モデル



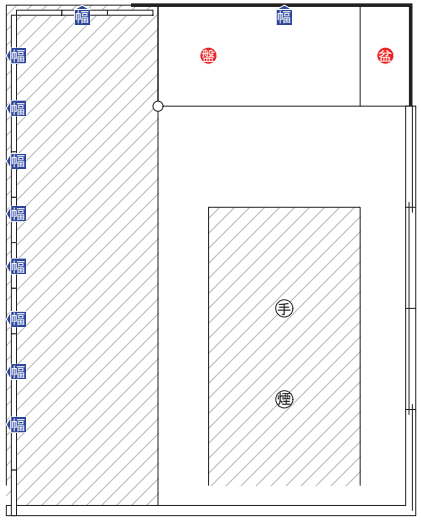
史料名	雙軒庵記念茗讌図録	著　者	池戸宗三郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第一席	床形式	②框床（琵琶床）（柱：　丸太　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図



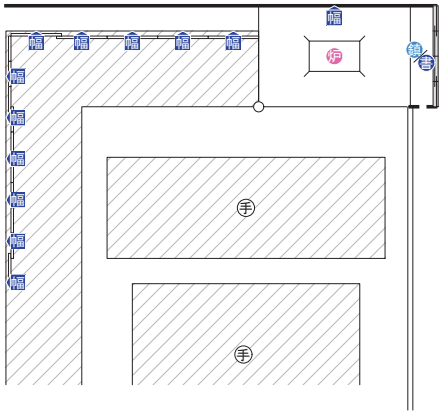
平面モデル



席　名	第二席	床形式	⑧框床　（柱：　丸太　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	付書院		

図

平面モデル

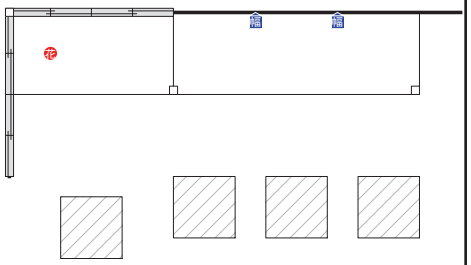


史料名	昌隆社五十周年記念茗讌図録	著　者	井上熊太郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第十五席　浅酌	床形式	⑤框床　（柱：　角柱　）	点　前	―
		床脇形式	棚（琵琶床風）	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	―		

図

平面モデル

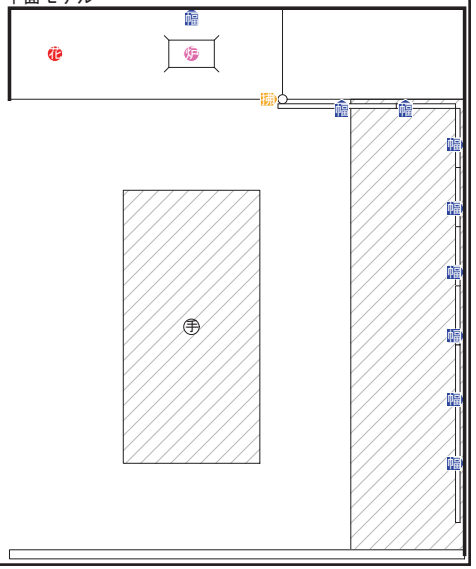


史料名	雙軒庵記念茗讌図録	著　者	池戸宗三郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第五席	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（書画展観席）	書院形式	―		

図

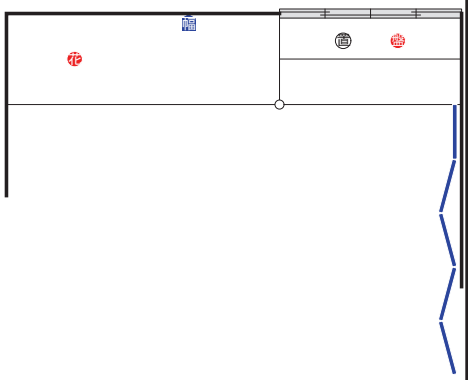
平面モデル



席　名	第六席　浅酌	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（酒席）	書院形式	―		

図

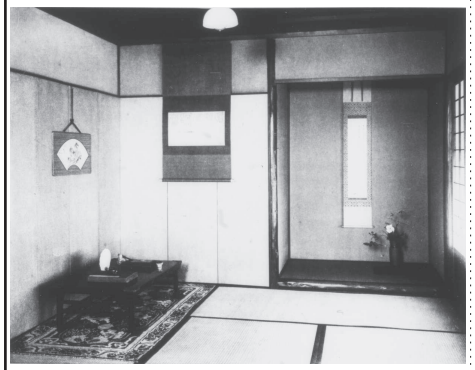
平面モデル



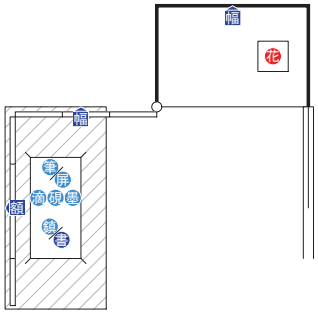
史料名	雙軒庵記念茗讌図録	著　者	池戸宗三郎
		開催地	大阪
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	国立国会図書館

席　名	第三席　待合	床形式	②框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図

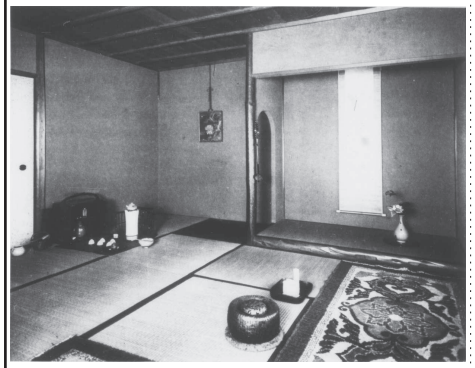


平面モデル

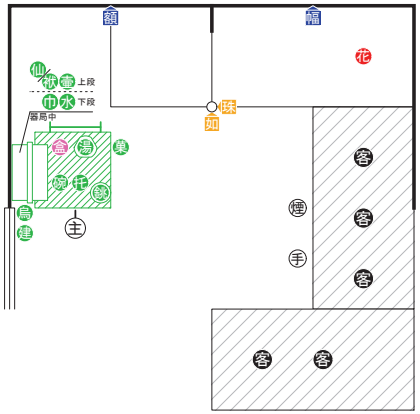


席　名	第四席　煎茗	床形式	⑤框床　（柱：丸太）	点　前	脇前上
		床脇形式	棚なし	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



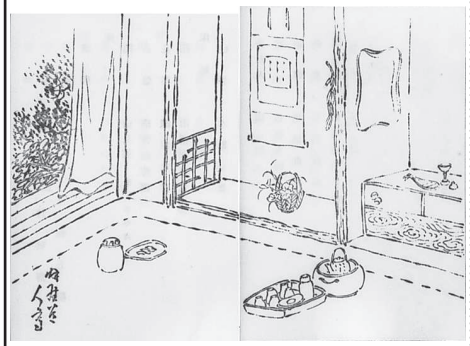
平面モデル



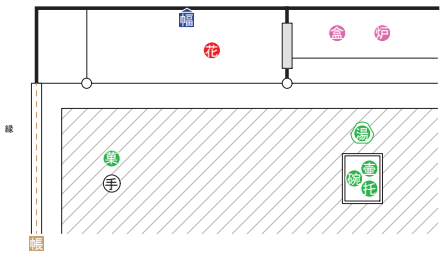
史料名	学温園茶会図録	著　者	森林右エ門
		開催地	愛知
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　香煎　香煎席	床形式	④框床　（柱：丸太）	点　前	―
		床脇形式	地袋	備　考	外部に樹木
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

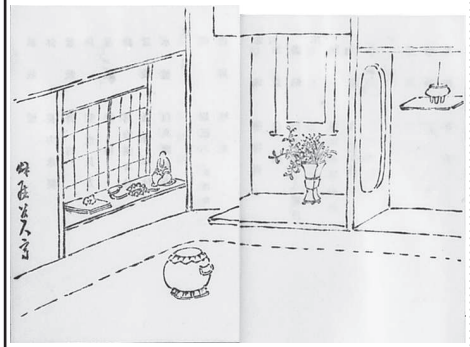


平面モデル

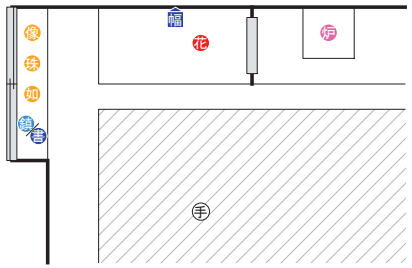


席　名	第三席　瓶花盆栽　広間(一)	床形式	⑨框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	付書院		

図



平面モデル

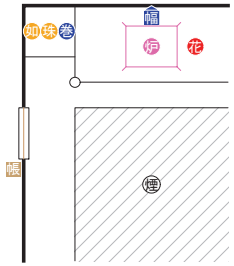


史料名	学温園茶会図録	著　者	森林右エ門
		開催地	愛知
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第二席　香煎　階上(一)	床形式	④框床　（柱：丸柱）	点　前	―
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

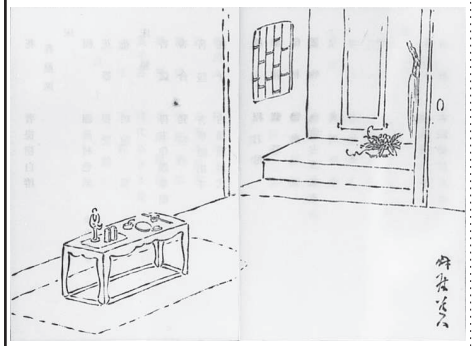
図

平面モデル

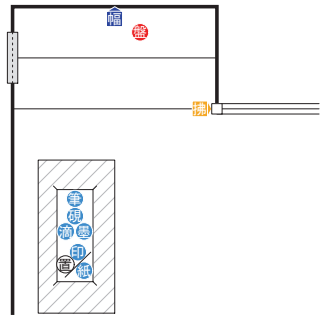


席　名	第二席　香煎　階上(二)	床形式	②框床(二段柱：角柱）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（前席）	書院形式	―		

図



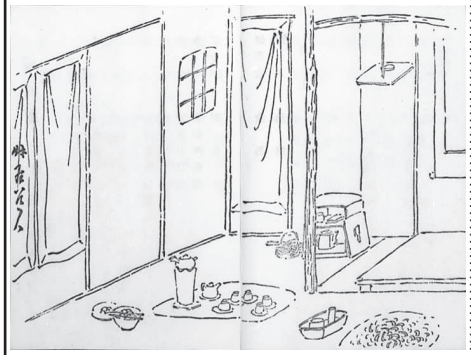
平面モデル



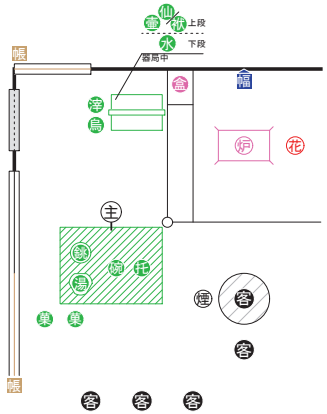
史料名	学温園茶会図録	著　者	森林右エ門
		開催地	愛知
刊行年	大正15年（1926）	所　蔵	高取友仙窟

席　名	第四席　煎茶	床形式	③蹴込床　（柱：丸太　）	点　前	床隣
		床脇形式	棚	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図

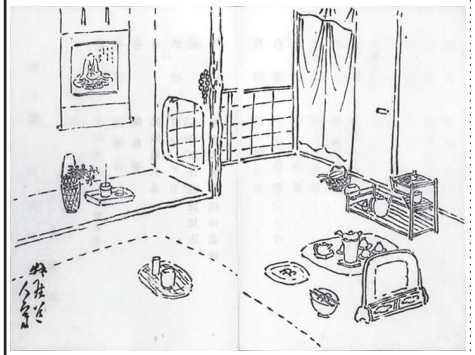


平面モデル

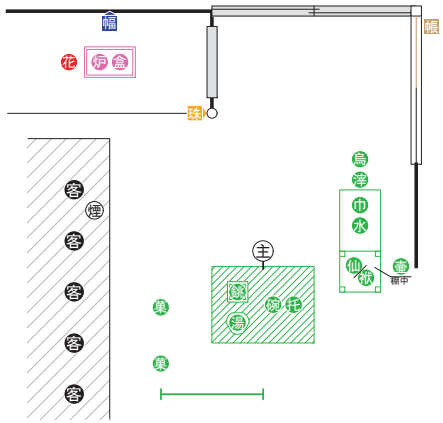


席　名	第九席　煎茶	床形式	②框床　（柱：丸太　）	点　前	脇前上
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（茶席）	書院形式	―		

図



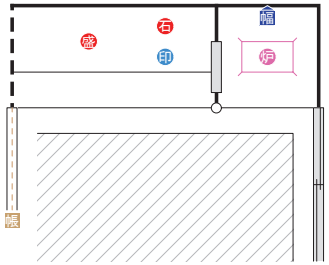
平面モデル



席　名	第三席　瓶花盆栽　広間（二）	床形式	④框床　（柱：丸太　）	点　前	―
		床脇形式	地袋 ＋ 天袋	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

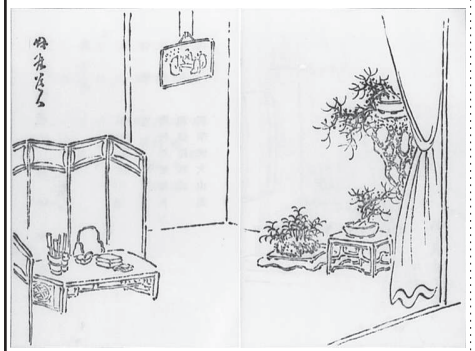
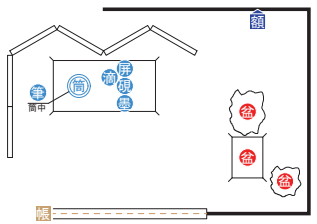
図

平面モデル



席　名	第三席　瓶花盆栽　広間（二）	床形式	―　（柱：―　）	点　前	―
		床脇形式	―	備　考	
席　種	（盆栽陳列席）	書院形式	―		

図



平面モデル